第一卷

# 解説

『藝者小竹』

小竹といふ藝者が、金で自由にしようとする軍人の客や女將やの壓迫に反抗しつゝ、宮田といふ大學生と想ひを遂げるといふ筋。今日からみて、さう勝れた作とは云へないが、その描寫と技巧が、素朴ながらにも後の泡鳴氏獨特の面影を偲ばせる所に興味がある。殊に、宮田と小竹の仲を取持つた小竹の姉の夫高見丑松といふ博奕打の親分に、學生の宮田が兄弟分の杯を差されて、急に何だか厭な境遇が身を包むやうな氣持になつたり、或は又、宮田夫婦が東京へ歸へる折、甲板の上から日の出を見て興ずるあたり哲理的心理描寫は、内部描寫の言葉で發想された泡鳴氏獨特の描寫法の出發點がよく伺はれる――所謂内部描寫に多少のゆるみがあるだけそれだけ判然と――。明治三十九年三月の作で所謂初女作である。

『老婆』

明治四十一年三月の作。前の作からみると、この作の間までに、約二ケ年の沈默があつた。果して

それは何ういふ沈默であつたゞらうか。この作は伊豆山神社の門前に茶店を出してゐる八十九になる薄ぼけの老婆を見たことを描いたものである。その描寫に全然無駄のないこと、尖つた觀察の光つてること、これを前の作の、いかにも硯友社同人の當時の作の響況を受けてゐる作風から較べて、明確に一時代を劃した作品と云つていゝだらう。一體、泡鳴氏の作は、全體の創作を通觀して、これと云つて際立つた變化が認められない、これは早くから作者の創作態度が確立されてゐたからだと思ふ。しかもその初期の作でも、この作の如きは今日に於て發表されたとしても、相當な優越性をもつてゐる方で、劣りはしない程の作である。

『日の出前』

吉本定藏といふ青年が、これまでの空想的智識を抛つて、實生活的に覺醒してゆかうとして、製本職工の監督になり、ある夜亢奮して寢られないまゝ、外を歩き廻つてる裡に、いつの間にか夜明け近くなり、九段坂上まで來て日の出を見る、と同時に、自分自身の形式打破の生活、活人生の眞想に悟入する次第が描寫されてゐる。所謂氏の勞働小説で、これを今日の平面的物質的な勞働小說に較べて內部的深刻味のあることは注意すべき問題であらう。更にこの作は宗教研究家乃至新體詩人としての泡鳴氏が、決然自我を確立してまた自叙傳の一節として見ると又別個の興味もある。明治四十一年五月の作。これを後の『一日の勞働』などいふ作と比較して味ふことは、泡鳴研究に大變興味あること

と思ふ。

『戰話』

明治四十年五月の作にかゝる。大石軍曹といふ平素は臆病さうだつた男が、日露戰爭當時、旅順のピー砲臺の攻擊の時、非常な目醒ましい働きをしたといふ話を描いたもの、泡鳴氏は一面戰爭に興味をもつた作家であつた。思想家としての此の戰爭哲學が、この作の中に素朴ながらにも現はれてゐる。且又、非常時に於ける凡人の非凡人的活動を描いた『非常時』『非凡人の面影』などいふ後年の作にもよく出て來る氏獨特の超人的心理描寫が、この作の中にも微見える。

『耽溺』

この作は明治四十三年に一度發表されたものを、更に大正四年五月に改訂して、泡鳴五部作の一として刊行された最初の長篇小說である。筋は、『僕』といふ男が、國府津の海岸に一夏を過した折、近所の田舍藝者吉彌とあつくなり、女優に仕立るといふので受け出さうとして、あれこれ金の無理算段をする、すると、吉彌に眼差を附けてゐた客が幾らもゐるので、女の不實を恨みつゝも、知らず／＼その女に耽溺してゆくといふ、拔き差しならぬ悲痛な生活を描いたもの。『僕』が、女の來るのを心待ちに、『先驅者』を讀みながら、その主人公の生活を味つてゐるあたり、果ては、待ち倦むで、女のゐる里見亭邊りまで、月の夜にふら／＼と女の樣子を探りにゆくあたりの陰慘な描寫は、讀む者の襟

を正させる氣がする。

『榮吉』

鹽山溫泉の名物男で、丈高童子といふ仇名のある、女嫌ひで酒好きの湯坊榮吉の話。明治四十一年九月の作。泡鳴氏の所謂有情滑稽ものゝ最初のものである。

『結婚』

明治四十一年十月の作。失戀した結果、他郷へ出て活版職工になつてゐた男が、再びその女を得て結婚した話。

『篠原先生』

芝の區會議員篠原勇が、細君と娘を續いて亡くしてから物淋しい生活を送つてゐるある夕方、お民といふ預り娘にお酌をさせながら淸元の『明け烏』など唸つてる。ふと鶴子といふ國の藝者のことを想ひ出す、轉た寢の裡に、その鶴子と狂言同樣の驅け落ちをやつたことを夢に見る。醒めてみると民子はチヤブ臺の傍に居崩れて寢てゐる。又もや鶴子と遊んだ若い頃の想ひ出の幻影の間に若返つた氣持を味ふといつた筋。明治四十二年三月の作。

『炭屋の船』

音樂家の小久保晴吉が品川沖の見晴らせる高輪の書齋で、ある詩に作曲するために、沈思してその

主要な旋律を捉へようと苦心してゐる所へ、酒食ひの炭屋が呂律も廻らぬ妙な調子で炭を賣りに來たので、勝手許で大騷ぎをしてゐる。

『時節は時節、値段は値段だ、考へても見ろよ、そんな安値で、はア、炭燒き小屋が立つて行くべいか？……』

かう云つた酒醉ひの呂律に、小久保は專門的なある興味を覺えて、自分も勝手元へ出て、新らしい着想を得やうと、炭屋親子に酒まで出して親しんでみるが、捉へ難い着想に惱みつゝ、五線紙を手許に引き据えて置いて、酒に醉つて寢る。覺めてみると、からりと晴れた品川沖を、昨日の炭屋の船が帆に朝風を孕ませてゆつたりと歸つてゆくところだといふ話。明治四十二年の作。

『郊外生活』

野崎の一家が櫻井に別莊を買つて、そこに家族を移してからの郊外生活の面白さを描いたもの。玉江親娘が夜更けに葡萄畑へ夜露のしゆんだ葡萄を盜みにいつて、夜番に石を拋げられる所がある。明治四十二年の作。泡鳴氏は又、大阪及びその近在を描いた鄉土藝術家の一人であつた。この作は此の鄉土藝術の最初のものである。

『川本氏』

お鳥といふ病人の女を連れた『僕』が、金の都合で三等車に乘ると、滿員で迚も病人の乘り場がない

ので、病人丈けを二等車に移して、『僕』は三等車から時折、病人の樣子を見に往つた。すると、一人のほろ醉ひの紳士が、いつの間にか二等車のお島の隣りの席にゐて、頻りと病人が場席を廣く取つてゐるのを滾してゐる。その紳士は終にはボーイに向つて不平を云つて喧嘩を吹きかける。その裡に、三等車に隙が出來たといふので、紳士は三等から乘り換へてまだ切符を切り換へてゐなかつたので、三等車に直されて、『僕』の近くに這入つて來た。相變らず醉つた紛れに不平を云ひ散らして、周圍の客の反感を買ひ、罵られたり彌次られたりするので、終ひには立つて高踏的な說教めいた反抗演說をする。『僕』はそれが自分の仙臺耶蘇教學校時代の舊友の一人であることは既に知つてゐたのであるが、矢張り思ひ上つた態度であるなと、何處までも名乘らずに冷靜に傍觀的態度を取つたといふ筋。これも同じく四十二年の作。

『韃靼海峽』

新領土の樺太へそれ〴〵の目的で往つた歸りの事業家新聞記者官吏などの數人が彼の荒い海峽を通る乘り合ひ船の氣分がよく出てゐる。鱶の群が進行してゐる船を圍繞いて、競爭でもするやうに附いて來る異觀を、船暈の後で眺めるあたりの描寫が面白い。同じく四十二年の作。

『脊中合せ』

藤田義行といふ教員上りの裁判所の書記の細君がお產をする、二つになつた頃何うも子供の樣子が

變だ、同僚や上官達は義行が飽酒の遺傳ではないか、こんな子が大きくなつては親子双方の爲めにはならぬ、いつそ今の裡殺して了つたらと、冗談口を利いたりした。まさかそんな事も出來ないと義行夫婦は思つたが、僅か二十圓の俸給では子供を病院へ送ることも出來ず、近所では頻りと子供を泣かせると苦情が出る、義行夫婦はある深夜にとう／＼子供の鼻と口に濡れ紙を張る、子供は死んで了ふ檢死も無事に濟んで出勤してゐる或る日、さきに子供を殺してしまう方がいゝと云つた滑稽家が、前と同じ無頓着な態度で『いよ／＼殺したな！』と云ふので義行はぎくりとするといふ筋。明治四十二年の作。

『乞食の影』

一代の大詩人を以て任ずる川上武彦が、俗人原をあつと云はせやうと、『詩の宮殿』といふ題の詩作に熱中してゐる。所は芝區廣町の公園に添うた片かは町、だら／＼坂になつてる道を隔てゝ芝公園の烏山といふ丘に對つてゐる。『お願ひでございます』といふ奇怪な聲に、破れ障子の穴から覗いてみると、だら／＼坂を上り詰めた道の向側の電柱の下に乞食の子が物乞ひをしてゐる、鬚武者の親爺は頻りとしらみを取つてゐる。素晴らしい文句で詩の宮殿を描き出してみるが、一向に物足りない、全體こんな家を工風して誰れが住むのか、さうだ、あの乞食を持つてゆかう、乞食の美化、乞食の美化………。天の啓示でも受けたものゝやうに思つて乞食の様子を見てゐると。親の乞食はやつぱりしらみ

を取つてる。子供の方は親爺の膝に倒れかゝつて、『何か喰ひたいなア……』と云つてゐる。詩人川上はその無邪氣さにすつかり認れ込む。先刻まで意氣込んだ詩の發想が臺なしになつて了ふ。その裡に『さア、行かうか?』『行かう――』と、乞食がお菓子を買ひに立ち去るといふ筋。炭屋の船と異巧同曲の作。同じく四十二年の作。

『金』

これも明治四十二年の作。一万五千圓のマニラの富籤を當てた法被に紺股引の熊太郎が、横濱の正金銀行で百圓札を耳を揃へて貰つてから有頂天になつて驅け出す。朋輩の車引き達が、盛んに金を貸せとかおごれとか云つて附き纒ふ、とゞの詰りが、女房はじめ皆がその金を眼當てに追掛けるので發狂して、日本波戸場の石垣鼻から、金の入つた財布を頸にかけたまゝ身投げをして死んで了ふといふ話。

『アボト先生』

アボト先生といふ英國人の英語の教師が、二人の女生徒に戀をしかけて失敗した話。明治四十三年二月の作。

『放浪』

これは明治四十三年に出版されたものであるが、大正八年七月、更に改訂して泡鳴五部作の一とし

て刊行された作である。樺太で自分の力に餘る不慣れな事業をして、まんまと失敗し、殆んど文無しの身となつて、勇、氷峰など友人を賴つて北海道まで逃げるやうに歸つて來た田村義雄の、窮迫と絕望と自暴自棄の底から、やつと再び東京での文士生活に歸らうとする迄の生活を描いたものである。素より世に著聞する實行文藝の張本人泡鳴氏の自叙傳の一節としてみる可きものであるから、これ以上の紹介と蛇足は要しないであらう。

大正十年一月

大月高陽識す

# 目次

# 藝者小竹

一

「あゝ、暑い！　暑い！」

と、獨り言ではない、當てつけ口調で云つて、仰向けに倒れた、その脊中と足とで唐紙の方へあと退り――張つてある袷の鶴の脛が、膝に隱れる程のところで、足を擧げてその唐紙の面に廣げ、團扇をおこり付ける樣に扇いで居るのは、小竹といふ藝者である。

これは伊豆伊東の湯治場で玉置といふ御神燈の一室。晝後の暑さを風に開け放つて、居るのは小竹ひとりではない。小簞笥の前に据ゑてある長火鉢の向ふには、じツと小竹を見つめて、團扇の手を止めて居るこの家の亭主、甘い物には不足がないと見える程太つたからたつきだが、今の素振りが氣に食はぬらしい體で、目をぱちくりさせて、口は何か云ひたさうに唇をびくつかせて居る。と、また、之と相向つて、この家の女將が火鉢を挿んで、長烟管を食へたまゝ、横目に小竹を瞰んで居る。

三人とも暫くは無言であつたが、もう、堪へ切れぬといふ樣子で、先づ亭主が口を切つた。

『それじやア、お前はこの玉置の爲めを思つて呉れないのだな？　これだけ譯を話して頼んでも、あの武山少佐の云ふことは聽かないといふのだな？　おれが只お前の云ひ分の壓制とやらで、あのお方の自由に成れと云ふではなし、たツた一度でも、あの人の心を立てゝやれば、それで家の爲めにもなる、――家の爲めに成れば、それがお前の爲めにも成るじやアないか？』

返事がないので、今度は、女將が音烈しく煙草の吸ひ殻をはたいて、團扇を取つた。

『これ、小竹、返事をしな。お前は今度に限つて默つて居るのは、あの富田の書生ツぽに惚れて居るからだらう。今迄にから強情張つたことはないじやアないか？　宮田に轉ばうとするのも、武山さんに轉べといふのも、今迄と違つちやア居ない――男に變りがあらうものか？　いツそ、お金の澤山ある方に轉ぶなら、達摩も氣がきいて居るのだよ。』

と、急に團扇を置いて、煙草を雁首につめ込んだ。

小竹はそのまゝ動きもしない、その眼尻には、じり／＼と煮え立つ様なくやし涙が流れて居る。然し、それを見せるのも殘念だといふ様子で、返事ともつかず、獨り言ともつかず。

『伯父さん、伯母さんと云つても、元は赤の他人――よく考へて見るがいゝ。家の爲め、家の爲めと云つたつて、私はこれでもこの家の爲めには盡してあるつもりだ――お補錢なら、いくらでも貰つてあげましよう。勘定して見りやア、何匹かわからない程、いやな男になぐさまれてさ、もう、私が賓

り出した三味線の棹まで、折つぺしよツてしまはうと思つたことは、幾たびもあつたのだ。それでもこの家の爲めだと思へば、義理にも辛抱して居たから、他の子までも繁盛して、私が威張らないまでも、玉置亭はこんなに大きくなつたのだ。』

『馬鹿者の多い當節だ、藝者屋の繁盛するのは當り前だい。』と、亭主がまた口を出すと、

『お前ばかり、さう、お威張りでないよ、他の子達が可愛相だから、ね』と、女將がいや味を云つた。

『他の子は皆、私が育てたも同前です』と、澄まして居たが、この他人の等、まだ自分の働きの有難味か分らないのかと思ふと、そこらあたりにある物がすべて憎くなつて、新しい疊の臭ひも、てかてか光る節なし天井も、何だかその身を疎くする樣な氣持ちがして、云ふまいと思つたことまで口へ出してしまつた。

『勝手にするがいゝ！　私が退いたら、御門に草が生へて、さぞ賑かになるだらうさ。』

『なアに』と、女將も澄ましたもので、『こツちの儲に成つたのは、お前じやアないよ——お前のどこやらだよ。それが無くなりやア、もう、お前はすたり物も同前。——へん、おほきにお世話さまで御座いました、明日から一昨日お出でだ。』

　また團扇を取つて、暑さうな顏を亭主に向けると、亭主は、それを合圖と見て、これは最後の威し文句であつたらしい。

「追ひ出してしまへ、追ひ出してしまへ。――そんな氣まゝ者は、小竹、この玉置には置いて置けない。――出て行け！』

『それじやア、この家は私が貰つて行きます。』

『何をぬかす』と、思ふさま、亭主は自分の固く握つて居た煙草入れを投げつけると、それが小竹の肩と腭との間に當つた。

小竹は足を以つて、二三度、どたばたと唐紙を蹴つたが、

『えゝ！』と、力一杯肩をゆすつて、『もッと打つなり、殺すなり、するがいゝ。こッちが働いて出來た家、倉だ――みんな祟り倒してやるから。』

團扇の手も止んで、靜肅はまた暫くこの室を守つて居たが、裏の田圃の水溜りには、涼しい風が渡つて、遠く見える山々は靜かにうす綠の裾を引いて、この明けッ放した室内に、百度以上の熱が籠つて居るのをつゆ知らないのである。

この時、二階の段ばしごをみし〳〵と下りて來た者がある。餘人ではない、明日はこの湯治場を去らうとするので、殘るは今晚だけだと迫つて、小竹が最後の返事を聽きに來て居た、武山少佐である。先刻から、二階で、ぽつ然と待つて居たが、あまり長引くので、身づからこゝへ出馬して來たのだが、この場の體を見て、平和談判は依然と六ケしいのだと、急に顏色が變つた。

『どうだ、おかみ、談判の模樣は』と、『もう、男が下つた樣に、きまりが惡いか、這入りもしないで室の外に立つて居る。

『なアに、ね』と、女將は少佐の顏を見て、『この子は少し障りがあるので、遠慮して居るのですよ、――まるで、だゞツ子の樣で困ります。』

この云ひまぎらしで、亭主は心を落ちつけたらしい。

『まア、どうか、お座わりを願ひます。――おい、敷物を。』

『それじやア、それと云へばいゝのに』と、少佐は女將の持つて來た敷物の上に座わつて、小竹の方を見た、

『どうだ、小竹、まア、起きたらよからう。――どうだ、そのさまは？　たゞの捏ね方も別にありさうなものだに。』

『本統ですよ、ねえ』と、女將は笑顏を見せて、『この子の氣まゝにも困り切つてしまうのです。』

『何のことはない、人さまの手前も知らない赤ん坊同樣ですから、どうか、おあきれになりませぬやうに。――おい、小竹、起きて、旦那さまに御挨拶をしな。』

と、亭主は女將に起せと目くばせすると、

『小竹、まア、起きたらどうだ』と、少佐は猫なで聲、臂から上までも出て居る白手をむずと摑んだ。

『よして下さい』と、小竹、それを振り放して『私はけふから本業に返りましたから、三味線ならどこへ出てゞも彈きますが――私には情夫が御座います――通り一返のお客さまには、もう、この身はまかせられません。』

『これ、小竹、何を云ふのだ』と、女將は急いで起さうとすると、それをも振り切つて、また、どたばたと唐紙に當つた。

『さア』と、あたまから出た樣な聲で、『殺すなら殺して見ろ！露助の野郎じやアあるめいし、このからだに觸つたら、强姦も同前だぞ！』

二

玉置亭の筋向ふ、藤屋といふ溫泉宿の二階の一室――壁には、角帽と金鈕子の洋服とが懸つて居るのも見えて、開けた障子の右と左に、浴衣すがたの客がもたれて、兩方から足を敷居に投げ出して居る。云はずと知れた、大學生の一組である。

年うへのがあざ笑ふ樣な口調で、

『おい、宮田、貴樣はまだうぶだぞ。不斷から沈んで居る氣性だが、あれを見てからの沈み方はどうだ。經驗のある僕から見りやア、まるで馬鹿げ切つてるじやアないか。高が田舍藝者の一匹、それが

眞實を明した？　よしんば、本性から出た言葉にしろ、さ、わが黨が他日天下を脊負つて立たうといふ意氣込みに比べては、大海の一滴だ。――一滴の誠は、一滴の涙を以つて報いよだ。』

『野村君は一概にさう云つてしまうが』と、宮田は目を見張つて、頰には少し恥ぢた樣子を見せながら、『實は、きのふ、あれの悲慘な生涯をうち明けたのだ。あれでも一度は女學生であつたこともあるのだ。』

『馬鹿ア云へ、宮田！　この頃の奴ア、直きに蝦茶を穿いたとか、自轉車に乘つたとか、云ひたがるものだ。苟もわが友人のうちには、一人たりとも、そんな知れ切つた手に乘せられるものゝ無いのを望むのだ。』

野村はなか〳〵對手にしない權幕！

『然し』と、これはまた思ひ定めた顏つきで、『僕は君に隱して居たのは惡いが、實は、きのふ――』

『また、實は、きのふかい？』

『いや――君と一緒に歸つて來てから、また行つたのだ――來て吳れいといふから、行つたのだ。それで、あらゆることが分つたから――』

『な、何と云つたのだ』と、野村は少し話に引き入れられた樣子で、『云つて見給へ。』

宮田の聽いて來た話に依ると、あれ――乃ち、小竹――の親は、もと阿州德島藩の藩士で、小竹の

祖父の時代に、商賣を初たのだが、――もつともこれは藩主から士族一般に商買をせよとの命令が出たからで――さいはひ、祖父はその道に向いて居たと見え、日本橋の魚河岸では、小山藤吉と云へば、知らないものは無かつたのである。

ところが、父の代になつて、遊藝音樂などが好きなところから、家へ師匠共を呼び込んで、自分は勿論、小供にまでも之を仕込んだのが因果――横濱に藝者屋を開業して、小供に半玉の代りをさせて居た。

自分は面白く儲かるにまかせて、家の子に手を出すやら、外に妾を圍ふやら、爲たい放題をしたあげくが、お定りの借金。首がまはらぬ苦しさに、小竹の姉――と云つて、腹ちがひ――をその抵當に渡したが、貸主はそれを連れて此の地へ來て、玉置亭を開業し、姉は小鈴と名乘つて、左褄を取る身になつたのが、一家悲慘の始りである。

姉が賣られる時、妹は爭つて自分が身を落すから、姉にどこかへ方づいて呉れろと勸めたのだが、まだ年が行つて居ないので、家に居て、母の話し對手になつて居る方がいゝと定つてしまつたのだ。然し、そのまゝぐづ〳〵して居るなら、父がまた妹の身をも賣らうと云ひ出すに相違ないと、母はその所天と籍を分けてしまつて、小竹と二人で本郷の新花町に小い借家住ひ――親子共かせぎの人仕事をして、小竹は渡邊裁縫女學校へかよつて居たが、不運はまた一歩を進めて、母は大病に罹つた。

その時、大變心配をして呉れたのは、父が横濱に榮えて居た時、番頭をして居た者で、その助けに由つて、不自由もなく母を大學病院に入れ、重病は漸く直つた。小竹はそのまゝ看護婦にでもなつて、助けて呉れた人に及ぶだけ恩を報いようと思つたが、千萬の親切は仇なりけりで、その使はせた金の爲めに、小竹の身を借りて一儲けしようといふ腹であるのが分つたので、二人はぞツと顫へたのだ。が、然し、若いながら、から成ると、今まで仕つけられた女の意地――それじやァそれの覺悟があると、どうせ、姉は父の爲めに足を泥水に入れたのだから、自分はまた母の爲めに一苦勞――面當に他から工面をして、元利を揃へて返してやると決心した。

たま〳〵、姉の小鈴から手紙が來て、姉は、當地で名うての親分――もとは、魚河岸で、父の世話に成つたをゆかりに、その人に身を引かせて貰つて、女中一人と家を持つたといふことであるので、早速掛け合をして、姉の代りに玉置の抱へと定つて、東京からやつて來たのだ。

來て見ると、姉は引かせて貰つた人の妾にされて居たのだ。その人が姉妹の父に對する報恩の名義もあつたものではない。姉はこれを嫌つて、一度は逃亡したのだが、直きつかまつて、『逃げるなら、腕一本なり、脛一本なり、置いて行け』と云はれ、そのまゝ涙を呑んでのその日ぐらし。人の親切は當てにならぬもの。『姉さん、私達が女に生れて來たのが不仕合せ』と、抱き合つて泣いたこともあるのだ。

然し、稽古事に掛けても、小供の時から姉よりもよく出來て、根が勝ち氣で、意地が強いので、燒けツ腹になれば、飽くまで我を通すのが癖。男など、どうせ、畜生だと踏み倒してかゝれば、この脂肉が欲しくば、切り刻ざんでも食はしてやる！ ああ、これが玉置亭の繁盛になつたとは、何たる禽獸界であらう？ 小竹は野ずゑの死かばねと同前——一たび肉慾に餓ゑた狼や鷲の啄むにまかせたからだに、誠の戀が宿るか、どうか。野村が、今までに得た自分の經驗から、疑ひの雲が起るのは當り前のことである。

『それで、君はあれを女房にすると定めたのか』と、野村が少しうらやむ樣に問ひかけると、

『ゆふべ、約束をした』と、宮田、涙もこぼれんばかりである。『たとへ泥にまみれて居ても、蓮の花は奇麗に咲く、腐つたからだも、骨まで通つて居るのではない。小竹に救ひの光が見えたのだ。僕がその戀を成就させなけりやア、またもとの闇に返つてしまうだらう。』

『よし！』と、野村もつひに贊成して、『それまで君が決心したのなら、僕が仲人になつてやらう。』

この時、早や日は暮れたので、女中がランプを持つて來て、にや／＼笑ひながら、

『宮田さん、お文』と一通、宛名を鉛筆で細文字に書いたのを渡して行つた。

『また來たのか』と、野村はのぞき込んで、『開けて見給へ。』

野村は、あけさせてから、自分で首を延ばして讀み行くと、かう書いてある。

『前略御免下されたく候。昨夜はいとしみ〴〵と御物がたりあり、私もうつかりお耻しき身の上を申し上げ候段、何卒惡からず御思召し下されたく候。あなた樣が御卒業の上、私の身を全く救ひ上げて下さるまでは、肌を觸れたまはぬとの御言葉、いともいとも淸き御こゝろざし――それに就けても、私がからだの穢れのいよ〳〵增さるこゝ地いたし申し候。たゞ〳〵昨夜の御約束をたよりに、私はたましひを入れ更へ、手馴れし三味の一本立ち、棹の折れるまでは、あなた樣の爲めに辛抱いたし申すべく候。必らず〳〵お見棄て成さらぬやう、神かけて祈りまゐらせ候。それに就けても、度々の御散財、伯父さまより御預りの金子まで御なくしに成り――』

『君、そんなにつぎ込んだのかい』と、野村はその意外なのに驚くと、

『君の知らない間に、僕』と、宮田が答へて、『僕、實は度々行つて、隨分店へは拂つたのだ。』

『いや、驚いた。僕は金をつかへと云つて連れて行つたのじやアなかつたのだぞ。不斷謹直なものは、こんなところで夢中になり易いのだが――どれ、その次ぎは――えゝ――』

と、また讀みつゞける。

『おなくしに成り、申しわけなく、私、工面をいたして、今晩御渡し申すやう御話し申し上げ候へども、今朝程より一つ、くさ〳〵いたす事これあり、その運びにまゐらず、且は只今より御座敷へ招かれ候まゝ、私よりまた使ひ差上げ候まで、何卒御待ち下されたく願上げ候。委細御目もじの上。かし

こ。小竹より、宮田勇様。』

『それ見ろ、君』と、野村は手紙を宮田に投げつけて、『貴樣は馬鹿にされて居るのだぞ。あの古猫め、なか〳〵食へたもんじやアない！　東京、橫濱から流れて來た位だ――ざまア見ても分らう。僕等が、もう、直きにこゝを去るのを知つて居るから、いゝ加減にあしらつて居るのだ。一日〳〵と後れさして居りやア、向ふはわけもないことだ。たゞ帝國大學生といふので、持てゝ居るので、僕等が惚れたと云はれりやア、奴等、田舍藝者の名譽だ。君は人間が良いから、勝手に丸められて居るが、この手紙が眞實らしいだけ、それだけ噓言であるのだ。畜生！　こツちを出しにして、甘い汁を吸はうとしやアがる！』

一方は自分の學校といふ觀念から、非常に憤慨して來たやうだが、宮田はたゞ無言で、半信半疑の體である。

『君、もう、思ひ切つてしまへ。法科と文科と分れて居るから、やることが合はないと云ふのとわけが違ふ、大學生の名譽に關すらア。――さア、飮みに行かう。金がなけりやア、僕がおごる。君が貰つた金たツて、太したものじやアあるまい――あんな奴等に出して貰はんでも、入用なら、僕が出してやらア。心配するな。大學生の體面に關すらア。』

と、云ひ〳〵、早や野村の支度が出來て、團扇を手に取つたので、進まぬながら、宮田もまた團扇

を手にして、ついて出て行つた。

## 三

野村、富田の兩人は、その夜に限つて、また行つたことのない料理店、高瀬屋といふのに這入つた。どこも、當地では、同じことだが、入り口は東京のどぶろく屋と相違はないので、晝間行つても薄暗いところで、細暖簾がたゞ紺地に屋號を染拔いたのと代つて居るばかり。この家に這入つて、奥から射すランプの光に照し見ると、土間の左右に添ふて板の間があつて、そこには一升徳利だの、茄子だの、白瓜だの、勝手道具などがむき出しにしてある。牛肉を釣してあるかして、その臭ひがぷんと鼻を打つた。

上つて行くと、右の間は家族の寢室と見えるが、客の多い時は、こゝにも入れるらしい。左の廣間の、勝手につゞいて居るのには、眞中にいろりが切つてあつて、それには、暑いのに、大茶釜に湯がたぎつて居るのがかゝつて居る。その傍には、老爺ががん張つて居て、おそろしい面がまへだが、二人のまごつくのを見て、『どうぞ奥へ』と、あたまは低い。

それから、二間程の廊下を通つて離れに行くと、思つたよりも奇麗で、氣がきいて居るところである。室は二つあつて、奥の一間はもう先客の占領するところと成つて居る。二人は今一方の室に座を

隣りの騷ぎと云つたら。まア、どうだらう！ 客は歌つても居ないのに、藝者ばかりがつゞけ樣の三下り――二人は、ふと申し合せた樣に、耳を傾けた。

『おい、小竹だぞ』と、野村は扇ぐ手を止めた。

『さうだ』と、たゞ一言――宮田は早やむかツとした樣子。藝者が客に招かれて、歌をうたふのは、何も不思議のないことだが、自分の戀ひ慕つて居るものを、他人が玩弄物にするのは――知らなければ、それまでのこと――知つて、氣持ちのいゝものではない。それに又、先刻の件もあるのに、あれは何たる浮れ樣だと、非常に不愉快さうに沈んでしまつた。

『お暑う御座います――何に致しましようか』と、煙草盆を以つて出て來たのは、色黑の顏にお白粉の乘りが惡い女、それでも商賈がら、どこかに人馴れて居るところが見える。

『刺身でもして貰はうか。』

『お刺身は今晩お生憎で――』

と、かう云ふところが、田舍に間の拔けた點である。

『それじやア、何でもいゝから、早く酒を持つて來てくんな』と、野村はその女中の手を取つた。

『おい、隣りの客は誰れだ』と、低い聲。

『少佐の武山さんださうで――それでは、お早く致しましよう。』

女が食盤を据ゑて出て行つたあとで、野村、宮田を見つめて、

『さア、こゝだぞ！　武山とは、例の金で小竹を轉ばさうとして居る奴だ。乃ち、君の色がたきだ。默つて、樣子を聽から。』

『さうだ』と、また、宮田は頷いたばかり。

店から、先づ酒と三角に切つた海苔が來た。野村は女に酌をさせて、ぐツと一息に飲み乾して、猪口を出したので、宮田の方へ注いで居た女が、德利を向け直して、

『まア、あなたは立派なお下際ですこと』と、また、そのあとへ一杯注いだ。返事がないのをしほに、女は出て行つた。

二人とも無言で、心臟の鼓動ばかりが高いのは、近づいて來た一種の秘密を暗中に探らうとする者の構へである。宮田の神經は別して過敏になつて、自分が、何だか、すツと光のないところへ秘んで行つて、隣室の話が闇に見えて來る樣な氣持ちになつたのである。

『おい、小竹、騷々しい――よせ！』

『はい』と、三味と歌との聲は止んだ。

『お前は、どうして、そんなに騷ぐのだい、おれが云ひつけもしないのに？』

『私を今晩お招き下さる以上は、もう、三味で立つのは御承知の筈ですから。』
『弾けいと云はないのに、弾くにやア及ばんじやアないか？』
『只今止めて居ります。』
『まア、飲めと云ふに。』
『飲めと仰つしやれば、いくらでも頂戴いたします。』
『まア、もう、一杯飲め、おれが注いでやる。』
『はい。』
互ひに猪口を置いた音がした。
『おい、小竹、お前は先刻、本業に返つたから、藝なら何でもやると云つたな――覺えて居るか、どうだ？』
『はい、慥かにおぼえて居ります。私は藝者ですから、御客様のお好みが御座いますれば――』
『よし！　それじやア、暫く聽かんが、あの「千鳥」とかいふ、少將成經の物を歌つて見ろ。』
これは讀者も御存知であらうが、古い曲で、また六ケしいので、今日では藝者などにあまりやれるものはないのである。
『はい』と、然し、小竹は輕く引き受けて、テンと三をあげて本調子に合せ、

『不敏や濱邊にたゞひとり――』

と歌ひ出した。聲は充分にあつて、その底には一種悲壯の銀線が張つてある樣に、引き立つて居る、實に、文句にある通り、『友なし千鳥』の『鳴きわめく』が偲ばるゝ風情である。

二人はこれに聽き惚れて居ると、そこへ煎り鳥と吸ひ物とが出て來た。

『誰れか呼びましようか』と、女が二人を扇ぎながらの問ひに答へて、野村、

『いや、もう、隣りので澤山だから、お銚子を持つて來て貰はう。』

歌はます／＼佳境に入つて、南の海は、かの寂寞たる鬼界が島の濱邊に、相愛して居る、千鳥成經の物語りも過ぎて、首尾よく終りを告げた。

『もう、一つ、「三吉」をやつて見ろ』と、つゞけ樣。

『はい』と、また棹を執つたらしい、直ぐ、

『不敏や三吉、しく／＼涙。

頰かむりして目を隱し、

沓見まつぺて、腰につけ――』

と歌つて來たが、今度は前の通り甘くは行かない――聲が顫へて、どうしても行きなやむ樣子。『見すぼらしげなうしーろ影』で、わッと泣き出した。

『こら、小竹、お前は兒を持つた覺えがある、な』と、少佐は尋ねた、『その兒のことを思ひ出して、悲しくなつたのに相違ない。』

『なか〳〵穿つたことを云ふ奴だ』と、こちらで野村はつぶやいた。

實は、云ひ殘したのだが、宮田の聽いて來た話に由ると、小竹は、母と共に父から離れる前に、一度、水戸の或會社員へ方づいたのであるが、父が度々無心を云つて來るのを氣の毒に思つて、自分から離緣を申し込んだのだ。二十歳の時に兒を持つたが、今、それが生きて居れば、五歳である。

『兒を持ちましても、持ちませんでも』と、小竹の聲、『それはお客の關したことで御座いません。あなたはたゞ先刻の恨みを報はうと、藝で私をいぢめるので御座いましよう？』

『さう云ふ譯ではないが、お前はなぜおれの云ふことを聽いて呉れないのだ？』

『それでは、私の云ふことも聽いて下さいますか？』

『そりやア、何でも聽いてやる、さ。』

『では、ぶしつけながら、私に三十圓——さし迫つた入用が御座いますので、どうか、それだけ出していたゞきましよう。』

宮田の手にした盃は顫つて、酒は熱い涙と共にはら〳〵と食臺に落ちた。

武山少佐の口調は全く違つてしまつた、たゞ醉ッぱらつて來たばかりではない。

『さア、揃へて三十枚――これでいゝのか？　然し、高いなア、田舍にしては』と、もたれかゝつたらしい『それならそれと、な、なぜ、その時云はなかつたのだい、お、おれをおかみの前で、あ、あんなに振つて見せて、さ？――えゝ、小竹、い、いまからだな？』

『けふは行けないの――』

『えゝ！』と、大きく聲は天井にひゞいて、『どうしてだい？』

『障りですもの。』

『なアに、また、おかみの口まねかい？　その手は食はん――金だけ取つて、逃げようといふのだらう』と、起き上つたらしい。

『いえ、そんなことは致しません。』

『それじやア、いつでもよからう――おい。』

『けふは本統に行けないの、よして頂戴よ。』

『おい――』

『よして頂戴よ。』

『おい！　おい！』

と、押しのけるけはひがするので、宮田は堪りかねて立たうとした。

この時、隣りのどちらかが、あひの唐紙へどんと當つて、その音でわれながら場所がらに氣が着いたらしい――少佐はしよげ返つた口調で、

『それじやア、いつだ？』

『あすの晩――今夜、直ぐこのお金が入用ですから、おとなしく歸つて頂戴、ね。』

『それじやア、歸る』と、少佐は立ち上つたか、障子が開いた。その前に、小竹が隣室に客があるのを云ひふくめるらしいささやきもきこえたのだ。

小竹はあとから附いて、廊下を送つて行く樣子。

『ありがたう御座います――また、どうぞ』と、店のもの〻聲がすると同時に、宮田は室を駈け出して行つた。

『おい、小竹、ちよツと來い！』

『おや、あなた、いらつしやツて？　私、今から伺はうと思つてたのよ。』

宮田のあとから附いて來た小竹、野村の居るのを見て、室の外で、

『今晩は』と、腰をかゞめた。

今まで受けた永年の苦勞の爲めか、どこかに二十五は二つ三つ越えて居る樣なところも見えるが、ふツくりとした顏に醉ひがまはつて、ほんのりと、恥かしい色をも助けて居る。

『這入つてもいゝの』と、首を振つた樣子も可愛らしい。
『どうか、お這入り下さい』と、野村がわざと堅くるしい挨拶をすると、
『いやねえ、野村さんは――いつも人を馬鹿にして』と、睨みながら、しとやかに二人の間に進んで來て、
『暑い、暑い』と云ひながら、ちよいと宮田の方を見て、座を占め、帶から小い扇子を取り出した。』
『色男のそばへ來ると、違つたものだ――荒鷹も鳩の樣におとなしく成つてしまうわい。』
『あら、初めから鳩ですよ』と、小竹、左の手で野村の手を打つて、宮田に向ひ、
『あなた、おこツて居るの？』と、聲は顫へて居る。
返事のないので、また、野村に向つて、
『隣りの樣子を聽いて居て？』
『聽いて居たとも』と、野村、『小竹さんの腕前を拜見――いや、拜聽して居たわけだ。――まア、一杯』と、猪口を渡す。
小竹、受け取つて、野村に注いで貰ひながら、
『いやだことねえ。――私、那奴を欺してやつたのよ。』
『欺して、あとはどうするんだ』と、宮田は小竹を睨みつけた。

『おこツちやア厭よ、私、あなたの爲めだものを。』
『何がおれの爲めだ?』
『だツて、入用があるじやア御座いませんか?』
『あつても、そんな腐り金は入らん!』
『情けないねえ、私が一身を棄てゝ拵へたんじやア御座いませんか?――聽いてたら、分りさうなものだのに。』
『いや、分らん。あすは、お前はどうするのだ?』
『あなたの爲めに死んぢまうのです』と、小竹は宮田のそばに泣き伏した。『私は、もう――伯父さん、伯母さんとも喧嘩をして――これも皆あなたゆゑ――家に居るのも厭!――うか〲、また、他人の世話には成れず――あす、武山が出發せずに、矢ツ張り私に迫るなら――もう――死んでしまうばかりの覺悟――お願ですから、このお金を受取つて――下さい。』
と、涙を拭き〲、懷中から紙幣を出した。
『そんな覺悟とまでは知らなかつた』と、野村も眞面目になつて、『それじやア、金はおれが出さう。宮田がそんな話はしなかつたので、けふまで實は知らずに居たのだ。』
『然し、折角出來た物――取つて頂戴よ』と小竹、宮田の手に金を渡さうとすると、宮田、之を取つ

て投げ返した。

『えゝツー　もう、約束はこツちから破つた！　たとへ一身を賭したツても、進んで人を欺すのを平氣な樣では、駄目だ』と、立ち上つたので、野村は、

『そりやア、君、不人情だ』と、止めやうとしたが、

『どうせ、泥水は直り樣がないのだ』と、疊を蹴つて、出て行つたので、

『小竹さん、おれがあとでよく云ふから、心配は爲ないがいゝ』と、云ひ置いて、野村もまた歸つて行つた。

あとに小竹ひとり、投げ返された札三十枚を見つめて、くやしさうに齒ぎしりをして居たが、

『ああ！　どうせ、私の育ちが賤しいのだ』と、之を疊に投げつけた。

見る〳〵眼尻は引き釣つて、般若の樣な相を現じ、自分で、座わつたまゝの膝をばた付かせて、これに摑みつき、その手で直ぐ胸に當り、

『こんなからだは入らない！』と、力一杯全身を振つて、

『ええツ！』と、無性に髮を掩つて、身を投げ倒したので、あはれや、奇麗に結つてある島田髷は、散々にかき亂されてしまつた。

四

『姉さん、開けて！　姉さん！　姉さん！』と、けたゝましく戸を敲く者がある。

これは、小い寄席がある、その向ひの新築二階家の戸口で、例の『腕一本なり、脛一本なり』の親分が、小竹の姉――もとの小鈴――の爲めに建てゝやつた家。行く〳〵は藝者屋を開業させ、東京流に半玉を置けば、いくら田舍だと云つても、姉株に三十錢や四十錢のはした金を吳れるものは無からうから、從つて繁盛するのは定つて居ると、藝者は少くとも四五名を抱へて、この町内の人氣をわが手に引き纏めてしまはうとの目論見であつて、姉はこれを厭がつては居るが、世話になつて居るのだから、不本意ながらも、數名の子供に藝を仕込んで居るのである。

小竹は、宮田等の歸つてから、直ぐ高瀨屋を駈け出して、姉のところへやつて來たのだ。

なか〳〵暑苦しい夜だのに、姉の家はもう床に就いたと見え、戸は閉つて、ひッそりして居る。

ひッそりして居る程、小竹の氣はあせるのである。

『姉さん、開けて頂戴、姉さん！』

『何だねえ、けたゝましい』と、奥で返事があつた。

『早く開けて、早く！』

『今開けるよ、お待ちな』と、出で來るけはひ。

『早く！　早く！』

どん〳〵、どんと、また敲く。

『どうしたと云ふんだ、ねえ、この子は？』

『早く、さ！』と、ます〳〵あせる。

『何だ、ねえ、氣疎うな？』と、戸が開くと、やはらかい寢卷すがたの年増が、そこに立つて居る。その衣物に添ふて、はツきりと輪廓の取れた細すがたは、月影に輝いて、風があると、羽根を生じて飛びさうである。

姉の顏を見れば、妹も少し遠慮があるので、直ぐおち着いて、何の事もない樣子に返つた。

土間へ這入つてから、何ものかが追つかけて來るかの樣に、大變恐ろしさうに、戸をぴしやりと締めたが、

『私、もう、家へ返らないわ。道でめツかるかと思つて――おお、こわ！』と、戸の方を見かへる拍子に、奥より射すランプの光が後ろ髮を照らしたので、その筈ならず亂れて居るのが姉に見えた。

『あら！　お前の髮はどうしたんだい』と、姉があやしんだ。

それには構はないで、小竹は、

『姉さん、どうしよう』と、その手に振ひ附いたので、何事かあつたのだと知つて、
『何も云はないで、どう爲ようもないじやアないか？　まア、お上りよ。』
『私、亡者になつてしまつて、どツちへも浮ぶ瀬がない。』
と、二人は奥の間へ連れ立つて行つた。

この姉妹は、腹違ひであるだけ、遠慮を仕合ふうちに、却つて相愛し、相思ふの情が深く、先きに姉が賣られる時、妹と苦難を爭ひ合つた事情など、思ひやれば誠にあはれだと云ふので、東京の或新聞の三面では、これを三日續きに書いた程である。

姉は痩ぎすの方で、顔立ちは妹よりもずツと品がある。然し、内氣で、惡く云へば、意氣地なしであるから、好ないところにでも、ずる〳〵べツたりに成つて居るのである。妹は、また、肥つて、愛嬌はあるが、勝氣で、活潑で、自分の思つたことはどこまでもやり通さうとする代りに、心の向き方では、墮落はます〳〵墮落に沈むのであるから、宮田は會ふ度毎にこれをいましめて居るのである。姉妹とも同じ様な境遇に落入つてからは、一段と相思ふの情は深くなつて居るのだ。

宮田の親切は、姉も妹から聽いて知つては居るが、自分も度々そんな場合に出食はし、何となくあつたかい心の春風に、折角清い、樂しい戀の芽が出かゝつたのを、中途で、悲しくも摘み取られたことがあるので、一たび泥水に落ちたものは、どうしても、眞面目な人と添ひ遂げることは出來ないとあ

きらめて居て、今度の事もあやぶんで、なか〳〵信用しないのだ。
『宮田さんに何とか云はれて來たのだらう』と、一言のもとに圖星を指す、『だから、云つてるの、さ――どうせ、眞面目なお方と、長く氣の合はう筈はない。あゝいふことは良くない、かういふところは惡いと、責められたに定まつてるよ。』
『だツて』と、小竹は、その通りに違ひないので、吹き出して、『私が惡かつたのだものを。』
『ほ、ほ、ほ、ほ！　矢ツ張りさうだらう？　好いた男にぶたれたのなら、一生の思ひ出だ――有難く思つてお置きよ。』
『あら、さうじやアないのよ――いツそ、ぶたれて、死にたかつた、わ。』
『でも、もう、死んだ筈じやアないか？』
『どうして？』
『そんなことじやア、けたゝましい「亡者」が「浮ぶ瀬のない」筈さ。』
『ほ、ほ、ほ！　私、それどころの亡者じやないの。今、あのお方に棄てられたら――家の伯父さん、伯母さんとも喧嘩をしたし――もう、心の遣りどころがない、わ。』
『でも、向ふから、棄てるに定つてるよ――いツそ、そんな苦勞は爲ない方がいゝ。たゞさい苦しい勤めだものを、思ひ合つて出來ないじやア、また一つの苦勞が嵩むばかり――』

『その苦勞なら、いくらでもする、わ――淨めの火だもの。育ちが賤しいからッて、たましひさへ入れ更へれば、からだの穢れは燒き棄てられましよう？』

あゝ、これだ！　小竹の心は、かき亂れて居る間から、救ひの光明に接して來たのである。

小竹の目に一種異樣の光が輝いて居る樣に見えたので、姉も眞面目に暫く見つめて居た。

この間に、今晩の出來事は詳く話されたのである。

夏の夜は風もなく、しんとして、開けてある窓の月かげは、たゞうッかりとして居る樣で、心に煩悶ある者と、これに同情する者とが、相並んで默して居るところには、光を照らすよりも、寧ろ薄暗いかげを投げて居る樣に見える。釣してある岐阜提燈に、あかりの點いて居ないのも見えて、これぞ亡者の迷つて居るのに似て居る。

『今晩は』と、門口に女の聲。

『あゝ、來た、來た』と、小竹は追ッ手でも來たかの樣におそろしがつて、姉のそばに近よつた。

『姉さんは來て居ますか』と、玉置からの使ひである。

『はい、來て居ますよ』と、姉が返事をした。

『姉さん、二本お迎へ！』

この聲、今は地獄から響いた樣に聽えたので、小竹はぞッとして姉の手にすがり附いた。

『今夜は歸せん、此處へ宿めると云へ』と、これはまた次ぎの寢室からである――親分の聲。團扇の音がして居る。

『旦那が云はれるから、歸つてさう云つてお呉れな』と、姉が取りつぐと、

『はい、畏りました』と、迎へは歸つてしまつた。

この親分の言葉には、町内一人も公けに反對するものはないのである。

『おい、小竹さん、その話の三十兩は、おれが出してやるから、あす、武山とかいふ野郎に返してやれ』と、寢て居るまゝで話しかけた――姿は見えないのである。

『それでは、親分に濟みませんから――』

『なアに、高が知れたはした金よ、一度の賭で取り返しの付くものだ。』

『どうも、濟みませんが、それではよろしく――いづれ、お返し申しますから。』

『なアに、心配する程のものじやア無え。』

『旦那がさうおツしやるのだから』と、姉も脇から口を添へて、『貰つてお置きよ。』

小竹は、實は薄氣味惡いのである。こんなことを種にしてまた何か云ひかけられては、たとへ死んでもいゝと覺悟して得た金であつたにせよ、思ふ男の爲めならばこそと、初めから顏をしがめて居たのだが、それは隣りに寢て居る者には見えない――果して、直ぐ、難問題が持ち上つて來た。

『それで、小竹さん、おれは遠から考へて居たんだが、玉置にあれだけ儲けさしやア、もう、向ふに云ひ分はあるめえ――ちツと、おれの方を助けて呉れねえか？』
『そりや來た』と、小竹の胸はどぎまぎして來て、どう返事をしていゝかと、姉の方を見ると、姉も變な顏つきをしてこちらを向いたところであつた。
『なアに、玉置が何と云つたツてかまやアしねえ。あすから、おれの家に居るがいゝ。さうすりやァ、おれも開業を繰り上げてやらア、な。』
何とか返事をしなければならないので、姉が先づ口を出した。
『それも善う御座んしようが、まだ家の子供が間に合ひませんから、小竹さん獨りでは骨です、わ。』
『玉置だツて、獨りでやツて居るも同前じやアねえか？』
『さうは行きませんわ、ね。』
『それじやア、どう爲ろといふんだい？』
『矢ツ張りあツちに居て――』
『馬鹿アぬかせ――淫賣屋見た樣なところに居てやる因緣があるかい？』
『そりやア、さうでも御座んすが、こツちさへ心を定て居れば――それに、また、今の話も御座んすので――』

『お前ア默つてやアがれ。——小竹さんの考へはどうだ、な？』

『私も——あの——お聽きの通りで御座いますので——』

『うーん』と、少ししよげた樣子、『じやア、その書生が卒業するまで、玉置で辛抱するといふんだ、な？』

『はあ。』

『それじやア、よし！　おれが仲人になつて、男に添はしてやるから、あす、宮田といふ奴を呼んで來い。』

『はあ、畏りました』と、堅くなつて居る。

『では、小竹さん』と、姉、『さうお爲な——お金も出して貰ひ、また、かういふことになつては、日那に濟まんけれど、ねえ。』

『本統にお禮の云ひやうがないわけだ、わ。』

『まア、今晩は、もう、お休みよ——勞れて居るだらうから。』

姉は床を取つてやつて、二階に妹を寢かした。

そのあとでのこと、姉は親分と死ぬか、活きるかのいさかひをした。——親分の寢床には、まだ問題は殘つて居たのだ。——妹の身を親分の手にゆだねて、それが云ひがかりの種にでもなつたら、折

角足を洗ひかけた妹の爲めに、故障が起るに定つて居るからである。親分は、また、愛して居る女が身を以つて止めるのであるから、小竹を甘く取り込まうと思つた計畫を、あきらめ難いけれども、あきらめることとなつた。

それで、小竹も先づ安心して眠ることが出來た。

## 五

小竹が親分の家で目を覺ましたのは、もう、かれこれ十時近くであつた。昨夜の心配でさぞ勞れて居るだらうといふ姉の心から、そツと寢かして置いたので、――寢卷にした姉の單衣のまゝ起き上つて、顏を洗つたところを見ると、木地は眞ツ靑で、全く生氣がない。どことなく怨めしさうな樣子が見える。

然し、小竹に怨みがありとすれば、今までの男子はすべてその怨みの目的物であらう。

急いで朝飯をすませ、茶の間へ來て、火鉢の前に座わると、先刻から來て待つて居た髮結のお濱が、

『姉さん、一服』と、吸ひつけた長烟管をさし出した。

『大變待たせたの、ねえ』と、これを受取つた。

『なァに、さうでも御座んせんの』と、お濱が答へて、手をもみ〳〵、小竹の上から膝までを見下ろ

した。

　小竹は二三服つゞけざま。

　姉も出て來て、そばに座わつたが、

『まア、ひどいこわし樣だ、ねえ――ゆふべは、さうでもないと思つたが』と、じツとあたまの方を見て居る。

『本統に肝癪が起つたのだものを――けさは、しびれて居るやうだ、わ』と、煙草を吸ひかけて、あたまを振つて見る。

『お前の好きから出たことだから、さうやき〳〵しないでもいゝのに』と、姉はひやかす樣ににやり。

『宮田さんのことで御座んすか』と、お濱もうすうす知つて居るらしい、『姉さんは、眞面目になると氣持ちのいゝ程一本氣にお成んなさるから――』

『全くだ、ねえ』と、姉もそれには感心した樣子だ。

『さう云つて貰へば、うそにも、あり難いねえ。――さア、結つて貰ひましようか？お待ち遠さま』と、小竹、鏡臺の前に座わつて、鏡にうつる姿を見て、われながら、けふに限つて、一段と何だか厭な感じがした。

　合せ鏡をして、髷の散々になつて居るのを見たが、

『本統にひどくなつてるの、ねえ』と、にが笑ひ。
『自分がしたとお思ひよ』と、姉。
『姉さんは思ひ切つたことをするお方です、わ』と、お濱は二の元結を切り、カセを解き放つたので、髷はぱツくりと口を開いた。
『だツて、今度のことに限つて、思ひ切れないの』と、小竹はにツこりと意味ありげの口を結んだ。
『さう申せば』と、お濱は髮を梳きながら『あの武山といふ人は厭な男で御座んしよう？ お金がどんなにあるか知れませんが、町内の藝者は大抵自由にされたさうですよ。』
『何だ、ね、あんな野郎は？——いけすかない！ 田舍だから、威張れるだけのこと。ちツとや、そツと、戰爭に手柄をしたからツて、あの傷だツて、逃げ傷かも知れやアじない——背中にあるといふじやアないか？』
『さうださうで御座んすよ。』
『ちツとばかりの湯治で直る位だから、知れたものさア、ね。蚯蚓の傷の樣だ。あんな下等動物は、胴から切つても、生きてるだらうじやアないか？』
『小竹さんは』と、姉が口を出した、『その蚯蚓に見込まれたのだアね。』
『ぞツとする、わ』と、小竹、わざと身を振はす。

『それじやア、私の手が狂ひます、わ』と、お濱が愛嬌に眞面目を使ふ。

『おや〳〵』と、姉妹は輕く笑つた。

この時、姉の仕込んで居る子供――十一二から、十五六までの――が二三人、二階から下りて來て、

『姉さん、お早う御座います』と、挨拶をして、また二階へ上つて行つた。

『もう、お早うでもない、ねえ』と云ひながら、小竹は一番あとから來た十一二の子を呼び止めた。

『きいちやん、踊りが上手になつたツて、ねえ――踊つて御覽な。』

『一つおさらひをして御覽な』と、姉も自慢から勸める氣味があつた。

『春雨がい〻』と云はれて、きいちやんはおとなしくその構へをした。――棹なしの、小竹が口三味線。

『チチントシヤン、チチチントンシヤン、はるーさーめーえに、ツツンチチリンチテンチテツントンしいツぽりぬるーるうぐーひすーの羽かーぜーににほーおうめがかーや、ツツンチチンチチント、シヤン――』

と、皆が調子に乘つて來たところで、

『賴む――』と、門口へ人が來た。

『はい』と、女中が出て行つた樣子。

『姉さん、もう、來たのよ。出て頂戴よ、私、きまりが惡いわ。』
『何だねえ、意氣地のないことを云ふ？　自分の男だのに。』
まごついて居るきいちやんの踊りは中止になつてしまつた。
實は、けさ、女中を遣つて譯を話し、宮田と野村とを呼んだから、來たのである。姉は、數日前、宮田に會つて知つて居るので、迎へに出た。
『あら、よく來て下すつたのねえ。どうか、こちらへ』と、その導くがまゝに、二人は客間へ通つた。馴れないところで、姉の愛嬌あふるゝ持て爲し振りには、二人とも、初めから、制服すがたのまゝ固くなつて、汗をふいて居る。
『只今、妹は、髮結さんが來て居りますので、暫く御免を被りますが――あの氣まゝ者ですので、ねえ、どうか、それは御知り置きを願ひますよ』と、前以つて妹の弱點を辯護して居る樣に聽えた。『あなた樣がたは明日お立ちださうで――』
『はい、明日』と、宮田、『あまり長くなりましたから、もう歸らうと思ひまして。』
『さうですねえ、學校の方がおありなさるのですから――あの、明後日からでも？』
『いや、十四五日からはじまりますので』と、野村は引き受けて、『さう〳〵遊んでばかりも居られません』と、笑つて見せる。

『それが不統で御座いますよ、妹の樣な商賣では、きまりがないので困りまして、ねえ。』

『どうか、早くお止めになる樣に、私も骨折りますから、あなたの方でも、その樣によろしく願ひたいものです。』

『あなたが野村さんとおツしやいまして？』

『さうです。』

『どうか、よろしくお願ひ申します。こちらでも、出來るだけ骨は折つて居るつもりで御座いますから。』

と、云つて居るうち、女中が茶と煙草盆とを持つて來た。

晩茶で御座いますが——只今、主人がお目にかゝりますから』と、姉と女中とは立ち去つた。

二人は無言で暫く室内を見まわしたが、新しい床の間には、筆太に、「天照太神」と書いた掛け物がかゝつて居て、その前には御幣が立つて、三寶に大きなお神酒德利が飾つてある。これを見て、二人は今出て來ようとする主人の面影をも想像することが出來たのである。

『姉さん、お白粉はどこ？』

『そこにあるじやアないか、ね。』

『ほんに、氣がつかなかつたの。』

『どうかしてるよ、この子は。』
次ぎの間で聲がすると同時に、唐紙が開いて、出て來たのはこの家の主人である。
顏の赤い、どツしりと太つたおやぢで、提げ煙草盆を以つて、にこ〳〵しながら、
『よく來てくんなさつた。』
二人はあわてゝ敷物をはづさうとすると、
『どうか、そのまゝ』と、止めて、自分も座を占めた。
『わしは高見丑松と申す者でごわす、お心易く願ひます』と、横柄ながら、あたまを下げるところを見ると、思つたよりも人の善いらしいのである。
二人は少し安心したと見え、座を占めたまゝ丁寧に挨拶をして、姓名を告げた。
『ははア』と、太い烟管に煙草をつめながら、『小竹からも聽いて居ましたが、お前さんが宮田さん――野村さんも御一緒に來てくんなさつたのは、何よりも都合がええ。今日お呼び申したのは、實は、宮田さんと小竹との約束の固めに、しるしの盃をあげたいのでごわす。』
と、煙を横に吹いた。
『それは恐縮の至りで御座います』と、宮田、手をついて、禮をしたが、あまりあたまを下げ過ぎたと思つたせいか、急に手を引いて、兩膝に載せ、語調がまた固くなつてしまつた。

『あなたの――、御――御好意は、あ――飽くまでも感謝いたします。』
『親分が引き受けて下さるなら』と、野村は碎けて出た、『これより安全な策はないと、私は思ひますから――』
『そりやア、心配しなさんな』と、親分、『これでも、町内の口きゝだ、わしが引き受けたからは、きッと不都合なことアさせません。』
昨夜小竹の利用を斷念したのは永久か、どうか、かげで聽いて居る者にも分らんのである。
『どうか、よろしく』と、二人は愛相に笑つて答へた。
親分は、得意の體で、胸をそらして、うしろをかへり見たが、
『おい、小竹、早く來て、御挨拶を爲ろ！』

六

この時、また唐紙が開いて、姉と小竹。
『まア、急にうぶに返ッちまッたんですよ。恥かしくつて、御座敷へ出るのが厭だッて！』
と、姉は却つてそわ〳〵と、小竹の手を引いて出て來た。
宮田が呼ばれた通りに來て吳れたので、小竹の喜びは非常なのである。自分が今まで何をして居た

身分であるかも、全く忘れて居るのだらう。たゞ、ゆふべの樣な失策は、もう、二度と再びして見せないと定めては居るが、それぱかりがまだ申し譯のないといふ氣持ちがして、不斷のいきほひはどこへか消えてしまつて、恐れの霞が自分の目の前に棚引いて居るかの樣子。

『いらツしやいまし』と、恥かしさうに小竹が、姉のそばに、敷物無しに座わるところを見ると、宮田の胸中では、矢ツ張り藝者じやないかといふ不平が横切つたが、ちよいと目と目を見合はすと、可愛いといふ情が一時に燃えて來た。

髮はいつもの通りに直つて居て、木地の青いのもお白粉で隱れて居る上に、けふこそは頰の色にまじり氣のない恥かしみがあらはれて居る。この優しさを目の前に見ては、ゆふべ宮田等が歸つてからの始末は夢にだも想像することは出來ないのである。

あの細い手でわが手を抑へ、その上に顏を載せてすゝり泣きをしたこと、店の女中がお燗を持つて來た時、窓の方に行つて、泣き顏をそむけたこと、隣室へ客が來た時、呼んで居るから行つてやれいと勸めたら、進まずながら出て行つて、いつもの通り元氣よく歌つたり、騷いだりして居たこと、女の方が年が上ではあるが、見棄てないでねえと云つたこと、一昨日歸京するからと云つて別れる時、いつまでも覺えて居るかと尋ねたら、『あなたこそ忘れる癖に』と、聲をつまらせたこと、などが一々宮田の胸に迫つて來た。

宮田は聲を發し得ない位であつた。

『小竹さん、昨夜は失禮いたしました』と、野村が挨拶をすると、

『私、悲しくなつてしまつてよ』と、小竹はあまへるやうに答へて、宮田の方を見た。

『ゆふべは、宮田さん』と、親分は吸殻をはたいて、『癪にさはることがあつたとかで、髮をかッこわしてやつて來たのでごわす。』

『妹は氣が短いので、本統に困つてしまうのですよ。』

『あら、私、惡いことをしたと後悔したのだ、わ。』

『その節、武山とか云ふ奴から三十兩貰つたさうでごわすが、それはわしが揃へて返しました。御心配にやア及びません。』

『さうですか』と、宮田。

『あなた、また、おこらんやうに、ねえ』と、小竹、氣が引けるらしい、『私、今までのことは皆惡かつたのですから、これからはお言葉通りに致しますから——野村さんにもお賴み申します。』

あたまを下げたが、これは小竹が一生の懺悔らしい——そのまゝ、ハンケチで淚を拭いて居る。

『さういふことまでして貰つては、親分に濟まんやうだ、なア?』と、野村は宮田に話しかけた。

『そんなこととは知らなかつたのだ』と、宮田の返事。

『なアに、高が知れたはした金でごわす。』
『それは家の方ですませてしまいますので』と、姉は口を挾んで『けふは返しにやりますから、御安心なすつて下さいまし。』
『ゆふべは、私も』と、野村、『歸つてから、宮田君の思ひ違ひをなだめましたが――宮田君とて、さう、急に心の變つたわけではないのですから――小竹さんさへしツかり成さつて、他日の所天があることを覺悟して居て下さればよろしいのです。』
『さうで御座いますよ』と、姉、『それはこちらの方でも充分氣をつけさしますから、ねえ、野村さんも――』
『何分可愛がつてやつてくんなせえ』と、親分は宮田と野村とをじろりと見て云つた。『わしもこんなすべツた野郎でごわすが、かう成つて見りやア、兄弟同樣――お互ひに力になりましよう。』
博奕打ちの兄弟！
宮田と小竹とは、はツと顏を見合はせた。
何と返事をしていゝのか、分らないのである。
小竹は、かツと急にのばせて來た樣子を扇子にまぎらした。
『はア、どうか』と、然し、宮田は答へたが、自分の身を何だか厭な境遇が包むのではないかと疑つ

て見れば、心の奧から自覺といふ邪魔物が踊り出て來て、自分の現在を鏡に映した樣に引き縮めてしまつて、而も、そのおもてに、戀といふ女と名譽といふ男とが、夫婦喧嘩をして居るあり樣も見える。

その傍には、紫の本包みをかゝへた、モーニングコートの痩哲學者が通つて居て、この喧嘩をあざ笑つて行くらしい。早く行けばいゝと思つて居るのに、その先生の步みは、遲々として、一向に見えなくなつて吳れない。——何だか跡戾りをして來る樣である。

そのうちに、角帽、金鈕子のマツキンレー靴が澤山集つて來た。しツかりやれ、しツかりやれといふ聲が聽える。意志が强くなけりやアいけないと叫ぶものもある。いや、人生の問題は情に入つて、初めて解釋が出來るのだと反對するものもある。また、理性の水を投ぜよと意氣込むものもある。死ぬまでやらすがいゝ——なアに、棄てゝ置くがいゝ——などと、云ふものもある。しまひにはいづれも面白がツて、夫婦喧嘩萬歲！　とどなつて、散り〴〵ばら〳〵に成つてしまつた。

そこへ赤門が見えた——ああ、また、立派な煉瓦の建物が見えて來た。蟻の樣に小い大學生が、群を成してあちらこちらの教室へ這入つて行くのが見える。

して、まだ、この鏡の面からは、例の喧嘩は消えないのである。

宮田の目前には、親分も居なくなつた、小竹の姉も居なくなつた、否、その小竹さへも居なくなつてしまつたのだらう。

然し、これは一瞬間の出來事であつたのだ。
宮田がわれ知らず野村の方を見ると、野村もさうした氣持ちがしたのか、どうだか分らないが
『私も出來るだけは骨折りますから』と、返事は今までの調子に似ず、氣が拔けた樣に聽えた。
三がさねの大きな瓦盃と銚子とを以つて、女中と今の可愛いきいちやんとが出て來た。
宮田は、これを見て、これが高見丑松と名乘る博徒と兄弟分になる盃かと思ふと、小竹が待ち遠しがつて居る心を汲んでやる氣も出ない樣子である。――自分と小竹との結婚豫定の盃ではないか？
姉は、盃と銚子とを座の眞中に置かせた。無論、ほんの形式ばかりで濟ますのだが、形式なるものは、この家の主人のやうな社會にあつては、これが斬る、斬られるといふ喧嘩の血止めにもなるのである。從つて、これが破れたら、また、それだけの反動が忽ち來たるといふことも定つて居るのである。――あとから出て來た頭つきと吸ひ物とは、一座が相笑つて、晝飯を共にする材料であるらしい。
宮田が、足のしびれをまぎらしながら、
『鳥渡失禮いたします』と、立つて行つたので、
『小竹さん』と、姉が目くばせをした。
小竹は宮田のあとから附いて椽がはに出て、唐かねの大きな手洗鉢のそばに待つて居ると、宮田は杉マサの折り戸を開けて出て來て、手を洗つて、腰の服囊から白のハンケチを出したので、小竹、直

ぐこれを奪ひ取つて、自分の絹ハンケチ——香水のにほひがいゝの——を渡した。
『忘れないやうに持つて行つて頂戴』と、云つて、じツと宮田の手を握つた。
ふり仰ぐ目に自分の目を報いて、宮田も亦小竹の手を握り返して、その頬に接吻した。そこで小竹は宮田に三十枚の札を渡したのである。
小竹ばかりが暫く座に返らなかつたのは、泣いて居たのである。
それから、假の三々九度——親分と野村との立ち會ひで、首尾よく終んだので、あとは普通の酒盛り親分は氣持ちよく醉つたらしいので、みんな一緒に晝飯をも終ませ、宮田、野村の明日の歸京を、小竹と姉とは、同船で、次ぎの港まで見送ることに話が定つた。

## 七

その日も、小竹は親分の家に宿つた。店へ歸つてからが、客でもあれば、その對手をして醉つたあげくが、寢坊をするに定つて居るからである。
明る日は、朝まだき、姉と二人で支度をして、海岸に出ると、別に玉置の娘が一人つき添ひになるつもりで、ついて來た
二友と姉妹とつき添ひとは、一緒にはしけに乘つて、汽船へ移された。

小竹は船に弱いのである。この町へ來た時も、醉ふのを恐れて、わざ／＼汽車で遠まはりをして、山を越えてやつて來たのだが、けふは格別の奮發をして居るので、恐れることもなく、宮田と共に甲板上の蓙に座わつた。

甲板から、自分達の住んで居る町内の方を見ると、うす靄がかゝつて、家々はまだねむたさうな家根を並べて居る。藁葺きの漁師家、瓦葺きの別莊建ち、あれは何亭、これは何屋と、それからそれへ渡つて行く向ふには、一つゞきの山が綠の色をしめらして、これを見るものゝ目には、殘んの夢も忽ち醒めんばかりである。

彈き飽いて、また聽き飽いた三味の聲もなく、心にもない人よろこばせの笑ひもなく、たゞ磯うつ波の音ばかり、涼しい風の間に響いて、而もこれを海の上から聽くのである。小竹がこんな景色に接したのは、生れてからこれが初めてだ。

『まア、氣持ちのいゝこと、ねえ――活き返つた樣だ、わ』と、小竹は姉の手を取つた。

『まア、こツちを御覽よ』と、姉がその手を引ッ張るにつれて、からだは向き直つた。

見よ、大海の日の出！

上に渦卷いて居る紫の大雲、小雲は、赤くふち取られて、いくつともなくその住ひに安んじ、下に開らけた海の果には、岩にも似た離れ雲が、ぽつりぽつりとそのど黑くひかる角をあらはし、間の青空

には紅を點じたやう——すべての物は燃ゆる樣な色を呈して居る。船が進むにつれて、右の方に延び出た岬のかげからも、一しほあかるい光景が見えて來たが、その方へ汽船の烟が靡いて行くので、その烟の末の動くのを船との關係を忘れて見て居たものには、全く天の火事ではないかと思はれるのである。

『あゝ！　いゝこと、ねえ！』と、小竹が云つたか、云はないうちに、破つた玉子の黄身の樣な圓い日が、波の上にふわりとあらはれた。

『あれ、宮田さん、日の出よ』と、また云ふ間もあるかなし、日は一段と大きくなつたと思ふと、きら〱と光が強くなつて來た。

『おお、まぶしい、わ』と、目をそらして、小竹、宮田を見ると、まだ日の方を見つめて何か考へ込んで居る樣子。

『あなた、活き返るやうじやア御座いませんか』と、小竹はからだを寄せた。

宮田の考へて居たのは、小竹の靈のよみ返りのことである。

だから、非常な喜びを以つて、宮田はこちらを向いた。

『雪枝さん』と、これは小竹の本名である、『あなたが救はれる時も、丁度かう云ふいきほひでしようよ』と、小聲。

雪枝は、人前をもかまはず、喜んで、宮田の膝にすがりついた。

『分つて居ますよ、私だツて。――もう、今、見棄てられても、本望です。』

然り！　小竹の身に、若し大なる靈が宿つたものとすれば、世間の藝者が、その多くの客のうちから、一滴の涙でも眞にこぼさせて呉れる手を見つけ出したら、一滴の涙をこぼす間だけでも、その手にすがつて、それを一生の思ひ出と滿足する通りのいきほひで、この活躍して居る一刹那に、天地の清淨をすべて攝取することも出來るだらう。『見棄てられても』とは、からだと心とを別々に取り放しても活きて居られるやう仕込まれて、われながらわれを打棄ることに馴れた、この種の女には何でもないことである。

宮田に取つては、さうは行かぬ――渠は却つて凡夫である。一は必らず一と添はなければ、滿足が出來ないらしい。

『あなたを棄てゝは、もう、私は活きて居られんのです！』

宮田がこの返事も誠である、然し、結婚の實を擧げるまでは、まだ公けに隣り人に發表は出來まい。されば、こゝ、二三知人の前にも小聲である。

然し、二人の胸は此の時天の樣に赤く燃えて居たのである。

『ああ、姉さん、武山さんが――』と、つき添ひの娘がさゝやいたので、いづれも注意をすると、艫

の方の昇降口を下りて行く、そのうしろ姿が見えた。渠、計らず同船になつたので、今までこツそりとこちらの樣子を見て居たのである。

二人は少し座を離れて、他の二人と雜談に移つた。

一時間經つか、經たないうちに、次ぎの港へ着いたので、小竹と姉とつき添ひとは、別を告げてはしけに乘つたが、丁度東京から這入つて來た汽船があつたので、直ぐそれに乘り移つた。

武山はどこへ行つたか、姿が見えない。

小竹の一行と宮田の方とは、汽船と汽船との甲板から、互ひにハンケチを振り合つて、嬉しさうに又悲しさうに別れてしまつた。

宮田が東京に歸れば、最後の學年を專ら勉强して行かなければならない。卒業さへすれば、細君の候補者は、無理にでも、向ふから、立派な身分で出て來ないことはない。

小竹の方は、また、宮田の卒業まで辛抱が出來るとしても、そのかげには、例の『腕一本なり』の親分の樣な者がついて居る。

この兩人の戀は、圓滿に成就するか、どうか、これは一つの疑問である。

――(三十九年三月)――

# 老婆

熱海へ湯治に來てから、もう、十何日となるので、多少運動にも出られるからだとなつたのだ。幸ひ、天氣のいゝあつたかい日だから、輕便鐵道に乘つて、十八町を隔てた小熱海、伊豆　へ出かけると、乘り合ひ客のうちに、同所を詳しく知つてる人があつて、おとまりなら、相摸屋がいゝの、江島屋がいゝの、古屋はどうの、井の口屋はかうのと、尋ねもしないに教へて吳れる。また、伊豆山神社ばかりがたゞ一の見物所であつて、式內の古神社と云はれ、軻遇突智の神を祭り『千早振るいつの御山の玉椿、八百萬代も色はかはらじ』と實朝が讀んだとか、社の後ろにある古々井の森は昔から有名なもので、兼房朝臣が『五月闇古々井の森のほとゝぎす、人知れずのみ鳴き渡るかな』と歌つてあるとか、案內記でも暗誦してゐるやうに話しつゞける。十四五分で伊豆山に着く。

下りたところは、鐵道——もとは人車鐵道——の爲めに開いた新道で、絶壁の中腹に通つてゐる一筋道だ。それから直下數十丈を石段によつて下だると、狹い海邊に石垣を築き出して、そこに澤山の溫泉宿が並んでゐる。濱と云つても、砂もなく、砂利もなく、大きな石ばかりが浪にゆられて、石垣

の裾まで、ごろごろ鳴つてころがつて來る。道と云つても、宿屋々々の庭さきを通らなければいけない樣になつてゐる。その一番はづれに、近頃出來た渡邊子爵の別莊があつて、大きな猛犬が入り口を番してゐるので、そこをとまりに、新道へあがつて來たが、さて、これからまた伊豆山神社へのぼるとなると、聽いて來たよりも嶮しい、而も長い磴道であるから、僕等は先づ相談して見なければならない。といふのは、その實、僕は同宿の一老人を連れて來たのである。

『どうです、登りますか？』

『かまひません、私ものぼつて見ましよう。』

と、勇んでのぼり出したのも、實は自的があるので——輕便鐵道に乘つて來た時、僕等が聽かされた話のうちに、この神社の門ぎはに茶店を出してゐる一老婆は、今年八十九歲になるから、その長壽にあやかつて來るのもよからうといふ勸めがあつたのだ。僕等はそれに對する好奇心に驅られて、この高きをよづるのである。

少し登れば、左右に狹い畠があつて、麥が生えてゐる。また少し登ると、また同じ樣な畠がある、一段は一段每に、一階は一階每に、おほ海の胸が開らけて、青い麥畠の端づれと接近して來る樣な氣がする。目に入るものは、青い麥、青い海、青い空ばかりだ。風は隨分強く吹いてゐるが、僕の肌は汗ばんで來る、後れて來る老友は頻りに海の方を見返つてゐたが、とんびの袖から手をさし延ばして、

向ふをゆび指しながら、

『御覽なさい。かさなつてゐる樣に見えた初島と大島とが、のぼればのぼる程、離れて來ます、大島の方は大分距離が遠い』と何だか不思議がつてゐるのもをかしいが、おつき合ひに立ちどまつてながめると、初島は黑いが、大島は薄墨色で、夢の樣な煙を吐いてゐるのが分る。

然し、それどころではない、僕は下から石段の數をかぞへて來たのであるから、忘れてしまはない樣に注意して、更らにかぞへながら登つてしまう。神社の第三門までゝ六百八十五段ある。

『幾段あります?』

『こゝまでゝ六百八十五段』と、僕は最後の段を一踏みしてから、移つて、大きな楠の木の根に立つ。

『つかれるのも無理はありません』と、老友は手拭ひを出して額の汗を拭いてゐる。

神主の書生らしい青年が、袴をはいて、また一方の楠の木にもたれながら、呑氣さうに詩吟をやつてゐたので、僕はそこへ進んで行つて、

『古々井の森はどれです?』と聽くと『あすこ』と、渠は縣社に向つて右の方をゆび指し、『あすこだつたが、皆切り倒されたんで、今はこれ』と、社の屋根うへをさして、『がその代りに呼ばれてゐるのだ。』

見ると、成る程、これも古めかしい森で、楠、椎、椰などが段々にかさなり合つて、社の上におツ

かぶさる樣な勢ひを呈してゐる。如何にもその古社地たるに恥ぢない有り樣だ。ふと、左手に狹い小屋掛けのあるのに氣がついて、例の婆さんのことを思ひ出し、

『あれに、いつも、婆さんが來てゐるのですか？』と尋ねると、

『はい、さうです。然し、けふは寒いから、來ないのでしよう』との返事。

『どこからやつて來るのです？』

『下からのぼつて來ます。』

これには一驚せざるを得なかつた。どんなに强壯な足、腰を持つてるか知れないが、八十九のよぼよぼ婆さんだと聽いてゐたのに、毎日茶店を出しに、この坂をのぼつて來るとは、大抵な骨折りではなからうと思ふ。

『商賣は可なり出來るのでしようか？』

『なアに、こんなところだから、知れたものだ。この頃では、一日置きに一度、二日置きに一度しか來ません。道具は皆私の方であづかつてやるんです。何だつて、もう、いゝ婆さんだから――』

この時、僕の老友は參詣を終へたと見え、殿前の石段を下りて來たので、聽いた通りを話すと、多少失望の樣子も現はれたが、

『ぢやア、婆さんも古々井の森になつたのでしよう』と洒落ながら、小屋の腰掛けに行つて腰をおろ

す、友は持つて來た白酒を出す。僕はまた病氣の爲めに酒が飲めないので、鹽瀬の餅菓子を三十錢ほど買つて來たのを出す、白酒は二人ともやれたが、餅菓子の方はどちらも餘り行けないので、一つ二つ喰つた跡は、もとの通りにつゝんでしまう。

よかつた天氣が急に曇つて、細い、から〳〵したあられが降つて來たので、いそいでそこを出發する。長い石段の五分の四ほどまではいそいで來たが、なか〳〵止みさうもないのに往生して、僕等は立ちどまつて一息つく、海の方が晴れてゐるのだ。それに、のぼる時は氣がつかなかつたが、新道から延び立つた大きな榎の木があつて、枯れて枝葉は落ちてゐるが、メートルを測る目當ての樣に、麥畠と海と空との間に直立してゐるので、僕等の立ち場からおのづから心に押し測られて、じツとそれを見まもつてゐると、目が暗んで足がぐらつく樣な氣になる。丁度、下を通る輕便鐵道客車の音が、がうツと自分等を引き落す樣な勢ひで過ぎて行く。

そこへ、人を呼ぶ樣な低い聲が聽えて來る。見ると、一階下の石段に倒れて、呻いてゐる一老婆がある。僕等は驅け下つて懷抱してやる。

『婆さん、どうしたのだ?』と、老友はいふ。僕はその體を抱き起してやつて、

『しツかりしな、婆さん、大丈夫だから。』顏を見ると、皺だらけで、人間の色などは初めからないものゝ樣だ。

『竹さん、竹さん、早く迎へに來てお呉れよ、いつまでこの娑婆に苦しめて置く氣だらう』と、婆さんは力なく倒れかゝるのを、僕はしつかとさゝへて、
『婆さん、しツかりおし、僕等がゐるから』と、勵ましてやる。
『あゝ、竹さんか？　一緒につれて行つてお呉れよ』と、僕にすがりつくので、
『いや、僕等は旅のものだ。行きがゝりにお前を見たから、懷抱してやらうと思ふので』と答へると、それが分つたのか、分らないのか、またぐたりと倒れかゝる。
『例の婆さんだらうから、兎に角、下までつれてツてやりましよう』と、老友。
『それより外に仕方がありますまい』と、僕等は先づそばにさらけ出されてゐるものを取りまとめて、しなびた蜜柑やら、一文駄菓子やら、その菓子箱と云つても、がらすの蓋はよく合はない樣だ。
『こんな物は邪魔だから、うツちやつて行きましよう』と、ふたりして、ただ細い息のかよつてるむくろばかりを新道まで運びおろす。あられは小やみになつて來る。
　そこへ通りかかつた田舍をんなで、五十ばかりのが立ちどまつて、
『あれ、またお婆さんが——それだから、寒い日にやア、出ない方がええといふのに。お婆さん、しツかりしろよ、お婆さん』と、耳もとへ口をつけて叫ぶ。
『お君か？』と、細い目を開らく。

『しツかりしろよ、お客さんがたに御苦勞かけてるぢやないか？』
『お前が世話して呉れないからよ。』
からはツきりした皮肉（だらう）と云へる狀態とは、僕等には見えなかつたのだ。惡く取れば、通りすがりの僕等に厄介をかけるのは、もう、當り前の樣に思つてるのではなからうか？
『そんなこといふけんど、うちでも、お前を入れたら、わしが肩身が狹くなるぢやないか？』
『ああ、竹さん、竹さん』と、婆さんはまた倒れかかる。
『今云ひ合ひをする時ぢやないで』と、そばに見てゐた八百屋のお上さんが出て來て、『早くつれて行つてやるがいい』と云つたが、たびたびあることと見え、『またか』と云はぬばかりに平氣でゐる。
『どうもお客さん』と、お君と呼ばれたをんなが、たすきを半ばはづし、『どうもすみません』と、僕等に手を借しながら、
『つい、そこで御座りますんで――』
『竹さん、竹さん』と頻りに叫ぶ婆さんを、――僕等は、何だか馬鹿らしくなつて、張合がなくなつたが、行きがかり上――お君と三人して運んで行つたのは、逢初川の谷あひにかかつてゐる逢初橋の渡りぎはを少しおりたところの、小さい穢い地藏堂である。大きな椎の木がその上を蔽ふてゐて、堂の中には、古疊が敷いてあり、奧の一段高くなつたところに、向つて正面の本尊の木像地藏、右手は

阿彌陀佛、左は分けの分らない自然石の何かの佛像に似てゐると思はれたのが並んで、いづれも塵芥だらけだ。その上には、『祝戰捷』と書いた大提燈やら、畫をかいた岐阜提燈やら、赤いほうづき提燈やらがつツてある。反對の片隅には、色のさめた薄ッぺらな布團を二三枚疊んでつみかさねてある。入り口には障子がしまるやうになつてゐるが。おまゐりに來るものもあると見えて、明けッ放しのまゝらしい。之に隣つて、谷に臨んだ方に二疊の間があつて、圍爐裏も切つてあつて、そこでいつも婆さんは煮燒きをするらしい。明いた窓には、南天の赤い芽などが首をつき出してゐて、然し直ぐ絶壁で、近い對岸の木々の枝が風にゆらいでゐるのが見える。右手には、輕便鐵道の通つてゐる逢初橋も見える。

『晝間はおまゐりの人が御座りますんで、狹いけんど、こちらへ寢かしましよう』とお君は布團を持つて來て、二疊の間へ敷き、ねんねこ半纏を脫がして、婆さんを寢かし、自分もそのそばへ座わつて、手をつきながら、『どうも御厄介になりました。まア一服めして下され。』

僕等は圍爐裏のそばの上り口へ腰をかけ、卷煙草に火をつける。

『ここの者か、ね、婆さんは?』

『はあ、この村の者だけんど、身寄りがなくなつたんで――』

『誰れも世話の仕手がないのか、ね?』

『へい、身寄りと申しても、亭主はなし、子供はなし、外に誰れも御座りませぬ。わしがたッた獨りの姪に當りますんで、死んだ跡の世話はしてやる筈で御座ります。わしも、うちの人がやかましいんで、今から引き取つてやるわけにもまゐりませず、まア喰べて行ける間は、かうしてをつてもらう話になつてをります。』

『あんな神社で駄菓子ぐらゐを賣つて、よく喰へて行ける、ね。』

『なアに、年よりのことだけでもあり、たまには、また、湯治に來たお客さんがたが可愛さうだとおッしやつて、お金を下さりますんで――』

『はは、一種の乞食婆に過ぎないんだな』と、僕は心で思つて、ますます厭氣がさして來たが、今の身なりを見ると、可なり小ざッぱりしてもゐるし、脫がされた半纏などはその縞柄が年に似合はない程大きいのも變だ。

『それに、わしがこゝの留守番に世話したのはお婆さんの仕合せで、お地藏さんにあがつた物は皆いただいてええことになつてをりまして、別に不自由は――まア不自由と申しますと、足、腰のきかないこと――それも、毎日の水汲みには、わしの孫が下まで行つてやります。』

『八十九ときいたが、よくそれであの高い石段がのぼれる、ね。』

『もう、ええ加減にやめさせにやなりませぬ。何と申しても、この通り、あたまも半分しびれて、人

間の感じが御座りませぬ』と、お君が婆さんの禿げたあたまのさきを賓頭盧の木像を撫でる樣に擦つて見せる時、僕は自分の腦天に冷たい死の手をおぼえて、その感じが急に足の爪さきまで走つた樣な氣がしたが、お君は平氣で言葉をつづけ、
『半分はあの世の人で、早く、もう、有難いお迎へを待つより外は御座りませぬ。』
そとにはさツと風が吹き渡つて、お堂わきの椎の葉がさら〳〵と鳴つてゐる、谷川の水のちよろ〳〵流れる響きが一きはは〻ツきり聽えて來る。すると、婆さんが首を動かしたと思ふと、
『ああ、お迎へだ、お迎へだ。あれ、竹さんお迎へに來る』と、むツくり、身を起して、『あの三味線と太皷の音は竹さんぢやないか！』と、嬉しさうにお君を返り見る。
『二度と竹さんがこの世に來る筈はない——お前はいつもそんな氣味の惡いことを云ふ。』
『けんど、あれは竹さんの三味線に太皷の音』と云つて、起きあがらうとする。
『あれは谷川の水音だよ。』
『さうか知らん』と、不承無承に枕につく。
『竹さんとは誰れのことだらう』と、僕はお君に聽く。
『昔の亭主で御座ります。それが惡い男で、神樂まはしの風情で、ふたりの若い時、この人をそ〻のかし、沼津へつれ出して、三味や太皷や笛などで、さんざツぱら面白いことをしたと申します。その

後、沼津でお女郎屋を開らき、澤山のお客をだまして、不義の榮華とやらをしてをりましたんで、その天罰が報くつて、また二人で落ちぶれたあげく、今から四十年程前にその亭主が虎列剌でなくなつたと申します。この婆さんも、もう、あきらめてはをりますけんど、矢ツ張り昔が思ひ出されるものと見えます。その亭主が竹さんといふ人で――』

『えゝ、竹さんが』と、婆さんに聽えたのだらう、またむツくり起きあがつたが、

『あゝ！あゝ！』と、急に大きな聲を出して縮みあがり、布團にかぢり付いたので、僕等は何事が起つたのかとびツくりする。老友の如きは、その前から不思議がつてゐた樣子であつたが、この時臺所の出口まで飛び出した。

『どうしたのよ』と、お君は案外平氣で脊中をなでてやる。

婆さんはなほ力一杯布團にかぢり付きながら、

『お社の石段が崩れて來る。』その顎をがくつかせて、低い聲は顫えてゐる。

僕は、この一言を聽いてぞツとすると同時に天地の滅亡、世の終りの有り樣が僕の心を横切つたのである。石段どころか人の骨の崩れる時も、大石の落ちる樣なひゞきがしよう。たゞ、生きてゐるものには聞えないだけだ。して、婆さんは半ば之を聽いてゐるのだといふ考へが浮ぶ。つまり、この婆さんは、ほとんど過去の人であつて、その殘つてゐる一部の精神が、竹さんといふ亭主と暮した時の

愉快を夢みて、それを命としてゐるのだといふ事實が分つたのである。大綿の半纒を持つてゐるのも全く意味のないことではなからう。

再び寢床に落ちついた頃、

『お婆、何をしてゐやがるんだい？　お祖父がおこつてるぞ』といふ聲がする。

お君はあわてゝ立ちあがり、外へ來た子を見て、

『手前までが邪慳なことを云やアがる、承知しないぞ』と怒りながら、僕等の方に向き、『あれですんで、碌々このお婆さんの世話も出來ませぬ。もう、こゝは、大丈夫で御座ります。たびくかういふことが御座りますけんど、一寢入りすれば、いつもけろりとして、あつたことは忘れてしまひますんで、もう、御心配には及びませぬ。どうも、御世話さまで御座りました』と、再び座つて手をついたのが、そゝくさと出て行く。

僕等は何だか心配であつたが、旅のものだけで殘つてもゐられないので、携へてゐた菓子づゝみを婆さんの枕もとに置いて、そこを出て、再び濱へ下だつて或温泉宿で一休みする。

湯に這入つたり、湯瀧に打たれたりして、さきの勞れや心配などが拔けると、さツきの白酒の醉ひがまはつて來て、欄干から直接にながめる海の景色は、熱海とは違つて、一しほ幽邃なところがある。眞鶴の鼻から熱海の錦浦の鼻まで開らけて、初島や大島は箱庭中の物である。初島のうしろに今汽船

や帆船が見えたと思ふと、暫く話をしてゐるうちに、大島の前を右の方へと出て行く。それを見てゐると、何だか別世界に來ていゝ氣持ちになつてる樣だ。老友は頻りにその船の行くへに注意してゐる樣であつたが、僕はまた、こんな幽邃な境をあの婆さんが觀じ得たなら、もう、あの世の景色であらうなどといふことを考へる。僕には、水ぎはの丸石がごろ〱云つてる音の間にも、今婆さんがお迎への聲と聽いた、谷川のひゞきが幽かに聽える樣な氣がする。

ゆふ方そこを立つての歸り途で、今一度地藏堂を音づれて見ると、お君の云つた通り、婆さんはもう褥の上に起きてゐて、近處の女であらう、三十ばかりのがその枕もとにひろがつてゐる穢い物を拭き取つてゐる。

『どうかしたのか？』と、臺所口から這入つて、僕が聽くと、その女が、

『吐いたので御座ります』と答へる。

ぷんと厭な臭ひがして、そばに開いてゐる竹の皮には——それにも反吐がかゝつてゐるらしいが——何も殘つてゐない。思ふに、婆さんは直きに目が覺めて、僕等が置いて行つた餅菓子をみんな喰つてしまつたのが當つたものらしい。氣の毒なことをしたとは思つたが、もう、さツきの者等だと名のるのも面倒だから、僕等は外に立つて見てゐると、

『まア、むさくるしいところで御座りますけんど、一服して下され』と、婆さんは何事も起らなかつ

たかの樣子で、いゝお客さんが來たと云はぬばかり。
『どこか惡いのかい？』老友が聽くと、
『へい、寒いのに、少し喰べ過ぎまして』と、竹の皮に目を落す。
老友は僕を返り見て、くすと笑ふ。さて、向き直つて、
『婆さんの樣な年になつては、何が樂みだ、ね、もう、色氣もなからうから？』
『かうなつては、まア、喰ひ氣とお迎へを待つことばかりで――』
『何か面白い夢は見ないかね？』
『もう、恨みも望みもないので、今思つたことを直ぐ忘れてしまひます。夢は見る樣だけんど、目が覺めると、覺めた時のことばかりになつてしまひます。』
『けふは何か恐ろしい夢を見なかつたか、ね？』
『見たか知らんけんど、おぼえてをりませぬ。』
老友の質問が進むにつれて、僕は更らに新らしい事實を發見したのだ。婆さんは、夢中になつて、最前の樣に全く過去の人となつてゐる時は、まだしも思ひ出が長いやうだが、覺めると、その思ひ出も殆どゼロに縮まつてしまつて、恨みもなく、望みもない代りに、天地も見えなければ、不思議な谷川の音も聽えず、死といふ物を無意義に待つてゐるのを除いては、たゞ喰ひ氣ばかりが現在の自分で

あるらしい。この婆さんには、過去と現在とが別々に離れてゐる、否、その過去が、あの石の階段の樣に婆さんには、攀ぢ難い五分の四までおツかぶさつて來て、殘る一分なる現在の領地をも更らに喰ひ去つて行くのを、ただ喰ひ氣ばかりで引きとめてゐるに過ぎないのだ。その物欲しさうな目つきが婆さんの現在の生命であるらしい。

頻りに反吐を拭いてゐた女が、それを濟ましてから、茶碗に一杯水を盛り、それを枕もとに置いて、立ち去つた跡で、

『その茶碗の水はどうするのだい』と僕が聽くと、

『死に水で御座ります。死んだ跡の世話はして吳れるものが御座りますけんど、人並みはづれた稼業をしたんが報つて、子供がないもんで、かうして獨りでをります。いつお迎へが來るとも分りませんので、每晩寢る時には、水を枕もとに置いて休みます。』

僕は、何だか死人くさいあの世の入り口に立つてゐる樣な氣になつて、急にあたりが暗くなつたかの樣に思ふとたん、がうツといふ地響きにおぞ氣を催したが、それは六時の鐵道客車が近づくのである。

『まア、達者でゐておくれ。』僕等は二人別々に二十錢銀貨を與へて別れると、婆さんは地藏堂の玄關まで立つて來て、

『有難う御座ります』と、坐わつてあたまを下げてゐたが、僕等がさツき助けてやつたことは知らず

にすんでしまつたのだ。

客車が逢初橋を渡る時、地藏堂の窓は見えたが、その後婆さんはどうしてゐるか知らない。湯治客の面白半分に尋ねて行く度毎に『人並みはづれた家業の報い』を、きツと、無意義に繰り返してはゐるだらうが、あの死に水を飲まうとするのが、最後の現在のまさに消える時で、その時は、慥かに、百雷の落ちる様な響を以つて、あの六百八十五段の石段があの世の海に崩れるのを實際に感ずるのであらう。

──(四十一年三月)──

# 日の出前

吉本定藏はこれまでの方針を失つた。失つたのではない、棄てたのだ。折角、この世の新鮮な空氣——それを感ずるに至つたのは近頃のことだが——を吸ひ出してから、もう、二十五年を經過した。その長い間といふもの、考へて見れば、殆ど無駄であつた、空想であつた、夢であつた。覺めて見れば、自分はまだ赤ん坊から上へ何程も發達してゐなかつたのだ。如何にも勉强はしたが、書物は讀んだが、然しそれは自分からしたのではなく、外國の宣教師、日本の先輩傳道師等に教へられて、その順序立てゝ呉れるまゝの書物を盲讀したのだ。實は渠等がさきに教へられた通りの順序によつて、自分も亦宗教界といふ別世界の傳習と形式とをおぼえたのに過ぎなかつたのだ。あれがいゝ、これが白面いと云つたり、云はれたりして讀了したものは、通俗な『天路歷程』、難解の『失樂園』を初めとし、神學書は勿論、哲學書類までも隨分あさつてゐるが、眞理らしい空論を口外することが出來る樣になつたばかりであつて、何の役にも立たないのみか、そんな習慣になづんでゐた爲め、新たに實世間の仲間入りをしようとしても、世間は自分なるものが二十五年前に生れたといふことを忘れ、他界人でゝ

もあるかの様に、何だか仲間あつかひをして呉れない。

自分は、眠つてゐる者または死んだ者として、矢ッ張り宗教の雰圍氣内にとゞまり、教會の所謂教師並に先輩諸氏に倣ひ、あはれげな聲を出して、『天にまします』を云ひ、アーメンを添へて行くなら、神學生に毛の生えた位――吉本定藏は、純然たる傳道師になつてしまうのは、不見識と思つて、嫌なのであつた――の程度に於て、いつまでも重寶がられ、――迫めては、持ち前の癖にまかして、讀書と研究と(それも、今から見ると、すべて方針が間違つてゐた)に耽けらして呉れるなら、まだしもだが、――どこそこの傳道を助けに行つて呉れろとか、何々新聞に出た攻擊文を英譯して呉れろとか、自分には馴れもしない、また出來もしないことをうるさく賴んで來る。それも、自分を忘れて、はいはいと聽いてゐれば、別にかうといふ定つた仕事を持たないでも、あの聖書學院では、樂に飼つて置いて呉れるのだ。然し定藏に取つては、そんな馬鹿げたことは、如何に生活問題ばかりの爲めとしても、もう、出來ないのだ。

もう、いゝ加減の年輩になつてゐるのに――實は自分自身も、つい、こないだまで氣がつかなかつたのだが――まだ『吉本君は勉强家だ、』『正直だ、』『聖人だ』と、默つてゐれば、どこまで人を馬鹿にするつもりだ? 勉强の方針が違つてゐた、正直の考へが違つてゐた、聖人の意味が違つてゐた。神といふ樣な、あるかないか知れもしない物に、祈りが出來なくなつたとて、何の痛痒をも感じないが、

目前に清淨無垢、神聖犯すべからざる物と信じてゐる一處女の胸中にも、事實は賴み難い不信の影を投じてあるのを、自分は發見したのだ。

山下琴子、これは定藏と同じ敎會の會員で、聖書學院の姉妹學校たる某女學院の生徒だが、敎科外に英詩を研究するといふ意氣込みで、定藏のところへ相談がてら譯を附けて貰ひに來る。定藏には分らないで行きなやむ行が度々出ると、『では、かういふ意味でしやう』といふ樣な調子で、無理にも解釋をつけてしまふ程の才女だ。先生の尊號を用ゐないで、『吉本さん、吉本さん』と親しげに呼ぶのを、定藏は却つて嬉しく思ひ、なつかしく思ひ、つひに戀しく思ふ樣になつた。色白く、でツぷり肥えたからだ付きで、二重目緣の愛嬌ある眼に見つめられるのを樂しみに、自分は每日琴子の來さうな時間を、外出しないで、待つてゐるのが習慣であつた。

暫くはテニソンの『エノクアーデン』をやつてゐた。獨りの女に二人の男、互ひにをさな馴染みが高じて戀となるが、フイリプの方が之を明しかねてゐる間に、エノクの方が成功してしまう。フイリプは幾星霜を獨身の生涯で通してゐるうちに、女の亭主が難船で不歸の客となつたと思つたから、昔の情をうち明けて、自分がその一家の主人となり、むつまじく暮すことになる。その有樣を、不歸の客と思はれた者、乃ち、エノクが歸つて來て、ひそかにかい間見たが、事情を思ひやつて何にも知らさないで立ち去つてしまひ、死後漸くそれが女に分る。琴子は讀み終つて——その時、はじめて全體の

意が分つたのであらう――急に考へ込んで、うツとりしてゐるので、
『婦人はすべてこんなに頼むに足りないものでしようか？』へ、定藏は待ちかまへてゐた時が來たかの樣に切り込む。氣が弱いので、これ程のことにも不斷は遠慮勝ちであつたのだ。
『そりやア、吉本さんが間違つてるわ、知らなかつたんですものを。』
琴子は女を辯護するつもりでさう云つたが、兎に角、二重結婚の狀態だから、多少きまりが惡かつたのだらう、赤い顏になつて首をかしげると同時に、左の臂を以つてからだを机にもたしかける。優しい姿、愛らしい顏、之に向つて坐つてゐる定藏の胸は躍つて、前後左右の考へがなくなつたのも無理はない。
『若し私がはじめのフリイプまたは後のエノクで、あなたがその婦人ならどうでしよう？』定藏の聲は顫えながら、出した手は輕く琴子のやはらかい手の上に觸れる。男に女、互ひにその相傳はるあつたか味をおぼえては、まんざら惡いものではなかつたらう。女もにつこり笑つて、それを避けようともしない。然し、また、その頰には、特別な赤みも耻かしみも見えない。今から思へば、『意氣地のない男が』と、腹の中であざけつてゐたのだらう。琴子は平氣なもので、
『どうでしようツて、あなた、そんなことアありようがないわ。いくら思つたつて、痩ッこけたあなたと太ツちよのわたしとは、第一、夫婦として釣り合はないぢやア御座いませんか？』

『それでもいゝでしよう』と、定藏の手に力が這入ると、琴子は握られた手を急に引ツ込める。

『あなたは餘り世間に疎いから困るわ。少しやア世入の云つてることも聽いて御覽なさいよ。あなたとわたしとの樣なものが一緒になつたつて、第一、生理上から愛情を保ち合ふことが出來ないと云ふぢやア御座いませんか？　それに、まア、あなたはそんなことは考へないで一生御勉強をなさるか、さうでなければ、早く生活の道をお立てなさらなければ――さうすりやア、いつかいゝ人をわたしが周旋してあげますわ。』

もう、それ以上にその時のことを語るのは、定藏に取つては、自分の冷汗をしぼられる樣な氣になるのだ。最も親しく、また最も戀しく思つた女でさへ、自分を馬鹿にしてゐたのだ。教會の形式が――たゞさへ、臭いにほひでも、馴れゝば感じなくなるものだのに――餘りに歷史的で、餘りに莊嚴であるから、それに目が眩んで、少しもその架空であり、虛僞であることに氣が附かなかつたのは、實世間に觸れなかつたせいなのだ。人の靈魂とも生命とも信じてゐた戀愛の神聖といふことが、たゞ空論に過ぎないことを、わづか十代の少女――實は、琴子は十九歲――でさへ承知してゐたのだ。傳習に捕はれてゐた時には生理上の問題、生活上の問題を加へて戀愛を取り扱ふのは、如何にも不信の影らしく見えたが、然しその不信は影の濃い事實であつた。この事實を知つて、今更ら之を知らない風で、自分ばかりが高尙な空想をつゞけて行くことは、意地としても、男の決して出來ないことだ。

琴子を神聖視することは全く破れてしまつた。かの女は普通の女だ、否、女の賢い俗物だ。男子の心を飜弄する爲めには、定藏に限らず、誰れにでも手を握らすのだ。して、その握らせた手から傳はる動氣に若しおのれの肉性を滿足さすだけの活力と生活費とが得られさうもないと感じられるなら、その場で直ちに體よくはね付てしまうのだ。世人は『ほれる』といふが、その時親もない筈、身もない筈、まして行く先のことなど心に浮ばう筈がないと思つたのは、定藏のうぶな考へであつた。教育を受ける程思慮が出て來るので、女も冷靜にまた現實的になるのを知らなかつたのだ。定藏には全く世間的な教育がなかつた。女に云はれて初めて氣がついたとは情けない。

『瘦ツこけたあなた……早く生活の道をお立てなさい……人を馬鹿な！ 然し、それが本統だ。この年をして、こんなに瘦せたからだで、孤兒の如く、いつまでも教會のお慈悲にあづかつてゐながら、たとへ神學や哲學を硏究したところが空學問だ。實際の戀愛を語る資格はない。結婚を考へる價打ちはない。われは小學生にも劣つてる人間だ。』かう定藏は氣が付いたので、これまで空しく經過した生涯が殘念で殘念でたまらず、さりとて直ぐどうしたらいゝかの考へも出ず、琴子が歸つてから、机の上に兩臂をつき、兩手に額を沒して、たゞぼんやりとその日を過ごしたが、夜に入つて、下宿屋の下女が怪しんだ程いつもになく早くから床に這入り、布團をかぶつて『えゝ、まゝよ、いつそかうして息が絶えて呉れゝば』と念じても、いのちの方から『さうあなたの自由にはならないよ』とあざ笑ふ

樣だ。

誰れも見てゐないのを幸ひ、頤をつき出したり、口を拗つたり、齒を喰ひしばつたり、われとわが愚劣を悔み、われとわが耻辱をすかして見たが、血が腦天に逆流して來て、瘦せこけた神經の冴え方と云つたら、自分の過去が恰も手に取る樣に浮ぶ。すべてそれが赤面の色素に外ならないのだ。ランプを消しても駄目。寢返りをしても駄目。過し方ばかりが重量を以つて、これからさきの考へは出かかつてもはね飛ばされてしまう。いつの間にか疲勞して眠つてしまつたが、翌朝早く目ざめての決心に、渴しても盜泉の水を飲まず、餓ゑても虛僞的團隊の補助は受けない——先づ第一に敎會との關係を斷念し、自分よりもずツと以前に、先見あつて牧師の職を放棄した先輩の、今は實業界でもがいてゐる某氏を音づれ、自活の道——と云つても、これまで人間を空想的存在物でゞもあるかの樣に敎へた自分の學問などを利用する氣はない——の周旋を賴んだ。

『かういふ方面では、君の樣な聖人は、有難過ぎて、全く必要がないのだが、若し小僧同樣の辛棒をするつもりなら』と、先輩が紹介して呉れたのは、諸官省、諸會社を初め、小學校の敎科書出版仲間に有名な、某といふ神田の大きな製本屋の主人だ。或書生の人物を見込んで學問をさせ、自分の娘を呉れたのが、今は少壯政治家中の幅きゝになつてる程だから、まんざら分らない考爺でもあるまいとは、先輩の注意して呉れた言葉である。普通人から見ては敎育のある、定藏の如き人を使ふ場所はな

いが、折角の御紹介だからといふ前置きで、さし當り、錦町の分工場——大工場は別にあるが——の留守番がないから、どうせ滿足な仕事ではなからうが、假りにそれをやつて貰ひたいといふことになる。晝間は職工の監督をし、夜はそこに寢とまりをするのだ。

よければ、けふからでもといふ催促に、何だか氣は進まないながらも、直ぐ行つて番頭らしい人と入れ代る。男女十五名ばかりの若い職工どもが、がや／＼しやべりながら、小學校の教科書のページを折り揃へてゐた。定藏は、入り口から直ぐ横の六疊——こゝだけに疊が敷いてある——に座わり、獨りで何をしていゝやら分らないので、あたりに積み重ねてある製本濟みの帳面や書物をひッくり返して見たり、職工の名簿を繰りひろげて見たりして、氣を落ちつけやうと思つても、昨夜からの神經疲勞もあるので、自分の胸が承知しない、その素振りを若い職工どもに感づかれまいと、火鉢に向つて、懷に持つて來た英書に讀みふけつてゐると、ふと、夢中の祕告の如く遠くから聽えて來る聲がある。

『あいつア何ものだ？』

『骨皮ばかりの唐變木よ。』

『可愛さうに、あれでも人間だよ。』

『聽えますよ。』これは女のらしい。

『あんな監督なら樂なものだ。』

『落丁がいくらあつてもかまはないと、さ。』

職工どもが自分を馬鹿にしてゐるのであつた。落丁――ああ、これだ！　このあるなしは、乃ち、今、自分の監督如何に歸するのである。主人――その下に使はれるとなれば、さう呼ばなければなるまい――の考へでは、これ位のことはおのづから分つてる筈だから特に注意を與へなかつたのだらうが、定藏には、この單純な責任さへ、職工の方から當てこすられたので、初めてあたまに這入つて來たのだ。が、急にその態度を改める樣に見えても拙いと思つたから、聽えなかつた風つきで、先づ卷煙草を吹かし出し、その煙の中から最初の監督づらを工場の方に向ける。

職工等がそれで少しおとなしくなつたのに一安心して、今度は自分の方から座を立つて、渠等のかたはらに行き、

『どうだい、少し手傳つてやらうか、ね』と、碎けたつもりで話しかけると、

『へい、どうか賴みます。』

『これも賴みます。』

『こちらのも賴みます。』

『私のも賴みます。』

『まア、女の方から助けてやんなさい。』

つゞけ打ちの冷かしと聽えて、どうも手の出し樣がない。煙草をつゞけながら、渠等の間を見まはる。

『こんなのはどうしましよう?』と、一人の女工がさし出したのを見ると、ページが摺り切れて活字の跡が殆ど消えてゐるのだ。

『跡まはしにして、足りなければ入れることにする、さ。』

『戸田さんは』と、そばのが、さきの番頭の名を云つてゐるらしい、『そんなのを入れたらいけないと云ひました。』

『然し、足りない場合には仕かたがなからうぢアないか?』

『一冊でもそんなのがあると、つツ返されるんです。』

『成る程、それもさうだ。』

定藏は、この對話で、また一つ事實を覺えたが、そのまゝそこにしやがんで、手早くページの揃へられるのを見てゐると、うしろの方でまた話しが初まる。

『お貞ちやん。』

『何よ?』

『ゆうべは、どうお暮しでした？』
『およしよ、また何か云ふつもりだらう？』
『なアに自分で氣をまはすのだ――お湯に這入つたかよ？』
『そりやア這入つたとも、さ。朝から晩までこんな穢ない工場にゐてさ、誰れが這入らずにゐられるものか、ね？』
『ぢやア綺麗になつてるだらう？』
『また！好かない野郎だ。』
『お貞ちやん、お貞ちやん。』これはまた別な聲だ、『お貞ちやんは赤いのが好きか、白いのが好きか？』
『勝手にしやアがれ。』
『いや、どうも』また別な聲だ、『白いのは手足に限る。』
『耶蘇坊主などア、地獄は暗いところだと教へるが、人間の墮落してえくのア、實以つて、白いところからだ。』
『ヒヤ〳〵』と、諸方から拍手の聲が起る。無學な奴等は、不斷、こんなことばかり話してゐるのかと、定藏は、輕蔑の念が生じたと云はんよりも、寧ろ、こんな奴等と伍するに至つた自分の變化を思つて、ひそかに自分が氣恥かしくなる。してすご〳〵ともとの座に戻る。

やがて辨當屋が晝辨當を五六個持つて來る。そのうちの一つが『新らしい御注文』だと聽けば、主人の方から氣を利かして、自分の爲めにわざ〳〵注文して置いて吳れたのであらうが、職工のと同一なのには驚いた。主人は職工等と自分との間にどれだけの區別を立てゝ吳れるのか疑はしい。こんな下劣極まることばかりを聯想してゐる動物等と、同じ食ひ物を喰はなければならないのかと思へは、何だか自分の沽券が下つた樣な氣がする。然し、これまでは、敎會の形式張つた監視——歸するところ監視だ、自分の行動が若しそれを破れば、精神的にはさうでなくとも、直ぐ退會を命じられる——のもとに、外國宣敎師等がわが國の缺點を誇大にして之が救濟費として本國から詐取する傳道金の一部——ほんの、たゞ一小部分——を、無邪氣にも（とは、その實、卑劣にも）頂戴して、兎角、遠慮勝ちに書物と生活費とに使つてゐたのとは違ひ、この一箱には、これから自分一個の勞力によつて憚かるところなく貰へる報酬の初穗が這入つてるのだ。職工等が何の憚るところもなく、勝手氣儘なことが云へるのも、自分が自分で働いて、自分の處分をしてゐるからである。之に比べると、これまでの定藏は乞食であつた。學問乞食であつた。

ドンが鳴ると同時に、命ぜられた通り、職工等に半時間の休憩を與へ、自分も辨當を開らく。その飯の一粒一粒が身に實世間の味を味はせて吳れる樣だ。今暫く何にも云はずこゝで辛抱してゐるうちには、新らしい方針もつくだらうといふ氣になり、午後は熱心な態度を以つて職工等に對する。渠等

も亦午前見せた如き無禮の跡を絶ち、その日一日の豫定だけの裁斷と製本とを終はり、ゆふ方になつて、各々その勞働時間を何時間、何十分と定藏の與へられた帳面に控へて貰ひ、丁寧に挨拶して家路に就いたが、渠等のうちで定藏の心に最も強い而も最もいやな印象を殘したものは、お貞ちやんと云はれた娘——可なり美人だが、帳面をのぞき込みながら、鳥渡自分に投げて行つた色目である。この顏に免じて、少しでも時間を多く働いたことにして呉れろといふのらしい。

お晝は賑やかな中で濟ましたから實際の味は分らなかつたが、晩の辨當はこの工場に獨りぼツちでやつたので、不斷はそんな事に餘り頓着しない定藏も、特別にまづいと感じられて、たゞ押し込む樣に喉へ通したが、その小さな箱を平らげてしまうだけの勇氣は出なかつたのだ。職工の監督が濟めば空工場の留守番——この兩者は名義に於て高下の相違があらうが、實際は同じ五六錢の辨當の味だと思ふ。周圍の戸締りをしてから、六疊の電燈——これを獨占するのも初めてだ——のもとに、再び例の英書を出して丁寧に讀み返す。

そのうち主人の宅から小僧が來て、一時入れ代るから本宅の湯に這入つて來いといふので、留守を渠に托して行つて見ると、細君らしい婦人や娘らしいものが種々世話をして呉れるのはいゝが、どうも氣がつまる樣で、下女が湯の加減を聽きに來て、ちらと自分の顏を見る樣子も、蔭では自分をあざけるのだらうと思はれ、職工等のけさ自分に對した無頓着が追想される。湯をあがつてから、顏を見

られるのも嫌なので、直ぐその宅を出ようとすると、
『まア、お茶でも飲んで行つて下さい』と、細君――としか見る外はない――につかまり、勝手へ招き入れられ、長火鉢のそばで乗らない話を聽かされる。主人はゐない樣だから、けふは細君が自分に對することを心得てゐたのだらう。
『今の仕事なぞアつまらんこツてすから、うちでもあなたなぞにやア向くまいと云つてました。』
『はア』と、たゞあたまを一つ下げる。つまらない仕事といふことは、自分ばかりの考へではない、之を與へたものもさう見爲てゐるのだ。
『その代りに、ねえ、何も格別骨の折れることぢやなし、少し辛抱するうちにやア何かいゝ方に向きましようから……』
『はア』と、また一つあたまを下げる。
『これまでどこにお住ひでした?』
『小石川に。』
『それでは、寂しいところから賑やかなところへ出られたんですから、馴れないうちは、あちらが隨分騒々しくつて堪らないでしようよ。』
『はア……』

『まア、一服吸ひなされ。』

『…………』無言であたまを下げる。

『うちにも男の子や女の子がをりますので、また暇には教へて貰ひます。』これは愛嬌に云つたのにしろ、また本意であつたにしろ、定藏に取つては、最も不愉快な言葉である。宗教家や道學者流の如く學問と見識とを鼻にかける積りなら、こんなところへは來ないし、また、こんなところへ來て、學問があると思はれるのは、取りも直さず意氣地なしとあはれまれるも同前だ。

『私などア』と、思ひ切つて、『とても駄目です、人を教へるどころではない、自分を教へて行かなければならないのですから、それに、今度考へるところがあつて、今日までやつて來た勉強を全く拋棄してしまう覺悟です。』

工場へ歸つて褥に就いてから、獨身者としても、これまでにない寂しみを覺えるのだ。きのふまでは、下宿屋にゐても教會といふ家根があつた、人の爲めに同情といふものを與へるから、自分も亦人から同情や恩惠を受けるのを當り前だと思つた。人の爲めには自分を忘れ、學問の爲めには世間に無關係でゐられた。つまり、虛僞と空理と空想との往來が頻繁なのによつて、自分の內部を返り見る暇がなかつたのだが、けふからは、周圍が敵にあらざれば虛無——自分は自分で自分の中の友を發見するより外はない境遇だ。若し夢から覺めて、その覺めた本人がなかつたらどうであらう？　人が自覺

しても、その內容を持つてゐなかつたらどうだ？自分はたゞその樣な空虛の塊まりに過ぎないのではなからうかといふのが、定藏の寂しみの極まつて來るところだ。時々あつた通り、熱淚を以つて枕をうるほし、それを感じて多少の慰めまたは滿足を得ようとしても、今夜に限つて、淚が出て來ない。この寂しみは、淚ぶくろの樣な身內の一小部分に觸れてゐるのではなく、身體の全部に沁み渡つてゐるらしい。かう思ふと、あたまの腦天から足の爪先きに至る神經が、一つづきに冴えかへつて、どんなに幽かな魂でも認め、どんなに小い物音でも聽取ることが出來る樣だ。

きのふからの疲れに加へ、けふはまた馴れないことの爲め心を勞したのであるから、そればかりでもがツかりするのは當前だのに、更らに又戀の失望やら、前途の無方針やらで、不斷表面に出て働いてゐると思つた筋肉と精神との力はゆるんで、いやアに沈んだ自暴自棄の調子になり、手も入らない足も入らない。實は、もう、死ぬまで眠りたいのだが、それでも冴えた神經が許して呉れない。邪魔になる電燈の光を消しても、店さきを通る電車の響きが――澄んで聽えるのは、夜が更けたのであらう――近づいては、消え去り、消え去つてはまた近づく。自分の目も耳もその度毎に遠くなつたり、近くなつたりする。自分のからだがそれにつれて延びたり、縮んだりする。右に寢返へりすると、琴子のことが浮ぶ。左に返へると、お貞ちやんのことが浮ぶ。仰向けになると、主人の家庭の有樣が浮ぶ。こゝは工場だといふ考へに立ち戻ると、自分の身の置き場ではなからうともがき出す。自分の身

體を離れて働くかの樣な神經も、やがては疲れて來る。
あたまを上の方へ引ツ張られると感じたのは、いつもの通り、睡魔が這入つて來たのだらう。やがて自分は電車の響きとなつて、電車内に腰かけると、跡から貞ちやんが這入つて來て、赤い切れと白い切れとを見せびらかして、自分の方に投げる。それが妙に引力があつて、段々大きな渦卷きを起す。自分は之に抵抗する力もなく、腰かけたまゝ、ずうツと引き込まれて行くのが無上の愉快を增進する樣であつたが、極度に達したとおぼえたのは、地獄の泥濘に落ちたのである。がツかり、關節がはづれてしまつた樣な身體の各部を、骨拾ひの樣に、段々寄せ集めてわれといふ物が再び組みあがると、自分は不愉快で、不愉快で堪らない。泥濘の水に濡れたと思はれる寢卷きの裾をはしよりながら、寢床を起き出で、裏の井戸端へ行つて、からだを洗ふ。
再び、ほとぼりの殘つてゐる布團に這入つたが、時計のちくたく、ちくたくが心臟に傳つて、その動悸を烈しくする樣だ。そのうち、何だか重い物が自分の上におツかぶさつて來るので、あツと聲を出さうとしても出ない。氣が付くと、自分の兩手が自分の胸に乘つてゐる。胸苦しくつて堪らない。部屋中の空氣が闇に窒素に變つてゐるのではないかと思はれる程だ。今聲を出しても、聽きつけて來るものはなからう。今息が詰るとして、誰れも手當てをして吳れるものはない。自分の過去は死人の夢も同樣であつたとしても、自分はこれから眞の生命を呼吸して立たうとするのだと考へると、急に死

といふ物がおそろしくなつて來る。して、目を開いても闇、目をつぶつても闇、おそろしい死の影が自分を取り卷いてゐる樣だ。ぞツとして、からだを横に曲げ布團をあたまからかぶる。

自分は暗いところからするりツと拔けて、ぱツと明るいところへ出る。それが主人の家だ。自分は主人の細君と一緒に茶を飮んでゐる。

『うちにも男の子や女の子がをりますので、また暇には敎へて貰ひます』といふかと思へば、急に舞臺が變つて、その人と一緒に湯に這入つてゐる。その湯のあつたか味にからだが弛んで、抵抗力もなく引ツ張られて行つたと思つたら、また不愉快な目に會つた。今度は起きあがるせいも出ないので、そのまゝ眠りを呼んだが、誰れとも分らないものゝあつたかい肌に押へられて、また、さうかと早く氣がついたので、寢床を飛び出る。電燈の小瀨戸をひねつて、光を招くと、壁に映ずる自分の黑法師も、昨夜よりは影が薄く見える。電氣もその燭光を減じた樣にうす暗い。自分の顏は張れぼツたい樣な、しびれた樣な、して、自分の眼は落ち込んでゐる樣な氣がする。時計を見ると、もう、朝の四時近くだ。

枕もとに座わつて考へると、つく〴〵自分で自分が厭になつて來る。思ひも寄らない墮落と苦悶とを夢のうちに實現したのは、自分の體內にも惡むべき獸性が潛んでゐるからであらう。いや、自分はやがて肉慾の權化であつたかも知れない。自分のひそかに標榜した純潔はどこへ行つたのだ？自分が

世の俗物等と相許さなかつた特色はどうなつたのだ？自分はかの職工等と何の相違があらう？自分の價打ちは全くなくなつてしまつた。こんなに弱いわれであつたかと思ふと、實に情けない。身體だけを離してうッちやられるものなら、目の前でゝもうッちやつてしまひたい。

『えゝ、情けない。情けない。』涙をこぼさんばかりもがいて見ても、あつた事實は取り消しが出來ない。再び眠れば再びこの苦痛を演じるに定つてるだらうから、運動して精神を引き立てるより外に良策はない。着物を着更へて外へ出る。世間はまだ眠つてゐるらしく、店屋もすべて軒並み閉ざしてあるので、自分のぼんやりした顏を見られる恐れがない。犬の影が一つ電車道をこちらに横切つて、左の横町に消えて行つた外、動物と云つては自分ばかり。柳の並み木は芽ぐんだ枝々に露を帶びて、なか〳〵深霧の多い曉け方だ。右の方に見える筈の神田橋も隱れて、空と道路とが一つにうッとりしてゐる。

その方向に進むと、橋が見えて來る。その手前から右に轉じて、錦町河岸を進むと、堀を隔てた石垣の崩れかゝつたのが見えて來る。西洋料理三河屋の壁が見えて來る。誰れかの長い屛外に、大きな塵芥溜めがあつて、塵芥が一杯あふれてゐるのが見えて來る。一つ橋に高等商業學校が見えて來る。こんなに、早起きをしたのは、曾て齒痛の爲めに家を飛び出した時と今朝とだ。齒の痛みをまぎらさうとした時も隨分堪らなかつたが、けさの如く心の痛みに堪へられない程ではなかつた。齒痛はまぎ

れると眠ることも出來ようが、夢にまでも現はれて來る肉の苦を避けようとすれば、一生、自分は覺めてゐなければならない。と思ひつゞけながら、心で眠りを押しのける樣に、行く手の深霧を突いて歩みをつゞけると、やがて牛ケ淵へ來たり、それから九段坂をのぼりつめると、直ぐ左へ電車の隧道うへを渡り、近衞歩兵聯隊前の、淵に臨んだ土堤の上に立つ。

眼下を深霧が立ち籠めてゐて、何物も分らない。自分は今それをくぐり拔けて來たのだが、東京全市はその中にまだ眠つてゐるのだらう。眠つてゐれば夢を見ることもあらう、夢を見れば自分の實驗した樣な失敗もあらう。その夢と深霧との中には、全市二百萬人の獸性がみなぎつてゐるのかも知れない。而も、剛健不撓の太陽はその中からかまはず出て來るだらうではないか？自分のもがいてゐるのも、決して人間を超脫する空想に老いぼれて行くのではないのを忘れてゐた。太陽はいつも若々しく、雲霧にその身を洗つて、光を發する。形式の打破！活人生！之に對する方針を定めなければならないのであつた。然し、職工の監督に歸つて行くべきものであるか、行くべきものでないか、一向自分には分らない――分らないのではない、押へに押へてゐた疲れと眠けとが、深霧の樣に眼前に押し寄せて來て、如何とも判斷する氣力がないのだ。敵に追はれてこゝを安堵と落ち延びた者の如く、飽くまでがツかりして、前後もかまはず、木の根にしやがんで目を閉ぢる。

一時間餘りも眠つたかと思はれる頃、どこの寺からだらう空に鳴り渡る鐘の聲によつて目が覺める

と、自分の着物は裾どころではない、肩から袂にもかけて、霧樹の枝からぽたり〳〵落ちるしづくを以つてじめ〳〵してゐる、朝日の影はまだ見えないが、自分はこの時、この刹那に於てはじめて實世間の洗禮を受けた樣に思はれる。

然し、かうしてはゐられない。兎に角、一先づ錦町の工場に歸る必要がある。立ち上つて袖を拂ひ、土堤を下だつて坂の下の方へ來ると、右の方から電車――最初のだらう――がやつて來る。

『吉本さん、吉本さん。』

ふり返ると、車の窓から、琴子が學校行きの風で、本包みを抱へながら首を出し冴えざえした顏で、にツこり笑つてお辭儀をしてゐる。定藏も默禮して通してやつたが、跡からのこ〳〵歩きながら考へると、自分はかの女の活氣ある姿が羨ましくつて堪らなくなつた。

――(四十一年五月)――

# 戰話

十年振りの會飲に、友人と僕とは氣持ちよく醉つた。戰爭の時も出征して負傷したとは聽いてゐたが、會ふ機會を得なかつたので、やうやう僕の方から、今度旅行の途次に、訪ねて行つたのだ。話がはずんで、出征當時のことになつた。

『今の僕なら、君』と、少し多言になつて來た。友人は、酒のなみなみつげてる猪口を右の手に持つたが、またそのまゝおろしてしまつた。『今の僕なら、どうせ、役場の書記ぐらゐで滿足しとるのやもの、徵兵の徵の字を見ても、ぞツとする程の意氣地なしやけど、あの時のことを思たら、不思議に勇氣が出たもんや。それも大勢のお立て合ふ熱に浮されたと云ふたら云へんこともなからう。もう、死んだんが本統であつたんやも知れんけど、兎角、勇氣のないもんがこないな目に會うて』と、左の肩を振つて見せたが、腕がないので、袖がたゞぶらりと垂れてゐた。『歸つて來ても、廢兵とか、厄介物とか云はれるのやらう。もう、僕などはあかん』と、猪口を口へ持つて行つた。

『そんなことはない、さ』と、僕はなぐさめながら、『君は、もう、名譽の歷史を終へたのだから、こ

れから別な人間のつもりで、からだ相應な働きをすればいゝぢやアないか？』
『それでも、君、戰爭でやつた眞劍勝負を思たら、世の中でやつとることが不眞面目で、まどろしこうて、下らん樣に見えて、われながら働く氣にもなれん。きのふもゆふ方、君が來て呉れるいふハガキを見てから、それをほところに入れたまゝ、ぶら〳〵營所の近所まで散歩して見たんやけど、琵琶湖のふちを歩いとる方がどれほど愉快か知れん。あの狹い練兵場で、毎日、毎日、朝から晩まで、立てとか、すわれとか、百メートルとか、千メートルとか、云ふて、戰爭の眞似をしとるんか思ふと、をかしうもなるし、あほらしうもなるし、丸で小供のまゝごとや。えらさうにして聯隊の門を出て來る士官はんを見ると、『お前らは何をしてをるぞ』と云ふてやりたうなる。されば云ふて、自分も兵隊はんの拔けがら——世間に借金の申し譯でないことさへ保證がつくなら、今、直ぐにでも、首くゝつて死んでしまひたい。』
『君は、元から、厭世家であつたが、なかなか直らないと見える。然し、君、戰爭は厭世の極致だよ。世の中が樂しいなぞいふ未練が殘つてる間は、決して出來るものぢやアない。軍紀とか、命令とかいふもので壓迫に壓迫を加へられたあげく、これぢやアたまらないと氣がつく個人が、夢中になつて、盲進するのだ。その盲進が戰爭の滋養物である樣に、君の現在では、家族の饑餓が君の食物ではないか。人間は皆苦しみに追はれて活動してゐるのだ。』

『さう云はれると、さうに違ひないのやろけど』と、友人は微笑しながら、『まア、もツとお飲み。』傾けた德利の酒が不足であつたので、『おい、お銚子』と、奧へ注意してから、『女房は弱いし、餓鬼は侮目泣きをる、これも困るさかいなア。』

『それはお互ひのことだア。ね』と、僕が答へるとたん、から紙が開いて、妻君が熱さうなお燗を持つて出て來たが、大津生れの愛嬌者だけに、

『えらうお氣の毒さまどすこと』と、自分の亭主に角のない皮肉をあびせかけ、銚子を僕に向けて、

『まア、一杯どうどす？――うちの人は、いつも、あないなことばかり云ふとります。どうぞ、しかつてやつてお呉れやす。』

『まア、かういふ人間は云ひたいだけ云はして置きやア濟むんですよ。』

『さうどすか？』と、細君は亭主の方へ顏を向けた。

『まだ女房にしかられる樣な阿房やない。』

「そやさかい、岩田はんに賴んどるのやおまへんか？』

『女郎どもは、まア、あツちやへ行とれ。』

『はい、はい。』

細君は笑ひながら、からの德利を取つて立つた。

友人は手をちやぶ臺の隅にかけながら、顏に大分赤みの帶びて來たのが、そばに立つてるランプの光に見えた。

『岩田君、君、今、盲進は戰爭の喰ひ物やて云ふたけど、もう一歩進めて云ふたら、死が戰爭の喰ひ物や。人間は死ぬ時にならんと眞面目になれんのや。それで死んでしもたら、もう、何もないのや。つまらん命やないか？たゞくたばりそこねた者が歸つて來て、その味が甘かつたとか、辛かつたとか云ふて、えらさうに吹聽するのや、僕等は丸で耻さらしに歸つて來たんも同前やないか？』

『さう云やア、僕等は一言も口嘴をさしはさむ權利はない、さ。』

『まア、死にそこねた身になつて見給へ。それも、大將とか、大佐とかいふものなら、立派な金鵄勳章をひけらかして、意張つて澄ましてもをられよけど、たゞの岡見伍長ではないか？こないな意氣地なしになつて、世の中に生きながらへとるくらゐなら、いツそ、あの時、六ケ月間も生死不明にしられた仲間に這入つて、支那犬の腹わたになつとる方がましであつた。それにしても、思ひ出す度にぞツとするのは、敵の砲彈でもない、光彈の光でもない、速射砲の音でもない、實に、僕の隊附きの軍曹大石といふ人が、戰線の間を平氣で往來した姿や。これが、今でも、幽靈の樣に、また神さまの樣に、僕の心に見えとるんや。』

『何か意味のありさうな話ぢやないか？』

『許しうすれば長なろけれど、大石といふ人はもとから忠實で、從順で、少し内氣な質であつたと思ひ給へ。現役であつたにも拘らず、第○聯隊最初の出征に加はらなかつたんに落膽しとつたんやけど、おとなしいものやさかい、何も云はんで、留守番役をつとめとつた。それが豫備軍のくり出される時にも居殘りになつたんで、自分は上官に信用がないもんやさかいかうなんやて、急にやけになり、常は大して飮まん酒を無茶苦茶に飮んだやろ、赤うなつて僕のうちへやつて來たことがある。僕などは、「召集されないかて心配もなく、また召集される樣子になつたら、その前からアメリカへでも飛んで行きたいんを、わが身から進んでそないに力んだかて阿房らしいやないか？て」冷かしてやつたんけど大した意氣込みで不平を云ふとつて、取り合はん。「こないなことなら、いッそ、割腹して見せてやる」とか、「鐵砲腹をやつてやる」とか、なか／＼當るべからざる勢ひであつたんや。然し、いよ／＼僕等までが召集されることになつて、高須大佐のもとに後備歩兵聯隊が組織され、それが出征する時、待ちかまへとつた大石軍曹も、やう／＼、附いてくことが出來る樣になつたんで、その喜びと云ふたら、並み大抵ではなかつた。どうせ、無事に歸るつもりは無いて、細君を離縁する云ひ出し、自分の云ふことを承知せんなら、露助と見て血祭りにする云ふて、劍を拔いて追ひまはしたんや。』

かう云つて、友人は鳥渡僕から目を離して、猪口に手をかけた。僕も一杯かさねてから、

「實際離縁したのか？」

『いや』と友人は少し笑ひを含みながら、『その手つゞきは跡でしてやると親類の人達がなだめといて、萬歳の見送りをしたんやさうや。もう、その時から、少し氣が觸れとつたらしい。』

『氣違ひになつたのだ、な？』

『氣違ひ云ふたら、戰爭しとる時は皆氣違ひや。君の云ひ方に據れば、戰爭といふものは氣違ひが死を喰ふのか、死が氣違ひを喰ふのか分らん。ずどん云ふ大砲の音を初めて聽いた時は、こわうてこわうて堪らんのやけど、度重なれば、神經が鈍になるて云ふか、過敏となるて云ふか、それが聽えんと、寂しうて、寂しうてならん。敵は五六千メートルも隔つとるのに、目の前へでも來とる樣に見えて、大砲の彈丸があたまの上で破裂しても、よそごとの樣に思はれ、向ふの手にかゝつて死ぬくらゐなら、こツちやから死ぬまで戰つてやる云ふ一念に、皆血まなこになつとるんや。かすり傷ぐらゐ受けたて、その血が流れとるのを自分は知らんのやし、他人も亦それが見えんのも尤もや。強い彈丸が當つて、初めて氣が付くんや。それに就いて面白い話がある。僕のではない、他の中隊の一卒で、からだは、大けかつたけど、智慧がまはりかねた奴であつたさかい、いつも人に馬鹿にされとつたんが「伏せ」の命令で發砲した時、急に飛び起きて片足立ちになり、「あ、やられた！もう、死ぬ！死ぬ！」て泣き出し、またぱツたり倒れたさかい、どないにやられたかて、同隊の軍曹が調べてやると、足の上を鳥渡敵彈にかすられたんであつた。軍曹はその卒の背中をたゝいて、「しツかりせい！こんな傷なら、し

ばつとけばえゝ。』――』

『隨分滑稽な奴ぢやないか？』

『それが、さ、岩田君。跡になれば滑稽やが、その場にのぞんでは、極眞面目なもんや。戰爭の火は人間の心を燒き清めて、一生懸命の塊りにして呉れる。然し、こわうなればどこまでもこわいものやさかい、その方でまた氣違ひになるんもある。どッちやにせい、氣違ひや。大石軍曹などは一番えゝ、一番えらい方の氣違ひや。』

『うちの人もどつちかの氣違ひどす』と、細君は再び銚子を變へに出て來て、直ぐ行つてしまつた。

友人はその跡を見送つて、

『あいつの云ふ通り、僕は厭世氣違ひやも知れんけど、僕のは女房の器量がようて（奥でくすッと笑ふ聲がした）、子供がかしこうて、金がたんとあつて、寢てをられさへすれば直る氣違ひや。彈丸の雨にさらされとる氣違ひは、たとへ一時の狀態とは云ふても、さうは行かん。』

『それで、君の負傷するまでには、たび〳〵戰つたのか、ね？』

『いや、僕の隊は最初の戰爭に全滅してしもたんや。――さて、これからが話の本文に這入るのやて――』

『まア、一息つき給へ』と、僕は友人と盃の交換をした。醉ひもまはつたのであらう、友人は、氣質

に似合はず、非常にいゝ氣持ちの樣子で、にこ〳〵笑ふてゐる。然し、その笑ひが何となく寂しいのは、友人の周圍を僕に思ひ當らしめた。

『久し振りで君が尋ねて來て、今夜はとまつて呉れるのやさかい、僕はこないに嬉しいことはない。充分飮んで呉れ給へ』と、酌をしてくれた。

『僕も隨分やつてるよ。――それよりか、話の續きを聽かうぢやないか？』

『それで、僕等の後備歩兵第○聯隊が、高須大佐に導かれ、て金州半島に上陸すると、直ぐ鳳凰山を目がけて急行した。その第五中隊第一小隊に、僕は伍長として、大石軍曹と共に、屬してをつたんや。進行中に、大石軍曹は何となうそは〳〵して、たゞ、まへの方へ、まへの方へと浮き足になるんで、或時、上官から、大石、しツかりせい。貴樣は今からそんなざまぢやア、大砲の音を聽いて直ぐくたばツてしまうやろ云はれた時、赤うなつて腹を立て、そないに弱いものなら、初めから出征は望みません、これでも武士の片端やさかい、その場にのぞんで見て貰ひましよ。――それからと云ふものずうツと腹が立つとつたんやろ、無言で鳳凰山まで行進した。もう、何でも早う戰場にのぞみたうてのぞみたうて堪へられなんだんやろ。心では、おかたゝ大砲の音を聽いとつたんやろ。僕は、あの時成る程離緣問題が出た筈やと思た。』

『成る程、これからがいよ〳〵人々の氣が狂ひ出すといふ幕だ、な。』

『それが、さ、君忘れもせぬ明治三十七年八月の廿日、僕等は鳳凰山下を出發し、旅順要塞背面攻擊の一隊として、盤龍山、東鷄冠山の中間にあるピー砲臺攻擊に向た。廿日の夜行軍、翌廿一日の朝、敵陣に近い或地點に達したのやけど、危うて前進が出來ん。朝飯の際、敵砲彈の爲めに十八名の死者を出した。飯を喰てたうへゝ砲彈の砂ほこりを浴びたんやさかい、口へ這入るものが砂か米か分らん樣であつた。僕などは、もう、ぶる〳〵顫て、喰う氣にもなれなんだんやけど、大石軍曹は、僕等のあたまの上をひゆう〳〵飛んで行く砲彈を仰ぎながら、にこ〳〵して喰てをつた。「腹が出來んといくさも出來ん。」僕等の怖なつた時に、却つて平氣なもんであつた。軍曹が上官にしかられた時のうはつき方とは丸で違ごた。氣狂ひは違たもんやて、はたから僕は思た。僕は、まだ、戰場にをる氣がせなんだんや。それが、敵に見られん樣に、敵の刈り殘した高黍畑の中を這ふ樣にして前進し、一方に小山を楯にした川筋へ出た。川は水がなかつたんで、その川床にずらりと並んで敵の眼を晤ました。鳥渡でも頸を突き出すと直ぐ敵彈の的になつてしまう。晝間はとても出ることが出來なかつた、日が暮れるのを待つたんやけど、敵は始終光彈を發射して味方の擧動を探るんで、矢ツ張り出られんのは同じこと。』

『鳥渡聽くが、光彈の破裂した時はどんなものだ？』

『三四尺の火尾を曳いて弓形に登り、わが散兵線上に數個破裂した時などは、青白い光が廣がつて實

の樣であつた。それに照らされては、隱れる陰がない。おまけに、そこから敵の砲壘までは小山もたく、樹木もなく、あつた畑の黍は、敵が旅順要塞に退却の際、みな刈り取つてしもたんや。一歩踏み出せば、もう、直ぐ敵彈の餌食は覺悟せにやならん。聯隊長はこの進軍に反對であつたんやけど、止むを得ん上官の意志であつたんやさかい、まア、半分燒けを起して進んで來たんや。全滅は覺悟であつた。目的はビー砲臺ぢや、その他の命令は出さんから、この川を出るが最後、個々の行動を取つて進めといふ命令が、敵に悟られん樣に、聯隊長からひそかに、口渡しで、僕等に傳へられ、僕等は今更ら電氣に打たれた樣に顫たんやが、その日の午後七時頃、いざと一同川を飛び出すと、生憎諸方から赤い尾を曳いて光彈があがり、花火の樣にぱツと彈けたかと思ふ間もなう、ぱら〳〵と速射砲の彈雨を浴びせかけられた。それからていふもの、君、敵壘の方から速射砲發射の音がぽと〳〵、ぽとぽと聽える樣になる。頭上では、また砲彈が破裂する。何のことはない　野砲、速射砲の破裂と光彈の光とがつゞけざまにやつて來るんやもの、かみ鳴りと稻妻とが一時に落ちる樣や、僕等は、もう、夢中やつた。午後九時頃には、わが聯隊の兵は全く亂れてしもて、各々その中隊にはをらなかつた。心易いものと心易いものが、お互ひに死出の友を求めて組みし合ひ、抱き合ふばかりにして突進した。今から思て見ると、よく、まア、あないな勇氣が出たことや。後について來ると思たものが足音を絕つ、並んどつたものが見えん樣になる、前に進むものが倒れてしまう。自分は自分で、楯とするものがない。』

『そこになると、もう、僕等の到底想像出來ないことだ。』

『實際、君、さうや。』

『わたしは何度も聽かされたんで、よく知つとります』と、細君がまた銚子を持つて出て來て、僕等のそばに座わり込んだ。

『奥さんがその楯になるつもりです、ね？』

『さうやも知れまへん』と笑つてゐる。

友人は眞面目だ。

『僕はなんでこないに勇氣が出るか知らん思たんが氣のゆるみで、急に寂しい樣な氣がした。僕獨りで。——聯絡がなかつた。こないな時の寂しさは乃ち恐怖や、おそれや。それに、發砲を禁じられとつたんで、たゞ土くれや唐黍の燒け殘りをたよりに、彈丸を避けながら進んで行たんやが、僕が黍の根を引き起し、それを堤としてからだを横たへた時、まア、安心と思たんが惡かつたんであろ、速射砲彈の破裂に何ともかとも云へん恐ろしさを感じた。仲間どもはどうなつたか思て、後方を見ると、光彈の光にずらりと黑う見えるんは石か株か、死體か生きとるんか、見分けがつかなんだ。また敵の砲壘までまだどれほどあるかて、音響測量をやつて見たら、たツた二百五十メートルほかなかつた。大小の敵彈は矢ツ張り雨の如く降つとつた。その間を平氣で進んで來たものがあるやないか？　たツ

た獨りやに「沈着にせい、沈着にせい」云ふて命令しとる樣な樣子が何やらをかしい思はれた。演習に行てもあないに落ち付いてをられん。人並みとは違た樣子や。して、倒れとるものが皆自分の命令に從ごて來るつもりらしかつた。それが大石軍曹や。』

友人は不思議ではないかと云はぬばかりに、僕と細君との顏を順ぐりに見た。

『戰場では』と、僕が受けて、『大膽に出て行くものにやア却つて彈丸が當らないものださうだ。』

『うちの人の樣にくよ〳〵しとると、ほんまにあきまへん。』

『そやさかいおれは不大膽の厭世家やて云ふとる。彈丸が當つてくれたのはわしとして名譽でもあつたろが、くたばりそこねてこないな耻さらしをするんやさかい、矢ッ張り大膽な奴は仕合せにも死ぬのが早い――「沈着にせい、沈着にせい」云ふて進んで行くんやさかい、上官を獨りほかいて置くわけにも行かん。この人が來なんだら、僕は一目散に逃げてしもたやも知れんのや。僕はこは〴〵起きあがつてその跡に付いてたんやけど、何やら樣子が不思議やつたんで、軍曹に目を離さんでをつたんやが、これはいよ〳〵キ印になつとるんや思た、自分のキ印には氣がつかんで――「軍曹どの危の御座ります」僕が云ふたら、

「なアに、くそ！沈着にせい。」

「みなやられたらしいです。あたりには、軍曹どのとわたしとばかり。打たれるくらゐなら先づてツ

ちやから打つて、敵砲手の獨りなと、ふたりなと射殺してやりましよ。」

「なにイ――距離を測量したか？」

「二百五十メートル以内――只今計りました。」

『ぢやア、やれ！沈着に發砲せい！。」

「よろしい！」て、二人ともずどん〳〵一生懸命になつて二三十發つづけざまに發砲した。

『之に應じて、當の目あてからは勿論、盤龍山、鷄冠山からも砲彈は雨、あられと飛んで來た。ぴかツて青い光が破裂すると、ぱら〳〵ツと一段烈しう速射砲彈が降つて來たんで、僕は地上にうつ伏しになつて之を避けた。敵壘の速射砲を發するぽと〳〵、ぽと〳〵云ふ響きが聽えたのは、如何にも怖いものや。再び立ちあがつた時、僕はやられた。十四五箇所の貫通創を受けた。

「軍曹どの、やられました！」

「砲彈か、小銃彈か？」

「穴は大きい。」

「ぢやア、後方にさがれ！」

「かしこまりました！」て一心に僕は驅け出したんやけど、倒れて夢中になつた。氣がついて見たら

「しツかりせい、しツかりせい」て、獨りの兵が僕をかゝへて後送してくれとつた。水が飲みたいんで、

水瓶の水を取ろとして、出血の甚しかつたんを知り、「とても生きて歸ることが出來んなら、いツそ戰線に於て死にます」云ふたら、「ぢやア、お前の勝手に任す」云ふて、その兵はいづれへか去つた。この際、外に看護してくれるものはなかつたんやさかい、それが矢ツ張り大石軍曹であつたらしい。どうやら、その聲にも似とつた。』

『それが果して氣違ひであつたなら、隨分しツかりした氣狂ひぢやアないか？』

『無論氣狂ひにも種類があるもんと見にやならん。――僕はそれから夜通し何も知らなかつたんや。再び氣が付いて見たら、前夜川から突進した道筋をずツと右に離れたとこに獨立家屋があつた、その附近の畑の掘れたなかに倒れとつた。夜のあけ方であつたんやけど、まだ薄暗かつた。あたまを擧げてあたりを見ると、獨り兵の這ひさがるんかと思た黑い影があるやないか？自分もあの樣にして這ひさがろ思てよう見ると、うわさに聽いた支那犬やないか？戰爭の過ぎた跡へかけ付けて、なま臭い人肉を喰ふ狼見た樣な犬がうろ付いとる間で、腰、膝の立たんわが身が一夜をその害からのがれたんは、まだ死をいそぐんではなかろて、勇氣――これが僕にはほんまの勇氣やろ――を出して、後方にさがつた。獨立家屋のあたりには、衛生隊が死傷者を收容する樣子は見えなんだ。進んだ時も夢中であつたんやが、さがる時も一生懸命――敵に見付かつたらいふ怖さに、たツた獨りぼツちの脊中に各種の大砲小銃が四方八方からねらひを向けとる樣な氣がして、ひどう神經過敏になつた耳元で、僕の手足

が這ふとる音がした。のぼせ切つてをつたんや。刈り取られた黍畑や赤はげの小山を越えて、およそ二千メートル後方の假繃帶場へついた時は、ほツと一息したまゝ、また正氣を失てしもた。そこからまた一千メートル程のとこに第〇師團第二野戰病院があつて、そこへ轉送され、廿四日には長嶺子定立病院にあつた。その間に僕の左の腕が無うなつとつた。寢臺の上に仰向けになつたまゝ、「おや腕が」と氣が付いたんやが、その時第一に僕の目に見えたんは大石軍曹の姿であつた。この人をしかつた上官にも見せてやりたかつたんやが、「その場にのぞんで見て貰ひましよ」と僕の心を威嚇して急に戰爭の修羅場が浮んで來た。僕はぞツとして蒲團を被ろうとしたが手が一方よりほか出なかつた。びツくりした看護婦が、どうしたんや問ふたに答へもせず、右の手を出してそツと左の肩に當つて見たら、二三寸のとこで腕が木の株の様に切れて、繃帶をしてあつた。――この腕だ。』

と、友人は左の肩を動かした。

『如何に君自身は弱くつても、君の腕はその大石軍曹と同じく、行くへが知れない程勇氣があつたんだ』と、僕は猪口を差した。

友人は右の手に受けて、言葉を繼ぎ、『あの時の心持ちと云ふたら、まだ氣が落ち付いとらなんだんやさかい、今にも敵が追ひ付いて來さうで、怖いばかりのまぼろしを見とつたのや。跡で看護婦の話を聽いたら、大石軍曹まで敵に思たんであろ、「大石が來た、大石が來た」云ふてたび〳〵うなされ

とつたさうや。して、その軍曹は而も僕を獨立家屋のそばまでかゝへて來て呉れた命の親だ。よくよく僕は卑恐の本音を出したもんやらしい。』
『それは僕に解釋さして呉れるなら』と、僕は口を出して、『氣狂ひとまで一方に思つた軍曹の、大膽な態度に君が深く打たれたので、夢中な心にもそれを忘れかねたんだらう。』
『それ、さ。』友人は卓を打つて、『僕は今でもその姿が見える樣なんや。岡見伍長に大石軍曹は神さんや』と、氣の弱いにも似ず、何となく威だけ高になつた友人の姿には、一種の神々しいところがあつた。その寂しいほゝゑみは消えて、顔は、酒の醉ひでなく、別な力の熱して來た目つきであつた。僕は、周圍の平凡な眞ん中で、戰爭當時の狂熱に接する樣な氣がした。
『大石軍曹は』と、友人はまた元の寂しい平凡に歸つて、『その行くへが他の死者と同じ樣に六ケ月間分らなんだ。獨立家屋のさきで倒れとつたんを見た云ふもんもあつたさうやし、もツとさきの方で負傷したまゝ戰ことつた云ふもんもある。何にせい、聯隊の全滅であつたんやさかい、僕の中隊で僕ともう一人ほか生還しやへんのや。全滅後、死體の收容も出來んで、そのまゝ翌年の一月十二三日、乃ち旅順開城後までほツとかれたんや　一月の十二三日に收容せられ、生死不明者等はそこで初めて戰死と認定せられ、遺骨が皆本國の聯隊に着したんは、三月十五日頃であつたんや。死後八ケ月を過ぎて葬式が行はれたんや。』

『して、大石のからだはあつたんか？』

『あつたとも、君——跡で收容當時の樣子を聽いて見ると、僕等が飛び出した川からビー堡壘に至る間に、「伏せ」の構へで死んどるもんもあつたり、土中に埋つて片手や片足を出しとるもんもあつたり、からだが離ればなれになつとるんもあつた。何れも、腹を出しとつたんはあばらが白骨になつとる。腹を土につけとつたんは黑い乾物見た樣になつとる。中には倒れないで坐わつたまゝ、白骨になつとつたんもある。之を見た收容者は男泣きに泣いたさうや。大石軍曹はて云ふたら、僕がやられたとこよりも遙かさきの大きな岩の上に、劍さきを以つて敵陣をゆび指したまゝ高須聯隊長が倒れとつた、その岩よりもそツとさきに進んだとこで、敵の第一防禦の崩壕内に死んどつたんが、大石軍曹と同じ名の軍曹であつたさうや。』

『隨分手柄のあつた人どす、なア』と、細君は僕の方に頸を動かした。

『そりやア』と、僕が話しかける間もなく、友人は言葉をついだ。

『思て見ると、僕を獨立家屋のそばまで後送して呉れた跡で、また進んで行て例の「沈着にせい、沈着にせい」をつゞけとつたんやろ。——まア、ざツとこないな話——君の耳も僕の長話の砲聲で勞れたろから、もう少し飲んで休むことにしよ。まア、飲み給へ。』

『酌ぎましよ』と、すゝめる細君の酌を受けながら、僕は大分醉つた樣子らしかつた。

『君と久し振りで會つて、愉快に飲んだし、思ひもよらない君の戰話を聽いたし、もう、何にも不滿足はない。休ませて貰はう。』

『それでは二階へ行こか？』

『まア、鳥渡待つておくれやす』と、細君は先づ僕等の寢床を敷きにあがつた。僕等は暫くしてあがつた。

家は古いが、細君の方の親讓りで、二階の飾りなども可なり揃つてゐた。友人の今の身分から見ると、家賃が入らないだけに、どこか樂に見えるところもあつた。夫婦に小供二人の活しだ。

『あす君は歸るんや。なア、僕は役場の書記でくたばるんや。もう一遍君等と一緒に寄宿舍の飯を喰た時代に返りたい』と、友人は寢卷きを着かへながらしみ〴〵語つた時、下の坐敷から年上の子の泣き聲が聞えた。つゞいて、年下の子が泣き出した。細君は急いで下りて行つた。

『あれやさかい厭になつてしまう。親子四人の爲めに僅かの給料で毎日〳〵こき使はれ、歸つて晩酌でも一杯思ふ時は、半分小兒の守りや。養子の身はつらいものや、なア。月末の拂ひが不足する時などは、借金をするんも胸くそ惡し、いツそ子供を抱いたまゝ、湖水へでも沈んでしまをか思ふことがある。』

かういふ話を聽きながら、僕はいつの間にか寢入つてしまつたが、醉ひの覺めて行くに從つて、目

も覺めて來て、再び眠られなくなつた。神經が段々冴えて行くのであつた。

その間に、僕のそばでぐツすり寢込んでゐるらしい友人の身の上や、昔の寄宿舍生活などを思ひ浮べ、友人の持つてゐた才能を延ばし得ないで、こんな田舍に埋れてしまう運命が氣の毒になり、そのむくろには今どんな夢が宿つてゐるだらうなど〻、寢苦しいまゝに幾度も寢返りをするうちに、よひに聽いた戰話があり〳〵と暗やみに見える樣になつた。

然し、大石軍曹なる者の「沈着にせい、沈着にせい」の立ち姿が黑いばかりで分らない。どんな顏をしてゐたらうと思ひめぐらしてゐると、段々それが友人の皮肉な寂しい顏に見えて來て、――僕は決して夢を見てゐたのではない――その聲高いいびきを聽くと、僕は何だか友人と床を並べて寢てゐる氣がしないで、一種威嚴ある將軍の病床に侍づてゐる樣な氣がした。

――(四十一年五月)――

# 耽溺

この作は明治四十三年某書肆より發刊されたものであるが、更に大正四年五月新潮社より改訂の上刊行された。從つて臺本は改訂されたる後者を收錄することにした。

# 一

僕は一夏を國府津の海岸に送ることになつた。友人の紹介で、或寺の一室を借りるつもりであつたのだが、たづねて行つて見ると、いろ〳〵取り込みのことがあつて、この夏は客の世話が出來ないと云ふので、またその住持の紹介を得て、素人の家に置いて貰ふことになつた。少し込み入つた脚本を書きたいので、やかましい宿屋などを避けたのである。隣りが料理屋で藝者も一人かゝへてあるので、時々客などがあがつてゐる時は、隨分さうざうしかつた。然し僕は三味線の浮き〳〵した音色を嫌ひでないから、却つて面白いところだと氣に入つた。

僕の占領した室は二階で、二階はこの一室よりほかになかつた。隣りの料理屋の地面から、丈の高いいちじくが聳り立つて、僕の二階の家根を上までも越してゐる。いちじくの青い廣葉はもろさうな物だが、之を見てゐると、何となくしんみりと、氣持ちのいゝ物だから、僕は芭蕉葉や青桐の葉と同様に好きなやつだ。而もそれが僕の仕事をする座敷から直ぐそばに見える。

それに、その葉かげから、隣りの料理屋の綺麗な庭が見える。燈籠やら、いくつにも分岐した敷石の道やら、瓢箪なりの池やら、低い松や柳の枝ぶりを造つて刈り込んであるのやら、例の箱庭式はこせついて厭な物だが、掃除のよく行き屆いてゐたのは、これも氣持のいい事の一つだ。その庭の片端の僕の方に寄つてるところは、勝手口のあるので、他の方から低い竹垣を以つて仕切られてゐて、そこにある井戸――それも僕の座敷から見える――は、僕の家の人々もつかはせて貰ふことになつてゐる。

隣りの家族と云つては、主人夫婦に子供が二人。それに主人の姉と藝者とが加はつてゐた。主人夫婦は極お人よしで家業大事とばかり、家の掃除と料理との爲めに、朝から晩まで一生懸命に働いてゐた。主人の姉――名はお貞――と云ふのが、昔からのえら物で、そこの女將たる實權を握つてゐて、地方有志の宴會にでも出ると、井筒屋の女將お貞婆さんと云へば、なか〳〵幅が利く代り、家にゐては、主人夫婦を呼び棄てにして、少しでもその意地の悪い心に落ちないことがあると、意張りたがるお客が家の者にがなりつく様な權幕であつた。

お君といふその姪、乃ち、そこの娘も、年は十六だが、叔母に似た性質で、――客の前へ出ては内氣で、無愛嬌だが、――とんまな兩親のしてゐることがもどかしくツて、もどかしくツてたまらないと云ふ風に、自分が用のない時は、火鉢の前に坐つて、目を離さず、その長い頤で兩親を使ひまはし

てゐる。前年など、かゝへられてゐた藝者が、この娘の皮肉の折檻に堪へ切れないで、海へ身を投げて死んだ。それから、急に不評判になつて、あの婆さんと娘とがゐる間は、井筒屋へは行つてやらないと云ふ人々が多くなつたのださうだ。道理で餘り景氣のいゝ料理店ではなかつた。

僕が英語が出來るといふので、僕の家の人を介して、井筒屋の主人がその子供に英語を教へてくれろと頼んで來た。それも眞面目な依賴ではなく、時々西洋人が來て、應對に困ることがあるので、『おあがんなさい』とか、『何を出しましよう』とか、『お酒をお飲みですか、ビールをお飲みですか』とか、『藝者を呼びましようか』とか、『大相上機嫌です、ね』とか、『またいらつしやい』とか、さういふことを專門に教へてくれろと云ふのであつた。僕は好ましくなかつたが、仕事のあひまに教へてやるのも面白いと思つて、會話の目錄を作らして、そのうちを少しづゝと、二人がほかで習つて來るナショナル讀本の一と二とを讀まして見ることにした。お君さんとその弟の正ちやんとが毎日午後時間を定めて習ひに來た。正ちやんは十二歲で、病身だけに、少し薄のろの方であつた。

或日、正ちやんは、學校のないので、午前十一頃にやつて來た。僕は大切な時間を取られるのが惜しかつたので、いゝ加減に教へてすましてしまふと、

『うちの藝者も先生に教へていたゞきたいと云ひます』と云ひ出した。

『面倒くさいから、厭だよ』と僕は答へたが、跡から思ふと、その時から既にその藝者は僕をだまさ

うとしてゐたのだ。正ちやんは無邪氣なもので、
『どうせ習らつても、馬鹿だから、分るもんか？』
『なぜ？』
『こないだも大ざらひがあつて、義太夫を語つたら、熊谷の次郎直實といふのを熊谷の太郎と云うて笑はれたんだ——あ、あれがうちの藝者です、寢坊の親玉。』
と、そとを指さしたので、僕もその方に向いた。いちじくの葉かげから見えたのは、しごき一つのだらしない寢卷き姿が、楊枝を銜はへて、井戸端からこちらを見て笑つてゐる。
『正ちやん、いゝ物をあげようか？』
『あゝ』と立ちあがつて、兩手を出した。
『ほうるよ』と、しなやかにだが、勢ひよくからだが曲がるかと思ふと、黑い物が飛んで來て、正ちやんの手をはづれて、僕の肩に當つた。
『おほ、ほ、ほ！　御免下さい』と、向ふは笑ひくづれたが、直ぐ白いつばを吐いて、顏を洗ひ出した。飛んで來たのは僕のがま口だ。
『これはわたしのだ。さツき井戸端へ水を飲みに行つた時、落したんだらう。』
『あの狐に取られんで、まア、よかつた。』

『可哀さうに、そんなことを云つて――何といふ名か、ね？』
『吉彌と云ひます。』
『歸つたら、禮を云つといてお吳れ』と、僕は僕の讀みかけてゐるメレジコウスキの小說を開いた。
正ちやんは、裏から來たので、裏から歸つて行つたが、それと一緒に何か話しをしながら、家に這入つて行く吉彌の素顏を鳥渡のぞいて見て、餘り色が黑いので、僕はいや氣がした。

二

僕はその夕がた、あたまの勞れを癒しに、井筒屋へ行つた。それも、角の立たない樣にわざと裏から行つた。
『あら、先生！』と、第一にお貞婆さんが見つけて、立つて來た。『こんなむさ苦しいところからお出んでも――』
『なアに、僕に遠慮はないから――』
『まア、お這入りなさつて下さい。』
『失敬します』と、僕は臺どころの板敷きからあがつて、大きな圍爐裡のそばへ坐つた。
主人は尻はしよりで庭を掃除してゐるのが見えた。おかみさんは下女同樣な風をして、廣い臺どこ

ろで働いてゐた。僕の坐つたうしろの方に、廣い間が一つあつて、そこに大きな姿見が据ゑてある。お君さんがその前に立つて、頻りに姿を氣にしてゐた。疊一枚ほどに切れてゐる細長い圍爐裡には、この暑いのに、燃木が四五本もくべてあつて、天井から雁木で釣るした鐵瓶がぐら／＼煮え立つてゐた。

『どうも、毎度、子供がお世話になつて』と、爐を隔て丶僕と相對したお貞婆さんが改まつて挨拶をした。

『どうせ、丁寧に敎へてあげる暇はないのだから、お禮を云はれるまでのことはないのです。』

『この暑いのに、よう精が出ます、な、朝から晩まで勉强をなさつて？』

『さうやつてゐなければ喰へないんですから。』

『御常談を――それでも、先生は外の人と違つて、遊びながらお仕事が出來るので結構で御座ります。』

『貧乏ひまなしの譬へになりませう。』

『どう致しまして、先生――おい、お君、先生にお茶をあげないか？』

　そのうち、正ちやんがどこからか歸つて來て、僕のそばへ坐つて、今聽いて來た世間のうはさ話しを出す。お君さんは茶を出して來る。お貞が二人の子供を實子の樣に可愛がり、また自慢するのが近處の人々から嫌はれる一原因だと聽いてゐたから、僕はそのつもりであしらつてゐた。

『どうも馬鹿な子供で困ります』と言ふのを、

『なアに、ふたりとも利口なたちだから、おぼえがよくツて末頼母しい』と、僕は讃めてやつた。

『おツ母さん、實は氣が鬱して來たんで、一杯飲ましてもらひたいんです、どツかいゝ座敷を一つ開けてもらひませうか？』

『それは有難たう御座ります』と、お貞はお君に目くばせしながら、

『風通しのえゝ二階の三番がよかろ。あすこへ御案内おし。』

『なアに、どこでもいゝですよ』と、僕は立つてお君さんについて行つた。煙草盆が來た、改めてお茶が出た。

『何をおあがりなさいます』と、お君のおきまり文句らしいのを聽くと、僕が西洋人なら僕の教へた片言を試みるのだらうと思はれて、何だか厭な、小癪な娘だといふ考へが浮んだ。僕はいゝ加減に見つくろつて出す樣に命じ、巻煙草をくはへて寢ころんだ。

先づ海苔が出て、お君が鳥渡酌をして立つた跡で、ちびり〳〵飲んでゐると二三品は揃つて、そこへお貞が相手に出て來た。

『お獨りではお寂しかろ、婆々アでもお相手致しませう。』

『結構です、まア一杯』と、僕は盃をさした。

婆さんはいろんな話をした。この家の二三年前までは繁盛したことや、近頃は一向客足が遠いことと

や、土地の人々の薄情なことや、世間で自家の缺點を指摘してゐるのは知らないで、勝手のいゝ泣き言ばかりが出た。やがてはしご段をあがつて、廊下に違つた足音がすると思ふと、吉彌が銚子を持つて來たのだ。けさ見た素顏やなり振りとは違つて、尋常な藝者に出來あがつてゐる。

『けさほどは失禮致しました』と、しとやかながら冷かす樣に手をついた。

『僕こそお禮を云ひに來たのかも知れません。』

『かも知れませんでは、お禮になりますまい！』

『いや、どうも――それでは、ありがたう御座ります』と、僕はわざとらしくあたまを下げた。

『まア、それで、あたい氣がすんだ、わ。』

吉彌はお貞を見て、勝利がほに扇子を使つた。

『全體、まア』と、はじめから怪幻な樣子をしてゐたお貞が、『どうしたことよ、出し拔けになぞ見た樣で？』

『なアに、おツ母さん、けさ、僕が落したがま口を拾つてもらつたんです』といふと、その跡は吉彌の笑ひ聲で說明された。

『それでは、いツそだまつてをれば儲かつたのに。』

『ほんとに、あたい、さうしたらよかつた。』

『生憎銅貨が二三錢と來たら、如何に吉彌さんでも驚くだらう。』
『この子はなか〳〵慾張りですよ。』
『あら、叔母さん、そんなことはない、わ。』
『まア、一つさしませう』と、僕は吉彌に猪口を渡して、『今お座敷は明いてゐるだらうか？』
『叔母さん、どう？』
『今のところでは、口がかゝつてをらない。』
『ぢやア、僕がけさのお禮として玉をつけませう。』
『それは濟みませんけれど』と云ひながら、婆アさんが承知のしるしに僕の猪口に酒を酌いで、下りて行つた。

三

『お前の生れはどこ？』
『東京。』
『東京はどこ？』
『淺草。』

『淺草はどこ？』
『あなたはしつッこいのね、千束町よ。』
『あ、あの溝溜の樣な池があるところだらう？』
『おあいにくさま、あんな池は迅くにうまつてしまひましたよ。』
『ぢやア、うまつた跡にぐらつく安借家が出來た、その二軒目だらう？』
『しどいわ、あなたは』と、ぶつ眞似をして、『はい、これでもうちへ歸つたら、お孃さんで通せますよ。』
『お孃さん藝者萬歳』と、僕は豬口をあげる眞似をした。
三味を彈かせると、ぺこん／＼とごまかし彈きをするばかり。面白くもないが、僕は醉つたまぎれに歌ひもした。
『もう、よせ／＼。』僕は三味線を取りあげて、脇に投げやり、『おれが手のすぢを見てやらう』と、右の手を出させたが、指が太く短くツて實に無格好であつた。
『お前は全體いくつだ？』
『二十五。』
『うそだ、少くとも二十七だらう？』

『ぢやア、さうして置いて？』
『お父さんはあるの？』
『あります。』
『何をしてゐる？』
『下駄屋。』
『おッ母さんは？』
『藝者の桂庵。』
『兄さんは？』
『勸工場の店番。』
『姉さんは？』
『ないの。』
『妹は？』
『藝者を引かされる筈。』
『どこにつとめてゐるの？』
『大宮。』

『引かされてどうするの？』
『その人の奥さん。』
『なアに、妾だらう。』
『妾なんか、つまりませんわ。』
『ぢやア、おれの奥さんにしてやらうか？』と、からだを引ッ張ると、『はい、よろしく』と、笑ひながら寄つて來た。

四

翌朝、食事をすましてから、僕は机に向つてゆうべのことを考へた。吉彌が電燈の球に『やまと』のあき袋をかぶせ、はしご段の方に耳をそば立てた時の樣子を見て、もろい奴、見ず轉の骨頂だといふ嫌氣がしたが、然し自分の自由になる物は、——犬猫を飼つてもさうだらうが——それが人間であれば、如何なお多福でも、一層可愛くなるのが人情だ。國府津にゐる間は可愛がつてやらう。東京につれて歸れば面白からうなどゝ、それからそれへ空想をめぐらしてゐた。
下座敷でなまめかしい聲がして、段々二階へあがつて來た。吉彌だ。書物を開らからうとしたところだが、まんざら厭な氣もしなかつた。

『田村先生、お早う。』

『お前かい？』

『來たら、いけないの？』ぴツたり、僕のそばにからだを押しつけて坐つた。それツきりで、目が物を云つてゐた　僕はその頸をいだいて口づけをしてやらうとしたら、わざとかほをそむけて、

『厭な人、ね。』

『厭なら來ないがいゝ、さ。』

『それでも、來たの――あたし、あなたの樣な人が好きよ。商賣人？』

『あゝ、商賣人。』

『どんな商賣。』

『本書き商賣。』

『そんな商賣がありますもんか？』

『まア、ない、ね。』

『人を馬鹿にしてイるの、ね』と、僕の肩をたゝいた。

僕を商賣人と見たので、また厭氣がしたが、他日わが國を風靡する大文學者だなど、威ばつたところで、かの女の分らう筈もないから、茶化すつもりでわざと顏をしかめ、

『あ、いたゝ！』

『うそ〳〵、そんなことで痛いものですか？』と、ふき出した。卦算の龜の子をおもらやにしてゐた。

『全體どうしてお前はこんなところにぐづゝいてるんだ？』

『東京へ歸りたいの。』

『歸りたきやア早く歸つたらいゝぢやアないか？』

『おッ母さんにさう云つてやつた、わ、迎へに來なきやア死んぢまうッて。』

『おそろしいこッた。然しそんなことで、びくつくおッ母さんぢやアあるまい。』

『おッ母さんはそりやア〳〵可愛がるのよ。』

『獨りでうぬぼれてやアがる。誰がお前の樣な者を可愛がるもんか？一體お前は何が出來るのだ？』

『何でも出來る、わ。』

『第一、三味線は下手だし、歌もまづいし、こゝから聽いてゐても、たゞきやア〳〵騷いでるばかりだ。』

『ほんとうは、三味線はきらひ、踊りが好きだつたの。』

『ぢやア、踊つて見るがいゝ』とは云つたものゝ、ふと顏を見合はせたら、抱き附いてやりたい樣な氣がしたのを、しつッこいと思はせない爲め、まぎらしに仰向けに倒れ、兩手をうしろに組んだまゝ、

その上にあたまをのせ、吉彌が机の上でいたづらをしてゐる横がほを見ると、色は黒いが、鼻柱が高く、目も口も大きい。それに丈が高いので、役者にしたら、舞臺づらがよく利くだらうと思ひ附いた。鳥渡斷つて置くが、僕は或脚本――それによつて僕の進退を決する――を書く爲め、材料の整理をしに來てゐるので、少くとも女優の獨りぐらゐは、之を演ずる段になれば必要だと思つてゐた時だ。

『お前が踊りを好きなら、役者になつたらどうだ？』

『あたい、贊成だ、わ。甲州にゐた時、朋輩と一緒に五郎、十郎をやつたの。』

『さぞこの尻が大きかつただらう、ね。』うしろからぶつと、

『よして頂戴よ　お茶を引く、わ』と、僕の手を拂つた。

『お前が役者になる氣なら、僕が十分周旋してやらア。』

『どこへ、本郷座？　東京座？　新富座？』

『どこでもいゝや、ね、それは僕の胸にあるんだ。』

『あたい、役者になれば、妹もなりたがるにきまつてる。それに、あたいの子――』

『え、お前の子供があるんか？』

『もとの旦那に出來た娘なの。』

『いくつ？』

『十二。』

『意氣地なしのお前が子までおッつけられたんだらう?』

『さうぢやアない、わ。青森の人で、手が切れてからも、一年に一度ぐらゐは出て來て、子供の食ひ扶持ぐらゐはよこす、わ。――それが面白い子よ。五つ六つの時から踊りが上手なんで、料理屋や待合から借りに來るの。「はい、今晩は」ツて、澄ましてお客さんの座敷へ這入つて來て、踊りがすむと、「姉さん、御祝儀は」ツて催促するの。小癪な子よ。芝居は好きだから、あたいよく仕込んでやる、わ。』

吉彌は直ぐ乘り氣になつて、いよ／＼さうと定まれば、知り合ひの待合や藝者屋に披露して引き幕を贈つて貰はなければならないとか、披露にまはる衣服にこれ／＼かゝるとか、かの女も寢ころびながら、いろ／＼の注文をならべてゐたが、僕は、その時になれば、どうとも工面してやるがと返事をして、先づ二三日考へさせることにした。

## 五

それからといふもの、僕は毎晩の樣に井筒屋へ飲みに行つた。吉彌の顏が見たいのと、例の決心を確めたいのであつたが、當人の決心が先づ本統らしく見えると、直ぐまた僕はその親の意見を聽きにやらせた。親からは近々當地へ來るから、その時よく相談するといふ返事が來たと、吉彌が話した。

僕一個では、また、或友人の劇場に關係があるのに手紙を出し、かう〳〵いふ女があつてかう〳〵だと、その缺點と長所とを誇張しないつもりで一考を求め、遊びがてら見に來てくれろと云つて置いたら、ついでがあつたからと云つて出て來てくれた。吉彌を一夕友人に紹介したが、もう、その時は僕が深入りし過ぎてゐて、女優問題を相談するよりも、二人ののろけを見せた樣に友人に見えたのだらう。僕よりもずツと年若い友人は、來る時にも『田村先生はゐますか』といふ樣な調子でやつて來て、歸つた時にはその晩の勘定五圓なにがしを拂つてあつたので、氣の毒に思つて、僕は直ぐその宿を訪ふと、まだ歸らないと云ふことであつた。どこかでまた燒け酒を飮んでゐるのだらうと思つたから、その翌朝を待つて再び訪問すると、もう出發してゐなかつた。僕は何だか興ざめた氣がした。それから、一週間、二週間を經ても、友人からは何の音沙汰もなかつた。然し、僕は、どんな難局に立つても、この女を女優に仕立ててあげようといふ熱心が出てゐた。

## 六

僕は井筒屋の風呂を貰つてゐたが、雨が降つたり、餘り涼しかつたりする日は沸たないので、自然近處の錢湯に行くことになつた。吉彌も自分のうちのは立つても夕がたなどで、お座敷時刻の間に合はないと云つて、錢湯に行つてゐた。僕が行く頃には吉彌も來た、吉彌の來る頃には僕も行つた。別

に申し合はせたわけでもなかつたが、時々は向ふから誘ふこともあつた。氣が附かずにゐたが、毎度風呂の中で出くはす男で、石鹼を女湯の方から貰つて使ふのがあつて、僕はいつも厭な、にやけた奴だと思つてゐた。それが一度向ふから餘り女らしくもない手が出て、
『旦那、しやぼん』といふ聲が聽えると、てツきり吉彌の聲であつた。男はいつも女湯の方によつて洗つてゐた。

このふたりは湯をあがつてからも、必らず立ち話しだ。男は腰卷き一つで、うちはを使ひながら、湯の番人の坐つてゐる番臺のふちに片手をかけて女に向ふと、女はまた、どこで得たのか、白い寒冷紗の襞つき西洋寢卷をつけて、そのそばに立ちながら涼んでゐた。湯あがりの化粧をした顏には、ほんのりと赤みを帶びて、見ちがへるほど美しかつた。

外にも藝者の這入りに來てゐるのは多いが、いつも目に立つのはこの女がこの男と相對してふざけたり、笑つたりしてゐたことである。はじめはこの男をひいきのお客位にしか僕は思つてゐなかつたが、石鹼事件を知つたので、これは僕の戀がたきだと思つた。否、戀がたきとして競爭する必要もないが、吉彌が女優になりたいなどは眞ツかなうそだと合點した。急に胸がむか／＼として來ずにはゐられなかつた。その樣子がかの女には見えだかも知れないが、僕は之を顏にも見せないつもりで、いそいで衣服をつけてそこを出た。しまつたと後悔したのは、出口の障子をつい烈しく／＼しめたことだ。

けふは早く行つて、あの男またはその他の人に呼ばれないうちに、吉彌めをあけ、一つ精一杯なじつてやらうと決心して、井筒屋へ行つた。湯から歸つて直ぐのことであつた。

『叔母さん。』僕もこゝの家族の云ひならしに從つて、お貞婆アさんをさう呼ぶことにしたのだ――

『けふは今から吉彌さんを呼んで、十分飮みますぞ。』

『毎度御ひいきは有難う御座いますけれど、先生はさうお遊びなさつてもよろしう御座いますか？』

『なアに、かまひませんとも。』

『然し、まだ奧さんにはお目にかゝりませんけれど、おうちでは獨りで御心配なさつてをられますよ。』

『いゝえ、先生の樣なお氣質では、つれ添ふ身になつたら大抵想像がつきますもの。』

『かゝアは何も知つてませんや。』

それがお可哀さうで。』

『よしんば、知れたツてかまひません。』

『先生はそれでもよろしからうが、私どもがそばにゐて、奧さんにすみません。』

『心配にやア及びません、さ。』景氣よくは應對してゐたものゝ、考へて見ると、吉彌に熱くなつてゐるのを勘づいてゐるので、旦那があるからとても駄目だといふ心をほのめかすのではないかとも取れないことではない。また、一方には、飮むばかりで借りが出來るのを、若し拂はれない樣なことがあ

つてはと心配し出したのではないかとも取れた。僕はわざと作り笑ひを以つて平氣をよそひ、お貞やお君さんや正ちやんやと時間つぶしの話をした。吉彌がまだ湯から歸らないのをひそかに知つてゐたからだ。

『吉彌は風呂に行つてまだ歸りませんが――もう、歸りさうなものだに、なア』と、お貞はお君に云つた。

『もう、一時間半、二時間にもなる』と、正ちやんが時計を見て口を出した。

『また、あの青木と蕎麥屋へ行つたのだらう。』お君が長い顎を動かした。蕎麥屋と聽けば、僕も吉彌に引ツ込まれたことがあつて、よく知つてゐるから、そこへ行つてゐる事情は十分察しられるので、いゝことを聽かしてくれたと思つた。然し、この利口ではあるが小癪な娘を、敎へてやつてゐるが、僕は內心非常に嫌ひであつた。年にも似合はず、人の缺點を橫からにらんでゐて、自分の氣に食はないことがあると、何も云はないで、親にでも強く當る。

『氣が強うて困ります』とは、その母が僕に會つて云つたことだ。まして雇ひ人などに對しては、最も皮肉な當り方をするので、吉彌はいつもこの娘を見るとぷり〳〵してゐた。その不平を吉彌は度々僕に漏らすことがあつた。もつとも、お君さんをさういふ氣質に育てあげたのは、もとはと云へば、親達が惡いのらしい。世間の評判を聽くと、まだ肩あげも取れないうちに、箱根の或旅宿の助平おや

ぢから大金を取つて、水あげをさせたといふことだ。小癪な娘だけに段々燒けッ腹になつて來るのは當り前だらう。

『あの青木の野郎、今度來たら十分云つてやらにやア』と、お貞が受けて、『借金が返せないもんだから、うちへ來ないで、こそ〳〵とほかでぬすみ喰ひをしやアがる！』

子供はふたりとも吹き出した。

『吉彌も吉彌だ、あんな奴にくッついてをらなくとも、お客さんはどこにでもある。――あんな奴があつて、うちの商賣の邪魔をするのだ。』

さう思ふのも實際だ。僕が來てからの樣子を見てゐても、料理の仕出しと云つてもさうある樣には見えないし、あがるお客はなほ更ら少ない。たよりとしてゐたのは、吉彌獨りのかせぎ高だ。毎日夕がたになると、家族は圍爐裡を取りまいて、吉彌の口のかゝつて來るのを今か今かと待つてゐる。

やがて吉彌はのッそり歸つて來た。

『何をぐづ〳〵してをつたんだ？直ぐお座敷だよ。』お貞はその割り合ひに強くは當らなかつた。

『さう。』吉彌は平氣で返事をして、爐のそばに坐つて、『いらつしやい。』僕に挨拶をしたが、まるめて持つてゐた手拭としやぼんとをどこに置からかとまごついてゐたが、それを爐のふちへ置いて、『一本、どうか』と、僕のそばの卷煙草入れに手を出した。

その時、吉彌は僕のうしろに坐つてゐるお君の鋭い目に出くはしたらしい。急に險相な顏になつて、
『何だい、そのにらみざまは？　蛙ぢやアあるめいし。手拭をこゝへ置くのがいけなけりやア、勝手に自分でどこへでもかけるがいゝ！　いけ好かない小まツちやくれだ！』
『一體どうしたんだ』と、僕が鳥渡吉彌に當つて、お君をふり返ると、お君は默つて下を向いた。
『あたいがゐるのがいけなけりやア、いつからでも出すがいゝ。へん、去年身投げをした藝者の樣な意氣地なしではない。死んだツて、化けて出てやらア。高がお客商賣の料理屋だ、今に見るがいゝ』
と、吉彌は頻りに力んでゐた。
僕は何にも知らない風で、かの女の口をつぐませると、それまでわく〳〵してゐたお貞が口を出し、
『まア、えい。まア、えい。――子供同士の喧嘩です、先生、どうぞ惡からず。――さア、吉彌、支度支度。』
『厭だが、行つてやらうか』と、吉彌はしぶ〳〵立つて、大きな姿見のある化粧部屋へ行つた。

七

『お座敷は先生だツたの、ねえ、――あんなことを云つて、どうも失禮』と、吉彌は三味線を以つて這入つて來た。

『……』僕はさッきから獨りで、どういふ風に油をしぼつてやらうかと、頻りに考へてゐたのだが、やさしい聲をして、やさしい樣子で來られては、今まで胸にこみ合つてゐたさま〴〵の忿怒のかたちは、太陽の光に當つた霧と消えてしまつた。

『お酌』と出した德利から、心では受けまいと定めてゐた酒を受けた。然し、まだ何となく胸のもつれが取れないので、碌に話をしなかつた。

『おこつてるの？』

『……』

『え丶、おこッてるの？』

『……』

『あたい知らない、わ！』

吉彌は赫と顏を赤くして、立ちあがつた。そのまゝ下へ行つて、僕のおこつてゐることを云ひ、湯屋で見たことを妬いてゐるのだと云ふことが若しも下のものらに分つたら、僕一生の男を下げるのだと心配したから、

『おい、おい！』と命令する樣な強い聲を出した。それでも、かの女は行つてしまつたが、まさかそのまゝ來ないことはあるまいと思つたから、獨りで酌をしながら待つてゐた。果して銚子を持つて直

ぐ再びやつて來た。向ふがつんとしてゐるので、今度は僕から物を云ひたくなつた。
『どうだい、僕もまた一つ蕎麥をふるまつて貰はうぢやアないか？』
『あら、もう、知つてるの？』
『へん、そんなことを知らない樣な馬鹿ぢやアねい。役者になりたいからよろしく賴むなんどと白ばツくれて、一方ぢやア、どん百姓か、肥取りかも知れねいへツぽこ旦つくと乳くり合つてゐやアがる。』
『そりやア、あんまり可哀さうだ、わ。あの人がゐなけりやア、東京へ歸れないぢやアないか、ね。』
『どうして？　さ？』
『ぢやア、誰れが受け出してくれるの？　あなた？』
『おれのはお前が女優になつてからの問題だ。受け出すのは、心配なくおツ母さんが來て始末をつけると云つたぢアないか？』
『だから、おツ母さんが來ると云つてるのでせう――』
　それで分つたが、おツ母さんの來るといふのは、女優問題でわざ〳〵來るのではなく、青木といふ男に受け出されるそのかけ合ひの爲めであつたのだ。
『あんな者に受け出されて、やツぱし、こんなしみツたれた田舍にくすぶつてしまふのだらうよ。』
『おほきにお世話だ、あなたよりもさきに東京へ歸りますよ。』

『歸つて、どうするんだ？』
『お嫁に行きますとも。』
『誰れが貴さまの樣な者を貰つてくれよう？』
『悍りながら、これでも衣物をこさへて待つてゐてくれるものがありますよ。』
『それぢやア、青木が可哀さうだ。』
『可哀さうも何もあつたもんか？　あいつもこれまでに大分金をつぎ込んだ男だから、なかなか思ひ切れる筈はない、さ。』
『どんなに馬鹿だツて、そんなのろまな男はなからうよ。』
『どうせ、おかみさんがやかましくツて、あたいをこゝには置いとけないのだから、たまに向ふから東京へ出て來るだけのことだらう、さ。』
男はそんなものと高をくゝられてゐるのかと思へば、僕はまた厭氣がさして來た。
『お嫁に行つて、妾になつて、まだその上に女優を慾張らうとは、お前も隨分ふてい奴、さ。』
『さうとも、さ、こんなにふとつたからだゞもの、かせげるだけかせぐん、さ、ね。』
『ぢやア、もう、僕は手を引かう』と、僕は坐り直した。『青木が呼びに來るだらうから下へ行け。』
『あの人は今晩來ないことになつたの――そんなに云はないで、さ、あなた』と、吉彌はあまえる樣

にもたれかゝつて、『今云つたことはうそ、みんなうそ。決心してイるんだから、役者にして頂戴よ。おツ母さんだツて、あたいから云へば、承知するに定つてる、わ。』

僕は、女優問題さへ忘れゝば、恨みもつらみもなかつたのだから、かうやつて飲んでゐるのは惡くもなかつた。

吉彌はまた早くこの厭な井筒屋を拔けて、自由の身になりたいのであつた。何んでも早く青木から身受けの金を出させようと運動してゐるらしく、先刻も亦青木の云ひなり放題になつて、その代りに何かの手筈を定めて來たものと見えた。おツ母さんから一筆青木に當てた依頼狀さへあれば、あすにも樂な身になれるといふので、僕は思ひも寄らない僞筆を賴まれた。

## 八

青木といふのは、來遊の外國人を當て込んで、箱根や熱海に古道具屋の店を開き、手廣く商賣が出來てゐたものだが、全然無筆な男だから、人の借金證書にめくら判を押した爲め、殆ど破産の狀態に落ち入つたが、この頃では多少回復がついて來たらしかつた。今の細君といふのは、やツぱり、井筒屋の藝者であつたのを引かしたのだ。二十歳の娘をかしらに既に三人の子持ちだ。はじめて家を持つた時、などは、井筒屋のお貞(その時は、まだお貞の亭主が生きてゐて、それが井筒屋の主人であつた)

の思ひやりで、臺どころ道具などを初め、所帶を持つに必要な物は殆どすべて揃へて貰ひ、飯の炊き方まで手を取らないまでにして世話して貰つたのであるが、月日の經つに從ひ、この新夫婦はその恩義を忘れたかの樣に疎くなつた。お貞は、今に至るまでも、このことを云ひ出しては、輕蔑と惡口との種にしてゐるが、この一二年來不景氣の店へ近頃最もしげ／＼來るお客は青木であつたから、陰では惡く云ふものゝ、面と向つては、進まないながらも、十分のお世辭をふり撒いてゐた。

青木は井筒屋の米櫃でもあつたし、また吉彌の旦那を以つて得々としてゐたのである。然しその實、苦しい工面をしてゐたといふことは、僕が當地へ初めて着した時尋ねて行つた寺の住職から聽くことが出來た。

住職のことはこの話にさう編み込む必要がないが、兎に角、渠は僕の室へよく遊びに來た、僕もよく遊びに行つた。醉つて來ると、隨分面白い坊主で、いろんなことをしやべり出す。それとなく、吉彌の評判を聽くと、色が黑いので、土地の人はかの女を『おからす藝者』といふことを僕に云つて聽かせたことがある。之を聽かされた日、僕は、歸つて來てから吉彌にもつと顏をみがく樣に忠告した。かの女の黑いのは寧ろ無精だからであると僕には思はれた。

『磨いて見せるほどあたいがうち込む男は、この國府津にやアゐないよ』とは、かの女がその時の返事であつた。

住職の知り合ひで、或小銀行の役員をつとめてゐる田島といふものも、亦、吉彌に熱くなつてゐることは、住職から聽いて知つてゐたが、この方に對しては別に心配するほどのこともないと見たから、僕も眼中に置かなかつた。吉彌を通じて僕に會ひたいと云ふことづてもあつたが、僕は面倒だと思つてはねつけて置いた。且どうも當地にとゞまる女ではないし、また歸つたら女優になると云つてゐるから、女房にしようなどいふ野心を起して、つまらない金は使はない方がよからうと、渠に忠告してやれと僕は住職に勸めたことがある。一方にはそんなしほらしいことを云つて、また一方では僞筆を書く、僕のその時の矛盾は——あとから見れば——甚しいもので、もう、殆ど全く目が暗んでゐたのだらう。

吉彌は、自分に取つては、最も多くの世話を受けてゐる靑木をも、あたまから見くびつてゐたのだから、平氣で僕の筆を利用しようとした。それを以つて綺麗に井筒屋を出る手つゞきをさせようとしたのは翌朝のことであるが、さう早くは成功しなかつた。

僕が晝飯を喰つてゐる時、吉彌は僕のところへやつて來て、飯の給仕をしてくれながら太い指にきらめいてゐる寶石入りの指輪を嬉しさうにいじくつてゐた。

『どうしたんだ?』僕はいぶかつた。

『人質に取つてやつたの。』

『おツ母さんの手紙がばれたんだらう――？』
『いゝえ、ゆふべこれ（と、鼻をゆびさしながら）に負けたんで、現金がないと、さ。』
『馬鹿野郎！　だまされてゐやアがる。』僕は僕のことでも頼んで出來なかつたものを責めるやうな氣になつてゐた。
『本統よ、そんなにうそがつける男ぢやアないの。』
『のろけてゐやがれ、おめえはよッぽどうすのろ藝者だ。――どれ、見せろ。』
『よッぽどするでせう？』拔いて出すのを受取つて見たが、鍍氣らしいので、
『馬鹿！』僕はまた叱りつけたやうにそれをはうり出した。
『しどい、わ。』吉彌は眞ツかになつて、恨めしさうにそれを拾つた。
『そんな物で身受けが出來る代物なら、お前はそこら當りの達磨も同前だア。』
『どうせ達磨でも、憚りながら、あなたのお世話にやアなりませんよ――ぢやア、これはどう？』帶の間から小判を一つ出した。『これなら、指輪に打たしても立派でせう？』
『どれ』と、ひツたくりかけたら、
『いやよ』と、引ツ込めて、『あなたに見せたツて、けちをつけるだけ損だ。』
『ぢやア、勝手にしやアがれ。』

僕は飯をすまし、茶をつがせて、箸をしまつた。吉彌はのびをしながら、

『あゝ、あゝ、もう、死んぢまいたくなつた。いつおッ母さんがお金を持つて來てくれるのか、もう一度手紙を出さうか知ら?』

『いゝ旦那がついてゐるのに、持つて來る筈はない、さ。』

『でも、何とやらで、いつはづれるか知れたものぢやアない。』

『それがいけなけりやア、また例のお若い人に就くがいゝや、ね。』

『それがいけなけりやア――あなた?』

『馬鹿ァ云へ。そんな腑ぬけな田村先生ぢやアねえ。――おれは受け合つて置くが、お前の樣に氣の多い奴は、結局こゝを去ることが出來ずにすむんだ。』

『いやなこツた!』立ち上つて、兩手に膳と土瓶とを持ち、『あとでいらつしやい』と云つて二階の段を降りて行つた。下では、『きイちやん、御飯』と呼びに來たお君の聲がきこえた。

## 九

その日の午後、井筒屋へ電報が來た。吉彌の母からの電報で、今新橋を立つたといふ知らせだ。僕が何氣なく行つて見ると、吉彌が子供の樣に嬉しがつてゐる樣子が、その擧動に見えた。僕が圍爐裡

のそばに坐つてゐるにも拘らず、殆ど之を意にかけないかのありさまで、たゞそわ／＼と立つたりゐたり、――少しも落ちついてゐなかつた。

　そこへ通知してあつたのだらう、青木がやつて來た。爐のそばへ來て、僕と家のものらに鳥渡挨拶をしたが、これも落ちつきのない樣子であつた。

『まだお宅へはお話してないけれど、けふ私がいよ／＼吉彌を身受け致します。おツ母さんがやつて來るのも、その相談だから、そのつもりで、吉彌に對する一切の勘定書きを拵へて貰ひませう。』

から云つて、青木が僕の方を見た時には、僕の目に一種の勝利、征服、意趣返し、または誇りとも云ふべき樣子が映つたので、ひよツとすると、僕と吉彌の關係を勘づいてゐて特に金づくで僕に對してこれ見よがしの振りをするのではないかと思はれた。

　さらに氣をまはせば、吉彌は僕のことに就いていゝ加減のうそを並べ、うすのろだとか二本棒だとか、燒き餅やきだとか云ふ嬉しがらせを云つて、青木の機嫌を取つてゐるのではないかとも思はれた。どうせ吉彌が僕との關係を正直にうち明す筈はないが、實は全く青木の物になつてゐて、かげでは、二人して僕のことを迂濶な奴、頓馬な奴、助平な奴などあざ笑つてゐるのかも知れないと、僕は非常に不愉快を感じた。

　然し、不愉快な顏を見せるのは、燒き餅と見えるから、僕の出來ないことだし、出來ないと云つて

も、全くこれを心から取り除くことは爲し得なかつた。之を耐へ忍ぶのは、僕がこれまで見せて來た快濶の態度に對しても、實に苦痛であつた。然し、その當面の苦痛は直ぐ取れた。と云ふのは、青木が直ぐ立ちあがつて、二階の方へ行つたからであるが、立ちあがつた時、かたはらの吉彌に目くばせをしたので、吉彌は僕を見て顏を赤らめたまま青木の跡について行つた。

僕は知らない風をしてお貞と相對してゐた。

『まア、吉彌さんも結構です、身受けをされたら』と、僕が煙草の煙を吹くと、

『さうだらうとは思つてをつたけれど』と、お貞は長煙管を強くはたきながら、『あいつもよツぽど馬鹿です。なけなしの金を工面して、吉彌を受け出したところで、國府津に落ちついてをる女ぢやなし、よしました置いとかうとしたところで、あいつのかみさんが承知致しません。そんな金があるなら、先づうちの借金を返すがえゝ。――先生、さうでは御座りませんか？』

『そりやア、叔母さんの云ふのも尤もです、然し、まア、男が惚れ込んだ以上は、さうしてやりたくなるんでせうから――』

『吉彌も馬鹿です。男にはのろいし、金使ひにはしまりがない。あちらに十錢、こちらに一圓、うちで渡す物はどうするのか、方々からいつもその尻がうちへまはつて來ます。』

『歸るものは歸るがえゝ、さ。』そばから、お君がくやしさうに口を出した。

『馬鹿な子ほど可愛いものだと云ふけれど、ほんとうにまたあのお袋が可愛がつてをるので御座ります。』お貞は僕にさも憎々しさうに云つた。『あんな者でも、をつて呉れゝば事がすんで行くけれど、ならなくなれば、またその代りを一苦勞せにやならん。――おい、お君、馬鹿どもにお銚子をつけてやんな。』

お君は、あざ笑ひながら、臺どころに働いてゐる母にお燗の用意を命じた。

僕は何だか吉彌もいやになつた、井筒屋もいやになつた、また自分自身をもいやになつた。

僕が歸りかけると、井筒屋の表口に車が二臺ついた。それから降りたのは四十七八の肥えた女――吉彌の母らしい――に、その亭主らしい男。母ばかりではない、おやぢもやつて來たのだ。僕はこらへてゐた不愉快の上に、また何だか、おそろしい樣な氣が加はつて、そこ〳〵に歸つて來た。

一〇

吉彌は、よもや、僕が度々勸め、かの女も十分決心したと云つたことも忘れはしまい。よしんば、親が承知しないで、その決心――それも實は當てにならない――をひる返すことがあるにしろ、一度はそれを親どもに話さないことはあるまい。話しさへすれば、親の方から僕に何とか相談があるに違ひない。僕の方に乘り氣になれば、直ぐにも來さうなものだ。いや、若し吉彌がまだ僕のことを知ら

してないとすれば、青木の來てゐるところで話し出すわけには行くまい。あいつも隨分頓馬な奴だから、青木のゐないところで、鳥渡兩親に含ませるだけの氣は利くまい。全體この話はどうなるだらうと、いろ／＼な考へやら、空想やらが僕のあたまに押し寄せて來て、たゞわく／＼するばかりで、心が落ちつかなかつた。

　窓の机に向つて、ゆふがた、獨り物案じに沈み、見るともなしにそとをながめてゐると、暫く忘れてゐたいちじくの樹が、大きなみづ／＼した青葉と結んでゐる果とを以つて、僕の勞れた目を醒まし、勞れた心を導いて、家のことを思ひ出させた。東京へ歸れば、自分の庭にもそれより大きないちじくの樹があつて、子供はいつもこッそりそのもとに行つて、果の青いうちから、竹竿を以つてそれをたたき落すのだが、妻がその音を聽きつけては、急いで出て來て、子供をしかり飛ばす。そんな時には『お父さん』の名が引き合ひに出されるが、僕自分の不平があつたり、苦痛があつたり、寂しみを感じてゐたりする時などには子供のある妻は殆ど何の慰めにもならない。一體、わが國の婦人は、外國婦人などゝ違ひ、子供を持つと、その精魂をその方にばかり傾けて、亭主といふものに對しては、たゞ義理的に操ばかりを守つてゐたらいゝと云ふ考へのものが多い。それでは、社會に活動しようとする男子の心を十分に占領するだけの手段または奮發（僕は之を眞に生きた愛情といふ）がないではないか？僕は僕の妻を半身不隨の動物としか思へないのだ。いッそ、吉彌を妾にして、女優問題などは斷

念してしまはうかと思つて見た。

さうだ、さうだ。今の僕には女優問題などは二の町のことで、もう、迅くに、僕といふ物は吉彌の胸に融けてしまつてゐるのではないか？決心を見せろとか、何とか、口では吉彌に強く出てゐるが、その實、僕の心はかの女の思ふまゝになつてゐるのではないか？いツそ、かの女の思ふまゝになつてゐるくらゐなら、六ケしい而もあやふやな問題を提出して、吉彌に敬して遠ざけられたり、その親どもにかけで嫌はれたりするよりか、全く一心をあげて、かの女の眞情を動かした方がよからうとも思つた。

僕の胸はいちじくの果よりもやはらかく、僕の心はいちじくの葉よりももろくなつてゐたのだ。

ふと浪の音が聽えて來た。泳ぎに行つて知つてゐるが、長くたわんだ、綺麗な海岸線を洗ふ浪の音だ。さツと云つては押し寄せ、すツと靜かに引きさがる浪の音が遠く聽えた。それに耳を傾けると、そのさツと云つて暫く聽えなくなる間に、僕は何だかたましひを奪はれて行く様な氣がした。それがそのまゝ吉彌の胸ではないかと思つた。

こんな下らない物思ひに沈んでゐるよりも、暫く怠つてゐた海水浴でもして、すべての考へを一新してしまはうかと思ひ附き、先づ、あぐんでゐる身體を自分で引き立て、さんざんに肘を張つて見たり、胸をさすつて見たり、腕をなぐつて見たりしたが、やツぱり氣が進まないので、ぐんにやりしたまゝ、机の上につツぷしてしまつた。

『おやツ！』かしらをあげると、井筒屋は大景氣で、三味の音がすると同時に、吉彌のうは氣な歌聲がはツきりと聽えて來た。僕は青木の顏と先刻車から出た時の親夫婦の姿とを思ひ浮べた。

## 二

その夜はまんじりとも眠れなかつた。三味の音が浪の音に聽えたり、浪の音が三味の音に聽えたり、丸で夢うつゝのうちに神經が冴えて來て、胸苦しくもあつたし、また何物かがあたまの心をこづいてゐる樣な工合ひであつた。明け方になつて、いつのまにか勞れて眠つてしまつたのだらう、目が醒めたら、もう、晝ぢかくであつた。

枕もとに手紙が來てゐたので、寢床の中から取つて見ると、妻からのである。云つてやつた金が來たかと、急いで開いて見たが、爲替も何も這入つてゐないので、文句は讀む氣にもならなかつた。それをうツちやる樣に投げ出して、床を出た。

楊枝を喰はへて、下に行くと、家のおかみさんが流しもとで何か洗つてゐた手をやすめて、
『先生、お早う御座ります』と、笑つた。
『つい寢坊をして』と、僕は平氣で井戸へ行つたが、その朝に限つて井筒屋の垣根を這入ることがこはい樣な、おツくうな樣な――實に、面白くなかつた。顏を洗ふのもそこ〳〵にして、部屋にもどり、

朝晝兼帶の飯を喰ひながら、妻から來た手紙を讀んで見た。僕の宿つてゐるのは藝者屋の隣りだとは通知してある上に、取り殘して來た原稿料の一部を僕が度々取り寄せるので、何か無駄づかひをしてゐると感づいたらしい――もつとも、僕がそんなことをしたのはこの度ばかりではないから、旅行毎に妻はその心配を豫想してゐるのだ――いゝ加減にして切りあげ、歸つて來て呉れろと云ふのであつた。

僕も、馬鹿にされてゐるのかと思ふと、歸りたくならないではなかつたが、然しまた吉彌のことをつき止めなければ歸りたくない氣もした。樣子ではどうせ見込みのない女だとは思つてゐても、どこか心の一隅から吉彌を可愛がつてやれといふ命令が下だる樣だ。どうともなる樣になれ、自分は、どんな難局に當つても、消えることはなく、却つてそれだけの經驗を積むのだと、初めから燒け氣味のある僕だから、意地にもわざと景氣のいゝ手紙を書き、隣りの藝者にはいろ〳〵世話になるが、情熱のある女で――とは、そのじつ、うそツ鉢だが――お前に對するよりもずツと深入りが出來ると、妻には云つてやつた。

その手紙を出しに行つた跡へ、吉彌はお袋をつれて僕の室へあがつてゐた。

『先生、母ですよ。』

『さう――おッ母さんですか』と、僕は挨拶をした。

『お留守のところへあがり込んで、どうも濟みませんが、娘がいろ〳〵お世話になつて』と、丁寧に

さげたあたまを再びあげるところを見ると、心持ちかは知らないが、何だか毒々しいつら附きである。からだは、その娘とは違つて、丈が低く、横にでぶ〳〵太つて、豚の體に人の首がついてゐる樣だ。それに、口は物を云ふたんびに横へまがる。癇の爲めにさう引きつるのだとは、跡でお袋みづからの說明であつた。

これで國府津へは三度目だが、なか〳〵いゝところだとか、僕が避暑がてら勉强するには持つて來いの場所だとか、遊んでゐながら出來る仕事は結構で羨ましいとか、お袋の話はなか〳〵まはりくどくつて僕の待ち設けてゐる要領に鳥渡這入りかねた。

吉彌は、たゞにこ〳〵しながら、僕の顏とお袋の顏とを順番に見くらべてゐたが、退屈さうにからだを机の上にもたせかけ、片手で机の上をいぢくり出した。そして、今しがた僕が讀んで納めた手紙を手に取り、封筒の裏の差出し人の名を見るが早いか、鳥渡顏色を變へ、

『いやアだ』と、はうり出し、『奥さんから來たのだ。』

『これ、何をします！』お袋は體よくつくろつて、『先生、この子は、ほんたうに、人さまに失禮といふことを知らないで困るんですよ。』

『なアに。』僕は受けたが、その跡はどうあしらつていゝのだか、鳥渡まごついた。止むを得ず、『實は』と、僕の方から口を切つて、若し兩親に異議がないなら、してまた本人がその氣になれるなら、吉彌

を女優にしたらどうだといふことを勸め、役者なるものは――とても、云つたからとて、分るまいとは思つたが――世間の考へてゐる樣な、またこれまでの役者身づからが考へてゐる樣な、下品な職業ではないことを簡單に說明してやつた。且、僕がやがて新らしい脚本を書き出し、それを舞臺にのぼす時が來たら、俳優の――殊に女優の――二三名は少くとも抱へて置く必要があるので、その手はじめになるのだといふことをつけ加へた。

『そりやア御もつともです』と、お袋は相槌を打つて、『そのことはこの子からも聽きましたが、先生が何でもお世話して下さることで、またこの子の名をあげることであるなら、私どもには不承知なわけは御座いません。』

『お父さんの考へはどうでせう？』

『私どものは、なァに、もう、どうでもいゝので、始終私が家のことをやきもき致してゐまして、心配こそ掛けることは御座いましても、一つとして賴みにならないので御座いますよ。私は、もう、獨りで、うちのことやら、子供のことやらをあくせくしてゐるので御座います。』

『そりやア、大抵なことぢやアないでせう。――吉彌さんも少しおッ母さんを安心させなきやア――』

『この子がまた、先生、一番意氣地なしで困るんですよ。』お袋は念入りに肩を動かして、さも性根なしとのゝしるかの樣子で女の方を見た。『何でも私に寄りかゝつてゐさへすればいゝと思つて、だゞッ

子の樣に來てくれい、來てくれいと云つてよこすんです。』

『だツて、來てくれなきやア仕方がないぢやアないか？』吉彌はふくれツ面をした。『おツ母さんが來たら、方をつけるといふから、早く來いと云つてやつたんぢやアないか？』

『おツ母さんだツて、いろんな用があるよ。お前の妹だツて、また公園で出なけりやアならなくなつたし、さう〳〵お前のことばかりにかまけてはゐられないよ。半玉の時ぢやアあるまいし、高が五十圓か百圓の身受け相談ぐらゐ、相對づくでも方が附くだらうぢやアないか？お前よりも妹の方が餘程氣が利いてるよ。』

『ぢやア、勝手にしやアがれ。』

『あれですもの、先生、ほんとに困ります。これから先生に十分仕込んで戴かなければ、丸でお役に立ちませんよ。』

『なアに、役者になるには年が行き過ぎてゐるくらゐなのですから、いよ〳〵決心してやるなら、自分でも考へが出るでせう。』

『きイちやん、しツかりしないと行けませんよ』と、お袋はそれでも娘には折れてゐる。

『あたいだツて、たましひはあらア、ね。』吉彌は僕の膝に來て、その上に手枕をして、『あたいの一番好きな人』と、僕の顏を仰向けに見あげた。

僕はきまりが惡い氣がしたが、お袋にうぶな奴と見拔かれるのも不本意であつたから、そ知らぬ振りに見せかけ、

『お父さんにもお目にかゝつて置きたいから、夕飯を向ふのうなぎ屋へ御案内致しませうか？　おツ母さんも一緒に來て下さい。』

『それは何よりの好物です。――ところで、先生、私はこれでもなか／＼苦勞が絶えないんで御座いますよ。娘からお聽きでも御座いませうが、藝者の桂庵といふ仕事は、並み大抵の人には出來ません。二百圓、三百圓、五百圓の代物が二割、三割になるんですから、實入りは惡くもないんですが、あツちこツちへ驅けまはつて買ひ込んだ物を注文主へつれて行くと、あれは善くないから取りかへてくれろの、これは惡くもないがもツと安くしてくれろのと、間に立つものは毎日氣の休まる時が御座いません。それが田舍行きとなると、幾度も往復しなけりやアならないことが御座います。今度だツてもこの子の代りを約束しに來たんですよ、それでなければ、どうして、このせちがらい世の中で、ぼんやり出て來られますものですか？』

『代りなど拵へてやらないがいゝや、あんな面白くもない家に』と、吉彌は起きあがつた。

『それが、ねえ、先生、商賣ですもの。』

『そりやア、御もつともで。』

『で、御承知でせうが、青木といふ人の話もあつて、けふ、もう、直きに來て、いよ〳〵の決着が分るんで御座いますが、それが定らないと、第一、この子のからだが拔けませんから、ねえ。』

『さうですとも、私の方の問題は役者になればいゝので、吉彌さんがその青木といふ人と以後も關係があらうと、なからうと、それは問ふところはないのです』と、僕の言葉は、まだ金の問題には接近してゐなかつただけに、うはべだけは、兎に角、綺麗な物であつた。

『然し、この子が役者になる時は、先生から入費は一切出して下さる樣になるんでせう、ね』と、お袋はぬかりなく念を押した。

『そりやア、さうですとも。』僕は勢よく答へたが、實際、その時になつての用意があるわけでもないから、少し引け氣味があつたので、思はず知らず、『その時ア私がどうともして拵へますから、御安心なさい』と附け加へた。

僕はなる樣になれといふ氣であつたのだ。

お袋は、それから、なほ世間話しを初める、その間々にも、僕をおだてる言葉を絕たないと同時に、自分の自慢話しがあり、金はたまらないが身に絹物をはなさないとか、作者の誰れ彼れ（その芝居ものと僕が同一に見られるのを頗る遺憾に思つたが）はちよく〳〵遊びに來るとか、商賣がらでもあるが國府津を初め、日光、靜岡、前橋などへも旅行した事があるとかしやべつた。そのうち解けた樣な、

また一物ある様な腹がまへと、しやべる度毎に歪む口つきとが、僕にはどうも氣になつて、吉彌はあんな母親の拵へた子かと、またまた厭氣がさした。

## 二

もう、ゆふ飯時だからと思つて、僕は家を出で、井筒屋のかど口から鳥渡吉彌の兩親に聲をかけて置いて、一足さきへうなぎ屋へ行つた。うなぎ屋は筋向ふで、時々行つたこともあるし、またそこのかみさんがお世辭者だから、僕は遠慮しなかつた。

『おかみさん』と、這入つて行つて、『けふはお客が二人あるから、ね。』

『あの、先刻、吉彌さんからそれは承つて居ります』と、おかみさんは襷の一方をはづした。

『もう、通知してあるのか？　氣の早い奴だ、なア』と、僕は二階へあがりかけた。

おかみさんは、どうしたのか、あわてゝ僕を呼び止め、いつもと違つた下座敷へ案内して、

『暫くお待ちなさつて――二階が直ぐ明きますから。』

『お客さんか、ね』と、僕は何氣なくそこへ落ちついた。

かみさんが出て行つた跡で、ふと氣がつくと、二階に吉彌の聲がしてゐる。藝者が料理屋へ呼ばれてゐるのは別に不思議はないのだが、實は吉彌の自白に據ると、こゝのかみさんが竊に取り持つて、

吉彌とかの小銀行の田島とを近頃接近させてゐたのだ。田島は之が爲めにこの家に大分借金が出來たし、また他の方面でも負財の爲めに頸がまはらなくなつてゐる。僕が吉彌をなじると、
『お金こそ使はしてはやるが』と、かの女は答へた。『田島さんとほかの關係はない。考へて見ても分るだらうぢやアないか、奥さんになつてくれいツて、若しなつて國府津にゐたら、あツちからもこツちからもあたいを闇打ちにする人が出て來るかも知れやアしない、わ。』
『お前はさう方々に罪をつくつてゐるのか』と、僕はつツ込んだことがある。が、兎に角、この地にとゞまつてゐる女でないことだけは分つてゐたから、僕の疑ひは多少安心な方で、既にかの住職にも田島に對する僕の間接な忠告を傳へたくらゐであつた。然し、その後も、毎日または隔日には必らず會つてゐる樣子だ。かうなれば、男の方では段々燒けッ腹になつて來る上、吉彌の勘定通り、ます／＼思ひ切れなくなるのは事實だ。それに、或日、吉彌が僕の二階の窓から外をながめてゐた時、
『ちよいと、ちよいと』と、手招ぎをしたので、僕は首を出して、
『なんだ』と、大きな聲を出した。
『靜かにおしよ』と、かの女は僕を制して、『あれが田島よ。』と、小聲。
成る程、鳥渡小意氣だが、にやけた樣な男の通つて行くよこ顔が見えた。男ツ振りがいゝとは兼て聽かされてゐたが、色の白い、肌のすべ／＼してゐさうな男であつた。その時、僕は、毛穴の立つてゐ

るおからす藝者を男にしてしまつても、田島を女にして見たいと思つたくらゐだから、僕以前は勿論、今とても、吉彌が實際かれと無關係でゐるとは信じられなくなつた。どうせ、貞操などをかれこれ云ふべきものでないのは勿論のことだが、青木と田島とが出來てゐるのに僕を受け、また僕と青木とがあるのに田島を棄てないなどゝ考へて來ると、ひいき目があるだけに、僕は旅藝者の腑甲斐なさをつくぐ思ひやつたのである。

その田島がてツきり來てゐるに相違ないと思つたから、僕はこツそり二階のはしご段をあがつて行つた。八疊の座敷が二つある、そのとツ附きの方へ這入り、立てかけてあつた障子のかげに隱れて耳をそば立てた。

『おツ母さんは、ほんとに、どうする氣だよ？』

『どうするか分りやアしない。』

『田村先生とは實際關係がないか？』

『また、しつツこい！――あつたら、どうするよ？』

『それぢやア、青木が可哀さうぢやアないか？』

『可哀さうでも、可哀さうでなくツても、さ、あなたのお腹はいためませんよ。』

『ほんとに役者になるのか？』

『なるとも、さ。』
『なつたツて、お前、直きに役に立たないツて、棄てられるに定つてるよ。その時アまたお前の厭な藝者にでもなるよりほかアなからうぜ。』
『そりやア、あたいも考へてまさア、ね。』
『そのくらゐなら、初めから思ひ切つて、おれの云ふ通りになつて呉れよ。』
　田島の聲は、見ず轉藝者を馬鹿にしてゐる樣な句調ながら、まんざら全く浮薄の調子ではなかつた。また、出來ることなら吉彌を引きとめて、自分の物にしたいといふ相談を持ちかけてゐたらしい。殊に最後の文句などには、深い呼吸が伴つてゐる樣に聽えた。その『可哀さうぢやアないか』は、青木を出しに田島自身のことを云つてゐたのだらうが、吉彌は何の思ひやりもなく、大變強く當つてゐた。かの女の淺墓な性質としては、もう、國府津に足を洗ふのは――果してけふ、あすのことだか、どうだか分りもしないのに――大丈夫と思ひ込み、跡は野となれ、山となれ的に樂觀してゐて、田島に對し若し未練がありとすれば、たゞ行きがけの駄賃として二十圓なり、三十圓なりの餞別を貰つてやらうぐらゐだらう。と、僕には讀めたっ。
『あたい、ほんとうはお嫁に行くのよ、役者になれるか、どうだか知れやアしないから』などゝ、かの女は云はないでもいゝことをしやべつた。

『どういふ人にだ？』

『區役所のお役人よ——衣物など拵へて、待つてゐるの。』

僕は隣室の狀景を想像する心持ちよりも、寧ろこの一言にむかッとした。之が果して事實なら——して、『お嫁に行くの』はさきに僕も聽いたことがあるから、——現在、吉彌の堅親は　その定つた話しをもたらしてゐるのだと思はれた。あの腹の黑い母親のことであるから、それ位のたくらみは爲かねないだらう。

『どうせ、二三十圓の月給取りだらうが、そんな者の嬶アになつてどうするんだ？』

『お前さんの樣な借金持ちよりやアいゝ、わ。』

『馬鹿ア云へ！』

『子供の時から知つてる人で、前からあたいを貰ひたいッて云つてたの——月給は四十圓でも、お父さんの家がいゝんだから——』

『家はいゝかも知れないが、月給のことはうそだらうぜ——然しだ、さうなりやア、おれ達アみな恨ッこなしだ。』

『ぢやア、さうと定めませうよ。』吉彌はうるささうに三味線をじやん／＼引き出した。

『よせ、よせ！』と、三味線をひッたくつたらしい。

『ぢやア、もう、歸つて頂戴よ、何度も云ふ通り、貰ひがかゝつてゐるんだから。』
『歸すなら、歸す樣にするがいゝ。』
『どうしたらいゝのよ？』
『かうするんだ。』
『いたいぢやアないか？』
『靜かにせい！』この一言の勢ひは、拔き身を以つて這入つて來た强盜ででもあるかの樣であつた。
『…………』僕はゐたゝまらないで二階を下りて來た。

暫くしてはしご段をとん／＼おりたものがあるので、下座敷からちよツと顔を出すと、吉彌が便所に這入るうしろ姿が見えた。

誰れにでもあゝだらうと思ふと、今更らの樣にあの粗い肌が聯想され、僕自身の身の毛もよだつと同時に、自分の心が既に毛深い畜生になつてゐるので、その鋭い鼻がまた別な畜生の尻を嗅いでゐた樣な氣がした。

## 一三

田島が歸ると同時に、入れ代つて、吉彌の兩親が這入つて來た。

『明きましたから、どうぞ二階へ』と、今度はこゝのかみさんから通知して來たので、僕は室を出て、またはしご段をのぼらうとすると、その兩親に出くわした。

『お言葉にあまえて』と、お袋は愛相よく、『先生、そろつてまゐりましたよ。』

『さア、おあがんなさい』と、僕はさきに立つて二階の奥へ通つた。

　おやぢといふのは、お袋とは違つて、人のよさゝうな、その代り甲斐性のなさゝうな、いつもふところ手をして遊んでゐればいゝといふ樣な手合ひらしい。男ツ振りがいゝので、若い時は、お袋の方が惚れ込んで、自分のかせぎ高をみんな男の賭博の負けにつぎ足しても、なほ他の女に取られまい、取られまいと心配したのだらうと思はれる。年が寄つても、その習慣が直らないで、矢ツぱりお袋にばかり世話を燒かせてゐるおやぢらしい。下駄の臺を拵へるのが仕事だと聽いてはゐるが、それも大して骨折るのではあるまい。(一つ忘れてゐたが、お袋の來る時には、必らず僕に似合ふ下駄を持つて來ると云つてゐたが、そのみやげはない樣だ。)初對面の挨拶も出來かねた樣なあり樣で、ただ窮屈さうに坐つて、申し譯けの膝ツこを並べ、尻は少しも落ちついてゐない樣子だ。

『お父さんの風ツたら、ありやアしない。』お袋が斯う云ふと、

『おりやアいつも無禮講で通つてるから』と、おやぢはにやりと赤い齒ぐきまで出して笑つた。

『どうか、おくづしなさい。御遠慮なく』と、僕は先づ膝をくづした。

『お父さんは』と、お袋は却つて無遠慮に云つた、『まア、下駄職に生れて來たんだよ、毎日、あぐらをかいて、臺に向つてればいゝんだ。』

『さう馬鹿にしたもんぢやアないや、ね』と、おやぢはあたまを撫でた。

『御馳走をたべたら、早く歸る方がいゝよ』と、吉彌も笑つてゐる。

をかしくないのは僕だけであつた。三人に酒を出し、御馳走を供し、その上三人から愚弄されてゐるのではないかと疑へば、このまゝ何も云はないで立ち歸らうかとも思はれた。まして、今しがたまでのこの座敷のことを思ひ浮べれば、何だか胸持ちが惡くなつて來て、自分の身までが全くきたない毛だ物になつてゐる樣だ。香ばしい筍の皿も、僕の鼻へは、かの、特に、吉彌が電球に『やまと』の袋をかぶせた時の薄暗い室の、薄暗い肌のにほひを運んで、われながら箸がつけられなかつた。

僕の考へ込んだ心は急に律僧の如く精進癖にとぢ込められて、甘い、樂しい、愉快だなどいふあかるい方面から、全く遮斷された樣であつた。

ふと、氣がつくと、まだ日が暮れてゐない。三人は遠慮もなくむしや〱やつてゐる。僕は、また、猪口を口へ運んでゐた。

『先生は御酒ばかりで』と、お袋は座を取り成して、『ちツともおうなは召しあがらないぢやア御座いませんか？』

『やがてやりませう――まア、一杯、どうです、お父さん』と、僕は銚子を向けた。

『もう、先生、よろしう御座いますよ。うちのは二三杯頂戴すると、あの通りになるんですもの。』

『然し、まだいゝでせう――？』

『いや、もう、この通り』と、おやぢは今まで辛抱してゐた膝ツこを延ばして、ころりと横になり、

『あゝ、もう、から云ふところで、かうして、お花でも引いてゐたら申し分はないが――』

『お父さんは直きあれだから困るんです。お花だけでも、先生、私の心配は絶えないんですよ。』

『さう云つたツて、ほかにおれの樂しみはないから仕やうがない、さ。』

『あの人も矢ツぱし來るの？』吉彌がお袋に意味ありげの目を向けた。

『あゝ、來るよ。』お袋は輕く答へて、僕の方に向き直り、『先生、お父さんはもう歸していいでせう？』

『そこは御隨意になすつて貰ひませう。――御窮屈なら、お父さん、おさきへ御飯を持つて來させますから』と、僕は手をたゝいて飯を呼んだ。

『お父さんは御飯を頂戴したら、直ぐお歸りよ』と、お袋はその世話をしてやつた。

僕は女優問題など全く撤回しようかと思つたくらゐだし、こんなおやぢに話したツて要領を得ないと考へたので、いゝ加減のところで切りあげて置いたのだ。

飯を濟ましてから、獨りで歸つて行くのらくらおやぢの姿がはしご段から消えると、僕の目に

入れ代つて映じて來るまぼろしは、吉彌の所謂『あの人』であつた。ひよツとしたら、これが乃ち區役所の役人で、吉彌の歸京を待つてゐる者――たび〳〵花を引きに來るので、おやぢのお氣に入りになつてゐるのかも知れないと推察された。

一四

その跡に殘つたのはお袋と吉彌と僕との三人であつた。

『この方が水入らずでいゝ、わ』と、お袋は娘の顏を見た。

『青木は來たの？』吉彌はまた母の顏をぢツと見つめた。

『あゝ、來たよ。』

『相談は定つて？』

『甘く行かないの、さ。』

『あたい、厭だ、わ！』吉彌は顏いろを變へた。『だから、しツかりやつて頂戴と云つて置いたぢやアないか？』

『さう無氣になつたツて仕やうがない、わ、ね。おツ母さんだツて、拔かりはないが、向ふがまだ險呑がつてゐりやア、考へるのも當り前だア、ね。』

『何が當り前だア、ね？　初めから引かしてやると云ふんで、毎月、毎月妾の樣にされても、成りたけお金を使はせまいと、僅かしか小遣も貰はなかつたんだらうぢやないか？　人を馬鹿にしやアがつたら、承知アしない、わ。あのがらくた店へ怒鳴り込んでやる！』
『さう、目の色まで變へないで、さ——先生の前ぢやアないか、ね。實は、ね、半分だけあす渡すと云ふんだよ。』
「半分ぐらゐ仕やうがないよ、しみツたれな！」
『それがかうなんだよ、お前を引かせる以上は青木さん獨りを思つてゐて貰ひたい——』
『そんなおたんちんぢやアないよ。』
『まア、お聽きよ』と、お袋は招ぎ猫を見た樣な手眞似をして娘を制しながら、『さう來るのア向ふの順ぢやアないか？　何でもはい〳〵ツて云つてりやいゝんだア、ね。——「そりやァ御もつとも」と返事をすると、ね、お前のことに附いて少し疑はしい點があると——』
『先生にやァ關係がないと云つてあるのに。』
『いゝえ、この方は大丈夫だが、ね、それ——』
『田島だツて、もう、迚くに手を切ッたつて云つてあるよ。』
『畜生！』僕は腹の中で叫んだ。

『それが、お前、燒き餅だア、ね』と、お袋は、實際のところを承知してゐるのか、ゐないのか分らないが、そらとぼけた樣な笑ひ顏。『つとめをしてゐる間は、お座敷へ出るにやア、こツちからお客の好き嫌ひはしてゐられないが、そこは氣を利かして、さ――ねえ、先生、さうぢやア御座いませんか？』

『そりやア、さうです』と、僕は進まないながらの返事。

『實は、ね』と、吉彌はしまりなくにこつき出して、『こんなことがあつたのよ。このお座敷に青木さんがゐて、下に田島が來てゐたの。あたい、兩方のかけ持ちでせう、上したの燒き持ち責めで困つちまつた、わ。田島がわざと跡から攻めかけて來て、燒け飲みをしたんでせう、醉ツぱらツちまつて聽えよがしに歌つたの、「青木の馬鹿野郎」なんかんて。青木さんは年を取つてるだけにおとなしいんで、さきへ歸つて貰つた、わ。』

　かう話しながらも、吉彌はたツた今あつたことを僕が知つてゐるとは思はないので、十分僕の氣を許してゐる樣子であつた。僕は、吉彌とお袋との鼻をあかす爲めに、すツぱり腹をたち割つて、僕の思ひ切りがいゝところを見せてやりたいくらゐであつたが、しみツたれた男が二人も出來てゐるところへ、また一人加はつたと思はれるのが厭さに、何のこともない風で通してゐた。

『そんなことのない樣にするのが』と、お袋は僕に向つた、『藝者のつとめぢやア御座いませんか？』

『大きにさうです、ね。』僕は斯う答へたが、心では、『藝者どころか、女郎や地獄の腕前もない奴だ』

と、卑しんでゐた。

『あたいばかり責めたツて、仕やうがないだらうぢやないか？』吉彌はそのまなじりをつるしあげた。
それに、時々、かの女の口が歪む工合は、お袋さながらだと見えた。

『まア、すんだことはいゝとして、さ』と、お袋は娘をなだめる樣に、『これから暫く大事だから、よく氣をおつけなさい。――先生にも賴んで置きたいんです、の。如才は御座いますまいが、青木さんが、井筒屋の方を濟ましてくれるまで、――今月の末には必らずその殘りを渡すと云ふんですから――この月一杯は大事な時で御座います。お互ひに、ね、向ふへ感づかれない樣に――』と、僕と吉彌とを心配さうに見まはした樣子には、さすが、親としての威嚴があつた。

『そりやア勿論です』と、僕はまた答へた。僕は棄てツ鉢に飲んだ酒が十分まはつて來たので、張り詰めてゐた氣も急にゆるみ、厭なにほひも身におぼえなくなり、年取つた女がゐるのは自分の母の如く思はれた。また、吉彌の坐つてゐるのがふら／＼動く樣に見えるので、恰も遠いところの雲の上に、普賢菩薩が住してゐるやうで、その醉ひの出た爲めに、頰の白粉の下から、ほんのり赤い色がさす樣子など、如何にも美しくツて、可愛らしくツて、僕の十四五年以前のことを思ひ出さしめた。

僕は十四五年以前に、現在の妻を貰つたのだ。僕よりも少し年上だけに、不斷にしツかりしたところのある女だが、結婚の席へ出た時の妻を思へば、一二杯の祝盃に顏が赤くなつて、その場にゐたゝ

まらなくなつた程の可愛らしい花嫁であつた。僕は、今、目の前にその昔の妻のおもかげを見てゐた。
　そのうちにランプがついたのに氣がつかなかつた。
『先生はひどく考へ込んでいらッしやるの、ね』と、お袋の言葉に僕は樂しい夢を破られた樣な氣がした。
『大分醉つたんです』と、僕はからだを横に投げた。
『きイちやん』と、お袋は娘に目くばせをした。
『しツかりなさいよ、先生。』吉彌は立つて來て、僕に酌をした。かの女は僕を、もう、手のうちにまるめてゐると思つてゐたのか、たゞ氣儘勝手に箸を取つてゐて、お酌はお袋に殆どまかしツ切りであつたのだ。
『きイちやん、お彈きよ――先生、少し陽氣に行きましようぢやア御座いませんか？』
　吉彌のじやん／＼が初まつた。僕は聽きたくもないので、
『まア、お待ち』と、それを制し、『まだお前の踊りを見たことがないんだから、おッ母さんに彈いてもらつて、一つ僕に見せて貰はう。』
『暫く踊らないんですもの』と、吉彌は、僕を見て、膝に三味をのせたまゝでからだを横にひねつた。
『…………』僕は年の行かない娘が踊りのお稽古の行きや歸りにだゞを捏る時のやうすを聯想しながら、

『おぼえてゐる物をやつたらいゝぢやないか？』

『だツて』と、またからだを振ると同時に、左の手を天心の方に行かせて、暫く言葉を切つたが、――

『こんな大きななりぢやア踊れない、わ。』

『お酌のつもりになつて、さ』とは、僕が、かの女のます〳〵無邪氣な樣子に引き入れられて、思はず出した言葉だ。

『さういふ注文は困る、わ。』吉彌は訴へる樣にお袋をながめた。

『ぢやア』と、お袋は娘と僕とを半々に見て、『私に彈けなくツても困るから、やさしい物を一つやつて御覽。――「わが物」がいゝ、傘は持つてることにして、さ。』三味線を娘から受け取つて、調子を締めた。

『まるで子供の樣だ、わ。』吉彌ははにかんで立ち上り、身構へをした。

お袋の絲はなか〳〵しツかりしてゐる。

『わがーアものーオと』の歌につれて、吉彌は踊り出したが、踊りながらも、

『何だかきまりが惡い、わ』と云つた。

そのはにかんでゐる樣子は、今日まで多くの男をだまして來た女とは露ほども見えないで、淸淨無垢の乙女がその衣物を一枚々々剝がれて行く樣な優しさであつた。僕が畜生とまで嗅ぎつけた女にそ

んな優しみがあるのかと、上手下手を見分ける餘裕もなく、僕はただぼんやり見惚れてゐるうちに、『待つゥ身にイ、つらーアき、置きイごたーアつ』も通り拔けて、終りになり、踊り手は疊に手を突いて、しとやかにお辭儀をした。斯うして踊つて來た時代もあつたのかと思ふと、僕はその頸ツ玉に抱きついてやりたい程であつた。

『もう、御免よ。』吉彌は初めて年增にふさはしい發言をして自分自身の膳にもどり、猪口を拾つて、

『おツ母さん一杯お駄賃に頂戴よ。』

『さア、僕が注いでやらう』と、僕は手近の銚子を出した。

『それでも』と、お袋は三味を横へおろして、

『よく覺えてゐるだけ感心だ、わ。――先生、この子がおツ師匠さんのところへ通ふ時ア、困りましたよ。自分の身に附くお稽古なんだに、人の仕事でもして來た樣にお駄賃を吳れいですもの。今以てその癖は直りません、わ。何だといふと、直ぐお金を送つて吳れい――』

『さうねだりやアしない、わ』と、吉彌はほゝゑんだ。

『…………』また金の話かと、僕はもうそんなことは聽きたくないから、直ぐみんなで飯を喰つた。

## 一五

お袋は一足さきへ歸つたので、吉彌と僕とのさし向ひだ。かうなると、こらへてゐた胸が急にみなぎつて來た。

『先生にかうおごらして濟まない、わ、ねえ』と、可愛い目つきで吉彌が僕をながめたのに答へて、

『馬鹿！』と一聲、僕は強く重い鬱忿をあびせかけた。

『そのこはい目！』暫く吉彌は見つめてゐたが、『どうしたのよ』と、かほをしがめて僕にすり寄つて來た。

『えゝツ、穢れる、わい！』僕はこれを押し除けて、にらみ附け、『知らないと思つて、どこまで人を馬鹿にしやアがるんだい？　さツき、おれがこゝへ來るまでのこゝのざまツたら何だ？』

吉彌は鳥渡ぎやふんとした樣であつたが、ゐずまひを直して、

『聽いてたの？』と、きまりが惡い樣子。

『聽いてたどころか、隣りの座敷で見てゐたも同前だい！』

『あたい、何も田島さんを好いてやしない、わ。』

『もう、好く好かないの問題ぢやアない、病氣がうつる問題だよ。』

『そんな物ア迅くに直つてる、わ。』

『分るもんか？　貴樣の口のはたも、どこの馬の骨か分りもしない奴の毒を受けた結果だぞ。』

云つて置かなかつたが、かの女の口のはたの爛れが直つたり、出來たりするのは、僕の初めから氣にしてゐたところであつた。それに、時々、その活き〳〵した目がかすむのを井筒屋のお貞が惡口で、黴毒性のそこひが出るのだと聽いてゐたのが、今更ら思ひ出されて、僕はぞッとした。

『寬恕して頂戴よ』と、僕の胸に身を投げて來た吉彌をつき拂ひ、僕はつッ立ちあがり、『おッ母さんにさう云つて貰はう、僕も男だから、おッ母さんに約束したことは、お前の方で筋道さへ踏んで來りやア、必らず實行する。然しお前の身の腐れはお前の魂から入れ變へなけりやア、到底、直りッこはないんだ。――これは何も燒き餅から云ふんぢやアない、お前の爲めを思つて云ふんだ。』

怒りはしたものゝ、僕は淚がこぼれた。それとなく、ハンケチを出して目を拭きながら座敷を出た。出てから鳥渡ふり返つて見たが、かの女は――分つたのか、分らないのか――突き放されたまゝの位置で、疊に左の手を突き、その方の袂の端を右の手で口へ持つて行つた。目は疊に向いてゐた。

その翌日、午前中に、吉彌の兩親はいとま乞ひに來た。僕が吉彌をしかりつけた――これを吉彌はお袋に告げたか、どうか――に對する挨拶などは、別に無かつた。兎に角、僕は一種不愉快な厭迫を免れた樣な氣がして、女優問題をも成るべく僕の心に思ひ浮べない樣にしようと定めた。且、これからは僕から弱く出てかれこれ云ふには及ばない、吉彌に性根があつたら、向ふから何とか云つて來るだらう、それを待つてゐるに如くはないと考へた。

『先生も御如才はないでしようが――この月中が肝心ですから、ね。』と、お袋の別れの言葉はまた斯うであつた。

『無論ですとも』と答へたが、僕はあとで無論もくそもあつたものかと云ふ反抗心が起つた。そして、それでもなほ實は、吉彌がその兩親を見送りに行つた歸りに、立ち寄るのが本統だらうと、外出もしないで待つてゐたが、吉彌は來なかつた。晝から來るかとの心待ちも無駄であつた。その夜もとうとう見えなかつた。

　そのまたあくる日も、日が暮れるまで待つてゐたが、來なかつた。もうお座敷に行つたらうから駄目だと、――そして、井筒屋はやらないが、井筒屋の獨り藝者は外へ出てはやりツ子なんだから、――あきらめて、書見でもしようと、半分以上は讀み終つてあるメレジコウスキの小說『先驅者』を手に取つた。國府津へ落ちついた當座は、面白半分一氣に讀みつづけて、そこまでは進んだが、僕の氣が浮かれ出してからは、殆ど全く之を忘れてゐたあり樣であつたのだ。この書の主人公レオナドダヰンチの獨身生活が今更らの如く懷しくなつた。

　仰向けに枕して讀みかけたが、ふと氣がつくと、月が座敷中にその光を廣げてゐる。おもてに面した方の窓は障子をはづしてあつたので、これは危險だといふ考へが浮んだ。こないだから持つてゐた考へだが、――吉彌の關係者は幾人あるか分らないのだから、僕は旅の者だけに、最も多くの恨み

を買ひ易いのである。いつ如何なる者から闇打ちを喰らはされるやも知れない。人通りのない時、よしんば出來心にしろ、石でもほうり込まれ、怪我でもしたら詰らないと思ひ、起きあがつて、窓の障子を塡め、左右を少しあけて置いて、再び枕の上に仰向けになつた。

心が散亂してゐて一點に集らないので、眼は開いたページの上に注がれて、何を讀んでゐるのか締りがなかつた。それでもじツと讀みつづけてゐると、新らしい事件は出て來ないで、レオナドと吉彌とが僕の心をかはる〴〵通過する。一方は溢れるばかりの思想と感情とを古典的な行動に包んだ老獨身者のおもかげだ。また一方はその性情が全く非古典的である上に、無神經と思はれるまでも心の荒んだ賣女の姿だ。この二つが、まはり燈籠の樣に僕の心の目にかはる〴〵映つて來るのである。

一方は、燃ゆるが如き新情想を多能多才の器に包み、一生の寂しみをうち籠めた戀をさへ云ひ現はし得ないで終つてしまつた。その生涯は如何にも高尚である、典雅である、純潔である。僕が家庭の面倒や、女の關係や、またさう云ふことに附隨して來るさま〴〵の苦痛と疲勞とを考へれば、いツそのこと、レオナドの樣に、獨身で、高潔に通した方が幸福であつたかと、何となく懷しい樣な氣がする。然し、また考へると、高潔でよく引き締つた半僧生活は、拾數年前、既に、僕は思想と實驗との上で通り拔けて來たのだ。そんな初々しいことで、現在の僕が滿足出來ないのは分り切つてゐる。僕の神經はレオナドの神經より五倍も十倍も過敏になつてゐるだらう。

かう思ふと、また、古寺の墓場の樣に荒廢した胸の中のにほひがして來て、そのくさい空氣に、吉彌の姿が時を得顏に浮んで來る。そのなよ／＼した姿のほゝゑみが血球となつて、僕の血管を循環するのか、僕は筋肉がゆるんで、がツかり疲勞し、手も不斷よりは重く、足も常よりは倦怠いのをおぼえた。

僕の過敏な心と身體とは荒んでゐるのだ。延びてゐるのだ。固まつてゐた物が融けて行く樣に、立ち据わる力がなくなつて、下へ／＼と重みが加はつたのだらう。墮落、荒廢、倦怠、疲勞――僕は、デカダンと云ふ分野に放浪するのを、寧ろ僕の誇りとしようといふ氣が起つた。

『先驅者』を手から落したら、レオナドはゐなくなつたが、吉彌ばかりはまだ僕を去らない。かの女は無努力、無神經の、たゞ形ばかりのデカダンだ、僕等の考へとは違つて、實力がない、中味がない、本體がない。かう思ふと、これも亦厭になつて、僕は半ばからだを起した。さうすると、吉彌も亦僕の心眼を往來しなくなつた。

暑くツて堪らないので、無やみにうちはを使つてゐると、どこからか、

『寛恕して頂戴よ』といふ優しい聲が聽える。然しその聲の主はまだ來ないのであつた。

## 一六

僕が強く當つたので、向ふは燒けになり、『ぢやア勝手にしろ』といふ氣になつたのではあるまいか？　それなら、僕から行かなければ永劫に會へる筈はない。會はないなら、會はない方が僕に取つてもいゝのだが、まさか、向ふはさうまで思ひ切りのいゝ女でもなからう。あの馬鹿女郎め、今頃はどこに何をしてゐるか、一つ探偵をしてやらうと、うちはを持つたまゝ、散歩がてら、僕はそとへ出た。

井筒屋の店さきには、吉彌が見えなかつた。

寢ころんでゐたせいもあらう、あたまは重く、目は充血して腫れぼッたい。それに、近頃は運動もしないで、家にばかり閉ぢ籠り、――机に向つて考へ込んでゐたり――それでなければ、酒を飲んでゐたり――ばかりするのであるから、足がひよろ〳〵してゐる。涼しく吹いて來る風に、僕はからだが浮きさうであつた。

でこぼこした道を踏みしめ、踏みしめ、僕は歩いてゐたが、街道を通る人かげがすべて僕の敵であるかの樣に思はれた。月光に投げ出した僕の影法師も、僕には何だかおそろしかつた。

成るべく通行者に近よらない樣にして、僕は先づ例のうなぎ屋の前を通つた。三味の音や歌聲は聽えるが、吉彌のではない。ゐないのか知らんと、ほかに當てのある近所の料理屋の前を二三軒通つて見た。そこいらにもゐさうもない樣な氣がした。

青木の本陣とも云ふべきは、二三丁さきの里見亭だ。渠は、吉彌との關係上初めは井筒屋のお得意であつたが、借金が嵩んで敷居が高くなるに從つて、かのうなぎ屋の常客となつた。然し、そこのおかみさんが吉彌を田島に取り持つたことが分つてから、また里見亭に轉じたのだ。そこでしくじつたら、また、もう少しかけ隔つた別な店へ移るのだらう。はたから見ると、段々退却して行くあり樣だ。

吉彌の話したことに據ると、青木は、渠自身が、

『無學な上に年を取つてゐるから、若いものに馬鹿にされたり、また、自分が一生懸命になつてゐる女にまでも謀叛されたりするのだ』と、男泣きに泣いたさうだ。

或時など渠は、思ひ物の心を試めさうとして、吉彌に、その同じ商賣子で、ずツと年若なのを――吉彌の合ひ方に呼んでゐたから――取り持つて見よと命じた。吉彌は平氣で命令通り向ふの子を承知させ、青木をかけへ呼んでその旨を報告した。

『姉さんさへ承知ならツて――大丈夫よ。』

『………』青木は、然しさう聽いて却つて之を殘念がり、實は本意でない。お前はそんなことをされても何ともないほどの薄情女かと、立つてゐる吉彌の肩をしツかりいだき締めて、力一杯の誠意を見せようとしたこともあるさうだ。思ひやると、この放蕩おやぢでも實があつて、可哀さうだ。吉彌こそそんな――馬鹿々々しい手段だが――熱のある情けにも感じ得ない無神經者――不實者――。

かういふことを考へながら、僕も亦その無神經者――不實者――を追つて、里見亭の前へ來た。いつも不景氣な家だが、相變らずひツそりしてゐる。ゐさうにもない。併しまたこツそり乳くり合つてゐるのかも知れないと思へば、急に僕の血は逆上して、あたまが燃え出す樣に熱して來た。

僕は、數丈のうはばみがぺろぺろ赤い舌を出し、この家のうちを狙つて卷き附くかの樣な思ひを以つて、裏手へまはつた。

裏手は田圃である。ずツと遠くまで並び立つた稻の穗は、風に靡いてきらきら光つてゐる。僕は涼風の如く輕くなり、月光の如く形なく、里見亭の裏二階へ忍んで行きたかつた。然し、板壁に映つた自分の黑い影が、どうも、邪魔になつて堪らない。

その影を取り去つてしまはうとするかの樣に、僕はこはごはまはりして、また街道へ出た。

もとの道を自分の家の方へ歩んで行くと、暗いところがあつたり、明るいところがあつたり、ランプのあかりがさしたり、電燈の光が照らしたり、――その明暗幽照にまでも道のでこぼこが出來て――ちらつく眼鏡越しの近眼の目さきや、あぶなツかしい足もとから、全く別な世界が開らけた。

戸々に立ち働いてゐる黑い影は地獄の兵卒の如く、――戸々の店さきに一樣に黑く並んでるかな物、荒物、野菜などは鬼の持ち物、喰ひ物の如く、――僕はいつの間に墓場、黃泉の臺どころを嗅ぎ當てゝゐたのかと不思議に思つた。

たまく、鼻唄を歌つて通るものに會ふと、その聲からして死んだものらの腐つた肉のにほひが聽かれる樣だ。

僕は、――たとへば、伊邪那岐の尊となつて――死人のにほひがする薄暗い地獄の勝手口まで、女を追つてゐる樣な氣がして、家に歸つた。

時計を見ると、もう、十時半だ。然し、まだ暑いので、褥を取る氣にはならない。仰向けに倒れて力抜けがした全身をぐツたり、その手足を延ばした。

そこへ何物か表から飛んで來て、裏窓の壁に當つてはね返り、ごろくとはしご段を轉げ落ちた。迷ひ鳥にしては、餘りに無謀過ぎ、餘りに重みがあり過ぎたやうだ。

ぎよツとしたが、僕は直ぐおもて窓をあけ、

『…………』誰れだ？　と、いつものやうな大きな聲を出さうとしたら、下の方から、

『靜かにく』と、聲ではなく、ただ制する手振りをした女が見える。吉彌だ。

僕は直ぐ二階をおりて外へ出た。

『…………』まだ物を云はなかつた。

『びツくりして？』先づ、平生通りの調子で小だわりのない聲を出したかの女の醉つた樣子が、なよなよした優しい輪郭を、月の光で地上にまでも引いてゐる。

『また青木だらう?』
『いゝえ、これから行くの。』
『ぢやア、早く行きやアがれ!』僕はわざとひどくかの女を突き放つて今夜も駄目だとあきらめた。
『もう一つあげませうか?』かの女は今一つ持つてゐた林檎を出した。
『……………』僕は默つてそれを奪ひ取つてから、つか／＼と家に這入つた。

## 一七

その後、吉彌に會ふ度毎に、おこつて見たり、冷かして見たり、笑つて見たり、可愛がつて見たり――こッちでも要領を得なければ、向ふでもその場、その場の商賣振り。僕はお袋が立つ時にくれ／＼注意したことなどは全く無頓着になつてゐた。

東京からは、もう、金は送らないで妻が焼け半分の厭みツたらしい文句ばかりを云つて來る。僕はそのふくれてゐる樣子を想像出來ないではないが、入りもしない反動心が起つて來ると同時に、今度の事件には僕に最も新らしい生命を與へる戀――そして、妻には決して望めないの――が含んでゐる樣にも思はれた。それで、妾にしても藝者をつれて歸るかも知れないが、お前達（親にも知らしてあると思つたから、暗にそれをも含めて）には決して心配はかけないといふ返事を出した。

僕があがるのはいつも井筒屋だが、吉彌と僕との關係を最も早く感づいたのは、そこのお君である。皮肉にも、隣りの室に忍び込んで、すべてを探偵したらしく、あつたまゝの事實を並べて、吉彌を面と向つていぢめたさうだ。

吉彌は之が癪にさはつたとかで、自分のうちのお客に對し、立ち聽きするなどは失禮ではないかと、おこり返したさうだが、そのいぢめ方が不斷の樣に陰辨慶的なお君と違つてゐたので、

『あら小まツちやくれも、もう年頃だから、燒いてるんだ、わ』と、吉彌は僕の胸をぶつた。

『まさか、そんなわけぢやアあるまい』と、僕は答へた。

然し、それから、お君は英語を習ひに來なくなつたのは事實だ。

僕も、これが動機となつて、いくらかきまりが惡くなつたのに加へて、自分の愛する者が年の若い娘にいぢめられるところなどへ行きたくなくなつた。また、お貞が、僕の顏さへ見れば、吉彌の惡口をつくのは、あんな下司な女を僕があげこそすれ、まさか、關係してゐるとは思はなかつたからでもあらうが、それにしては、知つた以上、僕をも下司な者に見爲すのは知れ切つてゐるから、行かない方がいゝと思ひ定めた。それで、吉彌を呼べば、うなぎ屋へ呼んだが、飮みに行く度數がもとの樣には多くなくなつた。

勉强をする時間が出來たわけだが、目的の脚本は少しも筆が取れないで、却て讀み終つたメレジコ

ウスキの小說を縮少して、新情想を包んだ一大古典家、レオナドダギンチの高潔にして而も恨み多き生涯を紹介的に書き初めた。

　或晩のこと、虛心になつて筆を走らせてゐると、吉彌がはしご段をとん／＼あがつて來た。

『…………』何も云はず直ぐ僕にすがり附いてわッと泣き出した。餘り突然のことだから、

『どうしたのだ？』と、思はず大きな聲をして、僕はかの女の片手を取つた。

『…………』かの女は僕に片手をまかせたまゝで暫く僕の膝の上につッ伏してゐたが、やがて、あたまをあげて、その喰はへてゐた袖を離し、『青木と喧嘩したの。』

『なアんだ』と、僕は手を離した。『乳くり合つたあげくの喧嘩だらう。それをおれのところへ持つて來たッて、どうするんだ？』

『分つてしまつた、わ。』

『何が、さ？』僕はとぼけて見せたが、青木に嗅ぎつけられたのだとは直觀した。

『何がッて、ゆふべ、うなぎ屋の裏口からこッそり這入つて來て、立ち聽きしたと、さ。』――では、先夜の僕がゆふべの青木になつたのだ。また、うはばみの赤い舌がぺろ／＼僕の目の前に見える樣だ。僕は之を胸に押さへて平氣を裝ひ、

『それがつらいのか？』

『どうしても、疑はしいツて聽かないんだもの、癪にさはつたから、みんな云つちまつた――「あなたのお世話にやならない」て。』

『それでいゝぢやアないか？』

『ぢやア、向ふがこれからのお世話は斷わると云ふんだが、いゝの？』

『いゝとも。』

『跡の始末はあなたが附けて呉れて？』

『知れたこツた』と、僕は覺悟した。

　かういふことにならないうち、早く切りあげようかとも思つたのだが、來べき金が來ないので、ひとつは動きがつかなかつたのだ。然し、もう、かうなつた以上は、僕も手を引くのをいさぎよしとしない。僕は意外に心が据つた。

『もう少し書いたら行くから、さきへ歸つてゐな』と、僕は一足さきへ吉彌を歸した。

## 一八

　やがて井筒屋へ行くと、吉彌とお貞と主人とが圍爐裡を取り卷いて坐つてゐる。お君や正ちやんは何も知らずに寢てゐるらしい。主人はどういふ風になるだらうと心配してゐた樣子、吉彌は存外平氣

である。お貞は先づ口を切つた。

『先生、飛んだことになりまして、なア』と、飽くまで事情を知らない振りで、『あなたさまに御心配かけては濟みませんけれど――』

『なアに、かうなつたら、私が引き受けてやりまさア。』

『濟まないこツて御座いますけれど――吉彌が惡いのだ、向ふをおこらさないで、そツとして置けばいゝのに。』

『向ふからほぢくり出すのだから　仕やうがない、わ。』

『もう、出來たことは何と云つても取り返しのつく筈がない。すツかり私におまかせ下さい』と、僕は男らしく斷言した。

『然し』と、主人が堅苦しい調子で、『世間へ、あの人の物と世間へ知れてしまつては、藝者が賣れませんから、なア――また出來ない樣なことがあつては、こちらが困るばかりで――』

『そりやア、もう、大丈夫ですよ』と、僕は輕く答へたが、餘りに人を見くびつた云ひ分を不快に感じた。

然し、割合にすれてゐない主人のことであるし、またその無愛嬌なしがみツ面は持ち前のことであるから、思つたまゝを云つたのだらうと推察してやれば、僕も多少正直な心になつた。

『どうともして』とは、實際、何とか工面をしなければならないのだ、『必らず御心配はかけませんが青木さんの方が成り立つてゐても、今月一杯はかゝるんでしたから――そこいらの日限は、どうか、よろしく』と、念を押した。

『それは勿論のことです。』主人は鳥渡にこついて見せたが、また持ち前のしがみツ面に返つて、『青木があの時揃へて出してしまへばよかつたに、なア』と、お貞の方をふり向いた。

『あいつがしみツたれだから、さ。』お貞は煙管をはたいた。

『一杯飮まうか？』もう分つたらうと思つたから、僕は、吉彌を促がし、二階へあがつた。

『泣いたんでぴツくりしたでせう？』吉彌は僕と相向つて坐つた時に斯う云つた。

『なアに。』僕は吉彌の誇張的な態度をわざとらしく思つてゐたので、澄まして答へた。『お前の目玉に水ツ氣が少しもなかつたよ。』

硯と卷き紙とを呼んで、僕は飮みながら、先輩の某氏に當てゝ、金の工面を頼む手紙を書いた。その手紙には、一藝者があつて、年は二十七――顏立ちは良くないし、三味線も甘くないが、踊りが得意（これは吉彌の云つた通りを信じて云ふのだ）――普通の婦人とは違つて丈がずツと高く――目と口とが大きいので、仕込みさへすれば、女優として申し分のない女だ。且、その子供が一人ある、また妹がある。それらを引き入れることが出來る望みがある。失敗は豫め覺悟の上でつれて歸りたい

から、それに必要な百五十圓ばかりを一時立て換へて貰ひたいと頼んだ。その全體に於て、さきに劇場にゐる友人に紹介した時よりも熱がさめてゐたので、調子が冷靜であつた。無論、友人に對する考へと先輩に對する心持ちとは、また、違つてゐたのだ。ただ、心配なのは承知して呉れるか、どうかといふことだ。

『もう、書けたの?』吉彌は待ちどほしさうに尋ねた。

『あゝ』と、僕の返事には力がなかつた。

僕は寢ころんでがぶ〱三四杯を獨りて傾けた。

『あたいも書かう』と、吉彌が今度は筆を取り、僕の投げ出した足を尻に敷いて、肘をつき、頻りに何か書き出した。

僕は手をたゝいて人を呼び、まだ起きてゐるだらうからと、印紙を買つて投函することを命じた。一つは、そこの家族を安心させる爲めであつたが、若し出來ない返事が來たらどうしようと、心は息詰る樣に苦しかつた。

『……』吉彌も亦短い手紙を書きあげたのを、自慢さうだ——

『どれ見せろ』と、僕は取つて見た。

下手くそな假名文字だが、漸とその意だけは通じてゐる。さきに僕がかの女のお袋に尋ねて、吉彌

は小學校を出たかといふと、學校へはやらなかつたので、僅かに新聞を拾ひ讀みすることが出來るくらゐで、役者になつてもせりふの覺えが惡からうと答へる。すると吉彌がそばから、

『まさか、絶句はしない、わ』と、答へたのを思ひ出した。

『しばらく御ぶさた致し候。まづはおかはりもなく、御つとめなされ候よし、かげながら祝し居候。さてとや、このほどよりの御はなし、母よりうけたまはり、うれしく存じ候。』

てツきり、例の區役所先生に送るのだと分つた。『うれしく』とは、一緒になることが定つてゐるのだらう。もつとも、僕はその人が承知して女優になるのを許せば、それでかまはないとも考へてゐたのだ。

そのつゞき、――

『ちかきうちに私も歸り申し候につき、くはしきことはお目もじの上申しあげさふらふ。かしく。きくより。』

菊とは吉彌の本名だ。さすが、當て名は書いてない。

『馬鹿野郎！　人の前でのろけを書きやアがつた、な。』

『のろけぢやアないことよ、御無沙汰してゐるから、お詫びの手紙だ、わ。』

『「母より承はり、うれしく」だ――當て名を書け、當て名を！　隱したツて知れてらア。』

『ぢやア、書く、わ。』笑ひながら、『うは封を書いて頂戴よ』と云つて、かの女の筆を入れたのは『野澤さま』といふのである。

僕はその封筒のおもてに淺草區千束町〇丁目〇番地渡瀨（これは吉彌の家）方野澤樣と記してやつた。かの女はその人を子供の時から知つてると云ひながら、その呼び名とその宿所とを知つてゐないのであつた。

『…………』さきの僞筆は自分の爲めに利益と見えたことだが、今のは自分の不利益になる事件が含んでゐる代筆だ。僕は、何事も成る樣になれといふつもりで、苦しい胸を押へてゐた。が、表面では、さう沈んだ樣には見せたくなかつたので、からかひ半分に、『區役所が一番戀しいだらう？』

『いゝえ。』吉彌はにツこりしたが、口を歪めて、『あたい、矢ツぱし青木さんが一番可愛い、わ――實があつて――長く世話をかけたんだもの。』

『ぢやア、僕はどうなるんだ？』

『これからは、あなたの』と、吉彌は僕の寢ころんでゐる胸の上に自分の肩までもからだをもたせかけて、頸を一音づゝに動かしながら、『め――か――け。』

十二時まで、僕等はぐづついてゐたら、お貞が出て來て、もう、時間だから、引きあげて呉れろといふ頼みであつた。僕は、立ちあがると、あたまがぐら／＼ッとして、足がひよろついた。

あぶないと思つたからでもあらう、吉彌が僕を僕の門口まで送つて來た。月のいゝ地上の空に、僕等が二つの影を投げてゐたのをおぼえてゐる。

一九

返事を促して置いた劇場の友人から、一座のおもな一人には話して置いた、その他のことは僕の歸京後にしようと、漸く云つてよこした。これを吉彌に報告すると、かの女はきまりが惡いと云ふ。なぜかとよく〳〵聽いて見ると、若しその一座に這入れるとしたら、數年前に東京で買はれたなじみが、その時とは違つて、そこの立派な立て女形になつてゐるといふことが分つた。よく〳〵興ざめて來る藝者ではある。

それに、最も肝心な先輩の返事が全く面白くなかつた。女優に仕立てるには年が行き過ぎてゐるし、一度藝者をしたものには、到底、舞臺上の練習の困難に堪へる氣力がなからう。寧ろ斷然關係を斷つ方が僕の爲めだといふ忠告だ。僕の心の奧が絕えず語つてゐたところと寸分も違はない。

然し、僕も男だ、體面上、一度約束したことを破る氣はない。もう、人を賴まず、自分が自分でその場に全責任をしよふより外はない。

かうなると、自分に最も手近な家から探ぐつて行かなければならない。で、僕は妻に手紙を書き、

家の物を質に入れて某の金子を調達せよと云つてやつた。質入れをすると云つても、僕自身のは既に大抵行つてゐるのだから、目的は妻の衣服やその附屬品であるので、足りないところは僕の父の家へ行つて出して貰へと附け加へた。

妻はかうなるのを豫想してゐたらしい。實は、僕、吉彌のお袋が來た時、早手まはしであつたが、僕の東京住宅の近處にゐる友人に當てゝ、金子の調達を賴んだことがある。無効であつた上に、友人は大抵のことを妻に注意した。妻は、また、之を全く知らないでゐたのは迂濶だと云はれるのが嫌さに、先づ以つて僕の父に內通し、その上、血眼になつてかけずりまはつてゐたかして、電車道を步いてゐた時、子を抱いたまゝ、すんでのことで引き倒されかけた。

その上の男の子が、どこからか、『馬鹿々々しいわい』といふ言葉をおぼえて來て、その頃、頻りにそれを繰り返してゐたさうだが、妻は、それが今回のことの前兆であつたと、御幣をかついでゐた。それに尤もだといふのは、僕が東京を出發する以前に、漸く出版が出來た『デカダン論』の爲めに、僕の生活費の一部を供する英語教師の職をやめられかゝつてゐたのだ。

父からは嚴格ないましめを書いてよこした。直ぐさま歸つて來いと云ふので、僕の最後の手紙はそれと行き違ひになつたと見え、今度は妻が、父と相談の上、本人で出て來た。

僕が、あたまが重いので、散步でもしようと玄關を出ると、向ふから、車の上に乳飲み兒を抱いて

妻がやつて來た。顏の瘦せが目に立つて、色が眞ツ青だ。僕は、これまでのことが一時に胸に浮んで、ぎよツとせざるを得なかつた。

『馬鹿ツ！――馬鹿野郎！』車を下りる妻の權幕は非常なものであつた。僕が妻からこんな下劣な侮辱の言を聽くのは、これが初めてであつた。

『…………』餘ツぽどのぼせてゐるのだらうから、荒立てゝはよくないと思つて、僕はおだやかに二階へつれてあがつた。

茶を出しに來たおかみさんと妻は普通の挨拶はしたが、おかみさんは初めから何だか濟まないといふ樣な顏つきをしてゐた。それが下りて行くと、妻はそとへも聽えるやうな甲高な聲で、なほ罵詈讒倒を絕たなかつた。

『あなたは色氣狂ひになつたのですか？――性根が拔けたんですか？――うちを忘れたんですか？お父さんが大變おこつてらツしやるのを知らないでせう？――』

『…………』僕は苦笑してゐる外なかつた。

『こんな兒があつても』と、かの女は抱き兒が泣き出したのをわざとほうり出す樣に僕の前に置き、

『可愛くなけりやア、捨てるなり、どうなりおしなさい！』

『…………』これまで自分の子を抱いたことのない僕だが、餘りおぎやア／＼泣いてるので手に取りあ

げては見たが、間が惡くツて、あやしたりすかしたりする氣になれなかつた。
『子どもは子どもで、乳でも飲ましてやれ』と、無理に手渡しした。
『ほんとに、ほんとに、どんな惡魔がついたのだらう、人にから心配ばかしさして』と、妻は僕の顏を睨む權利でもあるやうに、睨み附けてゐる。

僕も、――今まで夢中になつてゐた女を實際通り惡く云ふのは、不見識であるかの樣に思つたが、――それとなく分る樣な言葉を以つて、首ッたけ惚れ込んでゐるのではないことを說明し、女優問題だけは僕の事業の手初めとして確かに甘く行く樣に云つて、安心させようとした。妻はそれをも信じなかつた。

兎に角、妻は家、道具などを質入れする代りに、自分が人質に來たのだから、出來るつもりなら、歸つて、僕自身で金を拵へて來いといふのである。で、僕は明日一先づ歸京することに定めた。

それにしても、今、吉彌を紹介して置く方が、僕のゐなくなつた跡で、妻の便利でもあらうと思つたから、――また一つには、吉彌の跡の行動を監視させて置くのに都合よからうと思つたから、――吉彌の進まないのを無理に玉をつけて、晩酌の時に呼んだ。料理は井筒屋から取つた。互ひに話はしても、妻は絕えず白眼を動かしてゐる。吉彌はまた續けて恥かしさうにしてゐる。仲に立つた僕は時に前者に、時に後者に、同情を寄せながら、三人の食事はすんだ。妻が不斷飮まない酒を二三杯傾け

て赤くなつたので、燒け酒だらうと冷かすと、東京出發前も、父の家でさう心配ばかりしないで、ちよッと酒でも飲めと云はれたのをしほに、初めて酒と云ふ物に醉つて見たと答へた。

　僕は、妻を褥につけてから、また井筒屋へ行つて飲んだ。吉彌の心を確かめる爲、また別れをする爲めであつた。十一時頃、歸りかけると、二階のおり口で、僕を捉へて云つた、

『東京へ歸ると、直ぐまた浮氣をするんだらう？』

『馬鹿ア云へ。お前の爲めに、隨分腹を痛めてゐらア。』

『もッと痛めてやる、わ。』吉彌は僕の肩さきを力一杯につねつた。

　妻のところへ歸ると、僕のつく息が夕方よりも一層酒くさい爲め、また新らしい小言を聽かされたが、僕があやまりを云つて、無事に濟んだ。――然し、妻のからだは、その夜、半ば死人のやうに固く冷たい樣な氣がした。

## 二〇

　その翌日、吉彌が早くからやつて來て、そばを去らない。

『餘ぽど悋氣深い女だよ』と、妻は僕に陰口を云つたが、

『奥さん、奥さん』と云はれてゐれば、左程憎くもない樣子だ。いろ〳〵うち解けた話もしてゐれば、

また二人一緒になつて、僕の惡口——妻のは鋭いが、吉彌のは弱い——を、僕の面前で云つてゐた。
『長くこゝへ來てゐるの？』
『いゝえ、去年の九月に。』
『はやるの？』
『えゝ、どこででもきイちやん〳〵て云つて呉れてよ。』
『さう』と、あざ笑つて、『はやりツ子だ、ねえ。——いくつ？』
『廿七。』僕はこれを聽いて、吉彌が割合に正直に出てゐると思つた。
『學校は這入つたの？』
『いゝえ。』
『新聞は讀めて？』
『假名をひろつて讀みます、わ。』
『それで役者になれるの？』
『そりやアどうだか分りませんが、朋輩同志で舞臺へ出たことはあるのよ。』
二人はこんな問答もあつた。
僕は、歸京したら、ひよツとすると再び來ないで濟ませるかも知れないと思つたから、持つて來た

書籍のうち、最も入用があるものだけを取り出して、風呂敷包みの手荷物を拵へた。

遲くなるから、遲くなるからと、度々催促はされたが、何だか氣が進まないので、まアいゝ、まアいゝと時間を延ばし、――晝飯を過ぎ、――また晩飯を喫してから、――出發した。その日あたりから、して、吉彌へ口のかゝつて來ることがなくなつて來たのだ。狹いところだから、直ぐ評判になつたのであらう。妻を海岸へ案内しようと思つたが、それも吉彌が引き受けたのでまかしてしまつた。

僕の東京の住家は芝區明船町だ。そこへ着いたのは夜の十時過ぎ――車を歸して、締つてゐる戶をたゝいてゐると、家の前を通り過ぎた人が一人あつて、それが跡もどりをして來て、

『義雄かい？』僕の父であつた。

『只今歸りました』と、僕はあわてゝ、少しきまりが惡く答へた。けふは歸つただらうと、それとなく、わざ〳〵見まはりに來たところなのだらうから、父も隨分心配してゐるのかと、僕のからだが縮みあがつた。が、『まア、お這入んなさい』と、戶が明くのを待つて、僕は父を座敷へ通した。

妻が殘して行つた二人の子供のいびきが、隣りの室から聽えてゐる。

僕が茶を命じたら、

『今、火を起しますから』と、妻の母は答へた。

『もう、茶は入りませんよ、お婆アさん』と云つて置いて、父は僕に對して頗る嚴格な態度になり、

『今度のことはどうしたと云ふんだ?』
『………』僕は少し心を落ち着けてから、父の顏を見い〱答へた、『このことは何にも聽いて下さんな、自分が苦しんで、自分が處分をつけるつもりですから。』
『さうか』と、父は僕の何にも云はない決心を見て取つたのだらう、『ぢやア、もう、けふは遲いから歸る。あす早速うちまで來て貰ひたい。』
かう云つて、父は歸つて行つた。
妻が痩せたのを聯想するせいか、父も痩せてゐた樣だし、今、相對する母もまた頰が落ちてゐる。僕は家族にパンを與へないで、自分ばかりが遊んでゐたやうに思へた。
僕の書齋兼寢室に這入ると、書棚に多く立ち並んでゐる金文字、銀文字の書册が、一つ一つにその作者や主人公の姿になつて現はれて來て、入れ代り、立ち代り、僕を責めたりあざけつたり、讃めそやしたりする。その數のうちには、トルストイのやうな白髯の老翁も見えれば、メテルリンクのやうなハイカラの若紳士も出る。ヒユネカの如き活氣盛んな壯年者もあれば、ブラウニング夫人の如き才氣當るべからざる婦人もゐる。いづれも皆外國または內國の有名、無名の學者、詩人、議論家、創作家などである。そのいろんな人々が、また、その云ふところ、論ずるところの類似點を求めて、僕の交友間のあの人、この人になつて行く。僕は久し振りで廣い世間に出たかと思ふと、實際は暗闇の襖

中にさめてゐるのであつた。持ち歸つた包みの中からは、嚴肅な顏つきでレオナドがのぞいてゐる。

　神經の冴え方が久し振りに非常であるのをおぼえた。……ビスマクの首……グラドストンの首……曾て戀しかつた女共の首々……おやぢの首……憎い友人どもの首……鬼女や瀧夜叉の首……こんな物が順ぐりに、あふ向けに寢て覺めてゐる室の周圍の鴨居のあたりをめぐつて　吐く息さへも苦しく又頼母しかつた時だ――『鬼よ、羅刹よ、夜叉の首よ、われを夜伽の靈の影か……闇の盃盤闇を盛りて、われは底なき闇に沈む』と、僕が新體詩で歌つたのは！

　さま〴〵の考へがなほ取りとめもなく浮んで來て、僕といふものがどこかへ行つてしまつた樣だ。その間にあつて、――毀譽褒貶は世の常だから覺悟の前だが、――かの『デカダン論』出版の爲めに、生活の一部を助けてゐる教師の職（僕は英語を一技術として教へてゐるのであつて、その技術を金で買ふ樣に思つてゐる現代學生には別に師事されるのを潔しとしない）を、妻の聽いて來た通り、やめられるなら、早速また一苦勞がふえるといふ考へが、強く僕の心に刻まれた。

　然し、その時はまたその時で、一層奮勵の筆を以つて、補ひをつけることが出來ると、覺悟した。すると、また、心の奧から、國府津に在る金はどうすると尋問し出す。これが最もさし迫つた任務である。然し、それも亦、僕には、殘忍なほど明確な決心があつた。

それが爲めに、然しわが家ながら、他家の如く窮屈に思はれ、夏の夜をうちは使ふ音さへ遠慮勝ち

に、近頃にない寂しい徹宵の後に、やッと、待ち設けた眠りを貪つた。

## 二

子供の起きるのは早い。翌朝、僕が顏を洗ふ頃には、もう、飯を濟ましてゐた。『お歸りなさい』とも、何とも云はないで、輕蔑の樣子が見える樣だ。口やかましいその母が、のぼせ返つて、僕の不始末をしやべるのをそばで聽いてゐたのだらうと思はれた。

僕が食膳に向ふと、子供はそばへ來て、つッ立つたまゝ、姉の方が、

『學校は、もう、來月から始まるのよ』と云ふ。吉彌を今月中にといふ事件が忘れられない。弟の方はまた、

『お父さん、いちじくを取つてお呉れ』と云ふ。

いちじくと云はれたので、僕はまた國府津の二階住ひを冷かされた樣に胸に堪へた。

『まだもう少し食べられないよ』と云つて、僕は携へて來た土產を分けてやつた。

妻の母は心配さうな顏をしてゐるが、僕のことは何にも尋ねないで、孫どもが僕の留守中にいたづらであつたことを語り、庭のいちじくが熟しかけたので、取りたがつて、見てゐないうちに木のぼりを初め、途中から落ッこちたことなどを云ッ附けた。子供は二人とも嫌な顏をした。

『お母さん、簞笥の鍵はどこにありますか?』僕はいよ〳〵殘酷な決心の實行に取りかゝつた。
『知りませんよ』と、母は曖昧な返事をした。
『知らない筈はない。おれの家をあづかつてゐながらどんな鍵でもぞんざいにして置く筈はない。』
『實は大事にしまつてあることはしまつてありますが、お千代が渡してくれるなと云つてゐましたから――』
『千代は私の家内です、そんな云ひ分は立ちません。』
『それでは出しますから』と、母は鍵を持つて來て、そツけなく僕の前に置き、臺どころの方へ行つてしまつた。
僕は簞笥の前に行き、一々その引き出しを明け、おもな衣類を出して見た。大抵は妻の物である。紋羽二重や鼠縮緬の衣物――繻珍の丸帶に、博多と繻子との晝夜帶、――黑縮緬の羽織に、寶石入りの帶止め――長濱へ行つた時買つたまゝ、しごきになつてゐる白縮緬や、裏つき水色縮緬の裾よけ、などがある。妻の他所行き姿が目の前に浮ぶ。そして昔の懷しいかをりまでが僕の鼻をつく。
『行つて來ますよ』といふ外出の時の聲と姿とは、妻の年取るに從つて、段々引き締つて威嚴を生じて來たのを思ひ出させた。
まだ長襦袢がある。――大阪の或藝者――中年增であつた――がその色男を尋ねて上京し、行くへ

が分らないので、暫く僕の家にゐた後、男のゐどころが分つたので、おもちやの樣な一家を構へたが、つれ添ひの病氣の爲め收入の道が絶え、窮したあげくに、この襦袢を僕の家の帳面を以つて質入れした。その後、二人とも行く方が知れなくなり、流すのは惜しいと云ふので、僕が妻の爲めにこれを出してやつた。少し派手だが、妻はそれを着て不斷の沈み勝ちが直つた樣に見えたこともある。

それに、まだ一つ、ずツと派手な襦袢がある。これは、僕等の一緒になる初めに買つてやつた物だ僕より年上の妻は、その時からじみな作りを好んでゐたので、僕がわざ〳〵若作りにさせる爲め、買つてやつたのだ。今では不用物だから、子供の大きくなるまでと云つてしまひ込んであるが、その色は今も變らないで、燃える樣な緋縮緬には、妻のもとの若肌のにほひがする樣なので、僕はこツそりそれを嗅いで見た。

『今の妻と吉彌とはどちらがいゝ？』と云ふ聲が聽える樣だ。

『無論、吉彌だ』と、云ひ切りたいのだが、心の奧に誰れか耳をそば立てゝゐるものがある樣な氣がして、さう思ふことさへ憚られた。

兎に角、多少の價うちがありさうな物はすべて一包みにして、僕はやとひ車に乘つた。質屋をさして車を驅けらしたのである。

友人にでも出會つたら大變と、親しみのある東京の往來を、疎く、氣恥かしい樣に進みながら、僕

は十數年來つれ添つて來た女房を賣りに行くのではないかといふ感じがあつた。

僕は再び國府津へ行かないで――若し行つたら、ひよツとすると、旅の者が土地を荒したなど云ひふらされて、袋だたきに逢はされまいものでもないから――金子だけを送つてやることに初めから心には定めてゐたので、直ぐ吉彌宛で電報がはせをふり出した。

# 二二

國府津では、僕の推察通り、僕に對する反動が起つた。

さすがは學校の先生だけあつて、隣りに藝者がゐても寄りつきもしない、なかなか堅い人であるといふのが、僕に對する最初の評判であつたさうだ。が、段々僕の私行があらはれて來るに從つて、吉彌の兩親と會見した、僕の妻が身受けの手傳ひにやつて來たなど、あること無いことを、狹い土地だから、直きに云ひふらした。

それに、吉彌が馬鹿だから、のろけ半分に出たことでもあらう、女優になつて、僕に貢ぐのだと語つたのが、土地の人々の邪推を引き起し、僕はかの女を使つて土地の人々の金をしぼり取つたといふ樣に思はれた。それには、靑木と田島とが、失望の恨みから、事件を誇張したり、捏造したりしたのだらう、僕が機敏に逃げたのなら、僕を呼び寄せた坊主をなぐれといふ騷ぎになつた。僕の妻も危險で

あつたのだが、はじめは何も知らなかつたらしい。吉彌を案内として、方々を見物などしてまはつた。

僕が出發した翌日の晩、青木が井筒屋の二階へあがつて、吉彌に、過日與へた小判の取り返し談判をした。

『男が一旦やらうと云つたもんだ！』

『わけなくやつたのではない！』

『さんざん人をおもちやにしやアがつて――貰つた物ア返しやアしない！』

『何だ、この薄情女め！』

無理に奪ひ取らうとする、取られまいとする。追ツかけられて、二階の段を下り、化粧部屋の口で、とツつかまると、男は女の帶の間へ手をつツ込む。さうさせまいと悶いても女の力及ばずと見たのだらう

『ぢやア、やるから待ちやアがれ！』身づから帶の間から古い黃金を取り出し、『えゝツ、拾つて行きやアがれ』と、ほうりつけ、『畜生、そんな物ア手にさはるのも穢れらア！』

僕の妻は丁度井筒屋へ行つてゐたので、この芝居を、爐のそばで、家族と一緒に見たと云ふ。

『もう、二度とこんな家へ來やせんぞ』と、青木は投げられた物を手に取り、吉彌をにらんで歸つて行つた。

『泥棒ぢやい！』

吉彌は片足を一歩踏み出すと同時に、あごをも餘ほど憎らしさうに突き出して、くやしがつた。その樣子が大變をかしかつたので、一同は云ひ合はせた樣に吹き出した。かの女もそれに釣り込まれて、笑顔を向け、爐のそばに來て座を取つた。

藥罐のくら〳〵煮立つてゐるのが、吉彌のむしやくしやしてゐるらしい胸の中をすツかり譬へてゐるやうに、僕の妻には見えた。

大きな臺どころに大きな爐――くべた焚木は燃えてゐても、風通しのいゝので、暑さはおぼえさせなかつた。

『けちな野郎だ、なア?』お貞は斯う云つて、吉彌を慰めた。

『横つらへ投げつけてやつたらよかつたのに』と、正ちやんも吉彌の肩を持つた。

『きイちやんの樣子ツたら、なかつた』と、お君が云つたので、一同はまた吹き出した。

『どうせ、あたいが馬鹿なんですから、ね。』吉彌は横を向いた。

『一體どうしたわけなの?』僕の妻は仲裁的に口を出した。

『呉れたもんを取り返しに來たの。』

『あまりだますから、おこつたんだらう?』

『だまされるもんが悪いのよ。』

『さう?』妻は自分の夫もだまされてゐるのだと思つてきまりが惡くなつたが、直ぐ氣を變へて、冷かし半分に、『可哀さうに、貰つたと思つたら、おほ損をした、わ、ね。』

『ほんとに』と、吉彌も笑つて、『指輪に拵へてやらうと思つてたら、取り返されてしまつた。』

かういふ話をしてゐるうち、吉彌のお袋が一人の女をつれてやつて來た。吉彌は僕の方も亦出來なくなるかと疑つて、淺草へ電報を打つたので、今度はお袋が獨りでやつて來たのだ。つれた女は藝者の候補者だ。

お君が一座の人々をぎろ〳〵見くらべてゐるところで、お袋はお貞と吉彌とから事情を聽き、また僕の妻にも紹介された。妻も亦お袋にその思つたことや、將來の吉彌に對する注文やを述べたり、聽き糺したりした。期せずして眞面目な、堅苦しい會合となつた。お袋は不安の狀態を愛相笑ひに隱してゐた。

その間に、吉彌はどこかへ出て行つた。あちらこちらで借り倒してある借金を拂ひに行つたのである。

主人がその代りに會合に加つて、

『もう、何とか返事がありさうなものですが——』

『さうですね』と、僕の妻は最終の責任を感じて、異境の空に獨りぼツちの寂しさをおぼえた。

僕は、出發の當時、井筒屋の主人に、直ぐ、僕が出直して來なければ、電報で送金すると云つて置いたのだ。

先刻から、正ちやんもゐなくなつてゐたが、それがうちへ驅けつけて來て、

『きイちやんが、今、方々の拂ひをしてをる』と、注進した。

『ぢやア、電報がはせで來たんでせう?』と、僕の妻は思はず叫んだ。

『そりやア、いかん、呼んで來ねば』と、主人は正ちやんをつれて大いそぎで出て行き、やがて吉彌を呼び返して來た。

『かはせが來たんですか?』と、妻はおこつた樣子。

『えゝ』と、吉彌はしよげてゐた。

『ぢやア、さう云つて呉れないぢやア困ります、わ。』

『出してお見』と、主人が仲に這入つて調べて見ると、もう、二三十圓は拂ひに使つてあつた。僕が直接に送つたのが失敗なのだ。

それから、妻と主人とお袋とで詳しい勘定をして、僕の宿料やら、井筒屋へ渡す分やらを取つて行くと、吉彌のだらしなく使つたそとの借金ぐらゐはなほ拂へるほど殘つた。然し、それも僕のうなぎ屋なぞへ拂ふ分にまはつた。

『お客さんの分まで拂ふのア馬鹿々々しい、わ』と、吉彌は自分の金でも取り扱ふ樣なつもりでゐた。
僕の妻は、そんなわけの物ではないといふことを——どんな理由でだか、そこまでは僕に報告しなかつたが——說き聽かせ、お袋に談判して、吉彌のそとの借金だけはお袋が引き受けることにして、直ぐ淺草へ取り寄せの電報を打たせた。

## 二三

その晩、僕の妻のところへ、井筒屋から御馳走を送つて來たし、またお袋と吉彌と新藝者とが遊びに來た。
『あなたはどこにお勤めでしたの？』とは、お袋が異樣な問ひであつた。
『わたしはそんな苦勞人ぢやア御座いませんよ』と、僕の妻は顏を赤くして笑つた。『そりやア、これまでにも今度の樣なことがあつたし、またいろんな藝者をつれ込んで來られたこともあつたから、その方では隨分苦勞人になつた、わ。』
『ほんとです、ねえ、私も若い時は隨分そんな苦勞を爲せられましたよ。今では、又、子供ノ爲めに苦勞——世間では、娘を藝者にして、親は左うちはで行けると申しますが、こんな働きのない子ばかりでは、どうして、どうして、却つて苦勞は絶えません。』

かういふ話しがあつてから、吉彌とお袋とは歸つた。まだ青木から餞別でも貰はうといふ未練があつたので、渠を呼び出しに行つたのだが、渠は逃げてゐて、會へずにしまつたらしい。吉彌は跡に殘つた新藝者――色は白いが、お多福――からその可哀さうな身の上ばなしを聽き、主人に對する憎みの反動として、その哀れな境遇に同情を寄せた。東京からわざ〳〵やつて來て、主人には氣に入りさうな樣子が見えないのであつた。

この女から妻は吉彌の家の狀態をも聽き、僕の推知してゐた通り吉彌の歸るのを待つてゐる男（それが區役所先生の野澤だ）があつて、今度もそれが拵へてやつた新調の衣物を一揃へお袋が持つて來たといふことまで分つた。引かされるのを披露にまはる時の用意になるのであつたらう。

『田村さんの奧さんに會ひたい』といふ人が、突然やつて來た。それが例の住職だ。かう〳〵、かういふ事情になつてゐるところを、僕が逃げたといふので、その代りに住職に復讐しようと、町の俠客連が二三名動き出したのを、人に賴んで、漸く推し靜めて貰つたが、『いつ、どんな危險が奧さんにも及ぶか分りませんから、今晩急いで歸京する方がよろしからう』との忠告だ。

僕の妻は子をいだいて靑くなつた。

吉彌のお袋の出した電報の返事が來たら、三人一緒に歸京する約束であつたが、さうも出來ない

ので、妻は吉彌の求めるまゝに少しばかり小遣ひを貸し與へ、荷物の方づけもそこそこにして、僕の革鞄は二人に託し井筒屋の主人と住職とにステーションまで送られて、その夜東京へ歸つて來た。

『憎いのは吉彌、馬鹿者はあなた、可哀さうなのは代りに行つた藝者だ』と、妻は泣いて僕に語つた。

その翌日から、妻は年中堪へに堪へてゐたヒステリが出て、病床の人となつた。乳飲み兒はその母の乳が飲めなくなつた。その上、僕等二人の留守中に老母がその孫どもに食べ過ぎさせたので、それも亦不活潑に寢たり、起きたりすることになつた。

僕の家は、病人と痩ツこけの住ひに變じ。赤ん坊が時々熱苦しくもぎやア〱泣くほかは、お互ひに口を聽くこともなく、夏の眞晝はひツそりして、なまぬるい藥のにほひと陰鬱な空氣とのうちに、僕自身の汗じみた苦悶のかげがそツくり湛つてゐる樣だ。かうなると、浮薄な吉彌のことなどは全く厭になつてしまつた。

僕は獨り机に向ひ、最も不愉快な思ひがして、そゞろ慚愧の情に咽びさうになつたが、全くこの始末をつけてしまうまでは、友人をも訪はず、父の家にも行くまいと決心した。

全く放棄されたこの家はたゞ僕一人の奮勵如何にあるのだが、第一に胸に浮ぶ問題は、

『この月末をどうしよう？』

而もそれがこの二三日に迫つてゐるのだ。

あわてたところで、駄目な物は駄目だから、先づ書きかけた原稿を終つてしまはうと、メレジコウスキの小說縮寫をつゞけた。

二四

レオナドの生涯は實に高潔にして、悲慘である。語らぬ戀の力が老死に至るまで一貫してゐるのは云はずもあれ、渠を師とするものゝうちには、師の發展のはか〴〵しくないのをまどろツこしく思つて、その對抗者の方へ裏切りしたものもあれば、また、師の人物が大き過ぎて、惡魔か聖者か分らない爲め、迷ひに迷つて縊死したのもある。また、師の發明工風中の空中飛行機を――まだ乘つてはいけないとの師の注意に反して――熱心の餘り乘り試み、墜落負傷して一生の片輪になつたのもある。そして、レオナドその人の國籍もなく一定の住所もなく、きのふは味方、けふは敵國の爲め、たゞ勞働神聖の主義を以つて、その科學的な多能多才の應ずるところ、築城、建築、設計、發明、彫刻、繪畫など――殊に繪畫は渠をして後世永久の名を殘さしめた物だが、殆ど凡て未成品だ――を平氣で、あせることなくやつてゐる間に、後進または弟子であつて又對抗者なるミケランジエロやラフアエルなどに壓倒されてしまつた。

僕はその大エネルギと絕對忍耐性とを身にしみ込むほど羨ましく思つたが、死に至るまで古典的な

態度を以つて安心してゐたのを物足りない樣に思つた。デカダンは寧ろ不安を不安のまゝに出發するのだ。

こんな理窟ツぽい考へを浮べながら筆を走らせてゐると、どこか高いところから、『自分が耽溺してゐるからだ』と、呼號するものがある樣だ。またどこか深いところから『耽溺が生命だ』と、呻吟する聲がある。

いづれにしても、僕の耽溺した狀態から遊離した心が理窟を捏るに過ぎないのであつて、僕自身の現在の窮境と神經過敏とは、生命のある限り、どこまでもつき纏つて來るかの樣に痛ましく思はれた。

筆を改めた二日目に原稿を書き終つて、之を某雜誌社へ郵送した。書き出しの時の考へに從ひ、理窟は何も云はないで、たゞ紹介だけにとゞめたのだ。これが今月末の入費の一部になるのであつた。

その夕がた、もう、吉彌も歸つてゐるだらうと思ひ、現に必要な物を入れてある革鞄を淺草へ取りに行つた。一つは、かの女の樣子を探るつもりであつた。

雷門で電車を下り、公園を拔けて、千束町、十二階の裏手に當る近所を、云はれてゐた通りに探すと、渡瀨といふ家があつたが、まさか、そこではなからうと思つて通り過ぎた。二階長屋の一隅で、狹い古い、きたない、羅宇や煙管の住ひさうなところであつた。かのお袋が自慢の年中絹物を着てゐるものゝ住所とは思へなかつた。然し、ほかには渡瀨といふ家がなさゝうだから、跡戻りをして、その前

をうろついてゐると、――實は、氣が臆して這入りにくかつたのだ――

『おや、先生』と、吉彌が入り口の板の間まで出て來た。大きな丸髷すがたになつてゐる。

『……………』僕は敷居をまたいでから、無言で立つてゐると、

『まア、おあがんなさいな』と云ふ。

見れば、もとは店さきでもあつたらしい薄ぐらい八疊の間の右の片隅に僕の革鞄が置いてある。之に反對した方の壁ぎはは、少し低い板の間になつておやぢの仕事場らしい。下駄の出來かけ、桐の用材などがうつちやり放しになつてゐる。八疊の奥は障子なしに直ぐに居間であつて、そこには、ちやぶ臺を据ゑて、そのそばに年の割合ひにはあたまの禿げ過ぎた男と、でツぷり太つた四十前後の女とが、酒をすませて、御飯を喰つてゐる。禿げあたまは長火鉢の向ふに坐つて、旦那振つてゐるのを見ると、例の野澤らしい。

僕はその室にあがつて、誰れにもと即かず一禮すると、女の方は丁寧に挨拶したが、男の方は氣がついたのか、つかないのか、飯にかこつけて僕を見ない樣にしてゐる。

吉彌はその男と火鉢をさし挾んで相對し、それも、何だか調子拔けのした樣子。

『まア、御飯をお濟しなさい。』から、僕が所在なさに勸めると、

『もう、すんだの』と、吉彌はにツこりした。

『おツ母さんは?』
『赤坂へ行つて、ゐないの。』
『いつ歸りました?』
『きのふ。』
『僕の革鞄を持つて來て吳れたか、ね?』これはわざと聽いたのだ。
『あすこにある、わ』と、指さした。
『あれが入り用だから、取りに來ました。』
『さう?』吉彌は無關係なやうに長い煙管をはたいた。
こんな話しをしてゐるうちに、跡の二人は食事を濟ませ、家根屋の持つて來る樣な梯子を傳つて、二階へあがつた。相撲取りの樣に腹のつき出た婆アやが來て、
『菊ちやん、もう濟んだの?』と云つて、お膳をかたづけた。
如何にも、もう吉彌ではなく、本名は菊子であつた。かの女は男の立つた跡へ直り、煙管でおのれの跡をさし示めし、
『こツちへお出』といふ御命令だ。
僕はおとなしくその通りに住まつた。

二階では、例の花を引いてゐる樣子だ。

『あれだらう?』僕がかう聽くと、

『さうよ』と、菊子が嬉しがつた。

馬鹿な奴だとは思つたが、僕はもう未練がないと云ひたい位だから、物好き半分に根問ひをして見た。二階にはおやぢもゐるし、他にまだ二人ばかりゐる。跡からあがつた(それも晝頃から來てゐたといふ)女は、淺草公園の待合〇〇の女將であつた。

菊子の口のはたの爛れはすツかり直つた樣だが、その代りに眼病の方がひどくなつてゐる。勤めをしてゐる時は、氣の張りがあつたのでまだしも病毒を抑さへてゐられたが、張りが拔けたと同時に、急にそれが出て來たのだらう。井筒屋のお貞が云つた通り、果して梅毒患者であつたかと思ふと、僕は身の毛が逆立つたのである。井上眼科病院で診察して貰つたら、一二箇月入院して見なければ、直ゐるか直らないかを判定しにくいと云つたとか。

かの女は黑い目鏡を塡めた。

僕は女優問題に就ては何も云はなかつた。

十二三歳の女の子がそとから歸つて來て、

『姉さん、駄賃お呉れ』と、火鉢のそばに足を投げ出した。顏の厭に平ベッたい、前齒の二三本缺け

た、鳥渡見ても、愛相が盡きる子だ。菊子が靑森の人に生んで、妹にしてあると云つたのは、乃ち、これらしい。話しばかりに聽いて想像してゐたのと違つて、僕が最初からこの子を見てゐたなら、ひよツとすると、この子を子役または花役者に仕上げてやりたいなどいふ望みは起らなかつたばかりか、吉彌に對しても亦全く女優問題は出なかつたかも知れない。今一人、實の妹を見たかつたのであるが、公園藝者になつてゐるから、そこにはゐなかつた。

『先生がいらツしやるぢやないか？　ちやんとお坐り。』から菊子が云つたので、子は澁々坐り直した。

『けいちやん、お前、役者になるかい？』

『あたい、役者なんか厭だア』と、けいちやんと云ふのがからだを搖すつた。

僕は菊子がその子をも女優にならせるといふ約束をこの通り見ないでゐても、それを責める勇氣はなかつた。

## 二五

『さア、やるから遊んでお出』と、菊子は二錢銅をほうり出すと、けいちやんはそれを拾つて出て行つた。

菊子も僕を置いて二階へあがつた。

二階では、――
『さア、絶體だ。』
『出る、出る！』
『助平だ、ねえ――？』
『降りてやらア。』
『行けばいゝのに――赤だよ。』
『そりや來た！』
『こん畜生！』
ぺた〳〵と花を引く音がしてゐた。

菊子がまだ國府津にゐた時、僕をよろこばせようとして、
『歸つたら、うちの二階が明いてるから、隔日に來て、あすこで、勉強なさいよ』
二階がいつもあの様なのだらう。見す〳〵墮落の淵に落し入れられるのであつた。未練がないだけ、僕は今却つて仕合せだと思つたが、また、別なところで、渠等の知らないうちにあゝいふ社會に這入つて、あゝいふ悪風に染み、あゝいふ樂しみもして、あゝいふ耽溺のにほひも嗅いで見たい様な氣がした。僕は掃き溜めをあさる痩せ犬の様に、鼻さきが鋭敏になつて、飽くまで耽溺の目的物を追つてゐ

たのである。

やがて菊子が下りて來て、

『お父さんはお花に夢中よ』と云ふ。まだ多少はしほらしいところがあつて、ちよツと顔を出せとでも云つて來たものらしい。會ひたくないと云つたのだらう。僕は、かのうなぎ屋で、おやぢが『こんなところでお花でもやれば』と云つたのは、僕をその方へ引き込まうとして、僕の氣を引いて見たのだらうと思ひ出された。

『なアに、どうせ僕は花はしないから――』

お袋はゐないし、おやぢは僕を避けてゐる。婆アやも狹い臺どころへ行つて見えない。

一昔も過ぎたかの樣に思はれる國府津のことが一時に僕の胸に込みあがつて來て、僕は無言の恨みをたゞ眼のにらみに集めたらしい。

『あのこはい顔！』菊子は眞面目にからだを竦ませたが、病んでゐる目がこちらを見つめて、やにツぽくしよぼついてゐた。が、僕にもそのしよぼ附きが移つておのづから目ばたきをした時、かの女は絳絹の切れを出して自分で自分の兩眼のやにを拭いた。

お袋がいづれ挨拶に來るといふので、僕はそのまゝ辻車を呼んで貰ひ、革鞄を乘せて、そこを出る時、

『少しお小遣ひを置いてツて頂戴な』と云ふので、僕は一圓札があつたのを渡した。

『二度と再び來るもんか？』から、僕の心が胸の中で叫んだ。
僕が荷物を持つて歸つたのを見て、妻は褥の中から頻りに吉彌の樣子を聽きたがつたが、僕は之を説明するのも不愉快であつた。
『あの位にしてやつたんだから、義理にもお袋が一度は來るでせう――？』
『さうだらうよ。』僕はいゝ加減な返事をした。
『吉彌だツてさうでさア、ね、小遣を立てかへてあるし、髢だツて、早速髷に結ふのに無いと云ふので、借してあるから、持つて來る筈だ、わ。』
『目くらになつちやア來られない、さ。』
僕の返事は煮え切らなかつたが、妻の熱心は『目くら』の一言に飛び立つ樣にからだを向き直し、
『えツ！　もう、出たの？』と、問ひ返した。
吉彌の病氣はさうひどくないにしても、罰當り、業さらしといふ敵愾心は、妻も僕も同じことであつた。然し、向ふが黴毒なら、こちらはヒステリ――僕は、どちらを向いても、自分の耽溺の紀念に接してゐるのだ。どこまで沈んで行くつもりだらう？
『まだ耽溺が足りない。』これは、僕の燒けツ腹が叫ぶ聲であつた。
革鞄をあけて、中の書物や書きかけの原稿などを調べながら、つく〲思ふと、この夏中の仕事は

しえんだ者へを持つて行つたのだが——たゞしオテートの紹介にかゝかが出來たに過ぎない それも今月中の喰ひ物の一つになつてしまうのだ。最も多望であつた脚本創作のことなどは、殆ど全く手がつかなかつたと云つてもいゝ。

學校の方は一同僚の取り爲しで甘く納つたといふ報告に接したが、質物の取り返しにはこゝ暫く原稿を大車輪になつて働かなければならない。

僕は自分の腕をさすつて見たが、何だか自分の物でない樣であつた。

## 二六

その後、四五十日間は、學校へ行つて不愉快な教授を爲すほか、どこへも出ず、机に向つて、思案と創作とに努めた。

愉快な問題にも、不愉快な疑問にも、僕は僕そツくりがひツたり當て塡る氣がして、天上の果てから地の底まで、明暗を通じて僕の神經が流動瀰漫してゐる樣だ。すること、爲すことが夢か、まぼろしの樣に輕くはかどつた。その癖、得たところと云つては、數篇の短曲と短い小說二三篇とである。金にしては何ほどにもならないが、創作としては、よしんば望んでゐた脚本が出來たとしても、その脚本よりかずツと傑作だらうといふ確信が出た。

僕のからだは、土用休み早々、國府津へ逃げて行つた時と同じ樣に衰弱して、考へが少しもまとまらなくなつた。そして、僕が殘酷なほど滅多に妻子と家とを思ひ浮べないのは、その實、それが思ひ浮べられない程に深く僕の心に喰ひ込んでゐるからだといふ氣がした。

『えゝッ、少し遊んでやれ！』

から決心して、僕はなけなしの財布を懷に、相變らず陰鬱な、不愉快な家を出た。否、家を出たといふよりも、今の僕には、家をしよつて歩き出したのだ。

虎の門そとから電車に乘つたのだが、半ば無意識的に淺草公園へ來た。

池のほとりをぶらついて、十二階を見ると、吉彌乃ち菊子の家が思ひ出された。誰れかそのうちの者に出會すだらうかも知れないと、あたりに注意して歩いた。僕はいつも考へ込んでゐるので、外へ出ても、こんなにそは／＼しい歩き方をすることは滅多にないのだ。

菊子はとう／＼僕の家へ來なかつた。お袋も亦さうであつた。ひよツとすると、菊子の目が全くつぶれたのではないか知らん？　或はまた野澤も、金がなくなつた爲め、足が遠のいてゐはしないか？　また、かの女は二度、三度、四度目の勤めに出てはゐないか？

から云ふことを思ひ浮べながら、玉乘りのあつた前を通つてゐると吾妻橋の近處に住んでゐる友人に會つた。

『どこへ行くんだ？』
『散歩だ。』
『遠いところまで來たもんだ、な。』
『なアに、意味もなく來たんだ。』
『どツかで飲まう』といふことになり、つれ立つて、奥の常磐へあがつた。
友人もうす〳〵聽いてゐたのか、そこで夏中の事件を問ひ糺すので、僕は或程度まで實際のところを述べた。それから、吉原へ行かうといふ友人の發議に、僕もむしやくしや腹を癒すにはよからうと思つて、賛成し、二人はその道を北に向つて車で驅けらした。
翌朝になつて、僕も金がなければ、友人も僅しか持つてゐない。止むを得ず、僕がゐのこつて、友人が當てのあるところへ行つて取つて來た。
『滑稽だ、ねえ？』
『實に滑稽だ。』
二人は目を見合はせて吹き出した。大門を出てから、或安料理店で朝酒を飲み、それから向島の百花園へ行かうと云ふことに定つたが、僕は千束町へ寄つて見たくなつたので、先づ、その方へまはることにした。

僕は友人を連れて復讐に出かける樣な意氣込みになつた。もつとも、酒の勢ひが助けたのだ。

朝の八時近くであつたから、まだ菊子のお袋もゐた。

『先生、濟まない御無沙汰をしてゐまして――一度あがるつもりですが』と、挨拶をするお袋の言葉などには、僕はもう頓着しなかつた

『菊ちやんの病氣はどうです？』僕は敵の本陣に切り込んだつもりだ。

『あの通り、段々惡くなつて來まして、ねえ』と、お袋は實際心配さうな樣子で『入院しなけりやア直らないさうですが、それにやア每月小百圓は入りますから――』

『野澤さんに出してお貰ひなさいな』と、僕は菊子に冷かし笑ひを向けた。

『さう甘くも行きません、わ。』かの女も笑つて目鏡を片手で押さへた。

その樣子が可哀さうにもならないではないが、僕は友人と共に、出て來た菓子を喰ひながら、誇りがほに、昨夜から今朝にかけての滑稽の居殘り事件をうち明けた。禮を踏まない渡瀨一家のことは、もう、忘れてゐるといふことをそれとなく知らせたかつたのだ。すると、お袋が、それを悟つたか、悟らなかつたか、

『もう、先生、居殘りは困ります、ねえ。私共も國府津で困りましたよ。先生はいらツしやらない、奧さんはお歸りになつた、これと私とでどんなにやきもきしたか知れやアしません、わ。』

『然し、まア、無事に濟んだから結構です』と、僕は飽くまで冷淡だ。
『どうして、先生、私の方は無事どころぢやア御座いませんの。あれからと云ふものは、毎日々々、この子の眼病の話で、心配は絶えやアしませんよ。』まだ僕の同情を買はうとしてゐるらしい。
『いゝ氣味だ！』僕の心は、然し、から云つてよろこんだが、考へて見ると、僕の家には、妻も亦重い病氣にかゝつてゐるのだ。菊子の病氣を冷笑する心は、やがて又僕の妻のそれを嘲弄する心になつた。僕の胸があまり荒んでゐて、——僕自身もあんまり疲れてゐるので、——單純な精神上のまよはしや、たわいもない言語上のよろこばせやで滿足が出來ない。——同情などは藥にしたくも根が絶えてしまつた。

　僕は妻のヒステリを以つて菊子の毒眼を買ひ、兩方の病氣を以つてまた僕自身の衰弱を土培つた樣なものだ。失敗、疲勞、痛恨——僕一生の努力も、心になぐさめ得ないから、古寺の無緣塚をあばく樣であらう。たゞその朽ちて行くにほひが生命だ。
　から思ふと、僕の生涯が夢うつゝの樣に目前にちらついて來て、そのつかまへどころのない姿が、而もひた／＼と、僕なる物に浸り行く樣になつた。そして、形あるものはすべて僕の身に緣がない樣だ。
　僕の目の前には、僕その物の幻影よりほか浮んでゐない。
『さア、行から』と、友人は僕を促した。

『これから百花園に行くんです』と、僕も立ちあがつた。

『冷淡！　殘酷！』から云ふ無言の聲が僕のあたまに聽えたが、僕はひそかに之を辯解した。若し不愉快でも妻子のにほひがなほ僕の胸底にしみ込んでゐるなら、厭な菊子のにほひも亦永久に僕の心を離れまい。この後とても、幾多の女に接し、幾度かそれから來たる苦しい味をあぢはふだらうが、僕は、その爲めに窮屈な、型にはまつた墓を掘ることが出來ない。冷淡だか、殘酷だか知れないが、衰弱した神經には過敏な注射が必要だ。僕の追窮するのは即座に効驗ある注射液だ。酒の如く、アブサントの如く、そのにほひの強い間が最もきゝめがある。そして、それが自然に壓迫して來るのが僕等の戀だ、あこがれだと。

から云ふことを考へてゐると、いつの間にかあがり口をおりてゐた。

『どうか奥さんによろしく』と、お袋は云つた。

菊子は、さすが、身の不自由を感じたのであらう、寂しい笑ひを僕等に見せて、なごり惜しさうに、

『先生、私も目がよけりやアお供致しますのに――』

僕はそれには答へないで、友人と共に、

『左樣なら』を凱歌の如く思つて、そこを引きあげた。

――(四十一年八月)――

# 榮　吉

甲州の東山梨郡、七里村の鹽山温泉と云へば、昔から、山梨縣下では有名な湯である。諸方から入浴客が絶えないので、——して、それがまた田舍客、それでなくば、甲府などから色女や色男を引つ張つて來る客が多いのだが、——汽車が通じてからも、東京や横濱の人々を引き寄せる工風もなく、湯場の設備も不完全で、湯の性質分析表さへ内務省のは取つてないといふ有りさま。それでも繁盛するのだからよからうといふ風で、旅館などでは、頗るのんきな、大樣な接待ぶりを以て滿足してゐる。海老屋といふのが堅儀で、親切で、最も評判がいゝ。そこに三名物がある。つんぼの小僧捨藏、主人の勤、湯番頭の榮吉である。

つんぼと云つても、捨藏のは丸で聽えないのではない。少し大きく呼ぶと、必らずこちらを向いて小頸を傾ける、その樣子と受け答へとがなか／＼愛嬌があつて、人に厭な氣を起させない。して、おとなしい滑稽を厭みなく云ふのが癖だ。

「おい、小僧さん、お前の年はいくつだ？」

『十七――一つの時もあつたです。』

かういふ調子で、廊下の拭き掃除や何かをやつてくれる。夏の急しい時などは、寝が足りないのだらう、たまには、雑巾を持つた手をのばしたまゝ、板の上にからだを長く横たへ、ぐう〳〵いびきをかくことがある。

之を大きな太い聲で督勵するのは主人の勤だ、年は三十五で、十五をかしらに三人の兒がある。丸く肥えた、立派な體格の癖に、神鳴りと云つたら、死ぬよりも嫌ひで、小供やおかみさんに笑はれたり、冷かされたりしても、そんなことはおかまひなしに、何んでも三段になつた家根の下がいゝのだと、瓦葺きの下の天井の下に蚊帳をつらして、その下にちいさくなるのだ。

この家はもとおかみさんの兄の物であつたのだが、兄が死んだので、二人の手に渡つたのだ。主人はもと鹽山の巡査を勤めてゐたのだが、夜警の途中で大雷に出くはし、腰を拔かした。それが爲めに免職となつたが、主人の方では、また、こゝの様に神鳴りの多い地方で巡査などするのは、もう懲り懲りだと云つた。海老屋の主人の神鳴り嫌ひは近處切つての大評判である。

湯番頭の――湯坊さんといふ――榮吉は、また、無頓着、無愛相、ぶツきら棒の獨身者で、瘦せて丈の高いことゝ云つたら、丸で天秤棒をつツ立てた様だ。心も素直で、正直で、自分のやるべき仕事となれば、夜中から起きて湯を沸かしたり、曉け方にうめ湯をしたり、湯場の拭き掃除をしたり、桶

をかついで水を汲み込んだり、もう、何でも慣れてゐるので、決して人の干渉を許さない。氣に向けば、おまけに人の受け持ちまでも手傳つてやる。そこの主人よりも古い家つきで、さらに野心もない、望もない、たゞそれだけの男だ。夏などは、衣物なしの赤い腹がけに、赤い褌――『丈高童子』の仇名は實に最も適中してゐるのだ。

ぶつきら棒な男に、ぶつきら棒な言葉づかひ、鳥渡知らないものには物凄い感じを與へるのが、その堺隈の小供の單純なあたまにもしみ込んだのだらう。

『榮吉さんが來た！』といふのは、鬼やおまはりさんが來たといふよりもおそろしいのだ。泣く兒などは、この一言で泣き止むのが習慣になつてゐる。

『おい、榮吉さん、あついぢやアねイか？』と、男客。

『湯があついのア當りめイだア。』

『少しうめておくんな』と、女。

『もう、うめてありますよ。』

かういふ調子で、この湯坊さんは客に對するのだが、知つた客は別におこりもしない。面白い奴だと云つて、每度心づけをしてやる。渠はそれを直ぐ飲んでしまう。有名な女嫌ひで、その代り酒よりほかに樂しみはないのだ。

六歳の時榮吉はその父につれられてこの家に來た。父は甲府の者で、何かの故にその妻と別れ、ここへ來て下男の湯番頭に住み込んだのだ。十數年間は忠勤したが、大酒飲みが源因のひどい中氣になり、何の役にも立たないので、自分の子を代理として、自分は鹽山のふもとに小い小屋がけをして、そのうちに寢起する身となつた。それが榮吉の二十歳前後の時だ。

田地もないから百姓の道は知らず、店も持たないから商買のことは知らずに、たゞ野育ちに育つて來た榮吉――湯坊さんの二代目だけはお手の物であつた。鹽山温泉は沸すのであるから、毎日、湯の加減から、湯錢の勘定まで、主人から心配なくまかせられてゐて、夜の十時頃になるとその日の湯を抜き、新たにポンプで汲み入れて、翌日のを沸かし初める。たゞおんなじことを繰り返してゐるのだ。

『ありやア親が親だから、馬鹿づら』といふものもあれば、

『あんだことをばかりしてゐて、いつ所帶が持てるら?』と、疑ふものもあれば、

『女を嫌ふなどア、早、片輪だアな』と、てんで相手にしないものもある。

そんなかげ口を鳥渡でも聽くと、榮吉は眞ツかになつて、おこり出し、今にもその力強い腕をふり上げて、ぶち殺さずには置かないと云ふ權幕を見せる。それが主人でも、友達でも、男でも女でも、區別はない。ひツそりした割り合には非常に神經質だ。その癖自分が人の惡口を云ふ時は、人よりも五層倍、十層倍の毒舌を當人の目の前で吐くのだ。

或時など、入浴客をぶちのめして、氣絶さしたことがある。主人が出てあやまつたので事は濟んだが、榮吉自身は一言も詫びを云はなかつたさうだ。飽くまでも途中で折れない天秤棒だ。

然し、時によると、渠自身も、

『こんだことをしてヰて、どうなるら？』といふ樣なことを考へないでもないが、酒を飲めば忘れてしまう樣だ。

はじめは、おやぢが面白半分に醉ツぱらはしてよろこんでゐたのが、段々自分から進んで盜み飲みをする樣になつたが、おやぢの責任を自分が引き受けてからは、どうせくたばツてしまうおやぢに飲ますのが惜しいくらゐに、自分ばかりで飲みたくなつた。

ちび〳〵貰ふ金が酒になるのかと思ふと、可愛くツて、可愛くツて堪らないのである。その形である間は、錢勘定ばかりをしてゐる。それも五錢、十錢と云つて勘定するのでなく、一合、二合、三合と數へるのだ。そして、人におごツてやることはない代り、人からおごツて貰ふことは喜ぶ。つんぼの捨藏が、新米だけに氣を利かして、時々酒屋へつれて行つてやる。一合入りのコップに冷酒をなみ注がせ、

『どうだ、飲まんか？』とすゝめると、

『濟まねイ、なア』と云ひながら、一息に飲んでしまひ、けろりとしてゐる。餘り愛相がないので、

『どうだ、今一杯』と出すと、
『濟まねイ、なア』とまた一息だ。
三杯でも、四杯でもその通りで、少しも赤くならない。
『榮吉さんの酒には底がない』と、知つたものは不斷その方の相手をしないのだ。
それで、榮吉は時々眞理を吐く。『湯はあついものだア』もその一つだ。また或時、主人の勤が村の衞生會議に出て行つた跡で、ごろ〳〵神鳴りが鳴り出したので、おかみさんが心配して、
『榮吉、迎へに行つて來う』と命令した。
榮吉は主人を迎へて、桑畑の近路を歸つて來るとたん、ごろッと一つひどいのが鳴つたので、主人は地べたにへたばつた切り、
『桑原、桑原』と云つてゐる。腰が立たないのだ。榮吉は反對に、
『旦那、云はねイでも桑原だア』と、勵ましながら、太い男を高い男がしよつて、歸つて來た。
その間に、近くは鹽山を後ろに、左の笹子峠から甲府の山までは晴れ渡つて、駿河の方面ばかりが、富士山も隱れて、ひどく曇つてゐる。この時、
『もう、早、大丈夫でさア。近い天道の曇つてる神鳴りやアこわえけんど、遠いとこで鳴るのア、いくらでけイんでも、落ちる心配アねイ』といふ眞理を吐いたが、主人は榮吉の言葉を信用しないで、

『そんだことを云つてられるもんか？』と、急いで蚊帳の中へもぐり込んだ。

『生れつきの病氣だから、仕かたがねイ。』

榮吉はから冷笑して湯場へ戻つた。渠と主人とは同年だ。かういふ風に、時によると、主人が榮吉か、榮吉が主人か分らないほど、見識の轉倒することがあるのだ。

榮吉は曾て泣いたこともなく、笑つたこともない。また一直線に眞面目な心に浮ぶことが平凡な哲理となるのだが、たゞ一つ奇抜なのは、

『生れて來ない方がよかつた』といふことだ。

『ふんぢやア、好きな酒も飲めねイぜ』と、からかふものがあると、

『その時ア、好きも嫌いもなくならアな。』

『女を拵へねイから、そんだことを云ふらア』と、冷かすと、

『女といふ奴ア臭いもんだア。』

この一言には誰れも反對するものはない、どういふ意味に解釋するのか分らないが、一般の男子はもつともだと思つてゐるし、女どもゝ、榮吉の前を通りすがる度毎に、之を思ひ出して、何だか濟まない樣な氣がするさうだ。

「いくらでも洗つてやれるぢやアねイか？」と、たまに反問するものがあると、

『根が臭いんだから、洗つても駄目よ。』
『ふんぢやア、榮吉さんはどこから生れて來たら？』
『だから、生れて來ねイ方がいゝと云ふんだ。』
この答へは少し辻褄が合はない樣だから、
『もう、早、通り過ぎてらア』と笑はれても、
『鼻さきに散らついてらアな』といふ理由が附く。
よく／＼女嫌ひと見える。毎日、午後から夜にかけての湯場は、近所のものらが賑ふので、かういふ一種の厭世哲學問答が絕えないのだ。
よく聽いて見ると、榮吉は全く女に關係がなかつたのでもない。今から十二三年前、暫く同家へ出入りした目くらの女按摩――年は十八――があつた。遲くまで仕事のあつた時はそこに止まるのを常としてゐたから、いつの間にかそれに手を出した。して、目の見えないのをしほに、からだ中を嗅いで見たのだ。
世間では、若い者らがどこの娘はどうの、かしこの娘はかうのと、女ばかりで騷いでゐるのに、自分ばかりは犬ッころだけもかまつてくれるものがないのを、一時は、殘念に思つてゐた。それが、兎に角、世間で酒よりも、何よりもいゝと云ふ女といふ物に初めて出くはしたのだから、どんなにいゝ

のだらうと思つたら、どこかどん百姓のにほひがした。榮吉は百姓と肥え桶とを大嫌ひなのだ。自分もそんな臭い中から生れて來て、そんな臭いにほひに育つ米麥を食ふのかと考へると、如何にも生れて來ない方がいゝ樣だ。

「酒はそんなにほひがしねイ」と、榮吉は怒つて、一合、二合と數へる錢を女が要求するのを拒んだ。

『けちな野郞め！』とあざけられても、榮吉は平氣であつた。

その後、また洗濯女にもひツかゝつたが、やッぱり金が惜しいのでつゞかなかつた。

榮吉が金を大事がるのは酒が飮みたいからである。して、醒めてゐる時は、仕事と常談とに忙しい鼻さきに例のにほひが散らつくし、泥醉してゐる時は、寂しい感じも起らない。つまり、女をしんみり思ひ出す時が殆どないのだ。

無意氣な代りに、思いやりがないので、庭鳥を締めるのは、いつも渠の役目だ。

『やい、榮吉、鳥を剝け』と云はれると、直ぐ無言で一匹を引ッさげて庭の隅へ行き、鳥渡の間に羽根を剝いて來る。その手早さと云つたら、ない。

主人の子供が可愛がつてゐる牝犬に、二匹の兒が生まれて、それがちよこ〳〵歩きをする樣になつた時、赤い腹がけの榮吉を見て、自分の若主人と見違へ、その足もとにまとひついて來た。すると、榮吉は、

『この野郎！』と、厭といふほど、一匹の小犬の横ツ腹を蹴飛ばした爲め、小犬はその場で死んでしまつた。

『あれだら、親でも蹴殺すだア』とは、そこの家族のものらの云ひ分であつたが、兎に角、小屋がけのおやぢが生きてゐる間は、一定の仕送りを缺かしたことはなかつた。然し、おやぢが死んだ時、自分で穴を掘り、自分で土を埋め、自分で南無阿彌陀佛の一つも唱へた樣子が、蹴殺した小犬を葬つた時と對して違ひはなかつたさうだ。

おやぢが、死んでからは、その仕送りに使つた金も飲料になるので、以前よりも多く飲める樣になつたわけだ。それが爲めだらう、段々からだが不健康になつて、風を引いたり、腹を下だしたりすることが度々であつたが、遂ひに昨年の春、急性肋膜炎に罹り、すんでのことで死ぬところであつた。

家のものが看護にばかりかゝつてゐられないので、甲府からお袋を呼び寄せてやつた。六歳から見ない子ではあるが、さすが女だけに、『お前が榮吉か？』と、その枕もとに泣き伏して久濶の情と瀕死の狀態とに堪へかねて、暫く顏をあげ得なかつた。

榮吉はそんなことには平氣だ、寢床の中にうめき、苦しみながら、兩の眼に出てゐる涙は、たゞ自分が天秤棒の七轉八倒、死の苦悶のしるしばかりであつた。

あひまを見て、おかみさんが、

『やい、榮吉、お母が來てイ』と、注意すると、榮吉は涙にうるんだ眼をそゝいで、じろ〳〵お袋の顔を見てゐたが、

『おれを產んだなアお前か？——なぜこんだ臭い婆婆イひりつけたゞア？』

渠には人間の臭いと嫌ひと苦しみが一つになつてゐたのだ。

お袋にはそんな哲理は分りッこがないので、

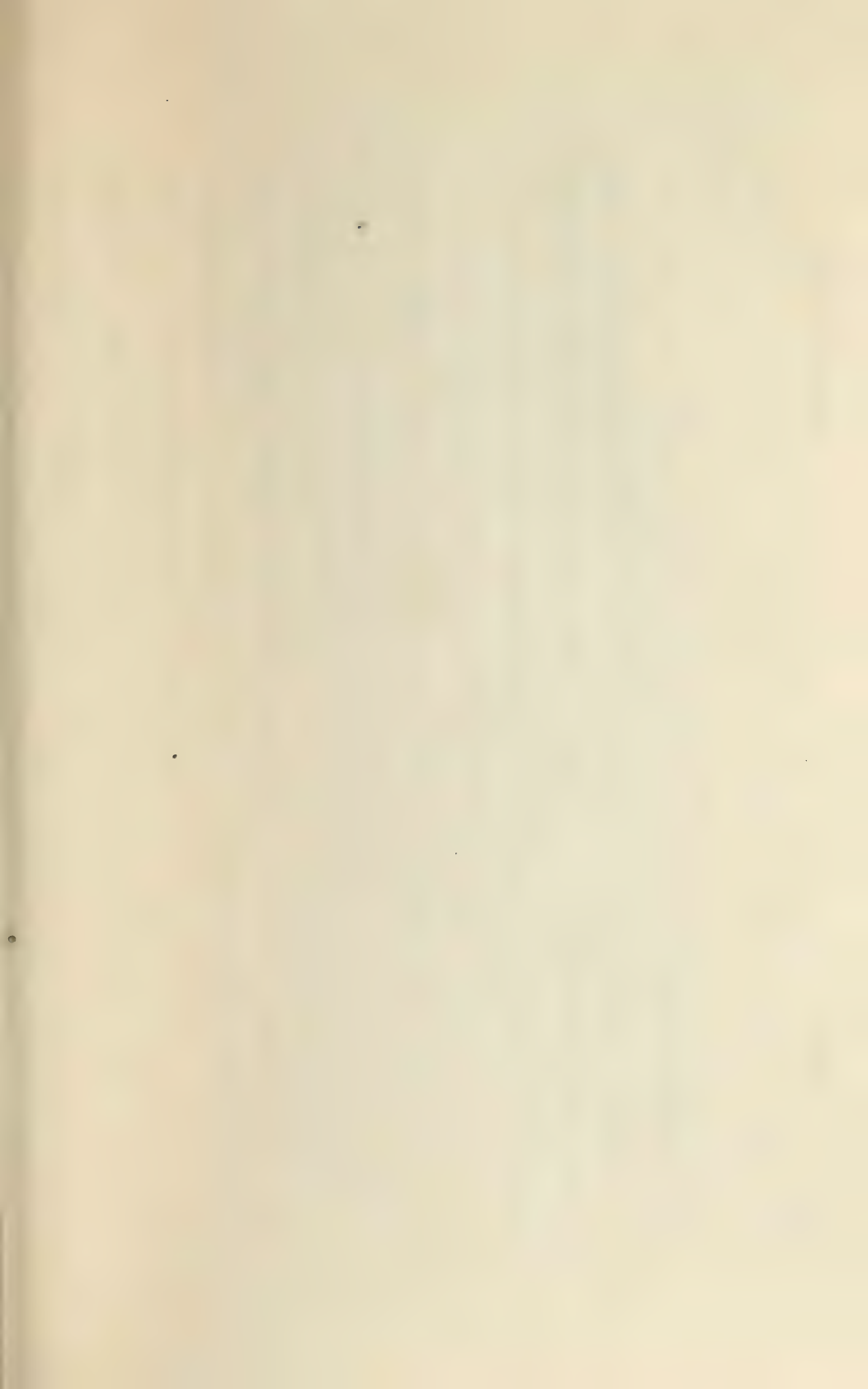
『そんだこと云はねイで、さア』と、かの女は榮吉がそッ方へ寢返りした肩を押さへ、『わしやアお前をぶちやアたが惡い。これから十年分も二十年分も一遍に大事がつてやるからよ。』

兎に角、それで、こゝの家族は看護の手が省けた。榮吉も段々致命のさかひを脫して來たが、なかなか全快しさうでないので、多少氣の毒だといふ考へが出たのだらう、その望みに從ひ、お袋につれれて甲府に行き、そこで二三箇月も養生した。して、全快の後、また鹽山へやつて來た。

海老屋の湯場の名物は再び歸つて來たのだ。

今度は餘り酒を飮むのは良くないと自覺したし、主人も成るべく飮ませない樣にするし、おやぢへの代りにお袋への仕送りも約束してあるし、自然、泥醉することなどは少くなつたが、やッぱり公然飮めない時は、こッそり飮みに行くのだ。それが爲めの財布はいつも赤い腹がけを離れない。して、飮めば同じ眞理を吐くし、自分も亦もとの榮吉よりほかではない。

『ありやア所帶の持てねイ馬鹿だア。』
『女嫌ひもいゝ加減でよからう。』
『あいつァひり出された時のにほひをおぼえてゐやアがるか？』
『なアに、氣が堅いづら。』
かういふ評判は相變らず繰り返されてゐるが、榮吉は泣きもしなければ、笑ひもしない。
『お前さん　となら、
　わしや　どこまでも
財布　片手に
　尻よ　はしより。』
といふ、自製の歌をうたひながら、湯場の世話をやつてゐる。今年、三十五歳のつッ立つた男だ。湯つぼのポンプが曉け方ごとん／＼鳴り出すと、海老屋にとまつてゐる客は先づ榮吉の生眞面目な姿を浮べて夢を拂ひ、それから寢床を起き出し、楊子をくはへて湯に這入りに行くのである。

——（四十一年九月）——

# 結婚

僕が大阪で某印刷會社に這入つてゐる時のことだ、同輩の活字ひろひの一人に、片山春雄といふ男があつた。沈默寡言、少しも他の同輩とは親しまないで、來てから歸るまで、こつ〳〵と仕事をするのだ。『その次ぎや、トウだ、ノボルだ、朝日のノボルだ』といふ樣な呼び聲に應じて、最も早くその字を拾ふものは渠である。まんざら無學から成りあがつた字拾ひではなく、僕と同樣、一時の事情があつてこんな者になり下がつてゐるのだらうと思はれた。

僕はこの男と同じ組であるから、始終その樣子をにらんでゐたのだが、僕は他鄕の空に獨りぼッちの寂しさを堪へかねてゐるところなので。――また一つは、どういふ事情があつて、こゝに來たのかを知つて見たい好奇心から、――段々渠に接近する樣に努める。渠も亦僕にばかりは接近する。

『鳩はこちらにありましたよ』とか、

『ぢやア、ルビの方がこれです』とか、

『一服吸はうぢやありませんか』と、同じ火で二人が煙草に火をつけるとか、

かういふことをしてゐるうちに、互ひに一方の穢い下宿を訪問する間柄となつたのだ。

然し、渠は少しも自分の身の上をうち明けない。

『職工といふものはいつも詰らんことばかり云つてゐます、な。』

『云つてるばかりではありません、してゐるのです。』

『社會主義、社會主義などいふ聲が聴えますが、一體あいつらに分つてゐるのでしやうか?』

『どうせ、雷同に定つてゐます。』

『もつとも、僕にも分らないのですが、若し分つたなら、して、僕の今の心が世の中に生てたいといふ氣になれば、或は僕も實際の社會主義に改宗する方がいゝかも知れません。』

『さういふお考へですか、ね?』

『僕は職工など決して好んでやつてゐるのではないです。これは、もつとも、君だとて同じでしやう?』

『無論、お互です。』

かういふ風に僕は受け答へをしながら、渠の多少奮激してゐる機に乘じ、そのありさうな物語りを聴かうとして、先づ僕の身の上ばなしをする。

『君も酒の毒です。なア』と、渠は慨歎する樣子であつたが、さて、

『君はまたどうしたのです?』と、問ひかけると、

『僕には云はれない秘密があるのです。』

渠はいつもから云つて深入りさせぬ。

僕は、馬鹿にされてゐる樣だから、斷然交際を絕たうかと思つたこともある。さうかと云つて、また、渠から頻りに親しんで來ることもあるので、やツぱし友人としてつき合ひをつゞける。

一緖に中の島公園をぶらついたり、千日前を冷かしたり、また無けなしの金を出し合つて、あすこのしツぼく、かしこの金時といふ風に、身分相應の名物を喰ひまはる。

或時、僕等ふたりに賞與金が出た。ふたりが他の職工より違つた働きをするからだらう。

『社長が僕等を認めて來ました、な。』

『それが當然でさア。』

面白い風が吹いて來さうだから、一つ記念の爲めにボート遊びに出かけやうではないかと、僕等は二人乘りのボートを淀川の本流に浮べ、渠が先づ舵を取るので、僕は止むを得ず左右の櫂をあやつる役だ、僕は島國生れだから、多少船を行る道を知らないではないが、西洋式は初めてゞある。

『君、櫂の方をどうです?』と僕、が云ふと、

『僕アからだが弱いから、この方がよろしい』と、渠は船のともべを動かない。

不斷から、僕は渠の瘦せて、色つやが惡く、物を云ふにも手が顫つたりするのを見て、餘ほど神經

をなやましてゐる男だと思つてゐたが、この答へで見ると、渠自身も之を自覺してゐて、骨の折れないコックスの方へ先まはりをしたのらしい。それにしても、僕の櫂があやしい上に舵取りがあやふやでは困るのだ。

雨の降つたあげくだから、流れは急だ。果してコックスの舵は殆ど利いてゐない。

『船長、しツかり頼みますよ』と、僕は渠を勵ましながら、左右の櫂で心持ち舵を取つて流れをさか登る。

中の島の郵便局や公園を左舷に見てのぼり、公園の鼻を離れると、川は二倍の廣さになる。

『どうです、愉快ぢやありませんか？』と、僕はこゝへ出てからゆつくり氣の合つた放談でもしやうと思つてゐたのだが、渠の顏は眞ツさをになつてゐる。

『どうかしましたか？』僕は驚いてから尋ねる。

『なアに、どうもしませんが、隨分骨が折れます、な』と、渠はうしろをふり返へる。舵によツぽど氣を取られてゐるらしい。

『ちやア、もう引ツ返しましようか？』

『どうぞ、さうして下さい。』

僕も隨分手が疲れて來たのだが、渠の舵を引く方へ櫂をあしらひながら、舟の方向を轉じやうとす

るうちに、舟は横ざまに流れて、もう、公園の鼻を通り過ぎてゐる。

『下だるのは早いです、なア？』と、僕が云ふと、渠は、苦しさうな低い聲で、

『よほど橋ぐひのところを氣をつけねば――』

一つは無事に過ぎたが、二つ目の大川橋の手前で、石船のさかのぼるに出くはし、それを避けやうとして、僕等は方針を失つた。どんと橋ぐひにぶツつかるが最後、コックスは水中にころげ込み、僕はまた一方の櫂を流す。あわてゝ船中につツ立つと、舟はそのまゝ流れて行くが、友人が見えない。

暫くすると、橋ぐひにせかれて渦卷く流れの末に、渠のあたまが浮んで、

『助けて呉れッ！』と一言、またそのまゝぶる〳〵云つてゐる。

これまでだと、僕は帶を解き、衣物を脫し、友人を助ける爲めに急流に飛び込む。

幸ひにして、大川橋から約一丁しものあたりで、僕等は岸にあがることが出來たのだ。

それからと云ふもの、渠は僕を無二の友人として、渠の所謂いのちの親として、取り扱ふ樣になつたのだ。そのうち明けたところに據ると、前橋の在の男で、渠には忘れられない戀人がある。向ふでもこちらを思つてゐる。然し、女のおやぢが兩方の思ひをかなはせない。と云ふのに、この女を自分の家の嫁に貰ふ下心で、おやぢ――有名な酒飮み――に分不相應な金を貸してある叔父があつて、厭といふなら、直ぐ、あすからでも乞食になつてしまへ、家田地はこちらの物だと、强慾な督促だ。お

やぢは飲んでゐさへすれば極樂といふたちだから、金のある兄の云ひ分にこそ靡け、一介の貧書生に向つて自分の飲み料なる娘を呉れやうと云ふ筈はない。

終に、女は、おやぢの強迫のもとに、つらい手紙を認めた。止むを得ず從兄妹同士の結婚をする、どうかこれまでとあきらめて、お島(女の名だ)は人が變つたと思つて呉れろと。附け加へに、『あなたのお心ざしは身にしみて一生忘れません』とある、その個所には涙の跡もあつたのだ。

然し、渠はその手紙を引き裂き、あすと云はず、故郷を飛び出し、堪へ切れない思ひ出を忘れやうとした。成るべく遠い方がいゝと思つて、わざ〳〵大阪へ來て、わざ〳〵詰らない印刷職工になつた。

『この片山はいつも死んだ方がいゝと思つてゐますが、まだ女に恨みがあるだけ、詰らない浮世の未練が去らないのでしやう、川へ落ち込んだ時、矢張りあなたに助けて貰ひました。』

渠はかう僕に白狀したのだ。

『ぢあア、氣の弱い女でしやうか?』と、僕が駄目を押して見ると、

『いや、僕はまだ何となく島子が僕を思つてゐる樣な氣もするのです』と、答へる。

その後、名殘り惜しかつたが、僕は渠を置いて仙臺へ行つたのだ。某氏に就いてもツと修養をしたかつたからだが、某氏の主裁する學校には、いろんな人間が收容されてゐる。貧書生もあれば、老壯士然たるものもある。無思想の鈍物もゐれば、大志を抱いて無事に苦しんでゐるものもある。僕は片

山のことを思ひ出したので、校長にその人物を紹介すると、
『では、呼んで見るがいゝ』といふことになる。片山も喜んでやつて來る。僕等ふたりは、寄宿舍の同室を占領して、またもとの交際をつづける。學科は共に邦語神學をやつてゐるのだ。
渠は戀の話しをしないし、僕も亦違つた境遇にかまけて、渠の失戀事件などは忘れてゐる。たゞ渠の顏色と身體とが、大阪にゐた頃よりも、ます／＼衰弱して行くのを心配するばかりだ。
『僕はもう勉強に堪へられん』と云つて、兩手であたまを押さへ、机の上につッ伏してしまう時もあれば、
『あゝ、寢ても起きてもゐられん』と、叫んで、夜中、寢床を飛び出し、どこかを歩いて來ることもある。
或時など、宮城野に行くと云つて出て行つたまゝ、五時間も六時間も歸つて來ないので、僕は心配して跡を追つて見ると、宮城野の眞ン中に仰向けに寢そべつて、ぐう／＼いびきをかいてゐる。よくよく神經が衰弱してゐたと思はれる。
からだが瘠せてゐる上に、敷き布團が薄いから、骨が當つて痛いいたいと云つたのは度々だ。
『僕アもう歸らうか知らん？』かう渠が云ふから、僕が
『どこへ歸るのだ？』と聽くと、それッ切り默つて、寂しく笑つてゐる。

そのうち、渠の叔父なる人からあつみのある郵便物が來た。十二錢も印紙を貼つた普通郵書だ。渠は何事かと開らいて見ると、叔父の短い書翰のほかは、すべて島子の片山によこした手紙がいくらもある。それで分つたことだが、島子は結婚の當日まで素直に親の云ふ通りになつてゐる風を見せ、その當日になつて、姿を隱したのだ。貰ふ方から迎へに來て見ると、肝心の本人がゐない。それで、一つは、燒けツ腹からでもあらう、之はてツきりおやぢと申し合の上逃げたのだとが鳴り出し、即座におやぢを追ひ出して、家宅田地を奪ひ取る手續きをしたので、おやぢもその仕うちを怒つたが、仕かたがない。小い小屋を作つて、そこに乞食同然の生活をしなければならなくなつた。島子もそこへ行つて、一緒に住まひ、人の手傳ひなどに賴まれて儲けた金を以つて、おやぢの好きな酒を飲ましてゐるのだ。かの女の數多い手紙には、まはらぬ筆を以つて、その狀態やら心持ちやらを書いてある。

渠はそれをすべて僕に見せ、

『言々句々みな僕の腸をえぐる』と云ふ。

女が本意でもない手紙を書いたのはお氣にさはつただらうとか、その後どこに行つてゐるのか知らして呉れいとか、おろかな自分の心はどうせ屆かないか知れないが、叔父さん方に宛てゝ幾度も手紙を出すうちには、一つ位はお手元へ行くだらうとか、自分はたゞ一人を思つて、身も心も瘠せて行くばかりだとか、かうして辛抱してゐるうちには、いつか自分の誠が屆いて、お目にかゝれる時があら

うとか、若しこの世で再び會はれないなら、後の世で會はうとか、丁度、友人が男として思つてゐることが、女の言葉となつてひし〳〵胸に堪へて來る。

叔父は、また、かういふ手紙などを見せると、甥が出世の妨げになると思つたから、そのまゝあづかつてゐたが、餘り女の情の切なさを思ひやるにつけても、見す〳〵それを蛇の生殺しにするよりも斷然思ひ切らす返事を甥から出さす方がいゝと考へたらしい、數々の書面でも分る通り、どうせ乞食同樣になつた女は細君に貰へまいからといふことが附け加へてある。

叔父の郵便はありがたいが、叔父自身の云ひ分は情けない。渠は叔父の手紙を破り棄て、その他を一つに抱いて號泣したが、また一つ〳〵を選り出しては、讀んでゐる。

無言だ。

手は顫へ、からだはびくつき、心臟は平脈を越えて動悸を打つてゐる。顏はこれまでに見ない良い血色を呈してゐる。

それが落ちつくと、また、不斷にない優しい顏になつて、手足の筋肉がゆるんだかの樣に、やわらかい輪廓がその袖や裾にあらはれる。

全身の氣力はたゞその手紙の上にばかり集り、目が觸覺の代りをもして、その暖かい言葉に觸れ、渠は實際、曾て初めて握つて見た女の手のぬくみを、夢の樣に感じてゐたのだ。

『あのおぼろ月の夜はお忘れなさるまじ。あなたとわたしとは直ぐあすにも結婚出來るものとおもひました。』

『あなたにお手傳ひして貰ひましたお蠶の家はもう人の物になりまして、わたしは今風も自由に吹き込むわら葺きのあばら屋に住まひしてをります。』

『わたしは月の光にもさいなまれる乞食女も同然で御座ります。然し、心はすッかりあなたにおまかせ申してあります。』

『毎夜、あなたを思ひて床につき、毎朝あなたに抱かれて起きる夢を見るのは、まだしも寂しい中の樂みで御座ります。』

かういふ文句を渠は夢中になつて、幾回となく拾ひ讀みをしてゐると、じやん／＼夕飯の鐘が鳴つて、各室の學生はどや／＼二階の段を下りて行く。渠は、ふと、氣がつくと、遺精をしてゐたのだ。僕は神經衰弱の極だと思つた。僕が食事を濟まして室に歸つて來ると、渠は床に這入つてゐる。同夜はそのまゝ通したのだ。翌朝になつて、

『僕ア歸る』と云ひ出す。

『ぢやア、いよ／＼島子さんを救つてやるのか？』

『かれを救ふのは、乃ち僕を救ふのだから。』

渠はから云ふ決心で仙臺を出發し、渠の叔父の立ち會ひで島子と結婚した。
僕はまた神學など、くそ眞面目な物は厭になり、再び放浪する氣で東京へ出る。
片山とはその後相會ふ機會がないが、結婚後一年ほどして、身體も丈夫に前橋の郵便局に勤めてゐるといふ知らせがあつた。
その後亦子供の出來た通知があり、臺灣に轉任したといふ通知があつた。
渠はとう〳〵結婚のために意氣込みもない無名で、安樂にこの世を通る、平凡人の圏内へ這入つて了つたのである。

――(明治四十一年十月)――

# 篠原先生

『あの先生も、奥さんと娘さんとを無くしてから、がらり人柄がお變りになつた』と云はれてゐる。芝の區會議員篠原勇は、實に世間のうはさ通り、この頃では、人間が一變した。

昔から四國町に住んで、薩摩ツ原を開いたことには、この人の盡力が大いに與つてゐる。渠はその爲めに可なり廣い地面と家屋とを自分の名義にすることが出來て、そこに私立の小學校を建てゝゐた。また、夜學を設けて、多くの徒弟を養つた。教師は渠と渠の細君と一人の傭ひ女教師とであつたが、渠の教へを受けたものらは方々の商店の主人やおかみさんになるに從つて、篠原先生といふ一つの勢力が三田界隈に出來て、町内の相談事の持ち込みどころとなつた。

私立の小學校が餘り勢力がなくなつた頃から、その方は專ら上の娘の高等女學校を出たのにまかせツ切りで、細君は公立小學校の準教員に出で、篠原自身は〇〇中學の國語漢文教師を勤めてゐた。然し、生徒間から篠原は法螺吹きだといふ不人望を被むり、そこをよす樣になつてから、渠は國で有する田地の開拓に身を入れるつもりになり、細君を辭職させて田舍の方の監督に送つた。その頃から篠原

は芝の區會議員になつてゐたが、元來が野心家だけに、次回の代議士選擧には、候補者として國から打つて出る準備の爲め、細君に云ひふくめ、田舍の有名な舊家を標榜して、多少の地盤を固めさせてゐた。

渠は少壯の時改進黨の一有力者であつた。そして、それが爲めに多くの財産も倒盡して、長らく教師などをやつてゐた。それも渠の常套手段であつて、古い教育家の名譽と養成した子分の勢力とを借りて、他日の發展を待つてゐたのであつた。

『今度當選したら、多年の鬱憤も十分に晴らしてやらうし、自分が倒盡した先祖の財產も一躍して取り返して見せるとは、篠原が細君に誓つたところだ。細君もその意を受けて熱心に金錢のかゝらない運動の準備を怠らなかつたが、ふと病氣にかゝつて、死んでしまつた。すると、母ばかりが手賴りであつた姉娘も、がツかりしたのか、直ぐにその跡を追つた。僅か一週間に葬式が二つあつたわけで、世間に對しては、餘程超然主義にかまへてゐた篠原も、これには非常な失望をしたらしい。その後の渠は圓活な超然性が眞の冷淡に變じ、人から見ると、その金錢慾が露骨に現はれるやうになつた。

先づ校舍に使つてゐた裏の建物を二軒の借家に造り上げ、表の方も、下の食室と二階の客間と子供の勉強室とを殘して、左右を二個の商店向きの借家に拵へ直し、一方には菓子屋、一方には道具屋が住むことになつた。眞ン中には篠原の表札はかゝつてゐても、久し振りで訪ねて來る人には、こゝがさ

うか知らんと鳥渡まごつかれる。その癖、渠の奇癖はなほ世間慾の淡然たるを表しようとして、自分等の三室をも立ち退き、裏口へ立派な石の門でも建て、奥の臺どころ四疊半ばかりあるのを造り變へ、そこへ引ツ込んで、そこを自炊場、寢室、兼客間にして、世人を驚かさうと考へてゐる。
『あなたも變りました、ねえ――奧さんを改めてお貰ひになつた方がよう御座いますよ』と、はじめて無遠慮に切り込んだのは、篠原が元から知つてゐる待合のおかみで、渠が昔その待合で拵へた借金の催促に來た時であつた。篠原は、この頃、獨りで寂しく感ずる時など、その婆アさんのところへ出て行き、その婆アさんのお酌で昔話を肴に醉つて來るのが一つの樂みになつてゐた。ところが、昔の借金の催促に來るとは少し異樣だと思つて、うす氣味惡い調子であり合せの馳走を出し、互ひにさし向ひの醉ひが出て來るまゝ、渠はいつもの冷かし口調を以てあしらつてゐると、催促とは表面の口實で、その裏には、近來不景氣勝ちであつて、女の腕ばかりではとても待合の商賣をつゞけて行くことが出來ないから、一緒になつて少し資本をつぎ込んで呉れろといふのである。そして、どうせ、さうなれば、夫婦にならうといふ意味の含んでゐるのが分つた。
　篠原はたゞさへ興ざめてゐたところへ、五十づらを提げたでぶ〱婆々アが、自分の女房の自選候補者として、白い物を皺だらけの顔に塗つて來たのを憤慨した。然し、さうまでは言葉にあらはさないで、

『お前さんがもツと若かつたら、妾にでもして樂に暮させるのに』と答へて、歸してしまつた。
さてそれを皮肉に歸して見たところが、自分の胸は何となくむしやくしやして堪らない。自分はまだあのおかみに見くびられてるほどくすぶつた、蟲が湧く樣な男やもめではないと思ふ。
たま〳〵下座敷へ隣りの菓子屋の若いかみさんが來て、お民といふ預り娘と話してゐる。お民と云ふのは、知人から頼まれて、自分の家の臺どころを引き受けさせてゐるかたはら、どこかの女學校へ通はせる約束がしてあるものだ。然し篠原自身の考へでは、かの女さへ承知すれば、直ぐにも自分の長男の專一――からだが惡いので、中學校も卒業させず、保養かた〴〵田舍の家の取締りをさせてある――に嫁がせたいのだが、渠はお民のそれを承知しないのを苦にしてゐるのである。
兎に角、若いをんな供の浮き〳〵した笑ひ聲に氣を取り直し、二階の馳走の殘りをおろして來させ、次男の勝次の勉强してゐるのを呼びおろし、お民に燒酎を一合買はせにやり、隣りのおかみさんや自分のうちのものに酌をさせながら、こじれた醉ひを呼び出し初めた。
『おい、お民、今の婆アさんをよく見たか?』篠原はにこ〳〵しながら勿體振つた顏を向ける。
『はい、よく見ました』と、お民は、却つて勝次やお隣りのおかみさんの方を向いて、意味もなく笑ふ。
篠原は勿體振つた顏を、手に持つた猪口の上に出しながら、

『あの皺ツつらで、おれの女房になりたいと云ふのだ。どうだ、勝、お前のお母さんにしてやらうか？』

『それがよう御座いませう』と、中學三年生の勝次が、小まツちやくれて冷かす。

『何ぼ何でも、ねえ、待合のおかみさんでは――』と、をんな同士があひ槌を打つ。先生が本意で云ふのではないと、みんなに呑み込めてゐたからである。

『如何にこのお父さんは老いぼれても』と、篠原は猪口を下に置いて、『まだあんな婆アさんの色男にはならない。』

　みんなは之を聽いて吹き出した。

『然し、勝』と、渠は勝次の方には向かず、意味ありげにお民をじろ〳〵見て、『あの專一はいゝ男だ、なア。』

『さうですか』と、勝次はあしらつた。お民はまた自分に結婚を勸めると感づいたやうに、横を向いて厭な樣子をした。

『お民は馬鹿だから困る』と云つたが、渠は氣を換へて、例の自慢の、區會や區の黨派的關係に對する權謀術數のかけ引きを語り初めたが、段々、またお民ばかりに對するやうに、若い女の心得やら、――女が年頃になれば早く行ふべき結婚やら、――結婚する男をよく選ぶべきことやら、――長上を敬ふ

べきことやら、――柔順であるべきことやら、――いろんなことを歴史や人の身の上にかこつけて、鹿爪らしく說き出した。が、誰れも與に乘つては來なかつた。

『けふは、朝から眠い日、ね』と、お民はこちらにかまはずに云つた。

『さう――あなたは』と、隣りのかみさんは疑問的に答へた。

『それだから、農學士の奥さんにやア成れん。』篠原は斯う云つて見たが、勝次に目で本統のことは云ふなと命じた。專一は中學さへ病氣の爲め中止したが、お民には農科大學を出たと云つてあるのだ。

『………』お民はかみさんと何だか冷笑的な默笑を取りかはした。が、かみさんは近頃這入つた借家人で、うちのことは知る筈がないと、篠原は高をくゝつてゐた。

『さア、これからお父さんがいゝ喉を聽かせてやる』と、渠は勝次に本を取つて來させ、老眼鏡を通して、渠の得意な清元の『明け烏』、浦里時次郎をうなり出した。

隣りのおかみさんは自分のうちから呼ばれたので早く歸つて行つたが、『好いた男にわしやいのちでも』といふところに至る頃には、お民もいつの間にか玄關でいびきをかいてゐた。

『お民！　お民！』と呼んだが、聲がない。『勝、お民を起して來な。この大切なところを聽かなけりやア、人情は分らない。』

『………』勝次はしぶ〲に立つてお民を起した。

篠原は德利を傾けると、一滴もない。もう一合買つて來る樣に命ずると、もう遲いから、酒屋が寢てゐる、いや、まだ寢てゐない、ゐたら叩き起せばいゝなどいふ押し問答のする、お民は再び買ひに行つて來た。勝次はその間に、

『つまんないから、僕は御免を被ります』と云つて、多少むツとした調子で二階へあがつてしまつた。

お民ひとりを對手の『好いた男に』も實は張り合ひがない。その上、かの女のねむたさうな樣子を見ると、片手を突いて膝を少し横にはだけて、如何にもだらしない。とても大切な息子の女房にすることは出來ない樣な氣にもなる。さうかと云つて、あの若いのに、――そのおやぢの仕込んだと云ふ漢學のおかげでか――可なりしツかりしたところがあるのを憎いとも思ふ。急に自分の血が全身に湧き立つ樣な氣がして、篠原はぢツとお民の方を見た。

さう惡い器量でもない。この田舍女も萬ざら棄てた代物ではない。然し目を轉じて、ふたりの間にはさまつてゐるちやぶ臺の上を見ると、清元の本に向ふとてかけた老眼鏡がまだそのまゝ自分の鼻さきにかゝつてゐるからであらうが、見えるものがすべてはツきりと穢く思はれる。臺のおもても拭き方がよくない樣だし、皿小鉢も何となくぢゞむさい。女房がゐれば、こんなことはないのにと思ふと同時に、お民が少しは氣をきかせて呉れてもよからう。自分の身のまはりや顏ばかりに氣を取られてゐないで、もツと甲斐々々しく働いて呉れてもよからうといふ不平が起る。然しまた篠原は、それを口

へ出して云つても駄目なことを知つてゐた。

『わたしは下女に來たのでは御座いませんよ』と云ふ素振りが、これまでにも度々お民の擧動に見えた。それでは早く跡取りの嫁になつて呉れゝばいゝのだが、それも承知しない。女學校へ通はせてやると云つたのは、嫁にするつもりであつたからではないか？　たゞわけもなく、このせちがらい世の中に、學校に行く費用まで出してやる馬鹿がどこにあらう？　いツそのこと、望みを換へて、自分の妾同樣にしてやらうか？　然しそれも、餘り兩方の年が違ふので――

夜が更けたのか、羽織りを引ツかけてゐるのが寒くなつたので、單衣に襦袢の襟のはだけを直し、お民に酌をさせて、酒を二三杯つゞけざまに飲んだ。

『何を笑つてる？』

『…………』

『男が酒を飲むのがをかしいのか？』

『でも――』首をかしげた樣子などはそツくりまだおぼこだ。

そとはしんとして、人通りが絶えた樣だ。

何だか心が落ちつかないまゝに、

『どれ、おれが手の筋を見てやらう。』篠原はそのからだを臺の横手に延ばし、變な風に尻を高くし

兩肱(りやうひぢ)をつき、『お前の手をお出(だ)し』と、自分の兩手をひろげた。

お民はたゞ申しわけのやうに莞爾(にこ)してゐるが、なか／＼動く樣子がないのを、篠原は無理にすゝめて手を出させた。

兩手でお民の右の手の指さきを握(にぎ)つた時、老人の胸はときめいた。あツたかい血の循環(じゆんかん)を感ずると共に、昔、國で鶴子といふ藝者にさうして見たことがあるのを思ひ出した。昨年死んだ家内も鶴子をよく知つてゐたのだと。

『この筋がから出てゐるのは出世のしるしだが、これがからなつてゐるのは』と、指さきを強く押さへた。

『もう、よろしい――ありがたう』と、お民は早口に冷かし氣味(ぎみ)で云つて、引ツ込めようとする手をまた一方の手でしツかり握り、

『まア、お待ち』と鹿爪(しかつめ)らしい樣子になつて他方の手の指さきで今の筋を追ひながら、『ええツと、かうなつてゐるのは、その――強情の筋――』

『さうでせうよ』と、お民は急に手を引いて、もとの通りに坐つた。

『いやか？　その――お前は――』手でなほかの女(ちよ)を追ふやうにしたが、燃え立つやうな感情が一つの強い言葉となつて喉(のど)まであがつたのをぐいと呑(の)みおろした。そして『げえツぷ』と云ふのにまぎら

せて、篠原はごろりと横になり、片手をかの女の膝近く延ばしたまゝ、他の手をまくらにして瞑目する。

急に寂しくなつて來た。こんな氣持ちになる時は、時間さへ早ければ、直ぐあの待合の婆アさんのところへ行つて、馬鹿口をきゝ乍ら、一杯飲み直すものを！——さりとて、あの婆々アが自分の女房になりたい謎をかけるなどゝは、よく／＼おれも爺に見られてゐるのだ。あれと同じ年齢でも、死んだ女房はまだしも活氣があつた。そして、女房の若い時などは、水々しい美人であつた。素直で、利巧で、よくおれの心を呑み込んで調子を取つて呉れた。上の娘がおれに手頼らないで、あればかりを力にしてゐるから、あれが死んだのに落膽して、直ぐその跡を追つたのも尤もだ。おれもあんなに女房の一生を虐待せずに、もツと可愛がつてやればよかつたのに——おれがこれまでやつて來たのも、あれがゐたからだと世間は云つてるさうだが、全くのことだ。

片腕をなくして、おれは急に爺むさくなつた樣だ。病身な息子の爲めばかりに、おれの死後の計を立てると、金錢慾が露骨に出て來る。自分の心は卑しくなるばかりだ。苦勞のうちにも何等樂しみといふものがない。馬鹿々々しい世が一しほ馬鹿々々しくなる。

あゝ、もう、金錢も入らない。名譽も入らない、今一度若い時に返りたい！

と思ふとたん、鶴子の藝者姿がありありと現はれて來た。國の料理屋の四疊半——

『今晩は――』

鶴子はさし向ひに坐つて、ぢツと自分を見つめて、今夜の來かたの遲かつたのを恨んでゐる目つき――

自分は同じ武術練習生と餘所で飮んでゐたので、それを出し拔いて遲くやつて來たのは手柄だと思つてゐたのに――

十分醉つてゐるので、今夜は何か奇拔な芝居をしようと考へて來たとたんだから、鶴子の不興を慰めかた〳〵、

『どうだ、今から驅け落ちをしようか？』

『致しましよう。』

鶴子は飛び立つほどに喜んだ。かの女は抱へ主の虐待に苦しんで、いつもそれを自分に訴へてゐたのだ。

かの女は早速二人乘りの車を用意して、自分を促す。かの女は眞面目でいそ〳〵してゐる、自分は室を出にくいほど醉つてゐる。

『さア、早く』と、手を引かれて室を出で、裏口から幌かけの車に乘り、横抱きに抱き合つたまゝ、ずん〳〵進んで行く。

自分には結び名づけが家にあるので、鶴子とはたゞひいき仲で、實際の關係はなかつたのだが、觸れ合つてゐるからだとからだとの間が、車の動搖により、離れてはまた合ふたんびに、女のあツたか味とやはらか味とが感じられて、如何にも棄て難い——

『末はあなたと夫婦ですよ。』

『さうだ、さうだ。』

『それでも、お貞さんが可哀さう、ね』と、鶴子は自分を抱きしめる。貞子と云ふのは、乃ち、自分の結び名づけだ。——

車はだん／＼進んで行く。——

『あなた、ほんとうでせう、ね？』

『ほんとうだとも、ほんとうだとも。かうして行くのが第一の證據だ。』

『それでも、餘り急ですから、狐につまゝれてはしないかと思ふの。』

『全體こゝはどこだ？』

『もう、古河へ近いでせうよ。』

『古河へ？』——

自分は喉がかわいて、水が欲しくなつたので、車をとめさせた。

『水はないか』と聽くと、
『おほ川の水よりほか御座りません』と、車夫が答へる。――
車を出ると、松の並み木道で、もう、古河の船乘り場が向ふに見える。夜は明けがただ。鶴子を見ると、お座敷着のぞべら〱とした姿を、左褄取つて立つてゐる。赤い蹴出しが朝風に搖られてゐるのに心も動いたが、酒の醉ひは冷りと急に醒めてしまつた。――
『一體どうしたのだ？』
『どうしたもあつたことですか、あなたが逃げようとおツしやつたので、やら〱こゝまで來たんぢやア御座いませんか？』
『こりやアおれの間違ひだ。たゞ、ほんの、狂言をやらうとしたばかりだ。』
『そんな無責任なことがありますか？　わたしや一生懸命です！』
『一生懸命であつても、なくツても、おれが醉ひの勢ひに乘じてやつたことで、かう醒めてしまつては歸つて貰ふほかは致し方がない。』
『あなたも武士の子ぢやアないですか？　人を馬鹿にするもほどがあります！』
自分は道ばたの木の株に腰をかけ、興ざめたまゝ、煙草を喫んでゐたが、
『武士の子が、かう、この通り、あたまを下げて賴むから、一應引き返して貰ひたい、跡の始末はおれ

の方で甘くつけるから——』

鶴子はワツと泣き倒れた。

『あゝ、くやしい！　くやしい！　くやしい！』かの女は濕ツぽい地べたにつッ伏して身をもがきながら、『あゝ、くやしい！　わたしやこんなに馬鹿にされたことはない！——もう、主人へは合はす顔がなし、行くところがない！——死んでしまふ、死んでしまふ』と云ひ出した。——

『鶴ちやん、許して呉れ。おれが悪かつた。萬事はおれが引き受ける。』

『そんな呑氣なことぢアない、わたしの顔がつぶれた！　えゝ、わたしの顔がつぶれた！』

かの女のもたげたうらめしさうな顔つきは忘れられない。地獄の鬼もさういふ色をしてゐるかと思はれるほど青かつた。もつとも、毎日夜ふかしをして、朝寝坊をむさぼる女のことだから、いつも生地の顔色は悪いのかも知れないが、涙にお白粉のはげた跡が青ざめて、松原のうすら寒い朝景色も物凄く見えた。

くやしまぎれに、鶴子は着てゐる縮緬の着物の袖をかみ切るのを見て、

『あゝ惜しい！』と一言、自分は吸つてゐる煙管をおのづから取り落した。

何だか手持ち無沙汰なので氣がつくと、自分は昔あつたことをありのまゝに夢見てゐたのだ。

目が覺めてからも、鶴子の事を思ひつゞけた。かの女は氣の毒な女であつたツけ——あの時、無理

に車に乘せて引ッ返し、自分の知り合ひの人の二階に隱し置き、自分がひとり出て行つて形勢を窺ふと、鶴子が逃亡したと云ふので、抱へ主は八方に手をくばつて探してゐた。最もいゝ玉がぬけ出したのだから、血まなこになるのも無理はなかつた。――

自分は平氣で抱へ主の家に行くと、主人はむツとした樣子だ。わざと落ち着いて、

『どうした？』

『ど、どうしたもあつたこツですか、鶴子はあなたとかけ落ちしたさうぢやア御座いませんか？』

『かけ落ち？　馬鹿を云つちやアいけない。鶴子はおれがかくまつてある。』

『何が故にそんなことをなさる、うちぢやア大變な騷ぎぢや御座いませんか？』

『何も騷ぐにやア及ばない。お前の方が惡いんだ。』

『何も惡いどころか、うちの高價な玉がなくなつては、商賣が立ち行きません。』

『それ位大切なものなら、なぜあれを虐待する？』

主人はぐツと胸にこたへたらしい、

『虐待と申して――』

『いや、虐待してゐた。貴樣の仕うちが惡ければこそ、鶴子がいつも泣いてゐるのだ。以後あれの待遇を改めると誓へ。さうすりやア、おれがあれを返してやる――。』

主人が謝つたので、自分は鶴子を返してやり、鶴子には十分な花を與へた上に、臺なしになつた衣服をすべて買ひもどしてやつた。――

その日は前夜の夜あかしやら、心配やらでぐツすり寢たがと考へるかたはらに、ぐう〳〵云ふいびきが聽えて來た。

ふと氣がつくと、お民がちやぶ臺のそばにつツ伏して寢てゐる。

篠原は起きあがつて德利をかたむけたが、もう一滴もない。今では何よりも可愛い德利の酒さへ一滴もない。

渠は情なくなつて、ほろりと淚がこぼれた。

鶴子はどうしたらう? あれから暫く主人の待遇もよくなつたと云つて嬉しがつてゐたが、自分には挨拶もしなくツて、やがて東京に出た。自分も、親類のものらから、あゝして置いては、若いものの身は持てないと云はれ、結ひ名づけの貞子といよ〳〵結婚して、東京へ出た。

自分は若い女房をつれて上野の山門――自分は日光の門跡に關係ある家柄だから、威張つて這入れば這入れたのだ――に這入り、小高いところの樹かげにふたり立ち並んで、池の端の辨天堂やら、本鄉の高臺などのいゝ景色をながめたことがある。女房は非常に喜んで、

『これから、こんないゝ都に住むんですか、ねえ』と云つた。

い〻都は、貞子の爲めには、實にせちがらい世であつたのだ。政治上の奔走やら、事業の失敗やらで、家内を安心させた日は殆ど一日もなかつた。

それにしても鶴子はどうしたらう？

湯島の天神そばに住んでゐる時、女房と一緒に錢湯へ行つた。今時のとは違つて、湯ぶねに鳥渡一寸幅ぐらゐの板の仕切りがあるだけで、殆ど男女混浴であつた。男の方から手が出たとか、女の方から足が出たとか、入れ込み時代には、よく爭ひが起つたものだ。その湯ぶねの三尺ほど手前を上から鳥居——龍などの形をつけた——がかぶさつて來て、石榴口になつてゐるから、中は晝間でも薄暗かつた。そとの流し場も、眞ン中の水ぶねとおか湯との中央を粗雜な板仕切りが通つてゐるだけで、男女は自由に行き來が出來たし、湯ぶねのそとがはの足場に腰かけて洗つてゐると、どちらからでも見通しであつた。

自分はその足場に腰かけて、貞子に脊中を流させてゐると、貞子は不意に流しの手をやすめて、

『あら、鶴ちやんが』と注意した。見ると、鶴子が、女湯の流しと定められた方の片隅で、切りに顏をみがいてゐた。自分等がゐるのを氣が附いてゐないらしい。

『鶴ちやんではないか』と聲をかけると、びツくりしてふり向き、

『あら、まア』と、鶴子は直ぐ立つて來たが、貞子がそばにゐるのと、みんなが裸體同志なのとにま

どついたのだらう、きまりが惡さうな樣子をして、『まア、思ひがけないところで、ねえ』とにが笑ひしながら、湯の中へ飛び込んだ。

自分等も亦湯の中に這入つて、互ひに首たけでの挨拶やら、思ひ出やらを語り合つた。そして鶴子も別に惡い氣を持つてゐる樣な素振りは見せなかつた。然しその心中では、うそのかけ落ち事件を恨んでゐたかも知れないし、また、もう、女房が出來てゐる男だから、二度と遇ふ必要がないと思つてゐたかも知れない。

湯島の天神町のかう／＼したところに住んでゐるから遊びに來いと云つたら、きツとお伺ひ申しますとは答へたが、その後一度も顏を見せなかつた。自分もかの女のおほまかに名のつた住所をわざ／＼尋ねて行く暇もなかつた。

あれから鶴子はどうしたらう！　かう考へて、渠は加減のいゝ湯に這入つてゐる樣な氣持ちになつて、うつら／＼とまた夢を見てゐる樣にかの女を思ひ浮べようとした。

女房がなくなつた今日では茶飲み友達にでもならうものを――あの時まだ藝者に出てゐたのだらうか？　今ではどこかへ片づいてゐるだらうか？　それとももう死んだか知らん？　かう段々考へて行くと、たゞさへ寂しい上に、一しほ心細くなつて、死んだ女房や行くへの分らない鶴子にわざと見棄てられた樣な氣になつた。

すると、鶴子が、古河の松の並み木道でうらめしさうに、悔しがつて、お座敷着をかみ切つた時の優しい姿が目の前に浮んで來て、どうしても忘れられない樣な、離れられない樣な、何とも云へない、あツたかい、やはらかな感じを與へる。渠は幻影の間に若返つてゐた。

然し氣がついて見ると、酒の興も醒めたし、世の中が一しほ厭になつたかの樣で――自分の老いぼれたからだに、夜の氣は用捨なく迫つて來た。

風を引かせてもと心配になつたので、お民を呼び起し、もう、床を取つて休めと命じ、自分も二階へあがつて、勝次の寢てゐる次ぎの間の寢床に這入つた。が、どうも、昔が戀しくツて――

『鶴子はどうしたらう？』湯島の錢湯で、自分の妻が鶴子を見とめて、『あら、鶴ちやんが』と云つた時の、その若い聲色を眞似て、篠原先生は、蒲團の一端をかゝへながら、ひそかに『鶴ちやん、鶴ちやん』と繰り返してゐた。そして渠の寢てゐる、その眞ツ下に當る座敷にお民がだらしなく枕をはづして、ぐう／＼といびきをかいてる姿が、今夜に限り、ありありと見えるやうであつた。

――（四十二年三月）――

# 炭屋の船

音樂家の小久保晴吉は赤坂から芝の高輪に轉居した。あたり近處が餘りがや〳〵してゐて、それが爲めに、研究やら作曲やらの邪魔になつて仕やうがなかつたからである。その道が道だけに、渠の耳官は非常に發達してゐるので、鳥渡した雜音でも、それが渠の神經を惱すことが甚しい。その代り、また沈思冥想の夜などに、鼠の騷ぐ音を聽いて、意外なメロヂを思ひ付いたこともある。

高輪の家と云ふのは、奮發して選んだだけあつて、あたり近處の音は聽えない樣な構へで、入り口は十間ばかりも專用の道を登つて行つたところについてゐる。高い崖の上で、おもな座敷はすべて海に向つてゐて、晴天の時などには、寢ころんでゐて、房州までも一目に見える。

十二疊の客間、六疊の書齋、八疊の稽古室、これらがおもな室だ。八疊の稽古室は、ピヤノが一臺、オルガンが一臺、ヴイオリンや、マンドリンや、三味線などがいくつも置いてあつて、そこの細君が踊りを自分に稽古したり、また、自分がヴイオリンを人に敎へたりするところになつてゐる。これら

の室は並んでゐて、長い一直線の緣側に限られ、一間ばかりの細長い庭があるだけで、低い垣根の直ぐそとは數十丈の崖である。

いつも海中の臺場はすべて見えてゐるし、朝夕に房州や下田通ひの蒸汽船も見える。たまには、月島に住んでゐる官吏で、小久保もよく知つてゐる某音樂通のヨツトが三角帆に風を孕まして、目の前を通ることもある。

小久保は、轉居當時、新居の心持ちよさに、每日酒を飮んでゐた。そして細君が人にヴイオリンを敎へたり、踊りの師匠が來て、細君に『梅の春』や『お染久松』の踊りを稽古したりする樣子を、かげで注意しながら、自分の目ざす仕事の他日の發展を樂しんでゐるのだ。

『詩人や小說家は書きさへすりやアいゝのだから樂だ。作曲家はさうは行かない——たとへワグネルの樣な立派なオペラが出來たとしても、今のわが國の狀態では、第一、それを演ずるものがない。第二に、それを演じても、聽衆にそれを聽き取ることが出來る素養あるものが少い。それでは、全く僕等の商買にならないではないか?』小久保はいつもかう云つて、樂天家だけにあせることをしない。

そとに出ては、好みもしない或大商店の音樂指揮者になつたり、自分の部下をつれて、所々の會に出演したり、中途半端だが、今の紳士や華族連に判る樣なオペラまがひの脚本を自作自演したりなどして、生活の道を立て、うちにゐては、また、他日の發展の爲めに、頻りに準備の研究を積んだり、

作曲の試みをやつたりしてゐる。

それやこれやで、小久保の家は、しよツちう、ピヤノ、ヴイオリン、三味線などの音が絶えたことがない。たま／＼絶えた時には、また崖したの街を通る豆腐屋の喇叭などが聽える。豆腐屋の喇叭を高いところで聽くと、周圍の雜沓から離れて、一種の音樂化された哀音を傳へるものだ、そしてその哀音の響きを夜の胸にまで傳へたまゝ、海面にのぼる月の光に醉はされることもある。

この音樂家は夫婦に、三人の子供に、三人の子守りに、女中に、女中がしらと云ふ家族だ。女中がしらのお竹は、人の未亡人だが、音樂學校に通つてゐる娘をつれて住み込んでゐて、しツかりもので、信用があるので、會計の方は一切引き受けてゐる。

そのお竹が買ひ物に出た途中で、――或日の夕がたのこと――面白い炭屋に出くわした。五十代の色の黑い、瘦せこけた田舍おやぢで、古ぼけた筒袖の半纏に紺の三尺、腹掛けをして白いがよごれたメリヤスの股引をはいてゐる。

『おかみさん、炭を買つてくらツせいや』と、それが手ぶらでお竹の跡について來てぴよこり／＼お辭儀しながら、賴む樣に云ふのだ。『おかみさん、買つてくらツせいや――どうせ、はア、殘り物だ――安くして置きます。』

『どんなのよ、持つて來てお見せ』と、お竹は、餘りうるさいので、さう答へ、家を敎へて歸つてゐ

ると、間もなく、そのおやぢとむすことが炭俵を二つづゝ擔つて持つて來て、玄關さきへ列べた。
『見てくらツせい、から云ふ、はア、上等の炭だ』と云ひながら、おやぢは『へい』とぴよこりあたまを下げたが、色の變つた手拭ひで顏の汗をふく。むすこはそのそばに立つて默つてゐるが、これも汗をふいてゐる。おやぢと同じ樣に色の惡い、瘦せこけた筒袖半纏、古ぼけた三尺、よごれた股引のひよろ高い二十五六の男だ。
お竹は格子戶を出て、それを調べて見ると、炭の質もいいし、俵の入りも充分らしい。出入りの炭屋から持つて來させると、どうしても一俵五十四五錢はしさうだ。
『全體、いくらに賣るんだい』と、お竹は聽く。
『さう、さ、な』と、おやぢは殘念さうに俵を見ながら、『早く一杯飮みていのだ――かけ値の無いところ、一俵、はア、四十錢づつにすべい。』
『そいでよかんべいか、父さん』と、むすこはそばから安過ぎるといふ樣な顏つきを見せる。
『よかんべい、どうせ、おれとお前の駄賃になるだけだ。』
『だけんど、そいで酒が飮めるべいか？』
『飮めるだけ飮むだ。』
『ふ、ふん』と、むすこは云つた切り、色の惡い顏をたゞにこ〳〵させてゐる。

兎に角、安いと思つたので、お竹は奥へ行つて、踊りの稽古をしてゐた小久保夫人を呼んで來る。夫人が障子ぎはから鳥渡見て、買つて置けと命じたので、お竹はもツと値切つてやらうかと思つたのを、その云ひ値のまゝ引き受けることにする。

すると、おやぢは代金を受け取つて腹がけに入れると、直ぐむすこに跡をまかせて、さきへ歸つてしまふ。むすこは、

『あの酒喰らひめ』と、目の色を變へて、おやぢのことを身づから低い聲で罵しりながら、餘り力もなささうにひよろ〳〵して、裏の方へ炭を一俵づつ運ぶ。

『あの迅いボート』と、お竹も海の方を見て獨り言を云ひながら、緣側の鼻に立つて、庭の奥の物置きへ炭を入れる指圖をする。この家も晩春の海に湛へられてゐる樣に暢氣であつた。『お前どこから來るの？』

『そと房州から——』と、俵を運び込みながら答へたが、運び終つてから話したことに據ると、炭燒きで、自分等の燒いた炭を自分の持ち船に積み込み、房州の鼻をまわつて、親子で東京へ漕いで來て炭問屋へ賣り渡す。然し問屋への賣り渡しは儲けが少いので、直接に一般の得意さきを探してゐると云ふのだ。つまり、炭燒きと運搬方と炭屋とを一緒にやつてゐるわけだ。そして、

『どうだ、おかみさん、もツと買つてくらツせいな、また七八日したら、持つて來らア』と云ふ。

『うちぢやア、さう急にやァ入らない。』

『入らねいでも、はア、腐るもんけい――買つてくらッせい。』

『さうだ、ねえ、一年分を買ひ込めば、七八十俵は入るよ。――もッと安くでもありやア』と、お竹も値段が餘り安いので、買ひ込んで置いても家の不爲めではなからうと考へ出す。

『一俵三十五錢にして置くべい――あの酒喰らひめがついて來ねいと、はア、それでも損にやアならねいだ。』

云ふことが面白くもあるので、お竹は夫人とも相談して、一年分の使ひ料七十俵を注文する。

『七八日したら、持つて來べい』と、また云つて、むすこは歸つてしまふ。低い聲で、『あいつみな飮んでしまやアがるだ』と云つて、行くさきを急いでゐる樣であつた。

『面白い炭屋だ』と云つて、それが家中の笑ひ草になり、その七八日が待たれる樣であつた。すると、またやつて來たが、小久保夫婦が留守であつたので、もう、少しのちに來いと云つて置いた。その日の夕がた、子守りの一人があわただしくそとから飛び込んで來て、

『奥さん、奥さん、來ましたよ、來ましたよ。』

『何もそんなに息をはづませないでもいいぢやないか』と、夫人も、これから面白い芝居でも見られるかの樣に、嬉しさうだ。然し坐わつたまま、縮緬の反物の耳――一風呂敷一杯で三圓づつださうだ

――の絹絲をほごしては、これをつぎ合はして鞠がたに卷いてゐる。これは近頃夫人の唯一の慰みで、踊りやヴイオリンの暇には、それぱかりに夢中になつてゐて、やがては機織機械を買つて、それを衣物に織つて見るとまで云つてゐるのだ。

玄關では、早や、お竹を初め、女中や子守りが面白さうに笑つてゐる聲がする。その笑ひ聲のあひまに、呂律のまわらない樣な話し聲がしてゐる。

『おみきを、はア、頂戴――醉ツぱら――どうか――御――どうか、御免を――はア、すまねいだ――これねいだの――これ――いだの――炭屋――はア、持つて來ただ――炭を――』

『どうしたの、お竹』と、夫人も出て行くと、以前と同じ身なりのおやぢの方が、ぐでんぐでんに醉ツ拂つて、式臺の上に腰をかけたまま、横になつてゐる。そして女中どもは面白半分、こわさ半分に、つツ立つたまま笑ひ合つてゐる。

『炭屋さん、なかなかいい機嫌、ね』と、夫人に言葉をかけられ、おやぢは兩手をついてからだを起し、

『やア、おかみさん、すまねいだ。はア、おみきを頂戴して醉ツ拂やアがつただ。許してくらッせい。一つ、おれは、はア、うかがひていことがあるだ。』から云つて、また倒れかかる。そしてそれを僅かにささへると云ふ樣な工合に、兩手を板の間につツ張つて、『うかがひていことが、はア――うかがひ

てい――』
『何をうかがひていの』と、夫人もおやぢの口調を眞似る。女中どもはまた笑ひ聲をあげる。
『何でもねいが、はア、うかがひてい――』
『云はなきやア、判らないぢやないか、ね？』
『今申すべい――はア、おみきを――』
夫人も女中どもと共に吹き出した。そしてよく聽いて見ると、炭は持つて來たが、むすこが三十五錢で請け合つたと云ふのは嘘だらう。四十錢で引き受けて置きながら、きツと、『あの野郎』が飲み代を五錢づつへそくるつもりに相違ないと云ふのだ。夫人はおやぢがぐずるつもりだ、な、と思つて、いやな顔つきをした。すると、
『そりやア、炭屋さん、三十五錢は本當だよ。わたしが談判したのだから』と、お竹が口を出す。
『そんな値段は、はア、ねいだ』と。おやぢはきつい聲を出し、赤みのさした青い顔の、目ばかり大きいのをお竹に向ける。熟柿の樣な酒息のにほひがする。
『ぢやア、こツちは買はないだけ、さ。』
『おれも、はア、賣つて損が行くだ。』
『安ければこそこツちは買つてやるだツぺい』と、お竹もおやぢの口調を眞似て、『この段々、はア、

暑さに向つて來る時節だもの。』
『時節は時節、値段は値段だ。考へても見ろよ、そんな安値で、はア、炭燒き小屋が立つて行くべいか？』
夫人は、玄關をあがつた室に据ゑてあるピアノに向つて腰をかけた。そしてそのピアノの鍵をいちくりながら出す音が如何にもうるさいと云ふ心持ちに聽える。それを、書齋に引つ込んで、頻りに或作曲の構想を考へてゐた小久保が聽きつけ、これも亦玄關へ出て來る。
渠は今一種の主要な旋律を捉へ得たのを非常に喜んでゐるのだ。ただ、その旋律をいろ／＼變化させて、序破急の構成を成立させる工合に苦心してゐる。ところが、女中どもの笑ひ聲やだんべい言葉の爲めに、專念の狀態をぶち毀はされた。
『ああ、酒でも飲んで』と云ふところを、夫人の出したいらいらする樣な鍵音に引かれて、出て來て見ると、自分よりもさきに既に酒を飲んだものがゐるのを發見する。
『おい、おやぢ、貴樣も酒好きと見える、な？』
『へい』と、おやぢは腰をかけたまゝつッ伏してゐた體をもちあげ、『どうも、旦那、濟まねいだ。』
『どうだ、もッと飲まうか？』
『へい、いや、もう充分やつただ』と云ふのが、ここで御馳走にでもなつた樣な挨拶なので、女中ど

もはまたおほ聲をあげて笑ふ。
　そこへ、また、むすこがやつて來た。これも醉つて千鳥足だ。然し、おやぢを見つけるが早いか、いきなり、
『父さん、ここの勘定取つたらいけねい』と、格子戸を這入り込んで來て、おやぢに向つて、土間へつッ立つ。ひよわい天秤棒をつッ立てた樣だ。片手には、穢い手拭ひの鉢巻でもした跡らしいのを二つに折つて握つてゐる。これも、こないだ來た時と同じ半纏、股引だ。
『いよう、貴樣も醉つてるな』と、冷かす言葉に氣がつき、あわててひよろつきながら、むすこは主人に向つてお辭儀をする。
『旦那、この醉ッ拂ひに勘定渡したら困るだ。』
『まだ渡さねいだ』と、お竹。
『あんだ、渡さねい――』と、おやぢはつッ伏したままで、『渡さねいなら、おらも炭渡さねいだ。』
『あに云ふだ、父さん、お前の約定したことでねいだ。』
『だから、いけねいと云ふだ。おらに三十五錢だ云やアがつて五錢づつ手前が飲んでしまやアがるつもりだんべい。』
『馬鹿云ふでねいだ。これねいだ、ここの勘定を大抵あの女に取られたのはお前だ。』

『あんだ、手前はまたその上にあの女に取られたでねいか？』

むすこは、人々の手前、少し恥かしいと云ふ様な風をして、おやぢに云ひ込められたまゝに、默つてしまふ。そして少し間を置いて、

『醉ツ拂ひだ、勘辨してやつてくらツせい』と、主人の方を見て云ふ。

『あんだ』と、おやぢはむツくり起きあがり、左の手を後ろについて身をさゝえ、右の手を肩と平行するほどにあげてむすこを指さし、然し首をぐツたり前の方へ垂れながら、『手前も醉つてるだ。』

『お前こそ醉つてるだ』と、むすこは一二歩ひよろ〳〵と迫りながら、手拭を握つた手をおやぢの方につき出して罵る。

見てゐて、小久保も面白くなつた。そしてこの山出しおや子の飾り氣のない對話を聽いて、自分の作曲に新らしい感想を得た樣に思ふ。

『おい、龍子』と、渠はそばに立つてゐる夫人を返り見て、『愉快な奴ぢやアないか？』

『面白い人達だ、わ、ね。』

『あの素朴な樣子は、きのふ彈いて見た「エイツオヴブレメン」にでもありさうぢやアないか？』

『え、何に？』

『そら、あのオペレトのドンキイ、さ。』

『あ、さう、ね』と、夫人も思ひ出し、その一節を口ずさんで見る。
小久保は、おや子の様子を、そのままで、もツと見てゐたかつたが、お竹が面倒臭がつて、
『炭屋さん、全體、どうすると云ふんだ、ね、親子喧嘩ばかりしてゐて、さ？』
『へい、買つて貰ひますべい』と、むすこがおやぢに先んじて云ふ。
『よかツぺいか、おい』と、おやぢは躊躇する。
『約定だ、仕かたがねいだ。』
『勝手にきめやがつて、この酒喰らひめ！』
『父さんも醉ツてるだア！』
『あんだ、手前が――』と、おやぢはむすこを投りつけようとして立ちあがつたので、
『おい、おい』と、小久保は言葉でさへぎり、『さう二人とも醉ツ拂つてゐて、炭が運べるのか？』
『へい』と、むすこがぴよこりあたまを下げたが、『船頭がゐるだ、大丈夫だ。』
やがて、おや子は船頭と共に荷車二臺に炭を積んで運んで來る。門前の坂を押し登る時などは、ひよろけたり、すべつたり、――その醉ツ拂ひの荷車引きの様子がをかしいと云つて、となり近處の子供や細君連は、わざ〳〵そとへ出て、それを見てゐた。それでも、おや子は大眞面目て、一生懸命の力を出す。一車づつを三人で押せばいいのに、一時に二車をつづけたのだ。そしてまたひよろけたり

すべつたりするのだから、見てゐるものはおほ笑ひをした。

　おやぢの方がまだしも力があるので、先づ坂の半分以上を行つた時、船頭は自分が後押(あとおし)をしてゐた後の車を中途に待たして置いて、おやぢのをさきに引きあげさせ、それから、むすこのをまた押しあげる。

　おやぢは、それにはかまはず、炭俵を一つづゝ肩にのせて、ずんずん運び入れてゐる。ひよろり、ひよろひよろ、ひよろり、ひよろひよろ――如何にも、たわいがなささうだ。そして奥の物置きに一つを納(をさ)めると、まア、これで一つ安心したと云ふ風で緣に沿ふた細庭を出て行き、また一つを運んで來る。

　むすこも亦、おやぢと入れ違(ちが)ひに、炭を運ぶのだが、おやぢよりはずツと力がないと見え、そこの家族(かぞく)のものがそのよろめく樣子を氣の毒で見てゐられない樣な氣もした。

　細長い庭で、おやぢは、むすこと行き違ふ度每に、

『この酒喰らひめ』と、にらみつける。すると、むすこはそれを恐ろしさう避けながら、

『お前(めえ)もさうだ』と云ふかの樣な目つきをして、おやぢの方を返り見るのだ。

　船頭ばかりが、眞がほで別に言葉を出さないが、これも俵(へう)を運びながら、おや子炭俵の鞘當ての間へ割つて入る腹藝(はらげい)をやつてゐる樣な行き方である。

　小久保は、庭の入り口に近い十二疊の室で酒を初めたが、代金を誰れに渡したら、最もよく納りが

つくだらうと考へる。おやぢに渡せば、また、こないだ（あつたと云ふ）の樣に、自分ばかりで飮みへらしてしまふだらう。むすこが先づ注文を請けたのだから、渠に渡すべきだが、これも矢ツ張りあんなに醉つてゐる。こはあのおとなしく、また、雇ひ主に忠實であるらしい、船頭に渡すのが最も穩當であると。

『おい、運び込んでしまつたのなら一つ飮まさう』と、渠は三人の珍客を自分のゐる室の緣側のそばに集める。そして女中に命じて、ひとりびとりに猪口を取らさせようとする。小久保は興が湧いて來たのである。

然し三人は遠慮して、それを取らうとしない。おやぢはむすこの考へ通りにしようとして躊躇し、むすこはおやぢのやる通りにしようとして、おづ〳〵してゐる。船頭はまた雇ひ主どもの通りにしてゐなければならない。

三人とも、こんな窮屈な場所で飮んだところで、うまくはない。それよりも早く代金を拂つて呉れるがいいと思つてゐるらしかつた。

『貴樣達ア遠慮して飮まん、な』と、主人は少し不興げになつた。そして『ぢやア、いゝよ』と、女中に云つて、猪口を引ツ込めさせた。『早く代金が欲しいのだらう――然しこれは、貴樣達の樣子では、船頭さんに渡すのが一番無事だらうと思ふが、どうだ？』

『へい、結構だ』と、おや子は答へる。

『醉ひが覺めたか、ね、炭屋さん』と、夫人は奧の方から出て來ると同時に、お竹は緣側からまわつて來て、

『さア、炭屋さん、きツちりありますから、よく、調べてお行き。』

『へい』と、鳥渡あたまを下げて船頭がそれを受け取る。

『また買つてやるから、ね』と、主人が云つたので、

『また買つてくらツせい』と、おやぢ。

『また來るだ』と、むすこ。

七十俵の炭の運搬で、醉ひは全く汗に出てしまつたらしい。おや子は、大分眞がほになつて、船頭を從へ、嬉しさうにまた睦まじさうに歸つて行つた——つい、今しがたの喧嘩を忘れてしまつた樣に。

その跡で、小久保は夫人と話しながら獨酌した。然し、どうも、湧いてゐた感興が消えてしまつた樣だ。あの朴訥な炭屋が自分と一緒に飮んで吳れれば面白かつたのにと、それをばかり殘念がつてゐる。

渠が作曲しかかつてゐるのは、或詩人の詩だ。その詩の想に對しては、主要な旋律は捉へてゐる。また、其變化と形容とは判つてゐる。然し、どう云ふ風に結末をつけようかがまだ判らないのである。

いつそのこと、炭屋を見なかつたなら、あの時に出來てしまつたのかも知れない。炭屋を見て、何となく、新らしい着想と感じとを得た樣に思つたのが、却つて、さきの用意までもぐらつかしてしまつた樣なものだ。

さう思つても、また、矢ツ張り、あの何となく面白い炭屋のことがあたまを去らない。

『買つてくらツせい』――『おみきを、はア』――『酒喰らひ』――『お前もだ。』から云ふ言葉が小久保のあたまに共鳴してゐて、どことなく新らしい緒口がつきさうな氣がする。

然し考へてゐればゐるほど、その考へがこんがらかつて來るばかりで、思ふ樣な構成にはなつて呉れない。渠は五線紙を手もとに引き据ゑたまゝ、ただ酒に醉つてしまつたばかりだ。

酒に醉ふと、渠は時をかまはず寢てしまふ。そして酒が覺めると、また時をかまはず起きるのが習慣だ。その夜、渠は午後十時頃に机のそばに横になつたのだが、目の覺めたのは午前一時過ぎだ。それから、また同じ作曲のことを考へ續けて夜を明かした。

朝早くお竹は起き出でて、海に向つた雨戸を明け放つたが、

『旦那、きのふの炭屋が今歸つて行きますよ』と云ふ。

『どれ』と、小久保は電氣に打たれた樣に縁側に飛び出した。珍らしいほど氣持ちのいい夜あけだ。

正面より少し右に寄つた海岸に、こんもりした森がある。その左り手を和船が一つ、帆にゆツたり

と朝風を孕ませて、沖に向つて進み出してゐる。それに乘つてゐるおや子も船頭も、薄いかすみの間から、よく見えてゐる。

小久保には、おや子の言葉も船頭の唄も聽えないが、炭屋の船その物が歌であつた。

『ここだ』と、渠は手を打つた。そして夜が明けたと同時に、渠の曲を解決する絲口も開けたのである。

名殘り惜しさうに小久保が見送つてゐるうちに、朝日がきら〳〵と照り出した。そしてその光のうちに炭屋の船も消えた。

行くさきは外房州である、然しその外房州は、小久保には、既に自分の胸のうちであつた。

――(明治四十二年)――

# 郊外生活

野崎の家が櫻井に別莊を買ひ求めてから、そこの家族はすべて郊外生活を面白いものだと思つた。

蜜柑畑の一部を庭内に取り込んであつたので、多くの圓い實が青くふくらみ出してゐる。さツと箕面の山おろしが、その蜜柑の葉や板塀を越えた白楊の枝を吹き鳴らして、障子をはづした坐敷へ遠慮なく這入つて來る。

『涼しい、なア――涼しいなァ』と、坊などは嬉しがつて、坐敷中をころげまわつた。

そのそばに、玉江は坐わつて、腰卷き一つで、肩にはぬれ手拭ひをかけて、うちわを使つてゐる。

『坊、何しててや、おいどまで出しなはツて？』かう云つて出て來たのは娘の一人で、母親そツくりの長い顔が白地の浴衣に桃色の細帶をしてゐた。これもうちわを邪慳に使ひながら、『暑い、なア。』

『お日さんの眞ツ盛りやさかい、なア――そんでも、坊は涼しい、涼しい云ふてる。』

『阿呆かい、な、坊！』娘は小い弟の方に向ひ、睨めつけるやうにして、『置きなはれ、置きなはれ――そんな、けツたいなこと！』

『お獅子してんね、や、お獅子。』から云つて、小い子は相變らずあふ向きに反つて、臍のあたりまでむき出しになつたまゝ、ぼんのくぼうと兩足の裏との支へで、頻りに脊中を疊の上から離れさせようとしてゐる。
『こないしてて、な』と、母は坊から目を娘の方に轉じ、『動物園が見えたらえゝが、な。』
『見えたんだすのに――山の上にあるんだすもん。』
『そりやそやけど、な』と、辯解じみた口調になり、『あの園ひを元の低いんでえゝ云ふのんは、おまはんだけや。おまはんは女學校へ行てて、衛生ツたら、空氣の流通ツたら云ふことおぼえて來ても、まだ世間のことは知つてやないが、な。こないに明け廣げた建て方てどこにおまツかい、な？』
『東京におまんが――あツちではみなこの通りだツせ。』
『行て見たやうに！　東京流なら東京流でえゝさかい、東京の人が住みなはれ――うちでは返上しまツさ。』
『そしたら、返上しなはれ――わて、園ひを改築しまんが。』
『おまはん、えらう金持ちやさかいに、なア。』
『お母アちやん』と、坊が母の膝へすり寄つて來て、『隣りは金持ちやて、なア。』
『うちほどあれへんが、な』と、さげずむやうな顏つきをした。

『うちは何ぼある』と、坊はそのからだを半分ほど母の膝へのせて、『百圓？　千圓？』

『ほ、ほ、ほ！』女二人は顏を見合はせて一切に笑ひ出した。

『坊が、なア』と、玉江はそのあたまを撫でてやりながら、『大けなつたら分ります。』

『そやけど』と、あたまを母の胸に押しつけながら、『お母アちやん僕に仰山呉れへんやないか？』

『子供がおあしを仰山持つてたかて、あけへんが、な。』

『いんや、僕、電車と飛行機買う！』

『なんぼ買うてやつたかて、直ツきにほかしてしまひはるさかい、なア。』

『ほかせへん、ほかせへん。』

『あんた』と、姉も弟を見ながら、『池堀つてもろたやおまへんか！』

『ほたら、船買うて貰ふ――ボート！』

『大阪へ行た時、なア』と、母に云はれて、坊は納得してまたからだをころがして行つた。『大阪なら、隣りが近うひツついてるさかいに、家と家の間に高い塀があつて、どないなぬすツとでも越えることが出けまへん。そとに向いたとこかて、太い格子で仕切つてまツさかい、至つて用心がえゝけど、なア――。』

『そんなこと、わたしかて知つてまんが。』

『知つてたかて、そのわけが分らんやないか？』
『あんた、學問せんさかい、あかん！』娘は面倒臭がつて、横を向き、うちわをばた〳〵使つた。
『學問、學問云ふたかて、世間が皆さう云ふさかい、學校へもやつてあるのんやけど、おあしの勘定一つでけへんさかい、あけへん。をな子にも商業學校が出けたらええのんや。』
『東京へ行たら、出けてまんが――をな子でも、商賣したい人の爲めには、なア。』
『おまツか？』から云つて、玉江は話の腰を折られた樣子をしたが、娘のそツけないのに對して獨り言を云ふやうに、『この家でも、まわりがこないに明け廣がつてゐるさかい、ほんまは、なんぼ高うても、板塀では用心が惡い。もツと高い高塀で圍て貰はんと、なア。』
『箕面の動物園、見えるやうにしとくなはれ』と、坊は七福神の幅に松の盆栽をあしらつた床の間近くころげてゐるままで、聲を出した
『もツとあの山が高うなつたらええのんや、坊にもよう見えて、なア。』
『お母アちやん、動物園を高うしておくれえ――ええ、高うして！』坊は飛び起きるやうにしてまた母のそばへやつて來た。
『ねきへ寄ると、暑い！　暑い！』
『動物園見える！』坊はから云つて、緣側へ出た。そして脊伸びをして、板塀の上へ僅かに見えてゐる

る物に氣を取られた。

同園の山の一番高いところにある空中觀覽車の、まわり損なつたまゝのが半分ばかり見えてゐるのである。この半分ばかり見えてるのが、全く見えないよりも、却つて家族の執着をつないで、この家の塀を高くする、いや、しないと云ふとが一時親子の爭ひの種になつた。電軌會社の邸宅經營部員に說き勸められて、その會社から會社の新築に成つたと云ふ邸宅の一つを買つた時は、千江、わけはなく喜んで、

『あたりの景色がようて、氣が淸々しまんが、な。』などと云つてゐた。芝居の外に、外出と云へば、たツた四五里の道を電車で三十分や四十分で行ける箕面や寶塚へでも、朝早くから騷いでそりやまア辨だ、そりや果物だと用意をしてかかり。母までが尻からげをして、白縮緬に浪や千鳥の形を墨繪で染め出した湯もじなどを出して行くものだと思つてゐたのが、こちらへ來てからと云ふものは、朝に、夕べに、坐わつてゐても山が見える、畑が見える、靑い草木が見える。かの女は生れて初めての新らしい氣分をおぼへて、新居の四五日は好きな芝居のシの字も思ひ出さなかつた。そして坊を連れて、不斷着のまゝ、近處の畑の中を歩いて見たり、拾數丁しかない動物園へ行つて見たりした。

が、箕面電軌會社が同じやうな經營をやつてる當町の邸宅地に、大した奴ではなかつたが、强盜が

這入つた話を聽いてから玉江は俄かにおぢけが付いてしまつた。そして、

『繁はんをこツちへとまらせと吳なはれ——高塀を拵へとくれやす』などと、主人に迫つた。主人は店がいそがしくツて、歸りの時間が遲かつたり、時によると、歸らなかつたりするのでかの女の云ふがままに、繁藏と云ふ老人の下男を別莊附きに改め、塀は費用を惜しんで元の板塀につぎ足して、かの女の滿足が出來るだけにした。

それが爲めに山も畑もさへぎられ、見晴らしと云ふものがなくなつた。子供は皆反對であつたが、姉娘は大體店の方にとまつてゐるし、長男は無頓着だし、坊はまた何も分らないし、そのあとまでもくよ／＼云つてるのは次女ばかりである。

『坊には』と、この娘は弟がつづけて脊伸びをして、口をあいてるのを見て、まだそツけない樣子をして、『觀覽車が動物園だツかい、な？』

『…………』母は聽かないふりをして横を向いた。

『お母アちやん、動物園へ象に乘りに行こ』と、坊はまた母のそばへ行つて、ベツたり横になつた。

『この暑いのんに、行けまツかい、な？』

『そいで、なア、歸りにまた葡萄ぬすツとしよ。』

『大けい聲しなはんな！』から云つて、母も亦大きな聲で叱りつけた。『この子の阿呆は何云ふか知れ

へん。』
『ほんでも』と、鼻を鳴らして、『うちのお父さんは葡萄植ゑてくれへんが、な。』
『秋に植ゑたげる云ふてや。』
『今、植ゑて呉れ！　清ちやんとこには仰山成つてるが、な。』
『うちやこないだ來たとこやおまへんか――去年からゐてのとことは違ひます。』
『お家はん、ちよツと。』から云つて、女中が縁がはへの出口に手をついた。
『なんや？』
『百姓だす。』
『百姓がなんや？』
『お家はんに會ひたい云ふて――。』
『おまはん行といで』と、玉江は相手にしたくもないと云ふ風で娘を立つて行かせた。女中もついて行つた。
坊が動物園へ行かう、行かうと母をせついてゐる所へ暫くしてから娘が同じ細帶姿で立ち戻つて來て、坐敷の眞ン中につツ立つたまま、顏を赤くして、『坊が清ちやんにしやべつて、清ちやんが皆の人に云ふてまわつた云ふて、葡萄畑の人がおこつて來やはつた。』

『坊！』玉江は表情のない顏を叱りつける方に向けて、それでも左ほどあわてた樣子もなく、お前、云ふたんか？』
『云えへん、云えへん！』坊はからだを縮めて緣がはへ逃げた。
『誰れにも云ふな云ふたのんに——もう、取つたげへんで！』
『僕も誰れにも云ふな云ふたんや。』
『阿呆かい、な！』かの女はふり向いて、娘に、『さう云ひなはれ、子供の云ふたことなど取りあげんで置いて貰ひたいて。』
『わて、知りまへんが、な。』
『そんなら、わてかて知りまへん！　お前も喰べた癖に！』
『そんでも、わて、ぬすんで來やへん。』
壁ひとへを置いた勝手の方では、聽き慣れない男の聲が大きな響きを立てて惡口を云つてゐる。そして女中が何か云つてはなだめてゐる。
それでも、なほ、玉江はゆツくり腰を据ゑて、向ふの男に聽えるとも知らず、
『阿呆や、なア——坊！』
『坊の惡い、やおまへん、お母はんが惡い！』

『知りまへん云ふたら、えゝやないか？』

『そんでも、あツちでは分つてる云ふて、立派なおうちやさかい、買うたことにして、おあしを呉れ云ふのんや。』

『誰れがやる！』さげずみの眼付きを險しく見せて、『買うくらゐなら、もツとええのんを買ひまんが。』

『そんなこと云ふたかて――まア、行といなあれ。』

『おまはんが行たらえゝのに――けツたいな百姓や、なア。』かう云つて、玉江は肩にかけた手拭ひで大きな乳を隱して勝手へ向つた。後ろから見ると、結ひ立ての根の低い丸髷ばかりがよそ行き姿だ。

そして、いきなりつツ立つたまま、

『あんた、何云ふてなアる？　うちの坊はぬすツとなどしやしまへんで。』

『坊がした云ふてるのやない！』百姓も目に角を立てた。『あんたがぬすんだ云ふのや！』

『わてもぬすツとやおまへん！』

『ぬすツとやないか？　おれの畑の葡萄をぬすみやアぬすツとやないか？』

『いつ盜みました？』

『おとつひの晩や！』

『その證據(しようこ)がありまッか？』
『坊(ぼん)が云ふたら、何よりの證據や！』
『坊が誰れに云ひました？』
『齋藤はんの坊に云ふた！』
『子供の云ふたことなど當てになりまッか？』
『子供は却つて正直(しやうぢき)や！』
『正直やさかい、ぬすッとなどしやへん！』
『今、したやうに云ふてたやないか？』
『何云ふたかて、こッちの勝手(かつて)や！』
こんな云ひ爭ひをして、何の結着も付かないところへ、主人がひよッこり『暑い、暑い』と云つて歸つて來た。
『あんた、まア、ええとこへ歸んなはつた、なア』と、玉江は力づいて、『この人が坊にぬすッとしたと云ひまんね。』
『何をぬかしに來たんや！』から、主人は初手(しよて)から怒つてしまつて、『わしのうちにやぬすッとするやうなもんはをらん――歸れ！　歸れ！』

『坊やない、お家はんや！』

『阿呆云ふな！　そないなをどかし云ふて來たかて、取り合はん！』

百姓が何を云ひかけても、主人はなぐり付けないばかりにあしらふので、

『おぼえてやがれ』と云ひ殘して歸つてしまつた。その時、娘のオルガンをいたづら彈きしてゐたのが聽えた。

主人が直ぐ湯に飛び込み、これもふんどし一つで茶の間へ太つた、毛もくじやらのからだを運び出したのを皆が取り卷いた時、玉江は娘が默つてそばにゐるのを知らないかのやうな平氣で、主人をあふいでやりながら云つた、

『こツちは人氣が惡いのんだツしやろか？』

『人氣と云ふほど人間の數はをらんけど、なア――これから別莊がふえて來るほど、別莊を當て込んで何やかや云ふて來るやろ。』

『いやや、な！』かの女は身ぶるひをして見せて、『用心せんならん、なア。』

『用心も無論必要やが――』

『矢ツ張り、大阪にをつた方がええかい、な？』

『大丈夫や、皆で組み合ふて巡査を置くことになつてるさかい。』
『そしたら、ええ、なア』と云つて、かの女は媚を帶びた笑顔を娘に向けた。が、娘は横を向いてしまつた。
坊が、つづけざまに、實の成つた葡萄を植ゑて呉れろとせがんでゐる間を、玉江は主人と芝居の話をした。そして若い俳優連に關する内輪の消息を互ひに新らしがつて話し合つてるうちに、かの女はまた突然藝のことに移つて、
『福助はんのおさんで成駒屋の紙治をもう一邊見たい、なア。』
『ありやほんまによかつた、なア――日本一ちや。』
『そんでも、曾我の家一座も面白おまツせ。あの「情」なア、あれを見てると、初手から切りまでをかしいて、をかしいて！』その場にあるやうに『あは、あは』と、口をあいて笑ひ、『あの正直者の俄か醉ひたんぼが、なア！』
『五郎はんも甘なつた。』
『僕、河内屋好ッきや。』かう云つて、坊は山田長政の態度を氣取つて見せた。
『この子は延二郎はん好ツきやで。』玉江は眼を細くして、坊の大きな見えをしてゐるのを眺め、『あの人の眞似ばかりしてる！』

『お母ちやんも好ツきやないか？　おほツけ姉ちやんも好ツきやないか？』

『そんで、お前も好きだツか？』

『お父さんも好ツきや、なア』と、肩にのぼるやうにしておやぢの五分刈りあたまを撫でまわしたが、とう〳〵押して倒して馬乘りになつた。おやぢはあふ向けになつて子を兩手でさしあげ、足の裏のうへに載せた。すると、手と足とを別々に動かしながら、

『龜は萬年の——』

『お父さんの謠ひをおぼえた、な』と、主人はその子をくるくると一まわしまわした。

『いやや！　いやや！』から、あわて叫んで、坊は下へ飛び下りた。

『この子は何にも云はれまへんで、ちよかやさかい、なア。』

『お前、ちよかはんか？』

『ううん、そやない。』

『そんでも、お母はんの云ふた云ふことを云ふたやないか？』

『これから云はんさかい』と、母の方へ引きつけられて、『お菓子おくなアれ。』

坊がビスケットを貰つて、外へ飛び出した跡でも、夫婦の間には役者ばなしが盡きなかつた。

けふは、池田の新市街に主人の謡ひの稽古があると云ふのでいつもより早く晩餐を濟ませた。そして膳を引かせてから、皆で夏橘柑の皮をむいた。

『こない暑い時ヤ』と、兩肌ぬぎの主人は、[illegible]を少し離れて、横庭の端近な处に太いからだをもたせかけて、『西瓜でも喰ひたい、なア。』

『この近邊にはおまへんが、な。』玉江は手にしみても袋を引ツくり返して、ぼり／＼云ふ程勢ひよく嚙み味つてゐたのが、口の端へ溢れたつゆを萩の大形のついた袖で押しぬぐひながら、

『これ、喰べなはれ、おいしおまッせ。』

『そない酸いのんを剝くだけでも邪魔くさい。』

『西瓜かて邪魔くそおまッせ——網に入れて、井戸へつけたり。』

『そんでも』と、皆のうまさうに喰つてるのをあぐらで見おろしながら、うちわをおほやうに使ひ、『新田西瓜の本場へ行てて、夜中に畑の大けいのをたち割つて喰ふと、種まですツと冷てて うまいさうや。』

『どう云ふわけだツしやろ?』

『夜つゆで冷えてるさかい。』

『あ、そんなら、なア』と、ぐツと喉を鳴らして娘の方を見て、『おとつひの葡萄もそれだツせ——夜

つゆがきら〳〵とお月さんの光(ひかり)に光つてたさかい、なア。』

『わて、知りまへんが、な、行(い)けへんさかい。』

『夜つゆにしゆんだ葡萄もうまいか知らんけれど、西瓜にやかなはんやろ。』

『ほたら、お母ちやん』と、坊は汁によごれた手で母の浴衣に障り、『今度は西瓜取つて來うか――種まで眞ツかいの？』

『阿呆云ひなあれ！』

『赤い　んが阿呆か？』

『人の物を取りやアぬすツとだツせ』と、おやぢがたしなめたのに恐れて、

『僕取れへん。』

『お前、えゝ子やさかい、なア。』から云つて、玉江は坊からその目をまた娘の方に轉じた。そしてその手は相變らず樒柑の袋を破りながら、『もう一邊あないな葡萄喰べとうおまへん、なア。』

『そしたら、買ひなあれ。』娘の答へは、外のゆふ風にそよぐ夾竹桃(けふちくたう)の花へ向いた。毛槍の毛のやうに逆立つた園生(おせい)の繁葉(しげば)と共にすき〳〵延びて、隣りの庭をのぞいてゐるその枝々には、桃色の花が咲き揃つてゐる。

『お前、喰べたいことないか？』

『喰べるなら、買ひなあれ！』
『買う云ふたかて』と、當てつけと感じたので、『晩の夜中であつたさかい、人がゐてえしまへんが、な。』
『葡萄畑には夜番がゐるが』と、主人は玉江に教へた。
『おう、こわ！　左よか。』かの女は今度は本當に身ぶるひして酸ツぱさうに目をつぶつた。
『そない酸いのんを仰山喰たら惡い。』
『おいしかつたら』と、笑ひながら、『仕よがおまへんが、な。――そしたら、わて等はうか〳〵夜外へ出られまへん、なア。』
『夜番がみなぬすツとでもおまへん。』
『そやけど、なァ――』

日がとツぷり暮れてから、主人は謠ひ本を以つて池田へと出て行つた。
そのあとへ、長男が大阪から歸つて來て、飯は濟んだが何か喰ひたいと云ひ出したので、薩摩芋をゆでさせて、皆でまた喰つた。
やがてちよか助の坊が寢てしまつたので、
『やれ〳〵、これで安心や』と、玉江は片肌ぬぎのからだを蚊屋の中から這ひ出させ、そこに兄弟が

涼んでこの椽さきへ來て、本庭の蜜柑の樹がさら〱その葉を鳴らしてゐるのを聽いて、また何か喰べたいやうな氣持ちになつた。『坊が起きてる間は、うるさうて、うるさうて――何を喰べても、喰べた氣イせえへん。』

『あんたにどないう喰ふ人もおまえんが、な。』から云つて、長男は妹と顏を見合はせて冷笑した。

『おまはん』と、かの女は長男に向いて、『葡萄喰べたいことないか？』

『行つたら喰べてあげまツさ。』

『いいえ、これから買うて來るね。』

『今頃から、電車に乗つてだツか？』

『電車かて、そないに乘てたもんやおまえんが、な、つい、岡町まで乗つて行きや、大けい八百屋もある――便利で、市中にゐるのんと、違えへん。』

『そんでも、わてや行くのんはいやだツせ。』

『わてかていやや』と、娘も取り合はなかつた。

『お霜やんなあれ。』と、長男も未練はあつた。

『あれもこわがりやさかい、なア――あ、そんなら、なァ』と、玉江はいい考へを得たと云ふやうにからだを飛びあがらせ、娘に向つて、『おとつひのやうなんを買うて來うか？』

『もう、置きなあれ、な。』
『どこに有んのや？』
『つい、そこの、なァ』と、矢ツ張り、娘に頷き合はうとする顔つきを見せながら、『箕面道や。』
『葡萄畑に成つてるんだツか？』
『それが、なア、夜が更けてから取ると、夜つゆがしゆんでおいしおまツせ。』
『そりや、うもおまツしやろ、なア――けど、わて、いやだツせ、疲れてまツさかい。』
『そんなら、おまはん一緒に行きなあれ。』
『散歩がてら行てもええ』と、娘は受けがつて、『どうせ暑うてまだ寝られんさかい。』
『さア、行こ、行こ』と、玉江は勇んで肌を入れながら立ちあがつた。
『そんでも、人がゐまツか？』
『あの、なア』と、かの女は長男を見おろし『夜番がゐるさうや――おあしさへ用意して行きや、安心なもんや。』

　櫻井邸宅地の經營が廣がるに從つて、心細くも切り開かれる運命に迫つてゐる蜜柑畑の間をぬけて箕面街道に出ると、十三日の月があざやかに冴えて、箕面の連山を黑く染め出してゐるのが見える。

そして夜風はそよ〳〵と平地の樹木を吹き渡つてゐる。

小刻みに急ぐ玉江は二三十歩で立ちどまつた。そして腰をかがめて、數百坪に跨がる薄ぐらい葡萄棚の下を窺ふ黑法師となつた。

『誰れもゐえんか、な』と云ふ聲がした。

『ゐえへんかて』と、跡からついて行つた娘は、手に持つたうちわを顎に當てた姿を月の光にむき出して、『這入つたら、惡い。』

『構へん、かめへん！』かう云ふ聲が、いつのまにか、棚の下蔭から聽えて來た。

『お母はん、置きなあれ、惡い！』

『かめへん、かめへん！』

『置きなあれ！　惡い！』

『かめへん、かめへん、見つけられたら、買うつもりでおあし持て來たと云ふたらええ。』

『置き――』と云ひかけると、どこからか石が一つ飛んで來て娘の額に當つた。『きやツ』と云つた叫びに驚いて、玉江が空手で、然し兩の袂を重い物でぶら付かせながら、畑から飛び出して來た時は、娘はその場に氣絶してゐた。

――（四十二年）――

川本氏

札幌を出發したのは十一月六日の夜だが、おほ雪が降つてゐた。

僕は、東京へ向つて出發したのであるが、一人の病人をつれてゐた。お鳥と云ふ若い婦人だ。僕はここに婦人と云ふ。ふたりは、合議の上、これまでの關係をやがて絕つことになつてゐたからである。このお鳥は、婦人にありがちの病氣で、出發の時刻まで、札幌の或病院に這入つてゐたのだ。まだ全快してゐるのではないので、夜を通して函館まで來るあひだ、かの女は僕の膝にもたれてからだを休めたり、眠つたりしてゐた。

それまでは、まだしもよかつたが、函館から青森へ海上を渡る時、非常に船に醉つたので、青森で上野行き列車の出發を待つ間に、少しも食事はせず、ただ牛乳を一杯すすつただけである。

いよ〳〵午後六時、乘り込みの時刻が來ると、僕等の腰かける場所もないほど、多數の乘客であつた。――僕等は病院やその他に多くの拂ひをした爲め三等切符を買ふの止むを得ざる狀態であつたのだ。――あちらの客車、こちらの客車と探し步いても、一向空席が見つからない。止むを得ずどこへ

でも押し込むつもりで、僕が或客車の踏み段に片足をあげると、お鳥は、立つたまゝ、

『あたい、そんな窮窟なところ厭だ、わ』とすね出した。

僕はかの女の財布の中と僕のポケトとをそらで數へて見て、大抵大丈夫だらうと決心し、かの女だけを僕の客車につゞく二等車に乘せてやつた。

僕の車中にも一ヶ所空席を發見したので、僕はそこに腰を据ゑ、列車が動き出してから、鳥渡お鳥の樣子を見に行くと、熱が出て來たと云つて、足をのばして横になつてゐた。ひたひにさはつて見ても、然し、さう熱がありさうでなかつたが、横になるだけの空席はあるので、他の客が這入つて來るまでさうしてゐてもよからうと云ひ聽かせ、胸が惡いとも云ふので、仰向けに寢かし、胸から足の方に毛布をかけてやつたが、割合に脊の高い女であるから、足だけは遠慮して膝を折らして置き、乘り合の人々にも申しわけを述べて、僕は僕の席に引き返した。青森から雪はないから、昨夜の寒さで風を引いたのであらうと思つてゐた。

再び見舞つて見た時、第一に氣が付いたのは、空席が一二人出來てゐたことだ。それから、お鳥の顏の上に僕の顏を持つて行つて、靜かに、

『氣分はどうだい?』から聽くと、

『吐きたいのよ』と、肩をゆすつて眉をしがめた。これは、かの女があまへる時、よくする表情で、

僕には見慣れてゐるから左ほど驚きもしなかつたが、吐きたいと云ふのだから、室の中央に置かれた金の平たい痰つぼを近よせると、かの女は直ぐそれへ白い物を出した。宵に飲んだ乳らしい。僕は他の乘客に見えない樣にそれをかこつてゐたが、壺から溢れ出したので、通りすがつたボーイにわけを話して、掃除して貰ふことを頼み、

『餘り惡いやうなら、盛岡か、どこかで降りてもいいから、ね』と、お鳥に注意すると、

『辛抱出來ることなら、する方がいい、わ』と答へるので、他の人々にも無禮のないやうにして、落ちつかして置いた。

盛岡へ段々近くなつて來た時、また見舞つて見ると、お鳥の車中の樣子が變つてゐるのに驚いた。他の乘客等がいづれも無言で凝視してゐる間に、一人の、古ぼけたとんびを着たままの、肥えた紳士――それまではゐなかつたと思ふ――が、お鳥の足の方にかけてゐて、その前に立つてゐるボーイと押し問答をしてゐる。

『貴樣アボーイぢやアねいか？　汽車中を取り締つて行く役目でありながら、こんな無禮を見のがして置くと云ふんか？』

『さう云ふわけでは御座いませんが――』

『だら、なぜ』と大聲に足踏みして、『起さないんだ？』

『それでも――』
紳士は確かに醉つてゐるらしい。然し醉つてゐる爲めのくだ卷きでもない樣だ。ボーイの顏をにらみつけて、『それでも』のつゞきを待つてゐるところを見ると、僕の昔知つてゐた川本氏である。
然し僕は渠を嫌ひであつた。僕ばかりではない、渠を知る學友は誰れでも渠を嫌ひであつたのだ。
仙臺の或耶蘇教學校に僕等が學んでゐる時、年うへだけに渠は僕の先輩であつた。僕は英語を目的に普通學部にゐたが、渠は傳道師になるつもりで邦語神學をやつてゐた。もとは大井憲太郎の部下に屬する壯士であつたさうだが、耶蘇教に改宗してからは、非常に熱心な信者になつた。その熱心は人も許し、われも許してゐたと云つてもいゝ。然しさツぱり人好きのしない男であつた。
まだ學生でありながら、教會を一人で脊負つてゐるかの樣にがんばつて、定まりの集會に出ないと云つては會員を責め、出るとまた、態度が不謹愼だと云つては、それを責める。笑つたと云つて責め泣いたと云つて責めるので、渠のゐるところでは、新入會員等はどうしていいのか分らなかつた。然し渠はさういふことをしなければ自分の熱心がをさまらないばかりでなく、さうして自分の熱心を得意がつてゐたのだ。
然し渠一個の都合の爲めに人々は自分等の行爲を左右されるのを好まなかつたから、成るべく渠を避けて、近よらないやうにしてゐた。

神學部を出てから。渠は矢張りさういふ態度を以つて傳道師になつた。何も知らない田舍人は、その熱心に隨喜して、渠を牧師にまでも仕あげた。渠は得意になるに從つて、人の行爲に干渉することが甚しくなつた。そして人の行爲に干渉することが甚しくなるに從つて、それだけ渠自身の行爲を責めることが薄くなつて來た。教會員は、それを看破するに至つて、彼を放逐した。渠はます／＼人の無情と罪惡とを指摘する性情を強くすると同時に、彼自身は酒をあふつて大道にごろつくやうになつた。

　それまでは僕もよく知つてゐるが、それからどこへ行つたのか分らなかつた。うわさに據ると、北海道で隨分よく開墾をしてゐたが、持ち前の性分の爲め失敗したことがあるさうだ。今でもそこにゐるといふ話もあつたから、僕は札幌に於て彼を思ひ出さないでもなかつたのだ。

　その人が今、僕の目前で、僕の携帶者のことで、また例の調子でボーイと押し問答をしてゐるのであつた。僕は名のるのがいやであつたから、知らない振りで通すつもりで、

『鳥渡――失禮ですが――若しこの婦人のことで起つたお話しなら、長くとは申しません、盛岡でおろしますから――どうかそれまで――』

『なにイ』と、川本氏は僕の方に向いて、『君の席があるのか』と、少し勢ひがゆるみかけたが、

『いや、わたくしはあツちの室にゐます』と、僕が答へるのを聽いて、渠は再び威だけ高になり、

『苟くも二等室に乘るくらゐのものなら、それくらゐの禮儀ア知つてゐる筈だ。』
『御婦人ですから』と、ボーイ。
『御婦人だツて、何だツて、おれの妻がゐたなら、矢ツ張り婦人だ。それが勝手氣儘に長くなるといふ法があるもんか?』
『實は』と、僕は一層おだやかに出て、『船で醉ひまして――また汽車でゆられましたので、御無禮を致してをります。』
『無禮にやアきまつてる!』
『御病人ですから』と、またボーイ、『お醉ひになつて――』
『おれも醉つてるのだ!』
『それは、あなたはお酒にお醉ひになつてをられますので――』
『おれも寢るのだ。ゆふべから眠らなかつたんだ。』
『それは、あなたの御勝手に、お眠りなさりませんでしたので――』
『兎に角、あれを起せ、起せ』と、川本氏は窓の方に大きくもたれかゝつた。
お鳥は案外平氣で、毛布の中で足は縮めてゐるが、仰向けになつたまゝ、目をつぶつてゐる。
僕は、近よつて、わざと大きな聲で他の人々にも聽えるやうに、

『盛岡でおりるかい』と聽くと、目をひらいて、
『人がやかましく云ふから、おりたくなつたの』と、ちいさい聲。
『では』と、僕はボーイに『盛岡でおろしますから、それまで賴みます』と語り、そこを出がけに、また川本氏に、『何分、病人のことで、濟みませんが、それまでよろしく』と云つて見たが、渠は何の答へもしなかつた。

僕は、多少薄氣味惡くないでもなかつたが、そのまゝ自分の席に引ツ返した。時計を見ると、十時過ぎ——眠くもある。

やがて、お鳥の車室のボーイがやつて來て、僕等の室に空席があるかないかを探してゐる樣子であつたが、一つ見つかつての歸り足を僕のそばにとゞめ、
『どうか、只今のは御勘辨を——時々、あゝいふお客さんがあつて困ります。途中で三等から乘り變へたんで御坐いますが、まだ切符を切り變へませんので、わけを話して、もとへ直つてもらふことに致しましたから——』
『それは氣の毒です、ね』と僕は挨拶した。

直ぐ二人のボーイがおもい手荷物を提げて這入つて來ると、それについて、川本氏も苦い顏をして來た。渠は僕のそばを二三席過ぎたところの、通り道がはの席を占める爲め、窓ぎはの客と肱かけと

の間に、でツぷりしたからだを横柄に割り込んだ。窓ぎはの客は、どんなえらい人が隣客になつたのかと云はないばかりに、ちいさくなるのが僕に見えた。

肱かけのそばで中央の道に、ボーイが積み置いた二個の荷物は、下のは何だか分らないが、上のはみやげ物らしい。菓子折の様なものや林檎入りの籠であつたらしい。

間もなく渠は居眠りを初め、窓ぎはの客の方へもたれかゝつて行つた。客は暫く無言でそれを堪へてゐたが、餘りおもみを感ずるやうになつたからであらう、咳ばらひをして胸をゆすつた。川本氏は目を覺まし、何かしほらしい詫言を云つてゐた様であるが、今度はまた肱かけの方にたわいもなく、こくり〳〵ともたれ出した。

僕に限らず、車中の注意はすべて渠に集つてゐたので、渠のそのあり様を獨りで凝視してゐる客もあれば、互に小聲で冷笑し合つてゐる客などもある。

『二等から天降つて來た醉ツ拂ひだ。』

『なアに、三等から切りかへて貰はうとしてことわられたんだらう。』

『そんなに醉つてるとも見えないが――』

『酒樽の様にふてい奴だ。』

『可愛さうに、眠いんだらうよ。』

人々がこんな嘲弄語を吐いてゐるのを聽きながら、僕もいつのまにか眠つてしまつたらしい。『わツはツは』と、手を打つて人々が笑ふ聲に目を覺ますと、川本氏は席からころげ落ちて、みやげ物と共に倒れてゐる。

然し氏はのツそり起きあがつて、大きな風呂敷の中で長方形のものが角張つてがく〳〵してゐるままを手にもたげて、もとのところに積み直し、自分も元の席についた。

僕は直ぐまた眠つたらしい。

ふとまた目が覺めると、川本氏は僕の方に向ひ、つツ立つて何かしやべつてゐるのだ。『禮儀といふことを知らなければならないです』と、出しぬけに大聲を聽かされ、僕はお鳥と僕とのことを語つてゐるのではないかと驚いた。然しさうではなかつた。渠は、說教者の教壇に立つ樣な、おほやうな態度を持つて、暫く無言で車中を見まわしてゐたが、おもい、腹から出る樣な聲で、『禮儀――禮儀――禮儀をです』と繰り返し、『諸君は實に禮儀といふことを知らん。わたくしが席からころげ落ちたのを見て、ただ徒らに笑つてゐるのは何のことです？――失敬ぢやないか？――無情といふものではないか？――諸君は實にあさましい人々だ。』

かういふことを、おもくるしい調子で、間を置き〳〵しやべつてゐたが、車中は默つてしまつて、相手にするものがなかつた。

渠は物足りない樣な顏つきをして席に着いた。然し直ぐまた立ちあがつて、
『世の中は實にあさましい。實にあさましいものと云はなければならん。――さうしたのが世の中の人の常かも知れません。然し、諸君、わたくしは今醉つてゐたのであります。酒に醉つたものには、少しも罪がないのです。――罪のない、云はば、無邪氣に倒れたものを目の前で見ながら、手を打つて笑ふとは何のことです。可愛さうだといふ考へは諸君に起らないんですか？――諸君は先づ飛び出して來て、わたくしを助け起してくれんければならんです。――諸君には、その考へが起らない。世の中は實にあさましいです。』

　この最後の一句などには、最も誠實な語氣が含まれて、僕には豫言者の熱誠も亦これには劣るとも、勝ることはあるまいといふ樣な氣がしたのだ。然し誰れも渠を相手にしなかつた。何となく、その威嚴ある樣な態度にはおそれた樣子であるが、皆が皆北海道の雪を背中にしよつて來たかの樣に冷淡で一言も同情の意を表するものはなかつた。

　渠は、暫く何かの返事または應援を待つて居る樣子であつたが、急に顏を和らげ、
『いや、かう云ふことを諸君に申しあげてすみません――すみません――どうか、お許しを願ひます』
と語り、ゆる〳〵と席に着いた。

　渠のあたまに何ごとが浮んだのか、その態度の突然變化した理由は、然し僕に分らなかつた。

車中を見まわすと、今までおそろしさ半分、おもしろさ半分に謹聽してゐた人々の興味が一時にしらけてしまつたらしい。室の一隅には、どこかへ護送される囚人が五六名陣取つて、あみ笠の下からこの演說者の方を見てゐた。そして附き添ひの巡査二名のうち、一名は知らない振りをして煙草を吹かしてゐ、また一名は居眠りをしてゐた。

川本氏自身の醉ひも醒めてしまつたらしい。僕と巡査等とにそびらを見せて、頻りに煙草のけむりを吹いてゐた。

然し僕はその後渠がどうしたか知らない。今度の驛が盛岡だといふので、僕はそこを去つて、お鳥を下車させる仕度にかかつた。

停車場近くの陸奥館といふのに落ちついたのは、もう、夜中の十二時を過ぎてゐた。然し直ぐ醫師を迎へて診察を乞ふと、お鳥の急病は風氣からではなく、矢張り、まだよく直らない子宮病の發作であつた。

醫師も去り、女中も退いて、僕等二人になると、お鳥は安心した樣子で不斷の如く話しをし出した。

『あのおやぢは、あれから、どうしたの？』

『僕の室へ來て、頻りに演說してゐたよ。』

『變なおやぢ、ね——二等客になつて、威張つて見ようとしたのだと、皆が笑つてた。』

『さう臆斷するのも可愛さうなことがあるんだ。』

僕はかう云つた切りで、お島には川本氏の來歴を話さなかつた。

――(四十二年)――

# 韃靼海峡

『僕は、君、僕の漁場を自慢するのぢやアないが、今年の收獲高を——まだ精算は出來んが——およそのところを概算して見ると、鰊で四萬圓、鮭鱒の方で二萬圓、都合六萬圓の純益は確かだと思つてるよ。』

から云つたのは、露西亞國境に最も近い安別番屋の監督・熊田と稱する男で樺太本廳第〇部長巡視の一行に便乘して、漁場の仲間を一便先きへ引きあげて來たのである。汽船吹雪丸と云ひ、樺太廳所有の警邏船で——南部樺太の西海岸を國境まで行つて來た歸航途中を、船中の食堂で、一行は今ブランデーの小宴を開いてゐる。

『そんなに儲かるのなら、少し廣告費として僕の方へ出して吳れてもよからう。』これは豐原日々と云ふ御用新聞の眞岡出張員で、碧水と號する人だが、からだが幾らでも太つて行くので、それを豫防する爲めに酒は一滴も飮まない。『今度まわつて來たうちでは、トマリオロの漁場が少しよかつたくらゐなことで、跡は皆——トマリポでもノダサンでも——とても話しになりさうでない。ろわべばかり景

氣のよささうなことばかり云つて、裏へまわると、皆來年までの踏みとまりが六ケしいやうだ。現にナヤシの二百三十號の如きは、番屋がこの一ケ月以前に逃げてしまつたので、給金を貰へなかつた夫婦が一組、歸ることも出來ないで、小いむしろ小屋を拵らへて、その中に乞食同樣寢起してをるのを見て來た。』

『うちのは』と、熊田は確信ある口調を以つて、『無論、そんな悲境に落ちる氣づかひはない。』

『そりやア、その筈、さ。』碧水はわざと聲を強くして、『密獵の親玉だから、なア。』

『そんなことアない、さ。』

『は、は、は』と、第〇部長の坂本は笑つたが、その禿げあがつてゐる額の筋が意味ありげに動いたのを見て、その筋向ふに腰かけてゐる熊田は少し氣兼をして、

『實際、そんなことはない。』

『けれど、君』と、碧水は調子に乗り、『あのトルストイの鼻を眞ン中にして、さ、日本の警邏船が來れば、露領へ逃げ、露西亞の官船が見えれば邦領へ驅け込むやうにしてゐりやア、禁獵期の鮭でも、秋鰺でも、勝手次第だから、なア。』

『そりやア、占領當時アいざ知らず、今は――』

この時、大きな横浪でも當つたかして、たツた百五十噸の汽船が外部からどしんと云ふ音を傳へて

非常にゆれた。最も驚いたのは坂本部長だ、口にしかけたコップを中にまごつかせて皆のものを見まわした。渠には、熊田が獵師の親かたとして船に強いのは當り前だが、醉つた先例がある碧水がけふに限り自分よりも平氣で、頻りに大氣焔を吐いてゐるのが羨しかつた。そこへ持つて來て、不意に驚かされたのが、何だか自分の威嚴を落したかのやうに思はれたので、それをさりげなく見せる爲め、熊田の言葉が終らないうちに叫び出した――

『なアに、やれるだけやり給へ。』

いつも注意深い部長のこの意外な豪語に聽き耳立てたのは、渠の正面に相對して、頻りに原稿を書いてゐる或東京新聞の記者、中村湖北である。然し部長が眞面目らしく、

『露西亞の領海から金があがるだけ、どし／＼あげて來るのはよいことです。愛國心のあるものがすることです――然しわが國の領海で密獵されるのは、ちと困る、なア』と云つたので、

『は、は』と、湖北も輕く笑つた。

それでその話は途切れてしまつた。

厚い樺の長テーブルをさし挾んで、海岸がはに部長、碧水、眞岡支廳長、沖がはに湖北、熊田、部長の一隨行員と云ふ順序に並んでゐる。

『今一杯どうです』と、坂本部長は旅行用の小いブランデイ瓶の口を取つて、湖北のコップにつぐ。

もう殘りすくなになつたのを見て、支廳長に向ひ、『濱野君、君の方のを少し貰ひましようか？』
『わたくしのも少し心細い方ですが』と、ほほ笑みながら云つて、濱野は自分の前に置いた大瓶を傾けて碧水や熊田のにつぐ。
『僕のオツカも出しましようか、ね、ビレオで分けて貰つて來た？』かう云つて、湖北は自分の包みに手をかける。
『いや、もう置き給へ。』坂本はそれを手眞似で制し、碧水の方を見て、笑ひながら、『たださへ船に醉はうとしてゐる人があるのに、そんな強い酒を飲まれては困る。』
『先づ困るのは部長ですか？』碧水も拔からずかうからかひ返した。坂本はもう船暈の矢を射込まれたやうに、一しほ自分の胸の中まで浮きつ沈みつし出して來たが、さう見られたくないので、強いてその笑みをつづけながら、
『まア、君から初まるのだらう、な。』
『大丈夫でしようよ。』かう云つて、濱野は碧水が肱をついて、その顎を右の手から左へ、また左の手から右へもたせ掛けてゐる樣子を控へ目にあざ笑ひながら、實は、自分は決して醉はないから、部長殿も安心して御座れと云ふ意味を聽かせた。
『碧水君は』と、湖北は鉛筆を休めて同業者に向ひ、『さう船に弱いのか、ね、僕は眞岡から仲間入り

をしたので、その前のことは知らないが――?』
『いや、さう弱くもないが』と、少し顏色が青くなつて、喉で何か呑み込む樣子。
『その返事振りが』と、部長も多少むかつく胸を押し延ばして、
『もう、あやしくなつて來たぞ。』
『ノトロをまわつた時の例もあるから、な』と、濱野はふと部長の尻馬に乘つたが、碧水が若し吐くと、部長もそれに釣り込まれるに相違はないと考へたから、跡の言葉をさし控へた。
『そんなことで、海賊の殘黨でもないが、ね』と、湖北。
『いや、實際、占領前には、この邊までも來たよ――而もかはさきを漕いで、さ。』
『ガスの中から軍艦だらう?』から坂本が受け足して、『まア、昔の自慢でも云つて景氣を付け給へ。』
『實際、僕はその時嬉しかつたよ、敵艦かと思つたら、日本の巡視艦であつたから――』
汽船は一浪大きなのに乘つたかして、足場を失つたやうに沈んで行く。碧水の大きなからだが竦みあがつたが、船が平均を保つた時、立ちあがつて、手を延ばし、
『どうも、いかん――僕も一つブランデイをやつて見ましよう。』
『さア、やり給へ』と、坂本も自分の氣分を轉じさせる爲めに立ちあがり、自分の乾したコップを取つて碧水に渡し、それについでやりながら、『然しから景氣では駄目ぢや――この肥えた人は筆で人を

いぢめるから、こんな時に船で復讐してやるに限る。』

『中村君は』と、濱野は右の肱をテーブルにかけて湖北の方を見て、『なか〳〵平氣です、な――始終原稿が書けるやうでは？』

『なアに、ビレオの印象を消えないうちに書き止めたいのです――僕もなつて來るか知れません、段段胸が惡く。』

『そ、そんなことは云ふな。』碧水は半ば口にしたコツプを口から離して持つたまま、『かう船がゆれるのはけふが初めてだらう。』

『ノトロ岬があつたよ。』坂本は碧水の苦笑するを見て、今の場合自分も苦笑しないわけに行かなかつた。

海は段々荒れて來たやうだ――脊の高い瓶が倒れかけるので坂本は濱野に命じてその口にキルクを詰めさせる。

『それはさうと、あのビレオの淫賣屋ですが』と、濱野はゐ直つて坂本に、『露領ですから、直接に命令を以つてやめさせることは出來ますまいが――』

『いや』と、湖北は首をあげて口出しをしたから、濱野は鳥渡いやな顏をした。が、坂本の方に顏を向けた湖北には、それが見えないで、『あれはあれでいいぢやアありませんか？ 國と國とはいつも戰

爭をしてゐると同樣で、手段の如何に關せず、本國へ他國の金を持つて歸へることは、寧ろ奬勵してかまはないと思はれますが――』
『僕も』と、坂本は胸を押さへながら、『その意見には賛成ぢや、國際間には、個人間の道義的關係のやうなものは殆ど發見されないから。』
『樺太の渡りものには、然し、個人間にでも道義などの觀念はない――ところで、熊田君』と、碧水は女のことを思ひ出して鳥渡勢ひを盛り返し、『君も知つてるお花、な――』
『どこの』と、今まで默つて人の話を聽いてゐた熊田に問ひ返され、
『あのゴケ、さ――坂井伯の落し種の。』
『うん、あれか』と、首を一つ上下に振つて、乘り氣になり、
『眞岡新報の長井の、さ――ピレオにをる。』
『そうだ。君も知つてるか』と、少し話の腰を折られた樣子で、
『僕等が巡視に行つた時、十五六名の露助やちやん〳〵坊主と手を握り合つたり、うち合つたりしてふざけてゐやがつたが、僕を見ると、さすがに良心はあるかして、ごけ家の中へ隱れてしまつた。』
『長井も知つとるか？』
『うん、アレキサンドルへ徒歩旅行をした時、あいつのことだから、行きにも歸りにも會つて來たさ

うだ。』

『露助のやうな強い奴ばかり相手にしてをつても、よくよわらないものだ、な。』

『ところが、五六名もゐたが、皆洋服姿で肥えて、血色がいい――皆けろりとしてをるよ。』

『喰ひ物がいいのだらうと思ふが、な――』

『それもあらうが、あんなところで色男の心配をする必要もないから、氣が樂なのだらう。』

『そんなものか、なア、あんな女は』と、坂本は無粹らしく口をさし挿んだが、心では、碧水の述べた理由ぐらゐは自分にも分つてゐると云ふ腹はあつた。で、その無粹をうち消すつもりで、『然し落し種など云ふのは嘘ぢや――新聞と云ふものは、よく面白い嘘を云ふから。』

『いや、確かにその證據があるのです。』

『君の』と、坂本は俄かに冷やかな態度になり、碧水の方を見ながら、『聽き込んで來る種には、漁業家の內幕に關しても、度々當てにならんのがある――此の間の密告なども調べて見ると、丸で跡方もなかつた。』

『いや、あれは』と、あたまへ手をのせたが、熊田の方へは遠慮がちな目を向けた。

『官吏と御用記者!』から橫目に睨んで、心に叫んだ湖北は自分の言論自由な身であるを祝福したと同時に、情實にからまつてばかりゐる仲間の空氣を暫く離れたくなつたので、『どこらを通つてるのだ

らう』と獨語しながら、その食堂を拔けて甲板へ出た。七月二十四日の太陽は中天に照つてゐるが、北風は都の十二月頃のやうに寒い。

氷のやうな泡を山と築きあげては、またうち碎くおほ浪のうねりを越えて、陸の方に黑ずんで見える山脈の間に、一つ秀出でた峰が見える。沖の方には、また、汽船が一つ北を向いて進んで來る。それ以外には、もと〳〵、何も見えない、然し見えるものは皆、浪と共に、うね〳〵と浮んだり、沈んだりしてゐる。

湖北の跡を追つて來た坂本が、青ざめた顏を無理に微笑させながら、はしごを登り切つて、足を甲板の上に置くと、夢に暗やみの中へ落ちる時のやうな氣がして、ふら〳〵とよろけた。

『あぶないですよ。』かう云つて、湖北は然しそのそばの欄干をしつかり握つてゐる。そこは沖の方に當つてゐた。

『隨分えらい、な。』坂本も苦笑をつゞけて欄干へかぢり付いた。

濱野がまた部長の樣子を心配してあがつて來た。

『いかがです、御氣分は？』

『まア、そんなことは云ふて吳れん方がええ。』成るべく胸の騷ぎに手を觸れないやうにしながら、『これがもツと荒れるやうでは、ウショロに泊らせるやうにしたらええか――諸君の意見もあることだか

ら――僕はどちらでも大したことはないが――碧水は大分まゐつて來たやうだし――どうでしよう、中村君?』

『さア』と、湖北は同業者の苦しみを思ふよりも、部長のどこまで我慢強いかを押し詰めさせて見たいので『あの男なら、いくら吐いても、痩せる氣使ひはないでしよう――いつそ、行けるところまで行くがいいでしよう。』

『あの汽船は』と、坂本は初めて氣が付いた。

『あれは』と、濱野は右の手でうは髯をひねりながら、『安別まで行く〇〇丸の最後の航海でしよう――もう、エストル川の沖に近いです、あれがモロチ山ですから――ウショロに寄航するとしても、まだ御座いますよ。』渠は、この分なら、部長も我慢が出來るだらうと、思つてゐる樣子だ。

『どうしよう。』かう、坂本は目で濱野に訴へた。

『大丈夫でしようが、船長に一つ相談してまゐりましよう。』濱野はしツかり靴を踏み締めながら、船長の舵を取つてゐる上甲板へ登つて行つた。

向ふの汽船がすれ違ふほどになつてからも、こちらの汽笛は鳴らない。やがて向ふのがぶうツと吹き出したので、こちらもそれに挨拶を返した。

『官船に乘つてゐるのだ』と思ひ出しながら、湖北は段を降り、食堂へは這入らず、寢室の方へ行く

と、部長の隨行員と熊田とが疊の上に横になつて、話をしてゐた。

坂本も獨りで濱野の返事を待つてゐられなくなり、よろ〳〵しながら食堂へ降りて見ると、ぶんと鼻を突くものが流れてゐるそばの腰かけに、碧水が獨りぽツちで呻いてゐる。

『こりや堪らん。』渠は食堂を飛び出すと、機關の響きが底の方でごと〳〵してゐて、それが自分の胸を落ちつかせて吳れない。寒い風をかすめて、再び甲板に免れ出たが、船はおほ浪のくぼみへ深くさか落しに沈んで行くところで、欄干を固く握つてゐても、息は詰り、目は暗む。

ふわツと足場が浮んで來るのをおぼえた時は、耳は遠くなり、胸はむかつき、上下左右も一緒に混亂して、船その物までが嘔吐を催すのかと思はれた。

『大した心配は入らないさうです。』

『さうか』と、坂本は威嚴をつくろつたが、濱野の返事には嬉しいほどの力を得たのである。『皆が無事に行けるのなら、このまま進行しようか？』

『まづ横にでもおなりになつたら、どうです？』

『さうしようか、な？』

二人が寢室へ這入つて來た時も、湖北は腰かけにかけて原稿を書いてゐた。『君が一番えらい、なア』と、坂本。

『部長もなか〳〵我慢強いですよ』と、湖北は渠に言葉を向けて、目は濱野と見合つて笑ふ。
『碧水はとう〳〵やつてしまつた、なア』と云ひながら、坂本は、腰かけて最も上席のところに二枚つゞきの白手布を濱野に敷いて貰つて、横になつた。隨行員は手拭で鉢巻をして、動けなかつた。跡は濱野と熊田との座談へ時々湖北が口をさし挿むばかりであつた。
碧水だけは食堂にうツちやらかされてゐた。
ウショロの鼻を過ぎ、イチヤラ富士を望み、ライチシカ湖の沖を通過する頃には、午後の時間を大分過ぎてゐたし、また浪風も比較的におだやかになつてゐた。
『いるかが澤山ついて來ました。』からボーイが知らせに來たので、湖北を初め、熊田、濱野、つゞいて坂本も、甲板へあがつた。
すべて一間内外もあると思はれる鱶の一種の群れが、何百となく、一行の船を追つて泳いで來る、右舷から見ても、左舷から見ても、その數はかぞへ切れない。
やがて船の艫は群れの爲めに遠巻きにされたかと思ふと、速いのは既に舳さきの兩がはにも達してゐる。
船が浪を切つて進むよりもずツと速いのだから、見る〳〵一行は鱶群の爲めに取り卷かれてしまつた。

ボーイが石炭の大きなかたまりを持つて來て、頻りに投げつけて見るが、當つたのか、當らないのか、一向に分らない。

すき通る海のおもてを走る動物の青い脊は氣持ちよく光つてゐるが、あたまが圓く大きいのに比して尾の方がこけてゐるのが、餘りいい形には見えない。

船の龍骨のさきと平行して、その左右を面白さうに進む數個が、舳さきから一番よく見える。

人々はそこへ集つて下をのぞいたが、

『何のつもりで隨行して來るのだらう、なア』と、坂本は笑ひながら。

『さア』と、濱野は返事に困つた。

『競爭でもする氣でしよう』と、熊田は投げるやうに云つて、

『太い火ばしを曲げて牛肉をさして釣れば釣れます。』

『こんな動物にも遊ぶ氣があるのか知らん』と、坂本が云つたのに答へて、

『どうせ、ひまでしようから』と、濱野も微笑を漏らした。

隨行員も出て來てゐたが、自分はこの一ヶ月間とても暇などなかつたと思ふ。

『面白い、面白い。』湖北がから叫んで熱心に見てゐるうちに、いつのまにか、後ろの方の群れの數が見えなくなつて來た。やがて、また舳さきのもゐなくなつた。『怨敵退散です』と、ふり向いて坂本を

見た時、ふと思ひ出した、一行に取り付きかけた船醉も、亦、いつのまにか退散してゐたことを。

『おう、鷲が飛んどる、鷲に違ひない。』

『確かに鷲です、な。』

『あれがさうですか?』

かう云つて、坂本と濱野と湖北とが沖の方を見てゐた時、碧水は敗殘者のやうな顔つきをして甲板へ登つて來た。

——(四十二年)——

# 脊中合せ

一

藤田義行といふ男は、二十七歳まで小學教員をやつてゐた。滋賀縣彥根の在所に於てである。然し教員などでいつまでもぐづ〳〵してはゐられないと感づいて、それを辭職し、大阪府の××裁判所の雇ひ書記となつた。

性質は至つて實直で、勉强家で、缺勤などしないので、同僚間には評判がよく、直きに渠等の一人の周旋で、七つ違ひの細君を貰つた。八重子と云つて、これも亦義行と同樣、なか〳〵正直でおとなしい女だ。

やがて女の子が生れた。そしてそれが二歲になつた頃、他の赤ん坊とはどうも違つてゐるところがあるといふことが分つた。

同僚や上官達が來て、その子の樣子を見るにつけ、

『どうも、おかしいところがある』と注意し、これは、きツと、義行が酒を飲み過ぎた時出來た子で、

氣違ひに相違ないと斷定した上官もある。また、他の上官の如きは、

『どうせ大きくなつても、子供にもつまらんだらうし、親にも亦不爲めだから、いツそのこと今のうちに殺してしまう方がよからう』と、常談に勸める。

『本眞に氣違だろか、なア』と、八重子が心配らしく云ふと、

『まさかとは思ふけれど』と、義行も小首を傾け、『もしそんなことなら、いツそ殺してしもうた方がえいかも知れん、な。』

『そないなことが出來ますか?』

『無論、何とか體のえい方法を以つて。』

夫婦の心配と苦勞とは、この子の爲めばかりに、絶えるひまがない。子供は一日抱いてゐなければむづかつて、むづかつて仕やうがないのである。八重子は殆ど全日それをあやしてゐるのが仕事の樣だし、義行は役所へ行つてゐてまでも耳にはその泣いてゐる聲が聽える。

たまに、かな盥に水を入れ、それに手をつけさせ、勝手にぼちや／＼させるまゝにして置くと、その間は氣嫌が直つてゐるのだ。そして子供はその濡れた兩手を『あゝ』とか、何とか云つて、上の方へつッ張り出し、水のしづくがその手をつたつて、冷りと脇腹の方へ流れ込むと、その冷たいのをおぼえて、ぞツとする樣子だ。然しそれが面白いのだらう、子供

は幾度もそれを繰り返す。

その間はいゝ氣嫌なので、八重子は、義行の留守に、さうさせて置いて、洗濯などをする。ところが、その遊びを餘りさして置いた爲め、子供に風を引かした。そしてむづかり方が一層甚しくなつた。『この親不孝め？』から叫んで、おとなしい八重子が抱き兒を疊の上に輕く投げつけることがあるほどかの女の心が亂れる様になつた。

『困つた兒や、なア』と義行は、いよ／＼泣き出す子を抱きあげ、『おう、おう、おう』と、すかして見るが、それでも泣きやむことがない。

『もう、ほツたらかして置きなはれ！』

『可愛さうやないか？』

『いいえ、もう、泣き死にでもしてくれる方がよろしい』と、八重子が泣き倒れたこともある。

二

義行の俸給は僅かに二十圓足らずである。家賃やら生活費を出す上に、子供に對して高い藥代は到底拂つてゐるわけに行かない。且、何度醫者に見せても、腹が痛いとか、手足がどうとか云ふ様な普通の病氣でないから、癲狂病院にでも送るより道がないと云ふ。また、癲狂病院へつれて行くと、こ

んな赤ん坊では、手のつけやうがないと云つてことわるのだ。
『あんな意氣地のない家はおまへん――子供を泣かしてばかりをつて』と、近所となりのかみさん達は井戸端會議で不平のこぼし合ひをしてゐる。

年の若い八重子は、それを知つてからは、一しほ心が亂れた。そして八重子までが氣違ひになりはせぬかといふ心配が義行の胸に浮ぶと、渠は亦不安で、不安でならない。夫婦は病兒を可愛さうに思へば思ふほど、その異樣な狀態が苦になつて溜らない上に、それが爲めに、夫婦喧嘩まで初まることがある。

『あれも貧乏からのことだツせ』と、人々は云つた。

『いツそ思ひ切つて殺しまはう』と云ふ相談が夫婦間にこツそり成立した。然し、いよ〳〵手を下だすとなつた時には、ふたりとも躊躇した。

深夜のことで、あたり近處は森閑としてゐたが、誰れかそとからこツそりのぞいてゐる樣な氣がしてならない。そして締めたと思ふ雨戸を今一度締めに行き、引ツ越しの時よりはずツと銳敏な注意を拂つて、戸にふし穴がないかと調べて見た。その上に障子を締め切つて、その破れなどをふさいだ。

『これで大丈夫』とは思つても、それか立つたり、ゐたりしてゐる夫婦の言葉にはのぼらない。無言で、夫婦は寢てゐる子の左右に來たが、義行はしやがんでゐる。八重子は立て膝だ。そして義行はい

きなり用意のぬれ紙を子供の鼻と口とに當てる。

『ぎやア』と、直ぐ子が泣き出したので、ふたりは申し合はせた樣につツ立つてしまう。紙は八重の手にあつた。

『お前がやつて見い。』

『あんたがおやんなはれ。』

『やつて見いと云ふに――』

『おやんなはれ。』

『お前や！』

『あんたや！』

これは聲に出したのではない、目つきでだ。そして八重子がその持つてゐるぬれ紙を義行に押しつけると、渠はまたしやがんで、子供の鼻と口とにペッたり張つた。

むづかつてゐる子の聲は紙のおもてには出なくなつて、かけてある蒲團がむく／＼動き出す。

義行は恐ろしくなつて、自分ばかりで殺すのではないと云ふつもりで、目を八重子の方へ轉ずると、八重子は見えない。渠はかの女を次ぎの暗い部室で發見すると、かの女は顏を蔽ひ、聲を忍んで、泣き顫えてゐる。

『泣くな、人に聽える』と云ふ意味で、渠は口をつぐんだまゝかの女の口に自分の手を持つて行つた。かの女のすすり泣きが渠の來た爲めに、一しほ大きくなつて行くからである。然し口を押さへてから、渠はまた自分の女房をも窒息させるのではないか知らんと考へた時は、ぎよツとしてその手を引いた。

『あツ』と、急に八重子がしぼりあげた樣な泣き聲を擧げたので、

『う、うツ』と、義行も亦それに釣り込まれて、かの女の上に倒れる。

夫婦はそのまゝ苦しさうな、怖しさうな息づかひをして、胸の動悸が心臟を破裂しさうに亂脈に打つてゐるのを、互ひに感じ合つたが、然し、物を云ふ勇氣も、何もない。たゞ、闇の中を大きな石が上から押しかぶさつて來る樣な氣持ちだ。

闇と無言に亂脈の動悸！　それでも自分等にはまだいのちはあるが、子供の脈はどうだらうと思ふと、あのまゝにはして置けない。然しまたあれを取つてやれば、再び自分等は泣きと心配との世の中だ。

苦しいのは、どちらにしても同じことだと思ふと、世に生きてゐるのが何のありがた味もなくなる。子も死ね！　自分等も死ぬ！　この覺悟が無言でふたりの間に傳はつた時は、もう、二度と子は産むまい。否、あすの太陽の光を、もう、自分等も見まいと思つた。

さうなると、少しはふたりの動悸は靜まる。然し脈が靜まる方になると、ふたりの肉――それまで

が青ざめてゐただらう――のあツたか味があたまを持ちあげて來るのを覺える。妻のあツたか味、所天のあツたか味、それがまた荒んだ夫婦のつめたい心に通じ合はれる樣になつて來て、捨てがたい夜の睦み、晝間の太陽、子の可愛さと云ふ樣なものが思ひ出される。

　それでも、義行は燒け氣味で、默つてゐると、八重子が先づ顏をあげて、

『あんた――あんた――あんた、富子は死んでか？』

『…………』

『あんた！』

『…………』

『あんた‼』

『…………』

『あんた!!!』

　義行は返事もしないで飛び起きる。そして次ぎのあかるい部室へ行つて、こわ〴〵、子の樣子を伺つて見る。立つたまゝ、腰をかゞめて、土左衞門を檢死する時の檢死官と云つた樣な工合だ、ずツとそばへは近寄らない。

　八重子もそこへ、腰が立たないまゝに、ゐさり寄つて來たが所天の顏に、『もう、脈がないらしい』

と云ふ言葉を讀んだのでからだ全體がぐらつき出して、わく〳〵しながら、
『もう、死にましたか?』
『しッ!』
『は、あッ』と、八重子はその場に倒れる。義行は目の色を變へてそこら中をうろ〳〵してゐた。

三

夫婦は死兒の枕もとでおそろしい夜を明かした。子が可愛さうなばかりではない。夜が明けると、自分等も人殺しの犯人として死刑の裁判を受けなければならないと思ふからである。
夜がいつまでも明けてくれなければいゝ――これがふたりの第一の希望であつた。よしんば、夜は明けても、醫者が診斷を間違つて呉れればいゝ――これがまた第二の希望であつた。
然し夜は彼等に遠慮なく明けかかつた、そして呼びに行った醫者が來た。戸をわざと明けないで、ランプの光で見て貰つた。夫婦は死兒の方よりもその醫者の顏色ばかりを見てゐた。然し渠の顏色には何の異狀もなかつた樣であつた。渠は、無論、いつも無愛相な、六ケしい顏つきをしてゐる男だ。
『診斷書をあげますから、直ぐ取りにお出なさい』と云つて歸つて行く跡から、義行が恐る〳〵ついて行つて、診斷書を貰つて來た。かかりつけの醫者は、夫婦の事情を察してか、察しないでか、富子

の死因をたゞ肺炎の結果、心臟閉塞になつたとしてある。

『よ御座んした、な。』

『よかつた、なア。』

ふたりは醫者の診斷書を、どこかの神さまのお札の樣に、押しいただいた――無論、渠等の大犯罪の跡が無事に濟んでしまうのを喜んでだ。渠等は今や、死んだ子の事よりも、自分等の生命を心配してゐたのだ。そして自分等が殺人犯であると云ふよりも、死んで、仰向けに堅くなつてゐる子が何かの大罪を犯したものででもあるかの樣に、それをばかり怖ろしい氣がして成るべくその方を見ない樣に、見ない樣にとする。

然し氣になるので、また、見ずにはゐられない。見ると、その度每に全身が痛いほど苦しくなるのだ。

死亡屆に診斷書を添へて出したのは、もう、二三時間前のことだが、役所へ缺勤屆を出して置かなかつたので、小使が出勤催促の手紙を持つてやつて來た。こんなことは初めてである。義行は、子供が死んだので、その取り込みの爲め、つひ缺勤屆を忘れてゐたと申しわけして、小使を歸す。

『どうせ、もう、あれ切りだろ』と、義行は云つた。役所を缺勤するのは非常に惡いことだと思つてゐる上に、無斷缺勤をやつたのだから、それが人殺し以上の罪ででもある樣に、渠自身には取れたの

だ。そして無斷缺勤に人殺し、二罪俱發だと考へると、渠の心は亂れるばかりだ。
あり合はせの酒を冷でがぶ〳〵呑んで、渠は狹い茶の間にぶッ倒れてしまう。眠らうとしても眠られないので、たゞ自分のしたことを忘れようと努めるばかりだ。八重子は所天の樣子を見て、一しほおそろしくなつた。自分ばかりが目を泣き張らして起きてゐると、罪をすべて自分に押しつけられる樣な氣がするので、自分も所天の寢ころんでゐるそばに行つて、當てつけに、かしらを並べる。
すると、所天は自分の苦しみを、人に押しつけるかの樣に向ふを向いてしまう。八重子も、何とも云はず――その實、所天と同樣、聲が出ないのだ――また反對の方に向く。
夏のことだが、朝から、入り口以外の戸は締め切つたまゝだ。たゞさへ蒸し暑い午後の空氣が、まだつけ殘されてゐるランプの油煙、並に死骸のにほひと共に立て籠つてゐる薄暗い家の中に、夫婦は空腹をも忘れて、ただ脊中合せに寢ころんでゐる。
『早く永久の夜が來て呉れたら』とばかり、ふたりとも藻搔いてゐるのであつた。
『今日は、今日は』と、入り口で聲がする。女の聲だが、密偵の樣に思はれて、ふたりともびツくりした。出迎へる力も出ない。すると、その聲は障子を明けて、づか〳〵あがつて、夫婦の、物におそはれてゐる樣な工合に、横たはつてゐる室へ來た。
『まア』と、これも亦びツくりした樣に、『寢てゐやはるの？』同僚の細君である。役所で、富子の死

んだことが分つてから、この家と最も親しい、同僚はその細君に通知して、手傳ひによこしたのだ。お房と云ふのだ。

八重子は泣き張らした目を擧げて、お房に挨拶し、お房も亦悔みの言葉を述べる。然し八重子はなほ立ちあがる樣子も見えないので、お房は先づランプを吹き消し、死兒の置いてある部屋の雨戶を明ける。

急にあかるくなつて、すうツと涼しい風が這入つて來たのには生き返る樣な氣持ちがしたが、直ぐ死兒の鼻と口とが八重子の目にはツきりとうつゝた。そしてゆふべのおそろしい仕事がかの女の心にも再び見えるので、かの女はまた目を伏せてしまう、然し一層あきらかに、ゆふべのことが心に見える。

お房はそれをわざと見せてやると云つた樣に、諸方の戶を明け放つた。そして甲斐々々しく、自分の持つて來た襷を十文字にかけ、臺どころ仕事にかゝる。飯もまだ焚けてない樣であるからである。

八重子は、それをまでいゝ氣になつて、人にばかりさせて置くわけには行かないので、自分も立ちあがつて、手傳ひ初める。

『わたし汲んであげるさかい』と、お房が云ひ添へるのを、

『よろしゆおます』と答へて、八重子は手桶をさげてそとへ出る。てか〳〵照らす日光はきのふ受け

たのと違はないが、けふは非常に光が強い樣だ。そしてその光線は自分の罪を責める矢でもあるかの如く密集して來る。

堪へ兼ねて、井戸端に倒れかけたのを、隣りのかみさんにやうやく支へられ、ただつッ立つてゐる八重子の桶に、そのかみさんが親切にも水を汲み入れて呉れる。そして、

『富ちやんはけふはえらうおとなしうおますな』と云ふ。

『はッ』と、八重子は心が一杯にまごついた。そして、『死にましたよ』と告げたのが、あとで考へると、『殺しましたよ』と云つたのではないか知らんと、それがまた一つの苦になつて、自分で自分をまぎらすつもりで、手桶を流しもとに置いたその手を一方の手と共にあげて、延びの樣な眞似をして見る。すると、脇腹がひやりとして、亡兒が生きてゐた時に喜んでした氣違ひじみた水いたづらを思ひ出す。

## 四

檢死もうまく濟んだので、夜に入つてから、義行獨りがついて、葬りに持つて行つた。

渠が歸つて來てから、手傳ひに來てゐたお房を初め、近處の婦人連は歸つてしまつた。

夫婦ばかりになつてから、多少安心したと云ふ樣子ではあるが、富子のぎやア／＼云ふ泣き聲が幽

かに聽える樣で、それが耳について眠られない。寢どこから、義行が起きあがつて酒をあふると、八重子も亦それを——飮んだこともないのに——がぶ〳〵あふる。

ふたりは醉ツ拂つて、暫く熟睡したが、直ぐまた目が覺めると、矢ツ張り、富子の聲が聽える。

『幽靈に化けたんやないか?』

と、八重子は初めて所天に言葉をかける。

『あほらしい』と、義行はあざ笑つたが、これも亦おそろしくなつて堪らないのだ。

たゞ抱き合つて夜をあかした。

義行はその翌日から出勤したが、取り調べる事柄が事柄だけに、すべてそれらが自分の罪狀を自分で調べてゐる樣な氣がして、自分の出勤する裁判所がこわくなつて來た。

そこへ持つて來て、或日のこと、上官の、さきに富子を殺してしまう方がいゝと云つた滑稽家が、さきのと同じ無頓着な態度で、

『いよ〳〵殺したな』と、義行にからかつた。そしてそばにゐた上官や同僚は一齊に聲をあげて笑ふ。

『病氣で死んだのは、あの子の爲めに却つて仕合はせかも知れません』と答へたが、義行の顏は眞ツ赤になつて、胸には非常な鼓動をおぼえた。そして『みな、誰れでも、知つとるのやないか』と考へるとそこにゐたたまらなくなる。

その日、歸宅してから、八重子とも相談の上、義行は辭職願を出した。さて、どうして暮さうと當惑してしまつた。そして義行は八重子の、八重子は義行の顏に、いづれも同じ子のおもかげを思ひ出す。

『もとはと云ふたらあんたが人殺しをしたさかいや。』

『あほらしい！　お前が殺せ云ふたんや。』

かう云ふ押しつけ合ひの考へを、夫婦は矢ツ張り脊中合せに持つたまゝ、互ひに罪深い秘密を漏らされない樣にと親しむことになつて、苦しい思ひ出の多い大阪の地をこツそり引き拂つてしまつた。

――（四十二年）――

# 乞食の影

一代の大詩人を以つて自任する川上武彦は、近頃、いくら詩を作つても世人から讃められたことがない。

どうせ、詩で飯は喰へないのを知つてゐるから、選者をしたり、つまらない雜誌の編輯を受け合つたりして、やうやく二階借りの獨身生活はして行けるので、詩で飯が喰へないことは少しも苦にしない。

然し詩に對する熱心と來たら、人よりも一倍も二倍も熱心だと身づから思つてゐるのに、讀詩社會は自然主義詩が持てるやうになつてから、少しも賞讃の辭を呈して呉れたことがない。

『三十四五にもなつて、おれはまだ小雜誌の投書家連にわいわい云はれるばかりで、――それも、若しおれが選者をやめたら、全くおれから離れてしまうものかも知れない――少しでも新らしい智識と趣味とを持つてゐる仲間は、殆どおれを眼中に置かないかの樣なのは怪しからん』と川上は時々獨りで憤慨して、熱い涙を古ぼけた机の上にこぼすこともあるのだ。

技巧がまづいのでもない、用語が貧弱なのでもない、思想が凡俗なのでもない。技巧、用語、並に思想は渠よりもまだ〳〵落ちてゐるものも多いが、その方の仲間にはまだしも世人から充分な同情と讃辭とを得てゐるのがあつても、渠自身は、いつも〳〵つまらない目に遇つてゐると考へてゐる。

自分は俗人に同情しないから、俗人も亦自分に同情しないのか知らん。それでは、自分が新識者、新趣味者と思つてゐるものがすべて、やツぱり、俗人原に過ぎないのだとも考へて見る。

渠は實際凡俗主義を大嫌ひで、いつも世間を超脱してゐると思つてゐる。如何に自分は貧乏でも、頭腦に於て富者である。如何に自分は平民でも、抱負に於て貴族である。如何に自分は凡人でも、主義に於て英雄である。如何に自分は無冠でも、理想に於て王者である。かう考へて、貧に安んじ、平民に安んじ、凡人に安んじ、無冠の太夫に安んじて、而も熱心に詩筆を揮つてゐる。であるのに、人は自分を貧弱な理想家と罵言し、あはれな空想家と冷笑し、實際の熱心が足りないと誹謗する。

どうも、その理由が分らない。

酒を煽つて、この不平を身づからもらすことが少なくない。

妻子もなく、かかり合ひのものもない代りには、渠の四疊半には、古びた小机のほかに、家具と云ふ家具もない。押し入れが付いてゐないからして、よごれた蒲團がむき出しのまゝ片隅に重ねてあつて、その反對の隅には、古雜誌の積み重ねと、紙の笠をかぶせたランプと、伊勢屋と書いた貧乏德

利とがある。それに添ふた壁が床の間のつもりになつてゐるのだが、そこには、外國雜誌から切り拔いた或詩人の肖像が釘どめになつてゐる。そのそばの表窓に添ふて、机が置いてあるのであるが、上には寂しい筆立てと硯と原稿紙とが載つてゐる。ほかにたゞ一冊のよごれた英語詩集があるだけだ。『書物など讀むと却つて詩が作れなくなる』といふ風に澄まし切つて、川上武彥は餘り讀書をしないし、從つて讀書力が足りないので、一般の人々よりも學識がない。その上、世間の經驗と觀察とに乏しい。ただ熱烈じみた文字を驅つた小詩篇を澤山作つたので、一時文壇に認められかけたのであつたが、世人は渠の熱烈は空想から來た虛僞の文字であるを知つた。然し、渠自身は決してさうは思はない。自分が空想家と思はれるのは、俗人原が肉體的條件を實質と見て、それに重きを置き過ぎるので、精神上の富者、貴族、英雄、王者の理想を解しないせいである。もツと深い同情を示めす爲めに、わが詩界に純精神的王者の宮殿を築きあげて見せなければならないと思ふ。

渠はかういふ考へからして、詩人の住むべき詩の宮殿とでもいふべき題を設けてそれに對する想像をしぼり出してゐる。

渠には夜も晝もない。氣に向いた時は徹夜しても机に向ひ、氣の向かない時は晝でもぐう〳〵眠るのだ。然し、けふに限つて、朝飯後、直ちに机に向つたのは、氣が向くも向かないもない、世人の自分に對する妄評愚評(?)が癪に障つてたまらなく、それに對する鬱憤を晴らすほどの一大詩篇を作ら

うとするのだ。

時は、丁度、花も散つてしまつた晩春の薄あツたかい午前だ。机の正面の障子には日の光が當つて、ほか／＼と心地がいい。朝から酒にでも醉つてゐる樣で、目の前に遠く目ざす詩の宮殿は夢の如く見えてゐるが、さて、自分を返り見ると、之を捕獲する材料が全く缺けてゐる樣な氣がする。目をつぶつて見たり開いて見たりする間に、多少熱する情を感じたので、さア、インスピレーションが來たと思つて、筆を執ると、あいた口に牡丹餅は落ちて來ない。詩の宮殿は形に成つて呉れない。

世人が自分を空想家と云ふのは全くだか知れないと、かう考へれば、心細くもなる。

いよ／＼筆が動かない。

然しどうしても、この宮殿は作りあげてしまはなけりやアと思つて、兩肱を机について、兩手であたまをかかへると、ふと耳についた聲がある。あはれツぽい調子で引ツ張る聲だ。

どうやら、道の向ふがはらしい。

川上のゐるところは、芝區廣町の、公園に添ふた片かは町で、だら／＼坂になつてゐる道を隔てて、芝公園の烏山といふ丘に相對してゐる。

あはれツぽい調子で引ツ張る聲はその丘から聽えて來るらしい。

渠は夢のうちにあるかの樣にその聲にゆり動かされて、先づ二句をうなり出した。

天に　そびゆる　阿房宮、
理想の　宮の　太ばしら——

から出たので、『太ばしら』を枕ことばにして、

ふとしき　建てし　その宮は
ミューズの　神の　住み給ふ——

それから何とつづけよう？『住み給ふ』ではまだ文句が切れないからと考へて、『天に』から三四度も讀み返して見た上、

金銀珠玉——

いや、これでは住むものにならない。かと云つて、宮と云ふ字を度々出せないし——

あまつ御殿——

これも面白くない。それに、羅馬は一朝にして建たないといふことも云ひたいから——ああ、これで四行だ——これで一節にして、切れたものと見てしまう方がよからうと、膝を打つてまた讀み返す。あはれツぽい聲がつづいて居る。子守りが烏山で歌つてゐるのか知らん？　それとも亦羅宇や煙管の鳴らす氣笛の出來そこないか知らん？　それにしては、一ケ所にとゞまつてゐるらしいのがをかしい。いや、自分の詩も一ケ所にとどまつてはゐられないと、また苦吟して見る。

ミューズの　神の　御殿には
金銀珠玉　散りばめて、
天の　羅馬市、一朝に
築きあがりし　もの　ならず。

渠はこの一節が短刀直入、簡結に出來た物だと喜んで、(その實とツ拍子もない駄句だ)次ぎは精神的理想的な事物を以つてその詩殿を飾らなければならないと考へ、『非物質』の土臺、『信仰』の石ずゑ、『精神』の柱、『永劫』のうつばり、『情熱』の壁ふすま、『同情』の床板、『運命』の天井、『神秘』の家根、『技巧』をまるめた金銀、寶玉、『涙』の泉水、『智慧』の樹木。かういふ建築並に裝飾の材料を案じ出して、之を組み立てようとすると、例のあはれツぽい調子で引ツ張る聲が耳に邪魔で、それが爲めに今度は却つて筆が動かない樣な氣がする。

『何だらう？』かう獨りで考へて注意してゐると、その聲は『お願ひで御座ります』、『お願ひで御座ります』と云つてゐる樣だ。

『乞食だ、な』と推測し、立つて障子の破れ穴からのぞいて見ると、だら〳〵坂をあがりつめた道の向ふがはで、電信柱のもとに、ちいさい乞食の子がきちんと座わつて、手を合せてもみながら、その聲を出してゐる。そのうしろには、おやぢらしい髯武者が足を投げ出して、ぼろ〳〵着の胸をはだけ

て、しらみを取つてゐる。

乞食の子は可愛さうだが、あのおやぢは憎むべき懶け者だと、川上は思つた。そしてそれには頓着しない樣子で、机にもどり、再び詩殿の建築を工風する。

土臺は　すべて『非物質、』
その　石ずゑの『信仰』は
『精神』ばしら、『永劫』の
うつばり　高く　受けささへ。
壁は『情熱、』その床は
『同情』――

とまでは歌つて來たが、そのつづきが七五の調（そればかりしか殆ど口調の練習がない）に塡りかねるので、そこで鳥渡筆を置き、また初めから讀み直し、『その床は、
『同情』なれや、『運命』の――

とつづけようか、それともまた
『同情』の板、『運命』の
天井　ありて、『神秘』家根、

としてもおもしろからうなどと考へて見たが、何だか物足りない樣な氣がする。(物足りないのは尤もなことだ。)

全體、こんな家を工風して、誰が住むんだらう? 詩人が實際に住むものとしては、もう、理想でなくなる。飽くまで達し難く、住し難い物と見せなければならない。その大なる對照として、あの乞食等を持つて行からうか?

『さうだ、乞食の美化、乞食の美化!』と、膝を打つて、天の啓示でも受けたかの樣な嬉しさの餘り破れ障子の穴から再びのぞいて見ると、『お願ひで御座ります』の子供は、勞れたと云はないばかり、足を横に出し、肱を地べたについて、仰向けに、樹上の小鳥が動くのを見てゐる。しらみのおやぢはどこへ行つたのか見えない。往來の人かげは鳥渡途絶えて、ただほかほかする日がそのあたりに當つてゐる。

やがてきやしやな蝙蝠傘が上の方から曲つて來ると、子は急に起き直つて、またあはれなお願ひをつづけ出す。そこへ、おやぢはのそり〳〵、鳥渡散歩してゐたといふ體で歸つて來る。あぐらかいてのしらみ取りは元の如しだ。通りすがりの婦人は、ただ鳥渡かへり見ただけで、行つてしまう。

すると、子供は急にからだごと仰向けになつたかと思ふと、おやぢの膝の上に倒れ、空に組み合は

せた兩足を兩手で以つて引ツ張りまはす。『何か喰ひたい、なア』と云つてゐる樣だ。

詩人川上はその無邪氣なのに惚れ込んでしまつた。天國の降下、詩殿の實現は、この心に據つて成らなければならないと思ふと、乞食の子が既にミューズの神の如く、電柱の根もとが威嚴ある石ずゑの如く見え、想像に想像、形容に形容を加へ、詩人自身は造物主の如き意氣込みを以つて、詩の宮殿をそこにうち建てたつもりになる。そしてさきに拵らへかけた新體詩の方はうち毀されたのか、何の聯絡もなくなつてしまう。

それでも、川上はわれを忘れて、乞食の子に同情し、電柱の根もとに永久の住まひ、永久の家があるかの樣な空想三昧に耽つてゐる。その實、乞食に與へた物も、與へられた物もないのだ。然し乞食親子がほか／＼照らす太陽の光を浴びて、熱くもなく、寒くもなく、感じある形體に何の拘束をも、何の壓迫をも受けてゐない樣な狀態が、如何にも、この詩人の空想生活に合してゐるのだ。川上はその場の感興と滿足とに連日の不平不滿が浮ぶ餘地もなくなつた。

『わが人。わが家、わが世界！』と、かう川上は心に叫んだ。

この時、乞食のおやぢが、

『さア、行こか？』と云ふと、その子が、

『行かう』と、急に嬉しさうに立ちあがつた。すると、おやぢものツそり立ちあがつた。

『けふは貰ひが少い、なア。』
『呉れないんだもの。』
『さうだ、なア。』
『お菓子買はう。』
かう話しながら、川上の詩中の家と人とはふら〳〵と坂の上の方へ歩いて行つた。川上はあツけに取られて、
『まア、待て、待て』と呼び止めないばかりのあり様で、そのうしろ姿を見送つてゐたが、その空想が破れて、初めてわれに返つて見ると、電信柱が道ばたにつツ立つてゐると同樣、自分は相變らず四疊半の獨りぼツち。詩稿には向つてゐるが、筆の動かし樣がない。
『自分も、あの乞食同樣、根柢がふらついてゐるので、世間から實力に乏しいと云はれるのだらう。――ああ、實力が欲しい、實力が欲しい！』と、かう心に叫んで、兩手を以つて兩腕をぶちのめして見たが、實力なる物は直ぐ出て來るものではない。さき立つものは不平不滿――胸に感ずるのは世の無情、天の無情――乞食までがその無情を受けついで、自分を馬鹿にするのかと思はれるので、机の前、切り拔き詩人像のそばにも、つくねんとしてはゐられない樣な氣になつて、大きな紋のよごれた羽織をひツかけ、家を飛び出した。自分の雜誌の投書家某を訪ねて、また酒をおごらせようといふの

である。

――(四十二年)――

金

正金銀行へ、法被に紺股引、足袋はだしの男が威勢よく飛び込んで來て、あたりに人がゐるのもかまはないで、現金受取口へ突進し、

『さア、金を呉れ！』と、から横柄に銀行爲替を出すと、掛り員は、落ち付いた口調で、

『となりの窓で手つづきをおしなさい』と命じた。

『なんだ、直ぐ渡せないんか？』

『渡しますから、手つづきをしてお貰ひなさい。』

『めんどくさいことを云やアがる、なア』と、男は舌うちをして別な窓へ移り、相變らず横柄な口の聽き方で番號札を貰ふと直ぐまた元の窓へ行つて、

『さア、呉れ』と、その札をつき出す。

『それは番號札ですから、順番の來るまで待つてお出でなさい』と云はれ、

『さうか』と、少ししよげた樣子でその窓を離れ、あたりをきよろきよろ見まわし、腰かけのあいた

場所へ無遠慮に腰をおろし、手にしッかり握つてゐる番號札を鳥渡見て、目を現金渡し口へ向けたが、その目の色が違つてゐるので、ゐ合はす人々はすべてをかしさうにこの男の方を注意してゐる。渠は如何にも待ち遠しい樣子をしてゐながら、時々にこついて見たり、また聲を擧げて笑つて見たりする。やがてその番號を呼ぶ聲がしたが、待ち設けてゐるには似合はず、きよとんとして氣が付かずにゐるので、掛り員が特別に注意すると、

『はア』と、飛びあがつて窓口へ走り行く。

『いくらです』と問はれ、

『一萬五千圓だい！』

『よくお調べなさい』と、ざるをつき出され、ふるひ付く樣にそれを受け取り、百圓札を百五十枚數へて見て——然し實際、數へて見たか、どうだか分らない數へ方で數へて見て——持つて來た風呂敷につつむと、それを一心にかかへた威勢と云つたらない。

『さア、マニラの富籤が當つたぞ！　當つた、當つた！』から叫んで、そこを飛び出し、大道を走つて行く。

　これは變だと思つたのだらう、大きな洋犬が二三匹追ッかけて來て、わんわんと吠えつくとたん、渠は驚いて大道にうち倒れると、風呂敷包は一間ばかり横へ飛ぶ。一匹の犬がその包を口に喰はへる

が早いか、逃げ出すので、渠は直ぐ起きあがり、
『畜生！　畜生！』と、犬を追ツかけ、半丁ばかり驅けて、やツとのことで包を取り返したが、その間の樣子ツたら、丸で正氣の沙汰とは思はれなかつた。通りがかりの人々は立ちどまり、店々の小僧や番頭どもは店さきへ驅け出して、面白さうに見てゐると、渠はそんな晴れがましい大道を、面目なかつたと云ふ氣しきもなく、歩き／＼獨り言の樣に、
『泥棒犬め！　折角當つた大金をあの畜生に盜まれるところであつた』など云つて行く。今度は走りもしないが、一生懸命に歩いてゐる。
向ふから、空ぐるまを引いて、二人の車夫があとさきになつてやつて來たが、渠を見て、一人が、
『おい、熊公』と呼びかける。渠は熊太郎といふのである。今まで氣が付かなかつたので、不意を打たれた樣にびツくりしてふり向く。また一人が、
『どうしたんだい、ぼんやりして、さ』と、何氣なしに冷かす。
『どうしたも、かうしたもあるもんかい。これ、見ろ、一萬五千圓取つて來た、わい』と、熊太郎は包をさし出して、直ぐまたかゝへ込む。
『どれ、見せろ、見せろ！』
『約束通り、しツかりおごれ。』

『おれに二十兩貸せ。』

『おりやア十兩でもいいから――』

そこへ

『やア、取つて來たんか?』と、別な車夫がまた空ぐるまを引いてやつて來たが、『おれにも少し出せ』と、かぢ棒をおろして熊太郎を捕へる。さきの二人もいつのまにかかぢ棒をおろしてしまう。三人とも、熊太郎につかみ付いてゐるのだ。

『放せ、放せ！　手前等も皆犬だ』と、渠は渠等の手をもぎ放して逃げようとするが、三人は前後左右からつき纏つて逃がさない。

『放せ、放せ』と、氣をもんでゐるうちに、巡査が一人やつて來て、

『貴樣等は大道で何を騷いでるんだ』と一喝する。

『へへ、どうも濟みません。』

『實は朋輩から――』

『少し金を貸りる談判を――』

『いや、貸すもんか』と、熊太郎は力味返つて、巡査に向ひ、

『おまわりさん、こいつらア皆泥棒犬です、おれが富籤が當つたのを盜んでしまはうとするんです。』

「ああ、お前かい、マニラが當つたのア？」と、もう、巡査もうすうす聽いてゐたらしい。そして富籤默許の時代であつたから、『大事にして、持つて歸れ、歸れ』と云つたが、あとの車夫がやツ張り追ツかけて行く形勢が見えたので、保護してやるつもりで熊太郎について行きかけると、熊太郎はきツと振り向いて、

「お前も犬だらう。」

「なんだ！」と、から、巡査は怒つてとツつかまへようとすると、車夫どもはあざ笑つて、

「おまわりさん、ほうツときなよ、ありやア氣違ひになつたんです。車引きが急に一萬圓當つたツて、朋輩等を直ぐ泥棒犬だとぬかしやアがる。今夜おごらにやア、ただぢやア置かねいや。は、は、はア。」

から云つて笑ひながら、三人の車夫は再び空車を引き出すと、巡査も、鳥渡小頸を傾げたが、そのまま行てしまう。

熊太郎は息せき切つて家に歸ると、小供に乳を飲ましてゐた女房のお藤が、暗薄い奥の間から太つた胸をだらしなくはだけたまゝ、土間へ飛び出して、

「貰つて來たか？」と、にこ／＼顔。

熊太郎はいきなり足袋を脱ぎ、土間から疊へあがると、

「これ、見ろ」と、どツかりあぐらを組み、お藤が見てゐる前で、札を一枚、二枚、三枚と數へて見

て、『百圓札が百五十枚――確かにある』と、獨りでうなづく。
『そんなに澤山、どうしるんだ』と、お藤は、一萬圓以上の金がどれだけ價打ちのあるものだか分つてゐないまゝに、口輕な言葉を出したが、さて、目の前にその現金を見ては、家族が不斷の暮しをいくらおごる樣にしても、何日間續くだらうかと考へて見ると、十日や二十日でおしまひにならないのは勿論、一年や二年や、また十年かせがないで寢てゐても、決して不足がなからう。ひよツとすると一生涯、車なんか引かせないでも樂にしてゐられるかも知れやアしない。こりやア大相ぼろいことが出來たと、考へれば考へるほど、心がぼんやりして、どうしたらいいのか手の出しやうがない。
熊太郎は、その間にも、金をまとめて包んで見たり、開けて見たり、數へて見たり、ふところに入れて見たりしてゐたが、立ちあがつてそれを神棚に載せて見るかと思ふと、またそれを戸棚の蒲團の間に挿んで見た。そこの戸を締めたまゝつツ立つて考へてゐるかと思ふと、また金を取り出して、自分のふところにしツかりしまう。をかしなことばかりしてゐると氣がついて、お藤が亭主の顏をのぞいて見ると、まなじりがいやアに釣りあがつてゐる。
『お前、どうかしたんかい?』と、かう、聽いて見ても返事がない。
『おい、熊公』と、さきの車夫三人がぞろ〳〵仲間をつれて這入つて來た。『かみさん、けふはうんとふる舞つてもらひに來やしたぞ。』

かみさんのお藤もぼんやりしてゐれば、亭主の熊もぼんやりしてゐて、仲間どもは、ただ、がやがやと、『マニラは煙草のことだとばかり思つてゐたのに』などと洒落を云ひ出すものもある。熊太郎、ふと氣がついて、びくびくツとからだを顫はし、『泥棒犬！』とばかり、立つて勝手口から飛び出してしまう。

その跡へ巡査が來て、女房のお藤に取れた金はもツけの幸ひだから、大切にして、無駄使ひをしない樣にせよとの注意を與へ、車夫どもには、折角熊太郎か當つたものをおだてあげて使はせる樣なことをすれば、友人の爲めによろしくないからといふ忠告を與へて、歸つてしまう。車夫どもも、いくら待つてゐても熊太郎が戻つて來ないので、歸つてしまう。

その日が暮れて、子供を寢かしつけてから、お藤は亭主を探しに出たが、心當りの仲間どもの家にはどこにもゐない。近處の子供の話に、熊太郎の家の裏手にある墓場の石塔のかげに、熊さんがしやがんでゐたと云ふので、そこをも見に行つたが影かたちもないそして空しく家に戻つて見ると、亭主は意外にも臺どころの椽の下から、しツかり金包を握つて目をきよと〳〵させながら出て來たのだ。

『どうしたんだ、ねえ、馬鹿馬鹿しい！　さんざツ腹探してゐたんぢやアないか』と、お藤は怒つては見たが、どうも亭主の樣子がをかしい。急に大金持ちになつたので、氣が變になつたのではないか知らと思はれ、他に何事も云はないで寢床に着けた。然し金を預からうと云つても渡さず、戸棚にし

まはうと云つても承知しないのだ。

お藤の心配が二つ出來た。亭主が氣違ひになつたのではないかと云ふことゝ、こんな大金を氣違ひに持たして置けば、いつ、どうなるかも知れないと云ふことゝだ。その結句、いゝ考へだと思ひ付いて、夜なべに、自分の大きな財布に太い長い紐をつけた。つまり、それに金を入れて、亭主の頸にかけさして置くつもりなのだ。

翌日になつてからも、熊太郎は少しも氣が落ち付かない様子だ。人力車の音がすれば隱れようとし、巡査の影が見えれば逃げ出さうとする。お藤は朝から注意して亭主の外へ出るのを押さへてゐたが、いつのまにか財布を持つてゐなくなつてしまつたのである。

その日は夜に入つても戻らないので、お藤はいよ／＼警察に訴へ出て、保護を賴むと、その町の巡査はお藤並に熊太郎の朋輩等と搜索に從事し初めた。二三日の間、山手や海岸で見つかることは、見つかるが、素早く逃げてしまうので、追窮することが出來ない。商賣が商賣であつただけに、驅けるのは上手な上に、それが懸命に走るのであるから、なか／＼追ツつけない。そして渠は巡査をも、朋輩をも、女房をも、自分の財布を盜みに來るのだと思ひ込んでしまつたのであるから、追へば追ふほど逃げるのだ。

そして毎日の飯さへ喰はないので、渠はきのふよりもけふ、けふよりもあすと、段々瘦せて行くの

が橫濱市中の評判になつた。

お藤はそれを聽くと、自分も三度の食事が出來ない樣な氣になるので、どうしても亭主を家に歸るやうにして貰ひたいと警察に哀願した。町の巡査もそれを可愛相に思ひ、けふこそ必ず追ッ捕へようと待ちかまへてゐると、熊太郎を海岸で見付けたので、一目散に追ひかけた。

すると、熊太郎は、もう、逃げどころもなくなつたと覺悟して、日本波戸場の柵を越えて、海につき出た石垣の鼻に走り行き、そこから、例の財布を頸にかけたまゝ、身を投げて死んでしまつた。

――(四十二年)――

# アボト先生

『アボト先生は日本の婦人を奥さんに貰ひたいのだッて、ね。』
『誰れがそんなことを云つて？』
『誰れからか、そんなことが傳はつてよ。』
『ぢやア、ハリスさんの結婚がうらやましくなつたの、ね。』
『やツぱり男だ、わ、ね。』
『あら、武田さん』と脊中を打つと、
『どうしたのよ、松平さん』と、痛さうな眞似をする。
松平といふのは名を鶴子と云ひ、病身の爲め學業が二ケ年後れた學習院女子部の生徒。武田といふのは名は玉子、東京女學館の卒業生だ。後者の方が一つ二つ年うへの樣だが、いづれも、午後二三時頃から、赤坂溜池の英國人アボト教師のところへ英語を習ひに行くのだ。
初めは、知人なる一日本人の盡力を借りて、學校の組織にたつてゐて、或耶蘇教會堂の跡を別に校

舍にあて、アボトの先輩ハリス氏も助けに來てゐたぐらゐであつたが、男女の入學者僅か二十名内外しか出來ないので、經費倒れがした。その上、ハリス氏が生憎日本婦人を細君に貰ひ、新婚當時のことであつたから、樂しい家庭を離れ難い爲めであつたらう、頻りに缺席がつゞき、同氏を目あてにやつて來た特志な學生はすべて同盟して退校をしてしまつた。

アボトはそれが爲めに學校を廢してしまひ、女生徒ばかりを——そこに意味があつたか、どうだか分らないが——自分の私宅で敎へることにした。殘つたのは、多少會話が出來るもの四五名であつたが、そのうちに鶴子も玉子もゐるのだ。鶴子は子爵の、玉子は富豪の娘で——その他も兎に角上流社會に關係あるものだ。某官立學校出勤の片手間に、別な學校を設けて一儲けしようとした外國人の失敗の跡としては、まだしも丸損したわけではなかつたのだらう。

親切に、丁寧に、愛相よく生徒を持て爲すので、生徒には評判のいい敎師だ。ハリス氏の樣に酒ばかり食つてゐるのでもない。また、同氏の樣な目ッかちではないから、相向つてさう厭な感じのしない若い紳士風がある。ただ一つ疑問なのは、うちに置いてある敎師と同年輩ぐらゐの女中である。料理やふき掃除をしながら、鳥渡英語も話せる女だ。

『女中兼用のお妾でしようか』と、陰言に云ふものもあるが、

『それにしては、身なりも野暮臭いわ、ねえ』とか、『あの器量の色黑では、先生があんまり可愛さう

だ、わ」とか、いろいろ實際上の推測はあるが、生徒が自分達に關したことではないと思つてゐれば、何でもないことで——男ひとりのところへ出入りするよりも、そんな人がゐてくれる方が、却つて心配はないのだ。

然しその女中の時々燒き餠を燒く樣な態度が見えないでもないと云ふものもある。三人も四人もそろツて敎はつてゐる時は、無事に定つてゐるから、無論、何のこともない。然し生徒のうち、誰れか獨りがさきへでも來て、アボトと親しく話でもしてゐると、そこへ茶を持つて來る女中の顏色が多少不斷よりも違ふと云ふ評判がある。敎授が濟んでの歸り途などで、そんなことが話題にのぼると、生徒の間に　いろんな推測が行はれる。自分達がをそはる樣になつたより以前に、先生が誰れかに關係したことがあるのを女中は知つてゐるので、またさう云ふことがあるのではないかと疑ふのか知らんと、女どもの觀察はこまかい。

先生と女中との關係はおそらくなからう、然し時々女中に變な顏をされるのは、生徒として、甚だ面白くない。かう云ふ感じが生徒間に段々深くなるに從つて、第二の、然しおだやかな同盟退學が起りさうになつて來た。

「先生が奧さんをお貰ひになるなら、早くお貰ひになつた方がいいのに。」

「さうすれば、女中は女中で、はツきりした區別が附くわ。」

「誰れかありさうなもの、ね。」
「あなたはいかゞ?」
「いやなこッた!」
「「降るアメリカに」ですか?」
「あれは英國人ですよ。」
「どッちでも、「袖はぬらさじ」よ。」
「バチエラーの教師は、もう、いやになつた、わ。」
かういふ樣なひやかしが出るやうになつては、生徒間に急に熱心の度が減退するもので――その多數が、と云つても三四名だが、退學の動議を持ち出した時までも、最も無邪氣にまた最も熱心にをそはつてゐたのは、鶴子と玉子とである。アボトの親切と教へ方の上手なとに深く信頼してゐるだけ、他のものよりも超然として、評判のよしあしには餘り頓着してゐない。
『わたくし達ふたアり切りになつても、習ひには行きましようよ』と誓ふ樣な態度を見ると、他のものは
「あのふたアりは身分と容貌とがいいので、それを讃めて貰ひたいのだらう」といふ惡口だ。
實際、この二人は最も美人だ。玉子は丸ぽちやの方だが愛嬌があり、鶴子はおも長の、品があつて

脊が高い。アボトは最も多くこの二人に親切であつたし、二人同士も亦最も仲がよかつた。
或夜のこと、雪が二三寸も積んだ。降雪翌日の晴天は風が寒いにも拘らず、鶴子は學校の歸りに高下駄で――その家憲として、學校へは車で行かせられないのだ――三平坂を下だり、山王の森下の道を通つて、溜池にあるアボトの宅へ行くと、仲間のものは誰れも來てゐない。コーヒが出たのを飲みながら、待つてゐても、まだ來ない。して、教師はこの一生徒のゐる部屋を、いつになく出たり、這入つたりしてゐる樣子がいつもと少し違ふので、
『先生わたしは歸ります』と、鶴子は立ちかける。
『松平さん、もう少しお待ちなさい――皆さんが來ないことはないでしよう』と、教師は熱心に、親切らしく、かの女をもとの椅子につかし、自分も亦自分の椅子に落ちついたが、別に一人に對しては、わざ〳〵來た教へ子でありながら、教へ出さうともしない。鶴子は止むを得ず再び腰をおろしたものの、何となくもぢ〳〵してゐる。この樣子を見て、『あなた、少しゆツくりなさい。この寒いのに、わざわざ來て下さつたのですから、わたくし御馳走致します。』
『いえ、先生、そんなことは御心配に及びません――皆さんがお出でにならないのなら、わたし歸りますわ。』
『まア、お待ちなさい。直き出來ます。』

『然し、わたし、御馳走を戴きたいのではないんですもの――』
『ですが、お獨りでは習つても、張り合がないでしやう――さうでは御座いませんか、松平さん？』
『それはさうですが、わたし』と、鶴子は歸りたさうに、また氣の毒さうに、寂しくほほえみながらアボトの顏を見る。
顏を見られて、渠はその頰にほてりをおぼえた。それをまぎらす爲め、座を立つて、渠は置きストーブの火を直しながら、
『まア、さう云はないで、わたくしの少しばかりの親切を受けて下さい。』
親切をと云はれると、英語がさう云ふ發想法だとは習つて知りながら、無下にそれを退けて歸ることも出來ない樣な氣がして、鶴子は
『どうも濟みませんです、ね』と答へ、『では、今少しゐて見ましよう――皆さんも來られるか知れませんから。』
『さうして下さい、わたくしの爲めにも結構です』と、教師がまた座に歸るところを見ると、鶴子の目には、火のそばであツためられたせいか、渠の頰が不斷よりも熱してゐる樣に思はれる。渠はまた、それを見られまい、見られまいとつとめてゐるかの樣に、落ちつきが缺けてゐるので、二人とも何だか話がし難い。

丸テーブルを間にして向ひ合つてゐるのである。鶴子は手持ち無沙汰にあたりを見ますと――斷つて置くが、アボトが借家は日本造りだ――來慣れた室ではあり、見慣れた裝飾ではあるが、けふに限つて、心持ちが少し違ふ。して、壁にかけまはしてある寫眞のうちには、外國のもあるが、アボトがわが國で手づから撮影したと云つたのもある。それらを初めて見る樣な氣がするのは、この室の主人を、敎師としてでなく、知り合ひの男性の如く思はれるからである。こんなことは、けふが初めてだ。して、友人としてアボト氏と親しむことは父から許されてゐないと考へると、望みもしない御馳走に囚はれてゐる樣な、いやな氣持ちがして、そとにきこえる電車の響きともなつて、逃げて行きたい心にもなる。然しまた、武田玉子さんと自分とを先生が曾て寫してくれた、その出來のいい寫眞はどこに置いてあるのだらう、と云ふ樣なことも考へて居る。

アボトは、この時、竹細工の棚から、ちひさい箱を二つ取りおろして來て、

「今日は敎師の資格を以つてあなたにのぞみません――その代り、煙草を飲むことを許して貰ひます――よろしいでしよう？」

から云つて、渠は笑ひかけた樣な、然し眞面目くさつた顏つきで、鶴子を見る。

「よう御座いますとも」と、かの女が手持ち無沙汰をまぎらすつもりでこころよく答へると、渠は一方の箱の中から太い葉卷を出し、また一方のを鶴子の方につきつけ、

『あなたも一つどうです――こちらのなら。御婦人にも喫へましよう。』
『ありがたう――わたしは無重寶ですから』と、鶴子が手を出す樣子がないので、
『では、わたくしばかり失禮いたします』と、渠は兩手でマチを摩つて、くはへてゐる煙草に火をつけた、鶴子は、それを見て、心では、實際失敬な人だ、見違へてゐたが、先生は實際あんな人なのか知らんと考へてゐる。
　そのうち、パインアプルに牛乳をかけたのが出た。女中が揃へて女中が持つて來たのである。アボトはまた隣室から西洋酒の瓶の二種を兩手に持ち、一種を脇の下にかかへて來たが、その一種の瓶から、二つのコップに無言でついでゐるのを見て、鶴子は、
『先生、それは何です』と聞く。
『ヰスキ――少しはよろしいでしよう？』
『いえ、わたしは戴きませんから――』
『では、この方は』と、アボトは別なのを取り、
『コニヤク――これならよろしいです。』
『いいえ、先生、戴きません。』
『さうですか』と、アボトは鳥渡鶴子の顏を見て、『このベネヂクチンはどうです、これは甘いのです

から――』

『いえ、もう、よう御座います。わたしはこの方だけで』と、皿を申しわけに引き寄せながら、『結構です。』

『では、どうか』と、アボトはまごついた樣子をして座につき、『あがつて下さい。』

『然し先生はヰスキがお好きなら、おかまひなく召しあがつて下さい』と、鶴子はまだ皿には手をつけない。

『わたくし好きです、然しハリスさんの樣には飲みません』と云ひながら、アボトは一コップをぐツと飲み乾した。然し鶴子にそれを卑む樣な樣子が見えるので、特別に機嫌を取る話をしながら、フオークを取らし、自分も亦皿の物を喰ツた。

然しアボトの如何にもうまさうにパインアプルを喰つてゐるのを見ると、鶴子にはそれが却つて何だか下等な樣に見えて、自分のナイフを皿の物に運び入れるのも厭な氣がして、ちひさい切れを僅かに口に入れても、殆どあぢがない。かの女とて、男性の友人を持つ經驗がないでもないが、この樣に意外なところで意外な男友を押しつけられるのを身づから警戒してゐるのだ。その上、その人から婿養子をする身かとか、許嫁があるのかとか聽かれると、習つた時は何氣なくおぼえたその言葉がいやにたり、耻かしくなり、心が縮かゝで、この來慣れた室に此ストーブのあツたかい空氣もぞツとするほ

ど寒い樣に感じられ、身をすくめて、うつ向き勝ちに、ただ『いいえ――いいえ』と否定の返事をする。して、そとに電車の響きが途切れたり、つゞいたりして聽えると、早く歸り行きたい一心で座にゐたたまらない樣な氣になる。然しまた、アボトの兎角遠慮勝ちに、臆してゐる樣に續發する訊問――としか、鶴子には、取れないが――のあひの手の如く、『あなたは召しあがつて下さいません、ね』と繰り返されると、然しまた義理にも食べないわけには行かず、牛乳のかかつたアプルをちひさくナイフで切つては、それを重さうにフォークで口に運び、絹ハンケチをあてがひながら、無理に嚥んで喉に下だす。何のあぢも矢ツ張りないのだが、それを呑み下だす度毎に、男といふ物に――目前にひかへてゐるから――對する處女の恐怖と自覺とを初めてかの女は感じたのだ。

　アボトは、また、何か心にあることを云ひ出したい樣子だが、鶴子の態度が引き締り過ぎて、少しも透きの乘ずべきがない樣に思はれた。

　そこへ、女中が紅茶を入れて持つて來たが、その場の樣子をあやしいと見たのか、二人の顏を見比べる樣に見て、直ぐ出て行つた。唐紙の締めかたが少し荒かつたので、アボトはきツとなつて、

『これ、隅！』

　聽えたのか、聽えないのか、返事がしない。

『隅！　隅！』

『はい』と、唐紙が明いて、女中は半身を出す。

『さう荒く締めてはいけません、お客さまに失禮です。』

『わたくし、氣がつきませんでした――濟みません』と答へて、女中は引ツ込んだが、その英語の調子を鶴子は可なりうまいと思つたと同時に、その顔つきが、自分の思ひなしか、如何にも燒き餅でも燒いてゐる樣に見えたので、餘り氣にもかけなかつた先生と女中とに關する評判を目の前にたしかめることが出來たかの如く思つた。

『どうも亂暴な女中で困ります』と、アボトが少しいらだツて申し譯をするのに答へて、鶴子は、

『いえ、わたし、さうも思ひませんでした』と、おとなしく受け流して、鳥渡その顔を見ると、渠の目色がいつのまにか變つて、燃えてゐる樣だ。

キスキの爲めに先生は醉つて來たのか知らんとも考へたが、兎に角おそろしくなつたので、鶴子は其の座を立たうとすると、

『今暫く待つて下さい、お話したいことがあります』と、アボトは立ちかけてまた坐わる。その聲は顫へてゐるのだ。

『お話があれば、直ぐ伺つて歸りましよう』と、鶴子の聲も亦渠の顫へにつり込まれた樣だ。

アボトの頭腦も熱してゐれば、鶴子の心も、それかと感づけば、浮かされた樣なのだ。

『あなた、いつか教へました手紙の挨拶語（グリーチング）の種類をおぼえてゐるでしよう――』と、アボトは云ひにくさうに云ひ出して、鶴子の顔を見つめる。いかにも熱心な態度ではあるが、鶴子にはさう聽かれただけでは、その急變（きふへん）した熱心の意味が分らない。或難題を持ち出されるのかと待ち設けたのが、多少氣拔けしかかつて、

『はい』とばかり答へると、

『Madam（マダム）とか、Dear（デーア） Madam（マダム）とか、My（マイ） Dear（デーア） Madam（マダム）とか――』と、アボトはまた言葉を切る。

『はい。』

『また、My（マイ） Favorite（フエボリト）とか――』

これはわが愛する者といふ挨拶であつて、夫婦または愛し合つてゐるものに云ふのだとおぼえてゐるので、鶴子はこの場合返事を控へて、じツとしてゐると、

『そのフエボリト――「愛するもの」と――云はして貰ひたいのです――わたくしに――あなたを――』

その聲が顫へ顫へて、鶴子を見つめる目つきには訴（うつた）へる樣な、またその言葉を押しつける樣な、質にあはれにして、どことなく强い男性（だんせい）の誠實と威嚴とがある。

『矢ツ張りさうだ』と鶴子が思つた時には、かの女自身も早やぼうツとのぼせてゐて、アボトがなほ

何かつづけて云つた樣であるが、はツきり聽き取れなかつた。暫くは、電氣に打たれたり、催眠術にかけられたりしたかの樣に、夢中であつた。

ふとわれに返ると、自分は端然としてもとの通り椅子に坐わつてゐるが、耻かしいばかりに顏をあけることが出來ない。して、アボトが足もとの亂れた樣な調子で物を云つてゐる聲が聽える。

『わたくしは決してあなたを侮辱してはゐませんです。――わたくしはあなたを尊敬いたします。――さうして、今申しあげた通り、――あなたを愛します――誠心誠意を以て、心から愛します。――あなたが若し許して下さるなら、わたくしはあなたのお御足にでも接吻いたします。――松平さん、どうか御返事を聽かして下さい。――松平さん――松平さん――松平さん――』と、最後にアボトが席を立ちかけた樣子だから、鶴子も亦あわてて立ちあがつた。

丸テーブル一つを隔てて、鶴子の恐怖に滿ちた而も氣の毒さうな目と、アボトの熱心に燃える一直線の眼力とが出くわした。

『松平さん、どうかこのわたくしの眞ごころを汲み取つて下さい。』かう云つて、アボトの精神は鶴子の胸に飛んで行つた樣な勢ひだが、さすがは、遠慮して、そのからだは一歩も運ばない。

『御返事を願ひます』と再び促されて、鶴子は、これが最後の言葉だと云ふ樣な口調で、

『とても父が許す筈が御座いませんから』と答へる。

『お父(とう)さんよりもあなた自身のお心は？』
『わたくしは御返事出來ません。』
『そ、それなら、只今直ぐ聽きたいとも限りませんから、御熟考の上願ひます。』
『…………』
鶴子は二度の返事なく烈しい動悸(どうき)を打つてゐる。アボトはまた、全身の血を集めたかの様に、胸の脈搏がチョツキのそとまでも高まつてゐるのが見える。鶴子は顫へてゐれば、アボトは苦しさうにチョツキの胸を浪うたしてゐる。

二人は暫く無言であつたが、アボトは二人が立つてゐたのにふと氣がつき、
『すみません――どうか坐わつて下さい』と云つたが、鶴子が座に戻らうともしないので、自分もそのままで、『あなたは非常に恐れてゐます。然し、どうか御安心なさい、わたくしは決してあなたに失禮なことはいたしませんですから――どうか坐わつて下さい、わたくしも坐わりますから。』

かう云つて、アボトはその椅子にどツかり腰をおろした。それが恰(あだか)も、今まで張りつめてゐた力失せて、破れかぶれにその身を後ろに投げ出したのが、丁度肱かけ椅子の眞ン中にとまつた樣であつた。鶴子は先生の様子を見て、そのうらめしさうな様子が如何にも氣の毒だと思ひながら、自分も亦もとの椅子に着く。

暫くまた無言(むごん)だ。

アボトはいつになく喉をぐい／＼鳴らして紅茶を飲んでゐる。鶴子も、その少し以前から、喉の渇きをおぼえてゐたので、コップを取つた。茶は大分さめてしまつたが、却つてそれがうまい様だ。二人とも一いきに飲んでしまつた。それでも、なほ無言だ。

やがてアボトは鶴子に向ひ、

『松平さん』と呼びかけたが、その調子がずつと落ちついてゐる。

『はい』と、鶴子はアボトを一瞥した。

『どうせ、どちらかの御返事を下さるのでしよう？』

『………』

『承知して下(くだ)さるか、それとも下さらないかの？』

『………』

『そのどちらかわたくしは只今聴かない方がよろしう御座います――と申すのは、突然こんなことを申しあげて、あなたを驚かしたのは、わたくしの罪です。この罪の爲めに、わたくしはあなたの御返事を待つ間の苦しみを喜んで忍びます。御返事を得たとて、それがまたこの上の苦しみになるのかも知れませんです。さうなりましたとて、わたくしの眞(ま)ごころが足(た)りないのなら、止むを得ません。然し

わたくしはいゝ方の御返事を熱望してゐます。わたくしはわたくしの出來るだけ最善を盡してゐるので御座いますから、そこだけはあなたも汲んで下さいましよう？　松平さん――松平さん、これだけ只今答へて下さい――』

『先生の御親切だけは御禮を申します。』

『ありがたう――それで、松平さん、若しあなたがわたくしを拒絶なさいましても、わたくしの誠意を恥かしめる様な他言はなさいますまい――？』

『はい、決して致しません。』

『では、その證據に』と、アボトは座を立ち、一歩踏み出だし、『あなたの熱心な握手を願ひます』と右手をつき出す。その出し方が不斷よりもあざやかでないのを瞥見し、鶴子は心で

『どうしようか知らん』と惑つてゐる。

その折も折、唐紙を叩く音が聽えたので、アボトはあわて氣味に

『お這入んなさい』と云つて、もとへ戾つた。ふすまがあいて、女中が少し投げ出す樣なそッけない口調で、

『古田さんが――』

『こちらへ。』

アボトは自分で自分の心を鎭めてゐる樣子だ。鶴子はまたこれで安心だといふ呼吸をしてゐる。そこへ古田といふのが直ぐ這入つて來た。アボトはこの人を使つて學校を設立したので、廢校になつた今日でも、その殘留生徒の鶴子や玉子に對して責任的關係が多少ないとは云へない。然しこの場の事情を知らないから、當り前の挨拶をして椅子を占めた切りで、鶴子がアボトに送られて室を出るのをゐながらに見送つた。

鶴子は先づ無事にアボト先生の家を出で、急いで四谷行きの電車に乘つた。幸ひ、乘り手が少かつたので、車掌ぎはの隅にもたれたまま、今のことを考へると、丸で自分の一大事を夢見た樣に思はれて、その時ののぼせがまだ取れてゐない。どうせ先生の要求に應ずることは出來ないと知つてはゐるが、何だか嬉しい樣な、恥かしい樣な、また世の中がなつかしくなつて來た樣な、また友人にも教へてやりたくない樣な氣分が胸の中に湧いて來る。若し自分が、あの時先生がヰスキの瓶をかかえた樣に、先生の脇の下にかかえられたなら、どんな心持ちだらう？　先生と自分とが若し夫婦といふものになつたらどうだらう？

若し先生が日本の男なら、無論、あの誠實な、熱心な態度には、自分が從つてしまつたに相違ないのだらう。あの女中のお隅さんだツて、ほかの女が行けば燒き餠も燒くか知れないが、まさか關係てゐるのではあるまい。先生が外國人であるだけに可愛さうで――然しまた外國人であるから、實際、

ぐづ〳〵してゐたら、どんなことをされたか知れない。古田先生が來て下さつたので、やうやく逃げて來ることが出來たのだらう。

『本統は、おそろしかつた』と、心で叫んで、ゆふがたの風の寒いのに身ぶるひした。然し、もう、二度と再び行かないと考へれば、今まで行き慣れた家の主人の獨りで寂しい樣子をしてゐるのが思ひやられて、それが深く身に沁みて氣の毒にもなる。

アボトは、その夜、神經がいつもより興奮して、寢どこの中へ這入つても、まんじりとも眠られないままに、獨身者に起りがちな寂しい空想に耽つてゐると、自分の知つてゐる日本婦人の姿や顏がすべて順番に現はれて來て、自分をあざ笑ふ樣だ。婦人ばかりならまだしもだが、古田氏やら、その他の英語教師等も現はれて來て、自分をあざ笑ふ。

日本は冷笑の國か知らん――それなら、こんな國でぐづ〳〵寂しい生活をしてゐるよりも、早く本國へ歸つた方がいい。一昨年、本國の大學を卒業して、直ぐに、日本へ來たのは、もと〳〵一時の思ひつきで、ただ結婚費を拵らへるつもりであつたのだ。來て見ればいいところであるから、英語教師生活が出來さへすれば、ここに永住したいといふ氣になつた。また、誰れか相當な日本婦人を得て家庭を作りたいとも思つてゐる。

で、兎に角、相當な日本人でありさへすれば、自分には誰れでもいいのだ。松平家の樣な立派な華族から、自分の妻が來ようなどといふ野心は夢更ら持つてゐなかつたのだ。あの時までは、實際、そんな野心はなかつたのだがと、アボトは自分で自分を辯解し、鶴子さんを說服しようとしたのは實際の出來心に過ぎなかつた――若し以前からそんな考へがあつたのなら、自分はもツと熱心に、誠實に出ただらう。さうかと云つて、ただ暴力に訴へて見たところで、失敗すれば、紳士の面目を傷つけるのみならず、日本にゐられなくなるだらう。

『いツそ、初めから本氣でかかつた方が、或は成功してゐたかも知れない』と、何だか惜しい樣な、殘念な樣な氣もする。

渠は床の中で地團太を踏む眞似をして見たりして、自分の殘念な、寂しい心を自分で胡麻化さうとしても、いよいよ神經が冴えて行くばかりだ。ヰスキをあふつて、やツとのこと眠りに入つたが、朝、目を覺ましてから、起きあがる力もない。一つには、また、雪解けの寒い道を早くから步いて行く不愉快を想像してゐたのだ。

本職の學校を珍らしく無斷で缺勤し、床に這入つた切り、朝飯も食はないで、ごろごろしてゐたが、また餘り無聊に堪へないので、晝頃になつてから、起きて來た。

あたまが重く、何をする勇氣もなかつたが、もう、女生徒がやつて來る時刻だと思ふ頃になつて、

僅かにそれを樂しみに氣が引き立つて來た樣だ。然し、この頃になつて、習ひに來る生徒が一般に前ほどに熱心でなくなつた樣に思ふと、それも亦寂しさを添へる一つの種になる。

やがて渠の玄關に女の聲がした。武田孃のらしい。渠は、恰も待ち設けてゐた戀人が來たかの樣に、ひそかに顏をあからめたが、それと同時に、その胸に急激の鼓動をおぼえた。

渠はその鼓動を押し隱すつもりで、何氣ない振りをして室を出で、

『どうかおあがり下さい』と、玉子を迎へた。

玉子は鶴子よりも大膽で、快濶な女だ。アボトを見るが早いか、

『先生、御免を被りますよ、水たまりへ這入りましたから』と、泥によごれた足袋を脫いであがつた。

『道が大相惡いでしよう？』

『ええ、もう、困つてしまひましたの――だから、きのふは休みましたが――まだどなたもお出になつてゐないのです、ね。』

『もう、まゐりましよう』と、アボトが先づ室に這入る。

『わたし、もう、どなたも來ない方がいい、わ』と、玉子もついて入りながら、『何だかけふはをそはりたくないの――』

『どうしてです』と、アボトはかの女と同時に椅子についたが、ひよツとすると、きのふのことを鶴

子からもう聽かされたので、それを諷するのではないかと心配した。然し玉子があどけない様な顏を向けて、

『道が惡かつたのですもの』とにこついたので、渠も亦それにつられて微笑する。して、鳥渡云ひしぶりながら、

『では、わたくし御馳走しますから、遊んでいらッしやい。』

『それも結構です、ね、おそまきのお雪見になります、わ――わたし、何かおみやげを持つて來たらよかつた。』

『いいえ、どう致しまして――あなたは何がよろしいです、パインアプル――プデング――その他のお菓子――どちら？』

『お菓子が結構よ。然し、先生、濟みません、ね、氣儘ばかり云つて――今度はわたしが何か持つて來て、御馳走の仕返しを致します。』

『どう致しまして』と云ひながら、アボトは室を出て行き、女中にその用意の命令を下だした。けふは成功するだらうと云ふ野心が、ふと、玉子の輕快な態度によつておびき出されたのだ。して、西洋酒の瓶を二本コップと共に持つて、再び這入つて來て、

『あなたはお寒かつたでしようから、ヰスキを水に薄くして召しあがつてはいかがです？　それがい

けませんなら、あまいベネヂクチンがあります。』

『少しなら、頂戴出來ますが――』

『では、このちひさいコツプに』と云つて、アボトは井スキの方を一杯に盛る。して、自分の爲めにも亦別なコツプにつぎ、立ちながらひと乾しして、その跡へまたつぎ入れる。

玉子はそれを見て餘り遠慮がなさ過ぎると思つた。然し、アボトは、きのふの失敗があるから、けふは、初めから酒の勢ひをつけて置かうとするのだ。

『さう、先生、おいしい物ですか、井スキ――でしよう――は？』と、かの女はいや味たらしく云つて、皮肉らしい目を向けると、

『さうです』と、アボトは座についたが、不斷なら、無邪氣に折れて笑ひさうなところを、けふの微笑には、どことなくはツきりしない、おもくるしい、心配さうな影が見えるので、玉子は烏渡異樣に感じた。して、他の仲間が一向まだ來ないのに思ひつき、先生は、習ひに來るものが不熱心になつたので、或はその人數をすべて失ふのではないかと心配してゐるのだらうと想像する。それで、自分等の前でも。燒け氣味になつて、お酒などを飮んで見せるのではないか知らと、心で獨り氣の毒がる。して、

『きのふ、皆さんはいらツしやいましたか』と聽いて見る。

『獨りだけ來ました』と答へて、アボトはコップを引き寄せる。

『どなたが？』

『松平さんです』と、渠はいやな顏をして引き寄せたコップを乾し、その跡をつぐ。

『あの方とわたしとが、實際、一番熱心ですよ——自慢では御座いませんが』と、かの女は先生の心を引き立てるつもりだが、渠はただ

『さうでしよう』と云つた切り、笑ふでもない、笑つてゐないでもない、變な樣子をして見せ、『あなた、松平さんにきのふからお會ひなさいましたですか？』

『いいえ、おととひ、ここでお目にかかつた切りですよ。』

『きのふは雪が積んでゐました。』

『それは、先生、けふも同じです——おほ、ほ！』

『はツ、はツ、は！』と、アボトも、ふいとへまなことを云つたと思ひ、笑つては見たが、鶴子は玉子の親友であるから、一二日のうちには、きのふのことがきつとばれるかも知れんと考へる。若し本國人同志なら、お互ひの名譽を重んじて、結婚の申し込みなどを他言することはないが、相手が日本人のことではあり、若し外國人と見て、自分を馬鹿にしてゐたものなら、自分に對する信義や約束を守ることはあるまい。どうせばれるなら、けふを限りの試みだと、また一杯を傾けて勢ひをつけ、玉

子にも勸めたが、これがかの女を說服する初まりだと思へば、鳥渡また心がぐらついてのぼせ氣味になり、顏が赤くなる。

『先生は、もう、お顏が少し赤くなつて來ましたよ』と、玉子はちひさいコップを少しづつ傾ける。

そのうち、女中が西洋菓子を持つて來る。

『お隅さん、濟みません、ね』と、玉子。

『いいえ、武田さん――きのふも、松平さん獨りでしたの。』

『さうださう、ね――道が惡いと、外出が不愉快で――』

『あなたの樣に御活潑な御氣性では、お獨りでも大丈夫でしようが――』

『なアに、どなたでも不愉快はおんなじでしようよ。』

『然し御婦人獨りでは、男のそばは御用心なさいませ』と、これは日本語でだ。

男のそばはと聽いて、玉子はむツとした。內部ではどんな關係があらうとも、表面女中の身でありながら、ここへ來てゐる客に對して、例のうわさの悋氣らしいことを云ふのは失敬だと思ひ、それツ切り、橫を向いて、お隅には物を云はない。

アボトはまた、遠藤須摩子樣といふ宛名をスマエンド子サマと書いた滑稽があるほど、日本の事情に通じないばかりでなく、殆ど全く日本語を解しないから、女中の言葉が何を云つたのかよく分らな

いが、自分の邪魔になるので、直ぐお隅を立ち去らした。して、玉子が飲み乾した杯に跡をつがうとすると、かの女は

『もう、戴きません』と云つて、からのを横へ押し寄せる。

二人は菓子に手をつけたが、アボトは胸に計劃を持つてゐるので、その方に心があせつて、食ふ物のあぢがよく出ない。然し玉子はうまさうに喰べてゐる。

玉子が愛嬌ある顏つきをして、いろんな笑話やら、眞面目な話やらを仕かけながら、恰も何等のかけ隔てもなく、おもしろさうに笑ひ、うまさうに食ひ、時々口の兩隅に傳つて出る消化液をハンケチで拭くのを見ると、アボトは、もう、遠慮も會釋もなく、自分の禮儀もしくは克己といふ皮を全く脫いで、かの女の血が通ふ白い肉塊の胸の中に全身を投じたくなる。して、若氣の押へ難い力が渠の胸に集中して、渠の血と共に煮えくり返る樣だが、

『いや、まだ時機が早い』と、自分で自分を返り見ると、自分の心は既にどこかへ脫けて行つて、からになつてゐる樣で、目前の玉子の姿が遠く見える。

『先生はどうかなさつてる樣です、ね』と、玉子の調子の違つた聲に氣が付くと、アボトは暫く躊躇したが、ふと、それに答へる言葉を思ひ付き、

『わたくし、少し病氣です』と、わざ／＼おもくるしく云ふ。

『それはいけません――何病です？』
『あなたには申し上げられません。』
『お話出來ないなら、仕方（しかた）が御座いませんが、御心配です、ね。』
『はい――心配ですが――』
『お醫者にお見せになつて？』
『いえ、見せません。』
『どうして――早く見て貰つたら、いいでは御座いませんか？』
『ドクトルでも直すことは出來ません。』
『では、何？ 肺病？』
『……』
『腦病？』
『……』
『肺病でも、腦病でもないなら、懷鄕病（ホームシック）？』
『いいえ』と、渠は鳥渡微笑して、『そんなものではありません。』
『では』と、玉子はアボトの微笑に乘じて自分も笑ひながら、『戀病（ラブシック）でしよう？』

『ふふん』と、渠は吹き出したが、またおもくるしい調子をよそひて、『まア、そんなものです。』

『ぢやア、先生』と、かの女はからだを少し乘り出して、『誰れです、婦人は？ 白狀なさい！ わたしが仲人になつてあげましようか？』

『いゝえ』と、アボトはいよ〳〵沈鬱な樣子をして、『それだけは云へません。』から語つて、自分の目的は實際鶴子であるか、または玉子であるかを考へて見た。鶴子よりは玉子の方が、渠等の目前でいつか語つた通り、愛嬌でいい。且、鶴子は、きのふの樣子では、とても物になりさうでない。自分の心を全く玉子に向けよう。して、この病氣は玉子の爲めだと云はう。こんな僞りは、その實、云ひたくない。然し戀の初めはいつも多少僞りがあるらしい。ただ僞りで得た愛を、得た以上は、誠實に保ちさへすれば、自分の責任を全くすることは出來よう。

こんなことを考へて、玉子の方にじツと目を向けると、かの女は自分をあざ笑つてゐる樣に思はれて、云はうとした言葉が出ない。

玉子はまた、實際、からかひ半分に、この秘密を聽かずには濟まさないと云ふ意氣込で、

『云へないことはないでしょう――それまで白狀してしまつたのですもの、ね。お力になることが出來るなら、わたしも出來るだけ盡して見ます、わ。』

『…………』

『云つて御覧なさい、な。』

『……』

『云へないの？』と、無言の人の方へ小頸を傾ける。

　玉子が殆ど先生に對する態度を忘れ、親しい友人の心に這入り込まうとするかの如き心持ちに見えるのに乘じて、アボトは、沈痛な戀を發表することが出來たかの樣な態度をよそひ、

『實は』と、わざと聲を低くめたつもりなのが、おのづからかすれ顫ひて、切れ〲だ、『あなたに——永久の手を——握つて——貰ひたい——のです。』

『ええツ』と、玉子はその意外に驚いた。して、その丸い頬を赤い血がよこ切つた。この瞬間の表情をアボトは多少冷やかに注意してゐたが、玉子の如何にも驚いたらしい而も優しい心根が自分の身に沁み込んだ樣になつて、同じ鋭敏な感情を有する肉塊なら、二人はここで全く手を握り合つてもよからうと思ふと、再び頭腦までがのぼせあがつて、今にもその一方の肉塊に飛びかからうとする。

　玉子は、そんな危機にはまだ思ひ至らなかつたのだが、自分が顏を赤くしたかと考へると、何だか先生の言葉に服從するかの樣に見えるだらうと、それを酒に云ひまぎらすつもりで、

『わたし、お酒に醉つて來た樣、ね』と、兩手で肉づきのいい頬ツぺたを撫でて見る。

　アボトは、この突然の話題轉換の爲めに、自分の必迫した勢ひの鼻さきを握りこぶしで打撃された

樣な氣になつた。して、
『また失敗だらうか』と、心では自分で自分の覺悟を疑ひ、且、耻ぢた。然しなほ言葉をつがうとするが、烏渡それが出ない。
玉子はまたにこ〳〵してゐるが、全く態度が變つて、眞面目臭くなつてゐる。
無言で二人の間を隔ててゐるのだ。然し若しこの無言が破れると同時に、アボトの希望も全然破壞してしまふものなら、いツそ、この間の云はず語らずの狀態――まだしもそこにゆかしみがある――にとどまつてゐる方がましだと、渠の目には怨みの涙らしいのが湧き出て來た。
大膽な玉子とて、鶴子と同樣、まだ處女だ。先生の目から一二滴の涙が落ちたのを見ては、自分の生涯に於て、初めて男の切ない情に接した氣持ちになつて、そのありがたさに身ぶるひをした。して自分も亦いつのまにか涙を湛えてゐた。
『然し、先生』と、かの女はうるんだ目を擧げて、先づ口を切つたが、その聲が低くまた亂れてゐるのを、直ぐ身づから悟つて出直さうとすると、その刹那にアボトは、
『う、う』と、朦朧な、苦しい樣なうなり聲を發して、烏渡椅子の上で飛びあがつた。玉子は、これを見て、急に何だか馬鹿げた人だといふ心になり、
『然しわたしは』と、いよ〳〵切り出した、

『日本人として、そんな自由な身では御座いません。』
『あなたが若し』と、アボトも絶望的な勇氣を得て、『日本人として自由が行はれないなら、わたくしと同樣、英國人になつて下さつてはいかがです？』
『そんなことも出來ません』と、玉子も亦遠慮と同情とを徹した大膽に歸つて、自分ながらも意外と思ふほど、強い語勢であつた。
『あなた、戀──人が──あるのですか？』
『そんなものは御座いません。』
『戀人でなくても、──親達の──定めた──許嫁がある──でしよう？』
『ありません。』
『では、──外國人が──いけないの──ですか？』
『まア、そんなものでしようよ』と、玉子はつんとおこツてしまつた。
『ああ、つらい！』から投げ出す樣に叫んで、アボトは絶望したかの樣に椅子の後ろへもたれる。
玉子はそれを見ない振りで澄ましてゐる。
『ああ』と、アボトはまた情けなさうな樣子をして、立ちあがつた。
飛びつきはしないかと、玉子が注意してゐると、アボトはかたはらの書棚の前に行き、下の引き出

しからピストルを取り出した。どうすることかと、かの女はこわ〴〵見てゐると、渠は身を椅子の上に投げ落して、そのピストルの筒さきを自分の喉に當てがひ、
『もう、自殺致します』と、そのまま、目をつぶツて仰向いた。
玉子は渠が本統に死なれては自分の迷惑だと思ひ、すツくと立ちあがつて、
『まア、お待ちなさい！』かう云つた口調には、全身の力が這入つてゐた。
アボトがじツとあけた目はうるんでゐる。然しその決心が本統であるとすると、渠の樣子に、何となくそれだけの力がないのを玉子は不審に思つたが、兎に角、危險な物を遠ざけさす必要があるから、
『ピストルをお捨てなさい』と命ずる。
アボトは默つて凶器をテーブルの上に置いたが、
『然しわたくし、どうせ死ななければなりません』と、歎息する樣子だ。
『いえ、あなたはそんなことをなさるには及びませんわ。わたし風情の爲めに、大切な一身を失つてはつまらないぢやア御座いませんか？』
『………』
『あなたは一個の紳士です。――そのうちには、きツといい人が見付かりましよう。』
『いいえ、わたくし、あなたでなければ、もう、誰れをも愛しません。』

『御無理です、先生、それは――』
『ですから、わたくし死にます。若し死なないで生きてゐても、絶望の生涯には、紳士といふ資格が成り立ちません。』
『御もつともですが、先生』と、玉子はその言葉を聽いて泣き出し、どツと椅子に落ちた。
『どうか、武田さん』と、アボトはそばに急ぎ行き、『わたくしを許して下さい』と、玉子の熱い手を握つた。
『いけません』と、かの女は渠を振り拂つて、かたはらへ避けたが、胸の鼓動が最も急激になつたと同時に、全身が綿の如くやはらかくなつたのをおぼえる。
渠がなほ暴力を以つて迫らうとするけはひを見て、玉子はおそろしさの餘り、われ知らず卓上のピストルを執つた。して、これも夢中でアボトの胸にそれをさし向けた。
『亂暴をなさつたら、一うちですぞ』と、わく〳〵してゐる。
この時、女中のお隅がコーヒーを入れたのを持つて這入つて來たが、びツくりして、
『あぶない、武田さん！　彈丸が籠めてあります！』
彈丸がと聽いて、アボトも今更らの如くおぞけづいたが、玉子も亦餘り危險だと思つた。して、かの女は初めてお隅が、『さきに男のそばは御用心なさい』と云つた眞意を讀めた。

『松平さんもこの手を喰つたのか知らん――實に、實に、失敬な、無禮な人だ』と、心に怒つて、その無念は遣る方なく思つたから、ぼんやりしてゐるアボトには目も呉れず、ピストルを持つたまま、『お隅さん』と、だけ會釋し、『こなたへまゐるのは、もう、けふ切りで御座います。』

かう云つて、飛び出す樣にそとに出で、手に持つピストルをおもて庭の石の上に置いて、門を出た。數寄屋橋行きの電車に乘つてから、直ぐ氣がついたのは足袋を忘れて來たことだ。然しそれを取りに戻るのも胸くそ惡いと思つて、乘つてゐる。

『お氣の毒で、何とも申しあげやうが御座いません』と、お隅があがり口まで來て云つたことを先づ思ひ出す。して、若し松平孃なり、自分なりにあんなことを迫るのなら、人の云ふ樣な女中との關係などはこれまでなかつたのだらう。して、また、鶴子さんにもきのふあんなに迫つたのだとすれば、けふ、自分にあんな熱心を表することが出來よう筈はなからう。ピストルをあの人自身の喉に當てた時、一つ間違へば、直ぐ何しろ生命がなくなつたのだ。實際、あの人の誓言しやうとした通り、自分ばかりを愛してゐたのか知らん？　敎はつてゐる間も、これまで決して自分ばかりに親切にして呉れたのではない。然し、それは、愛を發表する機會がなかつたのだと云へば云へよう。

鶴子さんと自分とでは、自分の方が英語もよく話せるし、器量から云つてもと默笑して、自分は鶴子さんよりも愛嬌があるとあの人が公然云つて呉れたことがある。如何に先生のお言葉だからッて、

あの時は、鶴子さんには氣の毒であつたし、自分はまた實際耻かしかつた。また、如何に日本の事情を知らない外國人だからと云つて、子爵の令嬢を高が英語教師ぐらゐに許して呉れるとは思ふまい。金持ちの娘なら、可なり平民的な英國人のことだから、あはよくば、自由結婚が出來ると思つたのかも知れない。暴力を加へやうとする樣に見えたのも、自分を愛してゐるのに夢中であつたからで、結局、愛の熱烈を表したのだらうか？

『然し外國人風情だ』と考へると、矢張り輕蔑の念が先きに立つ。然し、また、男性の熱い息に觸れたのを思ひ出すと、そツとして、いつまでもその心持ちをいだいてゐたい樣にもなる。して、日本へ來て、もう、足かけ三年を、あの人はさぞ寂しく送つたのであらうと思ふと、自分も亦、素足のもとから、何だか寂しい樣な氣が押しあがつて來た。

鶴子と玉子とは、同じ年頃の嬉しさと寂しさとを急におぼえた樣な氣持ちになつて、それから數日間といふものは、考へてばかり日を送つた。

然し玉子は、毎日會つてゐた友に暫く會はないのを思ひ出し、餘り不愉快な日を送つてゐるから、自分の母について行つて貰つて、芝居見物にでも行かうではないかと云ふ手紙を鶴子に出した。その末に、アボト先生のところへは行つてゐないことを書き添へた。

玉子からも喜んだ返事が來て、芝居にでも行くと、何だかけふこの頃の樣な不快な心持ちは直るだらうといふことや、先生のところへは、もう、皆さんが不熱心になつたらしいから、自分も行かないことにしたといふことなどを書いてあつた。

いよ〳〵約束の日が來て、鶴子は玉子の家を音づれた時、アボトの話が出た。

『玉子さんもおよしになつたて、ね。』

『さうよ、鶴子さん、わたしもよしました、わ。』

『皆さんが不熱心になつて來たのですもの。』

『先生が惡いのだ、わ。』

『ほんとに、いやな人よ』と、鶴子がこないだのことを思ひ出して顏を赤らめると、玉子は『えッ』と電光石火、『あなたも――』

二人はぴツたり目と目を見合はしたが、云ふのではなかつたと、互ひに口をつぐんだ。どちらもそれを知られては恥辱だと考へてゐるのだ。して、二人は心で別々にアボトのことを思つて、互ひに嫉ましい樣な氣がした。

この事件がいつのまにか――お隅の口からだらう――古田教師の耳へ這入つたので渠は手紙を以つ

てアボトを詰責したが、それッ切り、この英國人は古田に會はない。途中で出會つても、顔をそらして、逃げて行くさうだ。して、アボトは、自分が撮影した鶴子と玉子との並んだ寫眞を、いつも自分の寢床に飾り、玉子の殘した足袋を――お隅に洗はせてから――毎晩抱いて寢るといふ話だ。

――(四十三年二月)――

# 放浪

この作は、明治四十三年に出版されたのであるが、同じく四十五年に『わが身の罪』と云ふ無理解も甚だしい題に改められて、著者自身の知らない僞版が出た。それは然し訴訟によつて絶版させることになつた。

大正八年七月、新潮社から泡鳴五部作として更に刊行することになつたが、本書の臺本で、原作からみれば可なり訂正を加へてあることを斷つておく。材料の性質から云へば、『發展』。『毒藥女』。『放浪』。『斷橋』。『憑き物』といふ順序になる。たゞし、五部作の中最初に公に出されたものは、この『放浪』である。

編者識す

# 一

樺太で自分の力に餘る不慣れな事業をして、その着手前に友人どもから危ぶまれた通り、まんまと失敗し、殆ど文なしの身になつて、逃げるが如くこそ〳〵と北海道まで歸つて來た田村義雄だ。

小樽直行の汽船へマオカから乘り込んだ時、義雄の知つてゐる料理屋の主人やおかみや、藝者も多く、艀で本船まで同乘してやつて來たのは來たが、それは大抵自分を見送つて呉れるのが主ではなく、二三名の鰊漁者、建網番屋の親かたを『また來年もよろしく』といふ意味でなつけて置く爲めだ。

渠とても、行つた初めは、料理店や藝者連にさう持てなかつたわけでもない。然し失敗の跡が見えて來るに從ひ、段々融通が利かなくなつて來たので、自分で自分の飛揚すべき羽がひを縮めてしまつたのである。よしんばまた、縮めてゐないにしたところで、政廳の方針までが鰊を人間以上に大事がり、人間はただそれを捕獲する機械に過ぎないかの樣に見爲してゐる樺太のことだから、番屋の親かた等がそこでの大名風を吹かせる勢ひには、とても對抗出來る筈のものではない。

渠等が得意げに一等室や二等室へ這入つて行くのを見せつけられて、自分ばかりが三等船客でなければならなくなつた失敗は、如何に平氣でゐようとしても、思ひ出せば殘念でたまらなかつた。
一等船室には、實際、三名の番屋が三ケ所に陣取つてゐた。いづれも、それが自己の持つてゐる漁場から、マオカへ引きあげて來た時、例年の通り、負けず劣らずの豪遊を試みてゐたので、その時義雄も渠等と知り合ひになつた仲だ。北海道相撲の一行が來て三日間興行をした時なども、渠は渠等と組んで棧敷を買ひ切り、三日を通して大袈裟な見物に出かけ、夜は夜で、また相撲を料理屋に招いて徹宵の飮をやつた。
その親かた等の一人は義雄の事業に來年から協同的補助を與へてもいいといふ申し出をしてゐた。義雄もそれが若し成り立てば、今年の事はたとへ損失が多くても、辛抱さへしてゐればいいからといふ考へである。その相談はどうせ小樽に着してからでなければ孰れとも定められない事情であつた。が、渠がふと三等室を出て、その人の室へ行つて見ると、その人は赤黑い戸張りの奥に腰かけて、そばに一人の女をひかへさしてゐる。
『これは失敬』と云つて、義雄が出ようとすると、
『いいのだよ、君も知つてるだらう』と引きとめ、その手で女の頸を押し出す。
見ると、お仙と云つた藝者だ。つき出された顏が笑つてゐる。義雄は、出發の前夜も、その人に連

れられて酒店へ行き、この女を招いて飮んだのだ。その夜ふたりは關係したか、どうかは知らないが、以前は確かに關係があつたらしい。よく聽いて見ると、かの女は丁度いいしほに乘つて、見送りにかこつけ、マオカを脫走し、旅費だけをこの番屋に出させたのだ。

小樽へ着くと、直ぐ、お仙は獨りでどこかへ行つてしまつた。

義雄は例の番屋の本宅、松田方へついて行つた。そして、事業協同の下相談をあらかたでもつけて置きたいと思つたが、その會計主任とも云ふべき帳場が旅行中で、それが歸つて來るまでは、相談が出來ないとのことだ。

それに、この番屋の親かたは、船中で皆と一緒に相談してゐた通り、直ぐ札幌へ行つて、興行中の東京相撲を見ようと云ふ。そして、他の二人(これは函館の人であつた)の定宿へ電話をかけたのだ。

義雄も渠等と一緒に札幌へ來た。

然しステーションを出てから、義雄は皆が勸めるにも拘らず、皆に別れた。來早々小使錢もないのを渠等に見透かされるのが厭であつたからである。渠はステーションの入り口に立つて、渠等が車で外國じみたアカシヤ街を眞ツ直ぐに驅けて行く勇ましい姿を見送りながら、自分獨りはこれからどうなるのだと考へた。午後二時頃だ。

先づ、心に浮んだのは、今しがた、小樽の埠頭で別れたかのお仙はどこへ行つたか知らんといふことだ。かの女は無責任な女性――而も卑賤極まる女性――であるから、どこへ行つても、その場で自分一個を自分一個で處分することが出來る。然し渠自身はさうは行かない。小樽在住の番屋と共に同船して來たのは、小樽に着けば直ぐ來年の事業擴張の相談を濟ますつもりであつた。それさへ濟めば、本年殘餘の事業に對しても、多少回復のつきさうな補助もしくは借金もその人から出來ようから、再び樺太へ引ツ返すなり、自分は北海道にゐて、また別に何か一儲け出來る仕事を見附け、東京へ歸る前に、樺太に於ける失敗の埋め合はせをするなりしようと思つた。

然しそのおもな而も唯一のもくろみが、たとへ當分でもはづれては、渠等は當惑せざるを得ない。手にしてゐる風呂敷包みに、東京の雜誌二三冊と手帳と、不斷衣の袷と袷羽織とめりやすのシヤツとがある外には、樺太の夏に向きかかつた時拵らへた銘仙の單衣に對の銘仙の袷羽織を着てゐるばかりだ。そして、帽子と云つては、海水浴場で男も女もかぶる樣な大きな、粗末な麥わら帽だ。

札幌の眞夏は兎に角樺太のよりは暑い。人々がうす物一つで往來してゐる中を、渠獨りは袷の羽織を着たままで、ステーションから離れ出した。三十年も以前にアメリカから取り寄せて植ゑつけたと聽いたアカシヤの樹が、この南北に渡る中央通りの兩がはに、づらりと立ち並んで、家毎の家根を越えて葉を繁らしてゐる。風があつて、その動く枝葉ばかりは涼しい樣だが、下を通る渠その人の暑さ

は、今年になつて初めておぼえる暑さである。

渠は汗をふきふき、風呂敷をかかへて、五番館の陳列所前を反對の方角に曲つた。と云ふのは、兎に角、一友人の家に一時落ちつかうとするのだ。渠の懷中は宿を取るさへ心細いくらゐになつてゐる。そして、その友人とは、古くから知つてゐる同窓だが、手紙の上ばかりで、實際はもう十年足らずも會はなかつたのを、渠が樺太へ渡る前に鳥渡立ち寄つて、その住まひは承知してゐた。

廣いその眞ン中に低い草が生えたままにしてある通りを行くと、左りに北海道廳の柵がまわしてある。その柵内に直立して、天を突くさかさ掃木の樣に高い白揚樹の數數と、昨年の火災に燒け殘つた輪廓ばかりの道廳の赤煉瓦とを再び見ると、急になつかしい友人に近づいて來た氣になる。

そこから一丁も行かないところに、通りは農科大學の附屬博物館構内の柵に行きつまる。柵内に繁茂してゐる、脊の高いアカダモや、ドロや、柳やの森をのぞむと、然し、渠は、數ケ月前の月の夜に、友人と共にその間を散步しながら、今回着手した事業の成功を身づから保證したことがあるのを思ひ出す。それが今回殆ど手ぶらで歸つて來たのであるから、何となく顏を會はすのが恥かしい樣な氣もする。且、みやげもなく、また用意の小使錢も殆ど皆無のあり樣だが、博物館そばの通り角の友人の家に着いた時は、遠慮もなく、玄關のがらす戶を明け、

『歸つて來ましたよ』と、無造作に這入つて行つた。
半間ばかりの土間があつて、そこから障子をあけてあがると、直ぐ茶の間で、六疊敷の左り寄りのがらす窓のもとに、ちいさい四角い爐が切つてある。爐の中には、奇麗な小粒の石が澤山敷きつめてあり、その眞ン中に沈めた丸いかな物の中の灰にはおこつた火が埋めてあるかして、天井から鐵の自在鍵でつるした鐵瓶の湯がくた／＼云つてゐる。
然し裏の方はすべて明けツ放しのまま、家族のものは誰れもゐない。右の方の客間や寢間もみな方づいたまま見られるし、直ぐ奧の臺所からは裏の共同庭も見透かされる。義雄は持つてゐた包みをそこに投げ出し、爐のそばにあぐらをかいて、煙草をのみ初める。そして、暫らくここに落ちついてゐられるか知らんと考へて見る。
けふは、明治四十二年の八月十六日だ。初めてここへ訪問してから、もう、三ケ月餘りを樺太に經過した。そしてそれが殆ど全く失敗の經過であつた。ここに滯在してゐるうちに、向ふから多少回復の報知が來ればよし、さうでなければ、北海道で一つ何かいい仕事を見附けなければならない。
然し友人はまだ某女學校の國語漢文教師であつて、僅かの俸給によつて、夫婦に子供ふたり、生計を立てて行く人――交際も狹からうし、また義雄一個がその生計の一部分に影響しては、苦しい事情があるかも知れない。兎に角、札幌へ來ての第一着は、自分のその日を送るに足るだけの定收入を作

らなければならない。これはこの友人に話しても駄目だらうから、けふにも、今ひとりの、これはさう親しくないが、知人で、近々一實業雜誌を發刊しようとしてゐるものに行つて、早速相談して見よう。

などと考へてゐるうち、奧の方の共同庭――そこは、通り角の兩面に立ち並んでゐる家々に共通の裏庭だ――を、細君が衣物の裾を腰まで裏返しにはしよつて、手桶を兩手におもたさうに下げてやつて來るのが見えた。水口を這入つてから、かの女は義雄のゐるのに氣がつき、

『あれ、まア』と、東北辯の押しつまつた口調で驚きあわてて、裾の端折りをおろす。それで、義雄が第一に穢らしいと思つた白の腰卷きが隱れる。

『歸つて來ましたよ』と、渠が何氣なく笑つてゐると、かの女は爐ばたへやつて來て、

『いらツしやい』と挨拶する。『いかがでした、樺太の方は？』

『失敗でした、矢ツ張り』と、ほほゑみをつづけて、『然しまだ回復策が出來さうなので、ちよツと北海道まで歸つて來ました。』

『それはいけません、ね』と、細君は變な顏をした。義雄はそれが見たくなかつたのだ。然し、この場合、そんなことは云つてゐられない。ただ自分の暫らく厄介になることに對し、かの

女がその所夫にあたまから反對（があるかも知れないから）の氣勢を吹き込まない樣にさへして吳れればいい。

と、かう思つて、渠は、さきにここで話し合つた時の意氣込みとはうつて代つた自分の今のみじめな狀態が如何にも情けない。

友人は子供ふたりをつれ、十三四丁も南に當る公園の林檎畑へ林檎を買ひに行つて、留守だと云ふのを幸ひ、先づその細君に向つて、義雄は暫く厄介になることを告げた。そしてみやげ物も持つて來なかつた申しわけとして、ここまで歸つて來るのが漸くのことであつたくらゐで、用意の小使錢さへ殆どないほどだといふことをうち明けた。

然しまた生計上の心配をさしては濟まないと思つて、樺太の失敗はまだ全くの失敗でないこと。並に蟹——これを鑵詰に製造するのが義雄の事業である——の第二期漁獲が、八月の初め頃から始まるのだが、今年に限つて、七月一杯の昆布採集が豫想外に長引いてゐて、まだ初まらないが、それが初まれば、自分の生活費用は向ふから送つて來る筈になつてゐるといふこと。さなくも、東京の家を賣る筈だから、今月中にはそツちからも金を送つて來ること。などを、自分の信じてゐる通りに云つて聽かせた。

『然し事業といふものは六ケしいものですよ』と、細君は、茶を入れながら、義雄の言をあやぶんだ

樣な返事だ。渠には、かの女がさきに渠をあやぶんで忠告するやうに語つた話を思ひ出せたが、かの女の兄なる人に木材で失敗した者があつて、かの女はそれを共にゐてよく知つてゐるのであつた。

かの女の兄なる人は天鹽の或山林から枕木を切り出し、一と儲けしようとした。豫算通りに行けば大儲けをする筈であつたが、それが意外の失敗になつて、父の家までも失つてしまひ、この細君もその家に金持ちの娘として安んじてゐることが出來なくなつた爲め、七八年前、こんな教師風情のもとに方づいて來たのだ。

義雄の失敗もこの家の細君の兄のと殆ど全く同じであることが心に浮んだ。無い中の金の工面をする爲め、亡父の一週忌も濟まないうちに、自分の所有になつた家を抵當にしてしまひ、東京では、それが今月中に流れてしまうかも知れないのである。そしてその家には妻もゐるし、子供もゐる。然し、この場合どうすることも出來ない。家を流れないやうに賣り飛ばし、その殘りの差金のうちから、百圓だけ送つて來い。そしてその殘金を以つて、二三年間、どこにでも引ッ込んでゐろといふことを自分の妻への最後の手紙に云つてやつたのは、今月の初め頃である。

渠はそれッきり東京の家には手紙を出さない。妻子には自分が二三年間北海道へ行つて、放浪の身となつたと思へと云ひ含めたつもりなのだ。

義雄は文學を以つて東都の文界に多少の名を知られてゐたものだが、その勞力に報いることの少い

原稿生活に飽きが來たのが原因で、こんな失敗をした。然しこの失敗を失敗にしてしまつては、矢張り、厭になつた原稿生活に返らなければならない。今ではこれがつらいから、どうしても、罐詰の事業をやり通すか、或はまた他に何かの實業的仕事を見つけようか、とする熱心が胸に燃えてゐる。『六ケしいと云つても、やり方一つですよ。僕の事業の失敗などは、僕がその初めから附いてゐさへすればよかつたのです』と、義雄は斯う云ふ申しわけを云ふのさへ殘念であつた。

實際、ゆで釜とか、蒸籠とか、敷地とか、製造所とか、固定資本に餘り金を入れ過ぎて、流動資本の用意がすくなかつたのも、一つの原因ではあらう。然し、渠が原稿の整理やら、不足金の調達やら、愛妾の病氣介抱やらで、東京出發を二ヶ月餘も後らしたうちに、さきへ樺太に行つたもの等が取り返しのつかないへまをやつてしまつた。

渠等は無職業同樣な惡辣者を相談相手にして、それに利益の半ばを喰はれてゐたし、土地の番屋におだてられて、蟹を製造力不相應に買ひ込み、毎日その半分は、無駄に腐らしてゐたし、また原料並に物品を餘り高く買つてゐた。それで經濟の取れて行く筈はない。

思ひ返せば、渠は人を信じ過ぎたのだ。從兄弟の製造技師は無學文盲の爲めに他人にのせられ易いし、會計掛りとして遣はした弟はまだ學生あがりで本統の役には立たない。おまけに、その弟が慣れない寒氣の爲め急性肺炎になつて、一ヶ月餘りも入院した。

そんなこんなで、渠が向ふへ渡つた時は、最も望みある第一製造期の終りであつたが、利益どころか、東京の家を抵當にして拵らへた製造所が、諸機械ぐるみ、また抵當に這入つてゐた。渠が燒けを起して豪遊したのは、それが爲めである。

『然し樺太出發の際、第二の時期に必要な費用は、極切りつめたところだけでも、用意して置いたから、再び仕事を初めさへすれば、直ぐ五十や百の金は送らせるのに不自由はないのです』と、渠はつけ加へる。

『さうなれば、あなたがたも結構ですが』と、細君は浮かない返事だ。

全體、義雄はかの女を初めて會つた時から好いてゐなかつた。盛裝させれば、きツと美人には相違ないとは思つても、第一、抑しつまつた樣な東北口調が都振りに慣れてゐる渠には少し不愉快に感じられる。それはいいとしても、友人はその妻の身のまわりを餘りかまわなさ過ぎる。それも活計上の餘裕がないところから來るとして、女自身が餘り所帶じみて、くすみ過ぎてゐる。

半ばは同情から、半ばは惡感から來るのだが、女性といふものが子を持ち、所帶じみるに從つて、年の加減でもあらうが、自分から色けがなくなつて行くのを見ると、義雄はいつ、どこでそれを見るにしても、そのだらしなさ、意久地なさ、きたなさを感じて、下らない樣な、馬鹿々々しい樣な、憎らしい樣な厭氣を抱かざるを得ない。

ここの細君を厭なのは、義雄には、乃ち、自分の妻を厭な所以であつた。妻が厭であると、その子供までが——恰も自分との間に出來たものでないかの如く——厭になつて渠はわざとにも妻子の顏を暫く忘れてゐたし、また全く見ないで濟んでゐたのに、この北邊の地に來てゐながら、なほそれを聯想しなければならないのを非常に苦しく思つた。そして早く友人が歸つて來ればいいがと心で祈つた。
『この頃は夏期休暇中です、ね』と、渠はふと氣がついた。一年中で最も閑散なこの時期を、子供と共に出て行つたのなら、夜まではかからないとしても、友人はいつ歸つて來るか分らない。
『うちでも、もう直き歸りましようから』と、細君が親しげに云ふのにかまはず、
『奧さん、勝手に御用をなさい。僕はちよッと湯に行つて來ます——一日、一晩、船の中でごろついてゐたのですから。』

## 二

そとへ出る時、友人の細君がまた裾をはしよつたまゝ見送つて來た。白い腰卷きの末の凉しい風にひらつくのが、如何にもきたないにほひを送つて來る樣に思はれた。
『家庭なるものは實に厭なものだ』と、かう心に叫んで、手に持つ手拭ひで顏の汗を拭きながら、博物館の樹木に蔭つた柵外を南の方へ歩んで行く。なか／＼に凉しい。

渠が初めてこのあたりを散歩した時、まだ失敗などは夢にも見てゐなかつたからだが、今年の成功と共に樺太を引きあげると、こんなところへ東京から愛妾を呼び寄せて暫く閑靜に住んで見たいと思つた。然しその本人も、この頃では、生活費を送つてやらない爲め、頻りに怨言や罵倒の意を反對に送つて來てゐたが、それも來なくなつたほど、現在の樣子は分らない。

どうせ失敗するなら、斷ち難い戀にまで失敗してもかまはない。渠はから決心してゐる。そして、事業に熱心なものが往々義理も人情も返り見ないことがあるのは、こんな心持ちになつた時だらうと想像してゐる。

細いどぶの樣な川——それが柵内に流れ入る——に渡した橋を渡ると、道の眞ン中に、一本のアカダモの大樹が立つてゐる。その幽靈の手の樣にやアわりつき出た高い枝々を仰ぎ見ると、何とも云へないほど優しい、寂しい情が渠のあたまの上におッかぶさつて來て、すさんで行く孤立の幹とも云ふべき渠の精神をやわらげて呉れる樣だ。

札幌區立病院の廣い構内に添ふて角をめぐり、その本門の前を通り過ぎた湯屋に來た。他に客はない。そこで樺太の垢をおとしながら、この夏をいつまでこの湯に這入りに來なければならないのか知らんと考へる。あちらで旅館の狹い湯に這入りつけてゐた身には、錢湯の廣いのが先づ心をも廣く、ゆるくする。

そしておほきな湯船にはだかのからだを再び漬ける時など、何だか自分に犯した罪惡でもあつて、それの刑罰に引き込まれる様な氣分だ。湯の底が烈しい音でもして、ほら穴に變じはしないかとあやぶまれた。

節々がゆるんで、そのゆるんだ間から、自分の思想が湯氣となつて拔け出たのだらう。ぼうツとなつて、自分の神經までが目の前にちらつく。

どうも底から破裂しさうな氣がするので、湯船を飛び出し、板の間で再び垢をおとし初めると、身が輕くなるに從つて、不安が自由におそつて來る樣だ。

好きな湯に當りかけるのか知らんと、水船の水を汲んで顏を洗ふ。ひイやりすると同時に、不安の材料がはツきりと胸にこたへて來た。弟と從兄弟とが樺太で餓ゑ死にするかも知れないが、かまはないか？　東京で、妻子は心配の爲めに病氣になるかも知れないが、いいか？　愛妾も、亦、薄情を怨んでゐるが、どうだ？

渠は小桶を前にするゐてただ考へた。そして、一々その申しわけの理由を附けた。弟も從兄弟も、見す見す事業の不成功を來たしたのは、最も不注意なのだ。死ぬくらゐの苦しみをして、實際的に目を覺ます方がいい。妻子には、家を左右する權利を與へてあるから、それだけの心配をすればいい。それ以上の心配は、當分、自分の關することではない。愛妾のお鳥も、こちらの難局をあれだけ詳しく

云つてやつてあるのに、同情の手紙一つもよこさないのは、不埒極まる。ひよツとすると、例の男にまたくツついてしまつたのかも知れない。

かういふことは、特にけふに限らず、この頃は、朝に夕に考へてゐることだ。そして、三たび湯に漬かると、矢ツ張り獨りで不安の念にたへなくなる。

義雄が湯から歸つて來ても、まだ友人は歸つてゐない。友人に會ふ前に、ちよツと別な知人の方を訪問して來ようか知らん、それとも、今少し待つて見ようかなどと、心が落ちつかないで、立つたりゐたりしてゐると、向ふから、相變らず猫背、下向き加減の友人の歸つて來るのが見えた。

姥車に澤山の林檎と末の男の子とを乘せ、友人はうへの女の子と共にそれを押して來る。

『有馬君』と、爐ばたから義雄は呼んだ。友人は有馬勇と云ふのである。

『おう、歸つて來たか』と、なつかしさうに勇は云つて、先づ一郎を車からおろしてやり、それから車を土間の片隅へ入れ、女の子に持つて來させた籠に林檎を移し、それを兩手に提げておもたさうに、

『そら、そら、そら、そら』と調子取りながら、一郎と共にあがつて來た。その樣子を見ると、義雄は、勇よりも早く四五名の子供を持つた經驗はありながら、自分は初めから獨身ものであるかの樣な考へで、勇のお父さんじみて來たのがおそろしく目に立ち、多少滑稽やら侮蔑の念が浮んだ。

『おぢさん、また來たの？』一郎は直ぐふざけるつもりで義雄の肩を叩いたので、

『ああ』とばかりあしらつたが、またと云はれたのが渠には痛く感じられた。

『そんなことをしたら、いけない、いけない！』勇は、義雄の子供嫌ひなのを知つてゐるので、一郎を引き放してから、爐ばたへ坐わり、ハンケチで汗を拭きながら、『いや、暫らく』と、その下向き加減の首を義雄の方へちよツとつき出す。ひどい近眼で、四五度の眼鏡をかけてゐる。それが渠を間の拔けてゐるやうに見えしめることがないではない。年は三つか四つしか違はないが、義雄の叔父さんと見るのが、義雄自身には丁度適當だと思はれた。

『六月の初めに會つたのだから、まア、ざツと三ヶ月ばかりであつた――この頃は夏期休暇中らしい、ね。』からしいねと云つたのが、義雄には自分ながら餘り冷淡な口調だと思へた。無論、教師生活などには今は全く同情がなくなつてゐるが、渠自身も昨年まで十餘年間は中學程度の英語教師であつた。ただ文學者として原稿生活に慣れて來るに從つて、鼻垂らし小僧同樣な學生を相手にしてゐたのが如何にも馬鹿々々しくなつて、不平やら、校長と衝突やらで、よしてしまつたに過ぎない。

もとはと云へば、矢張り教師根性を出して、自分等の俸給の上り方が遲いの、少いのとこぼし合ひ、土曜日の來るのを待ち兼ねたり、冬期休暇や夏期休業の近づくのを指折り數へたりしてゐた。

『ああ、まだ大分樂が出來る、ね。』勇は斯う輕い調子で答へて、がん首の根がつぶれた煙管に刻み煙

草をつめ初める。

ふたりの子供は、喰ひたさうな顏つきをして、籠の中の物をいじくつてゐる。

『その林檎はちいさくツて、青いぢやアないか』と、義雄が云ふと、

『なに、こいつア青くツても喰へるやつだ。』勇は生來の東京ッ子口調を出して、『この手は、もう、けふあすでおしまひだ。今にも雨が降りやア、熟んでしまつて、喰はれない。買ひ時だから行つて來たのだが、もう、遲過ぎたくらゐだ――こんなに澤山でも、安いのだよ。』

から云つて、勇がその値段を說明するのを聽くと、マオカに林檎の初荷が着した時に買つて見たのよりは十層倍も安いのに、義雄は驚いた。東京で、ジヤガ薯を買ふのと同じ樣な格だらう。北海道に來てから、所帶持ちの苦勞に親しんだ勇が、十餘丁の道の暑いのをこととをもしないで、姥車を押しながら往來したのは、もツともだと思はれた。

『そんなに安いものなら、僕も少し買つて置きたい、ね、食後に二つ三つづつ喰ふのに――』

『もう、遲い――これをやり給へ、澤山あるのだから――暫らく立つと、また捨て賣りの時期が來る。買ひに行くのはその時にし給へ、それまで君がゐることになるなら。』

『どうせ、僕、今も細君に話したことだが、暫らく御厄介になるよ、迷惑はかけないつもりだから。』

『そんな心配には及ばないが、君さへよければ、いつまででもゐて呉れ給へ――その代り、何のおかまひも出來ないのを承知して置いて貰はなけりやア――』

『かまつて貰つては却つて僕が困る――今の場合、僕は大道で乞食をしさへしなければいいのだ。』

大道で乞食！　これは、義雄自身には痛切な發想であつたが、勇には戲言と見えたのだらう、渠は不審らしく發想者の顏を見た。義雄はやわらかに微笑してゐるが、その微笑はアカダモの枝がかぶせたやわらかさで、幹には犯し難いほどの嚴粛な寂しみを感じてゐた。

『時に』と、勇はゆツたりと煙草の煙を吹きながら、『樺太の方はどうだ、ね？』

『今のところ、丸で失敗の體、さ。』から云つて、義雄は直ぐありのままをぶちまけてしまつた。氣のちいさい勇を心配させまいとして、渠は自分の身が何とか方のつくまで、中途半端な云ひ拔けをして置からかとも思つたが、それは心に不愉快でもあり、また面倒臭くもあると考へたし、且、細君には既に大體のことを語つてしまつた跡だといふことに氣が附いた。

細君にはただ手ツ取り早く義雄の生活費送金の望みある道筋をうなづかして置けばいいと思つたが、渠は、勇には、事業の經過と現狀とばかりでなく、來年の發展策として、小樽の漁業家と協同しようとする相談があることをもつけ加へた。

そこへ細君が裏口からあがつて來た。そして、

『一ちやん、歸つたの』と云ひながら、臺どころと茶の間との敷居際に立つた。
『お母ちやん、林檎買つて來た。』
『むいてお呉れ。』から云つて、子供ふたりは直ぐ母親の左右にすがり附いて、『早く、早く』と云はないばかりに、かの女をゆすつてゐる。義雄は之を見て、あまい兩親にあまやかされて育つ子等を憎いほど厭に思つた。小兒を餓鬼と云ふのも、喰ひ物にかけては、最も適切な隱喩であると。
『おい、網、田村君にも林檎をむいてあげろ』と、勇はその細君の方へ顏をふりむける。
『はい』と答へて、お網は薄刃庖丁を持つて來て、水仕事に勞れたと云ふ樣子で、ペツたり爐ばたに坐わり、籠の中のをむき初める。子供も亦そのまはりに坐わり込んで、皮のむけて行くのを一つづつ見つめてゐる。

『その漁業家といふのがうまく金を出して呉れればいいが、ねえ。』勇は肩ごと首をあげて云つた。首をあげると同時に肩もあがるのが、この人の癖だ。
『そりやア、まだちやんと契約したわけではないから』と、義雄は引き受けて、『しツかりとは云はれないが、然し僕の信ずるところでは、向ふが云ひ出したくらゐだから、出す氣でゐるに定つてる、さ。面も、近々會見することになるのだ。』

『どこの人です、の?』から、お綱が庖丁の手をやすめて聽いた。
『小樽の人で、樺太の鰊取り――』
『鰊取りなど、當てになりませんよ。』
『いや、さうでもない』と、勇は妻の言葉を受けた。『あいつ等だツて、見込みがあるから申し込んで來たのだらう。まんざら利益があるか、ないか知らないで協同しようとは云ふまい。』
『そこ、さ』と、義雄は力を得て答へた。實際は、内心におぼつかないと思つてゐないでもなかつたのだ。『向ふも靠れかかつて來るのをしほに、僕の方でも靠れかかつて見るの、さ。當つて碎けろだ。』
『そのつもりでゐさへすりやア、大した間違ひはなからう。』勇は義雄に對して自分の弟か生徒に云つて聽かせる樣な口調であつた。『然し、それで、若しその相談が成立しなかつたら、どうする? その點は考へてゐるか、ね?』
『その點は、君』と、義雄はちよツと云ひ樣に困つた。渠には、まだこれといふ思案が附いてゐないのだ。『まかり間違へば、東京へ歸るだけのこと、さ。然し、僕は眞實歸りたくない。』渠は多少訴へる樣な目つきを勇に向ける。
『どうして?』
『どうしても、かうしてもない――事業が持ち直る樣子なら、僕は例の、君にも話したお鳥をつれて、

再びあちらへ渡り、マオカで越年しながら、東京の或新聞に長篇の小說を書いて送りたいのだし――』

から云つて、渠はその目をそらした。そして、むき立ての林檎を取つて、口に入れたが、あぢはふ氣にならない。渠はお鳥の樣子があやしくなつてゐるのを話す必要なしと考へた。若しいよ／＼變心したのなら、直ぐ別な女を見付けようと決心してゐるからである。その書きたい長篇小說と云ふのも、渠がかの女と足かけ二年間一緒に暮したことが材料になつてゐるのだ。かの女をめかけ同樣にした爲め、渠は自分の家庭を殆ど全く棄ててしまつたし、棄てた家庭と屢々衝突したし、お鳥その者とも別れる會ふ、死ぬ生きるの悶着があつた。

財政がまた膨脹して收入の不足を度々感ずる樣になつてから、渠は自分の生々活動主義をその全人的な立脚地として、何をやつても、人間が人間の全心全力を盡して努力さへすればいいのだと考へ、報酬のすくない筆硯を投げうち、努力の報酬がずツと多いと思つた鑵詰事業に手を出した。それも、――殆ど首尾よく失敗の體だが、――一つには、お鳥ともツと自由な生活をして見たいと云ふのが原因であつた。云つて見れば、お鳥の爲めに失敗し、その失敗の爲めにお鳥に見限られたのかも知れない。渠もこの點だけは餘り殘念で友人に語り得ないのだが、渠はこの創作の外に、マオカで越年しさへすれば、なほ別な仕事をやる計畫を立ててあると明かした。

それは、鑵詰製造の副業として、仕上げ鑵の入れ箱並に鱒箱を來年の事業期に對し一手豫約し、その

箱を製造する目的で、この結氷期に、樺太の山林から木材を切り出すことだ。
　實地を知らない友人の空想と笑はれない爲め、渠はあちらで實見した材料の控へ帳と、相當な大工並に木挽に製調させた見積り書とを出して見せた。
『若しマオカ越年の計畫がぐれてしまつたとすりやア、その時は樺太の事業が全然失敗と定るわけだが、それにしても僕は暫く東京へ歸りたくない――と云ふのは、だ、東京を出る時隨分盛んな意氣込みで出て來たのに、僅か三ケ月や四ケ月で失敗し、自分の家は人に取られてしまひ、自分の戀人もどうなつたか』とまで云つて、義雄は口をつぐんだ。これはまだしやべる時でないと思つたからである。然しここまで口がすべつた以上は、何とかつづけなければならないと決心し、ただ曖昧な口調で『分らない』と、聲を下げ、直ぐまたあげて、しツかりした調子をよそひ、『ところへ、おめ〳〵と、手ぶらで歸れるものぢやアない。』
『ぢやア一文にもならなかつたのか？』
『さう、さ』と、義雄は友人の注意がお鳥のことに向はなかつたらしいのを見て、もとの通りに生氣づき、『やツとのことでここまで歸つて來ることが出來たのだ。あちらで、四、五、六の三ケ月間に、三千圓ばかりの品物を拵らへたが、マオカの問屋へ即賣した現金が全く原料、その他の實費にかかつ

てしまつた――無論、僕が燒け酒を飮んだ費用も、その中には這入つてゐたのだ。』
『つまらないぢやアないか？』
『つまるも、詰らないもないことだ――今僕はどの面をさげて東京の友人等に會はれよう？』
『友人も友人だらうが、細君が困つてやアしないか？』
『今も云つた通り、家を處分して、困らんだけの方針をつけるやうに命令してゐるのだから、それ以上に僕は責任がないのだ。』
『それは少し』と、お綱は、さツきから林檎をむいてゐたが、そばから、そばから子供に喰はれてしまうので、もう、よしたと云はないばかりに庖丁を投げ出して、口を出した、『奧さん達にひどいではございませんか？　家をお賣りになるにしても、あなたが御留守では女獨りでお困りでしようよ。』
『なアに、誰れか相談相手を見つけて來るでしよう。――僕は友人に會ふのはまだしもだが、女房や子供のつらを見るのが何よりの苦しみです、げじ〳〵を見る樣にいやで、いやでたまらないんだから。』
『あんなことを』と、お綱は義雄が眞面目にこんなことを云ふ顏を見て笑ひながら、『奧さんがお氣の毒です、ね。』
『もとはさうでもなかつたらしいが、ね』と、勇は八九年前の同僚時代のことを思ひ出した『一緒に京都や竹生島などへよく旅行や見物に出かけたりして、仲がよかつた樣であつたぢやアないか？』

『うん、あの時はまだ、妻が僕より年うへだといふ缺點がさほど現はれなかつたので、僕が家庭といふものにまだ絶望してゐなかつたのだらう。然し、奥さんの前ではあるが、日本の女は殆どすべて、誰れでも、男子に對する情愛的努力が足りない。早くませて婆々アじみてしまう癖に、つまり、精神に張りがないのだ。結婚してしまひさへすりやア、もう、安心して、娘の時の様な羞恥と身だしなみ――寧ろ、男子の心を籠絡牽制して置く手段と云ふ方がよからう――を怠り、「わたしはあなたの物です、どうとも勝手におしなさい！」――』

義雄はかう云ひながら、眞面目くさつて顎をつき出し、さも憎らしさうな口眞似をして見せた。

『ほ、ほ、ほ』と、お綱は之を見て吹き出すと、おとならしく無關心の様な、もッともらしい様な風をして聽いてゐる勇も、亦微笑する。

『情愛にかけては、丸で死人も同様な受働的、消極的、無努力的であつて、燃える戀の生命などは殆ど流れもしないし、動きもしない。愛すべき女としての活氣は全く失せてしまう。それから見ると、盛りのついた猫のあわて過ぎて板壁からころげ落ちる方が、まだしも活氣がある。』

有馬夫婦は聲をあげて笑つた。義雄は調子に乗つてなほ言葉をつづけた、

『だから、女が直きに所帶じみて來て、まだそんなお年でもないのに、色氣といふものがなくなつて

しまひ、丸で灰色の肉塊が出來る。そして、犬か猫の樣に跡から、跡から子供を產んで、それを厭だとも思はず、背めずるばかりにして、愛し育てるざまと云つたら、ない。丸で畜生も同樣だ。』
夫婦は互ひに顏を見合はして苦笑したが、話し手はなかなかそれくらゐで話をとめなかつた
『さう云ふことを云ふと、女は直ぐ辯解して、子供を可愛がるのは當前のことで、何も恥ぢることはないと云ふが、それは餘裕のない畜生であるからである。最も貧困なものが人の軒に立つて物乞ひするを恥ぢないと同じ根性だ。自分の面目を忘れてしまう樣に、子供の爲めに亭主の存在を無視するのだ。』
『では、丸で』と、お綱は女の味方をして、『男といふものは自分が產ました子供の爲めに燒き餠を燒くのです、ね。』
『如何にも、さう云はれりやア さうかも知れません。』義雄はなほ眞實に、『母がそのつれ添ひを無視してまで子供の愛におぼれるのを、父たるものは平氣で見てゐるに忍びられません。女の情愛が男を去つて、他のもの——それが自分等の子供であらうが、またはよその叔父さんであらうが、大した違ひはない——に移つてゐるのを知りながら、その女の跡をおめおめと追つて行く男がありましようか？』
『然しそれは』と、お綱は躍起となつて、『世間一般の風習で、仕方がないでは御座いませんか？　他人なら知らず、自分の子供を可愛がるのは自分の所天を愛するも同じです、わ。』
『おんなじと思ふ男があれば、間違ひです——馬鹿か意久地なしのことでしよう。自分以外のものの

爲めに謀叛されたのです。女は謀叛人です。』

『それはあんまり角の立つ云ひ方です、わ。』お綱はいよ〳〵躍起となり、顏までがほてつて來た樣だ。『そんなことをおツしやるお方なら、わたし、あなたをおそろしくなりますよ。謀叛人なんかツて、女の心はそんなものとは反對です。子寶とも云ふ子供ですもの、それを夫婦が可愛がつて育てるのに不都合は御座いますまい。』

『奧さん』と云つて、義雄は身づから少し反省した。そして、わざと微笑を漏らしながら、『間違つて貰つては困りますよ、これは根本のところ僕が僕の妻に對する不平であつて、決してあなたがたに關して云つてるのぢやアないのですから――』

『それはわたしにも分つてをりますが、あなたがあんまり女のことを惡くお云ひなさるものですから、わたしも自然辯解したくなるのですもの。』お綱も微笑しながら優しく云つたが、その樣子にはどことなく惡憎の色が見えた。

で、義雄ば、お綱の心になほ理解を與へて置く必要があると思ひ、言葉をつづけ、『たとへば、あなたがたの家庭に就て云つて見ても』と云ひかけると、

『わたしのうちのことは』と、お綱は笑ひながらさえぎつて、『どうでもよう御座んすから――』

『なアに、奥さん、まア、お聽きなさい』と、義雄は平手で空を打ち、『別に惡く云ふのではないのですから。――若しあなたがいつも所帶じみた風ばかりしてくすんでゐるとすればです、――實着な有馬君だからそんなことも滅多にあるまいが、――どうしても、たまには充分色氣のある樣子をして自分に向つて貰ひたいと思ふことがないではなからう。』

『……　……』勇はにこ〳〵ツとして、煙草を煙管につめかける。それが、もツともだが、さう適切に義雄から自分の心をうがたれたくはないと云ふ樣子であつた。お綱もにこついて、所天の顏を瞥見したが、

『そりやア無理です、わ。』恨めしい樣子をしたかの女の心持ちを義雄は分らないでは無かつた。かの女は如何に家兄の失敗の爲めに自分の家が零落してからかたづいて來たとは云へ、この七八年を、同じ北海道に於て、こんなみじめな狀態で送るつもりではなかつた。結婚さへ承諾すれば、望み通り東京の學校へ轉任運動をして、やがては都の生活をさせて貰ふ條件であつたのが、一向その條件が行はれないで日を送り、年を送るうちに、子供は一人も二人も出來たけれども、所天の俸給はその割合ひにはあがつて行かない。その上、相變らずこの寒避地の好かない生活をつゞけてゐるのが、かの女には一生の過ちの如く見えて、自分の身を餘り安賣りしたのだと思はれてならないが、日本婦人の常套思想なる運命主義からして、何事も運命だとあきらめてゐると云ふことは、この前に、かの女は義雄

と勇との前で語つたところだ。
『奥さんも亦考へて御覧なさい、娘であつた時の様な色目を今使へますか?』と、から義雄につッ込まれた時は、然しかの女もむッとして、
『あなたのお好きな藝者ではありませんし、子供のある身で、さう、いつまでも、だらしなくもしてをられません。』輕蔑した様な、然し恨みのある様な、義雄には方々の家庭に於てしば〳〵出くわして親しみのある口調で、お綱は返事した。
『田村君の意見はなか〳〵正直で、眞實なところがあつて』と、勇は下向き加減の首を動かしながら、『僕等もそこまで行きたいのだが、――處世上だ、ね、――處世上さう卒直にやつてゐられないのだ。第一、生活問題の壓迫を感ずるから、ね。』
『さうだ、それも大問題であるから、ねえ。』義雄もそれ以上は云ふまいと、口をつぐむ。
『何はともあれだ、ね、お綱』と、勇は細君の機嫌を取る調子で云つた、『田村君に一杯あげる支度をしな。』

三

林檎で腹の張つた子供ふたりは、廣い通りの眞ン中の草の上で遊んでゐる。その上へ、內地人には、

異様な高樹(たかき)が二三本路傍に生えてゐる間から、ゆふぐれの色が攻め寄せて來るのが見える。涼しい風が玄關からも、裏庭からも吹き通る。

勇が酒と牛肉とを買ひに出て行くので、義雄も一緒に出た。今一人の友人――さう遠くない――のところへちよツと顔を出して來るつもりなのだ。

『島田君には、あれツ切り會はない』と、勇は道々義雄に別な友人のことを話した。あれツ切りとは、義雄が以前當地に一晩とまつた時、三人で大黑座へ芝居見物に行き、二人はそこで勇に別れて、遊廓へまぐれ込んだ時のことだ。『どうも、新聞記者肌の人には僕等は交際したくない、自分の現地位を危くする様なおそれがあるから、ね。』

『教師などは、それだから、僕等もいやになつたの、さ』と、義雄は半ば勇に同情すると同時に、北海道の新聞記者の多くがまだ專ら昔の萬朝記者じみたところがあるのを思ひ出す。樺太では、記者と云へば、殆ど全く北海道の惡習慣を帶びて來たものであるから、新たに記者を傭ふにも北海道から採用するのを嫌ひ、或新聞などは直接に東京のものを世話して貰ひたいと、義雄にわざ〳〵賴み込んで來たこともある。

島田といふ友人はそんな惡習に染まつたことがあるか、どうか知らないが、勇がそれを、國語學上もとの同窓であるに拘らず、敬して遠ざけてゐるのは、よく渠自身の性質をあらはしてゐると、義雄

は思つた。

義雄は途中から別れたが、再び歸つて見ると、勇は待つてゐた。

『ゐたか、ね』と云ふ勇の問ひに答へて、

『島田君はゐなかつたから、あす午前に來ると云ひ置いて來た』と、渠はどツかり、玄關の立て寄せた障子に近い爐ばたへ座を占める。

直ぐちやぶ臺の上に御馳走が並べられて出た。勇と義雄との間にちいさい焜爐が据ゑられ、牛鍋がかかつた。勇はその上にあぶら身をのせてじうく云はせながら、

『この頃肉屋の競爭で肉が非常に安いのだ。かういふものでなけりやア、僕のうちでは御馳走に出來ない。味はどこも同じことだらうが、けふは充分やつてくれ給へ。』かう云つて、酒の毒見をしてから、渠は義雄の猪口にも酒をついだ。

鍋には、肉のあしらひに、玉ねぎが這入る、カイベツ（キヤベツの變名だ）が這入る。かういふ物も、林檎と同樣、この北海道が本場だと思へば、義雄には特に珍らしく感じられた。樺太の三ケ月とはまた違つた生活がけふから初まるので、何となく愉快な點もないではない。

三ケ月前の一日は事業の話ばかりで、懷舊談などは殆どなかつたが、こよひは義雄もなかく呑氣にかまへてゐるので、古いことが二人の談話にのぼつた。

東京の或耶蘇教學校で同級にゐた時、西洋人の教師を夜に乘じてなぐり付けたこと、本邦人の教師が意久地なしなので排斥運動をしたこと。義雄が經濟學をやり出せば、勇もその專門學校に這入つて來たこと。某縣に於ける時代に、二人が共謀して校長排斥を企ててゐるといふ寃罪を被つたこと。などを語つた間に、燗德利は二三度自在鍵でつるして鐵瓶を出たり、這入つたりする。

『もう、あかりがつくのか？』義雄はお綱がランプを運んで來た時に云つた。そして、樺太はこの頃九時でなければ暗くならない、そして夜は午前二時に明けてしまうことを語つた。

『大相暮し易いところです、ね。』このお綱の言葉を引き受けて、勇は不思議さうにかの女に聽いた、

『どうして？――寒いところは厭だ、厭だと不斷云つてゐるのに？』

『石油が入らないから――』

『馬鹿な』と、勇も妻の顏につり込まれて笑つた。

『その上、澤山仕事が出來るでしよう』と、かの女はつけ加へた。

『ところが』と、義雄も笑ひながら、『若し飯を四度喰はなければならなかつたらどうします？』

『まさか』と、お綱は吹き出した。

義雄は切つてある爐が初めから珍らしいのだ。そして、ぴか／＼した鐵の灰入れを包んでゐる小石がいつも奇麗になつてゐるのは、時々取り出して磨くのだといふ說明も聽いた。渠はひよツとすると、

樺太越年の代りに、北海道の冬を過すかも知れないと考へてゐるので、札幌の家の建て方をも注意した。

窓はすべてがらす障子でカーテンを懸けてあり、椽がはの戸もがらす戸になつてゐるのは分つたが、冬籠りの時はどこを居間にするのだと聽くと、勇は釣りランプをはづし、それを手に持つて、次ぎの間に案內した。そして、渠の勉强室になつてゐる六疊の室を見せ、

『ストーヴをこの眞ン中に焚いて、煙りをここから出すのだ』と、煙り出しがまがつてそとへ出る角石の穴をゆび指した。

『かういふ住ひで色女と一緒に暮して見るのも面白からうぢやアないか？』かう義雄は語つて、もとの座につく。

『僕等は君の樣な呑氣なことは云つてゐられないのだ。』勇は渠に猪口を指しながら、『暮して見たいのならいいが、暮さなければならないのだ。』

かう云はれた時、義雄は勇の書齋に書物が丸でないのをあはれみ、如何にくすんでゐるとしても、讀書ぐらゐはもツとやればいいのにと思つた。そして、自分の東京に於ける書棚の澤山の書册が、今回は、どうなるだらう？　愛婦に次いで、書册――殊にわざ〳〵外國から取り寄せた洋書――は自分

の大切にしてゐるものだ。それらが自分の家と共に、もう抵當物になつただらうか、それともまた全く人手に渡つてしまつただらうか？　そんなことを考へると、自分の身を亦書棚の本の如く別々に碎かれてしまう樣な氣になる。

義雄は猪口を手にして、僅かに氣を取り直した。そして、どうしても、この冬は樺太か、北海道かで、どこかの女と共に越年しようといふことを考へながら、

『ストーヴを焚き出すと、部屋はさぞ穢くなるだらう、ね』と尋ねる。

『きたないどころではない』と、勇は答へた。『みんないじけてしまうから、掃除などは滅多にしないで、ストーヴのそばにまた炬燵をして、引ツ込んでばかりゐる、さ。』

『色女と暮しながら、原稿を書いたり、讀書したりするにやアいい、ね。』

『君の嫌ひな子供ばかり出來て困るだらうよ。』

『そりやア、また別なこと、さ。』

『時に、君のはどうしてゐるんだ？』勇は義雄にお鳥のことを聽き出した。

『實は、君、さツき、ちよツと口をすべらしたから、もう隱してゐるまでもないが――』

義雄は猪口を置きながら、『どりしてゐるか分らないのだ。僕が東京を出る時は二ケ月ばかりで歸るつもりであつたから、その間だけの生活費を渡して、寫眞學校に通はせることにして置いたが』と、

先づ、その女に寫眞術を習はせて獨立の生活が出來るだけにしてやるつもりであつたことを語つた。
ところが、あちらへ行つてから、料理屋や藝者屋へは一時の信用で遊びまはることが出來たが、現金と云つたら、十圓とまとまつたかねが出來ない爲め、女への支送りが六ケしかつた。催促が來る、申しわけをやる。女の催促が恨みに變じ、罵倒に變じ、義雄の申しわけが訴へに轉じ、絶望に轉じた。かういふことなどを語つて、
『この頃では、女からの返事がない、多分一度關係した男にまたくツついてゐるか、別な男を見つけたのだらう』といふ想像を加へた。
そして、この關係した男といふのは、義雄の友人加集泰助であつて、義雄が一度女と手を切らうとした時、中に這入つて貰つたものだ。その關係が出來た後、義雄の未練から再び愛の撚りがかかる時女は義雄に申しわけがなかつたと云ふ意味で、アヒサンを服して死にかけた。それは義雄の出發間ぎはのことだ。
それでその友人と女との關係は絶えた筈だ。そして、義雄は女の豫後を一週間ほど獨りで見てゐた上、女が平時のからだ通りよくなつたのを見定めてから出發したこと、などをも語つた。
『そんな女はゐない方が奥さんの爲めによいでは御座いませんか』と、お綱は云ふ。

『つまり、女といふ奴ア薄情なもの、さ』と、勇は斷定してしまう。

然し義雄が醉つてゐながらも目の前にあり〳〵と思ひ浮べられるのは、出發の際お鳥が上野まで見送つて來て、いよ〳〵汽車に乘り込むといふ場合に、プラトフォムで、人々とかけ隔つてゐるすきを見て、

『わたしは、もう、一生あんたばかりを愛します。親類もなく、友達もないと同樣寂しく待つてゐますから、早く歸つて來て頂戴、ね』と、その聲は顫へてゐながらも、いつにないしツかりした、はツきりした、積極的に情の籠つた言葉を發したことだ。

それから、また自分が二等客車の窓から、これが暫くの別れだといふ意味で、手をさし出すと、お鳥はじろ〳〵とあたりを見まわしてからまたその手をつき出し、義雄の思ふ存分に握らせたことを思ひ出す。

そんなことまでは義雄も語らなかつたが、

『あれまで熱心になつてゐたものが、僕の云つてやつた難局を少しでも辛抱し切れないとは不埒極まる、さ』と、渠は勇に猪口を勸めながら云ふ。

『然し』と、勇はその猪口を受けながら、『君が女を持たなければならないとすりやア、この難局を切り拔けてからの方が、つまり、いいぢやアないか？　難局を控へてゐながら、女に支送りしようなど

と考へるのが贅澤、さ。』

『そりやア、僕もさう決心してゐる、さ。ただ僕がまだ未練があるのだ。――考へると、可愛さうでもある。』義雄は風呂敷包みの中からお鳥のよこした手紙の一と束を取り出した。

六月二日附のはお鳥が義雄に上野で別れた日の夜認めたもので、手を握られた時の嬉しかつたこと、恥かしかつたこと、汽車が出る時はその跡を飛んで行きたかつたこと、悲しさにその場へ倒れかかつたことなどが書いてある。それと同じ様な感情で書いたのが、今一つ、一日置いて來てゐる。

その次ぎのは、十日間ほど經つてから書いたもので、樺太安着を本妻の方へは電報で知らせながら、自分へは手紙でよこしたといふ恨み言がある。これは、義雄には輕重の意味があつたのではなく、弟の病氣が餘り惡い狀態であつたので、その入院を電報で知らせるついでに、安着をも書き加へたのであつた。その辯解は手紙で書いてやれば濟むことと思つたが、その時手紙の返事では間に合ふまいと思はれることが書いてある。

それは、關係がなくなつた筈の男が、義雄の留守をいいしほにして、お鳥の住んでゐる借り二階へおほ手を振つて這入り込まうとすることだ。最初などは、お鳥の朝まだ起きあがらない時やつて來て、ひらきのうち錠――義雄が出發前につけた――を押し切つて這入つたりしたので、下の人々に今度から留守だと云つて吳れろと賴んだと書いてあるが、どうも義雄の安心出來ないことがあつた。

外でもない、かの女自身は義雄の手紙を受け取るまで頻りに渠の身を心配してゐたのに、本妻の方へは電報が行つてゐたのを知つた時は、渠に人情のないのを知り、『自分の身を抱いて泣きました』とある。電報のことをお鳥に知らせるのは、友人しかない。して見ると、その友人がかの女の義雄に對する愛を再び奪ふ爲め、輪に輪をかけて泣かせたのだと思つた。

この手紙の事情を解し得た時、義雄はマオカの旅館でむか〳〵ツとのぼせあがり、友人並にお鳥を咒つた。そして、直ぐかの女へ當て『カシウノシラヌヤドヘウツレ』といふ電報を打ち、またその意味をこま〴〵と認めた手紙を出した。

再び取り返しのつかないことをしては、もう、二度の勘辨は出來ないと思つたからである。

その次ぎの手紙は、義雄の電報並に手紙に對するかの女の返事である。宿などは轉じなくても、自分の心さへしツかりしてゐれば、加集の樣な奴（と、實際書いてある）にたとへ來たとてだまされはしない。それに、この頃は來ないし、自分も元の自分とは違つて、心を確かにしてゐる。御命令通り轉宿しようとしてもかねがないから、それを何より早く送つて吳れろとある。

別れの際、受け取つたのは二ケ月分の生活費と寫眞學校の月謝とだが、學校では別に種板や藥材の代金を拂はなければならない。その上、義雄に移された病氣（移した渠の方が却つて早く直つた）がま

たひどくなり、且、例年の脚氣が出たので、兩方の爲めに氣分も惡く、步行にも不自由してゐるから、醫師にも大分拂ひをした。そして、また、『蚊帳を借りることも儉約してをりますから、毎晩蚊にかまれて眠られません』ともある。

義雄はこの句を思ひ出して、お鳥の特別に色の白い肌を思ひ浮べた。

それに對して、義雄はたツた一圓を封じて送つてやつた切りだ。無論、やれたらやるが、やれなかつたのだ。そして、その封書には、某新聞社へ原稿を送つてあるから、そこから稿料をいくら〳〵取れ。そして、樺太へ來るなら來い、醫師もあれば、寫眞屋もあるからと、旅行途中の手順や心がけなども書き入れた。

それに對するかの女の恨み言が、そのまた次ぎの手紙である。

『難局だ、難局だと云つてよこしても、あなたが露領までも旅行出來る餘裕があるなら、わたしの方へも送つて呉れるくらゐなものはありましよう。あなたはわたしに加集と關係があるの、なんのと申されますが、あなたはそツちでまた浮氣をしてゐるのでしよう』とある。そして、樺太へ行くにはなほ更らかねが入る。自分は今持つてゐた不斷着まで質に入れ、器物類を賣つて、ゐ喰ひをしながら、人仕事を探したり、勤めの口の世話を賴んで見たりしてゐる。然しわざ〳〵新聞社などへかねを取りに行つて、若し渡されなかつたら恥ぢをかくばかりだ。今度こそ送金がなかつたら、どうせ一度死に

かけた身、自分はどうなるか知れない。などと書いてある。

かういふ手紙はすべて、義雄には、日附けさへ見れば直ぐその内容も分るので、一つ〳〵を束ねから無言で順序通りにめくり取つて行つたが、渠はその次ぎのを取つて、封筒から拔き出した。そして、鳥渡開いて見たが、またもとの通りに納めた。

餘り罵倒罵言に滿ちてゐる手紙であるからだ。

義雄は、勇にも話した通り、樺太で越年して、木材を切り出したり、創作をしたりするもくろみがあつたので、ちいさなロスケ小屋を一軒手に入れた。そこでお鳥と一緒に住む氣になり、かの女にどうしても來い、かねは新聞社のを取つてと云つてやつた。

すると、かの女の返事に、渡すか、どうか分りもしないかねを當てにして、樺太へ來いとは氣違ひの云ふことだ。その上、自分を可愛いと思ふなら、早く歸つて來い、樺太などへ行くのはいやだ。お前の嬶アも氣違ひの樣になつてゐるさうだが、お前もそれになつたのではないか？　もう、何も云ひたくない。お前が出發前に、事業費のうちに用立てた衣類六點を――亡き母の形見であるから――そツくり、早く返して呉れさへすればいい。そのかねを直ぐ送つてよこせとあるのだ。

これに對しては、義雄も非常に怒つた。もう、勝手にするがいい。どうせこちらの命令通り轉宿も

せず、稿料も取りに行かないなら、加集でないにしろ、また別な男にくツついてゐると見られても止むを得まいと云ふことを、最後の通知と見て、云ひ送つた。

その次ぎに、七月二十五日出のがある。それが樺太へ着した最後のものだ。

『これが、君』と、義雄はそれを勇の前に操り廣げ、『僕として殆ど絶緣のつもりで出した手紙に對する返事だ』と說明して、讀み初める。

『七月十五日の御手紙拜見いたしました。御立腹の段は御もツとものことと存じます。わたしの方も餘りひどいことを申しあげたと今更ら氣の毒に思ひます。それも餘り暮しのことを心配して、どうしよう、かうしようと、のぼせたからでしよう。

『然し昨日新聞社から原稿料を受け取りました。この頃はさツぱり加集はやつて來ませんから、宿を變へる必要はないと思ひますが、ふだんの着がへまで質に入れて、着の身着のままですから、わたしが入れた質物を出してしまひました。またお米なども買ひました。

『この頃は、寫眞の方も進んで來ましたから、時々寫生に出かけます。それもつき合ひで仕かたがありません。その度每に、女だから同じ衣物も着てゐられません。衣物を出したり、お米を買つてしまつたら、もう・殘りは僅かになりました。成るべく儉約するつもりで、お湯にもめつたに行かず、おかずも買はないで濟ます樣にしてをります。』

ここまで讀んだ時、渠はかの女の或部分の臭いにほひを思ひ浮べた。手紙はここからまた訴へになつてゐる。

『わたしがこれほどにしてゐるのをあなたは可愛さうとはおぼしめしませぬか。わたしはあなたの爲めに兄弟とは文通を絶ち、友達とは交際が出來ない身になつてをります。兩親がないわたしは、あなた獨りが賴りです。それに、あなたには別に本妻があつて、わたしは妾同樣なので御座います。世の中からはすたれ物にされてをります。わたしはいつまでも蔭に育つ草ではありませんか』だが、かの字を略して、疑問點を字のつもりで入れてあると、義雄は笑つた。

『あなたも男でしよう、そして小說を書くだけ人情を解してをられるのなら、せめてこのみなし子同前な蔭草をあはれと思つて、身なりだけでも飾らして下さい。今では、化粧品一つ買ふおかねがないのです。』と、ここまで義雄は讀んで來て、ちよツと手紙を置き、卷煙草に火をつけて、二十二歲の女のいふこととしては、實に正直なところではないかといふことを勇に說明し、再び讀みつづける。

『それですから、この手紙着次第、まとめたおかねを送つて下さい。さうでなければ、越年など云はないで、早く東京へ歸つて來て下さい。お顏が見たくて見たくてたまりません。

『わたしは勤め口か都合のよい奉公口かを探してをりますが、いつかふ見付かりません。うか〳〵し

てゐると、學校へも行けなくなり、毎日のくらしも立たなくなります。話し相手も、相談相手もないからだで、廣い東京にどうしたらよいか途方にくれましよう。どうぞおかねを送つて下さい。一生のお願ひですから、わたしに心配させずに、早く送つて下さい。賴みますよ、あなた、賴みますよ。さよなら。七月二十五日、鳥より。

『戀しき〳〵義雄さま』の艶ツぽい宛名だけは、義雄もそれを少し遠慮して、微笑にまぎらして讀みとめ、煙草の吸ひ殘りを火にほうり込んだ上、直ぐその手紙を卷き納め、ほかのと一と束ねにして、元の通り風呂敷に包んだ。

『おのろけを聽かされて。默つてゐるのもつまらんです、わ』お綱が先づ子供を寢かしつけた室から出て來た。

『實際、おごる値打ちがある、ね。』勇も猪口を取りながら云ふ。

『牛肉ぐらゐでは承知しませんよ。』

『豐平館(ほうへいくわん)の晩餐はどうしても、ね』と、勇はお綱と互に目と目を見合はせて、多少冷笑の氣味を見せた。

然し義雄は、暫らく、ただ寂しい微笑を以つて返事に換へてゐる。

『僕ア聽きたいんだ』と、やがて渠は口を開き、『全體、あなたがたはこの手紙でどう思ひます?』

『どう思ふとは？』

『女に就いて、さ――？』

『そりやア、あなた』と、お綱が引き取つて、『とても』と北海道流の副詞で力づけ、『お氣の毒なお方だとお察し申します、わ。』

『君が棄てるのも可愛さうだが』と、勇は猪口を取つてまた義雄にさし、お綱に酌をまかせながら、『一緒になつてゐるのも亦可愛さうだよ。』

『ところが』と、義雄は受けた猪口を下に置いて、『どツちにしても、可愛さうでも何でもないのだ。――全體、年の行かない割合に、喰へない女だ。覺悟をしてかかれば、アヒサンの樣な毒藥を不斷隱して用意してゐたくらゐだから、どんなことでも平氣でやれる奴、さ。今の手紙も、全く信じて讀めば、少しも疑はれる樣なところがない代り、ちよツとでも皮肉に見りやア、後ろにあやつり手がゐるとも見える。少しでも金を取つて逃げようといふ手段だらう――加集といふ男がまだ關係してゐるとすりやア、口錢取りのやり操り手、話し上手な策略家だから、ねえ。』

『逃げてしまへば、もう、責任はその男に歸するのだから、なほ更ら結構ぢやアないか？』勇が思ひ切れと云はないばかりに云ふのを、義雄は心で情けなく思ひながら、――否、寧ろ自分の心を解して吳れるものはこの家にもゐないと觀念しながら、――

『そりやア、それツ切り、いくら手紙で事情を云つてやつても、向ふからの便りがないのだから、僕もさツぱりして、思ひ殘りがなくなつたわけだが、どうせ僕には女が入用だから、矢ツ張り氣心の分つたものをつゞけてゐる方がいいから、ねえ。』
『ですから、奥さんのところへ御歸りになつたら――』と、お綱が云ふ。
『いや、女房のところへは、失敗を回復した後にも歸りません。』
かう云ふ話のうちに酒は終つて、飯になつた。
義雄は肉にカイベツのあしらひを、北海道の涼しい夜風と同樣、初めての如く珍らしく思つたと同時に、香の物代りに出てゐたカイベツ並に枝豆の糠味噌漬けを甘いと感じた。

## 四

翌朝、義雄の有馬の家で目を覺ました時は、勇もお綱も食事を初めるのを待つてゐた。
渠は手早く顏を洗ひ、渠等と共に食膳についた。味噌汁の中身がまたカイベツである。渠はこのカイベツと枝豆の漬け物とを味はつて、それらを渠の北海道生活に於ける最初の知己であるかの如く思つた。
渠は食後勇を伴つて、きのふの云ひ置き通り、島田の家を訪問した。島田の家は有馬の家と同じ通

り條の六七丁目這つたところにあり、札幌を一直線に南北に仕切る水道の一つ手前の橫丁だ。柳やイタヤもみぢなどが青い葉を飾つて路傍に立ち並んでゐるその角は、ちいさい個人的な鐵工場で、その筋向ふに、『北海實業雜誌社』といふおほきな看板が出してあつて、『島田氷峰』といふ表札が打つてあるのがそれである。島田は名を定吉といふが、氷峰の雅號を以つて諸方の新聞社をまわつてゐたので、その雅號の方が廣く北海道人士に知られてゐる。

渠はもと東京に於ける某歌人の門弟で、十七八歲の時、既に出藍のほまれがあつた。且、その當時は、石部金吉の名で通つてゐるだけ、同門婦人の間に評判がよく、その一人の如きは、渠が北海道の故鄕に歸つたのを追ツかけて來て、慇懃を通じようとしたが、渠にはね附けられてしまつた。その後滿洲に於て一つの邦字新聞が出來ようとする時、その記者として出發しかけたが、突然それを斷念したのは、その一外交官の細君が自分を追ツかけて來たその女であるといふことを聽いたからである。

渠は、義雄に三ケ月前に初めて直接に會つた時、以上のことを誇りがに語つたのだ。然し、渠が歌よみとしての努力が薄らぎ、新聞記者としての生活に深入りするに從ひ、その性格は段々變化して行つたのであるとは、義雄も想像出來た。氷峰は今ではどの新聞にも關係はないが、いろんな新聞記者に後援をさせて、一つの實業雜誌を出さうとしてゐる。

渠の話に據ると、渠は人に信用される年齡の來るを待つて、北海道の政治界にうつて出たいのであ

る、それに思ひ附いた一昨年から昨年の後半にかけて、渠は歌よみは勿論、新聞記者をもやめて、東京に於ける或私立大學の政治科へ入學してゐたが、その時期の過半は一種の花柳病の爲めに入院してゐた。そして、それが直り、病院を退くと同時に、東京の諸實業雜誌に似た樣なものを發刊するもくろみが立つたので、その準備に取りかかる爲め歸花した。

然し徒手空拳を以つては、その主意に贊成して吳れるものはあつても、なかなか資本を出して吳れるものがない。半歲ばかり札幌に於て流浪してゐるうち、生活上の困難がつみ重つて來たので、止むを得ず、一時の間に合はせに、再び新聞記者となり、道中の或方面へ出かける途中で、兄のゐる山へ立ち寄つた。そこで、話が一轉化した。

渠の兄は某炭山の役員である。彼は一番末ツ子で、兄は一番うへの總領だから、年齡に於て親と子ほど違つてゐる。而も渠はこの兄の非常な贅澤な家で小學時代を送り、また中學時代の學費も世話になつた。今はさういふ地位にはゐないが、そこへ、丁度、もと兄の世話になつた子分で、大分羽振りがよくなつてゐる受負師川崎藤五郎といふのがやつて來て、渠氷峰を引きとめ、

『新聞記者の樣なきたない商賣などはよして、おれが資本を出してやるから、お前の考へ通りやつて見い』と云ふことになつた。

何でも、一時に四五千圓出費するのだとは、義雄も氷峰から聽いてゐた。

義雄が島田の玄關のがらす戸をあけたてするのは、きのふのを加へて、けふで三度目である。最初、渠が氷峰と共にここから出て芝居に行き、薄野(すゝきの)に行つた時は、翌朝早く、汽車時間の都合上、ここへは立ち寄らないで、何とか樓の赤い、あツたかい蒲團から、直ぐ停車場へ車で驅けつけたが、氷峰はその跡からまた追ツかけて來て、寢ぼけたつらをして、義雄の出かかつてゐる汽車の窓のそとに立つたことを渠はひそかに思ひ出した。

氷峰はゐなかつたが、ちよツと寫眞版屋へ行つたのだから、待つてゐて吳れろといふ云ひ殘しがあつたので、義雄等はあがり込んだ。大分準備がととのつて行くものと見え、書生兼用らしい寫字生もゐるし、編輯補助、會計、廣告取りなどらしい人々も數名ゐる。そのうちには、主筆なる氷峰よりずツと年うへらしい老人もある。書生が主人を呼びに出た跡で、他のものらも亦それ〴〵用達しに出て行つた。

その跡で、義雄等は狹い家の樣子をかへり見ると、玄關に隣つたおもての室が雇ひ人らの事務室で、それにつづく奧の一と間が主筆の編輯室らしい。社とは云ふものの、まだ不整頓の爲め、どこかの書生雜誌の編輯所と大して變らない。然し、『購讀者名簿』、『原稿受入帳』、『廣告控帳』などの、既に出來てつるさがつてゐるのが見える。原稿用紙も澤山用意してある樣子だし、雜誌へ入れる寫眞銅版も大小七八組は主筆の机の上に積み重ねられてある。

女中か家族のものか知らないが、前には一人の老婆がゐたのに、今回は二十一二歳の色は白い、然し田舍じみた樣子の女が、横手の茶の間から、茶を運んで來た。

義雄等は椽がはに出て、狹い裏庭から吹いて來る風に當つて、涼んでゐる。以前白い花を一面に咲き亂してゐたクロバは刈り取られて跡かたもないが、その代り、脊の低い芙蓉には白と赤とのつぼみを含んでゐ、その根にあやめの花が落ちて葉ばかりのや、蝦夷菊の咲いてゐるのがある。

暫くすると、書生が歸つて來る。つゞいて、氷峰が單衣一つのへこ帶、握りぎんたまで、ぬツと這入つて來る。

『やア、田村君』と云つて坐わつて、それでも渠は四角張つたお辭儀をして、『昨日お歸へりでしたと――あとからの御返事は拜見いたしました。』

義雄は、何よりも先きに、その返事以前にハガキが屆いたか、どうかを質問した。それと同時に勇に出したハガキが屆いてゐないからである。そして、氷峰へも屆いてゐないのを聽き知つた時、渠は自分とお鳥との關係にまだ望みがあるのかも知れないと思つた。蓋し二人の間にも、往復封書の紛失もしくは不着したのがある爲め、意志の疏通を缺いてゐるのだらうかとも考へられる餘地が出來たからである。

『樺太郵便の不着が多いのは實に困る』と、義雄は眞底から不平さうに云つたが、その不平の最も深

い意味は、無論、他の二人には分らなかつたのである。

『それはさうと、御出發の際は』と、氷峰は義雄に向ひ、『實に失敬しました。つい、ああ云ふところでしたから』と、笑ひながら、『寢すごしまして、――僕が顏も洗らはないでステーションへ驅けつけたので、漸くお見送りが出來たのでした。』

『いや、僕こそ――』義雄も丁寧に、『いろんな御厄介になつたのだ。然し』と、直ぐ碎けて、『あれから用意はつづけてゐて、まだ雜誌は出來ないのか？』

『うん、まだ――』氷峰も隔てをゆるめて、『九月一日に初號を出すつもりであつたのが、多少後れるかも知れん。』

義雄と氷峰とは、文學上では、數年間手紙の上の友人であつたが、相會ふのはけふが二度目だ。後者が前者に向ふ態度には多少文學上の先輩に向ふといふ遠慮がないでもないが、前者は今詩と評論と小說とを殆ど全く鑵詰事業に換へたかの如くなつた跡であるし、後者も亦𤣥に歌よみと云はれるのを避けて、實業的方面に手を出しかけるのだから、先輩も後輩もあつたものではないと、義雄は思つてゐる。

『然し大分準備が整つて來た樣に見える、ね。』

『もう、漕ぎつけたも同じことぢや。ただ困るのは印刷と銅版で――ここにも』と、氷峰は机の上をさわつて見、『こんなに寫眞銅版が出來て來たが、札幌だけでは間に合はんので、仙臺まで材料を送つて拵へさすのぢや。東京などと違つて、萬事が不自由で困る。』

『そりやア仕方がない、さ。』義雄は卷煙草をつけ換へながら、『その代り、東京の雜誌や新聞の競爭を受けないで、北海道專門のものを廣めることが出來る便利を持つてゐるぢやアないか？』

『それもさうぢや。』氷峰も煙草を飲み初める。

『早く出し給へ、――早く。』

『出すのはわけアないが、金主の方が先づしぶり出して――五千圓出せば、三千圓を初號にかけ、その殘りを二號にまわさうとしたら、さう行かないうちに風向きが變つた――金主が山で一大失敗をやつたのぢや。』

『どこでも失敗はある、ね。』勇は義雄を見て微笑した。

『ところで、君の方は』と、氷峰は義雄の事業のことに及び、『どうです？　儲かりましたか？』

『僕ア君のぐづ〳〵してゐるうちに、三千圓ばかりの品物を擧げた、さ。』から氷峰に云つて、義雄は勇の方をほほゑみながら見返す。

『ほう』と氷峰は驚く。

『ところが、君』と、勇は口を出して、『全く失敗ださうだ。』
『そりやアまた――?』
『なアに、島田君』と、義雄は平氣をよそひながら、『みんな實費にかかつてしまつたの、さ。』
『は、は、は!』氷峰は笑つた、『藝者のあげ代も實費のうちへ這入りました、な。』

　義雄は自分の事業の失敗並にその回復策に就て勇に話した通りのことを氷峰にも話した。
『君はまださういふ事業をやるのは早かつたのぢや』と、氷峰も遠慮なく云つた。
『文學でこそ、田村義雄君と云つたら、一方の大家であるけれど、實業にかけては僕よりもまだあんこぢや、それが一躍して、千金を握らうとしたのはそもそも無理であつた。』
『僕も實はさう思つてゐたよ。』勇は胸を反らせて、贊成した、『さう容易く金が儲かるものなら、僕だツて、いつまでも學校などにぐづついてはゐない、さ。』
『さうぢや、君もかね黨の方であつた、な。』氷峰は勇をあしらつて置き、また義雄に、『然し君の大膽なのには、世間の人々は感服してをる。』
『そりア月謝が餘り高過ぎる經驗だから、ねえ』と、義雄は受けた。
『僕等にやア』と、勇はもつともらしく云つた、『とてもやれないことだ。全體、田村君は初めから人

並みはづれて思ひ切つたことをするから、僕等にやア、あぶなくツて、見てゐられないことがあるんだ。』

『君は然し』と、氷峰は勇に向ひ、『また人並みはづれて險呑がりぢやよ。それでは、田村君のどころではない、僕の事業をあぶながつてをるんぢやらう?』

『いや、さういふわけぢやアない――』勇は少し尻ごみして、『君のは君の、田村君のは田村君のだ。』

『有馬君はまた』と、義雄もはたから口を出し、『引ツ込み思案過ぎるよ。相變はらずの教育家でつづいて來たには感心するが、餘り野心が少い。前にも直接に有馬君に云つたことだが、七年も八年も新開地に來てゐながら、何とか工夫して、さ、安い地面とか、拂ひ下げの山林とかを、買つて置く位のことアしてゐるべきものだ。』

『そりやア考へてゐないでもないが、ね、島田君も知つてゐる筈だが、なか〳〵手に入り難いものだよ。』

『それも、さ』と、氷峰は云つた、『行き方一つぢや。教師やへツぽこ官吏には六ケしいとしても、農學校の教授とか、道廳の官吏などは、こツそりさきへまわつて、出る山林や土地を買ひ占めてしまう。僕等もつまらんことをしたものの一人ぢやが、新聞記者をしてをると、何かの關係上、土地を少し貰つて置け、いいところがあるからと、向ふから勸めて來ることが度々あつた。然しその時は意氣込み

ばかり高かつたから、土地などはいつでも得られる樣に思ひ、相手にもしなかつた。』

『A地のY 先生などア隨分持つてるさうぢやアないか』と、勇が聽く。

『なアに、その時貰つた土地ぢや――僕も惜しいことをしたの、さ、こちらが必要を感じて、どこか欲しいと思ふ時には、賴んでも、向ふから持つて來て呉れない。意地の惡いものぢや。』

『そんなかねがあるのか？』

『僕もどこか持ちたい、ね。』義雄は自分の窮境を救ふ一つの助けにもと空想して云ひ出す。

『ない、さ。』

『それぢやア駄目、さ。』

『無論、駄目の話だが――』

『金と云ふ物は、然し』と、氷峰はのんきさうに云つた、『天下のまはり物ぢやから、なア。然しこの頃は駄目ぢや、人の賣り物を買ふのは、不利益ぢやから――山林拂ひ下げの公布が出るのは、もツとさきぢや。』

『それにしても、君はいつまで滯在する？　當分をるのなら、僕等の方にも計畫があるのぢや』と云ふ氷峰の言葉に答へて、義雄は勇の方へ少し氣がねしながら、

『ゐられるなら、當分ゐたいと思ふのだ。樺太を研究したから、北海道をもついでに研究したいと思ふし、また、出來るなら、何かやるべき事業をも思ひつきたい。』

『やり給へ、北海道は新開地だけに、僕等の樣なあんこにでも仕事をさして呉れる。內地とは違つて、なかなか面白いよ。――君はどんな感じがする、ね？』

『何だか、外國じみた感じがする。然し、どことなく、なつかしくなつて來た、僕には。』

『さうだらう。僕は北海道が故鄕も同前ぢやから、なつかしさも君のとは違ふだらうけれど、內地と變つて、萬事が大きい。第一、石狩原野や十勝原野の樣な廣漠たる風景はなからうし、諸方の炭山事業も規模のああ大きいのは他にすくなからうし、住んでをる人間その物が片田舍のどん百姓でもなかなか馬鹿にならん。君の著書などをも讀んでをるものは、隨分、あちこちにあつて、全體に讀書力が進んでをる。それぢやから、僕の雜誌も出さへすれば隨分見込みがあるのぢや。』

『兎に角、滯在してゐるうちに、どうかして、北海道を旅行して見なければ――』

『まわつて見給へ。有馬君は餘り出たことがない樣ぢやが、北海道を知るには、十勝原野を見なければならん。それも秋がよい。四方八方の紅葉した以平高原の如きは、天下無雙ぢやから、な。』

『島田君は十勝にゐたから』と勇は義雄に說明した。『向ふの方はよく知つてる筈だ。』

『僕には、十勝は第二の故鄕ぢや。耽溺の紀念も多いし、お安くないラバーもをるし、僕を信じて呉

れるものもすくなくない。若し僕が代議士に打つて出る時になれば、あちらが根據地だらう。』

『君の雜誌さへうまく行きやア』と、義雄も渠の北海道通をうらやましくなつたといふ樣子で、

『君の政治的目的も着々はかどつて行くだらうよ。』

『僕はこの頃ます／＼歌人としての狹い世界がいやになつた。氷峰とはあの歌讀みではないかなど云つて、僕を實際に知らない人間は僕の實業雜誌主筆たる信用を輕んずる向きがまだあるのぢや。――然し、北海道なるものを適切に歌つた短歌はおそらく僕が初めだらう。〇〇氏の如きがゐ坐わつてをつて北海道を歌つたのなどと來ては、實にお話にならん――槲(かしは)の木一つの形容でも、その葉が實際にどう光るかといふことを知つてをらん。』

『そりやア實際だらう、さ。』

『島田君の』と勇か口を出した、『歌集と云ふか、詩集と云ふかが出た時にやア、僕等の樣な古いあたまにはよく分らなかつたが、學校でもなか／＼評判があつた。』

『それで思ひ出したが』と、氷峰は兩手をわざと堅く立てて膝につき、兩の肩をいからしてつき出す樣な眞似をしながら、義雄に、『僕の詩集の廣告を雜誌に出すつもりぢやから、君の著書も廣告したらどうぢやらう、餘地は與へるから？』

『それもよからう。出版元がただで廣告出來るんだから。』

『それよりも君が一人でも未見の友人のふえる方がよからう。』

『それが女ならいいが』と、義雄は寂しい微笑を浮べて、『野郎なら、もう會ひたくも見たくもない、現在の失敗的狀態に於いてはだ。』

『さう失望したもんぢやアない。』氷峰は慰める樣に、『本道で何かすると云つても、知つてる人が多い方がよからう――こないだの時は餘り忙しかつたから、何とも仕やうがなかつたが、今回は一つ歡迎會をやるつもりぢやから――それも、中學や青年雜誌の投書家の樣なあんこ供は別にして、新聞記者を中心として集つて貰ひたいのぢや。』

『それもありがたいことは有難いが、それよりやア僕を一度その十勝原野の樣な廣いところの眞ン中へつれて行つて、獨りで思ふ存分寢たり、起きたりさせて貰ひたい、ね――あんまり、樺太で精神を勞したから、その餘波だらう、考へると、この現在でも、あたまや胸が、――もう、からだ全體だが――煮えくり返つた跡の樣に氣が遠くなるのをおぼえる。』

『そりやア神經衰弱だらう。僕等も新聞記者時代には、よくそんなことがあつた。社が貧乏の爲め退社するものが多くなり、社長兼主筆は燒け酒ばかり飲んでをるのを、僕ばかりで一面も二面も三面も書いたんだ。溜つたものぢやない。一晩の徹夜で、頰ッぽねが神居古譚の巖石の樣に出たと云はれ

た。』

『さう云やア』と、勇が受けて、『田村君は、こないだ見た時よりも、ずツと瘦せた、ね。』

『さうかも知れない。』義雄は自分の頰ツぺたを撫でて見ながら、『僕は全體瘦せる質だが、この頃ア目の玉が引ツ込んだ樣な氣がするんだ。そして、見える物がすべて暗い光を發してゐる樣だ。』

『まア、大事にし給へ』と、氷峰は笑つた、『まだ氣違ひになるにやア早いから、なア。』

『大丈夫だよ』と、義雄も笑ふ。

『そりやアさうと、これからの方針はどう云ふ風にする、ね。』勇は相談でもかけるやうに云ひ出した、『小樽の方はまだ當てになるか、どうか分らないし、樺太から來るかねと云ふのもどうか分るまい――？』

義雄は返事をしないで暫らく考へてゐる。

『さう見くびツたものでもなからう。』氷峰が氣を利かせるやうに返事を引き受けた、『小樽の松田などア、兄の方は道會議員でも目に一丁字なしの方で、兄弟とも分らず屋だから、どうせ駄目と見といてよからうが、まア、あせらずにゐ給へ。僕の雜誌さへ二三號まで出れば、かねの方はどうともなる、さ――僕と共同のもとにやつたツてかまうまいから。』

『さうなりやア、それに越したことはない、さ』と、義雄は少しく勢ひづく。

『それよりやア、まア、僕のところへ來て遊んでゐ給へ、君さへかまはんなら。有馬君は妻子があるけれど、僕は獨身者ぢやから、遠慮はない。』
『さう賴みたい、ね。』
『なに、僕んところだツて、さしつかへはないよ』と、勇は調子を合はせたが、安心したといふ樣子がその顏に浮んだ。義雄はまた東京の妻子を見たくないこと、東京の友人に當分顏を會はせたくないことなどの意を氷峰にもらした。
奧から林檎をむいて持つて來たのが、義雄には昨夜の枝豆につゞいてうまかつた。
『北海道の林檎はどうか、ね？』氷峰はそのひと切れを手に取りあげながら聽いたので、
『僕は』と、義雄は口をもぐ〳〵させて、そのあますツぱいつゆを味はひながら、『正直に云ふと、島田君や有馬君に今度親しくなるよりも、この林檎やきのふの枝豆漬けの味の方が、先づ第一に、僕の疲れたからだに親しく沁み込む樣な氣がするのだ。』
『北海道の枝豆萬歲ぢや、な』と云ひながら、氷峰は立つて碁盤を持ち出して來る。『三ケ月前のかゝきを打たう、少しは強くなつたから。』
勇は、碁が分らないからといつて失敬してしまつた。

## 五

『君、實は、僕、小使錢もあぶなくなつて、ここまで歸つて來たのだから、少し融通して呉れ給へ、な、いづれ樺太から來たら返すとして』と、義雄が云ひにくさうに、然し云ひ出せば當り前の樣に云ふ。

『いいとも、いづれ社長に話して、當座の入費は出ささう。その代り』と、渠は何か條件を持ち出しさうであるので、義雄はどんなことかと待ちかまへるのを、なアに、大したことではないのだと云ふ風で、『僕の雜誌に少し原稿を書いて呉れ給へ。』

『そんなことア易いことだ。』

『易いと云ふても、どうせ雜誌や講談ぢやから、文學物は向かないから、先づ差し當り、「田村義雄は何故に蟹の罐詰製造家となりしや、」こんな問題で、一つ書いて貰ひたい。』

『書くとも、さ、自分が自分を思ひ切り投げ出して、而も自分の根柢を離れてゐさへしなけりやア、如何におほびらに自分のことを善惡共に語つても、決して恥ぢることアないんだから――第一人稱が乃ち第三人稱、主觀的乃ち客觀的、破壞が直ちに建設だ。』

『僕の樣な俗物にはよく分らんが、君の小說描寫論はさう云ふ樣な議論ぢや、なア。』

『さうよ。君やア讀んでゐたのか？』
『新聞紙上のはよく讀んでをつたぞ。』
こんな話をしてから、いよ／＼碁に向つたが、氷峰は石を握つた手を下に向けて盤の上につき出し、にや／＼笑つてゐる。
『そんな筈はないが』と義雄は向ふの顏を見たが、丁半(ちやうはん)の黑白を云はない。前には氷峰に二三目置かせたからである。
『まア、いいから當て給へ。こないだのは違つてをつた、その上僕は少し強くなつたぞ。』
『さうか』と云つて、義雄が黑を當てた。
『さうれ、見給へ』と、氷峰は得意さうに白を取つた。
最初の勝負は義雄が勝つた。然しその次ぎに渠は白を取つて負けた。氷峰はいい勝負だと云つて、いつまでもやめさせない。互ひに勝負がある。
そのうち晝飯になつた。晩には久しぶりで飮まうとあつて晝はあつさりした食事で、例の女の子が給仕をして呉れた。かの女(ちよ)は氷峰を『兄さん』と呼び、渠はかの女を『お君』と云つてゐる。義雄には、も早や、北海道流の菜(さい)が親しんでしまつた。
食後も暑さを忘れて圍碁をつづける。然し義雄のあたまに強く響くのは、目の前なる碁石の音では

ない。却つてこの家の筋向ふに當る鐵工場で鐵板か、何かをかん〳〵云はせてゐる音だ。

義雄は、蟹の大きなゆで釜を、鑄釜でなく、鐵の厚板で打たした經驗を得てからと云ふもの、鐵のかな臭いにほひが忘れられず、鐵の響きを聽くと、自分の精神が響いてゐる樣な氣がする。そして、鐵で拵らへた大きな入れ物を見ると、自分がその內容であるものの樣に思へる。

『あの工場はどんな人がやつてゐるんだらう』と、義雄が氣になるので聽くと、

『何とか云ふ人ぢや』と、氷峰は別に注意もしない。

義雄は立つて行つて、おもて座敷の窓から、脊延びして、板壁越しにのぞくと、筋向ふの道ばたに姿のいいしだれ柳が立ち並んでゐる。その間から見える工場入り口のわきに、ちいさい蒸汽釜の樣な物が二つ置いてある。

その釜に塗つてある朱色が柳の青葉と相映じて、義雄のかな臭くなつた神經の末の末までの感じを引き立てた。

ゆふかたに近くなつた頃、氷峰の宅へ物集北劍と云ふ人が尋ねて來た。義雄もそれに紹介された。

北劍は、もと氷峰が這入つてゐる北辰新報の社長兼主筆であつて、その盛んであつた時は、氷峰その他の記者等を使つて、北海メール（今では最も勢力がある）に對抗してゐたのだが、資力がつづかなかつたので、二三年前に休刊の名を以つてその新聞を廢刊した。

渠は今、遊び半分に、自分の本籍地なる村落（札幌郊外）の合併問題に奔走してゐる。四角張つたところへ出るには、いつも同じ古ぼけたフロクコートを着して行き、そのしみだらけで、色のさめてゐるなどに無頓着なので、却つて質朴な人物として人人に信用されてゐる。そのなか／＼膽ツたまの据わつたらしい、太つたからだを飛白の單衣に包んだまゝ、あぐらをかき、短い眞鍮の煙管を横にくはへながら、柔和に而も自慢らしく自分のやつてゐることを語るのを聽くと、義雄には、然し、正直らしいところに嫉妬心が强さうな樣子が見える。

『村の奴などは物の分りが遲くて困る。』北劍は少しどもる癖がある。『おれにまかすと云ふのだから充分にまかして置けばよからうに、そりや、北村がどうの、南村がどうのと云ひ出して、始末に終へない。然し、もう、こゝまで漕ぎつけたから、近々決定するだらうよ。おれだツて、そんなに幅の利かない男ではないから、なア。』

『それくらゐのことがまとまらないでは、昔の北劍も老いたり焉ぢやから、なア。』

『おれだツて、か、可愛さうに、それくらゐの、う、腕はあるとも。』

『まア、しッかりやつて呉れ給へ。』

『道會議員に打つて出ないかと勸めるものがあるのだよ——おれの地盤は充分堅いからと云ふて。』

『やつて見りやアどうぢや？』

『然し道會ぐらゐに出るつもりなら、お、おれだツて、今までぐづつきやアしなかつた、さ。』
『議長になつたツて、知れたもんぢやから、なア。』
『國會議員になつたツて、何ほどのことがある』と、義雄も口を出した。
『ただの起立議員では、なア』と、氷峰は笑つた。
『然し帝國議會の演壇で、い、一度は大演説を試みたいものぢや、なア。』
『北劍先生の樣にどもつては駄目だらう』と、氷峰がからかふと、
『これでも、そ、その場になつたら、ど、どうして――』と、北劍は笑ひながら答へをし切れなかつた。

こんな話をしてゐるうちに、氷峰はすべての事務員や編輯掛りを歸してしまひ、晩酌の支度が出る。酒を飮みながら話し合つて見ると、義雄と北劍とは、同時代に仙臺の別々な學校にゐたのが分つた。後者は無論五六歲の年うへだが、その知つてゐる當時の消息を前者もよく知つてゐる。後者がその校友會雜誌第一號の卷頭に出した論文を、別校から出る雜誌で攻擊したのは前者であつたのだ。また、前者がその校內の文學會に於いて朗讀した長篇の脚本的新體詩を、他校學生の招待席から足踏みして防害した者の仲間に、その後文學博士となつて物故した文藝批評家もゐたと同時に、北劍も亦その一人であつたことが分つた。

『奇遇だ、なア』と、はたから氷峰が愉快さうに云つた。

そこへ、また來客があつた。巖本天聲と云ふ北海メール記者だ。洋服で堅苦しく坐わる。

『これが田村義雄君です』と、氷峰が紹介する。そして、義雄と天聲との初對面が濟む。

『物集君』と、氷峰は北劍に向き直り、『今回田村君が來札されたに就き、僕等で歡迎會をやらうと思ふんぢやが、君も來て呉れるだらう？』

『僕は新聞記者の浪人だが、い、行つてもよい。』

『實は、ゆふべ、田村君が來たと分つてから、巖本君に會つたので、同時に奔走して貰ふことを頼んだ――メールで奔走しないと、來んものが多からうと思ふて。』

『それもさうだ。』

『そのことで』と、天聲は話しの仲間入りを爲し、『相談に來たのですが、どうです、計畫は立ちましたか？』

『計畫と云ふて、別にないぢやないか？　きのふ云ふたことだけは僕が引き受けるから、その跡を君がやつて呉れたらよいのぢや。』

『それは分つてるが、第一、いつまで御滯在やら――』

『田村君は暫くをるから、この土曜日がよからう。』
『日はそれとして、場所だ。』
『幾代がよからう』とは、北劍が出した意見である。
『いや』と、氷峰は首を傾けた、『幾代では、會計の方が足るまい——さう高い會費を取れば、人が來まいから、なア——普通の月ならよからうが、今月は東京のお客さんがたが、大臣やら、次官やら、隨分飛び込んで來たので、皆が會費疲れをしてをる。』
『本當に今年は北海道の大入りぢや』と、北劍はまた浪人的な目つきをして、『後藤が去つたと思へば、やがて司法大臣が來る——』
『伊藤さんがまた變梃な韓太子などをつれて來るさうぢやし』と、氷峰。
『田村さんも』と、天聲もその話に乘つて、『そのお客の一人になるのは、不名譽ではないと思ひますが——』
『それは無論、さ。』氷峰が急に義雄の方を見て笑ふ。
『僕などアどうして——さういふ歷々と一緒に見られては困る、値うちが違うんだから』と、義雄は謙遜して云つたが、値打ちが違うと出た言葉には、その實、謙遜の意味よりも寧ろ自信の影が這入つてゐた。自分が自分で自分の活動をしたり、失敗したりするに於いて、人間としての價値は決して渠

等に勝るとも、劣つてゐはしないと云ふ確信が義雄の胸に湧いた。そして、性來の無頓着好きから、
『會場などアどこでもいいぢやアないか、歡迎して貰へるのなら、それだけで僕はありがたいのだ。』
『では、中島遊園の西の宮支店がよからう』と、天聲の發議で會費はいくら〳〵、藝者は幾人呼ぶなどと云ふ相談がきまつた。
するト、北劍は、
『ああ、よ、醉つた』と云ひ出した。
『なアに』と、氷峰はうち消して、笑ひながら、『君がさう云ふやうになつた時は、もう、二升は十分やつた時ぢや――さうして例の、血が湧くやうな戀を思ひ出さんと――』
『けふは別ぢや。』かう云つて、北劍は同じちやぶ臺に向つて並んで坐わつてゐる義雄の肩を、
『おい、君』と云つて叩き、また一方の手で義雄の手を握り、『き、君は天外の孤客ではないぞ。おれと意氣投合した――きよ、兄弟分だ』と、もたれかかる。そしてまた起き直つて猪口をさし出し、氷峰に酌をさせる。
『田村君は物集君と仙臺で同時代であつたさうぢや。』氷峰は北劍の酌をしながら、天聲に語る。『無論、直接には話をしなかつたのぢやが――』
『眞に奇遇、さ』と、北劍も天聲に說明する。

『そりやア面白い、なア』と、天聲も眞面目くさつて愛相を云ふ。『田村さんも島田君や物集君の様な知己を得て、北海道の旅行も寂しくはあるまい。』

こんな話も義雄の耳には涼しく聽えてゐたが、渠の疲れたからだは、いつのまにか、疊の上に倒れてゐた。

『もう、歸る。』

『まァ、待ち給へ、一緒に出よう』と云ふ北劍と氷峰との應對が聽えたかと思ふと、義雄は氷峰にゆり起された。で、渠は驚いた樣に目をさまして起きあがり、

『あ、諸君に失敬した、ね』と、氣の毒さうに云ふ。そして心では餘ほど旅と事業上の心配とに疲れてゐる自分であることを感じた。

『さア、散歩に出よう。』氷峰は渠を促す、『札幌の夏の夜景も見て置き給へ。』

『君は弱い、なア』と、北劍は不平さうに云ふ。

『いや、實に失敬』と、義雄はあやまる。

四人はつれ立つてそとに出た。そして、兩側に樹木の植わつてゐる大道を南へとほつて行く。

星月夜だ。見える物がすべて陰になつて、空ばかりが明るい。

『いい夜だ、ねえ。』義雄は誰れにとなく語つて、急に沁み込んで來る孤獨に感に打たれた。

然し地上には、街燈の光で見ると、樹木の影にまじつて、四つの黑い影が動いてゐる。その一つの影が、

『田村さん』と呼びかける。

『はい』と、こちらが答へると、つづいて、

『あなたの御滯在中を幸ひに、一つ自然主義の說明をして貰ひたいと思ひます。』

『說明と云つて――僕が新聞や雜誌で書いたのと別に違ひませんよ。』

『そんなことを賴むよりも』と、また別な聲だ、『巖本君、あの田村君が出した論著を讀む方が手ツ取り早い、さ。書いた本人でも、その實、說明の出來ないことがあるもんぢや。歌よみの歌なども大抵は皆そんなもんぢや。――物集君、さうぢやないか?』

『そりやア、おれの書いた論說でも、明る日讀んで見ると、何のことか自分でちよツと分らんことがたまにはある。』

『そんなもん、さ。讀む人が自分で發明するより仕やうがない。』

『僕も書物だけはいろんな人のを買つてある。然し、どうも、いそがしいので、讀むひまがない。』

『北海メールの編輯はつらいから、なア。』

『實際だよ――僕もいつまでもやつてをる氣はない。』

この最後の聲が、先づ別れて『ここが最高等の西洋料理屋だ』と說明された大建物の角から、道を右へ曲つて行つた。次ぎに、北劍の聲らしいのが、また『あれが中央散策地の銅像だ』と云ふ黑影が二つ三つ立つてゐる廣い横通りを、右の方へ行つてしまつた。

あとに殘つた影二つは義雄と氷峰とであるが、なほ進んで、店頭の電氣で明るい街へ出た。それから、また一直線に薄暗い道を行き、南五條を横切ると、直ぐ左右の兩角に柳が一本づつ植わつてゐて、それが眞ン中の大きな電燈に照らされてゐる。そこのおほ門を這入ると、別世界の如くあたりが明るくなる。薄野遊廓だ。二人はもはや路傍の黑い影ではなく、明かに人間の血のあツたかみを吸ひたい動物であつた。

そして義雄も、一度前回の氷峰と共にのぼつたことがある高砂樓の客となつた。

## 六

その翌朝、義雄は獨りぼんやりした顏で薄野を出た。氷峰は渠より早くそこを出て、雜誌の訪問記事の種を取りに、前約のあるところへ行つたのだ。

渠は、如何にぼんやりして歩いてゐても、平氣なものだと思つた。札幌には、知つてゐる人もなく、

自分の曾て教へた生徒もゐないので、東京に於けるが如く不意にお辭儀される恐れがないからである。

わざ／＼最も賑やかな道を取り、アカシヤ街のつゞきをアカシヤ街の方へ向つて、一直線にぶらぶらと歩いて行く。急に呑氣な餘裕家になつた樣な氣がする。今まで脊負つてゐた重荷をおろしてしまつた樣な氣がする。外國じみた別世界へ來て、自分も亦別な人間の洗禮を受けた樣だ。何とは知らず堪へてゐた壓迫がなくなつて、氣が輕々した。

その輕々した餘裕の間を歩いてゐると、これまでの自分の心は何の爲めにおも苦しかつたのかといふことが思はれる。自分の樣に、藝術や實行に、人間はさう執着する必要があるか知らん？　死んでしまへば、それまでではないか？　そして、生きてゐるのに執着が必要になつてゐたのも、自分ばかりであつたのではないか知らん？

かうして呑氣に歩いてゐれば、――こんな呑氣さを感ずるのは初めてであるだけ――自分は丸で別人間になつた樣だ。知人もなく、妻子もなく、戀人もなく、社會との關係もない今の自分から見ると、執着は自分が社會の人々に對する名譽心もしくは虛榮心から來てゐたかの樣に思はれる。

『詩の一句や二句に拘泥して天下が動くものではない。』と、かう考へたが、『また、眞に天下を動かすだけの事業をしたところで、それが何ほどのことにならう？』

自分の呑氣と快樂とにまかして行く方が、悲痛の哲理などにかじり附いてゐるよりも、結局、都合

がいいのではなからうか？　今までの様な苦しい生活を追はれて來て、こんなところで、こんな輕い氣分を感じては、知人もなく、妻子もなく、戀人もなく、社會もない境界が却つて面白い様な氣がする。

然し、これは、自分でも、樺太以來、殊に昨夜來の疲勞の爲めに、身心がゆるんでゐるのだらうと思ふ。

急に涼しい風が肌から沁み込むのに氣がつくと、自分は札幌の中央を南北に仕切る大通りの細長い散策地に出た。芝草の青々したのが殘りの夢をさまして呉れる。

目をあげて、西の方を見ると、もとの開拓使黒田伯の銅像を越えて、この大通りの西はづれに當る圓山の景色が、朝日を浴びて、つや／＼して見える。

自分の右手に當る角に建つてゐる、高い、大きな石造りは、拓殖銀行だ、な、と思ふとたんに、どこかの時計が午前八時を打つてゐた。

ハイカラの若者――銀行員だらう――が得意げに、然し急いで、その銀行のとびらを排して這入つて行つた。

時間に後れさうな女判任か事務員らしいのが自分を追ひ越して、おほ跨に歩いて行くのを眺めなが

ら、義雄はゆツくり步いてゐたが、五番館陳列所の角まで來ると立ちどまつた。
右に行かうか、左りに曲らうかと思ひ惑つたのである。
左りに曲れば有馬の家へ行くのだ。然し渠は右に曲つて、氷峰の家へ向つた。例の鐵工場からは、かん〳〵云ふ音が聽えて來る。渠は今更らの如く生の響きを感じた。そして、それと同時に、悲痛孤獨の感じがもとの通り胸一杯に溢れて來た。
工場とすぢかひになつてゐる角に、葉の大きなイタヤもみぢが立つてゐる。その太い根もとに、焜爐の火を起して唐もろこしを燒き賣りする爺さんがゐる。店の道具と云つては、もろこしを入れた箱と焜爐とだけである。
こんな簡單な店を、義雄は、昨夜も、町の角々で澤山見たが、なかには、林檎をもかたはらに並べてゐるのがあつた。渠はもろこしの實が燒けて、ぷす〳〵はじけるそのいいにほひを、昨夜、醉ひごこちで珍らしく思つた。今、爺さんの獨りぼツちでそのにほひをさせてゐるのがなつかしくなり、何とはなしにその前へ行き、燒きもろこしを二穗ばかり買つた。
それを以つて實業雜誌社へ行くと、氷峰は今歸つたところで、茶の間で朝飯を喰つてゐる。
『何を買つて來たんぢや？』
『燒きもろこし、さ。』

『好きなのか？』
『なアに、うまさうだからよ。』義雄は一粒つまみ取つて口に入れたが、直ぐ二穂ともほうり出し、『にほひの香ばしい割合に、うまくない。』
『とても、うまいものか？――まア、飯を喰ひ給へ。』
『わたし好きよ』と、膳の用意をしながら、お君さんの言葉だ。
『ぢやア、あげましよう』と、義雄が二つともさし出す。
『燒きもろこしは』と、氷峰は微笑しながら『東京の燒き芋の樣に、女の好くもの、さ。』
『女に好かれるはいい、ね』と答へながら、義雄も氷峰のそばで膳に向ふ。
　お君は二人の給仕をしながら、嬉しさうに、もろこしを一粒一粒喰つてゐる。そして、二穂とも坊主になつてしまつた頃、二人の食事も濟んだ。
　氷峰は事務室へ行き、來てゐる社員に向つて、それ〴〵何かの命令を與へてゐる樣であつたが、そこから、
『君、待つてて呉れ給へ、直き歸つて來るから』と、義雄に聲をかけて、出て行つた。
『ゆふべは寂しかつたでしよう？』渠は、爐ばたから、臺どころであとしまひをしてゐるお君さんに聽くと、

『十勝にをつた頃から、いつもの樣ですから、慣れてしまつて、何ともありません』と、かの女は答へる。

『それでも、前に來た時、あなたはゐませんでした。』

『あの時は、わたし、山へ歸つてをりましたから、お母さんの代りに來てた時でしよう。』

かういふ話を簡單にかはしてから、義雄は次ぎの間へ行き、寢ころんだが、お君さんは氷峰の實際の兄妹か知らん。似てゐるところもある樣だが、どうもさう取れない。などと考へてゐるうち、ぐッすりと一ねむりした。

ところが、夢うつつの樣にひそ〳〵話が隣りの室から聽えて來る。

『兄さんは、もう、出たの？』

『出たのよ、直き歸ると云ふて。』

『ゆふべはどこへ行つたの？』

『お客さんと一緒にお女郎買ひ。』

『いやなこと、ねえ』と、二人のくす〳〵笑ひ。

『その代り、ゆふべだけは夢を見なかつたでしよう？』

『矢ッ張り、見たのよ。島田さんとわたしとが何か面白いお話をしてたら、大きな、堅い物があたまの上へ落ちて來るんでしよう――それが火の出る樣にがんとわたしのあたまに當つたかと思ふたら、目が覺めたの。』

『ぢやア、またお父さんに蹴られたの、ね。』

『わたし、恥かしくもあるし、つらくもあるし、どうしようと思ふのよ。けさ、起きたら、直ぐお父さんが、いつもの通り、「色氣違ひめ、またうはことを云やアがつた」て叱るんでしよう――』

『お父さんの足もとにあたまが行く樣な寢かたをしてをるから、行けないのだ、わ。』

『仕やうがないんですもの、それは――家が狹いんだから。』

『では、夢でのお話はおよしなさい。』

『わたしだッて、さうしたいことはありません、わ。けれども、夢に見るんですもの。』

『毎晩、癖になつたの、ね。』

『さう、ね。』

『わたしなら、いやアだ。』

『わたしもいやです、わ。』

『お鈴さんがそれをいやになつたら、兄さんをいやになるわけ、ね。』

『兄さんは好きよ、好きだから夢にまで見るんでしよう。』
『色きちがひ、ね、あなたは？』
『あら、いやアだ、お君さん、兄さんにそんなこと云ふたらいやよ。』
『云ふてやる、云ふてやる。』
『いやアよ、いやアよ。後生だかち、そんなことは――』
『兄さんだツて、嬉しがるだらう。』
『後生だからよ。』
段々、かういふ聲が大きくなるに從つて、義雄の眠りは覺めて來た。氣がつくと、いつのまにかどてらのかかつてゐるのを發見した。社員はすべて出拂つて、ここに誰れもゐない。
『靜かにおしなさい、お客さんに聽えるよ。』
『え？ ゐるの？』
『寢てゐるの。』
『聽えやしなかつたでしようか？』
その後は何か分らない小聲だ。
『お鈴、お鈴！』南隣りの家から呼び聲が聽えると、

『はい』と、大きな返事をして、一方の話相手は裏口から出て行つた樣子。
『お君さん、あれはどなた』と、義雄が聲をかけた。
『あなた聽いていらッしやつたの？』
『目がさめたので、すまないが、聽えましたよ』と云ひながら、渠はから紙を明けて茶の間へ行つた。

午前も、もう、そとは日の高いてかかした光に照らされて、ほこりと共に暑い風が這入つて來る。
お君さんは横になつてゐたからだを坐わり直して、
『あれはお隣りの娘さんです。』
『お鈴さんといふの？』
『ええ。』
『氷峰君に大層惚れてゐるんだ、ね。』
『さうよ』と、お君は答へて微笑したが、その顏には少しにがにがしい樣子が見えた。
『いくつ？』
『わたしに一つ下。』
『では、十九？　十八？』

『そこらあたりでしよう。』

『太つてゐるの？　瘦せてゐるの？』

『太つてをります、わ。』

『美人？』

『…………。』お君は笑つて返事がない。やがて、『去年の末、わたしの留守に、兄さんの病氣を親切に介抱してくれたさうです。』

『そして、氷峰君はその人を細君にするつもりですか？』

『さア、どうですか』と、かの女はにが笑ひして、心配さうな、しほれた顔つきをしてゐる。その樣子が、どうも、當り前の兄妹のする樣子ではない。『兄さんが病氣でぐツすり眠つてをりますと、隣りの室からこツそり出て行つて、お鈴さんは兄さんの顔を見てをつたことが度々あるさうです。』

『誰れがそれを見たの？』

『うちのお母さんが――その時、お母さんもついてをつたので、寢たふりをしてお鈴さんの樣子を見てをつたのだ、て。』

義雄はこの二人の女のどちらが氷峰の物であらうかと考へた。そして、

『あなたは氷峰君の本當の兄妹ですか』と聽くと、

『本當は、わたしのお父さんと兄弟だから叔父さんになるのですが、子供の時から一緒にをりますので、どうしても、兄さんとしか云へないの』と、かの女は答へて、多少元氣を回復した樣だ。

『何のことだ、まさか持統天皇ではあるまいし』と、然し、義雄は心でつぶやいて、その問題には興がさめてしまつたので、丁度その時膝の上にあがつて來た玉といふ猫をだいて、その喉をごろ〱云はせながら、獨り言ともつかず、『ああ、まだ眠い』と云つてあくびをする。

『ゆふべのお疲れでしよう』と、かの女はにやり笑ふ。

そこへ氷峰が歸つて來た。

『暑い、暑い』と、渠は洋服の上衣を脫ぎ棄て、『おい、お君、氷をあつらへて來ないか？』かう云つて、直ぐ、にこ〱しながら、碁磐を座敷へ取り出し、『どうだ、君？』

『きのふの勝負をつけようか、ね』と、義雄もねむけざましに氷峰と向ひ合つた。そして、石を運びながら、『君はなか〱色男だ、ね――今出て行つたのが本當か？　それとも、隣りのお鈴さんか？』

『誰れに聽いた？』

『今、その二人で秘密談をしてゐるのを、ここで寢てゐて聽いたの、さ――隣りのが君の夢ばかり見て、またおやぢさんにあたまを蹴られたと云ふぜ。』

『あいつにも困るのぢや、丸で色氣違ひの樣になつてゐやアがる。親の方から交渉があつたが、それ

となく逃げてゐるの、さ――どんなに野暮臭くても、脊が低くても、別嬪ならまだしもぢやが――僕は當分君の樣にかつえてはおらんぞ。お君は妹にしてあるが、實は僕が育てられた兄の兒で、兄はどうせ一緒に育つたのぢやから、夫婦になれと命令するが、僕はいやなんぢや。叔父と姪の間だから、無論、あやしい關係はない。』

『さう意張つてりやア、ここで意地めてやるぞ』と、義雄は敵のすきへ石を一つ打ち込んだ。

氷が來たので、それを飮みながら碁をつづけてゐるところへ、來客があつた。高見呑牛と云つて、北星といふ新聞體の週刊物を發刊してゐる記者だ。

氷峰は渠に義雄を紹介してから、渠に斷わつて、勝負の方附くまで碁をつづける。呑牛はにこ〳〵笑ひながら、二人の戰ふのを見てゐる。

勝負は義雄の勝ちで一先づ切りあげられた。すると、呑牛は、

『出來たよ』と、ふところから原稿を二つ出して、氷峰に渡した。一つは、辯護士、道會議長、某會社の取締役の某氏を批評した物、一つは、北海道で有名な人々の逸事を書いた物だ。雜誌第一號に出るのだなと、義雄は直ぐ感づいた。

批評の方を氷峰が讀んでゐる間に、義雄は逸事の方を疊の上に廣げて默讀した。それがなか〳〵面

白い。或無學な金持ちが、初めて蓄音機を聽いて、切支丹ではないかと驚いたこと。或豪農の若旦那が金時計を買ひ、おやぢに贅澤だとおこられない爲め、眞鍮時計だと僞はると、おやぢも承知して、眞鍮でも重い、なアと云つたこと。或政治家のところへ大酒家が二三名集つた時、餘り呑むので、その細君が中頃に燒酎を出し、それからただの湯を入れた德利を幾度でも持つて行くと、それを知らずに飮んで徹宵徹夜したこと。などを、簡單に、諷刺的に、小氣味よく書いてある。

呑牛はそれを得意げに氷峰に讀んで聽かせ、一節毎に讀みとまりて、氷峰がどんな顏をするかといふことをうかがふ樣に、渠の顏を見る。氷峰はその度毎に聲をあげて笑ひ、おしまひまで行つた時、『これもよい材料ぢや』と云つて、受け取つた。

直ぐ原稿料を渡せといふ樣な談判を隱語まじりで呑牛はしてゐるのを見て、義雄は再び自分も原稿生活に立ち返つたかの樣にいやな氣がした。

『二三日待つて呉れ給へ』と云つて、氷峰は金主が最初の約束通りやらない實情を話す。無論、近頃、或事業で失敗した爲め、大分不景氣なことは分つてゐるが、もと／＼氷峰を雜誌で盛り立てようとしたのは、獨りぎめで金主自身の娘を呉れようとしたのだ。それが意の如くならないので、金をも出し澁る樣になつた。

ここを社とするにも、金主自身がこの家を探し當てたので、家主の方へも自分の名義で約束をして

しまひ、あれはおれの婿だから、よろしく賴むと云つたさうだ。氷峰はこれを傳へ聽いて非常に怒つた。そして、結婚問題は一生の大事である。それを勝手に獨り合點されては困る、その上、お前のうちのは貰ふわけに行かないと、ぴッたり斷わつた。それから、金主は氣を惡くしたのだらう、どうも出し澁る樣になつたといふことを、氷峰は呑牛並びに義雄の前でうちあけた。

『君は正直過ぎるんだ』と、呑牛は目を一度ぱちくりさせて、云ふには、『三千でも、五千でも、支度金をつけて呉れようと云ふのも同樣なら、貰つて置くがよからうぢやアないか?』

『貰つて返すのならわけアない、さ、然し』と、氷峰は微笑しながら、『僕にも候補者が多いから、なア。』

『また十勝の女のお自慢か?』

『それもさうぢやが――』

『全體、君ア氣が多いんだ――然しまたああ云ふ奴にも困る』と、呑牛は某代議士を引き出し、それがもと或後家さん――昔は耶蘇敎の婦人矯風會の有名な辯士であつた――を引ッかけてゐた上に、その女の娘をも落し入れてゐたことを話す。その後家さんは鈴木玉壽と云つて、亭主と北海道へ移住して失敗したものだ。

『そりやア、肺病で去年茅ケ崎に死んだ小說家田邊を昔棄てたと云ふ女の、母と妹だらうよ』と、義雄が不思議さうに口を入れる。

『さうだ』と、呑牛がうなづく。『はんか臭い女達であつたよ。母は去年死んだ。』

『はんか臭いのアあいつもだぞ』と、氷峰が某道會議員のことに及び、それがいつも連れてゐる藝者風の美人があるが、どこの抱へを引かしたのかと思つてゐたら、その人自身の娘だ。『自分の娘と赤鍋とア實に不都合極まる！』

北海道が風俗が亂れてゐることは兼て聽いてゐたが、その實際は聽いたよりも甚しいのだらうと、義雄は思つた。

それから、話は北海道新聞界の歷史や人物談に移つた。そして、故中江兆民が北門新聞で榮えてゐた時のことや、中野天門の淸語學校のことなどだ。天門は弟子にえらいものがなかつた爲め、學校は長くつづかなかつたが、渠に養成されたもので、日露戰爭に秘密な功を立てたのが多くあることを義雄は知つた。また、義雄が面白い逸事として知つてゐる兆民の有名な睾丸酒も、この地であつたことと分つた。

それから、北海メールと北辰新報との最終の勇ましい論戰と競爭とに及び、それからまた呑牛自身が或小新聞に據つて官憲と爭ひ、獄に投ぜられた間に、函館の太ツ腹な漁業家と獄中で知り合ひにな

り、出てからも、その人の資本を以つて大新聞を起さうとしたが、そのうちに漁業家は失敗して、どこへ行つたか分らなくなつたことなども話にのぼる。

義雄のこの最後の話を聽いた時、自分の事業に協同しようといふ漁業家も、有馬氏の細君が云ふ通り、當てにならないと思つた。一體、漁業などは、考へて見ると投機業の一種とも云ふべきで、どか儲けのある代り、一度しくじれば、もう、立てない。義雄は、樺太で、ナヤシへ行つた時、或大漁業家が失敗して逃げた跡に、給料を貰へなかつた夫婦者が、國へ歸る費用もない爲め、むしろでちいさいテントを造り、そのなかに見すぼらしく寢起きしてゐるのを見たことを思ひ出して、それを他の二人に語る。

『北海道でもそんなことは珍らしくない』と、氷峰が云ふ。

『急に出來た身代は急に倒れるのが北海道の原則らしい』と、呑牛は平氣だ。『僕等はその間にあつて、多少のうまい汁が吸へるの、さ――丸で火事場泥棒も同樣、さ。』

『は、は、は』と、氷峰は笑つた。呑牛は目をぱちくりさせた。

一時頃に晝飯が出來たが、呑牛は有名な朝寢坊で、今しがた朝飯を喰つたからと云つて、歸つて行つた。

食事後、また碁を二三番戰つたが、義雄も氷峰もねむけがさして來たので、いつのまにか、二人ともうたた寢をした。

目が覺めると、間もなく晩飯だ。それが濟むと、

『おなじみへ行からか、な』と、氷峰は笑ひながら云ひ出す。

『それもよからう。』義雄も惡くない樣子を見せる。

目的のところへ途中で電話をかけて置いて、義雄は氷峰と共に巖本天聲の家を訪問した。何と云つても、現今、北海メールの記者は信用もあり、勢力もあるので、兎に角、そこへは第一番に行つて置く必要があると、氷峰が云ふからである。

主筆とは云へ、地方新聞のだけに、天聲は隨分穢いところに住んでゐる。北一條札幌區立病院のそばだ。平生、胃が惡いので、醫師の勸めにより、飲めない酒を晩酌に五勺ばかりづつ飲むと云つて、それを濟ましてから、いきなり、黃金色のカフスぼたんを持つて來て、客間兼書齋に直り、

『島田君、これはどれ程の値うちがあるー』

『めツきだらう』と、氷峰が受けると、

『どうして〳〵、そのおもみを見給へ。』天聲は大事さうに云ひ、『或洋品店の贈り物だ――さう、けちな店ではない。』

『生まじめな天聲もなか〳〵話せる樣になつた、な』と、氷峰はからかひ半分に、『賄賂などを取つて、けしからん。』

『いや、そんな物ぢやアないぞ。』天聲は氷峰からぼたんを取り返し、『廣告文を書いてやつた禮を持つて來たのだ。』

義雄もおつき合にそれを手に取つて見るうちに、天聲がビールを拔いた。

歡迎會に關する用意や來會者人名などに就いて、天聲と氷峰とは頻りに話してゐたが、やがて、天聲は義雄に向ひ、いづれ記者を遣はすから、東都文壇の近狀を談話して呉れろといふことや、一度北海道を巡遊して、その記事を新聞に出して呉れるといいがといふことなどを語つた。

談話は容易いことだが、巡遊には金がかかる。義雄の今の狀態では、ひまはあつても、出來ない。

『もしメールで何とか都合をつけて呉れれば、僕も旅行好きだし、樺太をもまわつて來たついでだから、一つ北海道をもまわつて見たいが』と、渠は當つて見た。

『原稿さへつづけて貰へれば、何とか都合の附かないことはなからうと思ふ――パスもあることだから』と、天聲は答へた。

『さう出來ると、面白いが、ねえ』と、義雄は氷峰を見ると、氷峰はそれに答へないで、

『そんなことよりも、巖本君』と、天聲に向ひ、『君の地位を利用して、何かうまい儲け口を早く見つ

け給へ、いつまでもあんな新聞にかぢり附いちやアをられんぞ。』
『うまいことがある、さ。』天聲は多少得意になつて、『僕の名義を貸して、百萬坪の地面を願ひ出した。成功すれば、半分貰れる筈だ。その時ア、兩君におごる、さ。』
『當てにせずに待つてをらうか』と、氷峰は笑つた。
そこを出てから、義雄が天聲の云つた巡遊のことを餘ほど面白く見て、氷峰に聽くと、氷峰はから答へた、
『メール社の樣な金のないところは駄目ぢや。事務の方に無勢力な天聲の云ふことなどは、實際に行はれたためしがない。』そして、また、同社から自分に主筆を賴んで來たことがあるが、天聲がやめられるのは氣の毒だから、氷峰はそれを斷わると同時に、天聲にそのことを注意してやつたことを語つた。

七

その翌朝、義雄は氷峰についてまた渠の家に行つた。
そこで正午過ぎまで熟睡してから、義雄は有馬の家へ歸つて見た。餘り所在なさに、新聞を讀むばかりにも飽き、風呂敷包みの中にある、趣味や早稻田文學の東京から送つて來たのを取りに來たのだ。

お綱さんは、門前で、二人の子供に取りまかれながら、八百屋物を買つてゐる。その八百屋が義雄には珍らしかつた。

脊の低い痩馬の脊の左右に、底の深い畚をになはせ、そのなかに青物——茄子、白瓜、西瓜、カイベツ、玉葱、枝豆、西洋かぼちや、林檎、唐もろこし、など——を入れてある。そして、それを引いて呼び賣りするものは、百姓馬子だ。アカダモやイタヤもみぢの影がつき添つてゐる札幌の市街を、かうして賣り歩くのかと思ふと、義雄には、それが新開地の市街を最も意味深く摘出してゐる樣に見えた。

ふと、札幌市街の自分が知らない部分を散歩して見る氣が起つたので、勇が留守なのを幸ひ、出した雜誌並に手帳をふところにして、直ぐまた有馬の家を出で、獨りでぶら〳〵歩いて見た。

道廳の構内をたツた五六本の白楊樹の高い影であるかの樣な氣持ちで通り拔け、郵便局の前に出で、豐平館の横を通つて、水道にかかつた小橋を渡り、東部の街々をめぐり、それからまた西部を見た。

札幌は石狩原野の大開墾地に圍まれ、六萬の人口を抱擁する都會で、古い京都のそれよりも一層正しく、東西南北に確實な井桁を刻み、それがこの都會の活きた動脈であるかの樣に強い感じを與へる。そして、その脈は四方ともに林檎畑や、もろこし畑や、水田、牧草地などに這入つて、消えてしまう。

その間に散在して、道廳を初め、開拓紀念に最も好箇な農科大學や、いつも高い煙突の煙りを以つ

て北地を睥睨する札幌ビール工場や、製麻會社や、石造りの宏大な拓殖銀行や、青白く日光の反射する區立病院や、停車場、中島遊園、狸小路、薄野遊廓などがある。

一體に、大通りの南北ともに、停車場通りを中心として、西部の方が賑やかだ。賑やかで、繁榮な部分には、開拓者が切り殘した樹木はないが、それでも、地方のアカダモ、イタヤ、白楊などの下を通つて來る人の心には、至るところ、さう云ふ樹木の影がつき添つて離れない樣な氣がする。

さういふ街々を縫つて、かの百姓馬子は青物を呼び賣りしてゐるし、また人通りのある角々には、例の燒きもろこしの店が出てゐる。

義雄は、それが何となく嬉しく、なつかしくなり、この百姓馬子に出會ふ限り、またもろこしの香ばしいにほひがしてゐる限り、札幌は自分の心に親しみがあつて、自分の滯在地と云ふよりも、寧ろ自分の故鄕であるかの樣な安心の思ひがして來た。

途中に立つてゐる大きな楡の木の繁葉から、涼しいゆふぐれの薄暗い羽がひが飛び出す樣に見える頃、義雄は北海實業雜誌社へ歸つて來ると、氷峰はぼんやり待つてゐた。そして、

『また行かうか』と云ふ。

『よからう。』義雄が斯うお定り文句になつたやうに答へると、

『軍用金を調達して來るから、待つてゐて吳れ』と云つて、氷峰は金主川崎のところへ出かけて行つた。

義雄は晚飯を獨り喰つてから渠の歸りを待つてゐたが、渠は一時間立つても、二時間立つても歸つて來ない。

『どうしたんだらう』と、渠は茶の間でうちわをつかつてゐるお君さんに聽くと、

『多分、しかられてをるのでしよう』と、かの女は答へる。

『どうして?』

『でも、二晚もつづけて遊びに行くから――けふ、社員が云ッつけてをりましたよ。』

『は、は!』義雄は笑つて、『ぢやア、おほかたそんなことだらう。』

やがて玄關のがらす戶が明いた音がして、氷峰はにが笑ひをしながら這入つて來た。

『駄目ぢや、駄目ぢや』と、首とからだを振り動かして、『おこられた上に、長い說法を聽かされて來た。』

『そんなことだらうと、今、お君さんが云つてゐたんだ。』

『けちな奴ア仕かたがないんぢや。』氷峰は椽がはの明け放つた障子にぐツたりもたれかかつて、足を投げ出し、金主が餘り自分を子供あつかひにするのをこぼし、實は、ゆふべも、おととひの晚も、金

を拂つたのは義雄の分だけで、自分のはなじみの女が出して呉れたのだが、三度目までもから手では行けないといふことを義雄にうち明けた。

『何も行かなけりやアならんところではなし』と、義雄は明快に、『碁でも打つ方がよからう。』

『それよりや、もう、寢よか』と、氷峰は蚊をうるささうにうちわで追ッ拂つてゐる。

そとは、もう、しんとして、音するものは上りか下りかの汽車の響きばかり――ねむさうなお君は、いいしほに、寢どこを敷き初めた、かの女のは事務室の方に獨り、氷峰と義雄とのは編輯室の方に同じ蚊屋(かや)だ。

氷峰は寢卷きを着かへながら、その赤いもみの裏を折り返して義雄に見せ、

『これもあの女に』と、高砂樓のなじみを思ひ出す樣子で、『貰つたのぢや。』から云つて、渠は、かの女がここへ遊びに來たいのだが、妹がゐると聽き、それではつまらないと云つて、來たことがない事情を話した。

『色男は仕やうがない、ねえ』と、義雄は渠を喜ばせながら、自分もとこに這入り、自分のお島はどうしてゐるのだらうと思つた。そこへ、優しい聲をして玉が來て、渠の夜着(よぎ)の裾へもぐり込まうとしたので、渠は氣味が惡くなり、

『この畜生！』と云つて、足ではねのけると、

『可哀さうに、なア、玉』と、氷峰がこれを引き寄せた。『これでも自然主義を實行するのぢや。』『そんな點へ直ちに自然主義と云ふ語を應用されては困る』と、義雄は云ひながら、東京の諸新聞がこの語を酒落に惡用した結果を、この地に來ても、見られるのがつくづく不平に思はれた。

氷峰は自分がどれか獨り、女を選んで結婚する時になれば、諸方から故障が出て來るだらうと云ふことを語り、お君のことは數へないが、第一、ネキストハウス（と、お君には分らない樣に云つた）のがある。十勝で待つてゐるのがある――これは、四五百圓も渠の新聞記者時代に補助を與へて呉れた女だ。或炭山には、今、身持ちになつてゐるのがある。小樽に遊女をしてゐるのがある。それに、この寢卷きの主がゐる。など、といふことだ。

義雄もお鳥との關係を一層深く氷峰に話しをしたが、われ知らず寂しい感じがして來て、涙までが出て來るので、氣を換へようとして、のこ〳〵起き出だし、衣物のたもとから、旅行中の感想や事件を控へた手帳を探し出し、再びとこの上にあふ向けになつて、蚊屋のそとに置いたランプの光をたよりに、そのうちに書き込んである數篇の散文詩を氷峰に讀んで聽かせた。渠も歌をよむ男であるから、必らず分るだらうと信じてゐるからである。

ホイトマンの散文詩の樣なぎごちない口調ではあるが、義雄は自分獨特の力が籠つてゐると誇つて

る物だ。第一に、『汽車』と云ふのを讀んだ。これは、闇夜を横切つて、東北の廣野へ來た時、大きな青大將の大地をのたくる樣に思はれた列車が、神經の疲れと共に、自分その物と感じられたことを歌つてある。

次ぎは、『乘り込み』と云ふのだが、小樽で樺太行きの汽船に乘り込むと、今しも積み荷をおろす人夫の賑やかなかけ聲がしてゐたが、それがぱツたり止むと同時に、自分獨りの寂しい胸にばかり、聽えないかけ聲が合唱の如く響いてゐるといふことだ。

次ぎは、自分の『罐詰製造所』の幻影。次ぎは、アイノ人がトンチ人の最後の末から『矛漁』の術を授かる神話。次ぎは、敗殘人種の末路を弔するアイノの『めの子。』次ぎは、火事の越年を歌つた『燒損林。』次ぎは、愛婦に棄てられた樣な寂しみを單調子な海岸に觀ずる『眞赤な太陽。』次ぎは自分を棄て去つたと思ふ女をなほも戀ふる意の『ブシの花』、乃ち、とりかぶとの花を歌つた物。

それから、『何の爲めに僕』といふのを讀んだ時、讀み手の義雄は最も深くそれを作つた當時の感に打たれた樣で、聲の調子も少し變つてゐたから、聽き手の氷峰もそこに感づいたと見え、『今一度讀んで見給へ——おしまひのが一番振つてゐる樣だから』と云つた。義雄は知己を得たと思つて、得意げに讀み返した。それはかうである——

『何の　爲めに、僕、

樺太へ　來たのか　分らない。
蟹の　鑵詰、何だ　それが？
酒と　女、これも　何だ？

『東京を　去り、友輩に　遠ざかり、
愛婦と　離れ、文學的努力　を　忘れ、
握り得たのは　金でも　ない。
ただ　僕　自身の　力、
これが　思ふ樣に　動いて　ゐない　夕べには、
單調子な　樺太の　海へ
僕の　身も　腹わたも　投げて　しまひたく　なる。』

『君の意氣と人格そツくりぢや、なア』と、氷峰は仰向いたからだを半ば起して義雄の方へ向いた。

『まだ一つあるよ』と、調子にのつて義雄は『マオカのゆふべ』といふのを讀みかけると、氷峰はもとの如く仰向けになつた。

その樣子が『もう、澤山』といふ樣にも見えたので、義雄は讀むのをやめようかと思つたが、最も短くもあるし、また讀みかけたものだからとあつかましく構へて、それをつづける。からだ――

『僕は　袷せに　袷せ羽織、
　そして、出て來た　藝者は　單衣に　夏帶――
熱い　樣な、寒い　樣な、
分つて　ゐる樣な、ゐない　樣な、
物足りない　歌と　三味と　酒と　酒落とに、
　マオカ　の　ゆふべの　お座敷は　暮れて　しまつた。』

『面白い』と、たわいのない聲で云つた切り、氷峰は無言で、手をだらり延ばしたまゝ動きもしない。隣室からは、お君さんのいびき聲が聽こえる。

義雄は慣れない蚊屋のなかで、急に、寂寞の感じに包まれてしまつた。

お鳥はどうしてゐるだらう？　あすは、當地へ來たことを知らせる手紙を出さう。あんなおこつた手紙はよこしても、實際、最後の別れに誓つた通り、獨りで辛抱してゐるだらうか？　それとも、再び取り返しのつかない樣に、誰れか男を拵らへたださうか？　あの白い、いい羽二重肌を他人に渡してしまひたくないが――

からだは、けふの長い散歩で、充分疲れてゐるが、神經が興奮してゐて、なかなか眠られない。そして、北海道といふところは、僅かにまだ二三日の滯在だが、その間に見聞したところだけを以て見ても、淫逸、放縱、開放的で、計畫をめぐらすにも、放浪をするにも、最も自由な天地らしい。金も容易く儲かれば、女も直ぐ得られる樣に思ふ――北海道は若々しい！

お鳥がこのままになつてしまふのなら、誰れか別なのをここで見つけよう――

ゆふべで前後三回、『これでおなじみになりました、ね』と云つたその本人の姿が目の前に浮ぶ――遊女風情だと云つて、もし愛がある段になれば、女房にしてもかまはないではないか――

すると、北海道――と云つて、札幌だらうが――に人間はひとりもゐず、內地のとは違つて樹木ばかりがあつて、それをすべて自分獨りで占有してゐる樣な氣がして來る。農科大學の廣い構內でもない。その附屬博物館の庭でもない。中島遊園でもない。

どこかとほつたことがある樣な道の眞ン中に立つてゐる楡の樹かげから、背の高いおほ廂のハイカラ女が出て來る。お鳥の樣だが、然しお鳥ではない。

相談がつくものならいいがと、何氣なく立ちどまると、かの女はこちらの心は知らないで、同じ步調をつづけて行つた。

ふと夢ではないかと氣がつくと、決して夢ではない。然し考へてゐたことは、すべて否定的にすべ

り拔けて行つた。ランプが明るい爲め、眠られないでうと〳〵するのだらうと思つて、それを吹き消さうとして背を腹に轉ずると、

『まだ起きてをつたのか』と、氷峰が出しぬけに云ふ。

『うん』と云つた切り、あかりを吹き消すと、闇と無言のうちで、義雄はますます神經のランプに照らされ、さま〴〵の思ひになやんだ。

## 八

氷峰は、珍客と稱してゐる者の爲めに三日三晩を殆ど空體に過した上、金主に叱られたりしたのを返り見、

『これではならん』と思ひ直した日の朝から、また勉強をし出した。そして、義雄にも、例の鑵詰談を書いて吳れろと迫つた。

義雄は、それを書く前に、お鳥に送る手紙を書くことにした。ゆふべから、何だか、特に再びお鳥が戀しくなつたので、かの女が當地へ來て吳れないまでも、せめて今一度初めの樣に熱心な情を籠めた言葉に接したいのだ。

ゆふべからさう思つてゐる間は、手紙が電報の如く飛んで行つて、電報の如く早く返事の來るもの

たらとまで思つたか、さて、筆を持つて紙にのぞむと、もう、何の手ごたへもないか知れないといふ心配が起る。

そしていよ〳〵書き出して見ると、その心配の爲めに、書き出すまでの熱心は半分以上も減じてしまひ、當てにならない女だといふ恨みが先きに立つて、優しい言葉がどうしても出ない。

何故に再三の手紙に返事をしないといふ叱責を冒頭にし、お前がゐなかつたら、こんな失敗はしないで濟んだ。(實際、渠の事業を思ひ附いたのは、一面には、かの女と關係して、生活費が嵩んだ窮策であつた。)つまり、お前の爲めに失敗して、止むを得ず當地へ來た。事業は恢復の見込みがある。然し、しばしの難局を辛抱し切れないなら、もう、お前と事業とは無關係だ。お前が、自分と關係するまでの決心通り、下女奉公をしても獨立するつもりなら、さう容易く自分を離れて、別人を待つべきものでなかつたらう。それも仕儀によつては再び許さないものでもない。まだ問題がそちらに殘つてゐれば、札幌區北四條西七丁目何番地の有馬勇氏方宛にて云つて來い。先づ電報でよこすがよからう。と云ふ風に書いて、身づから投函した。

『みづから御出馬――御熱心です、な』と、氷峰がひやかすのを、義雄は原稿を早く書けといふ催促の様に受け取つてむツとしたが、渠の性質として、そんなことは氣にならないので、さう取るのが正當か、正當でないかを考へるひまさへ與へない。

『さア、これから、實業雜誌界月並みの「如何にして」云々の長表題的原稿だ』と、義雄は氷峰の机のそばに腹這ひになり、筆を執り初める。

藝者と共に床の中で、詩を作つたおぼえはある。然し、その時は、精神に於いて却つて張りのあつた時だ。書く精神が不眞面目で、書く時の態度に張りがないでは、とても碌な物は出來なからうと思ふ。然し自分の名を出す以上は、僞つたことは云ひたくないから、燒けツ腹的にありのまゝを書出した——

『僕はこれまで文學者であつた。これからも矢ツ張り文學者でつづくだらう。文學界では、兎に角、以前から主義もあり、主張もあり、創作もやつて來たから、諸君に誇らうとすれば誇るところが多少ないではないが、それが近頃、而も本年、實業的方面に片足を踏み込んだのであるから、その方の事業はまだほや／＼なところで、その基礎さへ本當には定らない狀態にある。』から云つて、然し友人の新雜誌の爲めに少しでもなることだから、いや／＼ながら初步の實業談をやるといふのが前置きだ。

『先づ、僕がどんな動機で鑵詰業を始めたかと云ふに、さう六ケしい動機はない、さ、考へて見給へ。文學をやつて大した金が儲かるわけはない。歷々な文學者でも金が欲しければ、別な仕事を兼業して

ゐなければならない。翻譯とか、雜誌編輯とか、出版屋顧問とか、新聞記者とか、然らざれば、學校教師とか、家庭教師とか、圖書館書記とか、何かをやつてゐる。

『僕は去年まで拾數年來英語教師を兼業してゐた。それをよしたのも他業に向ふ一つの原因ではあらうが、僕の父が去年死んで――それまでは、父と別居してゐたのだが――僕の家を左右する自由が出來たと同時に、僕の財政はずん／＼膨脹して來た。

『割合に金錢に淡泊な僕でも、金を欲しくならずにはゐられないではないか？ それに、僕の性質として、今の所謂文學者と云はれるだけでは滿足出來ないところがある。』この最後の句には、氷峰は、二重丸圈點を打つた。『世人が一般に認めて文學社會といふ、その範圍以上に何か手を出して見たいと云ふことは、僕の以前から持つてゐた考へである。それが今回蟹の鑵詰製造に實行され出したのだ。』この最後の句には、氷峰は普通の丸點を打つた。

それから、『今一つの原因』は弟の爲めに仕事を拵へてやるわけであつたが、事業の眞ツ最中にあちらで大病を煩つた爲め、製造場の帳簿などが丸でめちや苦茶になつて、義雄があちらへ渡るまでに、既に、『父の遺産を賭しての仕事が大打擊を被りかけたと共に、僕の弟までも失ふところであつた』（この句にも、氷峰は二重圈點を打つた）といふことを書いた。

『それから、製造主任は僕の從兄弟で、拾數年來の經驗と信用とがある。（ここに氷峰のちよぼ圈點が

ついた。）父の存命中、僕はこのものと共にこの事業を初めることを父に勸めたことがあるが、心の實直な父は危險を恐れて贊成しなかつた。（ここには、氷峰の三角圏點がついた。）然しこの人間がゐるので、僕等の鑵詰は、他の同業者等のよりも、一箱四ダースに附き、五十錢乃至一圓增しで賣れ行くのだ。』（ここには、氷峰の二重丸圏點。）

それから、マオカを中心として二十里ばかりの海岸は『世界有數の蟹捕獲場』であること。蟹の鑵詰は外國貿易品として有望だが、本年は『粗製濫造』が多いこと。品質は、樺太のも、北海道物に決して劣らないこと。『蟹といふ奴は、月夜には身が瘦せるものだと云はれるが、それどころか、朝取つたのと夕がた取つたのとは、實質が丸で違ふほど、中身が微妙な組織を有する』こと。無經驗家は腐敗を防ぐ爲めに防腐劑を使ふかと思へば、險約の爲め硫酸紙の代りにパラピン紙を用ひて、白色の身に黑みを帶びさせてしまう樣な、どちらもけちな、間違つた仕かたであること。などがあつて、

『北海道物は不良品があつたら、製造家の怠慢もしくは不正行爲である。何となれば、北海道の製造家等は古くから良不良の經驗をしてゐるからである。（ここは、氷峰の二重圏點。）然し樺太物に不良品が出れば、北海道のと同樣、製造家の知りつつ惡意的に手を省くところから來るのもないではなからうが、多くは新らしい製造家等が、無經驗の爲め、知らずに不良な結果を生ぜしめるのだ』と結んだ。

そして、義雄が多大の不平と輕蔑とを以つて取り扱つてゐる製造主任なる從兄弟の無考へと不都合

とを云はなかつたのは、――云ふ折があれば、渠として、必らず正直に云つただらうが、――この原稿依頼者の註文が失敗の方面を話せと云ふのではなかつたからである。
義雄はこれを書き終り、讀み返しもしないで、渡してしまつた。そして、
『これが雜誌に掲載されて出る頃にやア、僕の樺太に於ける第二期の仕事も、大分出來てゐるだらうよ』と、氷峰に語つた。

## 九

義雄は朝夕お鳥のことが氣にかかる如く、樺太の方も亦心配で、心配でたまらないのだ。
最も有望な第一期の仕事は六月一杯で終はり、七月は、蟹の新たに發育する時で、取つてもちいさくて駄目だし、その上、雜漁者(ざつりようしや)等が昆布の採集に忙しいから、鑵詰製造業は一時中止の姿だ。最も經驗ある事業家はこの時でその年の事業を切りあげ、翌年の計畫擴張やら、賣り込みさきとの談判やらの爲めに、函館、東京などへ出てしまう。
義雄等は東京から來て、事業が小規模なので、マオカの問屋と直き取引にしてゐるから、上京の必要もないままに、且は第一期の失敗を恢復するつもりで、第二期の仕事に、手を出す用意をした。
マオカから七里ほど北のオタトモといふところに製造所があるのだが、そこは八月から浪が荒くな

るので、四里ばかり手前へ假製造所を定め、また別に一ケ所、マオカの南一里ばかりのテイヤにも設けた。

ところが、二ケ所とも、義雄の出發するまでは仕事を初めることが出來なかつた。渠はその後の事情を知りたいのだ。

『シコトハシメタカヘン』といふ電報を弟あてにして打つた。それと同時に、本年の引きあげまでの心得を繰り返した手紙を出し、

『この手紙着する頃には、大分仕事が出來てゐる筈だから、賣りあげ代金のうちから、自分が云ひ置いて來ただけの小使を送つて來い』といふことをつけ加へてやつた。それも電報がわせで送れと書いたのである。渠はこの事業を初めてから、何事にも電報を用ひ、また用ひられなければならない様な氣になつてゐた。

戀の文句を電報でやり、それに對する返事を電報でよこさせようとしたが、お鳥がそれをしなかつた時は、義雄の怒りは非常であつた。それから、一つには、かの女の熱心を疑ふ念が増した。渠は人生の實行的文學に對すると同樣、

『戀も一種の事業だ』といふ感じが胸に溢れてゐる。そして、事業に對しても亦戀その物であるかの樣になる。

お鳥が一たび自分を離れて、また自分の胸中に投じて來た時の樣に、義雄は、失敗しかけた事業をもとの通り早く恢復するには、氷峰のまだ分らない成功を何ケ月か待つてゐるよりも、小樽の松田の方を何とかまとめるのが近道だと思つてゐる。

氷峰の言を思ひ出せば、松田兄弟は當てにならない樣だが、每年三十萬内外の資本を運轉して、汽船の所有もある漁業家だ。當てにならないのは、寧ろその事業全體に關する運命に出會した時だけで、三千や四千の出費は、どうにでもして、協同に本當の愛さへあれば出せないことはなからう。

かういふ戀愛的な考へを以つて、慇懃な情の籠つた、然し親しさうなだけ疑念に滿ち滿ちた手紙を、松田氏並にその會計主任森本春雄――義雄が樺太巡遊中に知り合になつた年下の人――に送つた。この人も旅から歸つたかも知れないと思つたからだ。そして、面會の上熟談したいから、都合を知らして呉れろと云つてやつた。

戀文やら、原稿やら、電報やら、事業に關する手紙やら、義雄は一時に精力を集中した爲め、久し振りで執筆上の努力を爲し得た氣がして、心がすが〳〵しくなつた。

碁を打つても勝ち越しになるので、氷峰をとう〳〵先にしてしまつた。後者は躍起になつて來るが、前者は然しさう熱心でない。たゞ時間つぶしにやつてゐた。

義雄は全體碁よりも、玉突が好きだ。東京では毎日の樣にやつてゐたのが、マオカでは旅館に臺が据わつてゐたから、日に幾度となくやつた。その爲めに、義雄は不斷に倍した活氣があつたし、また、町のおもな人々並びに藝者などに多くの知り合も出來たが、今はそれがやれない狀態を考へると、如何にも心細い。

『せめて、小使だけでも早く樺太から送つて來ればいい。』かう思つて、夕飯後、弟の返電が來てゐるだらうと、有馬の家をたづねた。

返電は來て居ないが、義雄の最近殆ど忘れてゐた家の方から、渠が樺太で書いて、この二三年間、便りしないと云つてやつた最後の手紙――それには、有馬氏の番地を知らしてあつた――に對する妻の長い返事が來てゐた。これも最後の便りの樣だ。

かの女もいよ／＼あきらめたと見え、これまでによこした樣な、讀むのも面倒臭い泣き言は書いてない。その終りの方に、

『あなたがあんな事業などを思ひ立つた爲め、家族はこんな苦しみをしなければならぬ樣になつたのです。それも、今は、もう云ひますまい。わたくし共が血を吐く思ひを以つて、家のことで奔走してゐるのも、今は云ひますまい。その代り、家族に冷淡なあなたを措いて、家の處分はわたくしが勝手につけます。あなたは歸つて來てはなりません。

『仰せの通り、もしそのまま失敗に終るなら、二三年が十年でも、あなたの所謂放浪とやらをおしなさい。妻子は東京で、あなたは北海道で、かつゑ死にをすれば、さぞ世の中でえらいと賞めましよう。世間はあなたを先生と呼びます。おほかた、放浪と餓ゑ死にの先生でしよう。

『あなたはお鳥を思ひ切つたと云つて來ましたが、それを本當としても、時機が遲いです。あの女は毒とやらを移したり、移されたりして、加集と一緒にもがいてゐると云ひますよ。』

義雄はこの一節に至つて、無念に堪へられない樣な息づかひをした。それが爲めに、申しわけがなく、お鳥は文通を斷念したのか知らんと、胸に憤怒をみなぎらして考へた。然し妻の云ふことも誰かにいい加減なおだてを喰つたのかも知らんと、また默讀をつづける――

『加集は惡人です、あなたの御注意を待たず、わたくしが家へは近づけません。あなたの友人ではありましようが、わたくし共の災難に乘じてこの家を賣らせ、自分がその間に這入つて口錢を取らうといふ考へであるのを看破しました。あいつとお鳥とで人の家をのツ取ればさぞよかつたでしようが、わたくしはさうはさせません。』

ここに至つて、また泣き言、恨み言が面倒臭いと思ひ、直ぐ破り棄てようとしたが、もう、その終りになるので、またつづける――

『あなたは注意をして加集に家の處分の世話を賴むなら賴めと云はれますが、わたくしはあんな奴は

いやです。あなたが如何に家に冷淡でも、わたくしにもまた相談相手があります。

『これで手紙は暫く出しません。また貰はないでもよろしい。どこへ行くか分らないと云ふ仰せですから、あなた宛の郵便物は兎に角有馬氏方まで屆けることに致します』と結んである。

義雄はその『わたくしにもまた相談相手があります』といふところを讀み返して、ふと、男が出來たといふ意味ではないかと思つた。

お鳥の手紙に、『わたしの行ひをかれこれ下らん心配をするより、まア、御自分のかかアを御注意おしなさい。色氣違ひの樣だから、誰れとくッついてゐるか分らないでしよう』といふ、からかふ樣な、諷する樣な言葉があつたのを思ひ合はせ、若しさうなら、離緣の口實も出來て、却つて自分には好都合だと考へた。

然しそれは餘り自分の都合ばかりを計つた考へであつて、若しあの四十婆々アが三人の兒を無くなし、なほ三人の兒を犬ッころの樣に大事に育てつつ、その養育に朝から晩まで燒きもきする有樣を思ひ浮べると、吹き出したくなる程冷笑したくなり、男を拵らへる樣な、そんな洒落れた餘裕があらう筈はないと信じられる。そして、

『八月七日、千代より。田村先生』とある、その最後の宛名の先生などと如何にも皮肉ッたのを見ると、義雄は、妻の千代子のヒステリを嚙み殺した樣な、憎いほど厭な、瘦せこけづらを目の前に浮べずに

はゐられない。
『家のことに就いては、何とも云つてないか、ね』と、そばから勇が聽くのに答へて、
『これでは、賣つたとも、賣れないとも書いてない』と云つて、義雄はその手紙をずた〳〵に引き裂き、そのことに就いてはそれツ切り何にも語らず、『君、散步しよう』と、勇をつれ出した。
　舊曆七日の月が鎌の樣にとがつて、その鋭い光を横ざまに暗い繁樹の間から投げる博物館の構內——牧草の生ひ繁るなかの小徑を、二人して無言で散步すると、義雄は異樣な凄みと空想とにおぞ氣が立つをおぼえる。
　そして、博物館內に陳列してある、あの剝製のおほ熊や小熊がもとの通り生き返つて西洋館窓を拔け出すとする。そして、生ひ繁る牧草の間から、その黑い影を現はすと、骨格逞しいアイノの鬚武者が、マキリの代りに、あの弦月の鎌を握つて、熊の喉なる月の輪をねらふ。
　きゆツと、どこかで何物かの聲がした樣だ。
『何だらう』と、義雄が氣味惡さうに立ちどまると、
『栗鼠がゐるかも知れない』と、勇が答へる。
　義雄はそれで思ひ出したが、樺太ノダサンの殖民豫定地を巡見する時、濕地蕗や大いたどりの人影を沒する間をかき分け、水芭蕉や、濕地ぜんまいや、道一面の木賊などを踏み行き、一條の小流れへ

出ると、ちよツとしたドロ柳の曲りくねつた幹の上で、二三匹の栗鼠が遊んでゐるのを見た。

それから聯想したのは、山ダニに取ツつかれたことだ。宗谷(そうや)ナイボの露領時代の濫伐林の跡を見に行つた時、椴松、蝦夷松の枝からふり落ちるどす黑い――雌は赤黑い――ダニが、蕗や芭蕉の葉から義雄等に移り、汽船に歸つてから、それを取り盡すになか〳〵骨が折れた。二三日も知らないでゐたのは、足や腹の毛穴に喰ひ入つて、黑い山葡萄の實ほどに太つてゐた。義雄はぞツとすると同時に、

『蛇は出て來はしないが、ね』と聽くと、

『そんな物は、まア、ゐない、ね。』

義雄は思想上蛇を大好きなのだ。蛇が直立すれば人間だらうとも思つて居る。然しそれはその自然のままの狀態に於いてばかり考へてゐられるのであつて、もし一たび直立しかけると、もう、自分の敵であるのが分つた。自分はいつ、どこでも、自分の自由を自在に發展するといふ考へを防げられたくない。

といふのは、樺太旅行中に、同行者の一人が眞蟲(まむし)に嚙まれて、希望通りの同行をつづけることが出來なかつた。その時、眞蟲は橫長の體を直立させて、義雄にも飛びかからうとした。渠は然しそれを、手に持つてゐた熊よけ喇叭(汽船の代用汽笛であつた)を以てなぐり倒し、それから踏み殺して、

『敵討するものは何でもうち滅ぼして行くのが自然だ』と叫んだ。そして、その敵手の性質、勢力、惡意をも自分の物としてしまうのが自己自然の努力だと思つた。蛇も自分の内容の一部だと見られる樣になつてこそ、嫌ひでなくなるのだ。

から云ふ追想やら思索やらに耽りながら、義雄は建物の前の方へまわり、何とも知れない大木に行き、月光がちらちらとその繁葉をかき分けて漏れる樹かげの石に、勇と共に腰をかける。

渠は身づからこの夜の氣を吐いてゐる樣な心持ちになり、その氣の中に浮ぶ東京、樺太、失敗、失戀、札幌の滯在等が、目がねでのぞく綺麗な景の樣に、自分の世界と見える。そして、かたわらの勇が、

『何とか恢復させてやりたいもんだ、ね、その——君の——あの事業を』と云ふのを聽いて、

『事業は外形によつて拘束されない』と、義雄は答へる。そして、今組みあがつてゐた刹那の現實世界をうち毀されてしまつた氣がする。

この時、眼界の不透明な（と渠は考へられる）友人を厭な蛇だと思つた。

その不平を渠は例の思ひ切つた婦人論や教育論へ持つて行つて、勇をなやますと、勇は自分も學校教師に飽き、年取つて來た細君を嫌ひな點もあるのだから、義雄の云ふところに『半面の眞理』はあるとうなづく。

『然し、君、その半面をもツと充分、神經まで體得して見給へ、それに裏はらはなくなるよ』と、義雄が云ふ。『たとへば、僕が事業に成功しても、失敗しても、僕その物に變りはない。』

『努力さへしたのならいいと云ふのだらうが』と、勇は義雄の意を受けて答へた。『然し僕等はさう行かない、成功と失敗とは直ぐ自分の現在の生活に影響すると思ふから、ね。』

『家庭や學校に囚はれてゐるからだ』と、義雄は無遠慮に云つた。こちらへ暗に勇の諷意があると思つたからだ。『教師などよしてしまひ給へ。』

『僕もさう考へてゐるが、ね――』勇は素直に應じてゐた。

義雄は勇と共に有馬の家まで歸つたが、あがらないで、弟の返電が來てゐるか、どうかを聽いて貰うと、まだ來てゐない。

『どいつも、こいつも不熱心な奴等だ』と、渠は靴脫ぎの土を右足の下駄で蹴つたが、勇の立つてゐる前だと氣がついて、それを取り消すかの樣なにが笑ひをする。

『さう短氣を起さないで、氣ながに待ち給へ』と云ふ、勇の冷かしとも見えるおやぢじみた言葉を耳にしながら、渠に別れて義雄は氷峰の家へ行つた。

いつのまにか、義雄は氷峰の家の客の樣になつてしまつた。小樽へ出した手紙の宿所もここにしてあつたから、ここへその返事が來た。

森本春雄からで、義雄はそれを顫ひつくほど熱心な態度で讀んで見たが、それを卷き納める時は、失望の體に見えた。

『ことわりか』と、氷峰は原稿を書きながら聽く。

『なアに、主人が旅行中でまだ相談出來ないと、さ――會計主任からの返事で、松田は漁業組合總會出席の爲め函館へ行つた。』から云つて、義雄は卷き納めたのを封筒に返した。

『そりや困つた、なア。』氷峰も筆を擱いて卷煙草に火をつける。『いつ歸ると云ふのか？』

『まア、今月一杯はあちらにゐるらしい。』

『當てにせずに待つ、さ。』

『會計主任もあさつて頃は函館へ行くと書いてある。それに、行つたら必らず雜誌の相談もまとめるつもりだから、この手紙着次第直ぐ印刷上の見積りをどこか札幌の印刷屋でさして、郵送して吳れと云ふんだ。』から云つて、義雄は氷峰に、この主任なる人と自分との間に、一種の他の話が進行しかかつてゐることを語る。

實は、森本の關係ある漁場は樺太の西海岸に於いて多少勢力があるのを利用して、森本は西海岸の

漁業家を誘引し、今ある組合と衝突しない範圍に於いて、一つの團體を作り、政廳の施政方針に當る一雜誌を持たうとしてゐる。

初めは新聞を起さうと企ててゐたのだ。然し、それは森本の青年的客氣にまかせて、無學な主人の事業的意氣込みに訴へたに過ぎないから、餘り無謀過ぎるだらうと、義雄が忠告した。では、東京の一新聞を相當の金で抱き込まうかと云ふことであつた。それも、義雄は無駄だらうと判定した。そして、結局、ちよツとした新聞體の月刊雜誌がよからうと云ふことになつた。そして、その編輯者は、名を出さないでもいいのなら、義雄が樺太にゐる片手間にやらふと云ふ相談になつてゐる。

鑵詰製造上の協同が成り立つ上に、その雜誌の關係がつくとすれば、義雄の樺太に於ける位置は一層確かになるにきまつてゐるから、渠も一と肩入れる氣になつたのである。體裁も大體は決めてあるのだから、高見呑牛のやつてゐる週刊北星を持つて行つて、氷峰の出さうとする北海實業雜誌の印刷屋で見積り書を取り、それを小樽へ郵送するついでに、

『協同問題の件もしツかり賴みます』と云ふことを附け加へた。

全體、樺太の西海岸と東海岸とは全く利害を異にしてゐる。西は鰊を專らとし、東は鮭鱒を主とする。同じ建網稅問題でも、前者に不利益なことが後者にさう痛痒を感じない。現に、函館に於ける總會も別々で、西海岸の組合のがあつた後で、東海岸並びに亞庭灣のがある。兩者の利害が一致しないのを

政廳はつけ込みどころとしてゐるらしい。

かう云ふ事情を解するに至つてから、義雄は目前實際の政治的問題にも興味を有する樣になつてゐるので、自分の製造事業の協同は勿論、政治的意味の漁業雜誌を引き受けるのも亦面白いと思つてゐるのだ。

二

いよ〳〵歡迎會當日の土曜日が來た。

巖本天聲が、朝、最後の相談を決めに氷峰を訪ねて來た。それが歸ると、メール社の一記者が來て、義雄の樺太談や自然主義の三派論やを筆記して歸つた。それから、また、有馬勇がやつて來た。

『手紙が來たよ』と、勇がふところから出すのを見ると、お鳥からのだ。義雄は胸を踊らしたが、さうは見せないで、受け取つた。一たびマオカへ行つたのがまわつて來たのだ。

『それが例のか、ね？』勇は微笑して聽く。

『さうだ。』義雄が答へて、開封しかけると、

『矢ツ張り向ふにも未練があるのぢや、な』と、氷峰は机に向ひながら冷かす。『こんな貧乏文士か事業家か分らない奴は、早く見限つてしまへばよからうに――』

『いや、女といふ奴ア執念深いから、ね』と、勇はもつともらしく云ふ。

『さう馬鹿にしたものでもない、さ。』義雄は身づからまぎらしながらそれを默讀してゐたが、叫んだには、『不都合だ、ねえ、樺太の郵便局は！』

そして、この二友に別々に送つた郵便物が屆かなかつたことのある上に、義雄からお島に送つた手紙にも向ふへ屆かないのがあつたことを語つた。

『あなたはかう〱云ふことを書いてよこしたに返事しないとおこつてゐられますが、そんな手紙は來てゐません』とある。義雄の心には、直ぐお島からよこしたのにも自分の手に屆かないのがあるのだらうと思つた。そして、

『内地や北海道では、滅多にそんなことがないのに、樺太に關する郵便物の不着や紛失の度々あるのは、實に不都合だ』と云ふ。

『戀の交換を妨げるくせ物ぢやから、充分おこつてやれ』とは、氷峰の冷かし半分の意見だ。

『實際、さうだ』と、義雄は眞面目に憤慨しながら讀んで見ると、相變らずくだ〱しい恨み言ばかりだ。それに、最近の而も最終のとして勇に讀み聽かせた手紙には、病氣のことは忘れたかの樣に書いてなかつたから安心してゐたが、今回のにはまたそれがひどくなつてつらいとある。

あの病氣が慢性になつてゐるので、直つたかと思ふと、またひどくなるのだらうと、義雄は想像す

る。自分がさつぱり(だらう)直つてしまつた經驗があるだけ、直らないものの苦しみが思ひやられる。
果して病氣が直らないものとすれば、自分と別衾した經驗でも分つてゐるが、男と關係してゐるとは思へない。然し、かの女として充分燒きもきすべきよそ行き衣類質出しの件は何とも云つてゐない。そして、薬り代を送れ、食料をよこせとある。
誰れか泣きつく人を見つけて、それに質物を出して貰つたので、目下の必要ばかりを云つて來るのだらうかとも思ふ。お鳥の身の上を考へれば考へるほど、義雄のあたまは疑念に囚はれて行くのである。然し、まだ宛て名に、
『戀しき義雄さま』と書けるのに免じて、表面は心をやわらげ、これまでの自分の疑ひは全く惡かつた。許して貰ひたい。然し局面はまだ發展しないから、思ふ樣に送金は出來ない。といふ樣なことを認め、氷峰がきのふその金主から工面して呉れたうちから、五圓札二枚を封入した。
渠がその長い手紙(戀文だ)を書くまをぼんやり待つてゐるのもつまらないと思つたのだらう、勇は中途から歸つてしまつた。氷峰は平氣で自分の仕事をしてゐる。
義雄は封書に『東京市京橋區木挽町二丁目三番地海老名方淸水鳥子殿』の宛名を書き、それを手にして通りに出で、一二丁さきのポストに投じた。
そして、ふところなるお鳥の手紙を出して、引き裂き、路傍の排水渠(はいすゐきよ)に流した。かの女(ちよ)の手紙を棄

てたのは、これが初めてだ。『下女奉公の口がありましたが、病氣でつとまらないからよしました』とあつたので、若しそれを氷峰にでも見られて、お前の色女は下女になつたのかなど冷かされては、今度もしかの女を札幌へ呼んだ時の自分の威嚴に關すると思つたからである。

然し渠はそれだけかの女に對する心の空疎をおぼえ、路傍のイタヤもみぢや鐵工場の音などの方が今では、却つて、自分に密接な樣に感じた。

然しまたその日が特別に愉快に思はれたのは、決してただ渠に對する夜の歡迎會が待たれると云ふ理由ばかりではなかつた。

中島遊園は樹木を以つて蔽はれ、なかに丸木ぶねやボートを浮けた大きな池がある。その池の周圍に二三軒の料理屋がある。市中のはづれだから、繁盛は夏分に限つてゐる。冬になれば、何か特別な目的がなければ、このはづれまで數尺の積雪を分けて來るものはないと云ふ。

そこに、立派な西洋建ての北海道物產陳列所があつて、その附屬として、北海道林業會出品の寄せ木家屋が建つてゐる。用材はすべて同道特產の木材である。床の間は山桑のふち、ヤチダモの板、イタヤ木理の落し掛け、センの天井。書院はクルミの机、カツラ木理の天井、オンコの欄間、トチの腰板、ヤシの脇壁板。床脇はシロコの地板、サビタ瘤の地袋ばしら、ヤチダモ根の木口包み、オンコの

上棚板、ブナの下げづか。緣側はトド丸太の桁、アカダモの緣ぶち、並びに板、蝦夷松及びヒノキの垂木。座敷仕切りはクルミの欄間、ヒバ並びにガンピの釣りづか、ケンポナシの廊下の緣ぶち。鴨居並びに天井板はすべて蝦夷松。敷居は蝦夷松、五葉の松の取り合せ。西洋間の窓並びに唐戶の枠は蝦夷松、額ぶちはヌカセン、その天井板二十五種、腰羽目板二十二種は、以上に擧げた種類の外に、シナ、ナラ、シウリ、エンジユ、櫻、榭、朴の木、ドロ、山モミヂ、オヒヨウ楡、ハンの木、アサダ、サンチン、カタ杉、檜の木などだ。

義雄は、樺太トマリオロの鐵道工事並びに新着手炭坑を見に行つた時、山奧の平地のセン、イタヤ、ドロ、アカダモなどの間を切り開いて、そこに大仕掛けの炭坑事務所を新築してゐる。その新木材の強いにほひを嗅ぎ、深山のオゾンに醉はせられた樣な、如何にもいい、而も健全な心地を自分の神經に受けてからと云ふもの、木材に非常な趣味を持つて來た。且、また、樺太に歸れば、見積りした計畫通り、罐箱や鑵入れ箱の製造かたがた、木材をも取り扱つて見ようとする考へがある。だから、氷峰と共に池のふちや陳列所の庭を散步し、この出品家屋のなかへ這入つた時は、何よりも熱心にその用材の種類を注意して見た。

『さう見たり、さはつたりして、君にはそれが分るのかい。』氷峰は早く去りたさうになじる。

『うん。』義雄は獨り面白さうにうなづきながら、『少し考へがないでもないのだ。』

『君は山海を選ばず、餘り氣が多い、なア。』氷峰は捨てぜりふの樣に云つて下り口の方へ行く。
『然し何か一つ成功して見たいではないか』と、義雄も渠についてそこを出たが、玄關の桁や垂木がカツラだと云ふのを名殘り惜しさうに見てゐる。
『さア、行から、遲くなるから。』氷峰に促されて、庭の芝草の間を通り、陳列所の門を右に出て、池のほとりのナラや椎の木らしい樹かげを行き、涼しさうに舟遊びをして若い男女がきやア〱喜んでゐる方をながめながら、西の宮支店の前に來た。そして、二人は、
『田村君歡迎會場』といふ幅びろの長い紙を張りつけてある門を這入つた。

天聲、呑牛、氷峰など、義雄が既に知つてゐるもの等のほかに、集つたのは旬刊北海新聞の菅野雪影、小樽新報支社の北山孤雲。以上の諸氏は孰れもその部下二三名から五六名をつれて來た。その他に、物集北劍、有馬勇、もと新聞記者であつて今は競馬會社取締の濱野繁太郎、後藤遞相を室蘭へ送つて行つて、今札幌へ歸つて來た道會議員の松本雄次郎などだ。來ると云つて來なかつたのが、氷峰の雜誌の社長や、札幌電氣會社の取締某などだ。
都合二十個足らずの脇息が大廣間の上並びにその左右に並んだ。上中央は義雄、左りは松本雄次郎、右は濱野繁太郎。松本の次ぎは有馬、その次ぎは天聲並びにその社員。濱野の次ぎは北劍、その次ぎ

は孤雲並びにその社員。氷峰は、この會の發議者であるから、遠慮して、その社員と共に、右手の末に控へると、それに向つた左り手の末に雪影一派が坐わつてゐる。

藝者七八名の酌が一巡した時、孤雲が下座にまわつて、歡迎の辭を述べた。渠は記者の故參でもあり、また溫厚實直の人望家でもあるから、その選に當つたのだ。

渠は義雄の文學上に於ける功績を賞讃し、長い間、文壇に奔走して倦むことなく、詩に、評論に、散文詩に、小說に、自分等に敎へることが多かつたこと。特に、近來、文壇並びに思想界に於いて、新主義運動の急先鋒であること。また、今回、樺太に於ける蟹の雄詰とかを製造する事業を起し、文壇の餘勢を實業界にも張らうとする勇氣は感服せざるを得ないこと。たま〱自分等の土地を見舞つて與れたのを幸ひ、ここに有志のものが歡迎會を開らくに至つたこと。などを、熟達した巧妙の辯を以つて、二十分ばかり演說し、もて爲しとては大したことはないが、充分に、自分等と共に、歡を盡して貰ひたいと云つて、もとの席についた。

『あの人が自然主義?』などと云つて、藝者どもは珍らしさうに義雄の方を見ながら、互ひにこそこそばなしをしてゐるのがきこえた。

義雄は、こんな歡迎會をされたのは初めてであるから、ちよツとまごついた。五百や六百の聽衆に對して平氣で演說することはあつても、自分一個に對する宴會にのぞんでは、どうしていいか、急に

考へがつかなかつた。そして、やつてゐる仕事その物から位づけすれば、自分は左ほど謙遜するにも及ばない樣だが、兎に角、自分よりも年うへの人々がゐるのを見渡すと、何となくありがたくツて、胸が一杯になる。

『どう云つて、禮を云はう』と、渠は下座に出てから考へたが、さうまごついてゐるのを見られるのは面白くないから、思ひ切つて、『諸君の御もて爲しに對しては、わたくしは非常に喜んでをります』と發言した。そして、自分はさう重く見られようとは思はなかつたことを述べた時などは、涙も出からないばかりであつた。

出席の人々は渠から何か大氣焰でも聽かされることを豫期してゐたらしいが、渠は氣焰を吐くには餘り張り合のない會だと思つてゐたから、丁寧に禮だけ述べて席についた。

そして、冷靜になつて考へると、この會は自分を東都の文學者としてのことだ。自分は渠等の想像してゐる樣な遊戲的な文學者で滿足してゐない。それよりも、寧ろ實業界に足を投じ出した祝ひでもして呉れたのであつたら、この會は自分に最もありがたかつたのにと思つた。

酒は大部まはつた樣だ。あちらにも、こちらにも、藝者の三味線に乘つて、なかなか上手な端唄やら、都々一などが初まる。おけさ節も出れば、いそ節、ほうかい節、しののめ節も出る。

『僕は、仙臺の「さんさ時雨」を聽くと非常に愉快になりますが、北海道の「追分」を聽くとその反

對に非常に悲しくなる。好きな女があれば、それと心中でもしたくなります』と、義雄が松本に語つてゐるのを聽き、

『あら、心中ではつまりません、ね』と、そばにゐた老藝者が酌をしながら云ふ。

『お前でも』と、松本はその藝者に向つて『昔、心中しかけたことがあるではないか？』

『それだから、旦那』と、かの女は平手を下に振つて『つまらないと云ふのです、わ。』

『では、先生、僕が一つ歌つて聽かせましようか』と、メール社の追ひ分上手と云はれる一記者が進んで來て、それを歌ふ。なか〱うまい物だ。そして、その藝者は三味を合せながら、スイ〱と云ふかけ聲をする。

『おしよろ――たかしィま――（ア、スイ）およびはないが、よ――（ア、スイ〱）せめて――（スイ）うたすつ――（ア、スイ）いそやまでよ――（ア、スイ〱）』

その簡朴悠長にして、哀韻嫋々、どこまでも續いて、どこまでも絕えず、細く、長く、悲しい響きを傳へる。それを聽くと、義雄は今、一方に、北海原野の單調な雪景はかうもあらうかと感じ、また一方に、早くお鳥を呼び寄せ、そんなところで二人しツぽり一と冬を暮して見たいと思ふ。

然し松本は、通を氣取る劇評家がわざと冷然として芝居を見る如く、追ひ分などは上手なのを聽き飽きたといふ風をしてゐる。そして、義雄に、後藤遞相隨行中の奇談などを物語つた。

文學者だと思つてだらう、或代議士が遞相と同船中、家持の長歌『海行かば』云々、『山行かば』云云の句を解し得なかつた滑稽を、特に面白さうに話した。その代議士は、『水づくかばね』のみづは海の水だらうが、くかばねとは何か分らない。また『苔蒸すかばね』のむすが分らない、むすめなら分るが――などと云つたさうだ。

『とても、話せないです、なア』と、松本は附け加へて、今度は後藤男爵のことに移つた。そして、渠は漢詩を作るので、それに見識あるをほのめかしつつ、男爵の詩の拙劣な例などを擧げた。

『然しあの人は』と、義雄は多少自分の好きな者を辯護する樣に、『今では、伊藤さん、大隈さんに次いで、面白い役割りを持つてゐる人物でしよう。』

『なアに、まだ膽ツたまが出來ない。』

『その點は無論さうです』と答へた。義雄もそれは考へてゐることであるから、その一例として、この男爵が滿洲の金貨本位を提出した時、伊藤さんにあたまから叱りつけられたので、非常に頭痛に病んでゐたことを話した。そして、『下のものに横柄で、上のものにぺこ／＼する間は、あの人もまだ第一流にはなれません、ね』と云つた。

『少し僕等は耳が痛いです、なア』と、濱野は義雄の右から口を出した。『新聞記者をしてゐた時は、さうあたまを下げずに濟んだが、今の商賈ではなか／＼さうは行かん。』

義雄と濱野とが競馬の話から、樺太馬は小くていいのがない事などを話してゐるまに、向ふの方で、孤雲が頻りに扇子を以つて膝をたたきながら、アオウ、アオウと鼓のかけ聲をしてゐる。それに向つた藝者は長唄『勸進帳』の初めの合の手を一生懸命に彈いてゐる。

一向歌が出ない。

『出ないぢやアありませんか』と、藝者はなほ彈いてゐる。そして、孤雲はまた眞面目くさつた微笑を以つてそのかけ聲ばかりをつづける。藝者はつひに彈きくたびれて、三味をやめてしまう。

『孤雲先生まだ醉つてゐない、なア』と、それを見てゐた北劍は捨てぜりふに云つて自分の席を立ち、義雄のそばに來て、『おい、兄弟』と、渠の肩を叩く。『君と會ふたのは偶然と云へないぞ』と云ひながら、杯の交換を偽し、北劍は、孤雲があのあり樣を通り越して、本當に歌ひ出すまでにならなければ、いつも、出席者全體が充分飲んだとはまだ云へないといふことを說明する。

『妙な尺度が出來てゐるんだ、ね』と云つて、義雄は北劍のあひ手をしてゐるところへ、かはり番こに、香牛が來る、天聲が來る、孤雲が來る。道中最も古株の三面記者で、小說も書けば、俳句も詠むと云ふ老人が來る。芝居好きでその身代をつぶし、今は劇評家兼花柳界消息通になつて滿足してゐると云ふ大熊緣紅が來る。

義雄が自分の席を立つて各席をまわつた時、北海新聞の雪影だけその影をとどめてゐなかつた。どうしたのだと、こツそり氷峰に聽くと、席順に不平があつて早く歸つたとのことだ。そして、渠はその理由を說明した。雪影は札幌記者俱樂部から排斥されてゐるもので、自分の機關を利用して恐喝的手段を弄することが甚しく、呑牛第二世と言はれてゐる。呑牛は、氷峰が義雄に語つたによると、曾て刑事と稱して或油屋へ行き、そこの枡が法規に叶つてゐないから告訴するとおどし附けて金錢を强奪した爲め、數ケ月の臭い飯を喰つたことがある男だが、近頃では、そのすたれた名譽を回復しようとして謹直にしてゐる。ところが、雪影は、また、自分のところに使つてゐたハイカラ女を入れて、自分の妻を離緣し、それを遊女に賣り飛ばした形跡があるさうだ。そして、その新聞の資格から云つても、また最下等である。

然し席順の取り方は確かによくなかつた。同一社中をまとめて、その資格のいいのから上席を取つてあるから　雪影はメール社の末輩の下に坐わらせられる樣なことになつた。

『北海新聞は如何に劣等な社であるとしても、雪影は苟も一社の長である。それが他社の末輩の下座に置かれるのを、潔く辛抱するほどまだ墮落してをらない。かう云つて、渠は歸つたのぢや』と、氷峰は義雄に語つた。

雪影は歸つたが、その社中の一記者は殘つてゐた。そしてその記者は義雄に向ひ、北海道を巡遊す

る機會があるから行かないかと語つた。紀行文さへ貰へば、旅費は他に出させる道があると云ふのだ。
『そりやア望むところだから、話の都合によつたら行きましよう』と、義雄は答へる。
『では、あす相談にあがります』と、記者が云ふ。餘り容易な話なので、あの男はそんな話をする資格を持つてゐるのかと、義雄が氷峰に尋ねると、
『なアに、今巡錫中の本願寺法主を抱き込んでをるから、それに話すつもりだらう。メール社の相談よりもなほ當てにならぬ』と云ふ。
松本議員の方を見ると、綠紅が紙切れと鉛筆とを以つて何か談判をしてゐる。時々、何子、かに子と云つてゐるのを聽くと、別な藝者を寄附させる談判らしかつた。

やがて藝者が代つてしまつた。
孤雲の唄がいよ〳〵初まつた。義雄も、天聲のそばへ行つて、下手な二上りを歌つた。渠はもう歸りたいのであるが、平凡に來て、平凡に歸るのも何だか氣がとがめる樣であつたからである。そして、自分の唄に向つてゐる藝者をその夜の逸物と見たが、所有者のあると聽いた時、何と云ふわけでもないが失望した。
『土地の藝者に土地の男があるのは、何の不思議もない。』かういふことを義雄は心で云つて、心をま

ぎらせるつもりであつたが、この會に依つてます／＼札幌に親しみが出て來ただけ、自分もかの女を競爭することが出來ないでもなからう――金さへあれば――だが、今の狀態で考へると、この歡迎會その物も却つて自分を侮辱するのと同樣だ。いツそのこと、こんな時にこそ何事も忘れる爲めに遊廓へでもつれて行つて吳れるものがあればと思ふ。

『もう、歸つてもよからう、ねえ』と、氷峰を捕へて聽くと、

『まア、待ち給へ――今、計畫をしてゐるから』と答へる。

やがて義雄と氷峰とは玄關へ出た。

『お帽子は』と、女中がまごついてゐるのに對して、義雄は、

『その大きなのだ』と、例の麥藁帽を受け取つて、それをわざと阿彌陀に被る。

『丸で海水浴のお客さん見た樣です、わ』と云ふ、女中の笑ひ聲を脊に受けながら、渠と氷峰とはそこを去つた。(その麥藁帽子のうわさが、渠の殘した歡迎會第一の印象であつたさうだ。)

遊園の出口に、呑牛と綠紅とが待ち受けてゐた。そして、四人して、歸路を薄野に向つた。同席の老藝者がひとり、暗い樹かげ道を歸るのがおそろしいのか、義雄等の跡について來て、

『何の御相談です、惡いことはしないで、どなたもおうちへお歸りになる方がいいですよ』と云ふ。

それをさきへ行かしてから、四人はなほそろ／＼語りながら薄野の横手の入り口に行き、新川おほ

どぶの石橋の上にしやがんで、行くべきところを相談する。今一人同席の北海新聞記者に出會つたが、それはその黑い影を三等小路の方へ消してしまつた。

實は、誰れも金を持つてゐないのだ。どこは知つてゐるが、借金になつてゐるから行きにくい。かしこは面白いが、矢張り借りて置くことが出來ない。こんなことを云つてゐるので、義雄は氷峰から工面して貰つたのを提供すると、香牛と綠紅とは角の中店を決めに行つた。

月の光に、あたりの柳の枝がゆらいでゐるのが見える。橋のたもとからは、カンテラをとぼした露店の焼きもろこしのにほひがして來る。義雄は、このにほひが全身を以つて嗅げる限り、自分の神經は、他のもの等の習慣的に鈍り切つたのよりも、また鈍り切らないまでも部分的なのよりも、まだま だ鋭敏に全人的な努力をしてゐるのだと心丈夫に思つた。

『何をしてやがるのぢや』と、氷峰は獨り言の樣に、二人の周旋者のぐづ〱して歸らないのを、待ち遠しさにつぶやき、『然し、君』と、義雄に向つて云つた、『けふの樣な會は北海道に初めてぢやぞ——東都文士の團體を歡迎したことはあるけれど、個人の文士をこんなに歡待したことはなかつたのぢや。』

# 一二

とまつたのは義雄、氷峰、綠紅の三人で、呑牛は午前一時頃まで飮んで歸宅した。これが渠の近頃の慣例ださうだ。

呑牛はもと人數倍の遊び手であつた。渠としては、三四日のゐつづけなどは珍らしくなく、遊女屋から毎日、新聞社へ通勤した時代もある。また、行燈部屋に一週間もほうり込まれ、『行燈部屋日記』を書いたこともあるさうだ。

それが、近頃、酒こそ飮め、決して細君以外に關係したことがない。或人は腎虛したのだと云つてゐる。然しまた或人は、若い細君が盛んなので、それ以上に堪へることが出來ないのだと云つてゐる。

そんな人間が多くあるのを、義雄は北海道に來てから知つてゐるので、呑牛がどちらであつても、左ほど氣にもとめなかつた。然し渠は、朝になつてから、渠に向つて呑牛の相方が語つたことを耳底に殘した、乃ち、かうだ――

『高見さんは感心になつたの、ね――あの甚助と云はれた人が、奧さんを貰つてから、一度もとまつたことがありませんよ。本當に感心、ね。』

義雄がそこを出る時、そこの電話を借りて、小樽の森本春雄と五分間の話をかはした。いよ〳〵明日頃は函館へ行くかといふこと。行けば、雜誌の問題をしツかりやり給へといふこと。それから、共同談判は大體うまく行きさうかと聽くと、まだ何とも分らないから、さう當てにしてゐては困るとい

ふ返事である。

『僕の方は君等の話を實際當てにしてゐるのだから、これもしツかりやつて吳れ給へよ』と云つてるうち、話は變つて、

『君は今朝の小樽新報を見たか』と聽かれたので、

『まだ見ない』と答へると、

『君のことが載つてゐるぞ』と笑ひ聲だ。

それで五分間は切れてしまつた。氣になるので、早速氷峰に從つて北海實業雜誌社に歸り、小樽新報を探してゐると、氷峰が、

『このことだらう』と云つて、北海メール第一面の文藝欄に出た義雄の談話筆記『自然主義の三派』を見せた。

『いや、それとはまた別なことらしい』と、義雄がなほ探して見て、發見したのは小樽新報の欄外に出た『小說家田村氏の二十錢談判』といふのだ。樺太の新聞からの拔萃で、トマリオロの宿屋に於いて、隣室にとまつてゐたごけ志願者を僅か二十錢の違ひで買ひそこねたとある。

義雄はその意外なのに驚いた。然しそれに類似した事實はあつたので、實は、かうかう云ふのだと氷峰に向つて辯解した。氣があつたのはあつたのだが、非常に毒がありさうなので、本氣になれなか

つたのだ。
その日、メール社から義雄へ雜誌無名通信を讀めと屆けて來た。それにも、渠の私行上の、然し渠自身からおほぴらにしてゐることの素ッ突拔きが載つてゐる。そして、『渠が旅行に出る度每に女を拵らへて來ないことはない』とある側らに、誰れかのいたづらで、『而して歡迎會の歸りに女郎買ひをした』といふ朱書きがある。
さういふことを綜合して見て、義雄は當地にゐても自分の周圍が自分の爲めにいそがしい樣に見え、多少その意氣込みが揚らないでもなかつた。そして、樺太滯在中にも、東京新滑稽や、東京朝日新聞などに、お鳥との關係を書かれたことを思ひ出した。
然し、一方から考へると、さういふことはすべて過去のことだ。そして、現在の自分は殆ど全く戀もない。殆ど全く無一物である。無内容である。
この寂しい空疎に思ひ及ぶと、せめては早く弟の返電にでも接したくなる。然しそれも、今まで來ないなら、來さうにもない。
『多分、まだ仕事の發展が出來ないのだらう』と思ふと、義雄はこの誘惑の多い地方に空しくとどまることが出來かねる樣な氣がして、心はゐても立つてもゐられなくなる。

一三

北海實業雜誌社の隣りの娘お鈴はよく氷峰を目あてに社の茶の間へ遊びに來る。氷峰も必らず一度はそこへ顏を出すが、雜誌原稿の校正やら、順序取りやらにいそがしいので、お君が話し相手になつてゐる。

社のお君もまた屢々隣りへ遊びに行く。

義雄は、退屈まぎらしに、よくこの二人の娘にからかつて見たりする。お鳥がやつて來れば、いづれも、同じ樣な年頃の友達だと思ふからである。然し渠等は義雄を叔父さん扱ひにして、氷峰に對する樣なみづ〳〵しい態度を取つて吳れない。素人娘(しろうとむすめ)などは、とても、この場合、自分を慰籍して吳れるものではないのだらうと、義雄は考へてしまつた。

實は、お鳥の手紙を受け取る前に、渠は東京の友人なる或婦人に云つてやつたことがある。誰れか一人自分の愛婦に出來る婦人を見つけて吳れ。樺太へ一緖に行つて貰ひたいのだ。自分は、もとの愛婦に棄てられてから、實は寂寥で溜らない。若し自分の經歷と性質とをあなたの見た通りに、ありの儘に說明して、多少でもそれが分るものであつたら、成るべく年の若い美人の方がいいが、どんな家

業の女でもいい。

『あの老紳士の妾になつてゐて、それと手を切りたいと云つてゐた青森の女はどうしました？』から云ふことを思ひ出して、その人でもいいからと書き、自分は今の場合どんな女にでも、向ふが愛してくれさへすれば、降服してゐるだらう。決して尊敬を缺く樣なことはない。

『それに、妻子があつても、御存知の通り、自分はそれに全く愛情を持つことが出來ない。』表面は有婦の夫だが、精神的には、今回見つかつたものが本當の妻になれるのだ。

かういふ意味の義雄の照會に對して、そのをんな友達から返事が來た。然しそれはやわらかな冷罵を帶びた斷わりの返事だ。

『今度初めて田村さんのよわ音を伺ひました』などいふことがあつて、如何に精神的にはさうでないとも、女として自分が人の妾同前なものを世話することは出來ない。それに、あの青森生れの婦人はどこへ行つたか分らない。お望みの種類の女なら、そちらにも澤山ころがつてゐるようではないか？あなたの平生の手腕を振ふところはこの場合だ、といふ樣なことがある。

こんな斷わり手紙でも、優しい手で書かれたのだと思ふと、義雄には、實に嬉しい、有りがたい樣に感じられた。

『まさか、外國の戰場へ出かけてゐるのではあるまいし』と、渠は思ひ直して見たが、それでも女の

言葉が無暗になつかしい。

かう云ふ時に、お鳥の手紙(樺太からまわつて來たの)が來たのであつた。それに對する返事の返事には、

『早く歸つて來て下さい。それでなければ、そちらへ行きます』とあつた。然し義雄は、また、今少し方針のつくまで待つて呉れろと云つてやつたのだ。

義雄はお鳥を戀しいのは戀しいが、もとの樣にかの女に忠義立てをするほど誠實ではなくなつてゐる。もし他に愛する女が出來れば、お鳥などは呼ぶ必要がないとも思ふことがある。

然しそれを見つける道がないのだ。渠は聯想は屢々そば屋、だるま屋までに及ぶこともある。然しそんなところへ行くにも餘り無一文である。

渠は殆ど全く氷峰の食客になつてしまつた。

氷峰の急がしさうなのを見かねて、義雄は校正の手傳ひなどをしてやり、それに飽くと、有馬の家へ行くが、勇夫婦とは氣が合はないので、多くは市中を散歩する。そして、散歩の途中で行き違ふ艶ツぽい婦人は、すべて渠に餘り澄まし込んでゐる樣に見え、八百屋の百姓馬子と露店の燒きもろこしや林檎などが渠に最も親しみを感じさせるのである。

義雄は人間を離れて自然も天然もないと云ふ樣な考へを持つてゐながら、何となく人間がいやになつた樣な氣がする。渠は自己の存在を發見するところには必らず苦痛と悲哀とが伴ふことを承知してゐる。それが自己を逸して天然を親しみたくなるのは、明かに自己の自殺であるとは考へてゐるが、どうせ燒け死にをしてもかまはないのだと云ふ氣になると、表面的な天然の誘惑にも平氣で動かされるのが、却つて、自己最後の努力ではないかと云ふ思ひ切りにもなつて來る。

『ああ、人間界を離れて、何の苦もなく天然界に放浪して見たい！』かう考へると、樺太西海岸の巡遊は、餘り深い自己の變愛や事業やの失敗觀がつき添つてゐたので、無念無想的な快味が少しもなかつた。無論、そんな緩みがなかつたのだ。

それに、八月二十三日附けのハガキが弟から來たが、とても、話にならない。義雄からの電報並びに手紙は確かに受け取つたが、今暫く金を送ることは待つて吳れろ。テイヤ、ホロドマリ、兩製造場に於いて、まだ仕事を初めない。本年は風波の日が多く、昆布採集の方がまだ終らないが、もう、蟹があがる日も近いだらうから、とあるだけだ。

『ええツ、駄目だ、駄目だ！　渠等はその間何をしてゐるんだ』と、渠は大きく獨語したが、何もしないで、渠等はただ喰つてばかりゐる間拔けさ加減を思ひ浮べた。

ここにゐて、遠いあちらのことを思ふと、飛んで行つて、殘餘の仕事を切りあげさせたくなる。然

し切りあげさせるにも、多少の準備をこちらからして行かなければ、向ふに借金があるので、無事に歸つて來ることは出來ないにきまつてゐる。

成り行きにまかせるほか仕かたがない。

自分は寧ろこの重り重つた心の荷を全くおろしてしまつて、一つ、北海道中をまはつて見たい。さうすれば、氷峰や勇の家を煩はせることもなく、そしてそのうちには樺太の方も何とか方針がきまつてしまうだらうと思ふ。

かう思ふと、かの北海新聞記者が、歡迎會の席で語つたことをそのままにして、何の挨拶もなく、渠ばかりが本願寺法主と共に巡回してゐるのが羨ましい。然しまた考へて見ると、自分は、坊主などを取り込んで、自分の慾を滿たすほどまだ墮落はしてゐない。

北海メール社を動かすに限ると思つて、義雄は或夜巖本天聲の宅を音づれた。子分らしい青年記者が二人も來てゐて、自分等も文學者になりたいが、どうしたらいいだらうと云ふ樣な質問である。

義雄は渠等に忠告して、文學者などにはわけもなく成るものではない。文學者につき添ふ貧乏はなかなか辛抱し切れない、途中で商買換へをする位なら、初めから他に向ふ方がいい。同時代の友人が立派になつてゐる方向へ、――どの方向にも、友人はあるものだが、――中途から向つて行くのは、われながら間の拔けたものだといふ、自分の現在の經驗談をして聽かせた。

そして、一人の青年の如きは、あたまが惡いので、文學でもやつたらと決心したのだと云つたので、義雄は非常に怒つて、

『あたまの惡いものが緻密な文學などはなほ更ら出來る筈はない——巡査か郵便配達を志願しろ』と警告した。そして、隣りの庭を隔てた家から、長唄と三味線の聲が聽えるのに心を奪はれ、

『いつも聽いて痛快なのは、三味線の人間らしい聲だ、ねえ』と、渠は天聲に語る。そして旅行の問題に移つた時、天聲は、

『パスもあることだから、何とか相談して見よう』と答へた。

八月二十九日の夕かた、小樽の森本が義雄を訪問して來た。義雄はその時生憎留守であつたから、會ふことが出來ずにすんでしまつた。

然し、函館から歸つたのに相違ないから、その翌日、義雄は樣子を見に小樽へ出かけた。

小樽は北海道中最も商業的な都會で、金融機關が最もよく備はり、人間も亦最も多く活動してゐる。函館の繁華は昔の夢であつて、今は、その繁榮を小樽に奪はれてしまつた。札幌を純粹な官吏町とすれば、小樽は敏活な活動地である。

巡歴畫家などが行つて、得意げに抱一がどうだの、應擧がどうだの、雅邦がどうだのと說明しても、

そこの主人は感服して聽いてゐると思つたら間違ひ――話の途中をもかまはず、思ひ出した樣に番頭に聲をかけ、

『おい、店の方へ米五俵とどけたか』と云ふ樣なことを云ひ出す。などとは、義雄が氷峰から聽かせられてゐた。

松田の家は花園町にあり、四角に室をめぐらした二階建てで、中庭――冬になれば、雪が軒までも埋めてしまう――に向つた廊下のがらす戸は、如何にも巖丈で、うつとうしい日のつづく冬籠りの狀態を思はせる。

主人は函館から歸つた翌日、直ぐまた樺太の大泊へ渡つたさうだ。同所に、九月一日から三日間、樺太建網漁業家の大會が長官によつて招集されたからである。建網漁場入札税金の引き下げ、漁網の間隔擴張、漁期の延長、雜漁者の刺し網制限等、諸問題の爲めに建網家等が隨分強硬になつてゐるのを、長官はこの大會で相談的に融和折衷しようとするのだ。

森本も亦けふにも、あすにも、電報の來次第、應接に出かけることになつてゐるさうた。渠は、無論、主人の命令通り動かなければならないからと義雄に語つた。

玄關のがらす唐戸を這入つた十疊敷きの室の横にある帳場の格子前で、義雄は渠と對坐して對談した。

第一に、漁業雜誌の方は人々が不贊成ではないが、維持金を出すだけの熱心がないので、駄目だといふことが分つた。次ぎに、義雄がその前から頼んで手紙で聽いて貰つて置いた事件――乃ち、樺太西海岸の某漁場にたツた一個ある引き上げ蒸氣機械（所有主は今北海道の福島に歸つてゐる）を、本年の十一月から來年の漁業期前まで、木挽機械に使ふのを許して呉れないかと云ふ件――は、使用者さへ確かな責任あるものなら、貸してもいいと云ふ返事が來たことが分つた。

然しこの件は義雄が副業として材木屋もしくは鑵箱鱒箱製造を始める時の必要であるが、その先決問題であるべき鑵詰製造協同の件はまだ曖昧であるのだ。森本の主人が向ふから歸つて來なければ、分らないと云ふのだ。

『もう、どうでもいい。』などと、心では當てにしないが、結局を聽くまでは、相談しかけたことだからと思ひ、義雄は詳しい豫算書きを森本の手帳に控へさせた。

固定準備品――二百圓。ゆで釜並びに附屬品一切。八十五圓、チンプレス。七十五圓、切斷器。三十圓、切り搾り。十八圓、三本ロール。三十二圓、底締め。十一圓、胴附け。二十五圓、鍛冶屋道具。五圓、臺ばかり。計、四百八十一圓也。これは先づ三四年間は大丈夫つづく物だ。

消費品（百箱、四千八百鑵に附き）――二百四十圓、蟹二千四百疋。百九十二圓、空鑵並びにハンダ。

五十七圓六十錢、硫酸紙、ニス、鏝、並びに炭代。四十八圓、箱代並びに荷造り費。その他に、工場費——九十六圓、男五人、女十人の出面賃。運賃(小樽まで)——三十圓。計、六百六十三圓六十錢也。

それに對して、百箱の收入千圓也として。そして、原料を多く買ひ込み、出面の人數をふやしさへすれば、仕あがりの箱數が多くなるから、それだけ利益も亦多くなること。蟹一疋に附き、マオカで二十錢から二十五錢もしたのに、少し不便なオタトモでは始終八錢の値段を保つてゐたが、それも雜漁者數名を抱へて置けば、ずツと安い割合になること。ここ三四年で蟹は取り盡されてしまふかも知れないから、やるものは充分機敏に早くやらなければならないこと。などを附言した。

森本はそれに向つて頻りに考へをめぐらし、一年、二年、三年と、金利などをも見込んだ上、『年四割も利益のある仕事は餘りない、ね——まア、よく相談して見るから』と、その話はそれでおしまひになつた。

巖谷一六の筆で、『疎而不漏』と書いた大きな額がかかつてゐるのに氣か附いた。魚がどんな惡いことをしたのか知らないが、天網の恢々を漁網の嚴密なのに持つて行つて、漁業家の主人を世俗的に喜ばせた筆者の氣轉が思ひやられる。

『小樽の街でも歩いて見ようか』と、森本が云ひ出したのについて、

『行つてもいい、ね』と、義雄は答へる。

『では、ちよッと待つて呉れ給へ――けふ、二萬五千圓の鯨糟を取引きすることになつてゐるのが、晝を過ぎても音沙汰がないから』と、森本は電話口へ行つて、その本人を呼び出し、いつ頃來て呉れるかと云ふことを尋ねた。そして、『けふは日が惡いから、あすにすると、さ』と云つて、出て來た。

それから、二人して小樽のでこぼこした有名な石ころ道を歩み、街をまわつてから、山の公園地にのぼつた。後ろの方に、氷峰にうち込んでゐる女の住むと聽いた新遊廓が見える。前をのぞむと、洋洋たる海だ、大規模の築港も、半ば完成してゐる。

『小樽には、天然セメントの出る山があるので、築港にも非常な便利です』と、去十五日にここな汽車でとほつた時、同行者の一人が聽かせて呉れたことを、義雄は今思ひ出した。

森本と共に、海に向つた山上の茶屋に休み、林檎をむきながら、よも山のことを物語る――多くは樺太に關する話だ。

その話を聽き、また海上を浮ぶ汽船のうちには樺太へ往來するのもあると思へば、義雄の現事業地もたッた一晝夜の隣り――ただ海一つが隔てだ。然しその海が、渠自身の心中の缺陷と同樣、今では最も越え難い。

海の悲風が慘憺として自分の胸に吹き入る樣な氣がして、義雄は自分の足で自分を踏んでゐる絕體

絶命の位置を深く感ぜざるを得ない。

『苟しくもこのまま死んでしまはない以上、どうしても、この悲痛を實現する一大事業をしたい。』かう、心で叫びながら、自分も一つセメントの山でも發見したい。さう云ふ有形的な仕事が出來ないなら、無形的でもいい――たとへば、死といふ無内容物を轉じて、自己その物と同じ現實的存在物にして見たい。

かう云ふ空想に耽りつつ、義雄は一方に森本の極皮相的な、一般世俗的な事業觀や處世觀を聽くと、自分の自慢ではないまでも、大音樂の前で蚊が唸つてゐる樣に見える。二万圓が三万圓、百万圓が千万圓でも、音樂としては、蚊ほどの聲しか立てることは出來なからうと、義雄は思ふ。

『僕だツて、あんな僻地にいつまでも束縛されてゐる氣はないから』と云つて、森本が獨身の間はどこへでも飛び歩けるが、結婚でもすれば、東京か北海道で定住する樣な仕事を見つけるつもりだとうち明けたのに答へて、義雄は、

『僕も樺太は樺太として、北海道で一つ何かしたいと思つてゐる』と、自分は北海道を知らなかつたから、あちらへ先づ手を出したが、知つてゐたら、直ちにこちらへ來たのだらうと云ふことを語つた。

そして、

『それにしても、あちらの方がうまく行かなければ困るから、よろしく頼むよ』と云つて、山を下つた。

森本の誘ふまゝに玉突屋へ這入つた。義雄は久し振りのこの遊びで心も活潑になるだらうと思つたが、さうではなかつた。そして、渠は森本にさんざん負けを喰つた。

それから、松田の家にちよツと歸つてから、晩餐の爲めに、森本はその裏の料理屋へ義雄を案內した。先づ、前者は八月の中央公論を開らき、

『先刻話したのはこれだよ』と、後者に見せる。見ると、九月號豫告のところに『田村義雄氏の人生觀並びに藝術觀を論ず』（百五十枚）とある。

『これが出たら、そしてもう二三日で出るのだが、また答辯する必要があるだらう』と、義雄は云ふ。

藝者が來て、酒がまわつてから、義雄の重苦しい心も漸く多少の愉快を感じた。

## 一四

松田の家に一と晩とまり、翌朝になつて思ひ出したが、義雄が小樽から樺太へ渡る時、ふちの堅い麥藁帽と袷とを旅館に頂けて置いたのだ。渠は冬の鳥打帽を被つて行つたのであつた。

渠はその旅館に行き、帽子を取りかへ、袷を受け取つて、札幌に歸つた。然しいい首尾もないので、氷峰の家の敷居を跨ぎかねる樣な氣がした。

『どうも思ふ樣にはか取らないものだ、ねえ』と、義雄はつくづく考へ込んで氷峰に語ると、渠も一

と晩見ないうちに急に瘦せたかの如く、しほれた樣子をして、

『僕の方もあしたの拂ひに困つてをるのぢや、金主に現金もなく、融通もつきさうでないから』と云ふ。そして、それが出來ないばかりに、社員の給料も出せないし、印刷屋の前借約束も履行しかねるし、從つて雜誌全體の果取りもうまく行かない恐れがあるといふことを語る。

晝から有馬の家へ行けば、夫婦であすの月末拂ひを六ケ敷さうに勘定してゐる。

義雄は、自分の心の重苦しい代りに、渠等の樣な家持ち、所帶持ちでない身を自由で、輕快なものだと思つた。そして、勇の細君お綱さんが、どこかへ行つて來たのか、お白いも濃く、衣物も綺麗なのを着てゐるところを見ると、不斷とは違つて可なり別嬪に見えるといふ樣なことを考へた。

然しまた雜誌社へ歸つてから、考へて見ると、自分は當てにすべからざることを當てにしてゐるのだ。樺太のこともさうだ。小樽のこともさうだ。東京の家の處分のことも、賣れるか、賣れないか分らないから、さうだ。氷峰の安受け合ひも、この有樣では、さうだ。

跡に殘る問題はただ一つメール社の巡遊相談で、それも當てにはならないが、今一應念を押して置かうと思つて、天聲を社に訪問すると、パスが旭川支社へ行つてゐるから、手紙を出して置いた。二三日待つて呉れろとの返事だ。

さう〳〵煙草錢を氷峰に出させてもゐられないから、

『僕もまた原稿書きをやらうか』と、さし當り新らしい物を書き出す勇氣はないので、義雄は自分が東京出發前後に書きかけた小說――面白くないので、中絕してあるの――を取り出し、讀み返して見る。

矢張り面白くないのは面白くないから、これは跡まわしにして、手帳に控へてある散文詩十篇を清書し、『樺太雜吟』と題して博文館へ送つた。それから、小說の方もまた一氣呵成に書き足して、これは餘りいい舞臺にも出せないので、秀才文壇へ送つた。いづれも、稿料は直ぐ電報がわせで賴むと添へ書きして置いた。

『なかなかかせぎ出した、なア』と、氷峰は冷かす。

『なアに、何ほどにもなるものぢやアない』と、義雄は投げ出す樣に云ふ。

一五

雜誌社では、すべての月末拂ひが出來なかつた騷ぎだ。

氷峰の奉給が貰へないのだから、渠自身の私經濟が始末出來なかつたのは勿論、社員のうちには、あすから家族に喰はせる米がないと云ひ出すものもあつた。印刷屋はまた當てが違つて、職工に給金が渡せないから、職工が働かなくツて困ると、押しかけて來た。

氷峰は後ろ鉢巻きでおほ悶えの體だ。
『男めかけにでも行つて、一つ工面をして來ようか、なア』と、渠はそばにゐる義雄に冗談半分でだらうが云つた。それから、また、押しかけてゐる印刷屋の主人に向つて『どうせ、僕を責めたッて金の出ようはないのぢやから、社長へ行つて僕等と一緒に泣きつくより法はない』と、智慧をつける。
そこへ、社長の川崎がやつて來た。顏は日に燒けて黑いままによく磨かれて、綺麗な艶もある。二枚も金齒を入れ、意氣な銘仙の衣物に、同じ地の羽織、白縮緬の兵兒帶を締め、指には二つも太い金の指輪をはめてゐる。
『どうぢや、うまく行つたか』と、渠は皆の中へ割り込んだ。
うまく行くも行かんもない。』氷峰は鉢巻きをしめ直しながら、『社長に活動して貰はにや、とても、やり切れない。社員は飯が喰へないと云ふし、澤山君は職工が動かないと云ふし、なア。』
『實際、あなたに泣きつかねば』と、澤山もそばからおづ〳〵した樣子を見せて、『何とも仕やうがないのです。』
『そりやア困つた、なア。』川崎は快活さうにあたまへ手を載せたが、これまでにもう二千圓足らずつぎ込んで、それがまだ一文も這入つて來ないのだから、少しは思ひやつて貰ひたい。それに、今、現金は手もとに少しもない。と云ふことなどを話した上、現に角、五日まで待つて呉れ、澤山の方だけ

はどうかするから、社員の給料は廣告約束の前金を取つて拂へとのことだ。

澤はこれから山に行かなければならぬと云つて歸つた。澤山も兎に角安心を得て歸つた。氷峰はその跡で社員と共に『廣告控帳』を繰つて見たが、前金を渡して呉れさうなのは少い。

『全體、八月に出す計畫で發表して置いた雜誌が、九月一日にも後れてゐるのだから』と、義雄ははたから小言のやうに云つた。たださへ無謀な事業と思はれてゐるのが一層評判を落して來たので、社員の廣告取りなどを世間が少しも信用しないのは無理もなかつた。

それに、岡部司法大臣が來道して、人を茶化した樣な駄洒落歌を作りつつ、道中を巡視してゐるので、世間はその駄句や逸事の評判に急がしくなつてゐて、道中空前の大雜誌が出ることなどは思ひ出すものもなかつたのである。

氷峰は身づから出馬して、多少の廣告前金を集め、それに自分の時計、冬の洋服、和服などを質に入れたのを足して、社員の最も貧窮したのを助け、また社の日々を維持して行く道を立てた。

五日には、禿安と云ふ仇名のある老人が社へやつて來て、印刷屋へ渡すだけの金を氷峰に受け取らせた。あたまが禿げて、鼻さきの赤いこの老人は、もと、內地の或縣に於いて、縣會議長までしたことがあるが、今は札幌中知らない人がないくらゐなかなか喰へない點に於いて名物男だ。金貸しと借

り手との間に這入つて、口錢を取るのが商賈で、この人の手にかかつてどんぞこまで失敗しないものはないとまで云はれてゐる。川崎社長は、苦しまぎれに、この人の手を煩はしたのだ。

『社も君の手にかかる樣では、もう、駄目ぢや、なア』と、氷峰が冷かすと、渠は、『なアに、まア、精々勉强し給へ』と、てんで洒々したものだ。そして、『君の產はどこ』などと義雄に平氣な問ひを發し、碁盤を見て、その前に坐わり、『さア、來給へ——五目は大丈夫だらう。』

義雄は詰らないと思ひながらも初會を打つて見たが、このほら吹きおやぢめと分つたので、二番立て投げにした。それでも平氣なつらをして、禿安は歸つて行つた。

『今夜一つ川上を見に行かうか?』氷峰が云ひ出したので、

『それも面白からう』と、義雄は答へた。

川上一座は、先月から函館へ來たついでに、小樽並びに札幌の大黑座で五日づつ、都合十日間、二万五千圓で賣り込まうとした。ところが、けふ日、もう、お前などの出る幕ではないと、首尾よくはね附けられた。然し他の座持ちに泣き附いて、漸く興行をしてゐるのである。そして、札幌での人氣はよくない。

然し義雄が行くつもりで夕飯後有馬の家からやつて來ると、氷峰はゐない。

『どうしたの』と、お君さんに聽くと、かの女は、

『隣りのお鈴さんと芝居へ行つたの。』不平さうな顏つきだ。義雄も氷峰の違約に對して不平が出ないでもない。

第一、今夜のとまり場所に困る。氷峰の歸りは、どうしても、十一時過ぎの芝居のはね後だらう。それまで自分は若い女ひとりのところに寢て待つことは出來ない。

『樺太といふところはどんなところでしよう？』

『いいところですよ。』

『一度行つて見たい、わ。』

『ぢやア、僕と一緒に行つて見れますか？』

こんな冗談の應對をした跡で、義雄はまた有馬の家へ引ツ返した。

その跡を追ツかけて、意外な客が來た。加藤忠吉と云つて、義雄の古い同窓にして後輩で、今は鐵道の役員だ。

『相變らずちよこ〱じてゐる、ね。』

『うん』と、加藤はいやな顏をしたが、義雄に昔を思ひ出せる樣なもとの無邪氣に返つて、『君のことが新聞に出てゐたから、尋ねよう〱と思つて――それも急がしいので、延引してゐた。けふメールへ電話をかけて聽いて、今、あの雜誌社へ行つたのだ。』

『久し振りだ、話さう』と、義雄は渠をつれて、有馬の家へあがつた。

義雄は加藤を有馬の客間に招じ、勝手にがらす窓を明けて涼しい夜風を通し、渠を勇にも紹介した。

『君がまだこちらにゐるとア夢にも知らなかつた。もう、かれこれ十四五年だらう――どうだ、地位はいい加減進んだらう？』

『なアに、まだ一部の掛り長だ、俸給と手當を入れて、月に百圓ばかりだ。』

『まア、それでもいい、さ――しツかりやり給へ。』

『いつまでも、こんなこツちやアやり切れないよ。』

『然し結構です。』勇は口を挿み、『僕も十何年一日の如く勤めてゐるが、教師などア、君から比べると、椽の下のちから持ちだ。』

『いや、お互ひです。』加藤は勇をあしらつて、義雄に、『君の教師はよしたのか？』

『よしたとも、今は』と、義雄はほほえみながら、『鑵詰製造屋、さ。』

『さう云ふことを新聞で見てゐたが――』加藤は云つて、樺太などよりも、北海道の方が仕事をすれば澤山出來る餘地があることを、あれやこれやと語つた。そして『今、牧草地にいい場所があるが、ね、貰つてもよし、貸してもいいが、成るべくは協同でやりたいと云ふんだ。』加藤がかう云つた時、

義雄は身振ひするほど喜んでその話を聽いた。

牧草のことにも義雄は多少考へを向けてゐたのだ。都合いいものなら、それを目あてにして、手近くは小樽の森本に謀り、それで行かなければ、東京の一二の知人に相談をかけて見たいと思ふ。農業や牧畜などよりも、ずツと容易い仕事であるからである。

加藤の云ふがままに、手帳に控へて行くと、或川添ひの未開墾地、毎年一度水があがるから、水田にもいいところ二十五町步。買へば、水田として一反步六圓、總計千五百圓也。借りれば、借地料、一年二百五十圓也。開墾費並びに牧草種代その他一千二百五十圓也。（一反步、五圓の割。）收入、初年一反步に附き三圓、總計七百五十圓也。二年目は却つてなし。三年目から、毎年、一反步一噸十八圓、二十五町步につき四千五百圓也。

そして、牧草は軍馬の增加に對して不足なので、陸軍省は近頃その培養を奬勵してゐるから、一噸十八圓で直接に糧秣廠へ賣り込むことが出來ると云ふ說明を聽き、

『よし、一つ考へて見よう』と、義雄は加藤に受け合つた。そして、『僕もあツちの事業があやしくなつてゐるので、何か一つこツちで見つけなければならないから』と、附言した。

『一杯飮みに行かうぢやアないか？』加藤が義雄を引ツ張り出したので、勇は、玄關まで送つて來て、

『今夜、こツちでとまるか、ね？』

『島田君が芝居へ行つた留守だから、こツちへ歸つて來るよ。』
『なアに、醉つたところでとまる、さ』と、加藤が云つて、勇の方に向ひ、『しめ出して置いても大丈夫ですよ。』
『田村さん、成るべくお歸りなさいませ、さうお遊びになると、やめられなくなりますよ』と云ふ、お綱さんの聲が聽えた。

一六

その翌日、午後二時頃、雜誌社に行き、玄關のがらす戸を明けても、けふに限つて、來客を出迎へに來るものが來ない。
義雄はいつもの通り默つて靴脫ぎをあがり、そこの障子を明けると、お君が事務室から編輯室をそいでとほつてらしい、いやな目つきをしてこちらを見ながら、茶の間へ來るのが見えた。
事務室には、氷峰がひとり仰向けに寢ころんで、暑さうにうちわを使ひながら、これも、義雄を見て、變な顏をしてゐる。
義雄は、その場の聯想がちよツと怪しい方面に向つたので、われ知らずをかしいほど顏を赤める。然し、

『まさか』と、心で思ひ直して、『どうしたと云ふんだ？』
『なアに』と、氷峰は身を起しながら、『妹に芝居をねだられてをつたのぢや。』
『うそですよ、田村さん。』お君は奥の方から聲をかける。『わたしはねだりません。兄さんが自分で他人ばかりよくして、お前をつれて行かないのは氣の毒ぢやから、一度一緒に芝居に行かうと云ふから、そんなら今夜つれて行つてと云ふたのですよ。』
『どちらでも同じでないか？』
『わたしは誰れかの樣にねだりませんよ』と、お君の聲は冷淡なうちに多少の熱があるらしい。
『然し、お君さんだツて』と、義雄はその中を取つて、『行きたいのは當然だ、ねえ』と云ひながら、今まで二人は一種の秘密な情を以つて押し問答して居たのだ、な、と想像した。
『實は、君に失敬であつたが』と、氷峰はバツトの箱から兩切り煙草を出しながら、聲を低め、『ゆふべ、隣りのと行つたのぢや。はねは十一時頃であつたが、途中できやつがすね出したんで、あツちへ行つたり、こツちへ行つたり、さ――歸ると云つて見たり、歸らんと云つて見たり――どこかへちよツとつれ込めばよかつたらうが、僕はまだそこまで決心してをらぬから、他日若し拒絶する樣なことがある場合の邪魔を殘しても困るで、なア――人通りのない街をただぶら附いて、一時頃に歸つたのぢや。』

『然しさうぢらして置いて、いよ〳〵本物の色氣違ひにでもなつたら、可哀さうぢやァないか。』

『大丈夫、さ。お君の件もさうぢやが、年頃の女といふ奴ア、思ひつめると、死ぬほど熱心にもならう。然し、また、獨り手にさめて行く時があるものぢや。思はれたが最後、それを待つてをるより外に、逃げる道はなからうと僕は思つとる。たとへば、お君は今大分さめて來た時で、お鈴は今熱した絕頂に達してをる時ぢや。

『さう云ふ風にあしらつて行けるなら、君もなか〳〵えらいよ。』

こんな話があつてから、氷峰は、きのふ、物集北劍が來て、義雄に會ひたいと云つてゐたことを語る。

『何の用だらう？』

『何か未墾地のことに就いてだ、君が牧草培養の話をしてをつたからと云ふて。』

『ぢやア、これから行つて來よう——實は、ゆふべ、鐵道に出てゐる舊友に會つたら、牧草地に適する賣り物があるといふ件もあるから。』

大通り七丁目の角なる板長屋の一つは、古くから物集北劍の質素な住ひである。

北辰新報失敗以來、借金の跡始末の外に何の用事もない主人は、そとでは、自己本籍の所在地部落合併の問題に盡力し、うちでは、朝顏を培養して樂しんでゐる。渠は酒好きで、いくらでも飮むが、

何の藝もない。その藝のない無骨な點に惚れ込んで、今の細君は來た。もとは客を擲り飛ばすことが有名な女郎だが、渠ばかりには心かららち込んだと見え、北辰新報の難局時代には、かの女の部屋の金屛風までも質屋へまげてしまつた。お豐と云ふが思ひ通り夫婦になれた今日では、自分が資本家でもあつた樣に、

『もう、新聞發行などはいやです、なア』と、云つてゐる。ヒステリ的に瘦せてはゐるが、顏に美人のおもかげは殘つてゐる。北劍の盛んであつた時は、かの女が渠の部下なる記者氷峰に――慰勞のつもりで、わざ〱、――薄野遊びの資をつぎ込んだものだと義雄は聽いてゐた。

『物集君の細君には僕も隨分世話になつたよ』と、氷峰は度々語つた。

北劍はお豐を緣がはに呼び寄せ、自分の造つた朝顏の鉢を友人間に分配する相談をしてゐた。その標準は、早起きのものにいいのをやり、寢坊のものにはさういいのをやる必要がないと云ふにある。お豐さんは、

『島田さんなどは、寢坊の隊長ですから、よいのをあげるに及びません、わ』と云つてゐた。

そこへ義雄が行き合はせたので、朝顏の話から始まつて、北劍が釧路に經營させてある牧場のことや放牧馬のことに移り、それから、義雄の話し出した牧草のことになつた。

『ゆふべ、かう云ふ話を持つて來た友人があるが、どうだらう』と、義雄は手帳を出して、その控へ

を北劍に見せる。

『川添ひで、水田――どこか知らんが、そんなよいところが殘つてゐる筈がない』と、北劍は考へながら、『あつても、一反歩六圓とは既墾成功地の價格ぢや。それに開墾費、少くとも三圓を見込むと、八圓――高い、高い。』いツそ、この方が見込みあるか知れないと云つて、渠は一と綴ぢの書類を出し、近々やられる成功調査を金のない爲めに無事通過し難がつてゐる未墾地、二百三十萬坪ほどが天鹽にあることを説明する。そして、

『ちよツと木を切つたり、柵をめぐらしたりする金が二百か、三百あれば無事なのぢや――何とかして見たら、どうぢや』と云ふ。

『ちよツと當てがあるから、では、その方を當つて見ようか』と、義雄は答へて、それもどうだか分らないが、小樽の松田へ先づ相談しようと自分だけで決める。

『當つて見給へ、君もその土地の一部分を貰へれば、それを土臺にして、牧草培養も容易に出來るのぢやから』と、北劍はそれからまた牧草談に移り、面白い事實を語る。或退職軍人が坊主になつて本道に來たり、人助けの爲めだと云つて、頻りに牧草培養の利益を傳道した。それが爲めに、本道にクローバ、ルーサン、チモシ、ケンタキなどの牧草が非常に増加した。すると、間もなく、日露戰爭が起つて、糧秣廠は充分な買ひ上げをした。そして、その坊主は多分その筋の命を受けて、牧草を奬勵

したのであつたといふことが分つた。
『北海道には、まだ不思議なことが多いよ』と、北劍は義雄の感服してゐるのに輪をかけた。
『あなたのことが東京の新聞に出てをります、なア』と云つて、お豐は前日の都新聞を持つて來た。見ると、義雄とお鳥との惡口が出てゐて、中に這入つた加集ばかりがいい人物になつてゐる。
『こりやア、この加集といふ男か、さうでなけりやア、それが周旋した金貸しかが材料を與へたのに相違ない』と、義雄は辯明した。心では、こんな復讐をされるには、自分の東京に於ける家がまだ責れないので、借りた元金や利子を妻がまだ拂つてゐない、な、と想像できた。

天鹽の未墾地に關して義雄が照會したその返事が小樽から來た。無論、森本の手紙である。
先月末の交渉事件を返事しようと思つてゐるうち、未墾地問題の知らせがあつたから、二つを一緒に返事するとあつて、先づ、義雄の最も多く望みを屬して、小樽までも念押しに出かけた協同問題はすツぱり斷わりだ。
『三四年間に取り盡されるといふ蟹の鑵詰製造の爲めに、如何に奮發して資本金を出しても知れたもののゆえ、松田家の事業としては、餘りちいさ過ぎるといふ理由で、あの問題はお斷わりすることに決定致しました』と。

義雄はこれを讀んで、有形的物質的勢力なるものの、自分が豫想してゐたよりも偉大であることを自覺すると同時に、自分の有すると思ふ無形的、內容的現實の、まだまだ不充分なことをおぼえた。この場合、渠は勝ち誇つてゐた相撲がきはどいところで脊負ひ投げを喰つたと同樣な恥辱を感じた。『情けない、なア』と、渠は心から叫んだ。無論、その場に人は誰れもゐなかつたからである。

それから、そのあとを讀むと、未墾地の方も、實は、それと殆ど同じ方面に二萬町步ばかり着手中のがあつて、その處分に困難してゐたところだ。現に、きのふ、成功調査を受ける爲め、雇ひ技師がその地に向つて小樽を出發したが、それが歸り次第、兎に角、一度書類を見ようとある。

義雄はせめてこの土地問題だけでもうまく成功させたいと專らになる。然しこれは『また駄目だらう』と、默笑に附せられるのを恐れて、勇には話さなかつた。

樺太からの便りも一向ないので、仕事の初まり次第云つてよこせといふハガキを弟へ出した。そして、渠は自分の文句が一便每に過激な命令になつて行くのをおぼえた。

然し、それと行き違ひに、弟から細かい字で書いたハガキが着した。いよ〳〵仕事を初め出すことが出來る時になつたが、蟹は每日五疋から十疋、二十疋しか得られない。且、それが一疋に附き二十錢も二十五錢もする。これでは引き合ふ筈がないと怒られるかも知れないが、僅かでも製造しなければ、融通がつかないとある。

『馬鹿！』から叫んで、義雄はそのハガキを壁に投げつけた。そして、その輕い紙に手ごたへがないのを、自分の事業に手ごたへがないのと同じ樣に思つた。『駄目だ、駄目だ――僕は、もう、樺太を斷念する！』

『さう云ふんぢやア困る、ねえ』と、勇が云ふのを聽くと、渠は義雄よりもさきにそれを讀んだらしい。

『實に、無禮だ』と、義雄は心では怒つたが、ハガキだから止むを得ないことだ。それに、勇は、近頃時々義雄が勇のところにとまるので、義雄のことを心配し出したらしい。それが目に立つほどになつた。東京の家の方がどうなつたのか丸で音沙汰がなく、樺太からも送金して來ない。小樽漁業家の協同問題は駄目になる。すべて初めに云つたこととは違つてゐる。そこへ、またこのハガキだから、

『どうせ、失敗だらうから』と、勇は忠告がましく云つた、『東京へ歸つた方がよからう――こないだ出したといふ原稿料が來たら、それで歸り給へ。牧草のことなどア、ちよツくり行くものぢやアない。』

『そりやア、さうですよ、お歸りになれば、また奧さんのお力にもなりましようから』と、お綱さんも調子を合はす。

『何を云やアがる、この所帶持ちめ等！』から思つたが、義雄はさう見せないで、ただやわらかに、

『歸らなければならないことになれば歸りますが、まだ少し考へがありますから』と云つて、天鹽の

土地のことをまた思ひ出した。

## 一七

辭令に巧みな壯語男爵後藤遞相を送り、駄句り屋子爵岡部法相を送つた北海道は、今また伊藤公爵と韓太子とを迎へた。

韓太子が主で、公爵を從にして待遇しようとした河島長官は、衆人稠坐而も藝者などが澤山ゐる中で、公爵から叱り附けられた。そして、如何に太子のお伴でも、自分は自分だから、そのつもりで待遇を怠るなと命令された。

その時の長官の恐縮し方がをかしかつたと云つて、それを實見した人々から評判になつた。そして伊藤公爵に關する記事は、韓太子のよりも多く、諸新聞に出た。北海メールや小樽新報は勿論、高見呑牛の編輯する北星にも、渠の人物評や戀物語が掲載された。

かう云ふ賑やかな時に當つて、氷峰は獨り新聞界の友人等にかけ離れて、未刊雜誌原稿の校正の爲めに印刷屋へ往復ばかりしてゐる。

渠の好きな猫が、殺されたのか、見えなくなつたので、その代りに、どこからか兎を一對貰つて來た。書生に命じて、庭の隅に低い板がこひを造らせ、そこへ入れ、博物館構内の牧草などを取つて來

て喰はして置いた。晝となく、夜となく、他家の猫がいたづらをしに來るのが分つてゐたが、三日目の晩に、大きな音がしたかと思ふと、きゆうツと云ふ低い聲が聽えた切り、二匹ともゐなくなつた。

　ランプを持ち出して、皆と一緒に義雄も頻りに隅々を探して見たが見えなかつた。

『きツと、猫かいたちが喰ひ殺したのだ、わ』と、お君さんは可哀さうがつた。

　その翌朝、皆で厠が臭いと云ひ出したので、よく調べて見ると、その肥えつぼをかき交ぜて、一匹の兎がおぼれてゐた。そのまた翌日、ふと氣がつくと、無言の動物がまた一匹もとの巢のそばにしやがんでゐた。二日立つても道を忘れず、その死んだとは知らないつれを追ふて來たのだ。孕んでゐる方の兎だが、喉を痛く嚙まれてゐたので、食事を少しもせず、そのまた翌日死んでしまつた。

『兄さん、どうしよう』と、お君は自分の妹でも失つたかの樣に泣いた。

　その日であつた、氷峰はお君をいつまでも——たとへ、臺どころ仕事をして貰ふには便利たが——とめて置くのは、かの女の爲め並びに自分の爲めによくないと考へついた。そして、かの女のいやがるにも拘らず、山なる長兄のもとへ歸してしまうことに決めた。

　隣りのお鈴さんは、話し相手を失ひながらも、之から遠慮なく思ふ人に近づけるのを喜ぶらしかつた。

　然し、氷峰も亦他へ轉居する必要が出來た。と云ふのは、社長が會計上の不始末でもあつたら困る

と云ふ考へで、自分の選んだ會計掛りをそこへ住み込ませることになつたからである。
『水くさい、なア』と、氷峰は云つたが、自分も臺どころ掛りを失ふので、下宿屋へでも行く方がいいと決心した。そして、渠はお鈴や義雄と共にお君をステーションに見送つた日、印刷屋に近い、南二條の西一丁目なる鈴木といふ下宿屋へ移つた。

氷峰が下宿屋住ひになつて見ると、義雄はそこへ行つて居候暮（くら）しも出來ないから、有馬の家に置いて貰ふことになつた。

獨身者の不しだらな家とは違ひ、夫婦子供が小じんまりと暮してゐる家庭へ世話になつてゐるのは、義雄としてはなか〱こころ苦しい。

いツそのこと、思ひ切つて、東京の自由な友人間へ歸らうかとも思はないではない。然し、今のところ、歸るにしても旅費さへないので、工面を賴むとすれば、氷峰よりほかにないが、渠も亦今は、社長に束縛されて、着のみ着のままで下宿屋住ひになつたのだ。
『どうしても、原稿を書いて、勇夫婦に安心させて置くべしだ。』かう考へて、義雄は、その月の一日の中央公論に出た、某氏の自分に對する長論文（執筆者から送つて吳れた）の反駁を書き初めた。某氏の論評に對して、義雄の人生觀並びに藝術觀（これは渠の論文集『新自然主義』に於いて發表してあ

る）を辯護する爲めである。

然し某氏の論法が徒らに書籍上の空論に終つてゐるのを見ると、氣の毒なほどみじめな感じがした。義雄は、第一に、自分が青年時代に一たび足を入れかけた學者や宗教家仲間に這入らなかつたのを喜んだ。そしてその時代の同學や知人や感化者にして、今もなほ舊傳習の夢が覺めず、生命もない形式に囚はれ、生きながら死んでゐる渠等の狀態を思ひ浮べ、如何にもあはれなものばかりだと考へた。

夏期休業も終はり、毎朝八時から勇が學校へ出かける樣になつたのを幸ひ、渠の書齋に引ツ籠つて、義雄は筆を執つてゐるのだが、ここにはプラトンはない、イムマニュエルカントはない。スキデンボルグはない、エマソンはない。渠等はすべて義雄の古い感化者である。そして今では渠の思想上に於ける敵である。渠は渠等をそばに控へて、その向ふを張るのを正直な誇りとしてゐるのだ。渠等のないのは、渠に取つて、何だか心寂しい樣だ。

然し、その代り、反對的にでもカントやエマソンをそばに控へない放浪の身でありながら、今持つてゐる思想をまとめ得られるのは、自分の精神と神經とに獨創の情想が出來てゐるからであると、自分で心丈夫に思ふ。

『自分の悲痛な思索は自分の直接經驗だ。』かう思ふと、自分のこれまでに經て來た幾多の戀、信仰、詩人的努力、家庭の迫害、親不孝、妻子を虐待、友人の離散、失戀、懷疑、絶望、破壞、墮落、自殺

未遂、戀愛的事業、生の自覺、悲哀苦痛の現實的體得など、それからそれへと變轉滑脫して來た間にも、自分は終始一貫してゐるのを、自分ながら痛切に感じた。

そして、筆などを以つてまどろッこしい論戰をするよりも、寧ろ自分その物を今のまま論敵の前へほうり出した方が手速い證明だと考へる。

然しただ、東京と札幌と、海山何百里の隔てがこの論戰の筆を渠に執らせるのだ。渠は渠の鑵詰事業に熱中したと同じ覺悟を以つて、構想をめぐらす。

『執筆の意志』といふ第一項を書いてから、駁論全體の項目を先づ數へあげて見た。『新文藝に平行すべき新哲學いまだ實現せず』とか、『論者こそ却つて抽象的』とか、『主義と理想との新解釋』とか、『論者とカライルと自分との相違點』とか、いふのを列擧しながら、『現實は自我の無理想的活動』とか、『解決は死、無解決は生』とか、『活動は苦痛なり』とか、『强烈生活は優强者の勝利に歸す』とかいふのに至ると、項目だけを擧げたのに對しても、自分は既に自分の現在の本體を活躍させ得たといふ樣な痛みをおぼえる。痛みは即ち自分の眞摯な快樂であつた。

『戀や事業は自己の活動であつて、手段、目的ではない。』から考へて、目的を持つから失戀、失敗が見えるのだが、自分が、强烈に活動してさへゐたのなら、失敗も成功もあるものではない。そして、今

の自分ほど強烈な活動を心身におぼえることは少いと思ふ。

渠のこの現實的幻影は二日ばかりつゞいた。そして、三十枚ほどまで原稿が進んだ。題目も『悲痛の哲理』とすることにきまつた。然しその進渉は殆ど忘れてゐたものの記憶を再起したので途絶されてしまつた。

渠は段々の順序に從ひ、家も忘れ、妻子も忘れてゐる。樺太の事業をも忘れてゐる。そしてまたお鳥をも殆ど忘れてゐた。ところが、かの女から、突然『スグイクカネオクレ』といふ電報が來た。

『暫らく便りもしないで、人を馬鹿にしてゐやアがる！』から考へて、義雄はそこに心のないほどに冷淡だ。そして、自分のやつてゐることを返り見た。

『この原稿を書き終はつて東京へ送つても、若し出すところがなくツて、稿料が取れないなら、當座の間には合はない。』

いくら簡結にしても百五六十枚にはならう。そんな長い論文を出して吳れる雜誌はちよツと心當りがない。先づ、同じ中央公論だらうが、それもさうつゞけざまにはどうだか分らない。且、さきに送つた二原稿に對しても、各社は人を馬鹿にしてゐる、留守だと思つて、稿料を早く果取らせて吳れないありさまだ。

北海メールの天聲もさうだ。パス／＼と云つてゐながら、少しもそれを旭川から取り寄せる手つゞ

きを熱心にやらない。北海道巡遊も、もう、當てにはならないのだ。

『せめて、札幌だけにでも、もツと親しんで見たいものだが』と思ふと、ただつツ立つてゐる樹木のイタヤ、ヘル楡、白楊樹のながめだけでは、滿足出來ない。また、百姓馬子の八百屋や燒きもろこし屋だけでもさうだ。

義雄はあツたかい抱擁に久しく遠ざかつてゐるのである。

## 一八

渠の目の前を、高砂樓のなじみやら、歡迎會の藝者やら、小樽の料理屋のや、路上で印象を得た女やらの記憶が、度々通り過ぎる。然し、通り過ぎるだけで、直ぐ消えてしまう。

それが、渠には、闇にとぼつた光が直ぐまた消えた跡の樣に、一しほ寂しくて、寂しくて溜らないのだ。

『いツそ、歸つてしまへ！』かう自分で自分に命令した時は、一刻も早く歸京して、あの迷つてはゐる女だが、心の分つたお鳥に、今一度會つて見たいといふつもりになる。

然しお鳥には、ただ冷淡に、自分が歸るか、かの女を呼ぶか、どちらもまだ決しられないから、少し待てといふ返事を出した。そして、別に、親友二三名に向つて、歸りたいが、旅費が出來ないから

送金して吳れろと賴んでやつた。一人を當てたのでは、留守であつたり、出來なかつたりして、間に合はないかも知れないと思つたからだ。

義雄が歸京と決心したのを喜んだのは勇夫婦だ。その日の夕方は、めづらしく特別な御馳走をした。そしてお綱さんが、

『奧さんがさぞお喜びになるでしようよ』と云ふと、勇もそれについて、

『僕も惡いことは云はない――さうした方が實際いいのだ。君は越年の計畫も云つてゐた樣であつたが、充分の用意がなくつては、札幌の冬は寒いから、ね。』

『なアに、マオカにさへ越年しようとしたのだから』と、義雄は少し反抗的に、『北海道ではなほ更ら平氣だらうが――』勇の家、いや、札幌ばかりが自分の好奇心を引いた北海道ではないことをほのめかして、『然し、兎に角、かう軍用金が不自由では、ねえ』と微笑した。

『北海道の冬は』と、勇もこちらの土地不案內を諷ずる口調で、『來るのが突然だから、慣れないと、ちよツとまごつかされる。』

『まごつくのは、まごつく奴が惡いのだらう。』

然し、思ひ返すと、義雄は今からも早や多少まごついてゐる形がある。それを氣が附かないほどの人間だと思はれるのが不本意なので、且は、また、自分は決してそこまでうか〳〵してゐるものでは

ないといふことを示めす爲め、二三年前、越年期のマオカで、食糧上の大慘事があつたことを勇に語り聽かせた。

それはかうである――マオカへ初めて來た移住者等のうち、越年の用意に氣が附かなかつた爲め、海がいよ〳〵結氷するに至つてから、あちらにもこちらにも餓ゑを叫ぶものが出來た。それが丸で饑饉の狀態であつた。官憲はその處分に困り、急仕立ての慈善會を催しなどして、僅かに救濟することが出來た。その翌年からは、雪が降り出す前に、巡査が必らず各戶をまわり、三四人の家族に附き米三俵、味噌一と樽の用意をしてあるか、どうかを取り調べることになつてゐる。

『馬鹿な奴は、官憲でも、人民でも、そんな目に逢つてから、漸く注意するのだ』と、義雄は政治的意味を帶びさせたつもりで勇に云ふ。

『さういふのは、困つたものだ、ねえ』と、勇も答へて、小だはりのない世間ばなしに移る。

義雄は珍らしくいい氣持ちに醉つた。

獨りふら〳〵と有馬の家を出で、晴やみの道を、博物館わきに於いて、かのアカダモ――幽靈の手の樣な枝、すさんで行く自分を放浪の第一日に優しく、寂しくやわらげて吳れた幹――はこの邊だらうなどと考へた。それから、南二條に行き、氷峰に決心のほどを告げた。

『歸るなら、旅費ぐらゐはするつもりぢやが、今のところ、君も知つとる通り、僕自身の首がまわらぬのぢやから、なア』と、氷峰は云ふ。

『なアに、それはけふ東京の友人二三名へ云つてやつたから、どれからか送つて送る、さ』と、義雄は氷峰に平氣を見せる。

『さうか』と云つたばかりで、氷峰は頻りに同席の印刷屋に向ひ、發刊に迫つた雜誌に關する至急な話をしてゐるので、小使を借りてまたそこを出で、もう、やがて別れるのかと思ふ市中を、見納めのつもりでぶらついた。

足は段々薄野の方に向いたが、あがりもしないのに、地廻りの樣に、格子さきをまごつくのは詰らないと思ひ返した。そして、狸小路の賑やかな夜店をひやかしながら、掘り割り水道を東へ渡つた。

ガスの深い夜で、店々のあかりが濕ツぽく見える。

その邊に客を引ッ張る女がゐると聽いてゐたから、好寄心を起したのであるが、八字ひげの風來者を誰れも相手にして吳れるものはない。その辨、行き會ふ女はすべてそれでないかと思はれた。

ふと、思ひ附いたのは、そば屋といふ物だ。東京などとは違つて、云つて見れば、そこが仙臺なら汁粉屋といふところださうだ。そばは却つてどうでもいいので、いろんな料理で酒を飲ませ、その上の相談も出來るのだ。

『札幌滯在の一とみやげに、それがどんなところか實見して置かう。』から考へて、義雄はとある看板を見つけて、そこへあがつた。

こせ〳〵と小い部屋の多い、薄ぎたない家で、べたべたお白いをつけた不別嬪が四人も五人もゐる。そのうちの一人が出て來て、

『御料理は何がよろしい』と云ふ。

『僕はもう醉つてゐるんだから、そばだけ喰ひに來たのだ。』から註文して、『それにお銚子を一本』と云つた切り、女が勸める他の料理は命じなかつた。

それで女を相手に話して見ようとしても、自分は何となく氣がとがめて調子に乘れないし、女も亦こちらを安いお客と見たのか、話しかけられても、冷やかな挨拶ばかり――横を向いて、挑發的な鼻唄を歌つてゐる。

唄は普通の唄で、決して聞き慣れてゐないのではないが、義雄の現在には、それが異樣な挑發に取れたのだ。然しそれに應ずる手づるがない。

そして、二三室隔つた部屋では、どんな女か分らないが、客と共に追分を歌つてゐる。

義雄は座に堪へない樣な、いやな氣がして來たので、それだけの拂ひをして、そこを出た。雨がしよぼ〳〵降り出したのである。

義雄は傘なしでのそり〳〵歩く。醉つてゐるので、熱した顔に雨がひやり〳〵當るのが實に氣持ちいい。そして、

『自分は解ける物でもない、また急ぐ用事のある身でもない。』から考へて、わざとくそ度胸を決めたところは、どうしても、燒けツ腹だと自分でも思つた。

掘り割り水道に添ふて北に行き、北四條を西の方へ、今聽いた女の追ひ分節を繰り返しながら歸つて來ると、行く手のガスの中から一つ、カンテラの光が見える。それが氷峰の社の角なるもろこし店で、いつもと違つて、イタヤもみぢの下なるおやぢは寒さうに焜爐火にしがみ附いてゐる。

何となく話がして見たくなつたので、そのそばへ行き、

『この雨に、おそくまでよくかせぐ、ね。』初めての聲をかけると、

『へい。』渠は丁寧にあたまを下げたが、さも馴れ〳〵しさうに、『上機嫌で、旦那はいつも御結構です。』

義雄は、このおやぢばかりが唯一で最後の親友かと、興ざめざるを得なかつた。

## 一九

氷峰の雜誌の初號が刷りあがつて、その發刊があすの十五日に迫つてゐるのに、社としてそれを引き取る用意が出來てゐないばかりか、渠自身が下宿へ拂ふ前金も、僅かばかりを與へたほか、まだ渡

すことが出來ないのだ。これは、義雄も、一緒に行つてそこを探し當てたので、よく知つてゐる。

『ところが、あの婆々アはなか〳〵氣前者ぢやぜ』と、氷峰は讃めてゐた。婆々アとは、そこの女主人で、五十近いが、まだ目に立つほどお白いもつける質の女だ。

義雄は、そこの貰ひ娘や女中に、

『目のきよと〳〵した、言葉附きの荒ツぽい人』として、嫌はれてゐる。十四日の夜、渠が氷峰の二階の室に行つてゐると、下の娘があがつて來て、

『島田さん、お母さんがお約束の林檎を御馳走しますからいらツしやいツて』と云つた。

氷峰はそれについて行つて、暫らく戻つて來ない。義雄は渠を待ちながら、雜誌の刷り上り見本のページを繰つて見ると、雨敬、新戸部、山縣勇次郎、その他知名の人人の材料の外に、呑牛の人物評や逸事談、天聲の新聞編輯苦心談、北劍の中野天門談などがある。義雄の書いたのは、

『詩人文豪より蟹の鑵詰製造家となりたる田村義雄の鑵詰談』と云ふ、長い表題で載つてゐる。そして、義雄、氷峰、勇が三人で撮影した寫眞が挿んであつて、義雄の見出しには『將に實業家とならんとする田村義雄氏』とある。

義雄はこれを見た時、非常に心で苦しみをおぼえた。その原稿と寫眞とが發表されないうちに、もう、自分の事業は殆ど跡かたもなくなつてゐるありさまであるからである。

渠は雜誌を伏せてしまつた。然し、氷峰の戻るのが待ち遠しいままに、またそれを開らいて見ると、二百ページ餘の四六二倍大の雜誌が殆ど各ページに大小一つなり、二つ、三つなりの寫眞が這入つてゐる。材料はすべて北海道專門だが、その體裁は東京のおもだた實業雜誌にも劣つてゐない。廣告も澤山あつて、金のあがらないのは社長川崎藤五郎の請負廣告と、氷峰の詩集廣告と、義雄の詩集と『半獸主義』と『新自然主義』との廣告ばかり。あとはすべて取れるものだ。

『北海道に於ける絕後ではないかも知れぬが、空前の大雜誌だらう』といふ、仲間での評判は讚め過ぎでないと思はれた。

そこへ、氷峰が左りに酒を注いだ猪口を持ち、右に德利を持ち、變な手つきで兩方から肩と平行するほどにあげ、背を丸めてをかしな樣子で、女主人の婆アさんにふすまを明けさせて、這入つて來た。

『ああ、醉ふた、醉ふた』と、渠は坐わらないでふら〱してゐる。

『お酒がこぼれるぢやありませんか』と、婆アさんは息子でも世話する樣に渠を抑へる。然しかの女も醉つて顏が赤くなつてゐる。

『さ、もう、お休みなさい。』婆アさんは猪口と德利とを氷峰から取り上げ『これはお客さんにあげると云ふて、持つて來たのですから』と、義雄の前に置く。そして、かの女は立ち去つてしまつた。

「仕やうがない婆々アだ』と、氷峰はけろりとした。それほど醉つてゐるのではないらしい。
『どうしたのだ？』
『なアに』と、氷峰はいま〳〵しさうに、『あの年をして、おれに氣があるはあきれらア、な。林檎は晝間からの約束であつたが、一緒に酒を飲めと云ふのぢや。飲むと、ここは茶の間で女中の用の邪魔になるから、お母さんの部屋へ來いと云ふのぢや。はんか臭いから、逃げて來たの、さ。』
『そんな婆アさんらしい、ね。』
『おやぢがあつても、別に女と住んでをつて、自分を相手にして呉れないから 獨りで浮氣をしようと云ふのだらう。』
『困つた婆々アだ。』義雄も調子を合はせたが、自分の妻のことを思ひやると、かの女にして若し少しでも浮氣があるなら、ここのと同じ様になるかも知れないがと云ふ様なことが浮ぶ。そして、自分が段々若い女、若い女と目をつける様になつたと考へられるだけ、反對に、年寄り女の色氣をぞツとするほどいやな物だと聯想した。
『僕もこれではやり切れないよ』と、氷峰は義雄と爐を挾んで相對する。『お君からは毎日の様に手紙をよこすし。お鈴も裁縫に行くと云ふては隱れ通ひをして來るし。また、孕んでゐる女の親からは、來月が臨月ぢやから、準備の金だけでも送つて呉れろと云ふて來るし。その本人はまた死んでしまう

と云ふ手紙ぢや。けふも夏洋服まで質に入れて、郵便かわせを送つてやつたのぢや。』
『身から出たさび、さ。』から云つて、義雄は獨酌する。『然し、事情が事情だけに、お君さんは可哀さうだよ。叔父さんを繼するとは、もう、現代では悲劇だ。』
『それに、雜誌はこの通り刷り上つても、これを受け取る金があすまでに出來るか、どうか分らん。僕もよわつた、なア。』
『然し雜誌の方は社長がどうかするだらう、さ。』
『それにしても、僕の入用があるのぢや。今、頻りに人を持つて呼び出しに來る女があるから、あす逢ふてやつて、それから二三百出させようかと思ふてをる。』
『男めかけに行くのかい？』
『まア、さう大きな聲をするな』と微笑して、氷峰は雜誌をつき出し、『時に、うまく出來たらう、どうぢや？』
『立派なものだが、賣れて吳れないと困る、ね。』
『それは僕に充分考へがある、さ。――初號を出したら、直ぐ新聞記者がはへ披露會をやるが、君にも來て貰ふぞ。』
『そりやアありがたい、ね。』

こんな話から碁に移り、互ひ先の勝負があつて、義雄はその部屋で氷峰と一つ床へあとさきに這入つた。實は、今夜、勇は學校の當直であるから、細君ばかりの家にとまるのを氣の毒に思つて、義雄はこちらへ來たのだ。

『野郎同士では仕やうがない、なア。』

『然し、あの婆アさんぢやア溜るまいよ。』

『は、はツ』と、二人はあとさきの枕もとから笑ひ聲を出した。

氷峰は少し風を引いてゐたので、義雄と夢うつつで蒲團の引ッ張り合ひをした。そして、義雄は、北海道は夜中になると、夏でもなか／＼寒いといふことを實驗した。

## 二〇

中島遊園の料理屋大中本店に於いて、午後一時頃から、氷峰と或女とその仲に這入つた取り持ち年増とが會見した。この件ははなし上手な氷峰自身の詳しい報告を義雄がまた義雄自身で解釋して見たのだが――

女は二十二だと稱してゐるが、そこの女中に料理を命じたり、酒をあつらへたりするその態度や、しッかりした口振りから推察すると、どうしても、氷峰とはさう年が違つてゐないだらう。然し、自

分から呼び出しをかけたのには似合はず、男に對してどことなくうぶな羞恥を帶び、何か問はれるたびに顏を赤くする樣子を見ると、決して苦勞人筋のものではないらしい。むツくりした美人は美人であつた。

『お久し振りで御座いました』と、女が初めての挨拶した時、氷峰はその馴れ〲しさうにされるのを意外に思ひ、どこで會つたことがあるのか知らんと、さまざまに心では考へて見るが、どうも心當りがなかつた。

名は若杉貞子と云ふのを賴りに。どこかの歌の會へ出たことのある女か知らんとも考へて見た。然しそれも一向分らない。ただ、

『はア』と、曖昧な挨拶を返してしまつたので、それを今更ら問ひ糺すのも角が立つだらうと思ひ、もぢもぢする心を煙草でごまかした。

女も言葉のつぎはを失つてしまつた。

序幕から場が白けてゐるので、年增がそばから、

『少しお話しなさいよ、わたしが眠くなつてしまひます、わ』と、碎けた態度でおだてた。

それから、何の關係もない伊藤公爵のことやら、當地は本年はえらい人々が巡遊に來ることやら、舊北辰新報のことやら、新派の歌のことやら、まさに出ようとする實業雜誌のことやら、すべて女の

方から持ち出して話題にするのを、男はただそれに說明的返事をするだけであつたが――。

『手ッ取り早く要領に入ればよいに。つまらない』と、氷峰は、こんな時ばかりの伊達に、飮めない酒を女につがせてぐんぐんあふつた。

『大分いけます、ね。』女は多少勢ひづいて來た。

『えいえい、島田さんは隨分飮めるのですよ』と、年增がいい加減に取りつくろつた。

『何を云やアがる、この婆々ア』と、氷峰は心でそれをあざ笑ひ、こんな種類の桂庵的がゐる爲め、北海道のをんなの風儀が亂れるのだと憤慨もしかねなかつた。

その癖、渠は自分にも望みがあつて來たのだが、貞子といふ女も、それについて來たこの年增も、一向話を進めなかつた。

貞子も少し酒の相手をしたが、かの女の方に話題が盡きて、けふの天氣模樣などのことに及んだ。餘り辛氣臭いので氷峰は醉ひの勢ひにまかせて切り出した。

『全體、あなたは何物です?』

『何物とはひどいぢや御座いませんか』と、年增がさへぎつた。

『なに、それは云ひ方が惡かつた。』氷峰はわざとあたまを押へたが、『あなたは何をしてをるんです?』

『何もしてはをりませんが』と、貞子はきまりが惡いといふ樣子であつた。氷峰の方をじろりと見て優しく微笑したが、直ぐ下を向いて顏を赤くしてゐるのは、醉ひも出たので、必ずしも、恥かしみばかりではなかつたらしい。

そして、貞子が自分のことを氷峰に話したに據ると、兄と二人で親の財產を分けて貰ひ、その自分の部分は自分の考へのままになる。そして、今、やつて見たい事業があるから、氷峰に手助けをして貰ひたいと云ふのだ。

その事業とは、瀨戶物製造である。京都あたりで十五錢、二十錢しかしない陶器が運賃やら割れやらを見込んでだらうが、北海道に來ると、實際、五十錢から六十錢する。それを運賃入らず、割れも少く製造販賣することが出來れば、五十錢が四十錢、三十錢に賣つても、利益は充分に望まれよう。小樽附近にも陶器原料にいい土があるさうだが、貞子の方では、岩見澤の或場所に、それがあるのを發見した。

『で、あなたは』と、貞子は氷峰に向ひ、『新聞社にをられた時から、大變精力の强いお方と聽いてをりますから、一つ、自分の事業と思つて、專らお力になつて貰ひたいのです。』

『それもよからうが――第一、こないだからのこちらの要求は、どうなつたのです?』

『あれは、な、島田さん』と、年増が口を出し、『二十日まで待つて貰ひたいと云ふことです。』
『けふ渡すと云ふので、僕を引ッ張つて來たんぢやないか？』
『さう云ふことで御座いましたか』と、貞子は少し恥ぢた樣子で、『わたくしの方では、初めから二十日と申してをりましたんで御座います。』
『それならそれで、一杯喰つたとおもやよろしい』と、氷峰はすねた樣に笑つた。
『然し、島田さん、そんな野暮は禁物よ。』年増は變な手つきで渠を打つ眞似をして、
『さう云はなきや、あなたが早く來ないぢやありませんか——貞子さんは大變お待ちかねよ。』
『あら、叔母さん！』これは貞子が北海道に親しい人を呼びかけた呼び名だ。これも打つ眞似をして、
『きまりが惡いぢやありませんか？』
『は、は』と、氷峰も輕く笑つて、貞子に、『これで僕があなたを打つ眞似をすりや、形式上の三すくみだ。』
『ほ、ほ、ほ！』貞子も笑つて、口に手を當てた。その手は綺麗に白く、金の指輪が二つ光つてゐた。
そして、また眞面目になつて氷峰に、『然し、ちよツと都合がありますので、どうか二十日まで』とあたまを下げた。
『わたしはその三すくみを拔けますから』と云つて、年增の叔母さんはそこをはづした。

＊　＊　＊　＊　＊

再び年増が出て來た時、

『まア、いい風でもお入れなさいよ』と云ひながら、池に向つた障子をするりと兩方へ明けた。すると、その池の向ふ側の椎の樹かげに、裁縫通ひの娘らしいのが三名、すぼめた蝙蝠傘を杖について、水中の魚の泳ぐのを見てゐた。

『見えるぢやありませんか』と、貞子はうつて變つたうは付き方で立ち上り、自分でその障子を締め返した。

その時、三名の娘は同時にこちらを見た。その一人はお鈴であるのを、氷峰は認めた。かの女も亦渠を認めて、『あら』といふ樣子を見せた。お互ひに意外であつた。

拾五圓何拾錢と云ふ勘定を貞子がして、二人は一緒にそこを出た。

氷峰は、きのふも、そこへ婦人と共に來たのである。その婦人は、渠がお母さんも同樣世話になつたおほ年增であつたと云ふ。然し、今、三人をいいお客と見て、門まで送つて來たおかみや女中が、じろじろ自分の顏を見たのに、渠は氣が引けた。と云ふのは、この頃、大黑座で打つてゐる役者一座の一人が、さうたび〳〵、後家さんや娘に買はれに來るのだと思はれては、迷惑だからであつた。

『これから、また、あのお鈴がやつて來て、今の事情を執念深く聽きただすのであらう』と思ひながら

ら陳列館の前をぶらぶら行くと、貞子はそのあとから恥かしさうに少し離れてついて來た。
『もツとくツついてお步きなさいよ』と、年增に押しやられて、やツと女は渠のそばへ來た。
『醉ひました、なア。』
『わたくしもこんなに醉つたことはないの。』
『もツと飮まうか？』
『いやです、わ』と、かの女は身を娘らしくそらした。そして、またてく〱ついて來た。氷峰はその樣子をさかりのついた雌馬の樣だと思つた。
『よく似合ひます、な。』後ろから年增が冷かした。
『たんとお燒きなさいよ』と、貞子はその割合に腹を決めてゐたらしい。
『えい〱、燒きますとも——その代り、また芝居でもおごつて貰はねば、な。』
『おごりますとも、さ——芝居だけ？』
『いいや、芝居に、あづま壽司に、西洋料理に、丸井の呉服に——』
『大變慾張り、ね——お腹が裂けますよ』と、貞子は段々調子づいて來た。
然しかの女が調子づいて來た時は、遊園を出た女學校々舍の前に來て、そこから氷峰は別れてしまつた。人に見られては、下らないと思つたからだ。

そして、家に歸る道々考へて見ても、どうも貞子なるものが、一回會つた切りだからでもあらうが、腹に這入つて來ない。いい女ではあるが、妻とするには、まだよく分らないところがある。

『それよりもお鈴だ』と考へると、かの女の方は、まだ決定はさせてないが、度々會つてゐるだけに、よく素性も心持ちも分つてゐる。顏や姿や學問から云へば全くゼロと言つてもいいが、自分のずぼらな性質に對しては、かの女が經濟向きに一種の才を持つてゐるのは唯一の取り柄だ。『それに、あの熱心なのだから』と思つた。

歸つて見ると、果してお鈴が來て待つてゐた。そして、うらめしさうな脹れツつらをしてゐる。

『今のを燒いてるのか』と、氷峰は笑ひながら爐ばたに坐わつた。

『そんなんぢやない』と、お鈴は涙ぐんだ。

『なんで泣くんぢや』と聽くと、かの女は下の婆アさんがここへ來る度に睨みつけることを告げた。

『はんか臭い奴ぢや、なア、そんなことでめそ〳〵泣くのア。』氷峰は慰める樣な、またじらす樣な樣子で、『ありや、おれに氣があつて、燒いてるのぢや。』

『まさか』と、お鈴は笑つたが、矢ツ張り泣いてゐる。

『あんたは、そんなこと云ふて、矢ツ張り、今見たことが氣になるのぢや。』かう云つて、氷峰は今の女は山から來た自分の親戚のものだといふことに云ひくるめてしまつた。

然しなほ、かの女は歸りもしないで、めそ〳〵泣くのが止まない。面倒臭いのでほうつて置かうとすると、聲をあげてすすり泣いた。

氷峰はやツとその意味が分つた。若い女がただ悲しいのではなく、その生理的經過上制しがたい力のみなぎつて來たのに堪へ兼る訴へだと考へた。そして、お鈴を引き寄せて、その頰にあつく接吻してやつたさうだ。

女にかつゐてはゐる義雄だが、氷峰のこんな話を聽いたのでは、人ごとだからでもあらう、曾て或旅館で隣室のことに目がさめた時と同樣、別に刺戟も挑發も受けなかつた。そして若し神なる物があつて密室に於ける夫婦の樣子を見てゐたら、失ツ張り、こんな冷靜と寬大とを持つてゐるのだらうと思へた。

## 二

北海實業雜誌の初號はいよ〳〵生れた。全道各地の書店へ發送したのは勿論、北海メール、小樽新報、並びに北星に出た大きな廣告を見て、購讀を申し込んで來るものが多い。それに、札幌ステーションの賣店に於いては、發刊日の午後半日のうちに二百部ばかりも賣れた。

その評判は、最近の來道貴賓なる後藤男爵、岡部子爵、伊藤大師、本願寺法主に次いで、著明なも

のとなり、札幌、小樽、旭川、帶廣、函館等に於いては、直ぐ知らないものはないほどになつた。そして、逢ふ人毎に、

『氷峰君萬歳』を呼ばないものはない。社長の川崎は、主筆ばかりが讃められて自分は殆ど緣の下の力持ち同樣なのに業を煮やしたのだらう。雜誌の披露會を東壽司に於いて思つたよりも張り込んだ。然し、その內幕は、初號を印刷屋から受け取る代金も、披露會の費用も、すべてかの禿安老人に二度目の手を煩はしたのだ。

東壽司に招待されたものは義雄の歡迎會に來た新聞記者のあたま株と、北劍と義雄と禿安とである。藝者やお酌も七八名來た。

その席で、禿安が入らない世話を燒いて、記者仲間を怒らしてしまつた。と云ふわけは、全體、この老人などをこの席へ招待したのは川崎の不注意であつて、酷に云へば、仲間を侮辱したのだと思はれてゐる矢さきに、禿安はどう感づつたのか、例の小樽新報の孤雲がまだ歌ひ出さないで、『アオウ、アオウ』を頻りに繰り返してゐる最中、片ツ端から細君持ちを說きつけて、自分と共に早く歸るやうにしてしまつたのだ。そして、殘つた獨身者は義雄と氷峰ばかりだ。

『あのおやぢ、また、何をおせツかいしやアがるんぢや——勝手に出しや張りやアがつて、さ』と、川崎は自分がけちな策略をさせたと思はれては困るといふことを憤慨した。

それから、三人は雨の夜を車で高砂樓に繰り込んだ。島田さんが來たといふので渠に熱心な女が先づ飛び出して來たが、川崎のゐるのを見て、

『あら、兄さん』と、まごついた。川崎は暖簾をこぐつてあがる時、雨の袖で顔を隱してゐた。そして、渠も亦この女のなじみである。

酒の席では、川崎と氷峰とがどちらも感づいて、をかしな遠慮がちの鞘當てがあつたが、川崎は高見香牛と同じ事情で女郎屋にとまつたことがない。然し請負師のかけ引き上、人をつれて、よくここへやつて來るので、すべての女から、

『兄さん、兄さん』と云はれて喜んでゐる。

この夜も、自分が大藏省である見識を見せて、女どもに意張つた話を聽かせ、皆の前で可なりふざけもしたばかりで、さきへ歸つてしまつた。

『あの兄さんは本當に面白い人よ』と、花子といふ義雄のなじみも引けてから渠に語つた。

渠はこの樓へ最も多く來たのであるが、女が格式張つてどうも木で鼻をくつた樣なので、いつも、二度と來まい、二度と來まいと思ふのだ。

## 二三

義雄は、歸京することになつてゐる以上は、一日でも早く出發したいのである。メール社の方のパスも餘り延び／＼してゐるうへ、その延びる理由をも云つてよこさないので、或は天聲がいい加減なことを云つてゐるのだらうと想像して、多少怒らないでゐられない。義雄は渠のところへ問ひにも行かない。

天鹽の土地問題も、松田の雇ひ技師に書類を見せたところ、とても相談にならないと云ふので、北劍の家へ行つて、義雄は書類を返却してしまつた。

樺太の方へは、また、癇癪まぎれの最後の手紙として、これから以後までも仕事をしてゐる必要がないのみならず、ゐればゐるほど損害が多くなるのだらうから、早く引きあげるやうにしろ。自分は、北海道でも見込みがつかないから、全然失敗と見て東京へ歸る。然し、いよ／＼出發となれば、電報を打つといふことを云つてやつた。

書きかけた論文も、かうなれば、筆を執る勇氣がなく、中絶してゐる。

義雄は全く虻蜂取らずの大失敗者の樣だ。待たれるものは、ただ歸京旅費の來ることばかり。

『然し旅費の來るのを待つのも一種の事業だらう、若し自分がそれに心身全體を投じてゐれば』と、まだ強情張つて、渠は自分の人生觀とは離れたくなかつた。

勇のところに終日引ツ込んでゐるのも面白くないので、毎日、晝間は氷峰の社へ遊びに行き、夜は

おそくまで渠の下宿へ行つて話す。氷峰も大分義雄に飽きが來たらしい。これを知つた義雄は、もう、どこにも、眞に親しむところがない樣な氣になつて、歸京したい一方だ。そして、そのいら〳〵する心を靜める爲め、暑苦しい日を終日寢て暮したこともある。そして、殆ど全くがツかりして、筋肉の一すぢも動かしたくない樣になつた。

一日置いて、實業社へ行つて見ると、氷峰は、もう、第二號の原稿を取りまとめにかかつてゐる。そして、社として僅かに這入つて來た金を社員の出張旅費に分配して、次號の材料並びに廣告を取る爲め、小樽、旭川、帶廣、釧路、室蘭地方へ、社員を分派したところだ。

それを見ても、時間の經つのと人のやつてゐる事業の進行とが明らかに日に見える。樺太から着した翌日には、氷峰に誇つて、渠のまだぐづ〳〵してゐるうちに、自分は三千圓ばかりの仕事をして來たぞと吹聽したが、今はそれが殆ど正反對だ。外部的には殆ど何もやつてゐない。そして活動停止の樣な義雄は、身づから、如何にも氣が氣でならない。

『もう、どこからか一と口ぐらゐは送金して來さうなものだが、ねえ――』すると、

『いい友人がなくなつたのぢやないか』との返事だ。

『或はさうかも知れない。』義雄は、東京へ歸つても、もとの如き立ち場が得られるか、どうかといふこの頃の心配を胸にみなぎらした。然し、自分のやつた文學上の過去の事業は、決して友人で出來た

のではない。自分一個の努力だ。そして、その寂しい努力を再びつづけるのが、失ツ張り自分の仕事だと思ふ。

『僕は一度でも快樂一方の人間を想像して見たい。』義雄はいつになく弱わ音を吐いたので、

『それでは』と、氷峰は異樣な顔つきをして、『君の說に從へは死ではないか？』

『無論、死、さ。』義雄は痛切に自分を返り見て、『然し僕が死ねば、死その物もついに充實した內容を得られよう、さ。』

『さうだ、君の考へで死ねれば、なア。』

から云ふしんみりした物語りをしてゐるところへ、雪の屋といふ雅號の淺井能文がやつて來た。

渠はもと或東京新聞の記者をしてゐたが、今は當地の或中學で、倫理並びに作文の敎師だ。呑氣な、人のいい人物で、友人間には聖人のあだ名があり、自分も亦時々その借金手紙などの裏書きに『雪の屋聖人』と書く。

渠は、夏期休暇を利用して開かれた釧路地方の敎育會講習會へ、氷峰の周旋で、倫理學の講義に行つてゐた。そして、妓樓遊びばかりしてゐたので、講習會で得た金を使ひ果し、九月の授業開始期に間に合ふ樣に歸ることが出來なかつた。そして、歸つて來ての唯一のみやげは、自分の被る麥藁帽の

裏絹へ數多く書かせた藝者や女郎の自署であつた。

　渠も義雄と同じ樣に毎日氷峰のところへやつて來る。そして、これは義雄とは違ふが、毎晩、遊廓を地廻りしなければ、寢られない人だ。この頃は、金を使ひ切つたあとで、無論、登樓が出來ないから自分のなじみのゐるあちらこちらの格子さきに立ち、ただ言葉をかはすのを喜んでゐる。

　そして、たまには、格子隔てに金品をねだられ、親切にも、苦しい算段をして持つて行つてやる。それから、また、女郎から來た『雪の屋さま』當ての手紙をすべて序文つきで麗々しく雜誌北星に出すのも、人とは違つてゐる男だ。親切だが、どうも女に好かれない。そして、嫌はれても、どう云ふものか、それが分らない。

『雪の屋にも困る、なア』と、氷峰はいつも義雄に語つてゐる。女の話が出ると、にやり／＼笑つてのり氣になつて來るが、それが出ない限りは、一時間でも、二時間でも默つてゐて、それに飽きた時は、どんな用談があつても、かまはず平氣で失敬する。然し、また、

『まだ地廻りには時間が早いよ』などと冷かされると、

『さうだ、なア。』首を曲げ、口をぱくりと明けながらもとの座に直る。

　渠と義雄と氷峰と、三人はつれ立つて社を出で、晩飯を喰ひに氷峰の下宿へ行つた。そこへ、北山孤雲が訪ねて來て、

『丁度淺井君がをられるので、好都合ですが』と云つて、今度小樽に商業學校が設けられたが、その教頭になつて吳れないかといふ相談を持ち出した。そして、俸給はこれ〳〵だが、位地は今よりもいいと云ふ。

雪の屋は暫らく默つてゐたが、今の方が結局都合がいいと云つて斷わつた。

孤雲と入れ代つて、また呑牛がやつて來た。いきなり、雪の屋を捕へて、

『おい、あの、君のあまツたるい寄書は今度限りよすよ、讀者から新聞の品格がさがるといふ忠告が來るから』と云ふ。かうむき出しに云ふのは、友人間で、義雄も聽いてたが、雪の屋の反省を促してやる相談があつたからである。

『さうか』と、渠も不意打ちを喰つたといふ樣子で、のろ〳〵と、『それでは――僕もやめよう。』

『何か、もツと身のあるものなら、結構だ。』

『さうだ、なア。』

『あんな物を出すのは、いつも云ふ通り、君の恥辱ぢや』と、氷峰もそばから云ひ添へる。

それから、皆が出し合つて、僅かな金が出來たので、牛肉を買はせて、簡單な宴會が初まつた。

仕事をしなければ考へる、考へてゐなければ何かの遊びでもする。かういふ風にして疲れ切つてし

まはなければ、不斷でも、義雄は眠られない。それが、この頃の如くいら〳〵して來たら、殆ど終夜一睡の安眠も出來ない。一つ、はしやぎ倒れるまで、充分はしやいで見るのも面白からうといふ氣になり、下らない雜誌やら『春夢瑣言』の話やらをしたり、聽いたりしながら、常よりも澤山酒をあふつた。然しその割りには醉はない。

女の話になつて來ると、雪の屋もその仲間入りをして、例のにや〳〵笑ひを以つて、釧路や帶廣のことを語る。氷峰も、帶廣にゐる女の自分にまだ熱心である自慢ばなしや、中學一年生の時、人の細君に强いられて、ついその氣になつたこと。東京で石部金吉と云はれてゐた時、歌を緣にいろんな申し込みがあつたこと。などを話す。呑牛は、また、札幌の遊女や藝者の個人的內幕や、知名の人士の遊び振りを素ツ破拔く。義雄も亦負けない氣になり、自分の九歲の時の初戀や、その次ぎの戀人に十數年振りでめぐり會つたことや、吉彌といふ藝者を受け出した時のことや、樺太女の話をする。

然し話も漸く盡いたらしい頃、誰れかの發議で花を引かうといふことになり、下の女中を呼んで、當てのあるところへ花札を借りにやると、

『もう、寢てしまうて、駄目です』といふ返事だ。

『何時だらう？』時計を見ると、もう、十二時に近い。

『雪の屋君、どうぢや、皆で行かうか？』かう云つて、氷峰が冷かし半分に淺井に向つて微笑する。

『どうも、地廻りだけだ。』雪の屋が口を明けて締りのない返事をする。
『どうぢや、田村君も惡くはなからう』と、氷峰は義雄をも促した。
『結構だ、ねえ。』
『あすまで居殘るものがあれば、僕に一つ當てがあるが――』と、香牛は相談を持ちかけた。
『僕も、君の方に』と、氷峰は香牛に向ひ、『拂ふ廣告料があるから――』
こんな話の末、雪の屋はあす學校があるし、香牛や氷峰も用事があるから、さしたる用のない義雄があすの居殘り役になるときまつて、四人は薄野に向つた。

一等店には行ける見込みがない。中店でも、義雄が知つてゐるところには行けない。皆で相談の上、三等小路のうちの上店へあがつた。
井桁樓といふのである。
香牛のなじみなる女の部屋――二階の一郎下の隅にある――に這入り、先づ皆で相談する。雪の屋にもここになじみがある。氷峰もここでは、『金魚の旦那』といふ名でとほつてゐる。そのわけは、渠にうち込んでゐた一妓がその愛翫する金魚、三つ尾四つ尾の流金を立派ながらす鉢ごと渠に贈つたのを、渠がさげて歸る途中で友人に發見されてから、評判になつたのだ。今小樽にゐると云ふのが乃ち

その主だ。
渠と義雄との相方になるのがきまつてから、酒宴が初まつた。
義雄は、かういふところでは、不斷の談話家に似合はず、兎角沈み勝ちになるのが常だが、今夜に限つて、誰れよりもよくしやべる。そして、自分の關係した女や自分のからだの思ひ切つたうち明け話をして、女どもを笑はせた。
そして、自分が十四の時神戸で初めて福原へつれて行かれ、こわいので、ただ眠つたばかりで歸つたあとの感想や、仙臺で汁粉屋へあがつたら、それがこちらの所謂そば屋であつた時のまごつきなどを、熱心な、性急な調子で、而もおもしろをかしく語つた。そして、樺太二枚鑑札の藝者がマオカで或客(これは森本春雄のことだ)を追ツかけ、逃げてゐるのを知らず、旅館へその客の室に忍ぶつもりで、別な人のところへ入り込み、枕さがしと思はれたことをおほきな聲で最も滑稽的に話した時などは、脊中合せの隣室からも笑ひ崩れる聲が聽えた。そして、同席の女どもは、義雄の熱心な滑稽的口調や態度にも醉はされたらしく見える。
『どちらがおれの相方だらう』と思つて、渠は新らしい方の二名を見ると、どちらもいい女ではない。然しまだしも比較的に小づくりの方がいいと思ふ。
試みにかわやへ立つて行くと、丁度小づくりのがついて來た。手水鉢で手を洗つてから、廊下で、

『お前がおれのか？』笑ひながら聽くと、
『わたしはどちらでもよろしい、お好きでないなら。』
『なアに、お前の方ならいいんだよ。』義雄はかの女の手を引いてもとの部屋へ這入ると、皆が
『やア、萬歳』と冷かす。然し義雄がちよツと苦い顏をしたのは、こちらが先を越した故だらう。
義雄と共に、今の部屋を一つ隔てたのに引けてから、かの女は茶(ちや)を入れたりしながら、何だかいそいそして、思ひ出し笑ひをする。
『演味氣の惡い女だ、なア。』渠がわざと顏をしがめながら云ふと、
『だツて、あなたはおもしろい人だ、わ——隣りのこの花さんのお客までが吹き出してをりました、わ。』
『吹き出すものは吹き出させて置くがいいぢやアないか？　まさか出來物ぢやアあるまいし、膏藥を張るわけにやア行くまい。』
『わたし、あなたの樣な人が好きよ。』
『好きなら、勝手に好きなよ、おれはおれでおれだい——ああ、こりや〳〵』と、義雄は獨りで踊り出す。
然し、渠は、腹の中では、その實、最も反對に、自己をその根底から動かす知、情、意合致(がふち)の悲痛

を、過去や未來の記憶や希望の餘裕なきほどに、深く感じてゐたのである。そして、この感じがよくかたづけてある部屋の引き締つた空氣と女の今ふり撒いた香水のにほひとに、直接に融和して行く樣におぼえられた。

義雄は然し非常に醉つてゐる。

『おれが本當に踊つて見せようか』と、子供の時に見覺えた幇間踊り『今頃は半七さん』を臆面もなく出鱈目に踊ると、女はにこ〳〵しながら見てゐる。そして渠は音を立てまいと思つても、ふらつく足がどたりどたりと疊に當る。

そこへ、今、呑牛を見送つて來た女が通りかかり、締めてある障子のそとから、聲をかける、

『何事が初まつたのよ?』

『まア、お這入りよ。』こちらの女が云ふがままに、そとのが這入つて來た。

『よく入らツしやいました』と、義雄はわざと平つく張つて挨拶をする。その樣子がをかしいと云つて、二人の女はまた笑つた。

『本當にこの人はおもしろいのよ、どたばた踊つたりして、さ。』

『承りますが』と、こと更らに丁寧なお辭儀をして、『踊つては惡う御座いますか?』

二人はまた笑ふ。

『それでも』と、這入つて來た女の方が眞面目な笑顏を見せて、『あなたはえらい人なのだて、ねえ。』かう云つて、かの女は、香牛に云つて聽かせられたらしく、義雄が自分の歡迎會席上へ平氣で安ツぽい海水浴帽を被つて行つたことを、阿彌陀にかぶる眞似までして、話す。

屛風が立てまはされてから、直ぐ女は、

『初會惚れして、わしや恥かしや』と低い調子で歌ひながら這入つて來た。

義雄は、そんなありふれた思はせ振りに容易く乘る樣な男ではないぞと云はないばかりに、その方へ寢返りながら云つた、

『へん、「あすは來るやら、來ないやら」だい。』

* * * *

『煙草の樣だ、ねえ』と、義雄が冷かした通り、敷島といふのが女の名だ。仙臺在、岩沼の生れで、義雄が仙臺に學生をしてゐた時知つてゐた人をかの女も亦知つてゐるので、よく話が合つた。

朝、起きてから、——どうせ、ゐ殘りだから、ゆツくり起きたのだ——綺麗に掃除の出來た火鉢を中にさし向ひ、女が火をつけて吳れた卷煙草を吸ひながら、六疊の部屋を見まはし、義雄はまだねむさうなあくびをした。女もそれにつり込まれた樣にあくびをして、

『あなたのが移つた』と笑つて、袖を以つてその口を隱し、目をしよぼつかす。ゆふべ見た時の心持ちとは違つて、細い、優しい目を持つてゐる女だ。

如何にも小づくりだが、品のいい細おもての額や頬に縮緬皺が多いのを見ると、然しおほ負けに負けてやつても、二十五は下らない樣だ。(ゆふべ初めて見た時は、もツと年增に見えた。)それでも、かの女は二十三だと云ふ。そして、少し躍起となり、簞笥の引き出しから、娼妓許可の鑑札を出して來て、

『御覽なさい、これより確かなものはない――誰れにも見せたことはないけれど、あなたがさう云ひ張るから見せます。』

見ると、『宮城縣岩沼町――荒物商――平民――大野富藏次女、梅代――明治二十年九月十日生』とある。本當のことを云つてゐるのだとは分つたが、それが分つたとて、別に自分の鑵詰事業が恢復されるわけでもなく、また、自分の望まない歸京をやめる樣にして吳れるものでもないと思ふ。

『こんな詰らないお札は何の御利益もねえや。』わざと憎まれ口を利いて、義雄はそれを女の膝の上に投げる。『燒いてしまうがいいや。』

『おほきなお世話だ。』女はそれを引き出しにしまつて、ほほゑみながら、『これがなければ、わたしの商賣が出來ませんから、ね――』そこに聲を引ツ張ると同時に目を細めて、顎のさきを義雄の方へつ

き出す。義雄はその顎を、火鉢のうへの方で、ちよッと、手の握り拳に受けて見せた。

　そこへ、番頭が來て、これで二度目の催促だ――明けた障子の敷居の上へ膝をつき、丁寧の樣だが然し冷酷な顔つきをして、

『一向、遲い樣ですが、使ひでもさし立てましようか？』

『さうだ、ねえ――』義雄も變な顔をして、氣の毒の樣な、またこちらが恥かしい樣なおぢけが出た。が、まさか、氷峰等が自分をこのまま打ッちやつては置くまいといふ考へがあるので、『まア、君、もう少し待つて吳れ給へ、いよ〳〵來なかつたら、僕が責任を負つて、行燈部屋へでも下りる、さ』と、おもては笑つて見せる。

　然し番頭は少しもをかしくない樣子だ。義雄の腹の中と同樣な澁い顔をして、

『それでは、今少し待つて見ましよう』と答へて、引ッ込んだ。その引ッ込んだのをじろりと見た女の目つきが非常に意地惡さうに義雄には見えた。顔は少しもそッちへ向かないで、黑い目の玉だけが細い長い目の中でじろりと動いた。

『いやにこわい目つきをしたぢやアないか？』義雄がからかふと、

『でも、癪にさはるからよ。』女は直ぐ笑がほになる。『さうしげ〳〵催足しないでもよからうぢやない

か、あの番頭さんが分らないのだ、わ、わたしがついてゐるのに。』
『おそろしい人にくッつかれたものだ。』義雄はなほおぢけを見せないつもりで、『いよいよ金が來なけりやア、お前と番頭とでおれを行燈部屋へほうり込まうと云ふのだらう。』
『はんか臭い人だ、ねえ、あなたは——そんな心配はしないでも、わたしが二日でも三日でも大事にして置いてあげます、わ。』
『何とも、重々恐れ入ります。』おほ業なお辭儀をして女を笑はせながら、時計を出して見ると、もう、十一時過ぎた。自分も腹が減つて、ぺこぺこして來たのをおぼえる。
『本當に冗談ぢやアない！』少し女にも申しわけのない、恥かしい樣な氣になつたが、それを隱す爲めにわざと笑ひながら、火鉢のふちへ兩肱をついて、招き猫の樣にして寄せ合はせた兩手の上へ顎を置き、女の顏を見つめて、『どうだ、仙臺へ歸りたくないか？』
『さう見つめると、わたしの顏に穴があきますよ』と云つた切り、女はつんとして返事をしない。そして『歸りたいとて、歸りよか佐渡へ』と、もぢつて歌つてから、『「四十九里浪の上」をどうします』と云ふ。
『誰れか引かして呉れるものがあるだらう、さ。』義雄は冷淡に答へたつもりだが、かねさへあらば自分が引かしてやるのにと云ふ望めない望みにも裏切られて、自分の目は弱く他へ轉じた。『立派な簞笥

や茶簞笥があるぢやアないか？』

『わたしだツて』と、女は答へる、『お嫁に行つて、人の細君になる時がありますから、ね。』

元祿女郞を書いた掛け物がかかつてゐる半間の床の間には、女學世界、婦人世界などが積み重ねてある。また、家政學、裁縫敎科書、挿花の栞などがある。

然し、さういふしほらしい、所帶がかつた物を見て、女がいつか人の妻になるその用意をしてゐるのかと思ふと、矢ツ張り、淺薄な、くすぶつた普通並みの女房になつてしまうのだらうと云ふ想像がさきに立ち、憐憫と侮蔑とが互ひ違ひに嫌惡の繩を綯つて行く。そして、その繩が自分の身のまはりに段々蛇の樣に纏つて來るのを感ずると、義雄は早くそこを拔け出したくなる。

『ああ、早く歸りたい、なア』と、渠はさもつらさうに云つて、うつ向きに長くなり、投げ出した毛脛の足を以つて、右と左りをかたみに、疊の燒け蹴りをする。

『丸で子供の樣だ、ねえ。』女は座を立つて、義雄のわきへ來て坐わる。

義雄も亦、うつ向いたのを仰向けになると、ぢツとこちらを見てゐる女の顏を下から見あげることになつた。何だか抱きついてやりたい樣な氣になつたが、いい氣になつて、女の巧みな手管にのつたと思はれはしないかと思つて、ただ苦笑ひをしてゐる。近頃の寂しさが初會の女をでも若し心の奥まで

抱き込めるなら抱き込みたい氣にこちらをならせてゐた。
ふと氣がついたのは、女の左りの耳たぶの下部に、ちいさな瘤の樣な物が附いてゐる。梅毒の吹き出たのか知らんなどと思つたが、それにしては、顏の無事であるのが不思議だ。
『まさか』と、心ではさう云つて信じないが、憎まれ口のつもりで『もう、一度は吹き出たんだ、ね？』
『何が、さ？』女は兩手を以つて上から義雄の胸を押す。
『その』と、押されたのを少し苦しみに感じながら、『耳たぶの瘤よ。』
『これは、失禮ながら、そんなあやしいものでは御座いませんよ。』女は憎らしいと云はないばかりに義雄をゆすりながら、『ニキビの固まつたのです。』
『どれ、見せろ。』手を出すと、女はおとなしくその方の耳を少し傾むける。そして、義雄がそれをさはつて見ると、やわらかい。
番頭の足音がするので、女は自分の座に戻つた。義雄も亦坐わり直した。そして、渠の心の中では、いツそ、金が來ないで、もツとかうしてゐたいと思つた。
然し氷峰から屆けて來た封金に不足はなかつた。義雄はいよ〳〵立ち去らなければならない。
『また來て頂戴よ』といふ聲を從へて、廊下へ出ると、

『今歸るの』と、呑牛のなじみが聲をかける。かの女は自分の部屋の前なる欄干に倚つて、下庭の池の鯡鯉の泳ぐのを見てゐたのだ。名は左近と云つたツけと、義雄は思ひ出しながら、

『さよなら』と答へると、

『またお出でよ、ね、――またお出で。』左近も斯う云ひながらついて來た。

二階の段を下だり、裏玄關にまはしてある履き物を引ツかけて出ると、敷島も附いて裏門のそとまで來た。

『また來て頂戴よ』と繰り返すのを冷淡に聽き流して、出たところを誰れか知り人に見られはしないかと思ひ、角まで一直線に急ぎ進み、曲りがけにふり向くと、裏門の柳のもとに、まだかの女は立つて、こちらを見てゐた。

『…………』たツたおひるまでのゐ殘りに何だか一ケ年も二ケ年も一緒に住んでて別れたやうに親しみがあつた。

二三

義雄はその足で氷峰の下宿へ行つたが、留守だ。雜誌社の方へ行くと、氷峰が出しぬけに云ふ、

『ゆふべ君は持てた筈ぢやぞ。』

『そんなことがあるもんか』と答へたが、義雄は女の態度がこれまでに自分の經驗しなかつた親切な態度であると思ひ浮べてゐた。そして、あれは女その物が親切であるのでなく、あの店がさうさせて客を引くのだらうと云ふことを說明した。

『それもさうぢや。』氷峰は金魚の經驗を思ひ起したらしく、『もとから、あすこは丁寧なところぢや――實は、金を屆けないで、もツと君を心配さしてやらうかと思ふてをつた。』

『そんなことをされて溜るかい？』

『まア、これを見給へ。』氷峰は自慢さうに一つの封書の開封してあるのを出す。見ると、渠が中島遊園で密會した若杉貞子の手紙だ。義雄は中を出して讀んだが、要するに、氷峰にはほかに女があるさうだから、自分如きものはと遠慮して、とてもお邪魔になるだらうといふことが書いてある。

『どう返事をしたのだ？』

『車屋に持たせて來たのぢやが、僕は無論ほかに女がある、貴孃にその中へ這入られては邪魔だ。僕から要求した金も、他で工面するから、入らないと書いてやつた。女といふ奴はいやなもんぢや、もう、燒いて來たのぢや。』

『そりやア常り前だらう、一度でも關係しちやア。』

『然し、僕の要求は少しも果さないで、そんな勝手なことが云へる筈ぢやない。』

『それもさうだらうが、君の思ひ切りがいいのにも感心すらア。』

『君に感心して貰つても、一向金は出來ぬ。』

『然し向ふの身になつて見給へ、な。』

『あれだツて、娘ぢやと云ふてをるけれど、何物ぢやか分るものか！』

『さう考へりやア一言もない、さ――女郎を君が胡麻化すのと同じだから。』

『それも、僕が本當に惚れたのなら、別、さ。』

こんな話をしたあとで、義雄は朝晝兼帶の食事の代りに、氷峰と共に、露西亞パンを嚙じつた。辨當を取る金がなかつたのだ。

義雄が有馬の家へ歸ると、原稿料がかわせで一と口、友人からのが電報で一と口、來てゐた。いよいよこれで歸京が出來る。

それを郵便局へ行つて受け取つた歸り途で、有馬の子供にやるみやげや、夕飯の馳走を買つた。

然しあす、あさつてに出發すると云ふのではない。と云ふのは、義雄が何か一つ握つて置きたいと云ふつもりで、先般、樺太廳の或人に紹介したことがある。樺太の木材を樺太以外へ輸出する目的で切れば、特別な保護があるので、稅も非常に安い。そして、木材の性質も、三井物産の探險隊が先年報告した樣な、そんな惡いものばかりではないらしい。渠等は實際の探險はせず、いい加減の報告材

料を拵らへて、徒らに飮んでゐたのを聽いて知つてゐるから、あれは決して信用出來ない、と義雄ぼ思つてゐる。それを切り出して、一つ北海道の木材と競爭する計畫を立てて見たいので、それに關聞る問ひ合せの返事を待つてゐるのだ。

その返事がここ二三日のうちに來る筈だ。

晩酌のほろ醉ひにまかせて、義雄は有馬の家から二三丁さきの巖本天聲を音づれた。

一つには、歡迎會などのことで世話になつたので、さう冷淡にほうつて置けないからでもあるが、今一つには、出し拔けに歸京を報告して、もう、渠の樣に要領を得ないものの言を待たないといふ意をほのめかしたのだ。

すると、天聲はあわてた樣子をして、

『さうせツかちにしなくてもよからう』と云つて、パスのことを旭川へ度々云つてやつて貰ふのだが、旭川の支局長がなか〳〵ずぼらで、今回に限らず、いつも滅多に返して來ないこと。事務の方に、義雄を相當に歡待するだけの費用を出させたいのだが、それも僅かに二十圓內外しか出さないこと。然しその金は既に預つてゐるから、今、中止されては、自分が事務の方に對して困ること。その代り、それだけでは何とも仕やうがないから、今一度パスを請求して見るといふこと。などを語つた。

『では、まだ多少の望みはある』と思つて、義雄はそこを出た。天聲は、中央公論に出た田村論の駁論を義雄が書いてゐるのを知つてゐるから、それを書きあげたか、どうかといふ樣なことを聽き、且、早く書き給へと親切らしく云つた。が、義雄にはこの時何だか他人の仕事の樣に思はれて、別に乘り氣になつた話はしなかつた。

歸つて見ると、まだ九時だ。有馬夫婦は爐ばたに坐わつて話してゐる。義雄は何氣なくその仲間入りをすると、夫婦はいづれもしよげた樣な態度が見える。

『夫婦喧嘩でもしたあとか知らん』と思ふと、さうでもないらしい。

義雄はメール社の話がまだ見込みのないわけではなかつたことなどを語つて聽かせた。と云ふのは、こないだ中から、何の話も一つとしてまとまらない爲め、渠等の方に少からず不信用の樣子が見えて來たので、これでも一つ出來たら、渠等も多少自分の價値を認めるだらうと考へたからである。然し、義雄の心では、その實、それを——條件が餘り面白くなささうなので——決してさう結構な話とは思つてゐないのだ。

すると、お綱さんが突然、云ひにくさうな樣子で、

『今晩は島田さんの方へとまりにお行きなさらんので御座いますか』と云ふ。義雄は變な心持ちがした。勇も亦かの女に附いて、

『實は、今晩叔母が歸つて來るか知れないのだ——君も知つてる通り、人の留守番に行つてゐる』と云ふ。
『それが來ると、あなたの蒲團が御座いませんのですよ。』
『貧乏所帶はこれだから困るんだよ』と、勇がまた附け加へた。
お綱と勇とは顏を見合はせた。そして、それを見た義雄は苦笑ひして、では、なぜ先刻出る前に云うて呉れなかつたのだとは思つたが、
『それも尤もだから——僕ア行かう。然し島田にも別な蒲團があるわけぢやアないのだ。然し、まア、お休みなさい。』から云つて、渠は再び有馬の家を出た。
夫婦が立ち上つて見送りながら、惡く思はない樣にと頻りに辯解してゐたが、渠には、もう、それが立派な辯解には取れなかつた。
『體よく夜中に追ひ出されたも同樣だ。』から考へて、渠は重い足を運ぶ。そして、かの八月十五日の午後二時頃、初めて札幌停車場の前に立つた時の寂しい感じを、今夜また、舊曆八日のつき夜に思ひ浮べた。
博物館構内へでも這入つて見ようと思つて、直ぐそばの入り口まで行つては見たが、高い繁木の數

多い根もとを透かして、暗く牧草の生えてゐるのが、如何にも物凄い。そして、風にゆらぐ繁葉の間から、隱れた月の光がはろり／＼と夥多の蛇の目の樣にひかつてこぼれるのを見ると、どうしても、おぞ氣がついてそこへ這入る氣になれない。

然し藁は牧草と寢床、木の枝と家を聯想して、自分も兎や蛇の形になつてゐたら、こんな苦悶やまごつきはなからうにと考へる。

柵外の路なかに立つ例のアカダモの樹かげに行き、その根に腰かけて冥想すると、自分と云ふ物の心熱までが自分の目前にあらはれて來て、生存と云ふ苦悶の闇を照らす樣だ。然しその照らしは却つて自分の苦悶を一層明瞭に自覺させる鋭さであつた。

そこにもゐたたまらないので、また歩き出す。然し今から氷峰の下宿へ行つたとて、あれもゐないか知れない。よしんばゐたとて、つづけざまに風邪の氣味があるので、早く寢てゐるに相違ない。その一つ寢床へ這入り込むのは氣の毒だ。それに、こないだ、一緒にその床のあとさきに枕した時の寒かつたことを思ひ出すと、再びさういふ目に會ひたくない。

『勇等の考へでは、金が來たから、宿屋へでも行けといふのか知らん』と、初めてから氣が附いて見ると、なほ更らそんな氣にもなれない。

『矢ツ張り自分は自分だ』と考へると、知力も意志も共に感情と合體して、『薄野へ行け』と命令する

樣だ。そして、どうせ行くなら、ゆふべの女のところへ行つてやらうと云ふ氣になる。

敷島といふ女が、どことなく、他のよりは可愛い樣なところがあつた。

井桁樓のおもてに達すると、入り口で、涼しいのに、見知りの番頭が皐丸火鉢をしてゐた。冷淡に構へて、然し顏を赤らめながら、義雄は女の名を云つて、その部屋が明いてゐるかと聽くと、

『へい。』渠は馴れ〳〵しく、『明いてをりますから、どうかおあがり下さい。』

確かにさうかと念を押したうへ、店を張つてゐるものらにわざと顏を見せない樣にして、つか〳〵あがつた。そのあとに、ばた〳〵といふ拍子木の音がした。

敷島の部屋に飛び込み、獨り、床の間の前の座蒲團の上で、火鉢に向つてあぐらをかき　そのまま壁にもたれて、川崎雜誌社長がさきに高砂樓でじた樣に兩袖で顏を押へてゐると、ばた〳〵云ふおいらん草履の音が近づいて來て、障子が明く。

多分敷島に違ひないと思つたから、義雄は袖で顏を隱してゐると、

『へん、そんなことをしたツて、駄目だ』と云ひながら、かの女は這入つて來て　火鉢を中に義雄と相對して坐わる。『入らツしやい。』

『はい、入らツしやい。』渠もわざと固苦しくあたまをさけたが、微笑してゐた。

『來て吳れればよいと思つてたところへ呼ばれたので』と、女もにこ〳〵しながら、

『誰れか知らと考へながら來たら、矢ツ張りあなたであつた。』

『おれも』と、義雄は火鉢に兩肱をかけながら、『ばツたり〳〵とお前の草履の音だらうと考へてゐたら、矢ツ張りお前であつた。』

『眞似師だ、えね』と、女は火鉢を越えて濼を打つ。

『然し』と、義雄はその態度のまま、『まア、結構だ。』

『何が、さ？』女は不思議さうに云ふ。

『いつ來ても、御商賣が繁盛しない樣だ。』

『人を！』あツけに取られた樣に體を正し、『馬鹿にしてる、ねえ』と、聲を引ツ張り、『お氣の毒だが、もう、晝間からかせいでしまひましたよ。』如何にも憎らしさうだ。

『ぢやア、おれは來てやらないでもよかつたのだ。』

『何ぼでも、お客が多い方がいいぢやないの？』

『然しさう多けりやア、また、おれとばかりしツぽりといふわけにやア行くまい？』

『だから、明けて置いたとお思ひよ。』

『親切だ、ねえ、この子は。』

『親切ですとも、あなたには。――今晩は、もう、店へ出ないの。』
『そんなことを云つて、矢ツ張り、敷島さん』と、番頭の大きな呼び聲を眞似る。女は不意を打たれて、
『びツくりするぢやないか』と、胸を撫でる。
『然しさう云つて呼びに來たら、矢ツ張りお客に出るぢやアないか？』
『いゝえ、出ません、わ、今晩に限り――病氣だと云ふて。――實際、けふはいそがしかつたもの。』
女はあまえてゐる樣な調子だ。義雄は然しあまい奴と見られない樣に、見られない樣にと努めてゐる。そして、何氣ない風をして、女の耳たぶの下部のニキビのかたまりと云ふのをさはつて見る。番頭が臺の物を持ち運んで來たので、その番頭に、
『けふは、番頭さん、ゐ殘りぢやアないから、安心して呉れ給へ。』
『へい、恐れ入りました。』渠はあたまを下げて去る。
『また來たの？』左近が通りすがりに義雄の聲を聽きつけ、そとから聲をかけた。
『はア』と、ちよツと氣恥かしい樣な返事をしたが、思ひ直して、『また來ましたから、どうかよろしく願ひます。』
『こツちこそよろしくです、わ。――高見さんは？』

『けふは會はないから知らない。』

『ひどいの、ね、あなたばかり來て。』

『そりやア濟まなかつた。』向ふへは平氣らしく云つたが、獨りで來たのがこちらの女に弱みを見せるわけだ、な、と思つて、少し自分で自分が面白くなかつた。

『まア、お這入り』と、敷島がお上手をつかつたが、左近は障子にも手をかけない。

『仲よく二人でお話しよ。敷島さんはあなたに惚れたのよ。』

『そりやア、まだ早過ぎるよ』と、義雄は障子の方を向いて答へる。

『馬鹿におしでないよ、左近さん。』敷島はゆるんでゐるが、然し圓味を帶びた口調で、『これでも場數を踏んで來たおいらんですから、ね。』

『左樣、左樣』と、そとのも冗談に答へて、『だが、ね、田村さん。』

『はい〳〵。』

『あなたのやうな呑氣な人のお話は面白いから、また聽かして頂戴よ。』

『はい、かしこまりました。』わざと斯う答へたが、自分を呑氣な人間と女どもが本氣で思つてるかと思ふと、馬鹿々々しくもなつた。

ばた〳〵云ふ草履の音が廊下の奥の方へ響いて行つた。

左近の云つたことを敷島のゆふべ以來の言葉振りや樣子に照らして見ると、かの女の『初會惚れ』云々の唄もまんざら無意味に低唱したのではなからうとも思はれる。

然し何の見どころあつてさうかと考へて見ると、それも女等の言葉に徵してただ、『香氣な人、』『面白い人』と云ふにとどまるらしい。

（三）

自分は決してそんな男ではない。と、かう義雄は心で憤慨した。こんなところへ來るのが既にやぶれかぶれであるので、思ひ切つた馬鹿も云ひ、思ひ切つた踊りもするからこそ、渠等は不斷の不愉快と低氣壓とから救はれて、面白くもあらう。

渠等の不斷の生活が所謂苦界で、つらいことはつらからうが、そのつらさは子供に與へるおもちや同樣の物を與へれば濟む。たとへば、人形とか、風船玉とか、飛行機模型とか、そんな物で一時をまぎらしても濟むのだ。渠等自身が既におもちやだから、人をおもちやにするのも何とも思つてゐないのだ。自分はいくら失敗や墮落しても、決して渠等の慰みには使はれない。

『然し、まア、假面をかぶつてゐるのも一興だ』と覺悟して、義雄は女の調子を取つてゐる。

そして、互ひに酒をついだり、つがせたりしながら、義雄はきのふと同じ冗談を云はうと思つても、どうしてか、それが出ない。また云ひたいこと、問ひたいことが女の身の上や考へに就いて山々ある

樣で、然し、それも相手がそんな種類の女だと思ふと、眞面目には出て來ない。

あり振れた題目よりほか話がないままに、膳も引けてしまつた。

義雄は左近――の方をいいと見たので――あれを敷島よりも好きだと公言する。すると、敷島は、あの人は若い樣だが、自分より三つも四つも年うへであり、また、おとなしいので、近々引かせて呉れるお客がついてゐるなど云ふことを語つた。そして、

『わたしも、誰れか引かして呉れるお客があれば、ね――』と、聲を引いて、遠慮がちに男にすがり附く。然し男が

『ぢやア、おれが引かしてやらうか』と云つても、なか〳〵信ずる樣子はない。

『けふ日のお客さんは女郎よりも餘ツぽど商賣人だ』と云つて、女は男といふものの信じ難い例として、自分の一度打ち込んだ道廳の青年官吏の物語りをした。隨分つかはせたあげくだが、その友人と共に店の格子さきに先ち、百圓の金がなければ免職される破目になつたから、どうかして呉れないかとの相談を持ち込んだ。その翌日、自分がこの店へ住み換へをして、それを調達してやつたのは遣つたが、それが男の官金を費消した埋め合せになつたばかりだ。有罪にはならなかつたが、そのまま遠方へ轉任して、便りがなくなつた。

『それから、もう、二度と再び男になど惚れるものか』と決心したのだらうだ。そして、女郎を本氣

にさせるのは容易いことだ。二三度ぱツぱと使つて見せ、それから格子のさきに立つて、ちびりちびり無心を云ひかければ、初手の女なら大抵それで釣られてしまうといふことを語つた。

然し、かの女が義雄の顔を、屏風の、あちらになつてゐる電燈の光の薄暗い餘波に照らして、ぢツと見つめながら、

『うらの返しに來て呉れたの、ね』と云つた時は、渠も何となく女の寂しい心が思ひやられ、それを、あす、また、裏門の柳のかげから、冷然として、あとは見ず知らずの人の如く、立ち去らなければならない自分の心と對照して見た。

## 二四

その翌日、氷峰の下宿で朝晝兼帶の食事をやつたが、敷島にあつくなつてゐると思はれるのが不本意だから、義雄は不斷の開放的談話家に似合はず、井桁樓のことは餘り口に乘せなかつた。

然し今晩も亦行つて見たくなつたので、たの字よりとして、女に當て午後六時頃には行くから、部屋を明けて置けよといふことを、ハガキに書いて送つた。それほどなら、けさ出る時云ひ置いて來ればよかつたのだが、さういふのが何となく意久地ない樣な氣がして、相變らず、つらい心を冷やかに見せて歸つて來たのだ。

北海實業雜誌をも送つてやつた。それは約束であつたのだが、どうせ行くのなら持つて行つてやつてもいいのに、それとこれとは何だか別なことであるかの樣な氣がした。且、また、自分の行くまでに雜誌を見て、自分が實際何をやつてゐるかといふことを知らせて置きたかつたにも由るのだ。

今度は裏門から這入つて、裏玄關のがらす戸を開けた。すぐそばの便所のにほひがアルボースにうち消されたまま匂つて來る。そのにほひは、丁度、自分が穢い方面に這入りながら、目をつぶつて、心の内容を披瀝する氣持ちの樣に思はれ、それによつて、義雄は自分自身の現在の立ち場をよく嗅ぎつけることが出來た。

戸についてゐる鈴が鳴つたので、おもての方から番頭が草履を持つて飛んで來た。かれにさき立つて階段を二つに折れてのぼり、廊下の角の左り手の部屋へ行かうとすると、

『ちよツとこちらへ』と、右の方へつれて行く。

『畜生！　けふはまわし部屋だ、な』と思ひながら、先づおもて二階の廣間へ行き、低い大きな飯臺の前に腰を据ゑる。

やがて敷島がにこ〳〵してやつて來た。然し臺を隔ててさし向ひになり、義雄の浮かない顏を見た時は、かの女も眞面目臭くなり、

『今晩は濟みません――あなたのハガキが一と足遲く來たもんだから、部屋がふさがつたのです。』

『然しさう遲く屆いた筈ではない』と、義雄は重い、浮かない聲で、『かな棒時間よりも早かつたに相違ない。』

『それでも、お客さんがさきへ來たら、仕やうがない、わ。』女もうらみ聲で云ひ爭ふ樣に云ふ。

『仕やうがないから、おれも仕やうがない、さ。』

『では、歸ると云ふの？』

『ああ、歸れと云ふなら、歸る、さ。』

『誰れも歸れとは云はないぢやありませんか？』

『ああ、誰れも歸れと云はない、さ。』

『それなら、素直にしてゐたら、いいでは御座いませんか』と、女は笑ひがら臺をまわつて來て、男のそばへぴツたり坐わる。『今晩は生憎(あいにく)なんだもの——でも、一人でも急がしいなら、喜んで呉れるのが當り前だのに。』

『そりやアお前の爲めには喜んでゐる、さ。然しおれが不愉快なんだ。』義雄はまだいや味を云ひながらも、出て來た臺の物に向つて、猪口の取りやりをした。

まわし部屋に引けてから、女は茶を入れて置いて、寢床を取りながら、

『これでいよ〳〵なじみになるの、ね』と云ひ、おととひの初會、ゆふべの返し、今夜からなじみ、つづけて來たのだといふことを嬉しさうに語る。

『おなじみがふえて結構でしよう』と、義雄は冷かす。

『…………』女は冷かされてもただにこ〳〵しながら、本部屋の方から、わざ〳〵、綺麗な枕や赤い肩敷き――義雄の親しみある――を持つて來て、休む仕度をする。

その間に、左近を初め、その他の女が澤山入り代り、立ち代り、やつて來て、叮寧らしい挨拶をしながら、義雄の顏を見て行く。渠は『人を見せ物にしてゐる』と思つたが、實は、敷島が色男を得たと云ふわけで、その祝ひらしいことを皆にさせられ、皆はまたその禮に來たのだと分つた。

『向ふのお客を棄てて置いてはよくなからうよ。』義雄はいや味半分、粹半分の心持ちで云ふと、『なアに、今、どこかへ遊びに出て行つてゐないから』と答へながら、床の中へ這入つて來た。そして、男と横に向ひ合つて、これで、まア、安心といふ樣子だ。

義雄の判斷では、この種の女等は殆ど戀しいといふことを知らない。朝、目がさめて、客を送つてしまへば、その日の晩はまた同じ人が來るか、來ないか分らない。たとへ戀しいと思つても、その人が來なければ、それツ切りのことだ。

客の歸り姿を送つて、また來て吳れればいいと思ふことはいくらもあらう。然し、その代り、門を

一歩離れてしまへば、自分の心はもう屆かないといふ經驗を幾度もしてゐる。

渠等の人生は曲輪の中に限られてゐて、そこを離れたものはすべて死でもあらう。虛無でもあらう。ただ男を自分のそばに引きつけてゐる間が、その商賣でもあり、生活でもあり、生命でもある。そして、その男が好きであり、可愛くあれば、その間だけ眞實の生活がある。

かう思ふと、義雄はこの種の女が自分の主義をちいさく實現してゐる樣に考へられる。曲輪以外は死または虛無の空想界である。無經驗、無思慮の女は、一般の俗習家等の空想界に求める理想と同樣、頼むに足らない死人同樣の戀を追ふて失敗する。然し本當に思慮あり經驗ある女は、全く空しい戀などに一時の安心を求める樣なことはしないで、自己の苦界に密接して來た戀をばかりその場の實質ある、糧にする。だから、握つた間はその男を離さない。これが却つて最も切實な、最も遊戲分子の少い愛であらう。

自分に對する敷島が、然し、そんな切實な愛を持つてゐるか、どうだか分らないが、それと同じ樣な心持ちにはなれる稼業だと思ふと、その樣子振りから言葉つきに至るまで、義雄にはそれと取れないこともない。

そして、義雄があがつた時、女は渠の送つた雜誌を店で繰りひろげ、渠の書いた談話を讀んでゐたところであつたと語つた。そして、女は少し取り澄ましながら、

『僕はこれまで文學者であつた。これからもやツぱり文學者でつづくのだ』と、暗誦して見せる。その眞意が分つてゐるか、どうか知らないが、たゞすら〳〵と、雜誌に出た義雄の文句通りを暗誦し、そのあとに書いてあることまでもお浚ひするのを聽くと、渠は自分がかの女に半ば了解された樣な氣がして、自分を今遠く離れてゐてよく理解して呉れないお鳥などよりは、ずツと親しみがある樣だ。

この苦界に辛抱してゐるほどだから、こちらと一緒になつてこちらの悲哀と苦痛とを共にすることもできないことはなからう。いツそのこと、この小づくりな女を引かせることができるなら引かせて、義雄は自分のまだ飽かない燒けツ腹のこの放浪を――無理に東京などへは歸らないで――かの女と一緒につづけてもかまはないと思つた。

――(四十三年五月)――

# 非常時

土用明けの低氣壓で雨——而もおほ降りの雨——が何日　いて、最後に最もひどいどしや降りをした。その翌日から立派な晴天になつたので、午後から、何日ぶりかの散歩がてら、高野巖は家を出た。

別に當てがあつたのではない。然し渠の編輯してゐる雜誌で俳句欄の選者に頼んである土井曾水と云ふ宗匠で、某新聞の政治記者の家が近處なので、碁でも　番打つて來ようと思ひ、そこへ立ち寄つて見る。曾水は年若い仲間の石井春山とビールを飲んでゐた。高野が見えたので、別にまたビールを拔かせ、冷素麵などを出す。

そのビールを飲み、素麵をすすり込みながらの話にだが、美濃、尾張に於ける明治二十四年の大地震のことが出た。曾水は尾張犬山の人で、まだその土地の漢學塾に通つてゐた時のことだ。

『もう、古いことで——今ぢやア、犬山も名古屋のオキヤーセ言葉になつてしまつたが、それがまだ名古屋化せられないで「おきやーせ」の代りに「おきせ」、「なも」の代りに「ない」と云ふ様な、純

粋の犬山なまりが殘つてゐた時のこと、さ。犬山は、地盤が岩石で出來てゐるから、地震と云ふものは決してないと云はれてゐた。實際、また、その土地にゐる者は、僕を初め、地震のヂの字も感じたことがなかつたのだ。——

『僕は、その日、朝六時頃に起きた、ね。その前夜、母から、起きると直ぐ下女を叩き起し、味噌汁に入れる葱を買ふ錢を渡せと申しつかつてゐたので、その通りにしてから、漢書をかかへて家を出だして、二三軒先の友達をさそひに行くと、まだ戸がしまつてゐる。叩き起すとそこの母親が戸を明けて呉れた。なかへ這入つて友達の支度するのを待つてゐると、戸障子ががたがた云ひ出して、柱時計が僕の前に飛んで來たのだ。不思議なこともあればあるものだと思つてゐると、戸棚の戸がはづれて倒れ出した。僕はただあぶなツかしいので外へ飛び出した。——

『すると、その前の呉服屋の屋根の瓦がぴよこぴよこ飛びはねてゐる。やがてその家がづぶりと崩れ落ちた。それに附いて、近處の家が五六軒將棊倒しになつた。は、はア、これが地震と云ふものだ——おばアさんのお伽話などでよく聽いた、あの善光寺で地震があつて、牛が三匹、人が何人死んだと云ふ——その地震だ、な、と思ふと、急におそろしくなつた。何でも、そんな時竹藪へ逃げさへすればいゝと聽いてゐたから、祥雲寺といふ寺を目ざして一目散に走つた——そこに藪があるのを知つてゐたからだ。もう、その時は殆ど夢中だから、何が何だか殆ど分らなかつた、ね。何でも、誰かと手を

引ッ張り合つて走つてゐたのだが、どうも誰れであつたかおぼえなかつた。――

『途中で、二三軒、家が倒れて、ぼうツと土けむりがあがつた。そのけむりの中に包まれて、初めて自分の家がどうなつただらうと云ふことに思ひ及んだのだ。それまでは、ただ藪へ逃げることばかり考へてゐたのだ、ね。ところで、ふとわが家を思ひ出しながら、跡もどりした。さうすると面白いのだ』と、會水は鳥渡言葉を切つて、ビールのコップに手を出す。

『その間もゆすつてゐるのだ、ね』と、高野は聽く。

『ゆすつてゐるには違ひなかつたらうが、僕が走つてゐるので、自分にはさう感じないのだ。』

『それもさうでせう、な』と、春山も口を出す。

『で、家の方へ行つて見た、ね』と、會水はビールの泡を口ひげから拂つて、『すると、澤山の人々が電信柱につかまつて、ごろ〳〵してゐるぢやないか？』

『電信柱に？』と、春山は不思議さうに問ふ。

『さうだ電信柱に――どう云ふつもりであつたか分らないが、多分、しツかりした物につかまつてゐれば、ふら〳〵しないと思つたからであらう――幾人となくそれにつかまつて、あツちへごろり、こツちへごろりやつてゐる。』

『いも蟲ころ〳〵の樣なものだ、ね』と、高野もつけ加へる。

『それが、さ』と、倉水は微笑しながら、『今から云へば、丸で滑稽だが、その時のその人々に取つては、一生懸命なのだ――南無阿彌陀佛と云つてはころ〳〵、南無妙法蓮華經と云つてはころ〳〵――その中に僕の母親もゐたのだ。ふと僕の來たのを發見したのだらう、「あ、まだ生きちよるか」と云ふきは立つた聲で、僕も氣がついた。「お母さま、どうして見える」と近よると、そのいも蟲の列――父もそのうちに見えた――が僕の方へころげて來て、僕は獨りはね倒された。起きあがらうとすると、成る程自分の足もぐら〳〵するぢやないか？』

かう云つて、渠は高野の顏を暫らく見つめる。高野はコップを手にした切り、その跡を聽かうとするに熱心だ。然し春山が、その喫ひ出した卷煙草の煙の中から、

『僕もさういふ經驗を一度でもして見たい、な』と云ふ。

『して見たいと云つて、出來るわけの物ぢやアない、さ。』

『そりやアさうですが――』

『とても、正氣で電信柱などへつかまつてはゐられない、さ。』

『みんな夢中だッたのです、な。』

こんな風に話が横へそれかけるので、高野はコップを下に置いて、

『それから、どうしました』と催促する。

『それから』と、曾水はまたビールをぐツと一口飮んで、『兎に角、馬鹿なことをしてゐたもので、そんなにごろ〳〵してゐないで、皆逃げればいいのに、自分達は――どうしたものか――逃げもしないで、僕にばかりこんなところへ來たらいけないと云ふのだ。「早く學校の運動場へ逃げせ」と云はれたので、はア、如何にも、學校にも竹藪があると思ひ出し、半町ばかりの道をかけ出して行つた。目の前でまた家がつぶれて、土けむりがあがつた。そのけむりの中の崩れた家の上を踏み越えて行つたらしい――跡で考へて見ると、どうしてもそこを通らなければ來られなかつたのだ。――

『で、學校の藪へ逃げ込んだ、ね。自分ながら、まア、少しはこれで安心だと思つた。いろんな人がさきへ來てゐたが、夜の明けがたからのことで、すべて身を以てのがれて來たので、何の用意もしてゐない。持ち出した物と云つたら、却つて馬鹿げたもの、さ――箒一本を持ち出したのもあれば、大事さうに子供のおまるを持つて來たのもある。また、若夫婦の如きは、――をかしかつたもをかしかつた――ふたりとも、裸體のままで、飛び出して來た。兩手のほかに何も蔽ふものは持つてゐないのだ。』

『滑稽も、これ以上のはないでせう、な』と、春山。

『いや、まだその上があつた。矢ツ張り、夫婦で飛び出して來たのが、氣がついて見ると、細君も蔽ひ物がないので、亭主はころげてゐる瓦の破片を拾つて、それを當てがつてやつたさうだ。

『は、は、はア』と、春山も高野も笑ふ。奥の方でも、曾水の細君の笑ふ聲が聴えた。
『然しそれは、だ、若い人間の極正直な性情を極正直に發揮したところだと見れば、これ以上の美點はなからう、さ――で、その藪は長さが三十間、幅が八間ばかりあつたから、隨分そこへ收容することが出來た。それに學校の建て物が四角にまはつてゐて、中庭が運動場になつてゐるから、ここばかりは倒れることがないと看做されてゐた。その運動場にも、大分人が集つた。僕は藪の中で親達の來るのを待つてゐた。鼻がつまつた樣なので、搔んで見ると、土が太い飴ン棒の樣になつて飛び出す。舌を手でこいて見ると、眞ツ黑にしめつた土がくツついて來る。僕は、子供ながら、これは大變な事件になつたと思つた。兩親のことが心配なので、また出かけて行くと、向ふから兩親は他人と五六名手をつなぎ合はしてやつて來るに出會つた。すると、母が「また來ちよる、藪へ行きせ、藪へ行きせ」と叱るではないか？　僕はまた渠等よりもさきに元の藪へ驅けて行つた。
『やがて母も父も來た。――もう、正午近くになつた。「おばアさまが見えんぢやないかよ」と云ふのだ。さア、大變だ、「死んだか生きちよるか？　誰れか見て來んといかんぞよ」との事だが、見に行かうと云ふものがない。「僕が行く」と云ひ出すと、皆が「險呑ぢやで、おきせ、おきせ」ととめる。ぢやア、小僧を一人やれと云つても、「いかん、いかん」ととめる。二人やれと云つても、埒があかないので、とう〳〵僕が小僧二人をつけて行つて見ると、僕の家はそのまゝで倒れてはゐなかつた。して、

おばアさんはどこにゐるだらうと思つて探したら、獨りで、庭の松の木にすがりついて、南無阿彌陀佛を唱へてゐる。』

『ほうッ』と、春山は意外がる。

高野はいつのまにか手帳を出して會水の話の要點を筆記してゐる。

『右の目の上へ落ち瓦が當つて血だらけになつてゐたが、それを大きい小僧に負ぶはして、僕等は藪へ戻つた。』

『そのおばアさんは生きた心地がなかつたでせう、な』と、春山。

『あばアさんどころか、もう、みな、半分は死んだつもりであつた、さ。――そこに、一人、珍物があつた。これは新聞紙にも「地震の敵」と稱せられ、こんな平氣な人間に會つては、いかな大地震も閉口だらうと云はれた。僕の祖父（と云つても、義理の祖父で、僕の家の、まア、厄介物の樣になつて、おばアさんとは關係がないので、獨りで、隱居部屋に住んでゐたもの）だが、他の人々がすべて逃げまどつてゐた間に、平氣で炬燵にあたつてゐたのだ。』

『そりやア、また、面白い、ね』と、高野は聽き耳を立てる。

『大膽なぢゞイには相違ないが、朝起きて、早速、佛壇に蠟燭をあげた。すると、その立てた蠟燭が倒れた。あぶないと思つて火を吹き消すと、江戸の大地震よりもひどい地震だ。初めのおほゆれに倒

れなかつたから、もう、自分の家は倒れない。それに、隱居部屋は離れの様になつてゐるが、本家と丈夫な土藏とにはさまつてつながつてゐるから、相持ちで、一層大丈夫だと鑑定をつけた。然しよそからの火事のけむりが見え出して來た時は、安閑ともしてゐられないので、手桶を持ち出して、井戸に出て行き、八十六歳になるぢイさんが、十四ひろもある井戸から、水を手桶に三十八杯汲みあげた。そのうち、消防夫が來たので、それに「おれが水を手桶に三十八杯用意したぞ」と云ひ置いて、再び引ッ込んで了つた。その水汲みの頃に、僕の兩親などが例の電信柱につかまつてゐたので、ぢイさんはそれを見て、「は、はア、やつちよる、な」と思つたさうだ。』

『よッぽど大膽だが、また呑氣です、な』と春山は云ふ。

『ところが、ぢイさんも呑氣だが、こちらもまた呑氣と云はうか、夢中であつたと云はうか、おばアさんをつれに行つてゐながら、そのぢイさんの方をまだ忘れてゐた。午後三時頃になつて、みんなが空腹を感じて來た。飯を焚くには米を持つて來なければならないとなつて、その米を不斷搗いて呉れるのはぢイさんだから、「さア、おぢイさまが見えん」と、皆がまた思ひ出す。僕がまた小僧二人をつれて行つて見ると、ちやんと炬燵に當つて、炬燵の上に何であつたかのお經を開いて、目がねをかけて、それを默讀してゐるのだ。』

『へえ』と、また春山は感心した樣子だ。

『僕が「おぢイさま、險呑ぢやで、皆のをるとこへ來いせ」と云ふと、「さうあわてないでもぢや、おれはこれでおほ地震に三度會つた。土佐の地震、江戸の地震、これがまた三度目ぢや。この家は、もう決して倒れないのぢやで、安心せい。」と、かう云つてるぢやないか？呑氣にも程があるから、「それでも飯を喰はずにはをれんで、今米を取りに來た」と云ふと、「ぢやが、よう、少し腹が減つて來た樣ぢやで、出來たら、さう云つてお出で——おれも、今火でも起そかと、思つてをつたとこぢや」と答へる。僕等はそれ以上ぐず／＼してゐられない樣な氣がして、ぢイさんはそのままにさせて置いて。小僧等に米だけ擔はせて戻つた。——

『その間でも、小いゆすりはつづけざまにあつたのだが、家倉の倒れたのは、大抵、最初のおほゆすりがつづいた時で、その後に倒れたのは、最初の時に殆ど倒れかけてゐたのが、片づいて行つたのに過ぎないのだ。兎に角、犬山二千戶の家が七百戶ばかり辛うじて無事に殘つた。然しさう云ふ家のでも、家族が初めからよくまとまつてゐたのは僕のうち位のもので、——その他は、おやぢばかりで他のものはどこへ行つたか分らないとか、子供ばかりでその親どもがゐないとか云ふのだ。おばアさんがどうしても見えないと云つて騷いでゐるのもあるし、お母さんはどこへ行つたよと云つて泣いてゐる娘もある。血だらけになつた女を負ぶつて來たものもあるし、殆んど四つ這ひに這ふ樣にして逃げて來た腰拔け男もある。例の眞ツぱだかで飛び出した夫婦の如きは、家がつぶれてしまつたので、家

に這入ることも出來ず、男は人に兵兒帶を半幅だけ裂き取つて貰つて、それを褌にし、女はまた誰れかの袢纏を借りて、漸やくそれを腰にまとつてゐた。然し、もう、大分うすら寒い、紅葉がぽつ〳〵よくなつて來た時節であつたから、二人ともぶる〳〵振へてゐた。『それぢやで、若いものはもツと愼みが肝腎ぢや」などと冷かされても、何とも返答が出來ないのだ。』

『そんなところを寫眞にでも取つたら、面白かつたでせう』と、春山。

『氣の利いた寫眞屋は、もう、コダクを持つてぶらついてゐたよ』と、會水は一息ついて、素麵に箸を入れたが、僅かになつてゐるので、もう一杯と別にビールとを持つて來る樣に奥へ命じた。『僕等も腹は出來るし、多少慣れて來たので、その日の四時頃から、町の樣子を見に行く氣になつた。地震は然し五分置き位にはゆすり通してゐるのだ。僕の家の近所で、どこかの女中らしいものが、倒れて來た廂に兩足と左の手とを押しかぶせられ、左の頰が怪我したのか血だらけになつて、右の手を拜む樣にして通る人每に助けて呉れいといふ意味で、あゝ、あゝと云つてゐる。然し誰れもそれを助けてやる暇がないのだ。僕等にはまたその廂をあげるだけの力がない。赤十字の擔架は行つたり、來たりしてゐるが、それらはまたその方に忙しい。――』

『何百年以前に掘つていつ埋めたとも分らない井戸が、ぽツかり市中の眞ン中に明いて、それに落ち込んでしまつたものもある。また、木曾川に添ふた犬山公園の一部に大龜裂が出來た時、娘が先づそ

こへ落ち込むと、危ないと云つて助けやうとした母親も亦それにつゞいて、二人とも深く挿まれてしまつたのもある。家の倒れた上を掘つてゐるものもあれば、掘られて、半死半生の有樣で出て來るものもある。赤十字の救護所の前に行くと、死んだ人間を澤山積み重ねて、その上に水を打つた薦をかぶせてある。どうしたわけか、死人にはすべて濕つた薦をかぶせてある。また、大きな肥甕が二本ともそツくり、大して中の物を漏さないで、二間ばかりさきへ飛びぬけて据わつてゐた。或家などはまた一間半ほどゐざつて立つてゐるのもあつた。小い藪がそのまゝそツくり、くるり向きを更へてゐたのもある。——

『不思議なのは、さツぱり聲や音がなかつたことだ。つまり、聽えなかつたのだらう。これは、夢中であつたと云ふよりは、寧ろ世間が餘りざわ／＼した音響ばかりであつたからであらう。——

『四ケ所から出た火事を見たが、いづれも倒れ伏した家が燒けるのだから、火も高くあがらないで、濟んでしまう。——藪に歸つて見ると、叔父の家の小僧がゐないと云つて騷いでゐた。もう、日が暮れてゐる。家の倒れた爲めに見通せる範圍には、祭禮の時のやうに澤山のぼんぼりが動いてゐて、賑やかな物だ。學校の運動場や藪には、急仕立ての卯辰小屋が六十何軒と出來て、それには避難者等の屋號や家名をしるした提燈をかゝげてある。その賑やかなのを見て、僕は初めて自分の眼が本氣で物を見てゐるのだと云ふことに氣がついた。すると妙なもので、耳も同時に正氣に返つたかして、周圍

の雜踏が聽え出した。子供の泣く聲、それを叱る聲、人を呼ぶ聲、何か命令する聲――急がせる聲、勵ます聲、――それが眞ッ暗の中からであるから、丸で、あちらこちらに動く提燈から出る様なのだ。』
『その見立ては面白かつた』と、高野は鳥渡鉛筆を置く。
『夜宮の様な混雜でしたらう』と春山も云ふ。
『實際、僕も、段々恐れが減ずるに從つて、面白くなつて來た、ね。』曾水はコップを手に取る。そこへ、細君が素麵のお代りと冷したビールとを持つて來た。『さア、充分やつて呉れ給へ』と、渠は他の二人に勸め、自分も箸をつける。
『あまりおいしうもないでしよう』と、細君がお愛相を云ふのに答へて、
『いや、僕は麵類が非常に好きです』と、高野は正直に云つて、『蕎麥の様なものになると、毎日三度の飯の代りに喰つてゐても飽きません、ね。』
『さうか、ね』と、曾水。
『然し、この大久保へ越して來てから、蕎麥もいゝのが出來ないので、あまり喰つて見る氣にならない。』
『そりやアさうです、な』と、春山も同感の様だ。『ゆふべも、實は、書生が蕎麥を喰ひたくなつたと云ふのであつらへたのですが、あのどしや降りの最中に、出前がやつて來たら、うちの犬が吠えつい

た。可愛さうに、出前は持つて來た蕎麥をみんなひツくり返してしまうた。』
『ほ、ほ、ほ』と、曾水の細君は笑ふ。して、『どうしました、蕎麥屋さんは？』
『まさか、もとへ戻すわけにも行くまい、さ』と、曾水。
『僕が、多分さうだらうと思つて出て見ると、待ちまうけてをつた御馳走が一杯、門のそばにこぼれてをるぢやありませんか？』
『は、は、は』と、高野も高く笑ふ。『退屈であつたといふ別方面の要求から、今の卯辰小屋で救助米をもらへなかつた位の心持ちはしたらう、ね。』
『いや、その上に、犬どもが何の禮も云はずに喰ふてをるのを見せつけられたのです。』
『こりや面白い』と、曾水。
『一匹二匹ならまだしも――吠えた聲で四五匹は集つてをつたでせう。それが互ひにうなりながら、喰ひ合ふてをつたです。』
『それだ』と、曾水は自分の話の一急所を捕へ得たと云はぬばかりに箸を置き、『人間もさう云ふ時には畜生と殆ど變りはない、ね。兄弟同志が焚き出し飯の多少を爭ひ合ふし、親子同志がまた一つの握り飯を奪ひ合ふのだ。横から見ればあさましい樣だが、而もそれがその場に於ては眞劍なのだ。あの狀態を見たら、人間は家族間にも水爭ひ等の一揆や竹槍騷動が起る可能性はあると思はれるよ。』

『勿論さう、さ』と、高野はそこに力を入れる。『それが人間の確かな事實だ。すべて最も眞劍なところには、讓與も割愛もない。讓與や割愛が手段になることはあらう。然し、それも、手段と目的とが區別的に認識せられてゐる間は眞劍とは云はれないと僕はいつも云ふのだ。眞劍とは手段と目的との區別を徹して、それ身づからに於て既に充實してゐることである。つまり、身を以つて自我の生存（この場合、肉體上と心靈上との區別はない）を爭ふ本能力の發揮だ。之を今の話の畜生に見て、また異常の時の人間に見て、平時の人間に見ないのは、必らずしもその事があさましいからでもなく、また野蠻だからでもない――平時の人は膚淺な手段的文明に目が暗んで、その思索と實行とを本能的に徹底することが出來ないからのことだ。』

『大分六ケしい議論になつて來た、な』と、倉水。

『いや、さういふことを議論する場合ではなかつた』と、高野も亦鉛筆を執り、『それからどういふことです？』

『僕の特に感じたのはこれだ』と、倉水はまた話を初める。『爭つて喰ひ物にありつくのは、職人とか、土方とか、その他また貧民とか云ふに於ては、當り前のことで、別に目立ちもしない、さ。ところが、遠山と云ふ、犬山で第一番もしくは二番目と云はれる豪家の老主人が、だ、その家族はどこへ行つたか分らない上、自分は足や腰を痛められ、よぼ〳〵と杖をつきながら、僕等の卯辰小屋をさしてやつ

て來た、ね。僕の家だけが兎に角みな揃つてゐて、且、麴屋をやつてゐるので原料の米を澤山持つてゐたのを知つてゐたから、來たのだらうと思はれる。「どうぞ御膳の殘りでもあつたら、喰はせて頂戴」——丸で乞食ぢやないか？　丁度、僕が喰ひかけて地べたに落した握り飯が一つころがつてゐたので、わざとそれを拾つてやると、目を白黑させて喰つた。それから、またほかの卯辰小屋をも貰ひまはつたらしいのだ。』

『然しあの人は』と、細君がそばから、『死ぬまでそんなことをしたおぼえはないと云ふてをられたさうですよ。』

『家の恥辱と思つて隱しとるの、さ。——そのほか、みじめであつたのは、病人や身持ち女の避難者だ。うん〳〵云ふ聲が聽えるから、行つて見ると、女がむしろの上で今子を產みかけてゐる騷ぎぢやないか？　また向ふの方で苦しさうな聲を出してゐると思へば、病人の心臟が破裂して、今もがき死にするとこで、兩手を擧げて、空をつかんでゐた。』

『悲慘です、な』と、春山は持つてゐたコップを置く。

『その間でもゆすつてゐるのだから、人は皆あたふたしてゐて、病人等の世話をしてゐられないんだから、たまらん、さ。』

『その地震を知らんで寢てをつた人があるぢやありませんか』と、細君はその話をせよと云ふらしい。

『さうだ』と、曾水も思ひ出して、『その地震を少しも知らないで、一日寝てゐたものがある。常春楼と云ふ料理屋の料理人が三名、いづれも有名な寝坊ではあつたが、その日の朝、皆順番に目をさましたことはさましたさうだが、眞ツ暗なので、さきのがまた眠つてしまつた。その次ぎのもさうして、眠つた。またその次ぎのも眠つた。して、もう一度順番に目をさましたが、また眠つてしまつた。三度目に先づさめたものが「どうもをかしい」と考へて、一緒に寝てゐる一人を起した。「まだ暗いぢやないか、な」と、目をこすつてゐる。』

『ふ、ふツ』と、細君は待ちかまへてゐたかの様に吹き出す。して、主人の顔と客の顔とにどんな様子が見えるかと頻りに伺つてゐる。

『三番目のを起して、マッチを擦らせると、自分等の上に天井なしの屋根がかぶさつて來てゐるのが分つた。そこで初めて地震がゆすつてるのを感じた。「大變ぢや」と云ふわけで、屋根をぶち拔いて出ると、もう、その日のゆふかたであつた。』

『ほ、ほ、ほ』と細君は笑つて、客の方を向く。

『無類の寝坊です、ね』と、高野も細君の笑顔に答へる。

『三人も、よう、揃ふたものです、な』と、細君。

『また怪我がなかつたもんです、な。』と、春山。

『うん、そこの家族はあわてゝ飛び出したので、大怪我をしたり、死んだりしたのだが、その三名だけが無事であつた。――それが、まア、ざッと第一日のことだが、二日目――四百回足らずゆすつた――の夕方になつて、お布れが出た。名古屋の監獄が倒れたので囚徒がすべて逃亡した。その大部分は當地の方へ向つた樣だから、警戒しろと云ふ布告であつて、それを役場の人や巡査などが布れまはつた。たゞさへ人心が恟々としてゐるところへ、またこんな知らせだから、僕等は非常に心騷ぎがした、ね――一つには、左ほどでもない注意が度々警察署や役場の手を經るに從つて、誇張された點もあつたらうと思はれる。拔き身を以つて押し寄せて來るとか、槍をひッさげて片ッ端から强奪して來るとか、まア、いろんな浮說が廣まつた。』

『實際、やつて來ましたか』と、春山。

『まア、聽き給へ――地震の小搖り位はもう何とも思はなくなつたものが多いから、今度は倒れた家――の中には、いろんな必要品を掘り出せば掘り出せるから――の夜番をつけて、泥棒の用心をしなければならんと考へ出した。達者な男はすべて手分けをして倒れた家の屋根の上に立つて、提燈を以つて、その夜番をする。夜番の提燈が澤山見えたり、隱れたりするのも綺麗であつた。ところが、だ』と、會水はそこに鳥渡力を入れて、『名古屋街道の方から、人がすた〳〵驅けて來た。すると、最初にそれを見た夜番がそれに先んじて逃げた。すると、またその手前にゐた夜番もすた〳〵逃げる。また

その次ぎのも逃げる。さう云ふ風にして、夜番全體のすた〳〵逃げになつたのだ。』

『へえ』と、春山。

『つまり、囚徒がもう押しかけて來たと思つたのだ。』

『如何にも、さう思はれたでせう、な。』

『疑心暗鬼を生ずで、モッブの雷同の恐ろしいと云ふことも僕はその時分つた、ね。』

『先覺者が世に必要なわけでせう。』

『いや、先覺者も何もあつたものぢやない――そんな者があつても、そんな時にその聲を聽くものがないよ。』

『そりやア、實際だ、ね』と、高野も鳥渡口を入れる。

暫くまた素麵をすすり込む音ばかりであつた。

『三日目には夜番を多くした。火事を引き起す憂ひがあるところからして、家の中であかりをつけることがならぬと云ふ布告が役場から出た。四日目（か、五日目）に、名古屋の測候所から報知があつて、今までにあつたより以上の地震が來ると云ふことだ。また、それと同時に、おほ津浪もあるか知れぬと云ふ警告だ。報知や警告ばかりではない、さう云ふことがまだあるだらう、あるだらうと思つてゐる僕等の心には、きつとさうだらうと云ふ樣に受け取れたのだ。おまけに、西の空を見ると、一

面に赤い――岐阜は三日四晩燒け通したが、その火が空に映つて見えるのだ。その夜は、みな聲をあげて泣いた、ね。念佛や題目の聲ばかりで、その夜に限つて惡人と云ふものは一人もなかつたらしい。』

『そりやア。人間が不意を喰らふと』と、高野が受けて『最も多くその自我をゆるめたり、また全く失つたりするその間は、全く反抗心が起らないものだ。それが必らずしも善ではない。例へば、大山三上の或絕壁の頂上から、不用意な巡禮者が、足をつかまへてゐて貰つて、うつ向きになり、その絕壁の中腹の凹みに刻んである如來の像を拜する。恐ろしさの餘り、その時ばかりは惡心が消えてゐる。然し、山を下だると、また、けろりとその恐ろしさを忘れてしまう。』

『人間と云ふものは』と、春山、『まア、そんなものでしやう、な――情けないことですが。』

『非常時は滅多にないのだから、それでいいのかも知れん、さ』と、曾水は說明を加へてから、また語りつづける。『それで、前に云つた叔父の家の小僧だが、僕等は每日探してゐた。見つからないので、もう、死んだとあきらめた。ところが、僕は、地震のそも〳〵の時、僕と手を引き合つて逃げたのは誰れであつたらうと云ふことを考へて見て、ふと、その者が「ころんではいけませんよ」と云つたのを思ひ出した。その聲は確かに叔父の家の小僧であつた。ぢやア、それからどうしたのだらうと調べてゐるうち、五日目に分つたが、三里さきの小牧――そこにその小僧の生家がある――へ逃げて行つてゐた。そこまで行けば、まさかと思つたのが、矢ツ張りゆすつてゐたのだ。――

『犬山から岐阜へは四里半、名古屋へは七里ある。さういふ市から歸つて來た人々の話によつて、僕等の土地以外の、而も一層甚い事情が分り出した。名古屋廣小路（郵便局と云つたら、日本一等の煉瓦造りと云はれてゐた。石造では日本銀行、煉瓦ではこの郵便局であつた。「愛知縣に二つない廣小路の郵便局、金のさちほこ雨ざらし」とか云ふ唄もある位で、この堅牢な建て物へ這入つてゐるさへすりやアと思つたのが間違ひであつた。近處の家は倒れないのに、それのみ押しつぶれて、澤山の避難者が一度期に死んだ。――

『岐阜では、方々の酒屋、油屋から火の手があがつて、十ケ所以上も火事が起つた。悲慘な話は、母の足が落ちて來たうつばりに押へられて取れないので、見す〳〵燒け死にをさせてしまつたことだ。』

『うん、さう云ふ例は』と、高野、『安政年間の江戸の地震にもあつたと聽いてゐる。これは娘の方が死んだのだが、矢ツ張りうつばりに敷かれて、助けてやらうにも力が足りない。そのうちに、火が押し寄せて來たので、母は自分の羽織を脫いで娘の上にかぶせたまま、獨りで逃げたさうだ。』

『僕のもそれに似とる――火事だと云ふので、亭主が唯「跡へ續いて來い」と云つて獨り逃げ出したので、身持ち女房が一人の子を脊に負ひ、一人の子を右に抱き、老母の手を引いて走る途中で、梁が落ちて來て老母の足――それも只足の親指だけだ――を押し伏せた。それがどうしても拔けない。母は指を切り取つてくれと云ふが、さうするにも忍びない。ただ引ツ張つてゐるうち、火がやつて來て

女房の髮が燒ける。脊中の子が泣き出す。親も大事だが、子も可愛さうだし、また自分のいのちがあやうくなつて來たので、止むを得ず老母を捨てて逃げた。そして、その女と二子とは、三人とも、おほ燒けどうの爲めに入院したさうだ。――

『また、僕のおやぢの妾がゐた藝者屋だが、そこのおかみは帳面を以つて飛び出した、帳面は商賣上最も大事だからであらう。そしてあてどもなく市中を走つたが、行くさきからけむりが迫つて來るのだ。右に走ると、けむりだ。左に走つてもまたけむりだ。跡戻りをしてももう逃げ道がない。全市が火になつてしまつたのだ。止むを得ず、長良川へ飛び込んだ。ゆふかたであつたが、人が澤山飛び込んでゐた。餘り火氣がひどいので、脊の屆く限り、はや瀨の方へ逃げたが、それでも火はべろり〳〵とおほきな舌を延ばして嘗めようとするのだ。また、稻葉山へ逃げたさうだ。ふもとはすべて火であつたが、山にはまだ火の手はあがらなかつた。それが、二日目のゆふかたにはあがつて來て、三日目には全山が燒けてしまつた。おかみは然し助かつた。』

『よツぽど氣丈な女だらう?』と、高野。

『そりやアさうだ』と、曾水。

『して、犬山にも、龜裂は澤山出來たのか?』

『いや、犬山では、幸ひにも、公園のだけであつたらしい。ほかぢやア、隨分多くの大龜裂が出來て、

泥水を吹きあげたりした。最もひどいのは、何番かの觀音で有名な谷汲の一村がそツくり埋沒して了つた。そして朝の說教の時であつたさうだが、觀音の御堂が、三百五十名の善男善女を入れたまゝ、陷沒した。一週間は、地下の御堂内からわめき悲む聲が聽えてゐたさうだが、漸く掘り返すことが出來たのが八日目であつた。その時は、もう、すべて死んでゐた。

『觀音さんも當てになりません、な』と、春山は笑つた。

『いや、當てになつて、御堂内で往生することが出來たのだらう』と、高野はまたその上を笑つた。

『は、は、は』と、皆の笑ひになつたが、その時、細君は三回目の素麵を持つて來た。

『隨分喰へるものだ、ね』と、高野は云つて、コツプのビールを飮む。

『こんな物をいくら喰つたツて、御馳走にはならん。』曾水は平氣をよそほつてゐる。

『いや、結構です』と、春山はまた箸を出す。

『ひゞなものだから、僕等は震動を每日表に取る樣になつた。每日、三百回から三百五六十回はゆすつてゐる。四五分每には、必ずゆるんだから、慣れたと云つても、決して油斷はしてゐないのだ。いざとなれば、またどこへでも飛び出すつもりで、僕等の假りに拵らへた藪中の卯辰小屋と云つたら、すだれの屋根に竹の柱、地べたに莚ろを敷いて、その上に野宿だ。天長節が來ても、それどころぢやない。近處の紅葉が段々よぢれて落ちるに從つて、氣候も段々寒くなつて來て、袷羽織ではなか〳〵

しのぎ切れなくなつた。蒲團を引き出したり、衣物を掘り出したりするものはあるが、金を探すと云ふ様なものは殆ど一人もなかつた。實際、その場合に金錢かあつても、何の用をも爲さないのだ。――

『然し若し金を掘つてゐたものがあつたとすれば、第一日に乞食に來たかの分限者の家族だらう。遠山の家族は二日目には、兎に角あちらこちらから集つて來て、すべてのあり金や貴重品を掘り出したらしい。そして、その家族だけが別に安全な場所に小屋がけして、そこに大事な物を運び込み、盜賊の恐れなどを避ける爲め、勝手に巡査を頼んで保護をして貰つてゐた。ほかのもの等は、そんなこととは夢にも知らなかつた。慾と云へば、ただ食慾ばかりで――腹が出來てゐる間は、ゆすることに對しても心丈夫に感じ、寒さに對しても左程つらくはなかつた。腹が減ると、然し、また寒さを實際よりも多く感じ、ゆすられることもまた非常に恐怖し出すのだ。あの勢ひでは、やがて死人の肉を喰ひ出すかも知れんと、僕は思つた。かの眞ツぱだかで飛び出した若夫婦は、男は清太郎、女はお定と云つたが、衣物がまとへる様になつてから、急に勇氣を出して、さきの恥辱を別な働きをして取り消さうとしたのだらう、二人とも僕等の最も大事な炊事に非常に奔走したよ。――

『井戸がにごつて、いい水を得られない。初めは濁り水のままで飯を炊いた。僕の母などは、それが厭で、少しも口にしなかつたが、よく／＼たまらなくなつたと見え、澄まして置いた水で別に米を研いで炊かせた。そして、一度期に澤山喰つたので、それを見てゐた僕のおやぢが「たんと喰ふぢやな

いか、な」と云ふと、その拍子に飯を喉へつかへさせた。』

『は、は』と、春山が笑ふ。

『ところが、笑ひどころぢやなかつた、ね——母のからだにまたおほ地震がゆすつたほどおほ騷ぎをしたよ。』

『ほ、ほ』と、細君も笑つて、『あなたはよく、また、いろんなことをおぼえてをられます、な。』

『實際、おち〳〵眠ることは出來ず、小屋がけだから寒い風が吹き込むし、まア、喰ふことよりほかに手賴りはなかつたのだ。ところが、十七日目にだが、豪雨があつた。ゆふべのどしや降りも隨分ひどかつたが、なか〳〵あんなものぢやなかつた。おまけに、大きな雷と共に、第一日から以後にはなかつたほどのおほ地震がゆすつて、紫色のいな光が縱横に天をつん裂いた。それがおよそ五分間ばかりのことであつたが、すだれの屋根はざア〳〵漏るぢやアないか？』

『大變でしたらう、な』と、春山。

『お前は』と、曾水は細君に向ひ、『その時、泣き出したさうぢやないか？』

『そりや、子供ですもの、泣きもしましようよ。』

『いや、その實、また泣いたのは子供ばかりぢやアない、ね。「下から來た災難をのがれたものは、今度は上から來る災難でやられるぢや」と云つておとなが皆泣いて念佛を唱へた。兎に角、建ち殘つて

ゐる家へでも這入らねば仕やうがないと云ふことになり、僕の家だけでも二十幾軒の男女を收容した。間口五間の麴屋だから、店の道具を片づければ、隨分廣い避難所であつた。僕のおばアさんや兩親は十七日日で例のぢイさんに會つた。兩親を先導として多くの人々がごちや〳〵と走り込むと、ぢイさんは平氣なつらをして迎へに出た。「まア、どうしちよいでたかや」と母が云ふと、「何でもないぞよ」と答へた。皆は裸になつて、づぶ濡れに濡れた衣服などを絞つた。然しまたいつ飛び出さなければならぬか分らないから、戶をすべてはづして、敷居の外に竹を横に渡し、それへ外がはから戶を立てかけて、雨風を防いだ。いざと云はば、それをつツぱづして逃げる算段だ。――

『麴のおほ釜はあつても、火事の危險があるから使はないで――ハソリと云ふおほ鍋で幾度も飯を炊いた。屋根の下に久しぶりで休むことが出來たのだが、夜になるに從つて、非常に寒い。時節として、かみ鳴りが珍らしい上に、またこの時節はづれの寒さだ。どうしても火によつてあツたかみを取る必要があるので、役場のお布れには反くが、廣い土間の眞ン中で火を焚いた、ね。然し、そのまはりに、手桶やら水甕などに水を盛つて、澤山並べて置いた。皆がたとへ眠つてゐて、まさかの時あわてて飛び出しても、水甕は獨りでに倒れて、火を消すだらうと云ふ思ひ付きだ。僕の家だから、僕は勝手に蒲團を出して寢た。どうせ、皆に着せるだけの蒲團はないから、皆は火のそばに坐わつて、夜を明かすと云ふので、僕は蒲團を――久しぶりのことで――四人分も五人分も引ツかぶつた。――

『僕が夜の一時頃に小便に起きると、また大雷があつた。母は「あぶないで、出ずにおきせ」と云ふ。然し必然物は必然物だから――』

『は、は』、『ほ、ほ』と、春山や細君が聲をあげる。

『僕は誰れか男の人に厠へつれて行つて貰つた、ね――その男も顫へてゐたよ。』

『は、は、は』と、高野も聲高に笑ふ。

『それから、また眠つたよ――さすが、僕はまだ子供であつたのだ。その翌日も雨であつた。飯の時に、ぢイさんの經驗談があつて、それを聽いたものは少し氣が落ちつく樣になつた。ぢイさんの話と云へば、「おれは江戸、土佐の地震を初め、おほ地震、小地震の記録に殘つたものには、七八度會つてる」と云ひ出し、「おほ地震の跡には必ず大雷があるものぢや。津浪にも、おほ稻光が伴ふことがある。けれど、それは安心せいと云ふ天の知らせで――その跡はもう段々落ちついて行くものぢや。きのふのゆれでも、迷つとるものには大變大きい樣に思はれたであらうけれど、第一日のに比べては、何でもなかつた。それが爲めに家が倒れたとか、火事が出たといふことはないぢやないか、な。」まア、かう云ふ風な話し振りだ。』

『落ちついたものです、なア』と、春山。

『その談話――つまり、その場では坊主の說敎の樣であつた――の時、丁度、視察の新聞記者が來て

ゐた。この記者がぢイさんを世間に紹介する筆を執つたのだが、僕はこの時新聞記者と云ふものは面白い仕事だと思ひ初めたの、さ。ぢイさんは「第一日からして、もう、あれ以上の地震は來ないと考へとつたぞ」と語ると、「さう云つても、おぢイさまの樣にくそ度胸をきめとることが出來んが、ない」と母が受ける。「なに、あわてとるもんぢやでさうぢや。おれは水汲みに出た時、お前等が電信柱につかまつてごろ〱しとるのを見たんぢや。あかん奴共ぢや――逃げるなら早く逃げるがえゝ。何も、神や佛でもない電信柱につかまつて、いも蟲見たいにごろ〱やつとるにや及ばん。」――「ふ、ふん」と、初めて母が笑つた、ね。』

『お母さんも少し安心して來たのです、な』と、春山は煙草のけむりの中から云ふ。

『母親に限らず、僕のおやぢなどは、びッくりし方が大きかつた代り、ぢイさんの大膽に面じて、よほど正氣がついて來たのだ。兎に角、僕の兩親は初めは腰が立つか、立たんかのあり樣であつた、ね。ただ險呑がつてばかりをつた。ぢイさんばかりは飽くまで平氣だから、新聞記者に向つても、「一體、役場があんなお布れを出すのが違つとる。たださへあわてとるところへ、またあわてさすのぢやで、何のことはない、實際の地震に輪をかけて見せる樣なものぢや。もう、決して大きな地震はない。この年ばかりではない、ここ少うても三年間は大丈夫ぢやで、あたふたしとる代りに、早う金でも掘り出せと、さう新聞にも書きせ」などと語つてゐた。――

『僕の家へ避難したものは、このぢイさんの言葉によつて、割り合に早く落ちつく樣になつたが、ほかの組は、晴天になると、直ぐまた卯辰小屋へ出て行つた。晴天になつてからでも、ゆすりは止まなかつた。然し毎日三百回以上であつたのが僅に百二三十回になり、そのゆすりかたもゆるくなつた。』

『全體』と、高野も大分勞れて來て、鉛筆を置き、巻煙草に手をつけながら、『いつまでゆすつてゐたのか、ね？』

『ゆするのは年々のことだが、二年目までは日に十二回までゆすつてゐた、ね。――で、段々物事に手がつけられる樣になつてから、皆がおの〳〵自分自身のことに從ひ初めた。僕の家の避難團體が解散する時、最も面白かつたのはかの淸太郎夫婦に對する皆の挨拶であつた。かの夫婦は、僕のうちの雇人同樣に皆の爲めに炊事によく働いて呉れたので、皆もそれを感謝すると同時に、最後の冷かしを加へたので――「淸太郎さま、お定さま、隨分お世話になりました、おまけに、丸はだかまで見せて貰つて、ない。」これにやア、夫婦もよわつてゐた樣だ。』

『つまり、その無禮をしたことを炊事の世話で帳消しにしたわけです、な』と、春山は微笑する。

『まア、そんな譯だ、ね。ところが、あの分限者の遠山だ。今ぢやア六十萬圓以上の財産になつて、犬山一の富豪だが、たツた一飯でも御馳走して貰つたことに就いては、その後誰れ一人に禮を述べたことがないのみならず、だ、不埒にも「そんな乞食見たいなことをしたおぼえがない」と云ひ張つて

ゐた。』

『恩知らずです、わ、ねえ』と、細君も憎らしいと云ふ振りをして、皆を見まわす。

『然し、そりやア』と、高野は反對して『さう云つても仕かたがない、さ。どうせ生存競爭よりほかにない人生ではないか？　遠山なるものがその時一時の乞食になつたのも、自我の生存を爭ふ唯一の努力であつたのだ。乃ち、眞劍の姿であつたのだ。後になつて、その人がその過ぎ去つた事實を否定するのを憎むくらゐなら、その事實のあつた時、その場で押へてしまつたらいいのだ。』

『その場で押へるとは』と、曾水が不審がる。

『つまり、賭博や姦通と同樣、現行犯的に、その場で皆が食物を與へなかつたらいいのだ。』

『然し、その時は、可愛さうであつたから、食を與へたのだ。』

『だから、後になつてかれこれ云ふ權利を君等が放棄したわけだ。つまり、そんな虛僞家を生かしたほど、君等にまだ下手な餘裕を存じてゐたのが間違ひ、さ。向ふは虛僞を云つてでも、君等を喰つてしまはうとしてゐるのだ。

『別に喰はれるほど僕等は向ふに接近した關係はない、さ。』

『いや、自我のやつたこと、乃ち、たとへば君等が食を與へたと云ふことを否定する奴は、その否定するだけ君等を喰つてゐるのだ。人生は、結局、非常時などに最も表面まであらはれる喰ひ合その物

だ。人は、ぼんやりと餘裕を存じてゐる間に、あらゆる種類の强者から喰はれてしまうのだ。』
『では、遠山の樣な奴は惡い意味の强者だらう？』
『いや、惡いも、いいもない、さ――自分が人を喰はなければ、人が自分を喰ふのだ。』
『恐ろしい人生觀だ、なア？』
『それが不賛成なら、遠山が乞食をして金を掘り出したのに少しも異存は云へない――君等がぼんやりと君等を喰ふ仕事を助けたのだから。』
『ぢやア、君ならその時どうする？』
『結びをやらないで、かつゑ死にさせる、さ。』
『ひどい考へだ。』
『さうでなけりやア、その時から遠山を自分の喰ひ物にしてしまう、さ。』
『それもひどい。』
『然し僕等の生存には、この二つよりほかに實際の强者の道はなからう。』
『よしんば、君の云ふ通りを眞理としても、非常時ばかりに應用の出來る眞理だらう？』
『さう、さ――然し、人生はいつも非常時の狀態であるを忘れてはいかんよ。』
『兎に角』と、春山が仲に這入り、『六ケしい問題になつて來ました、な。』

『僕等の常識的な思想上にも一大地震が起るわけだ』と、曾水はコップを取る。高野も、春山も、また
コップに殘つたビールを飲んでしまう。
三人とも、もう、いい加減に醉つてゐた。
『君は强者の道と云ふことを云つた、ね』と、曾水は思ひ出した樣に微笑する。
『さう、さ』と、高野が答へる。
『ぢやア、一つ、この問題を碁盤の局面に於て決しようか？』
『よからう――僕も一番君を負かせるつもりで來たのだ。』
『そりや面白いでしよう』と、春山が直ぐさま碁盤を持つて來て、主人と高野との間に据ゑる。
これからいよ〳〵初まる戰爭をあふり立てる樣に、ゆふがたの凉風が庭の椎の木から起つて來た。

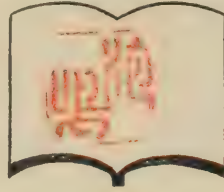
――（四十三年九月）――

泡鳴全集第一卷終

大正十年一月二十日印刷
大正十年一月廿五日發行

泡鳴全集第一卷

（非賣品）

著作權所有

著作者　岩野美衞

發行者　國民圖書株式會社代表者
東京市麴町區內幸町一丁目六番地
中塚榮次郎

印刷者　東京市神田區三崎町二丁目三番地
井波修次郎

發行所　東京市麴町區內幸町一丁目六番地
國民圖書株式會社
電話新橋一一二七番
振替東京五二二九八番

印刷所　國民圖書株式會社印刷所

（製本　個本製本所）